

Oracle® Business Intelligence Discoverer

管理ガイド

10g リリース 2 (10.1.2.1)

部品番号 : B25101-01

2005 年 10 月

Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2.1)

部品番号 : B25101-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Discoverer Administration Guide, 10g Release 2 (10.1.2.1)

原本部品番号 : B13916-04

Copyright © 1996, 2005, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	xix
対象読者	xx
ドキュメントのアクセシビリティについて	xx
関連ドキュメント	xx
表記規則	xx
サポートおよびサービス	xxi

第 I 部 Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要

1 Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要

Oracle Business Intelligence Discoverer	1-2
Oracle Business Intelligence Discoverer の様々なコンポーネント	1-3
Discoverer マネージャの役割	1-4
Discoverer マネージャが使用するツール	1-4
Discoverer で使用できるデータソース	1-4
Discoverer マネージャの基本概念	1-5
ビジネス・インテリジェンス	1-5
Discoverer の動作	1-5
詳細情報の参照先	1-5

第 II 部 マルチディメンション・データソースを使用する Discoverer の管理

2 マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理するための前提条件	2-2
オンライン分析処理 (OLAP)	2-2
マルチディメンション・データソース	2-2
Discoverer カタログ	2-3
マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理	2-3
マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理者の役割	2-3
アクセス対象がマルチディメンション・データソースの場合とリレーショナル・データソースの場合の Discoverer システムの管理方法の相違	2-3
マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理するために使用するツール	2-4
Discoverer Plus OLAP の開始時にユーザーを支援する方法	2-5
サンプル・ワークブックへのアクセスを有効にする方法	2-5
プリプロセッサ・プログラムの作成方法	2-5

第 III 部 リレーショナル・データソースを使用する Discoverer の管理

3 リレーショナル・データソースを使用する Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要

リレーショナル・データソース、OLTP システムおよびデータ・ウェアハウス	3-2
Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator	3-2
リレーショナル・データソースを使用する場合の Discoverer システムの基本概念	3-3
End User Layer の概要	3-3
ビジネスエリアの概要	3-4
フォルダとアイテムの概要	3-4
ワークブックとワークシートの概要	3-4
階層とドリルの概要	3-5
サマリー・フォルダの概要	3-5
リレーショナル・データソースを使用する場合の Discoverer マネージャとしての役割	3-5
リレーショナル・データソースを使用する Discoverer を正しく実装するための手順	3-5
リレーショナル・データソースを使用する Discoverer システムのメンテナンスに含まれる内容	3-8
Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator を使用するための前提条件	3-9
システムの前提条件	3-9
データ・アクセスの前提条件	3-9
Discoverer でのデータベース・パラメータの使用	3-10
Discoverer Administrator の開始方法	3-11
ワークエリア	3-12
「ワークエリア」ウィンドウのタブ	3-12
「ワークエリア」ウィンドウの状況依存メニュー	3-15
管理タスクリスト	3-15
Discoverer Administrator の新機能	3-16
Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプ	3-16

4 End User Layer の作成とメンテナンス

End User Layer	4-2
End User Layer が便利な理由	4-2
End User Layer 所有者	4-3
Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限	4-3
End User Layer のメンテナンスに必要な権限	4-4
EUL ゲートウェイ	4-4
既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法	4-4
新規データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法	4-6
End User Layer の削除方法	4-7
デフォルト End User Layer を表示または変更する方法	4-8
エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー	4-8
使用するエクスポート/インポート方法	4-9
Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードの使用	4-9
Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトの エクスポート/インポート	4-10
標準データベース・エクスポート/インポート・コマンドによる完全な EUL の エクスポート/インポート	4-10
Discoverer のエクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法	4-11
エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法	4-12

エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法	4-14
Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのエクスポート方法	4-16
Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのインポート方法	4-16
標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法	4-17
標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法	4-17
インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法	4-19
EUL の作成とメンテナンスに関する注意	4-21
識別子	4-21
一般的な EUL の領域要件および記憶域パラメータ	4-22
最初の EUL 開発および継続的なメンテナンスの推奨ワークフロー	4-23
Discoverer ワークブック・ダンプ・ユーティリティの使用	4-24
ロジカル・スタンバイ（読取り専用）データベースでの EUL の作成	4-27

5 ビジネスエリアの作成とメンテナンス

ビジネスエリア	5-2
新規ビジネスエリア作成の準備方法	5-2
ロード・ウィザード	5-3
ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法	5-3
オンライン・ディクショナリからのロード	5-4
ゲートウェイからのロード	5-5
テーブルおよびビューの選択	5-6
Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目の指定	5-7
ビジネスエリアの命名、オブジェクト名およびソート・オプションの指定	5-7
Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く方法	5-8
Discoverer Administrator に接続済の場合に既存ビジネスエリアを開く方法	5-8
EUL 間のビジネスエリアのコピー方法	5-9
ビジネスエリアのプロパティの編集方法	5-9
ビジネスエリアの削除方法	5-10
ビジネスエリアとデータベースの同期化方法	5-11
ユーザーがビジネスエリア（またはビジネスエリア内のフォルダ）を参照できない理由	5-12

6 フォルダの作成とメンテナンス

フォルダ	6-2
単一フォルダ	6-2
複合フォルダ	6-3
データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用する利点	6-3
カスタム・フォルダ	6-4
カスタム・フォルダと単一フォルダの違い	6-4
カスタム・フォルダの例	6-4
フォルダ間の依存性	6-6
ビジネスエリアにおけるフォルダの共有	6-6
データベースからの単一フォルダの作成方法	6-7
複合フォルダの作成方法	6-8
カスタム・フォルダの作成方法	6-9
フォルダ・プロパティの編集方法	6-9
カスタム・フォルダの SQL 文の編集方法	6-11

複合フォルダのリーチスルー	6-11
ベース・フォルダにリーチスルー可能な複合フォルダの定義方法	6-12
複合フォルダのリーチスルーを使用する際に適用されるルールおよび制限	6-13
エンド・ユーザーに対するベース・フォルダ・アイテムの可用性を判断するルール	6-13
ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義している場合に Discoverer Administrator での結合に適用される制限	6-13
ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義している場合に Discoverer Administrator のサマリー・フォルダに適用される制限	6-13
リーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを使用してワークシートを作成する場合に Discoverer Plus および Discoverer Desktop に適用される制限	6-14
Discoverer エンド・ユーザーがリーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを含む ワークブックを開閉する場合に適用される例外	6-14
EUL オブジェクトをインポートする場合に複合フォルダのリーチスルーに適用される ルール	6-14
ビジネスエリアからのフォルダの削除方法	6-15
ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法	6-16
複数ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法	6-16
EUL 内の親なしのフォルダの表示方法	6-17
親なしのフォルダの EUL からの削除方法	6-17
ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法	6-17
フォルダにおけるアイテムのソート方法	6-18
ビジネスエリアにおけるフォルダの順序変更方法	6-18
ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法	6-18

7 情報に対するアクセス制御

Discoverer およびセキュリティ	7-2
Discoverer アクセス権限	7-2
Discoverer と Oracle Advanced Security Option (ASO)	7-2
Discoverer 作業権限	7-3
ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール (職責) の指定方法	7-3
ユーザーまたはロール (職責) がアクセスできるビジネスエリアの指定方法	7-5
ユーザーまたはロール (職責) が実行できる作業の指定方法	7-7
特定の作業を実行するユーザーまたはロール (職責) の指定方法	7-9
クエリー取出し制限の設定方法	7-10
スケジュール・ワークブック制限の設定方法	7-12
データベース・ロールを使用した Discoverer ワークブックの共有方法	7-14
透過アプリケーション・フェイルオーバー	7-15
透過アプリケーション・フェイルオーバー	7-15
Discoverer ユーザーに対する透過アプリケーション・フェイルオーバーの影響	7-15
Discoverer で透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを有効にする方法	7-15
Discoverer による透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートに関する注意	7-16

8 ワークブックのスケジュール

ワークブックおよびスケジュール・ワークブック	8-2
ワークブックをスケジュールする理由	8-2
エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする際の処理	8-2
ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能	8-3
スケジュール・ワークブックの結果の格納場所	8-4
ワークブックをスケジュールするための前提条件	8-5

DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法	8-5
スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルの所有者を指定する方法	8-6
スケジュール・ワークブックを実行可能にするためのシノニム v\$parameter に対する SELECT 権限の付与方法	8-8
新しいスケジュールジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法	8-9
スケジュール・ワークブックの表示および管理方法	8-10

9 アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス

アイテム	9-2
アイテム・クラス	9-2
値リスト	9-2
値リストの設定	9-3
代替ソート	9-3
代替ソートを実装する様々な方法の例	9-4
例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法	9-4
例 2: データベース・テーブルを使用した代替ソートの実装方法	9-4
例 3: ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用した代替ソートの実装方法	9-5
ディテール・ドリル	9-6
ディテール・ドリルの設定	9-6
日付アイテム	9-6
日付フォーマット・マスク	9-6
日付アイテムの切捨てと EUL_DATE_TRUNC 関数	9-7
切り捨てられる日付アイテムへの条件の適用	9-8
別のアプリケーションへのドリルアウト	9-8
EUL アイテム名の自動生成および自動更新	9-9
1 次要素と 2 次要素	9-10
「名前の自動生成」プロパティの機能	9-10
2 次要素に対する「名前の自動生成」プロパティ値の設定方法	9-10
「名前の自動生成」プロパティのデフォルト値を「はい」に設定する方法	9-11
ロード・ウィザードを使用したビジネスエリアの作成時に行われる処理	9-11
既存のビジネスエリアのすべての 2 次要素に対して「名前の自動生成」プロパティを 「はい」に設定する方法	9-11
「名前の自動生成」プロパティに関する注意	9-12
アイテム・プロパティの編集方法	9-13
値リスト・アイテム・クラスの作成方法	9-14
代替ソート・アイテム・クラスの作成方法	9-16
ディテール・ドリル・アイテム・クラスの作成方法	9-19
カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法	9-20
アイテム・クラスの編集方法	9-21
アイテム・クラスにアイテムを追加する方法	9-23
ドラッグ・アンド・ドロップを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法	9-24
「アイテム・クラスの編集」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに 追加する方法	9-24
「アイテム・プロパティ」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに 追加する方法	9-24
アイテム・クラスからアイテムを削除する方法	9-24
ポップアップ・メニューを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法	9-25
「アイテム・クラスの編集」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを 削除する方法	9-25

「アイテム・プロパティ」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法	9-25
アイテム・クラスを使用するアイテムの表示方法	9-25
アイテムの値リストの表示方法	9-26
アイテム・クラスの値リストの表示方法	9-26
アイテムとアイテム・クラスの削除方法	9-27
エンド・ユーザーがワークシートでパラメータ値を選択したときのパフォーマンスの向上	9-28
索引付きアイテムをアイテムに割り当てる方法	9-29
ユーザー定義データ型の列に基づくアイテムに関する注意	9-31

10 結合の作成とメンテナンス

結合	10-2
単一アイテム結合	10-3
マルチアイテム結合	10-4
3つ以上のフォルダの結合	10-5
非等価結合	10-7
1対多結合、1対1結合および多対多結合	10-8
複数の結合を使用した2つのフォルダの結合	10-8
クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響	10-9
複合フォルダからのクエリー結果に結合が影響する例	10-10
外部結合	10-13
結合の作成方法	10-15
結合の表示および編集方法	10-18
結合の削除方法	10-20
ファントラップの概要および Discoverer での処理方法	10-21
ファントラップの例	10-22
複合フォルダ内でファントラップを設定した場合の作業	10-24
結合にデータ型の不一致がある場合の作業	10-25
データ型の異なる2つのアイテム間に結合を作成する方法の例	10-25

11 ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス

ユーザー定義アイテム	11-2
導出ユーザー定義アイテム	11-3
集計ユーザー定義アイテム	11-3
集計ユーザー定義アイテムに適用される制限	11-3
分析関数と集計ユーザー定義アイテムの動作の相違点	11-4
集計導出ユーザー定義アイテム	11-4
集計導出ユーザー定義アイテムの例	11-4
ユーザー定義アイテムの作成方法	11-6
ユーザー定義アイテムのプロパティの編集方法	11-7
ユーザー定義アイテムの編集方法	11-7
ユーザー定義アイテムの削除方法	11-7
エンド・ユーザーが1つのワークシートからドリルアウトして Discoverer Viewer に他のワークシートを表示できるようにするユーザー定義アイテムの作成方法	11-8
PL/SQL ファンクションが必要な理由	11-10
ユーザー定義 PL/SQL ファンクション	11-10
ユーザー定義 PL/SQL ファンクションの登録	11-11
ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを自動的に登録する方法	11-11
ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを手動で登録する方法	11-12

12 条件の作成とメンテナンス

条件	12-2
条件のカテゴリ	12-2
Discoverer での条件の使用	12-2
異なるタイプの条件	12-3
単一条件の作成方法	12-4
拡張された条件の作成方法	12-5
条件の編集方法	12-7
条件プロパティの編集方法	12-7
条件の削除方法	12-8
条件の例	12-8
例 1: 2002 年のデータを検索する条件の使用	12-8
例 2: 過去 7 日間の売上を検索する条件の使用	12-8
例 3: 第 3 四半期の出荷を検索する条件の使用	12-9
外部結合と DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリの設定	12-9
例 1: 条件を適用しない場合	12-10
例 2: クエリーに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 1 に設定 (オフに切替え) する場合	12-10
例 3: クエリーに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 0 に設定 (オンに切替え) する場合	12-11
必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法	12-11
ソース・フォルダが (行レベルのセキュリティを適用するなどの) 必須条件を含む場合に サマリー・フォルダを有効にする方法	12-15

13 階層の作成とメンテナンス

階層	13-2
アイテム階層	13-2
日付階層	13-3
日付階層テンプレート	13-4
日付階層とパフォーマンス	13-5
アイテム階層の作成方法	13-5
日付階層とテンプレートの作成方法	13-7
アイテム階層の編集方法	13-9
日付階層テンプレートの編集方法	13-10
日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法	13-11
デフォルト日付階層テンプレートの設定方法	13-11
アイテム階層または日付階層テンプレートの削除方法	13-12
日付フォーマット「RR」を使用するデフォルト日付階層を、 Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator へのアップグレード後に変更する方法	13-12
カスタム・フォルダで CONNECT BY 句を使用して階層を作成する方法	13-13
「Scott」スキーマの「emp」テーブルを使用して、カスタム・フォルダと CONNECT BY 句で 階層を作成する方法	13-14

14 サマリー・フォルダの管理

Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ	14-2
サマリー・フォルダ	14-2
Discoverer サマリー・テーブル	14-2
マテリアライズド・ビュー	14-3

自動サマリー管理 (ASM)	14-4
ASM の機能	14-4
ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件	14-5
様々な ASM 実行方法とその使用状況	14-6
ASM ポリシー	14-6
サマリー・データをリフレッシュする理由	14-6
サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理	14-7
サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法	14-7
ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法	14-10
コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法	14-11
バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法	14-11
サマリー・フォルダのデータベースの構成方法	14-11
サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法	14-12
SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法	14-12
表領域割当て制限を決定しリセットする方法	14-14
スキーマ・オブジェクト名を確認する方法	14-14
サマリー処理の開始時間を設定する方法	14-15

15 手動によるサマリー・フォルダの作成

手動によるサマリー・フォルダの作成について	15-2
Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件	15-2
サマリー組合せ	15-3
サマリー組合せを定義するときに考慮する事項	15-4
サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン	15-6
式がサマリー・フォルダを使用する時期	15-7
EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法	15-7
ユーザーのクエリーに基づくサマリー・フォルダの作成方法	15-11
外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法	15-17
サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法	15-21
サマリー・フォルダのプロパティの編集方法	15-22
サマリー・フォルダの編集方法	15-23
サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法	15-25
サマリー・フォルダの削除方法	15-25
サマリー・フォルダのサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法	15-26

16 サマリー・フォルダに関する追加情報

Discoverer でのサマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来	16-2
クエリー・リライト	16-2
Discoverer によるクエリー・リライトの条件	16-2
Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示	16-3
Discoverer で「SQL インспекタ」ダイアログに SQL を表示する方法の構成	16-3
(Discoverer で) マテリアライズド・ビューを使用 / 使用しない実行計画の例	16-4
Discoverer がクエリー・リライトする場合の SQL の例	16-4
クエリー・リライトしてサマリー・テーブルを使用する場合の利点を示す例	16-5
Oracle Standard Edition データベースと Oracle Enterprise Edition データベースのサマリー・フォルダの特性の相違点	16-6
外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの相違点	16-7
Oracle Enterprise Edition データベースで EUL アイテムにマッピングする場合の外部サマリー・テーブルとビューとの相違点	16-8

Oracle Enterprise Edition データベースで1つの外部サマリー・テーブルに対して1つのマテリアライズド・ビューのみ登録可能な理由	16-9
Oracle Enterprise Edition データベースのリフレッシュ・オプション	16-9
Oracle データベース間のインポート後のサマリー・フォルダのリフレッシュ	16-9

17 Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法

Oracle Applications	17-2
Oracle Applications の職責	17-2
Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能	17-2
Oracle Applications とともに Discoverer を使用するための前提条件	17-3
Discoverer を Oracle Applications モードで実行する場合の相違点	17-3
Oracle Applications モードでの Discoverer の「接続」ダイアログの相違点	17-3
Oracle Applications モードでの Discoverer セキュリティの相違点	17-4
Oracle Applications モードでの Discoverer サマリー・フォルダの相違点	17-4
Oracle Applications モードでの Discoverer および Secure Views/ 言語設定の相違点	17-5
Oracle Applications ユーザー用に「接続」ダイアログを設定する方法	17-5
Oracle Applications EUL の作成方法	17-7
Oracle Applications EUL をメンテナンスするユーザー	17-11
Oracle Applications ユーザーが Oracle Applications EUL をメンテナンスできるようにする方法	17-11
パブリック・ユーザーを介してすべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する方法	17-15
ビジネスエリアにアクセスできる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法	17-15
Oracle Applications のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定する方法	17-16
Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法	17-16
特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法	17-16
Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責をワークブックに表示する方法	17-17

18 Oracle Application Server のコンポーネントとともに Discoverer を使用する方法

Discoverer を Oracle Application Server Control とともに使用する方法	18-2
Discoverer を Oracle Application Server Reports とともに使用する方法	18-2
Discoverer を Oracle Application Server Web Cache とともに使用する方法	18-2
Oracle Warehouse Builder とともに Discoverer を使用する方法	18-3
Discoverer を Oracle Application Server Login Server とともに使用する方法	18-4
Discoverer を Oracle Application Server Portal とともに使用する方法	18-4

19 EUL ステータス・ワークブック

EUL ステータス・ワークブックについて	19-2
Discoverer EUL V5 のビジネスエリア	19-2
標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法	19-3
Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法	19-4
Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックの実行方法	19-6
Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンインストール方法	19-6
EUL データ定義ワークブック	19-7
EUL クエリー統計ワークブック	19-8
EUL アクセス・ワークブック	19-8
EUL ワークブック管理ワークブック	19-9
EUL ステータス・ワークブックと DBA_JOBS_RUNNING テーブルに関する注意	19-9

20 クエリーのパフォーマンスの予測

クエリーのパフォーマンスの予測について	20-2
Discoverer Plus でのクエリー予測の機能	20-2
クエリー予測が使用できなくなる理由	20-2
クエリー予測の速度と精度を向上する方法	20-3
クエリー予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法	20-3
クエリー予測のための timed_statistics パラメータの確認および変更方法	20-3
データ・テーブルの分析方法	20-4
クエリー予測のための optimizer_mode パラメータの確認および変更方法	20-5
クエリー予測にかかる時間を短縮する方法	20-5
Secure Views でクエリー予測を使用する方法	20-7
古いクエリー予測統計の削除方法	20-8

21 Discoverer のレジストリ設定

Discoverer のレジストリ設定について	21-2
Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定	21-2
Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定	21-2
Discoverer Desktop のパフォーマンスを向上させるレジストリ設定	21-2
Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細	21-3
Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法	21-10

22 Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース

使用可能な Discoverer コマンドライン・インタフェース	22-2
Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース	22-2
Discoverer コマンドライン・インタフェースと Discoverer EUL command line for Java の 相違点	22-3
Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド	22-3
Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド修飾子	22-3
Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用	22-4
Discoverer コマンドライン・インタフェースの実行に必要な権限	22-4
コマンドの使用に関する注意	22-5
このガイドで使用されるコマンド構文規則	22-5
コマンドの構文	22-6
コマンドの例	22-6
コマンド・ファイル	22-6
コマンド・ファイルの作成方法	22-7
コマンド・ファイルの実行方法	22-7
コマンド・ファイルの例	22-7
Discoverer Administrator コマンドのクイック・ガイド	22-8
Discoverer Administrator コマンド・リファレンス	22-9
/?	22-9
/apps_fndnam	22-10
/apps_gwyuid	22-10
/apps_user	22-10
/asm	22-10
/cmdfile	22-11
/connect	22-11
/create_eul	22-11
/create_eul /apps_mode	22-12

/delete	22-12
/delete_bus_area	22-13
/delete_eul	22-14
/export (EUL オブジェクト)	22-14
/import (ビジネスエリア)	22-15
/import (EUL オブジェクト)	22-16
/load	22-16
/refresh_bus_area	22-18
/refresh_folder	22-18
/refresh_summary	22-19
Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス	22-19
/aggregate	22-20
/all	22-20
/apps_grant_details	22-20
/apps_responsibility	22-20
/apps_security_group	22-20
/asm_space、/asm_tablespace	22-20
/audit_info	22-21
/auto_gen_name	22-21
/ba_link	22-21
/business_area	22-21
/capitalize	22-22
/condition	22-22
/date_hierarchy	22-22
/db_link	22-22
/description	22-22
/eul	22-22
/eul_language	22-23
/external_element	22-23
/folder	22-23
/function	22-23
/hier_node	22-23
/hierarchy	22-24
/identifier	22-24
/insert_blanks	22-24
/item	22-24
/item_class	22-24
/join	22-24
/keep_folder	22-25
/keep_format_properties	22-25
/log	22-25
/log_only	22-25
/lov	22-25
/object	22-26
/overwrite	22-26
/parameter	22-26
/password	22-26
/private	22-26
/refresh	22-26
/remove_prefix	22-27

/rename	22-27
/schema	22-27
/show_progress	22-27
/sort_folders	22-27
/sort_items	22-28
/source	22-28
/summary	22-28
/user	22-28
/workbook	22-28
/xmlworkbook	22-29
Discoverer Desktop コマンド・リファレンス	22-29
/?	22-29
/apps_fndnam	22-29
/apps_gwyuid	22-29
/apps_user	22-30
/batch	22-30
/cmdfile	22-30
/connect	22-30
/export	22-31
/open	22-31
/opendb	22-32
/parameter	22-32
/p	22-32
/pt	22-32
/savedb	22-32
/sheet	22-33
Discoverer Desktop コマンド修飾子リファレンス	22-33
/all	22-34
/apps_responsibility	22-34
/eul	22-34

23 Oracle 以外のデータベースおよび Oracle RDB に対する Discoverer サポート

異機種間サービス	23-2
Generic Connectivity を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続	23-2
Oracle 以外のデータベースに接続するための Generic Connectivity の使用と ODBC ドライバの 使用の相違点	23-2
Generic Connectivity を使用する利点	23-3
Oracle Application Server Control を使用して Discoverer に Generic Connectivity を 設定する方法	23-4
Oracle 以外のデータベース（システム固有の ODBC ドライバを使用してアクセス）から Oracle データベース（Generic Connectivity をサポート）に EUL を移行する方法	23-8
Discoverer Administrator で異機種間データ・サービスを使用する場合の ORA-3113 エラー	23-9
Transparent Gateway を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続	23-9
Oracle RDB に対する Discoverer サポート	23-9
Oracle RDB で Discoverer を使用するためのソフトウェア要件	23-9
Oracle RDB でサポートされない Discoverer 機能	23-10
Oracle RDB で部分的にサポートされる Discoverer 機能	23-11

24 前のリリースの Discoverer からのアップグレード

アップグレード・パスの選択	24-2
Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードの前提条件	24-2
Discoverer と EUL のリリース	24-3
アップグレード・プロセスの概要	24-3
Discoverer リリース 3.1 以下から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード	24-4
Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード	24-5
Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード	24-5
アップグレード手順 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ	24-6
アップグレード手順 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード	24-6
アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ	24-8
アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行	24-9
アップグレード手順 5: リリース 4.1 EUL の削除	24-10
アップグレード手順 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除	24-12
Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード	24-12
Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード	24-13
アップグレード手順 1: リリース 5.0 EUL のバックアップ	24-13
アップグレード手順 2: リリース 5.0 EUL のアップグレード	24-13
アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ	24-15
アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行	24-16
アップグレード手順 5: クライアント・マシンからの Discoverer Version 9.0.x 製品の削除	24-17
Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードに関する注意	24-18
Oracle Applications EUL のアップグレードに関する注意	24-18
分析関数を含む EUL のアップグレードに関する注意	24-18
Video Stores チュートリアルへのアップグレードに関する注意	24-18
スケジュール・ワークブックのアップグレードに関する注意	24-19
.dis ファイルに保存されたワークブックのアップグレードに関する注意	24-19
EUL Gateway を使用する Discoverer システムのアップグレードに関する注意	24-19
集合演算子を含むサマリー・フォルダのアップグレードに関する注意	24-19
無効な文字が含まれた識別子のアップグレードに関する注意	24-19
スケジュール・ワークブックおよび Discoverer の現行リリースと Oracle9i より前の データベース・リリースとの間の互換性	24-20

第 IV 部 リファレンス情報

25 ダイアログのリファレンス

ダイアログのリファレンス一覧	25-2
「アルファベット順」ダイアログ	25-6
「ビジネスエリア・プロパティ」ダイアログ	25-7
識別子の変更の警告ダイアログ	25-8
「フォルダの選択」ダイアログ (アイテム、条件、結合の場合)	25-9
「結合の選択」ダイアログ	25-10
ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ	25-11
「条件プロパティ」ダイアログ	25-12
「条件」ダイアログ	25-14
「ビジネスエリア削除の確認」ダイアログ	25-15
「削除の確認」ダイアログ	25-16

「フォルダ削除の確認」ダイアログ	25-17
「接続」ダイアログ	25-18
「EUL 作成ウィザード」ダイアログ	25-19
「EUL 作成ウィザード: ステップ2」ダイアログ	25-21
「EUL 作成ウィザード: ステップ2」ダイアログ (Oracle Applications EUL)	25-22
「カスタム・フォルダ」ダイアログ	25-23
カスタム・フォルダのプロパティ・ダイアログ	25-24
「データベース情報」ダイアログ	25-25
「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト	25-26
「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マテリアライズド・ビュー」タブ	25-27
「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブ	25-30
「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブ	25-31
「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「表領域」タブ	25-32
「EUL の削除」ダイアログ	25-33
「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログ	25-34
「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ	25-36
「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ (この日付階層を使用する日付アイテムの選択)	25-37
「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ (階層を構成するアイテムの選択)	25-38
「階層の編集」ダイアログ: 「名前」タブ	25-39
「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「代替ソート」タブ	25-40
「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「一般」タブ	25-41
「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「値リスト」タブ	25-42
「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブ	25-43
「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「アイテムの選択」タブ	25-45
「結合の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ	25-46
「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ	25-48
「サマリーの編集」ダイアログ: 「アイテム選択」タブ	25-50
「サマリーの編集」ダイアログ: 「組合せ」タブ	25-51
「サマリーの編集」ダイアログ: 「一般」タブ	25-53
「サマリーの編集」ダイアログ: 「リフレッシュ」タブ	25-56
「EUL マネージャ」ダイアログ	25-59
「EUL アップグレード」ダイアログ	25-60
「EUL アップグレードのエラー」ダイアログ	25-61
「エクスポート・ウィザード: ステップ1」ダイアログ	25-62
「エクスポート・ウィザード: ステップ2」ダイアログ (選択したビジネスエリアのエクスポート)	25-63
「エクスポート・ウィザード: ステップ2」ダイアログ (選択したオブジェクトのエクスポート)	25-64
「エクスポート・ウィザード: ステップ2/3」ダイアログ	25-65
「フォルダ・プロパティ」ダイアログ	25-67
「階層プロパティ」ダイアログ	25-73
「階層ウィザード: ステップ1」ダイアログ	25-74
「影響」ダイアログ	25-75
「PL/SQL 関数のインポート」ダイアログ	25-76
「インポート・ウィザード: ステップ1」ダイアログ	25-77
「インポート・ウィザード: ステップ2」ダイアログ	25-78
「インポート・ウィザード: ステップ3」ダイアログ	25-80
「サンプル・データ・インストール・ウィザード/サンプル・データ削除ウィザード: ステップ1」 ダイアログ	25-82
「サンプル・データ・インストール・ウィザード/サンプル・データ削除ウィザード: ステップ2」 ダイアログ	25-85
「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ3」ダイアログ	25-88

アイテム・クラス・プロパティ・ダイアログ: 「一般」タブ	25-89
「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ1」ダイアログ	25-91
「アイテム階層ノード・プロパティ」ダイアログ	25-92
「アイテム・プロパティ」ダイアログ	25-93
「アイテム」ダイアログ	25-99
「結合プロパティ」ダイアログ	25-100
「ロード・ウィザード: ステップ1」ダイアログ	25-104
「ロード・ウィザード: ステップ2」ダイアログ	25-106
「ロード・ウィザード: ステップ3」ダイアログ	25-107
「ロード・ウィザード: ステップ4」ダイアログ	25-108
「ロード・ウィザード: ステップ5」ダイアログ	25-111
「フォルダの管理」ダイアログ: 「ビジネスエリア」タブ	25-113
「フォルダの管理」ダイアログ: 「フォルダ」タブ	25-114
「フォルダの管理」ダイアログ: 「親なしのフォルダ」タブ	25-115
「スケジュール・ワークブックの管理」ダイアログ	25-116
「一致する値」ダイアログ	25-119
「新規条件」ダイアログ (詳細設定)	25-120
「新規条件」ダイアログ (アイテムまたはフォルダの選択)	25-123
条件の新規作成 / 編集ダイアログ	25-124
「新規日付フォーマット」ダイアログ	25-126
「新規アイテム」ダイアログ	25-127
「新規アイテム」ダイアログ (フォルダの選択)	25-129
「新規結合」ダイアログ (フォルダの選択)	25-130
「オンライン・ディクショナリ・オプション」ダイアログ	25-131
「ビジネスエリアを開く」ダイアログ	25-132
「オプション」ダイアログ: 「接続」タブ	25-133
「オプション」ダイアログ: 「デフォルト EUL」タブ	25-135
「オプション」ダイアログ: 「クエリー管理」タブ	25-136
「PL/SQL 関数」ダイアログ: 「引数」タブ	25-137
「PL/SQL 関数」ダイアログ: 「関数」タブ	25-139
「権限」ダイアログ: 「権限」タブ	25-141
「権限」ダイアログ: 「クエリー管理」タブ	25-144
「権限」ダイアログ: 「スケジュール・ワークブック」タブ	25-145
「権限」ダイアログ: 「ユーザー / ロール」タブ	25-147
「プロパティ」ダイアログ	25-148
「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログ	25-149
「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ	25-150
「リフレッシュ・ウィザード」ダイアログ	25-151
「リポジトリ・ユーザー」ダイアログ	25-154
「職責」ダイアログ	25-155
「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「一般」タブ	25-156
「スケジュール・ワークブック」ダイアログ: 「パラメータ値」	25-157
「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「スケジュール」タブ	25-158
「セキュリティ」ダイアログ: 「ビジネスエリア -> ユーザー」タブ	25-159
「セキュリティ」ダイアログ: 「ユーザー -> ビジネスエリア」タブ	25-161
「ユーザー / ロールの選択」ダイアログ	25-162
「サマリー・プロパティ」ダイアログ	25-164
サマリー・ウィザード (ASM) : ダイアログのリスト	25-167
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: ダイアログのタブのリスト	25-168
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「フォルダ」タブ	25-169

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「分析」タブ	25-170
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「削除」タブ	25-171
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「クエリーの使用方法」タブ	25-172
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「クエリー・ユーザー」タブ	25-174
サマリー・ウィザード (ASM) : 「分析されませんでした。」ダイアログ	25-175
サマリー・ウィザード (ASM) : 「推奨サマリー」ダイアログ	25-177
サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ2 「フォルダの分析」ダイアログ	25-178
サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ3 (領域の割当て) ダイアログ	25-179
「サマリー・ウィザード: ステップ1」ダイアログ	25-180
「サマリー・ウィザード: ステップ2」ダイアログ	25-181
「サマリー・ウィザード: ステップ3」ダイアログ (クエリー統計の使用)	25-182
「サマリー・ウィザード: ステップ3」ダイアログ (外部テーブルの使用)	25-183
「ヘルプの使用方法」	25-185
「値」ダイアログ	25-186
ワークエリア: 「データ」タブ	25-187
ワークエリア: 「階層」タブ	25-188
ワークエリア: 「アイテム・クラス」タブ	25-189
ワークエリア: 「サマリー」タブ	25-190

26 SQL ファイルおよびトレース・ファイルの使用

Discoverer に付属する SQL ファイルのリスト	26-2
Discoverer の問題を解決するためのオラクル社カスタマ・サポート・センターの利用	26-3
トレース・ファイルを作成して Discoverer の問題を診断する方法	26-4
Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を設定して EUL トレース・ファイルを 作成する方法	26-4

27 Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブック

サンプル・データを使用して Discoverer Administrator の使用を開始するために必要な データベース前提条件	27-2
Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックのインストール時に 実行される処理	27-2
サンプル・データのインストールに必要な権限	27-4
Discoverer Administrator に最初に接続するときに適用される条件	27-4
EUL を作成する理由	27-5
Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックのインストール手順	27-5
サンプル・データ用のプライベート EUL の作成方法	27-5
Discoverer サンプル・データのインストール方法	27-9
VIDEO5 データベース・ユーザーのサンプル・データ EUL に対するアクセス権限を 付与する方法	27-14
チュートリアル用ビジネスエリアを別の End User Layer にインストールする方法	27-16
チュートリアル用ビジネスエリア、テーブルおよびデータを削除する方法	27-20
サンプル・データの再インストール方法	27-22

A Oracle Business Intelligence Discoverer の管理アカウント情報

Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって PUBLIC ユーザーに付与される データベース権限	A-2
Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって Discoverer マネージャに付与される データベース権限	A-3

B Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー情報

Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー	B-2
Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー・リスト	B-2
Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーで実行可能な PL/SQL ファンクションの 登録方法	B-3
ワークシートの保存時に PL/SQL トリガーを使用して SQL をワークシートから抽出する方法の例	B-3

用語集

索引

はじめに

このマニュアルは、Discoverer Administrator を使用して Discoverer システムの設定と管理を行うユーザーを支援します。

Discoverer Administrator によって Discoverer システムを制御および管理できるため、Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーが必要な情報を検索できます。

対象読者

Discoverer システムの管理者は、次の操作の実行方法についてはこのマニュアルを参照してください。

- End User Layer の作成およびメンテナンス
- ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムの設定
- ユーザーによる情報の検索を支援するための、結合、ユーザー定義アイテムおよび条件の定義
- サマリー・フォルダを使用した Discoverer のパフォーマンスの向上

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

関連ドキュメント

このマニュアルで参照されているドキュメントおよび Oracle Business Intelligence に関するその他の情報（ホワイトペーパー、ベスト・プラクティス、最新版のドキュメント、その他の関連ドキュメントなど）は、OTN-J（Oracle Technology Network Japan）から入手できます。URL は次のとおりです。

<http://otn.oracle.co.jp/>

表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。
<>	山カッコは、ユーザー指定の名前または値を囲みます。

規則	意味
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。
メニュー名 コマンド	縦線は、メニューの選択肢の順序を表します。たとえば、メニューとそのメニューのコマンドを示します。

Discoverer では、操作の実行方法が複数ある場合があります。たとえば、新規条件を作成する場合、次の 2 通りの方法があります。

- 「ツール」 → 「条件」 を選択する。
- ツールバーの「条件」 ボタンをクリックする。

Discoverer のマニュアルでは、マウスを使用しないユーザーのために、選択するメニューおよびメニュー・オプションが示されます。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

第 I 部

Oracle Business Intelligence Discoverer の 管理の概要

第 I 部では、Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要を説明します。

Oracle Business Intelligence Discoverer の 管理の概要

この章では、Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要を説明します。項目は次のとおりです。

- 「Oracle Business Intelligence Discoverer」
- 「Oracle Business Intelligence Discoverer の様々なコンポーネント」
- 「Discoverer マネージャの役割」
- 「Discoverer マネージャが使用するツール」
- 「Discoverer で使用できるデータソース」
- 「Discoverer マネージャの基本概念」
- 「詳細情報の参照先」

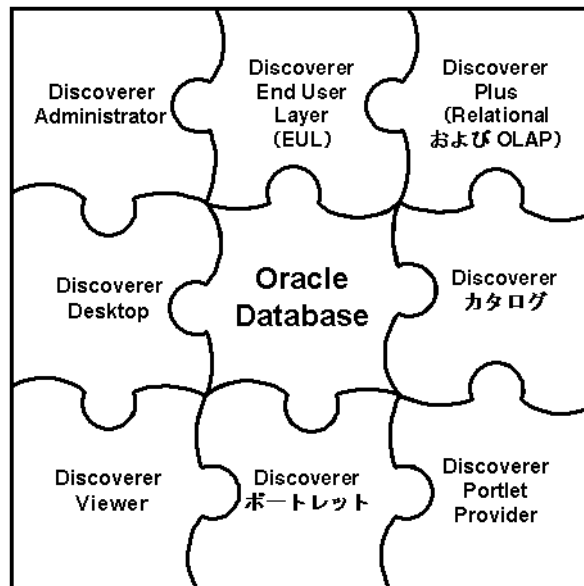
Oracle Business Intelligence Discoverer

Oracle Business Intelligence Discoverer は、直観的で非定型のクエリー、レポート作成、分析および Web パブリッシングのツールセットで、ビジネス・ユーザーによるデータベース情報への即時アクセスを提供します。

Oracle Business Intelligence Discoverer によって、組織のあらゆるレベルのビジネス・ユーザーが、情報に基づいたビジネス上の意思決定をすばやく行うことができます。ユーザーは標準の Web ブラウザを使用して、リレーショナルとマルチディメンション両方のデータソースのデータへのセキュアな即時アクセスが可能です。Oracle Business Intelligence Discoverer に用意されているビジネス・ビューによって、ユーザーは基礎となるデータ構造の複雑さから解放されるため、ビジネス上の問題の解決に集中できます。

Oracle Business Intelligence Discoverer は、Oracle データベースとともに動作する統合された多数のコンポーネントで構成され、完全な統合ビジネス・インテリジェンス・ソリューションを提供します。

図 1-1 Oracle Business Intelligence Discoverer のコンポーネント



Oracle Business Intelligence Discoverer のどのコンポーネントを使用するかは、実行する作業によって異なります。次に例を示します。

- 新規ワークシートを作成し、リレーショナルとマルチディメンション両方のデータソースのデータを Web 上で分析する場合は、Discoverer Plus（および Plus OLAP）を使用します。
- 新規ワークシートを作成し、PC 上の Windows アプリケーションを使用してリレーショナル・データソースのデータを分析する場合は、Discoverer Desktop を使用します。
- 既存のワークシートのデータを分析する場合は、Discoverer Viewer、または Discoverer Portlet Provider を使用して Oracle Portal ページに追加された Discoverer ポートレットを使用します。
- Discoverer ワークシートをダッシュボード形式のポータルにゲージとして表示する場合は、Discoverer Portlet Provider を使用します。
- リレーショナル・データのエンド・ユーザー・ビューを管理する場合は、Discoverer Administrator を使用します。

Oracle Business Intelligence Discoverer のコンポーネントでは、Discoverer End User Layer または Discoverer カタログに格納されている Discoverer オブジェクトの定義を使用します。

詳細は、「[Oracle Business Intelligence Discoverer の様々なコンポーネント](#)」を参照してください。

Oracle Business Intelligence Discoverer の様々なコンポーネント

Oracle Business Intelligence Discoverer は、次のコンポーネントで構成されています。

- Oracle Business Intelligence Discoverer Plus (Relational および OLAP)

このコンポーネントはインターネットまたはイントラネット上で実行されます。エンド・ユーザーは次のことができます。

- 新規ワークシートおよびグラフを作成し、必要なデータを取得する
- データを分析する
- ワークシートおよびグラフを他の人と共有する

Discoverer Plus の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer

この Oracle Business Intelligence Discoverer コンポーネントは、インターネットまたはイントラネット上の Web ブラウザ内部で実行されます。Discoverer Viewer を使用すると、エンド・ユーザーは、Discoverer Plus および Discoverer Desktop で作成したワークシート内のデータを分析できます。エンド・ユーザーはワークシートをパーソナライズし（アイテムの移動など）、各自の変更内容を保存できます。

Discoverer Viewer の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- Oracle Business Intelligence Discoverer Portlet Provider および Discoverer ポートレット

これらの Oracle Business Intelligence Discoverer コンポーネントは、インターネットまたはイントラネット上の Web ブラウザ内部で実行されます。Discoverer Portlet Provider を使用すると、エンド・ユーザーは、Discoverer ワークシートを既存のポータル・ページのエリア（またはポートレット）として追加できます。エンド・ユーザーは Discoverer Portlet Provider を使用して、次のタイプの Discoverer ポートレットを公開できます。

- ワークシート・ポートレットのリスト
- ワークシート・ポートレット
- ゲージ・ポートレット

エンド・ユーザーはワークシートをパーソナライズし（ストップライト・フォーマットの追加など）、各自の変更内容を保存できます。

- Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop

この Oracle Business Intelligence Discoverer コンポーネントは、エンド・ユーザーが新規ワークシートを作成してリレーショナル・データを分析できるようにする、Windows 専用アプリケーションです。エンド・ユーザーが Discoverer Desktop で作成したワークシートは、Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer ポータルで使用できます。

Discoverer Desktop の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator

この Oracle Business Intelligence Discoverer コンポーネントは、Discoverer マネージャがビジネス指向のリレーショナル・データ・ビューの作成とメンテナンスに使用する、Windows 専用アプリケーションです。Discoverer Administrator には、次のタスクを行うウィザードとダイアログが用意されています。

- データに対するアクセス制御
- サマリー・データの管理

- バッチ・スケジュールの管理

Discoverer Administrator の詳細は、「[Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator](#)」を参照してください。

- Oracle Business Intelligence Discoverer End User Layer (EUL)

Discoverer End User Layer コンポーネントは、リレーショナル・データソースのクエリー時に使用するオブジェクトの定義を格納および取得するためのリポジトリです。

End User Layer の詳細は、[第4章「End User Layer の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

- Oracle Business Intelligence Discoverer カタログ

Discoverer カタログ・コンポーネントは、マルチディメンション・データソースのクエリー時に使用するオブジェクトのユーザー定義を格納および取得するためのリポジトリです。

Discoverer カタログの詳細は、「[Discoverer カタログ](#)」を参照してください。

Discoverer マネージャの役割

Discoverer マネージャの役割は、エンド・ユーザーが Discoverer Plus、Discoverer Plus OLAP、Discoverer Viewer および Discoverer Desktop を使用できるようにすることです。Discoverer マネージャには、次のいずれかの作業に対する責任があります。

- リレーショナル・データソースを使用する Discoverer の管理

詳細は、[第3章「リレーショナル・データソースを使用する Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要」](#)を参照してください。

- マルチディメンション・データソースを使用する Discoverer の管理

詳細は、[第2章「マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理」](#)を参照してください。

- Discoverer コンポーネント (Discoverer Plus、Discoverer Plus OLAP、Discoverer Desktop および Discoverer Viewer) の構成

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

Discoverer マネージャが使用するツール

Discoverer マネージャは次のツールを使用します。

- Discoverer Administrator

詳細は、[第3章「リレーショナル・データソースを使用する Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要」](#)を参照してください。

- Oracle Warehouse Builder

詳細は、Oracle Warehouse Builder のドキュメントを参照してください。

- Oracle Application Server Control

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

Discoverer で使用できるデータソース

Discoverer では次のデータソースを使用できます。

- リレーショナル (詳細は、[第3章「リレーショナル・データソースを使用する Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要」](#)を参照)

- マルチディメンション (詳細は、[第2章「マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理」](#)を参照)

リレーショナル・データソースとマルチディメンション・データソースの相違点は次のとおりです。

- リレーショナル・データソースは、通常、データ値を含む行と列で構成されるテーブルに編成されています。
- マルチディメンション・データソースは、通常、1つ以上のディメンションで編成されています。通常、このマルチディメンション・データ構造はキューブと呼ばれます。

Discoverer マネージャの基本概念

Discoverer の管理を始める前に、いくつかの基本的な概念に慣れておくると便利です。

- 「[ビジネス・インテリジェンス](#)」
- 「[Discoverer の動作](#)」

ビジネス・インテリジェンス

ビジネス・インテリジェンスとは、データを分析してビジネス上の疑問に対応し、将来の傾向を予測できる能力のことです。

Oracle Business Intelligence Discoverer は優れたビジネス・インテリジェンス・ツールであり、ユーザーはデータを非定型方式で分析できます。クエリーとレポートの事前定義を IT の専門家に依存することなく、Discoverer ユーザー自身が分析するデータを選択して、ビジネス上の意思決定を行うのに十分な情報が得られるまで結果を分析できます。また、Oracle Business Intelligence Discoverer を使用すると、ユーザーはデータ分析の結果を様々なフォーマット（グラフや Excel スプレッドシートなど）で同僚と共有できます。

Discoverer の動作

データベースの情報に対するユーザーのリクエストは、ワークシート形式で行われます。

ユーザーがワークシートを作成するかまたはワークシートを開くと、Discoverer では次の動作が実行されます。

- ワークシートに対応する SQL 文に変換（たとえば、フォルダ名とアイテム名をそれぞれテーブル名と列名に変換）
- データベースに SQL 文を送信
- データベースから返された結果セットを表示

Discoverer Plus、Discoverer Desktop および Discoverer Viewer の場合、SQL 文はアプリケーション・サーバー・マシン上で実行される Discoverer プロセスを経由してデータベースに送信されます。

詳細情報の参照先

Discoverer の管理に関する詳細情報は、使用しているデータソースに応じて、次のどちらかの章を参照してください。

- マルチディメンション・データソースを使用している場合は、[第2章「マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理」](#)を参照してください。
- リレーショナル・データソースを使用している場合は、[第3章「リレーショナル・データソースを使用する Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要」](#)を参照してください。

第 II 部

マルチディメンション・データソースを 使用する Discoverer の管理

第 II 部では、マルチディメンション・データソースを使用する Discoverer の管理について説明します。

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理

この章では、マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理について説明します。項目は次のとおりです。

- 「マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理するための前提条件」
- 「オンライン分析処理 (OLAP)」
- 「マルチディメンション・データソース」
- 「Discoverer カタログ」
- 「マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理」
- 「Discoverer Plus OLAP の開始時にユーザーを支援する方法」

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理するための前提条件

Discoverer エンド・ユーザーがマルチディメンション・データソースにアクセスする前に、次の作業を実行する必要があります。

- Oracle9i Enterprise Edition または Oracle Database 10g のデータベースを OLAP オプションを使用してインストールし、適切なデータベース・パッチをインストールします。

詳細は、使用しているプラットフォーム用の Oracle9i または Oracle Database のインストール・ガイド、および Discoverer のインストール時に使用したガイドを参照してください。

- OLAP カタログのデータへのアクセス権を付与します。OLAP カタログでは、論理マルチディメンション・オブジェクトを定義します。OLAP カタログは、リレーショナル・データベース・スキーマまたはアナリティック・ワークスペースのいずれかにマップされます。

アナリティック・ワークスペースには、OLAP DML で記述されたマルチディメンション・データ・オブジェクトおよびプロシージャが格納されます。OLAP DML は、Oracle OLAP 計算エンジンで使用されるデータ操作言語です。OLAP DML によってクエリー言語 (SQL など) の分析機能および OLAP API が拡張されるため、予測、モデリングおよび what-if シナリオも処理対象になります。

詳細は、『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

オンライン分析処理 (OLAP)

オンライン分析処理 (OLAP) は、マルチディメンション・データソースに対して実行するクエリーを示します。たとえば、「注文 84305 はいつ出荷されたか」は単純なクエリーの例です。また、「南西地区の今四半期の売上を、1年前の売上とどのように比較するか、次の四半期の売上予測はどうか、売上予測を改善するために変更できる要因は何か」は、典型的な一連のクエリーの例です。

最も標準的なクエリーは、単純なデータ選択と取得で構成されます。ただし、OLAP クエリーは詳細に構造化されているため、ユーザー定義アイテム、時系列の分析、および集計済の履歴データや現行データへのクイック・アクセスを含めることができます。OLAP クエリーでは、メジャーで使用するディメンションおよび階層を使用します。データのクエリーを行う際は、「当地区で製品をどのように販売するか」のようにビジネス用語を使用します。各ディメンションには、質問する方法を反映した独自の選択内容が含まれます。

OLAP の詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』
- 『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』

マルチディメンション・データソース

マルチディメンション・データソースは、大量のデータを分析するために最適化されています。このようなデータソースは、データ・ウェアハウス、またはオンライン分析処理 (OLAP) データソースとも呼ばれます。

リレーショナル・データソースでは、データがテーブルに編成されています。テーブルは、列と行を持つデータ構造です。これに対して、マルチディメンション・データは、1つ以上のディメンションで編成されたデータです。通常、マルチディメンション・データ構造はキューブと呼ばれます。Oracle9i 以上のデータベースには、リレーショナル・データ構造 (テーブルと列) とマルチディメンション・データ構造 (キューブ) の両方を含めることができます。これら2つの構造を組み合わせることによって、マルチディメンション・データに迅速にアクセスする一方で、リレーショナル・データを集計することも可能です。

Discoverer カタログ

Discoverer カタログは、Discoverer Plus OLAP 用のオブジェクトの定義を格納および取得するためのリポジトリです。Discoverer カタログは、Oracle Business Intelligence Beans (BI Beans) を使用して作成されたアプリケーションで使用できます。エンド・ユーザーは Discoverer Plus OLAP を使用して、ワークブック、ユーザー定義アイテム、保存済選択などのオブジェクトを Discoverer カタログに格納し、Discoverer カタログにアクセスする他のユーザーとそれらのオブジェクトを共有します。たとえば、ユーザーは BI Beans アプリケーションでグラフを作成して Discoverer カタログに格納できます。他のユーザーは、適切なアクセス権を持っている場合、Discoverer カタログに格納されたグラフを取得して、Discoverer Plus OLAP で新規ワークシートにそのグラフを挿入できます。

Discoverer カタログを使用すると、ユーザーやシステム管理者は特定のオブジェクトへのアクセス権を指定できるため、オブジェクト・レベルでのセキュリティを確立できます。

注意: Discoverer カタログを OLAP カタログと混同しないでください。Discoverer カタログにはオブジェクト定義が格納されています。OLAP カタログでは論理マルチディメンション・オブジェクトを定義します。そのオブジェクトは、スター・スキーマまたはスノーフレーク・スキーマのテーブル内の列、あるいはアナリティック・ワークスペースのマルチディメンション・オブジェクトにマップできます。

Discoverer カタログのインストールおよび管理の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理

この項では、マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理者の役割、使用するツール、およびマルチディメンション・データソースとリレーショナル・データソースの管理方法の相違について説明します。

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムの管理者の役割

Discoverer マネージャには、Discoverer Plus OLAP の初期実装、および継続的な管理とメンテナンスを行う責任があります。Discoverer マネージャとしての役割を果たし、マルチディメンション・データソースを使用する際に企業の意思決定担当者をサポートするには、次の事項を理解しておく必要があります。

- データベースの理解: データベースのデータ内容、データの種類、データの格納方法 (リレーショナル・データベース・スキーマまたはアナリティック・ワークスペースのどちらに格納するか)、メタデータの構成方法、および他のデータとの関連について把握している必要があります。
- ビジネスの理解: 意思決定担当者が必要とするデータ、実行される分析の種類、および最終結果をわかりやすく表示する方法について把握している必要があります。

アクセス対象がマルチディメンション・データソースの場合とリレーショナル・データソースの場合の Discoverer システムの管理方法の相違

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理するためには、リレーショナル・データソースにアクセスする Discoverer システムとの管理方法の相違を理解する必要があります。相違点は次のとおりです。

- マルチディメンション・データソースとともに Discoverer を使用する場合は、Discoverer Administrator を使用して管理作業を実行しません。かわりに、「[マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理するために使用するツール](#)」で説明するツールを使用します。

- リレーショナル・データソースとともに Discoverer を使用する場合は、Discoverer では End User Layer (EUL) を使用します。マルチディメンション・データソースとともに Discoverer を使用する場合は、Discoverer では End User Layer (EUL) を使用せず、Discoverer カタログを使用します。
- 次の作業は、通常、マルチディメンション・データソースではなくリレーショナル・データソースに対して実行されます。
 - ワークブックのスケジュール
 - 結合の作成とメンテナンス
 - サマリー・フォルダの作成とメンテナンス
 - クエリーのパフォーマンスの予測

リレーショナル・データソースとともに Discoverer を使用する場合は Discoverer Plus OLAP を使用する場合の相違については、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理するために使用するツール

マルチディメンション・データソースにアクセスする Discoverer システムを管理する際は、指定のツールを使用して次の管理作業を実行します。

- Oracle Analytic Workspace Manager または Oracle Warehouse Builder を使用して、OLAP カタログ・メタデータを定義します。メタデータの定義方法は、ROLAP (リレーショナル・オンライン分析処理) を使用するか、または MOLAP (マルチディメンション・オンライン分析処理) を使用するかによって異なります。
 - ROLAP では、OLAP カタログはリレーショナル・データベース・スキーマにマップされます。
 - MOLAP では、OLAP カタログはアナリティック・ワークスペースにマップされます。データの適切な定義方法および構成詳細については、『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。
- Oracle Application Server Control を使用して、Discoverer カタログを構成します。次の作業を実行します。
 - Discoverer カタログのインストール
 - 情報に対するアクセス制御
 - Discoverer カタログのオブジェクトのインポートおよびエクスポート
 - ログおよびルック・アンド・フィールドのカスタマイズ
 - ログ・レベルの指定
 - Discoverer Plus OLAP サブプレットの URL パラメータの指定詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。
- Oracle Analytic Workspace Manager を使用して、ディメンションおよびメジャーをメンテナンスします。

詳細は、『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。
- Oracle Analytic Workspace Manager または Oracle Warehouse Builder を使用して、ディメンション階層をメンテナンスします。

詳細は、『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。
- Discoverer Plus OLAP でユーザー定義アイテムと条件を作成してメンテナンスします。

詳細は、Discoverer Plus OLAP のヘルプ・システムを参照してください。

Discoverer Plus OLAP の開始時にユーザーを支援する方法

Discoverer マネージャは、次の各項で説明する方法で Discoverer Plus OLAP のユーザーを支援できます。

- 「サンプル・ワークブックへのアクセスを有効にする方法」
- 「プリプロセッサ・プログラムの作成方法」

サンプル・ワークブックへのアクセスを有効にする方法

Discoverer Plus OLAP には、製品に含まれる多数の強力な機能を説明するためにサンプル・ワークブックが同梱されています。ユーザーがサンプル・ワークブックにアクセスできるようにするには、Discoverer カタログとサンプル・ワークブックをインストールする必要があります。このインストール処理に関するドキュメントは、Oracle Technology Network の Discoverer の項から入手できます。

プリプロセッサ・プログラムの作成方法

Discoverer マネージャは、Discoverer Plus OLAP または Discoverer Viewer の起動前にユーザーが特定の作業を実行するためのプリプロセッサ・プログラムを作成できます。

プリプロセッサ・プログラムを作成する理由

Discoverer Plus OLAP および Discoverer Viewer のユーザーは、製品の起動前にプリプロセッサ・プログラムを実行すると便利な場合があります。プリプロセッサ・タスクを指定するには、PL/SQL コードを入力し、D4OSYS スキーマに D4O_AUTOGO ストアド・プロシージャを定義します。このストアド・プロシージャは、Discoverer Plus OLAP および Discoverer Viewer の起動時に自動的に実行されます。

D4O_AUTOGO ストアド・プロシージャを使用して、次のような作業を実行できます。

- ROLAP 実装で SQL コマンドを実行できます。
- MOLAP 実装で、SQL の AW.EXECUTE コマンドをアナリティック・ワークスペースで使用してルーチンをコールします。このルーチンを使用して、次のような作業を実行できます。
 - アナリティック・ワークスペースでプログラムを起動します。
 - 予測を実行します。
 - PERMIT コマンドを使用して有効範囲をデータに適用できます。「プリプロセッサ・プログラムの作成例」を参照してください。

D4O_AUTOGO ストアド・プロシージャの引数

D4O_AUTOGO ストアド・プロシージャが受け取る引数は、ログインするユーザーのユーザー ID のテキスト値のみです。D4O_AUTOGO ストアド・プロシージャが定義されている場合、Discoverer Plus OLAP および Discoverer Viewer は現行ユーザーのユーザー ID をストアド・プロシージャに渡します。

プリプロセッサ・プログラムの作成例

ユーザーが分析を許可されるデータ値の範囲を設定することは、プリプロセッサ・タスクの一例です。たとえば、サンプル・ワークブックでは、ユーザー Scott は将来の予測データ（たとえば、2005 年データ）を参照することは許可されていません。このようなセキュリティを設定するには、D4O_AUTOGO ストアド・プロシージャを使用してデータの範囲を設定するための環境を指定する必要があります。

サンプル・ワークブックで使用するデータは、shaw という名前の Oracle OLAP アナリティック・ワークスペースに格納されます。このワークスペースには scope_data というストアド・プロシージャが定義され、現行のデータベース・ユーザー ID に基づいて期間の範囲が設定されます。scope_data ストアド・プロシージャは次のように定義されます。

```
DEFINE SCOPE_DATA PROGRAM
PROGRAM
"Scopes data based on user id
trap on error noprint
aw attach CS_OLAP.SHAW first
"***
"* shawt_time_isvisible specifies for each user the time periods that
are visible.
"* The SCOTT user does not have access to 2002 forecast data
"***
limit shawusers to upcase(userid)

cns shawt_time
    permit read when shawt_time_isvisible

error:
    return
END
```

scope_data ストアド・プロシージャを実行するために、D4O_AUTOGO ストアド・プロシージャを次のように定義できます。

```
CREATE OR REPLACE PROCEDURE D4OSYS.D4O_AUTOGO (user_id IN VARCHAR) is
BEGIN
    dbms_aw.aw_attach('CS_OLAP', 'SHAW');
    dbms_aw.execute('scope_data');
END;
```


第 III 部

リレーショナル・データソースを使用する Discoverer の管理

第III部では、リレーショナル・データソースを使用する Discoverer の管理について説明します。

リレーショナル・データソースを使用する Oracle Business Intelligence Discoverer の 管理の概要

この章では、リレーショナル・データソースを使用する Oracle Business Intelligence Discoverer の管理の概要を説明します。項目は次のとおりです。

- 「リレーショナル・データソース、OLTP システムおよびデータ・ウェアハウス」
- 「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator」
- 「リレーショナル・データソースを使用する場合の Discoverer システムの基本概念」
- 「リレーショナル・データソースを使用する場合の Discoverer マネージャとしての役割」
- 「リレーショナル・データソースを使用する Discoverer を正しく実装するための手順」
- 「リレーショナル・データソースを使用する Discoverer システムのメンテナンスに含まれる内容」
- 「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator を使用するための前提条件」
- 「Discoverer でのデータベース・パラメータの使用」
- 「Discoverer Administrator の開始方法」
- 「ワークエリア」
- 「Discoverer Administrator の新機能」
- 「Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプ」

リレーショナル・データソース、OLTP システムおよびデータ・ウェアハウス

リレーショナル・データソースとは、データ値を含む行と列で作成されるテーブルにデータが格納されているデータベースです。リレーショナル・データベース管理システム (RDBMS) の全体的な構造は、システムの使用方法に応じて何通りもの方法で設定できます。

典型的な RDBMS はオンライン・トランザクション処理 (OLTP) 用に設計されており、膨大な量のトランザクション・データをできるかぎり効率的な方法で格納することを主な目的としています。OLTP システム設計における主な目的は、データを RDBMS に格納することです。OLTP システムには、ビジネスで日常的に使用される情報が含まれています。OLTP システム用に設計された RDBMS の情報は、一般的に処理に重点が置かれ、現在のデータであり、変更しやすいという性質を持ちます。

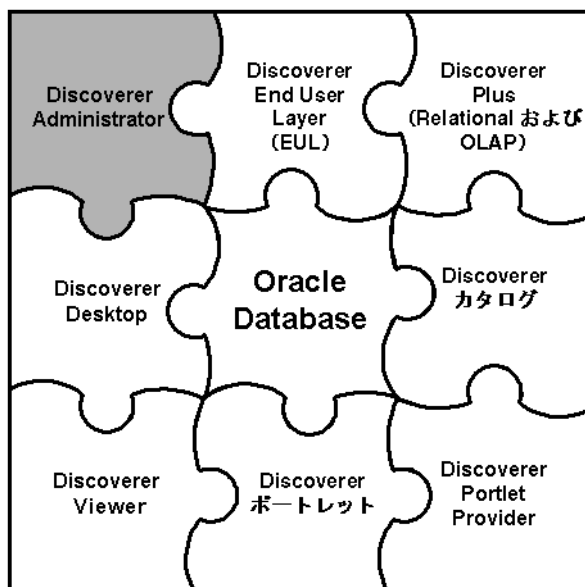
データ・ウェアハウスとは、単に情報を効率的に格納するだけでなく、データ分析を容易にする目的で設計された構造を持つ RDBMS のことです。データ・ウェアハウス設計における主な目的は、データを RDBMS から取り出すことです。データ・ウェアハウスの情報は、一般的に目的に重点が置かれ、過去のデータであり、静的であるという性質を持ちます。

Oracle Business Intelligence Discoverer は、RDBMS が OLTP システム用に設計されたのか、データ・ウェアハウスとして設計されたのかにかかわらず、ビジネス・ユーザーにデータ分析機能を提供します。

Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator

Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator は、Oracle Business Intelligence Discoverer のコンポーネントの 1 つです。

図 3-1 Oracle Business Intelligence Discoverer のコンポーネント



Discoverer Administrator により、ビジネス・ユーザーはデータソースの複雑な概念から解放されるため、Oracle Business Intelligence Discoverer を使用してビジネス上の疑問に迅速かつ的確に対応できます。

Discoverer Administrator のウィザード形式インターフェースでは、次の操作を実行できます。

- End User Layer (EUL) の設定とメンテナンス
EUL とは、データベースの他のテーブルおよびビューに関する情報（つまりメタデータ）を含む一連のデータベース・テーブルです。詳細は、「[End User Layer の概要](#)」を参照してください。
- 情報に対するアクセス制御
- Discoverer エンド・ユーザーがワークシートに含める条件およびユーザー定義アイテムの作成

Discoverer Administrator のユーザーは、Discoverer マネージャと呼ばれます。

Discoverer Administrator は、ビジネス・インテリジェンス・ツールの集まりである Oracle Business Intelligence Tools の一部として提供されます。

リレーショナル・データソースを使用する場合の Discoverer システムの基本概念

リレーショナル・データソースを使用する場合は、Discoverer システムを設計および実装する前に、Discoverer に関するいくつかの基本的な概念をよく理解しておく必要があります。

これ以降の項では、これらの基本概念について簡単に説明します。

- 「[End User Layer の概要](#)」
- 「[ビジネスエリアの概要](#)」
- 「[フォルダとアイテムの概要](#)」
- 「[ワークブックとワークシートの概要](#)」
- 「[階層とドリルの概要](#)」
- 「[サマリー・フォルダの概要](#)」

各項の内容は簡単な説明のみですが、マニュアル内の他の章への相互参照が含まれているため詳細を参照できます。

End User Layer の概要

End User Layer (EUL) は、Discoverer エンド・ユーザーをデータベースの複雑性と物理構造から解放します。EUL では、各 Discoverer エンド・ユーザーまたはユーザー・グループに合わせて調整できる、直観的でビジネスに焦点が合ったデータベースのビューが提供されます。EUL を使用すると、Discoverer エンド・ユーザーはデータ・アクセスの問題ではなくビジネスの問題に集中できます。Discoverer エンド・ユーザーのクエリー作成は SQL の生成によって補完され、一連の豊富なデフォルト設定を使用することによってレポートを簡単に作成できます。

EUL のメタレイヤー構造によって、データベースのデータ整合性が保持されます。Discoverer マネージャまたは Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer に対して行う操作は EUL のメタデータにのみ影響し、データベースには影響しません。

EUL は、データベースのおよそ 50 のテーブルのコレクションです。Discoverer Administrator を介して変更可能なテーブルは、これらのテーブルのみです。ビジネスエリアは、EUL データベース・テーブルを使用して Discoverer Administrator で定義されます。また、Discoverer ではアプリケーション・データベースに読取り専用アクセスが提供されます。

EUL の詳細は、[第 4 章「End User Layer の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

ビジネスエリアの概要

一般的に、データベースのすべての情報に関心を持つユーザー（またはユーザー・グループ）はいません。むしろ、ユーザーは各自の行うジョブになんらかの関係がある情報のサブセットに関心を持つ傾向があります。そのような場合、Discoverer Administrator を使用して関連情報のコンテナとして1つ以上のビジネスエリアを作成します。

ビジネスエリアを作成したら、関連情報を含むデータベース・テーブルをそのビジネスエリアにロードします。

ビジネスエリアの詳細は、第5章「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」を参照してください。

フォルダとアイテムの概要

ビジネスエリアにロードするテーブルおよびビューは、フォルダとして Discoverer エンド・ユーザーに表示されます。テーブルまたはビュー内の列は、アイテムとして表示されます。

データベース・テーブルと列には、ユーザーにとってわかりにくい名前が付いている場合があります。Discoverer Administrator を使用すると、フォルダおよびアイテムの名前を、基礎となるテーブルと列の名前に比べてよりわかりやすい名前に変更できます。

ビジネスエリアのフォルダは、データベース・テーブルまたはビューに直接基づいている必要はありません。また、複数のテーブルまたはビューの列に基づくアイテムを含んだ複合フォルダを作成できます。さらに、自分で作成した SQL 文に基づくカスタム・フォルダも作成できます。

同様に、ビジネスエリアのアイテムは列に直接基づいている必要はありません。複数の列を計算して生成されるユーザー定義アイテムや、Oracle データベースで利用できる分析関数を利用するユーザー定義アイテムを作成できます。

フォルダおよびアイテムの詳細は、次の項目を参照してください。

- 第6章「フォルダの作成とメンテナンス」
- 第9章「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」
- 第11章「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」

ワークブックとワークシートの概要

Oracle Business Intelligence Discoverer エンド・ユーザーは、アイテムをワークシートに挿入して Discoverer のデータ分析およびチャート作成ウィザードを使用することで情報を分析し、関心のある情報を検索します。Discoverer ワークシートは、ワークブックにグループ化されます。ワークブックは、ファイル・システムまたはデータベースに格納できます。

Discoverer エンド・ユーザーに対して、作成されたワークシートの情報分析のみを許可する場合があります。または、エンド・ユーザーによるワークシートの作成を許可した方が適切な場合もあります。Discoverer Administrator では、各自のワークブックを作成できるエンド・ユーザーと、作成されたワークブックの使用のみを許可されたエンド・ユーザーを決定できます。

ワークブックとワークシートの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

階層とドリルの概要

階層とは、エンド・ユーザーがドリルアップまたはドリルダウンして詳細度に応じた情報を表示できるアイテム間の論理関係です。Discoverer エンド・ユーザーは、効率的に情報を分析するために次の操作を行います。

- 特定の情報に関する詳細を表示するためのドリルダウン（たとえば、特定地域の売上合計が期待に反した場合、通常、エンド・ユーザーはその地域の売上合計値にドリルダウンして、地域内のどの都市の売上が低いのかを参照します）
- ディテール・データが上位レベルの情報にどの程度貢献しているかを参照するためのドリルアップ（たとえば、ある都市の売上数値を参照している場合、通常、エンド・ユーザーはドリルアップして、その地域の売上合計値を参照します）

ビジネスエリアにテーブルをロードすると、Discoverer によって日付アイテムのデフォルト日付階層が自動的に作成されます。他のアイテムに対して独自の階層を作成する場合があります。

階層の詳細は、[第 13 章「階層の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

サマリー・フォルダの概要

サマリー・フォルダは、再利用のために保存されたクエリー済データを表します。

Discoverer Administrator でサマリー・フォルダを作成すると、エンド・ユーザーのクエリーに対するレスポンス時間が短縮されます。クエリーのレスポンス時間が短縮されるのは、クエリーがデータベース・テーブルではなく、事前に集計および結合されたデータにアクセスするためです。また、Discoverer では、他のアプリケーションで作成されたサマリー・データを含むテーブルに基づくサマリー・フォルダを使用できます。これらのテーブルは、外部サマリー・テーブルと呼ばれます。

サマリー・フォルダの詳細は、次の章を参照してください。

- [第 14 章「サマリー・フォルダの管理」](#)
- [第 15 章「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)
- [第 16 章「サマリー・フォルダに関する追加情報」](#)

リレーショナル・データソースを使用する場合の Discoverer マネージャとしての役割

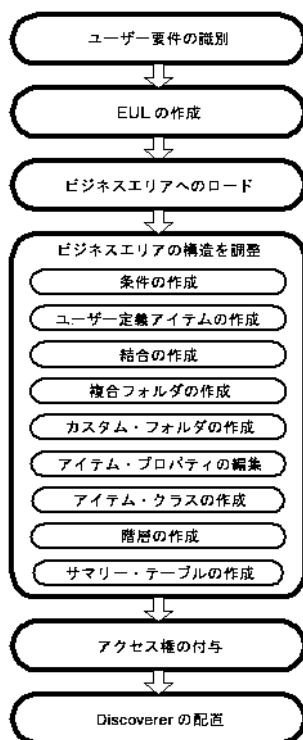
Discoverer マネージャには、次の操作に対する責任があります。

- Discoverer システムの初期実装
- Discoverer システムの継続管理とメンテナンス

リレーショナル・データソースを使用する Discoverer を正しく実装するための手順

次のフロー・チャートに示すように、リレーショナル・データソースを使用する Discoverer システムの実装には基本的に 6 つの手順があります。

図 3-2 Discoverer 実装フロー・チャート（リレーショナル・データソースを使用）



これら 6 つの手順の詳細を説明します。

1. ユーザー要件の識別

Discoverer の実装を成功させるには、ユーザーの要件を満たす必要があります。ユーザー要件を特定するには、主なユーザーに次の項目について質問します。

- 現在使用している情報
- 表示を希望する情報
- 希望する情報の表示方法

まず、ユーザーが現在使用しているレポートと情報ソースを検討します。Discoverer を使用することで、ユーザーが現在使用している情報へのアクセスと、新しい強力な方法で情報を分析する機能の両方がユーザーに提供されます。

一般的に、ユーザーの要件は時間とともに変化します。システムがロールアウトされたあとで、ユーザーから大きな変更の要望が出されることがよくあります。Discoverer で実行可能な作業が明確になれば、Discoverer を他のどの領域で活用できるかを判断する材料になります。

要件が変更されることを予測して作業を行うようにしてください。正常なシステムでは、最初は要件の一部を満たし、その後ユーザーのフィードバックに基づいて時間とともに変更されていきます。

2. EUL の作成（EUL が存在しない場合は必須）

ビジネスエリアを作成するには、EUL が必要です。EUL が存在しない場合は、EUL を作成する必要があります。

3. ビジネスエリアの作成とビジネスエリアへのデータのロード (必須)

ユーザーの要件が識別されると、ユーザーがアクセスする必要がある情報を把握できます。たとえば、あるユーザー・グループは販売情報にアクセスし、他のグループは製造情報にアクセスするなどです。

Discoverer で、共通のビジネス目的を持つ情報を 1 つのビジネスエリアにグループ化します。ビジネスエリアの作成後、その情報を保持するデータベース・テーブルおよびビューを指定する必要があります。これを行うには、テーブルおよびビューをそのビジネスエリアにロードします。

4. 最も柔軟で理解しやすい方法でユーザーがデータを表示できるようにビジネスエリアの構造を調整

ユーザーがデータにアクセスして分析するには、ビジネスエリア設定および内容はデフォルトで十分です。ただし、Discoverer Administrator ではデフォルトの分析機能を拡張する多くの機能が提供されます。

次の操作を実行できます。

- オプション条件と必須条件の作成による、フォルダに返される行数の絞込み (詳細は、[第 12 章「条件の作成とメンテナンス」](#)を参照)
- 既存の計算をユーザーに提供するユーザー定義アイテムの作成 (詳細は、[第 11 章「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」](#)を参照)
- データベースからのテーブルのロード時に自動的に結合されなかったフォルダを組み合わせる結合の作成 (詳細は、[第 10 章「結合の作成とメンテナンス」](#)を参照)
- 結合およびリレーショナル構造をユーザーに対して完全に非表示にする、複合フォルダへのフォルダの結合 (詳細は、[第 6 章「フォルダの作成とメンテナンス」](#)を参照)
- アイテムを持つフォルダとして入力した (SQL 文によって返される) 結果セットを表すカスタム・フォルダの作成 (詳細は、[第 6 章「フォルダの作成とメンテナンス」](#)を参照)
- データをわかりやすくするための、アイテム名、説明および他のフォーマット情報の編集 (詳細は、[第 9 章「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)を参照)
- 値リスト、代替ソートおよびディテール・ドリルをサポートするアイテム・クラスの作成 (詳細は、[第 9 章「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)を参照)
- ドリル操作を簡素化する階層の作成 (詳細は、[第 13 章「階層の作成とメンテナンス」](#)を参照)
- サマリー・テーブルの作成、Discoverer によるサマリー管理の自動化、または既存サマリー・テーブルの登録によるクエリー・パフォーマンスの最大化 (詳細は、[第 14 章「サマリー・フォルダの管理」](#)を参照)

5. ユーザーまたはロールに対するビジネスエリアへのアクセス権の付与 (必須)

ユーザーの要件が識別されると、どのユーザー (およびユーザー・グループ) がどの情報にアクセスする必要があるかを把握できます。

様々なユーザーが同じ情報へのアクセス権を必要とする場合があります。たとえば、ある従業員に関する情報を、その従業員のマネージャ、給与スタッフおよび人事管理部門のユーザーが要求することがあります。

また、1 つのユーザー・グループのみが情報へのアクセス権を持つことが適切な場合もあります。たとえば、エンジニアリング・プロジェクトの情報はプロジェクト・マネージャにとっては重要ですが、給与スタッフには関係ありません。

ユーザーの情報に対する要件を考慮しながら、ユーザーにビジネスエリアへのアクセス権を付与できます。

Discoverer ユーザーが（エンド・ユーザーであるか管理者であるかにかかわらず）、基礎となるデータベースのセキュリティに影響を及ぼすことはありません。ユーザーは、Discoverer の情報のうち、アクセス用のデータベース権限を持っていない情報は参照できません。つまり、Discoverer のセキュリティと権限はすべて、データベース・セキュリティ機能に追加されたものです。

6. Discoverer の配置

ユーザーの要件により、企業で使用可能な Discoverer コンポーネントが決定されます。

ユーザー要件を識別すると、各自でワークシートを作成する必要があるユーザーや、作成されたワークシートの使用のみを必要とするユーザーがいることがわかります。さらに、Web ブラウザを使用して Discoverer を実行するユーザーと、Java アプレット・ユーザー・インタフェースまたは HTML ユーザー・インタフェースを使用して Discoverer を実行するユーザーがいます。

次の表を参考にして、組織に配置する Discoverer コンポーネントを決定してください。

ユーザー要件	Discoverer Plus	Discoverer Viewer	Discoverer Desktop
Windows を実行する PC における Discoverer のインストールおよび実行	いいえ	いいえ	する
Web ブラウザを使用した Discoverer の実行	する	する	いいえ
新規ワークシートの作成	する	いいえ	する
ファイル・システムへのワークブックの保存	する	いいえ	する
Discoverer ユーザー・インタフェースのカスタマイズ	いいえ	する	いいえ

ネットワーク・パフォーマンスやセキュリティ問題など、決定内容に影響する要因は他にもあります。

配置する Discoverer コンポーネントを決定したら、固有のインストールまたは構成手順に関する適切なドキュメントを参照してください。詳細は、「[関連ドキュメント](#)」を参照してください。

リレーショナル・データソースを使用する Discoverer システムのメンテナンスに含まれる内容

リレーショナル・データソースを使用する Discoverer システムの実装後は、ユーザー要件を満たすために継続的に行う必要がある Discoverer のメンテナンス作業量は減ります。

通常は、次の操作によってビジネスエリアを引き続き調整します。

- 値リスト、代替ソートおよびディテール・ドリルをサポートするアイテム・クラスの追加（詳細は、[第9章「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)を参照）
- データベースからのテーブルのロード時に自動的に結合されなかったフォルダと、同じワークシートに現在アクセスする必要があるユーザーを組み合わせる新規結合の追加（詳細は、[第10章「結合の作成とメンテナンス」](#)を参照）
- フォルダに返される行数を制限する新規オプション条件と必須条件の追加（詳細は、[第12章「条件の作成とメンテナンス」](#)を参照）
- 最初は必要でなかった既存の計算をユーザーに提供する新規ユーザー定義アイテムの追加（詳細は、[第11章「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」](#)を参照）
- クエリー作成を簡素化する新規複合フォルダの追加（詳細は、[第6章「フォルダの作成とメンテナンス」](#)を参照）
- 従来のフォルダでは満たされないユーザー要件を満たす新規カスタム・フォルダの追加（詳細は、[第6章「フォルダの作成とメンテナンス」](#)を参照）

- ユーザーによる新しいデータ分析方法を可能にする新規階層の追加（詳細は、[第 13 章「階層の作成とメンテナンス」](#)を参照）
- 特定のクエリーにおけるパフォーマンスの問題を解決する新規サマリーの追加（詳細は、[第 14 章「サマリー・フォルダの管理」](#)を参照）

前述の操作に加えて、ユーザーおよびそのユーザーがアクセス権を持つビジネスエリアの変更や、個々のユーザーがこれらのビジネスエリアで実行できる操作の変更が必要となる場合があります。たとえば、次のような場合です。

- 新規ユーザーを追加する場合、ジョブの実行に必要なビジネスエリアへのアクセス権を新規ユーザーに付与する必要があります。
- 既存ユーザーがジョブまたは部門を変更する場合、既存ユーザーに新規ビジネスエリアへのアクセス権を付与するか、あるいは以前のビジネスエリアのアクセス権を取り消す必要があります。

詳細は、[第 7 章「情報に対するアクセス制御」](#)を参照してください。

Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator を使用するための前提条件

この項では、Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator を使用するためのシステムおよびデータ・アクセスの前提条件について説明します。項目は次のとおりです。

- [「システムの前提条件」](#)
- [「データ・アクセスの前提条件」](#)

システムの前提条件

Discoverer Administrator を使用する前に、次の前提条件が満たされている必要があります。

- 適切なデータベースがインストールされ、使用可能である必要があります。Oracle Enterprise Edition データベースでは、サマリー・フォルダのパフォーマンスを向上させるマテリアライズド・ビューの使用がサポートされます。
- Discoverer Administrator が、通常は Oracle Developer Suite のフル・インストールの一部として、PC にインストールされている必要があります。

エンド・ユーザーが Discoverer を使用するには、次のいずれかまたは両方がインストールされている必要があります。

- Discoverer Plus または Discoverer Viewer（あるいはその両方）がアプリケーション・サーバー・マシンにインストールされ、Oracle Business Intelligence インストールの一部として適切に構成されている必要があります（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照）。
- Discoverer Desktop がエンド・ユーザーの PC にインストールされている必要があります。

データ・アクセスの前提条件

Discoverer Administrator を使用して Discoverer システムを作成およびメンテナンスするには、特定の Discoverer 権限およびデータベース権限が必要です。

- EUL を作成するには、次の項目で説明されている権限が必要です。
 - [「Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限」](#)
- EUL を管理するには、次の権限が必要です。
 - EUL に対する「Discoverer 管理」権限
 - 変更するビジネスエリアに対する「管理許可」権限
 - ビジネスエリアに追加するテーブルに対する SELECT データベース権限

- サンプル・データをインストールする手順は、第 27 章「Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブック」を参照してください。
- 次の Discoverer 機能を活用するには、固有の権限が必要です。
 - 自動サマリー管理（詳細は、「ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件」を参照）
 - 手動サマリー・フォルダ作成（詳細は、「Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件」を参照）

Discoverer システムを使用するには、エンド・ユーザーに特定の Discoverer 権限およびデータベース権限が必要です。

- 最低 1 つの EUL に対するアクセス権限
- EUL 内の最低 1 つのビジネスエリアに対するアクセス権限
- ビジネスエリアの各フォルダの基礎となるテーブルに対する SELECT データベース権限（データベース・ユーザーに直接またはデータベース・ロール経由で付与されます）
- 次の Discoverer 機能を活用するには、固有の権限が必要です。
 - スケジュール・ワークブック（詳細は、「ワークブックをスケジュールするための前提条件」を参照）
 - ユーザー PL/SQL ファンクション（詳細は、「ユーザー定義 PL/SQL ファンクション」を参照）

Discoverer でのデータベース・パラメータの使用

Discoverer では、データベースで使用可能な機能を利用するために様々なデータベース・パラメータが使用されます。予測した結果を得るには、データベース・パラメータを推奨値に設定する必要があります。データベース・パラメータの値は、Oracle DBMS の初期化ファイル (INIT<SID>.ORA ファイル) で指定できます。たとえば、Discoverer のサマリー管理機能とワークブック・スケジュール機能の両方で、Oracle データベース固有のスケジュール機能が使用されます。job_queue_processes で指定する値により、両方の機能が影響を受けます。

次の表に、Discoverer で使用されるデータベース・パラメータのうち、このガイドで参照されているものを示します。

値が設定されていない場合の結果	データベース・パラメータ	説明	推奨値
スケジュール機能およびサマリー・フォルダを使用できない	job_queue_processes	ワークブック・スケジュール機能およびサマリー処理に関連します。詳細は、「ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能」を参照してください。	1 より大きい値
クエリー予測が提供されない	timed_statistics	クエリー予測の有効化に関連します。詳細は、「クエリー予測のための timed_statistics パラメータの確認および変更方法」を参照してください。	TRUE
クエリー予測が提供されない	optimizer_mode	クエリー予測の有効化に関連します。詳細は、「クエリー予測のための optimizer_mode パラメータの確認および変更方法」を参照してください。	CHOOSE
クエリー速度の低下	optimizer_index_cost_adj	コストベースのオプティマイザにおける索引の使用法の調整に関連します。詳細は、Oracle10g のドキュメントを参照してください。	詳細は、データベース管理者に問い合わせてください。

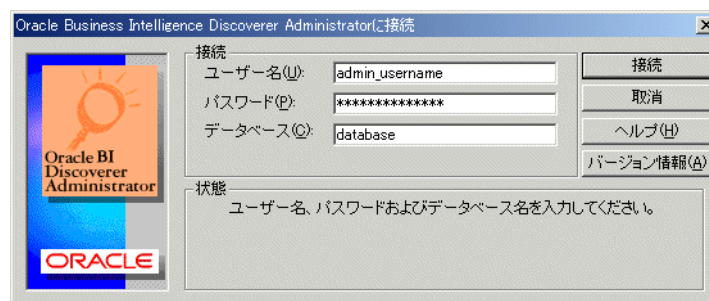
値が設定されていない場合の結果	データベース・パラメータ	説明	推奨値
クエリー速度の低下	optimizer_index_caching	コストベースのオプティマイザにおける索引の使用方法の調整に関連します。詳細は、Oracle10g のドキュメントを参照してください。	詳細は、データベース管理者に問い合わせてください。
無効な接続文字列	global_names	Generic Connectivity の設定に関連します。詳細は、「Oracle Application Server Control を使用して Discoverer に Generic Connectivity を設定する方法」を参照してください。	FALSE
データベース障害時にデータベース・プロセスが代替のバックアップ・コンポーネントに再配置されない	failover_mode	透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートの有効化に関連します。詳細は、「Discoverer で透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを有効にする方法」を参照してください。	FAILOVER_MODE=<type><retries>
データベース障害時にデータベース・プロセスが代替バックアップ・コンポーネントに再配置されない	type	failover_mode パラメータのサブパラメータです。詳細は、「Discoverer で透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを有効にする方法」を参照してください。	(TYPE=SELECT)
データベース障害時にデータベース・プロセスが代替バックアップ・コンポーネントに再配置されない	retries	failover_mode パラメータのサブパラメータです。詳細は、「Discoverer で透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを有効にする方法」を参照してください。	(RETRIES=5)

Discoverer Administrator の開始方法

Discoverer Administrator を開始する手順は、次のとおりです。

- Windows の「スタート」メニューで「プログラム」→「Oracle Business Intelligence Tools - <BI_TOOLS_HOME_NAME>」→「Discoverer Administrator」を選択すると、「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログが表示されます。

図 3-3 「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログ



- 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Administrator を開始するデータベース・ユーザーの名前を入力します。
- 「パスワード」フィールドに、Discoverer Administrator を開始するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
- 次のガイドラインに従って、接続するデータベースを「接続」フィールドに指定します。
 - デフォルトの Oracle データベースにログインする場合、「接続」フィールドには何も入力しないでください。

- デフォルト以外の Oracle データベースにログインする場合は、データベースの名前を指定してください（名前がわからない場合は、データベース管理者に問い合せてください）。
5. 「接続」ボタンをクリックして Discoverer Administrator を開始し、データベースに接続します。

次に表示されるプロンプトは、Discoverer システムによって異なります。

- 1つ以上の EUL へのアクセス権を持っている場合は、新規ビジネスエリアを作成するか、デフォルト EUL で既存のビジネスエリアを開くように要求されます（詳細は、[第 5 章「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)を参照）。
- EUL へのアクセス権がない場合（組織内で初めて Discoverer Administrator を使用する場合、あるいは既存 EUL に対する管理権限が付与されていない場合）は、新規 EUL を作成するように要求されます（詳細は、「[既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法](#)」を参照）。

注意

- 「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログには、「**Oracle Applications ユーザー**」チェックボックスが含まれている場合があります。Oracle Administrator を使用して EUL を管理し、Oracle Applications とともに使用する場合は、このチェックボックスを選択します。Oracle Applications とともに Discoverer を使用方法の詳細は、[第 17 章「Discoverer を Oracle Applications とともに使用方法」](#)を参照してください。
- Discoverer Administrator は常にデフォルト EUL で開始します。デフォルト EUL は、「[オプション](#)」ダイアログ: 「[接続](#)」タブで指定された EUL です。作業対象の EUL を変更する場合は、デフォルト EUL を変更してから Discoverer Administrator に再接続する必要があります（詳細は、「[デフォルト End User Layer を表示または変更する方法](#)」を参照）。
- Discoverer Administrator を使用するときは、特定の EUL に対する現在の接続が複数存在しないことを確認する必要があります。EUL に対する接続が 1 つであれば、競合する変更を EUL オブジェクトに対して気付かずに行う危険を回避できます。

ワークエリア

ワークエリアは、End User Layer へのビューです。ワークエリアで、次の項目を作成および編集して EUL をメンテナンスします。

- ビジネスエリアおよびフォルダとアイテム
- 階層
- アイテム・クラス
- サマリー・フォルダ

Discoverer Administrator のメイン・ウィンドウに「ワークエリア」ウィンドウが表示されます。一度に複数の「ワークエリア」ウィンドウを開くと、ビジネスエリア間でオブジェクトをコピーするときに便利です。ただし、すべての「ワークエリア」ウィンドウには同じビジネスエリアが含まれていることに注意してください。

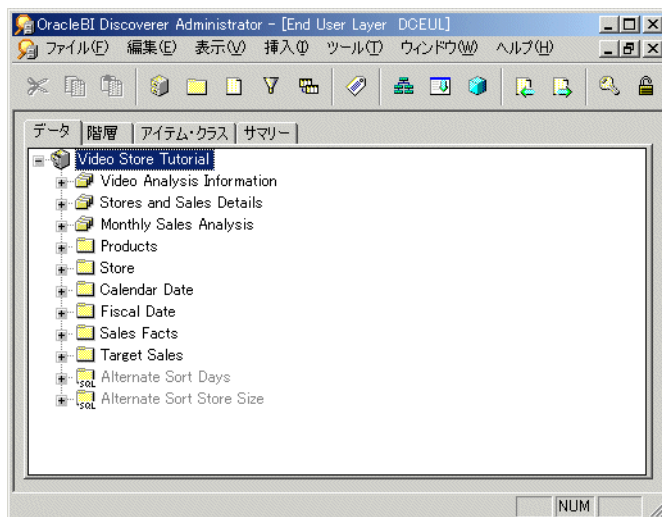
「ワークエリア」ウィンドウのタブ

「ワークエリア」ウィンドウには 4 つのタブがあります。

- 「データ」タブには、各ビジネスエリアの構造と内容が表示されます。「データ」タブでは、次の操作を実行できます。
 - ユーザー定義アイテムの作成
 - 複合カスタム・フォルダの作成
 - 結合の作成

- 条件の作成
- ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムの新規作成
- オブジェクト・プロパティの変更

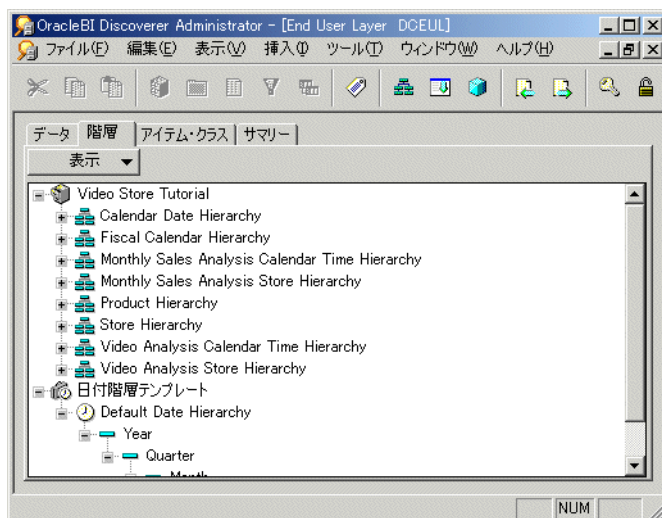
図 3-4 「ワークエリア」ウィンドウの「データ」タブ



「データ」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「ワークエリア：「データ」タブ」を参照してください。

- 「階層」タブには、各ビジネスエリア内の階層が表示されます。「階層」タブでは、次の操作を実行できます。
 - 階層の新規作成
 - 既存階層の内容および編成の検討
 - Discoverer Administrator で提供する階層テンプレートの表示
- 「階層」タブの「表示」ボタンを使用すると、表示する階層を指定できます。

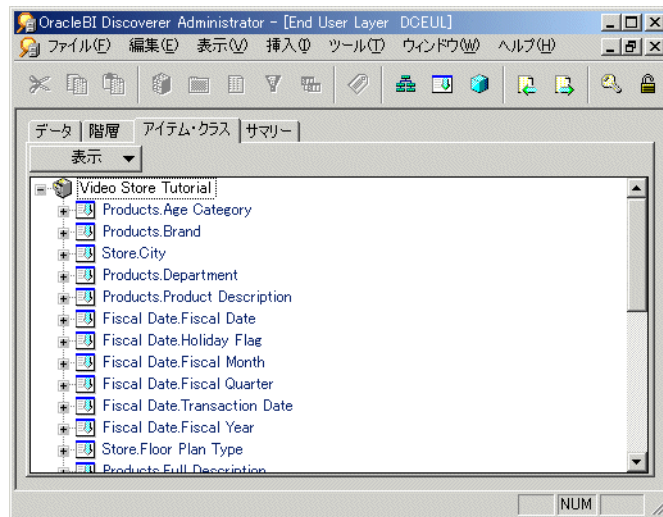
図 3-5 「ワークエリア」ウィンドウの「階層」タブ



「階層」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「ワークエリア：「データ」タブ」を参照してください。

- 「アイテム・クラス」タブには、各ビジネスエリア内のアイテム・クラスが表示されます。「アイテム・クラス」タブでは、次の操作を実行できます。
 - アイテム・クラスの新規作成
 - アイテム・クラスに関連付けられた値リストの表示（存在する場合）
 - 各アイテム・クラスを使用するアイテムの表示
 - ディテール・ドリルおよび代替ソート属性を持つアイテム・クラスおよびそれらのオプションがアクティブかどうかの識別
- 「アイテム・クラス」タブの「表示」ボタンを使用すると、表示するアイテム・クラスを指定できます。

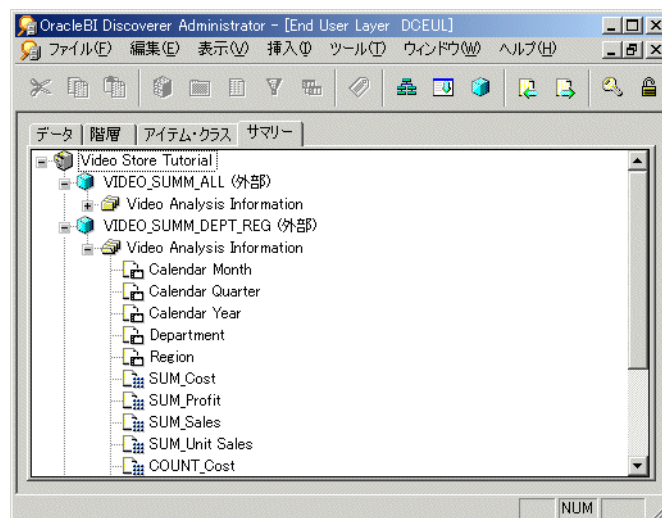
図 3-6 「ワークエリア」ウィンドウの「アイテム・クラス」タブ



「アイテム・クラス」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「ワークエリア：「データ」タブ」を参照してください。

- 「サマリー」タブには、各ビジネスエリア内のサマリー・フォルダが表示されます。「サマリー」タブでは、次の操作を実行できます。
 - サマリー・フォルダの新規作成
 - サマリー・フォルダの編成および定義の検討
 - サマリー・フォルダのリフレッシュ

図 3-7 「ワークエリア」ウィンドウの「サマリー」タブ



「サマリー」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「ワークエリア: 「データ」タブ」を参照してください。

「ワークエリア」ウィンドウの状況依存メニュー

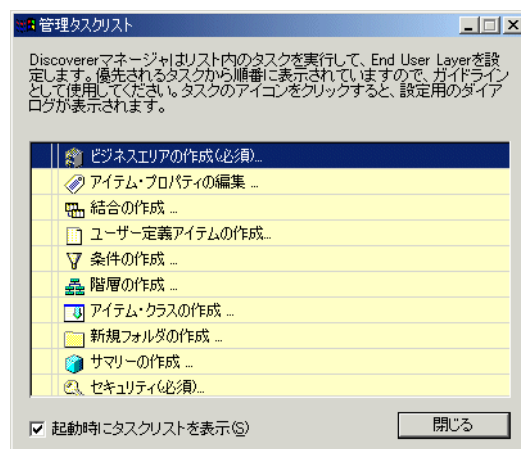
Discoverer Administrator での作業中にマウスの右ボタンをクリックすると、ポップアップ・メニューが表示されます。「ワークエリア」ウィンドウでは、このポップアップ・メニューの内容は現在選択されているオブジェクトで最も頻繁に使用されるコマンドとなります。

現在選択されているオブジェクトがない場合、ポップアップ・メニューにはビジネスエリア全般における作業用のコマンドと、現行のタブに適したコマンドが表示されます。

管理タスクリスト

Discoverer Administrator を初めて開始すると、Discoverer Administrator のメイン・ウィンドウ上部に「管理タスクリスト」が表示されます。

図 3-8 管理タスクリスト



「管理タスクリスト」には、2通りの使用方法があります。

- ビジネスエリアの準備に関連する基本的な手順のリストとして使用
- リストされた作業に関連するダイアログを表示するショートカットとして使用

Discoverer Administrator の新機能

Discoverer Administrator リリース 10.1.2 には、次のような新機能と改善された機能が含まれています。

- 多数のユーザーに対応するための Discoverer Administrator UI の拡張 : Discoverer Administrator の機能が改善され、多数のユーザーを検索、選択および表示できるようになりました。詳細は、「[ユーザー / ロールの選択](#) ダイアログ」を参照してください。
- 複合フォルダのリーチスルー : 複合フォルダやそのベース・フォルダからのエンド・ユーザーに対するアイテムの可用性が増加しました。詳細は、「[複合フォルダのリーチスルー](#)」を参照してください。
- 名前の自動生成 : EUL アイテムの名前の導出元が変更されると、EUL アイテムの名前が自動的に更新されます。詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。
- 透過アプリケーション・フェイルオーバー : データベース・フェイルオーバーから透過的にリカバリされます。詳細は、「[透過アプリケーション・フェイルオーバー](#)」を参照してください。
- Advanced Security Option (ASO) の暗号化認証 : Discoverer の機能が Oracle データベースの ASO オプションを使用して認証されます。詳細は、「[Discoverer およびセキュリティ](#)」を参照してください。

Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプ

Discoverer Administrator では、オンライン・ヘルプとドキュメントが提供されます。

Discoverer Administrator ヘルプ・システムにより、HTML 形式の管理ガイド情報を参照する状況依存アクセスが提供されます。

ヘルプ・システムを開始するには、「Discoverer」ダイアログの「ヘルプ」をクリックするか、「ヘルプ」→「トピックの検索」を選択します。

- 「Discoverer Administrator」ダイアログの「ヘルプ」ボタンにより、ダイアログのフィールドに詳細な文脈依存ヘルプが表示されます。
- 「ヘルプ」→「トピックの検索」メニュー・オプションにより、状況依存ダイアログ・ヘルプを含む Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator ヘルプ・システムの内容が表示されます。
- 「ヘルプ」→「マニュアル」メニュー・オプションにより、使用可能な Discoverer マニュアルの一覧が表示されます。

ヘルプ・システムでトピックを検索する手順は、次のとおりです。

- 各ヘルプ・ページ上部にある「目次」アイコンをクリックするか、「ヘルプ」→「トピックの検索」を選択します(ヘルプ・システムのトピック・リストを表示)。
- 各ヘルプ・ページ上部にある「索引」アイコンをクリックすると、索引エントリのリストが表示されます。

管理ガイドを PDF 形式で表示 (および印刷) するには、Oracle Developer Suite のドキュメント CD を使用してください。

ヒント : 語句を検索するには、PDF フォーマットの管理ガイドを使用します。

Discoverer のその他の情報 (ホワイト・ペーパー、ベスト・プラクティス、チュートリアルなど) は、Oracle Technology Network (www.oracle.com/technology) から入手できます。

End User Layer の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用して End User Layer を作成およびメンテナンスする方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「End User Layer」
- 「End User Layer が便利な理由」
- 「End User Layer 所有者」
- 「Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限」
- 「End User Layer のメンテナンスに必要な権限」
- 「EUL ゲートウェイ」
- 「既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法」
- 「新規データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法」
- 「End User Layer の削除方法」
- 「デフォルト End User Layer を表示または変更する方法」
- 「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」
- 「使用するエクスポート / インポート方法」
- 「Discoverer のエクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法」
- 「エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法」
- 「エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法」
- 「Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのエクスポート方法」
- 「Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのインポート方法」
- 「標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法」
- 「標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法」
- 「インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法」
- 「EUL の作成とメンテナンスに関する注意」

End User Layer

End User Layer (EUL) とは、Discoverer エンド・ユーザーにとって理解しやすい単純なメタデータ（データベースの実際のデータに関するデータ）です。ユーザーが Discoverer のデータに簡単にアクセスできるように、Discoverer Administrator を使用してこのビューをユーザー用に作成、カスタマイズおよびメンテナンスします。Discoverer を使用するには、少なくとも 1 つの EUL に対するアクセス権が必要です。アクセス権は、第 7 章「情報に対するアクセス制御」で説明する「権限」ダイアログを使用して付与します。

End User Layer が便利な理由

EUL により、Discoverer エンド・ユーザーはデータベースに関連する複雑な概念から解放されます。Discoverer エンド・ユーザーにとって使い慣れた理解しやすい用語を使用して、直観的でビジネスに焦点が合ったデータベースのビューが提供されます。このため、Discoverer エンド・ユーザーはデータ・アクセスの問題ではなくビジネスの問題に集中できます。

■ EUL に含まれるもの

EUL には、1 つ以上のビジネスエリアを定義するメタデータが含まれています。ビジネスエリアとは、ユーザー固有のデータ要件に当てはまるテーブルまたはビュー（あるいはその両方）の概念上のグループ化です。ビジネスエリアは、EUL にアクセスするユーザーまたはユーザー・グループのニーズを反映するように設定できます。

たとえば、会計部門が予算と財務に関するデータを表す会計ビジネスエリアを持ち、エンジニアリング部門のプロジェクト・リーダーが予算情報を必要とするプロジェクト専用のビジネスエリアを持つ場合について考えます。一部の列は同一でも、各部門のテーブルとビューの正確な組合せは異なる可能性があります。

■ Discoverer による EUL テーブルの作成

「EUL マネージャ」ダイアログでは、EUL を構成するテーブルのセットを作成または削除できます。

Discoverer マネージャが Discoverer Administrator を使用してビジネスエリアにフォルダとアイテムを定義すると、Discoverer は適切な SQL 文（テーブル、ビューまたは列からの選択を定義する）を生成して EUL テーブルに格納します。Discoverer エンド・ユーザーが (Discoverer Plus または Discoverer Viewer で) クエリーを実行すると、Discoverer は対応する SQL 文を生成してデータベースに送信し、データベースが結果を返して Discoverer に表示します。Discoverer エンド・ユーザーは、データに対するアクセス、分析および取返しを行うために SQL を理解する必要はありません。すべて Discoverer によって処理されます。

■ Discoverer による EUL オブジェクトのエクスポート / インポート

1 つのデータベースから EUL オブジェクト（ビジネスエリア、ワークブック、フォルダ、アイテムなど）をエクスポートして、別のデータベースにインポートできます。たとえば、開発環境から本番環境に推移する際に EUL オブジェクトを移動する場合について考えます。

EUL および EUL オブジェクトは、次の方法でインポートおよびエクスポートできます。

- Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードの使用
- Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用
- 標準データベース・エクスポート / インポート・コマンドの使用

詳細は、「[使用するエクスポート / インポート方法](#)」を参照してください。

注意

- EUL はデータベースのデータ整合性を保持します。Discoverer での Discoverer エンド・ユーザーの操作は、データベースのアプリケーション・データに影響しません。Discoverer は EUL で保持されるメタデータにのみ影響します。ただし、データベースのデータに影響する特定の PL/SQL ファンクションも存在します（詳細は、データベース管理者に問い合せてください）。

- EUL テーブルは SQL*Plus などを使用して編集可能ですが、オラクル社ではそれらの編集をサポートできないため、EUL テーブルは編集しないことをお勧めします。

End User Layer 所有者

End User Layer (EUL) 所有者とは、EUL の作成対象となるデータベース・ユーザーです。

1 人のデータベース・ユーザーが所有できる EUL は、1 つのみです。自分の EUL に接続している場合に新規 EUL を作成しようとする、Discoverer Administrator によって既存の EUL を削除するようにプロンプトが表示されます。すでに EUL を所有しているデータベース・ユーザーに EUL を作成する場合は、Discoverer Administrator によって既存の EUL を削除してから新規 EUL を作成するようにプロンプトが表示されます。

EUL 所有者は各自の EUL をメンテナンスおよび変更し、他のユーザーに対して EUL へのアクセス権を付与できます。付与される権限に応じて、他のユーザーは EUL を使用したり、その EUL を変更できます。

EUL の作成時には、アクセス権を持つユーザーを次のように指定します。

- データベースのすべてのユーザー (PUBLIC アクセス)
- EUL 所有者のみ (PRIVATE アクセス)

注意: セキュリティを重視する場合は、PRIVATE アクセスの指定をお勧めします。ユーザーおよびロールに対するビジネスエリアのアクセス権および権限は、必要に応じて後から定義できます。

既存 EUL へのアクセス権を変更する場合は、その EUL の所有者あるいは次の Discoverer 作業権限を持つユーザーとしてログインしている必要があります。

- 管理者
- 権限の設定

詳細は、[第 7 章「情報に対するアクセス制御」](#)を参照してください。

Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限

Oracle データベースで End User Layer を作成するには、EUL の作成対象となるデータベース・ユーザーに次のデータベース権限が必要となります。

- CREATE SESSION
- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- CREATE SEQUENCE
- CREATE PROCEDURE

また、データベース・ユーザーには次の項目も指定する必要があります。

- デフォルト表領域 (一時表領域は指定しないでください)
- デフォルト表領域に設定された割当て制限 (推奨最小値は 3MB)

デフォルト表領域の詳細は、「[EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログ](#)を参照してください。

Oracle Enterprise Edition データベースに対して Discoverer を実行している場合、データベース・ユーザーが Discoverer の手動サマリー管理および自動サマリー管理 (ASM) の機能を使用するには、さらに権限を追加する必要があります。詳細は、次の項目を参照してください。

- [「ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件」](#)
- [「Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件」](#)

「EUL マネージャ」ダイアログでは、次の操作を実行できます。

- データベース・ユーザーが前述の条件を満たしている場合の、既存 Oracle データベース・ユーザーに対する EUL の作成
- (新規ユーザーを作成するユーザーが) 次のデータベース権限を持っている場合の、新規 Oracle データベース・ユーザーに対する EUL の作成
 - CREATE SESSION
 - CREATE USER
 - GRANT ANY PRIVILEGE
 - ALTER USER

注意: 新規データベース・ユーザーに対して新規 EUL を作成するために必要になるのは、前述の権限のみです。これらの権限があれば、データベース・ユーザーとして Discoverer Administrator に接続し、新規データベース・ユーザーに新規 EUL を作成できます。

新規 Oracle データベース・ユーザーに対して EUL を作成する場合、Discoverer によって必要な権限が付与され、デフォルト表領域と割当て制限が設定されます。

End User Layer のメンテナンスに必要な権限

データベース・ユーザーに管理権限がある場合は、Discoverer Administrator で EUL をメンテナンスできます。

データベース・ユーザーに管理権限を適用するには、「[特定の作業を実行するユーザーまたはロール \(職責\) の指定方法](#)」を参照してください。

EUL ゲートウェイ

EUL ゲートウェイでは、Discoverer で Oracle Designer などの他のソースのメタデータを EUL に移入する方法が提供されます。EUL ゲートウェイを使用すると、他のツールまたはアプリケーションで定義されたメタデータを EUL に直接ロードできます。

EUL ゲートウェイを設定する手順は、<ORACLE_HOME>%discoverer%kits ディレクトリにあるドキュメント `eulgatew.doc` を参照してください。

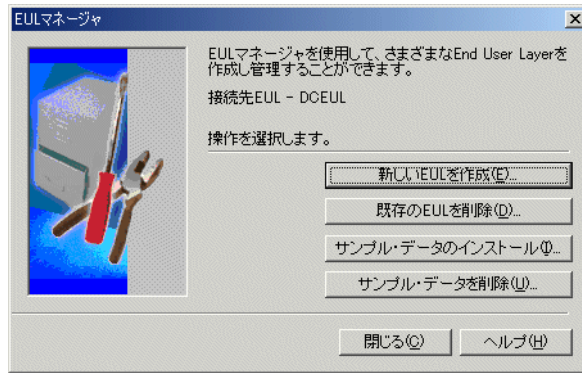
EUL ゲートウェイからビジネスエリアをロードする方法の詳細は、「[ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法](#)」を参照してください。

既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法

既存データベース・ユーザーに対して EUL を作成する手順は、次のとおりです。

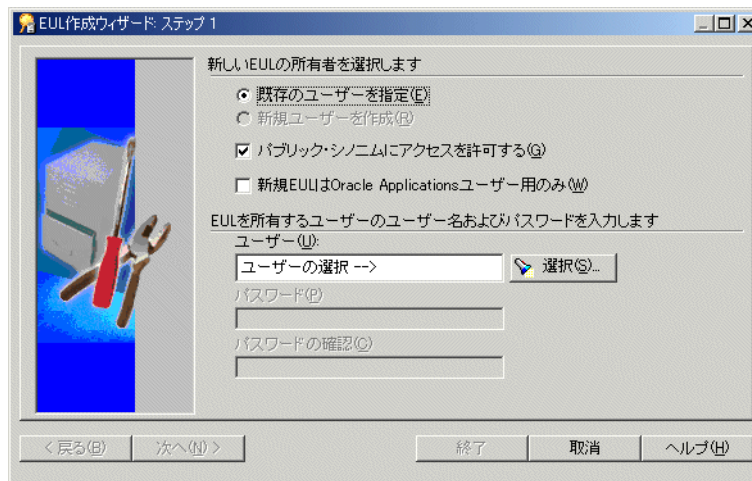
1. 「ツール」 → 「EUL マネージャ」を選択すると、「[EUL マネージャ](#)」ダイアログが表示されます。

図 4-1 「EUL マネージャ」 ダイアログ



2. 「新しい EUL を作成」をクリックすると、「EUL 作成ウィザード」ダイアログが表示されます。

図 4-2 「EUL 作成ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



3. 「既存のユーザーを指定」ラジオ・ボタンを選択します。
4. 必要に応じて、「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択または選択解除します。
 - 現行データベースのすべてのユーザーに新規 EUL へのアクセスを許可する場合は、このチェックボックスを選択します。
 - 新規 EUL によるデータの表示を EUL 所有者にのみ許可する場合は、このチェックボックスを選択解除します。

注意: セキュリティを重視する場合は、このチェックボックスを選択解除することをお勧めします。

5. 必要に応じて、「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」チェックボックスを選択または選択解除します。
 - 新規 EUL の使用を Oracle Applications ユーザーのみに制限する場合は、このチェックボックスを選択します (アプリケーション・モード EUL の詳細は、[第 17 章「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」](#)を参照)。
 - 標準 EUL を作成する場合は、このチェックボックスを選択解除します。

注意: ここでの選択は、最終的な選択です。標準的な EUL を Oracle Applications EUL に変更することはできません (逆の変更もできません)。

6. 「選択」 ボタンをクリックすると、「ユーザー / ロールの選択」ダイアログが表示されます。このダイアログで、新しい EUL を所有するデータベース・ユーザーを検索および選択します。
7. 現行ユーザー以外のデータベース・ユーザーを EUL 所有者に指定した場合は、データベース・ユーザーのパスワードを指定する必要があります。
8. 「終了」 をクリックします。

Discoverer Administrator によって EUL の作成を示す進行状況バーが表示され、指定されたデータベース・ユーザーに対して新規 EUL が作成されます。

新規 EUL が作成されると、新規 EUL に Discoverer のサンプル・データをインストールするオプションが提供されます。詳細は、第 27 章「Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブック」を参照してください。

新規データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法

注意: この機能は、Oracle 以外のデータベースでは使用できません。Oracle 以外のデータベースを使用している場合は、データベース管理者に連絡してデータベースに必要なユーザー ID を作成するように依頼してください。

新規データベース・ユーザーに対する EUL の作成に必要な権限の詳細は、「Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限」を参照してください。

新規データベース・ユーザーに EUL を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」 → 「EUL マネージャ」を選択すると、「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。
2. 「新しい EUL を作成」 をクリックすると、「EUL 作成ウィザード」ダイアログが表示されます。
3. 「新規ユーザーを作成」 ラジオ・ボタンを選択します。

「新規ユーザーを作成」 ラジオ・ボタンが使用できない場合は、データベース管理者に連絡して CREATE USER 権限の付与を依頼してください。

4. 「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」 チェックボックスを、次のように選択または選択解除します。
 - 現行データベースのすべてのユーザーに新規 EUL へのアクセスを許可する場合は、このチェックボックスを選択します。
 - 新規 EUL によるデータの表示を EUL 所有者にのみ許可する場合は、このチェックボックスを選択解除します。

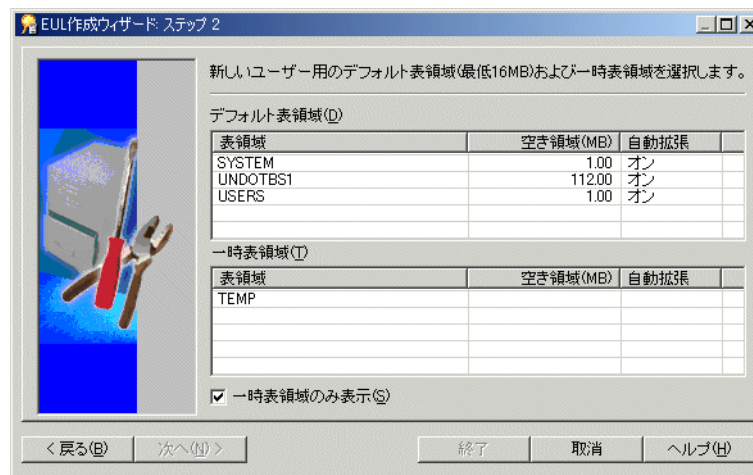
注意: セキュリティを重視する場合は、このチェックボックスを選択解除することをお勧めします。

5. 必要に応じて、「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」 チェックボックスを選択または選択解除します。
 - 新規 EUL の使用を Oracle Applications ユーザーのみに制限する場合は、このチェックボックスを選択します（アプリケーション・モード EUL の詳細は、「Oracle Applications」を参照）。
 - 標準 EUL を作成する場合は、このチェックボックスを選択解除します。

注意: ここでの選択は、最終的な選択です。標準的な EUL を Oracle Applications EUL に変更することはできません（逆の変更もできません）。

6. 「ユーザー」 フィールドに新規データベース・ユーザーの名前を指定します。
7. 「パスワード」 フィールドに新規データベース・ユーザーのパスワードを指定します。
8. 「確認パスワード」 フィールドに、新規データベース・ユーザーのパスワードを再度指定します。
9. 「次へ」 をクリックして、「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 4-3 「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



10. 新規データベース・ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を指定します。

どれを選択するか不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。詳細は、「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログを参照してください。

11. 「終了」をクリックします。

Discoverer Administrator によって EUL の作成を示す進行状況バーが表示され、新規データベース・ユーザーとそのデータベース・ユーザーに対する新規 EUL が作成されます。

新規データベース・ユーザーと EUL が作成されると、新規 EUL に Discoverer のサンプル・データをインストールするオプションが提供されます。詳細は、第 27 章「Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブック」を参照してください。

End User Layer の削除方法

様々な理由から、EUL の削除が必要になる場合があります。たとえば、古い EUL やテスト EUL の場合です。

注意: 削除する EUL の所有者として接続する必要があります。

EUL を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ファイル」→「接続」を選択すると、「接続」ダイアログが表示されます。
2. 削除する EUL の所有者のユーザー名、パスワードおよび接続文字列を指定して「接続」をクリックすると、「ロード・ウィザード: ステップ 1」ダイアログが表示されます。
3. 「取消」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。
4. 「ツール」→「EUL マネージャ」を選択します。
5. 「既存の EUL を削除」をクリックすると、「EUL の削除」ダイアログが表示されます。

現行の EUL を削除するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

6. 「EUL」フィールドに指定された EUL が削除対象の EUL であることを確認して、「OK」をクリックします。

表示された EUL 名が正しくない場合はステップ 2 に戻って、正しい接続文字列を使用して EUL 所有者として接続します。

「OK」をクリックすると、すべての EUL テーブルを削除するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。これにより、データベース内のすべての EUL 情報およびワークブックが削除されます。サマリー・データとサマリー情報もすべて削除されます。

7. 「はい」をクリックして続行します。

8. 「OK」をクリックして EUL を削除します。

Discoverer によって、現行データベース・ユーザーの EUL オブジェクトが削除されます。

デフォルト End User Layer を表示または変更する方法

現行データベース・ユーザーのデフォルト EUL（つまり、現行データベース・ユーザーが Discoverer Administrator に接続するときに表示される EUL）を表示したり、どの EUL をデフォルト EUL にするかを変更できます。

注意: データベース・ユーザーが複数の EUL へのアクセス権を持っている場合は、代替 EUL のみを選択できます。

デフォルト EUL を表示または変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「オプション」→「デフォルト EUL」タブを選択すると、「オプション」ダイアログ:「接続」タブが表示されます。
2. (オプション) 次に現行データベース・ユーザーとして接続するとき使用する EUL をクリックして、「OK」をクリックします。

エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー

通常は、次の操作を行います。

- EUL のバックアップまたはアーカイブ
- 他の場所への EUL の配布
- EUL 間のビジネスエリアのコピー（詳細は、「[EUL 間のビジネスエリアのコピー方法](#)」を参照）
- 1つの EUL から他の EUL への EUL オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、階層、ユーザー定義アイテムなど）のコピー
- 本番環境へのパッチの適用

次の操作を行うかどうかに応じて、EUL および EUL オブジェクトをコピーする方法が異なります。

- 指定された EUL オブジェクトの他の EUL へのコピー
- EUL 全体のコピーと新規 EUL としての再作成
- EUL 所有者であるデータベース・ユーザーのコピー

3つのケースいずれの場合も、インポート操作の後にエクスポート操作を実行します。詳細は、「[使用するエクスポート / インポート方法](#)」を参照してください。

Discoverer Administrator を使用して EUL または EUL オブジェクトをエクスポートする場合は、Discoverer EUL エクスポート・ファイル（拡張子 .EEX で）を作成します。.EEX ファイルを作成すると、次に Discoverer Administrator を使用して .EEX ファイルをインポートできます。

次のような .EEX ファイルをインポートできることに注意してください。

- リリース 3.1 以下の Discoverer からエクスポートされた .EEX ファイル（これらの EUL エクスポート・ファイルは一般的なテキスト・ファイルです）
- リリース 4.1 以上の Discoverer からエクスポートされた .EEX ファイル（拡張子は .EEX ですが、これらの EUL エクスポート・ファイルは XML フォーマットです）

使用するエクスポート/インポート方法

EUL 間で EUL オブジェクトをコピーするには、まず EUL オブジェクトをファイルにエクスポートしてから、新規 EUL または新規データベースにインポートします。

次のものを使用して、EUL 間で EUL オブジェクトをコピーします。

- Discoverer エクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザード（詳細は、「[Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードの使用](#)」を参照）
- Discoverer コマンドライン・インタフェース（詳細は、「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポート/インポート](#)」を参照）
- 標準データベース・エクスポート/インポート・コマンド（詳細は、「[標準データベース・エクスポート/インポート・コマンドによる完全な EUL のエクスポート/インポート](#)」を参照）

Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードの使用

Discoverer のエクスポート・ウィザードを使用して、EUL オブジェクトを EUL エクスポート・ファイル（拡張子 .EEX）にエクスポートします。オブジェクトをエクスポートすると、次に Discoverer のインポート・ウィザードを使用して .EEX ファイルをインポートできます。

（.EEX ファイルに）エクスポートする EUL オブジェクトとしては、ビジネスエリア、フォルダ、アイテム階層、日付階層、アイテム・クラス、ワークブック定義（Discoverer Desktop および Discoverer Plus で作成）、PL/SQL ファンクション登録情報、サマリー・フォルダおよび自動サマリー管理（ASM）ポリシーなどがあります。

Discoverer のユーザー・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポートまたはインポート方法については、次の項目を参照してください。

- 「[Discoverer のエクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法](#)」
このオプションは、EUL のオブジェクトを新規 EUL にコピーするとき、あるいはバックアップを作成するときに EUL 全体をファイルにエクスポートする場合に使用します。
- 「[エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法](#)」
このオプションは、エクスポート・ファイルを使用して、既存 EUL を選択したビジネスエリアで更新する場合に使用します。
- 「[エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法](#)」
このオプションは、エクスポート・ファイルを使用して、既存 EUL を選択した EUL オブジェクトで更新する場合に使用します。たとえば、運用中のビジネスエリアに小規模な変更を適用するときなどです。
- 「[インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法](#)」
このオプションは、EUL オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、階層、ユーザー定義アイテムなど）を 1 つの EUL からインポートして他の EUL で再利用する場合に使用します。

注意: エクスポート・ウィザードでは、データベース、EUL テーブルまたは EUL によって参照されるデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。これらのオブジェクトをエクスポートするには、「[標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法](#)」の手順に従う必要があります。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポート/インポート

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して、Discoverer のユーザー・インタフェースを使用せずに EUL オブジェクトをエクスポート/インポートします。Discoverer コマンドライン・インタフェースの詳細は、「[Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース](#)」を参照してください。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポートおよびインポート方法については、次の項目を参照してください。

- 「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのエクスポート方法](#)」

このオプションは、コマンドライン・インタフェースを使用して、EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル (.EEX) にエクスポートし、次にこの .EEX ファイルを他のデータベースにインポートすることにより、EUL オブジェクトを1つのデータベースから他のデータベースにコピーする場合に使用します。

- 「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのインポート方法](#)」

このオプションは、EUL オブジェクトを新規データベースにインポートする場合に使用します。

注意: Discoverer コマンドライン・インタフェースのエクスポート機能では、データベース、EUL テーブルまたは EUL 定義によって参照されるデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。これらのオブジェクトをエクスポートするには、「[標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法](#)」の手順に従う必要があります。

標準データベース・エクスポート/インポート・コマンドによる完全な EUL のエクスポート/インポート

標準データベース・エクスポート/インポート・コマンドを使用して、データベース、EUL テーブルおよび EUL 定義によって参照されるデータベース・オブジェクトをエクスポート/インポートします。

次の作業を実行して、EUL をユーザー間でエクスポート/インポートします。

- 「[標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法](#)」

このオプションは、EUL を新規ユーザーにコピーするとき、あるいはバックアップを作成するときに EUL 全体をデータベース・ダンプ・ファイル (.DMP) にエクスポートする場合に使用します。

- 「[標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法](#)」

このオプションは、データベースのダンプ・ファイル (.DMP) から EUL ビジネスエリア、EUL テーブルおよび保存済ワークブックを新規 EUL 所有者にインポートする場合に使用します。

EUL のエクスポート方法またはインポート方法は、次の項目に応じて異なります。

- ユーザーのマシンにインストールされている Oracle クライアント・ソフトウェアのリリース
- EUL が存在する Oracle データベースのリリース

Oracle データベースのリリースとユーザーのマシンにインストールされた Oracle データベース・クライアント・ソフトウェアのリリースを同じにすることをお勧めします。リリースが異なる場合 (EUL が Oracle9i データベースにあり、Oracle10g クライアント・ソフトウェアがマシンにインストールされている場合など) は、以降の指示に従うことができません。EUL をエクスポートできない場合は、データベース管理者に連絡し、EUL をエクスポートするように依頼してください。

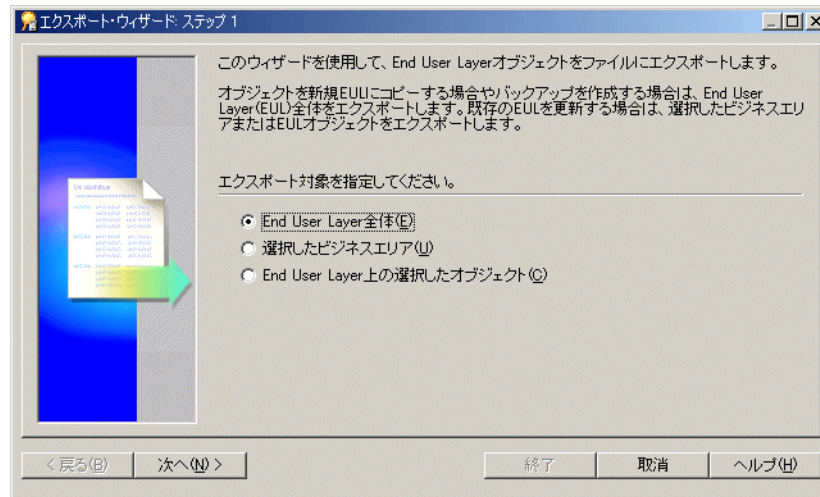
Discoverer のエクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法

このオプションは、EUL のオブジェクトを新規 EUL にコピーするとき、あるいはバックアップを作成するときに EUL 全体をファイルにエクスポートする場合に使用します。

Discoverer のエクスポート・ウィザードを使用して EUL 全体をエクスポートする手順は、次のとおりです。

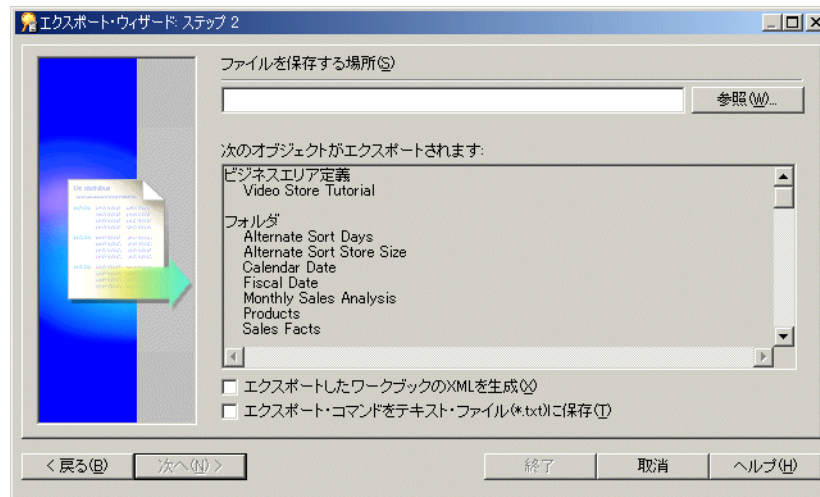
1. 「ファイル」→「エクスポート」を選択すると、「エクスポート・ウィザード:ステップ1」ダイアログが表示されます。

図 4-4 「エクスポート・ウィザード:ステップ1」ダイアログ



2. 「End User Layer 全体」ラジオ・ボタンを選択して「次へ」をクリックすると、「エクスポート・ウィザード:ステップ2/3」ダイアログが表示されます。

図 4-5 「エクスポート・ウィザード:ステップ2」ダイアログ

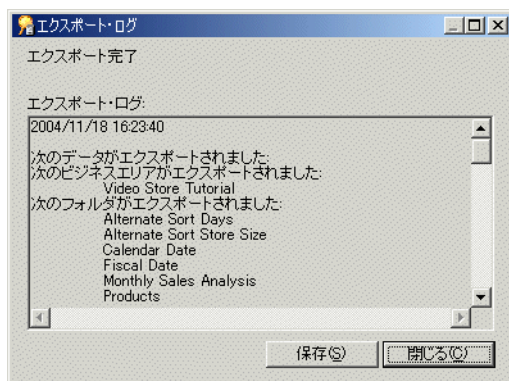


前述のダイアログを使用して、エクスポート・ファイルの名前と場所を指定します。

3. 「参照」をクリックすると、「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。
このダイアログで、EUL エクスポート・ファイルを保存する場所を参照できます。

4. エクスポートする EUL の適切な名前を入力します。
5. (オプション)「エクスポートしたワークブックの XML を生成」チェックボックスを選択して、XML フォーマットのワークブック定義をすべて保存します。
これによって、ワークブック定義を XML ブラウザで表示できます。
注意: エクスポート・ファイル (*.EEX) は常に XML フォーマットですが、時間と領域を節約するため、ワークブックはデフォルトではエクスポート・ファイル内部にバイナリ・フォーマットで保存されます。ワークブック定義をエクスポート・ファイル内部に XML として追加保存するには、このチェックボックスを選択します。
6. (オプション)「エクスポート・コマンドをテキスト・ファイル (*.txt) に保存」チェックボックスを選択して、このエクスポートを作成したエクスポート・コマンドをテキスト・ファイルに保存します。
これによって、このエクスポート作成に使用されたコマンドを含む追加ファイルが作成され、ファイル拡張子 .txt が適用されます。その後、このファイルはコマンドライン・インタフェースと併用できるようになります (コマンドライン・インタフェースの詳細は、[第 22 章「Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース」](#)を参照)。
7. 「終了」をクリックすると、指定された場所にエクスポート・ファイル (および選択された追加ファイル) が作成され、「エクスポート・ログ」が表示されます。

図 4-6 「エクスポート・ログ」ダイアログ



「エクスポート・ログ」には、エクスポート内容の情報が表示されます。

8. (オプション)「保存」をクリックして名前と場所を指定し、ログ・ファイルを保存します。
9. 「閉じる」をクリックして完了します。

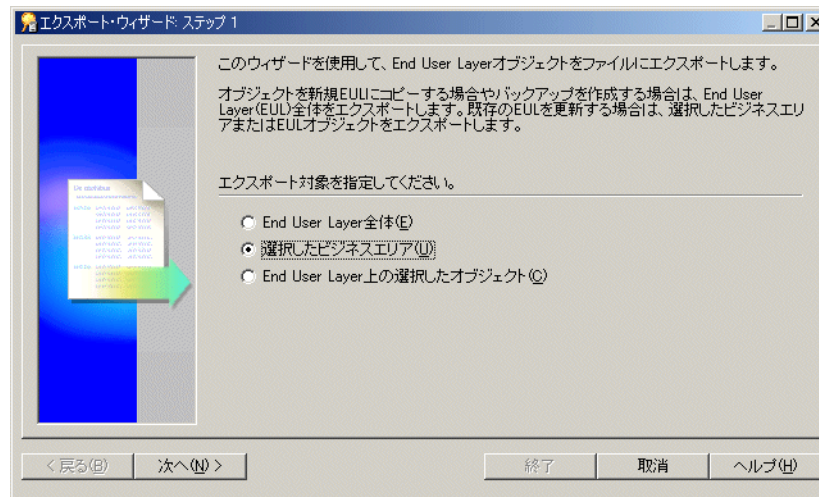
エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法

このオプションは、エクスポート・ファイルを使用して、既存 EUL を選択したビジネスエリアで更新する場合に使用します。

エクスポート・ウィザードを使用して選択したビジネスエリアをエクスポートする手順は、次のとおりです。

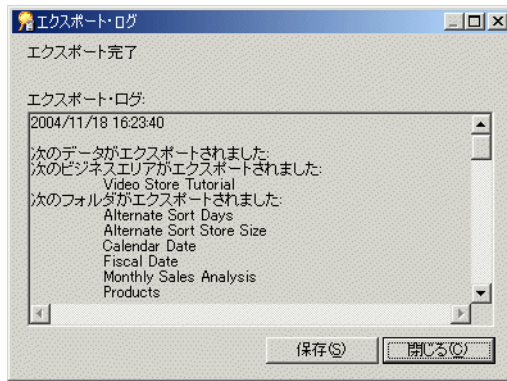
1. 「ファイル」→「エクスポート」を選択すると、「エクスポート・ウィザード: ステップ 1」ダイアログが表示されます。

図 4-7 「エクスポート・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



2. 「**選択したビジネスエリア**」ラジオ・ボタンを選択して「次へ」をクリックすると、「**エクスポート・ウィザード: ステップ 2**」ダイアログ（**選択したビジネスエリアのエクスポート**）が表示されます。
3. エクスポートするビジネスエリアを「**選択可能**」リストから「**選択済**」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら他のビジネスエリアをクリックすると、一度に複数のビジネスエリアを選択できます。
4. 「次へ」をクリックして、「**エクスポート・ウィザード: ステップ 2/3**」ダイアログを表示します。
5. 「参照」をクリックすると、「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。
このダイアログで、ビジネスエリアのエクスポート・ファイルを保存する場所を参照できます。
6. エクスポートするビジネスエリアの適切な名前を入力します。
7. (オプション)「**エクスポートしたワークブックの XML を生成**」チェックボックスを選択して、XML フォーマットのワークブック定義をすべて保存します。
これによって、ワークブック定義を XML ブラウザで表示できます。
注意: エクスポート・ファイル (*.EEX) は常に XML フォーマットですが、時間と領域を節約するため、ワークブックはデフォルトではエクスポート・ファイル内部にバイナリ・フォーマットで保存されます。ワークブック定義をエクスポート・ファイル内部に XML として追加保存するには、このチェックボックスを選択します。
8. (オプション)「**エクスポート・コマンドをテキスト・ファイル (*.txt) に保存**」チェックボックスを選択して、このエクスポートを作成したエクスポート・コマンドをテキスト・ファイルに保存します。
これによって、このエクスポート作成に使用されたコマンドを含む追加テキスト・ファイルが作成され、ファイル拡張子 .txt が適用されます。その後、このファイルはコマンドライン・インタフェースと併用できるようになります（コマンドライン・インタフェースの詳細は、[第 22 章「Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース](#)」を参照）。
9. 「終了」をクリックすると、指定された場所にエクスポート・ファイル（および選択された追加ファイル）が作成され、「エクスポート・ログ」が表示されます。

図 4-8 「エクスポート・ログ」 ダイアログ



「エクスポート・ログ」には、エクスポート内容の情報が表示されます。

10. (オプション)「保存」をクリックして名前と場所を指定し、ログ・ファイルを保存します。
11. 「閉じる」をクリックして完了します。

注意: EUL 間でビジネスエリアをコピーしている場合は、「EUL 間のビジネスエリアのコピー方法」のステップ 2 に進んでください。

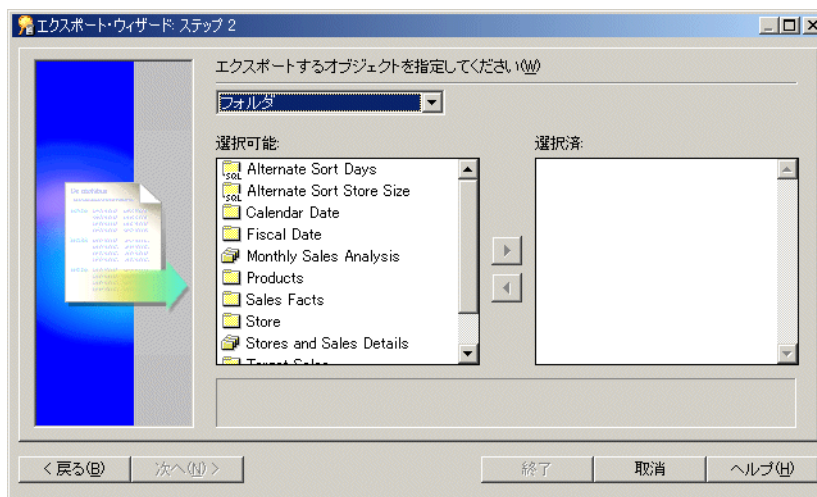
エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法

このオプションは、エクスポート・ファイルを使用して、既存 EUL を選択した EUL オブジェクトで更新する場合に使用します。たとえば、運用中のビジネスエリアに小規模な変更を適用するときなどです。

エクスポート・ウィザードを使用して選択したオブジェクトをエクスポートする手順は、次のとおりです。

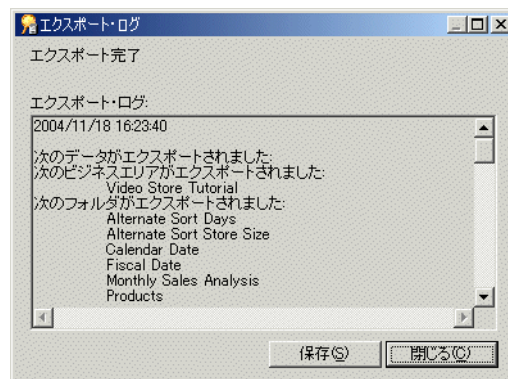
1. 「ファイル」→「エクスポート」を選択すると、「エクスポート・ウィザード:ステップ 1」ダイアログが表示されます。
2. 「End User Layer 上の選択したオブジェクト」オプションを選択して「次へ」をクリックすると、「エクスポート・ウィザード:ステップ 2」ダイアログ (選択したオブジェクトのエクスポート) が表示されます。

図 4-9 「エクスポート・ウィザード:ステップ 2」ダイアログ



3. 「エクスポートするオブジェクトを指定してください」ドロップダウン・リストを使用して、ファイルにエクスポートする EUL オブジェクト・タイプを表示します。
たとえば、フォルダ、アイテム・クラスおよびアイテム階層です。
注意: 前述のビジネスエリアを選択すると、Discoverer ではビジネスエリアの定義のみがエクスポートされ、フォルダとアイテムはエクスポートされません。ビジネスエリアのフォルダとアイテムをエクスポートするには、明示的に選択する必要があります。
4. エクスポートするオブジェクトを「**選択可能**」リストから「**選択済**」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら他のオブジェクトをクリックすると、一度に複数のオブジェクトを選択できます。
5. 「次へ」をクリックして、「エクスポート・ウィザード:ステップ 2」ダイアログ (選択したビジネスエリアのエクスポート) を表示します。
6. 「参照」をクリックすると、「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。
このダイアログで、エクスポート・ファイルを保存する場所を参照できます。
7. エクスポートするオブジェクトの適切な名前を入力します。
8. (オプション) 「エクスポートしたワークブックの XML を生成」チェックボックスを選択して、XML フォーマットのワークブックをすべて保存します。
注意: エクスポート・ファイル (*.EEX) は常に XML フォーマットですが、時間と領域を節約するため、ワークブックはデフォルトではエクスポート・ファイル内部にバイナリ・フォーマットで保存されます。ワークブック定義をエクスポート・ファイル内部に XML として追加保存するには、このチェックボックスを選択します。
9. (オプション) 「エクスポート・コマンドをテキスト・ファイル (*.txt) に保存」チェックボックスを選択して、このエクスポートを作成したエクスポート・コマンドをテキスト・ファイルに保存します。
これによって、このエクスポート作成に使用されたコマンドを含む追加テキスト・ファイルが作成され、拡張子 .txt が適用されます。その後、このファイルはコマンドライン・インタフェースと併用できるようになります (コマンドライン・インタフェースの詳細は、[第 22 章「Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース」](#)を参照)。
10. 「終了」をクリックすると、指定された場所にエクスポート・ファイル (および選択された追加ファイル) が作成され、「エクスポート・ログ」が表示されます。

図 4-10 「エクスポート・ログ」ダイアログ



「エクスポート・ログ」には、エクスポート内容の情報が表示されます。

11. (オプション) 「保存」をクリックして名前と場所を指定し、ログ・ファイルを保存します。
12. 「閉じる」をクリックして完了します。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのエクスポート方法

このオプションは、コマンドライン・インタフェースを使用して、EUL オブジェクトを一般的な Discoverer エクスポート・ファイル (.EEX) にエクスポートし、次にこの .EEX ファイルを (使用できる他のデータベースに) インポートすることにより、EUL オブジェクトを1つのデータベースから他のデータベースにコピーする場合に使用します。これは、EUL オブジェクトのコピーを可能にする2つの作業のうち、最初の作業です。EUL オブジェクトをインポートするには、このエクスポート作業を完了する必要があります。

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して EUL オブジェクトをエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. Discoverer コマンドライン・インタフェースの `/export` オプションを使用して、必要な EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル (.EEX) にエクスポートします。

たとえば、Video Store Tutorial ビジネスエリアと2つのワークブック (「Vidstr5 - Video Tutorial Workbook」および「Vidaf5 - Analytic Function Examples」) を `vidstr.eex` ファイルにエクスポートするには、次のように入力します。

```
D:\orant\bin\dis51adm.exe /connect eulowner/eulowner@orcl.world /export
"D:\vidstr.eex" "Video Store Tutorial" /workbook "Vidstr5 - Video Tutorial
Workbook" /workbook "Vidaf5 - Analytic Function Examples"
```

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポートの詳細は、「[/export \(EUL オブジェクト\)](#)」を参照してください。

注意

- EUL オブジェクトをデータベースに戻す方法については、「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのインポート方法](#)」を参照してください。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのインポート方法

このオプションは、EUL オブジェクトを使用可能な新規データベースにインポートする場合に使用します。この作業を完了する前に、EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル (.EEX) にエクスポートする必要があります (詳細は、「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのエクスポート方法](#)」を参照)。これは、EUL オブジェクトのコピーを可能にする2つの作業のうち、2番目の作業です。

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して End User Layer オブジェクトをインポートする手順は、次のとおりです。

1. Discoverer コマンドライン・インタフェースの `/import` オプションを使用して、新規 EUL 所有者に EUL オブジェクトをインポートします。

たとえば、前述の方法で作成された `vidstr.eex` ファイルをインポートするには、次のように入力します。

```
D:\orant\bin\dis51adm.exe /connect eulowner/eulowner@orcl.world /import
"D:\vidstr.eex"
```

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのインポートの詳細は、「[/import \(EUL オブジェクト\)](#)」を参照してください。

標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法

このオプションは、すべてのビジネスエリア、EUL テーブルおよび保存済ワークブックをデータベース・ダンプ・ファイル (.DMP) にエクスポートする場合に使用します。

標準データベース・エクスポート・ユーティリティを使用して EUL をエクスポートする手順は、次のとおりです (EUL が Oracle9i 以上のデータベース上に存在し、Oracle Developer Suite をインストール済のマシンを使用していることを前提とします)。

1. コマンドライン・ウィンドウを表示します (例: Windows の「スタート」メニューから「コマンドプロンプト」を選択)。

2. EUL をエクスポートする場所までナビゲートします。

たとえば、EUL を D:¥ORACLE10 にエクスポートする場合に、コマンド・プロンプト・ウィンドウが現在 C: を表示しているときは、次のようになります。

- 「D:」 と入力して [Enter] キーを押す
- 「cd ¥ORACLE10」 と入力して [Enter] キーを押す

3. 次のコマンドを入力します。

```
exp <eulowner>/<password>@<dbname> file=<filename.dmp> owner=<eulowner>
```

たとえば、データベース・ユーザー hrmgr が所有する EUL を hreul.dmp ファイルにエクスポートするには、次のように入力します。

```
exp hrmgr/hrpswrd@HRDB file=hreul.dmp owner=hrmgr
```

EUL テーブル (および関連するシノニム、ビューおよびその他の定義) が D:¥ORACLE10 ディレクトリの指定された .dmp ファイルにエクスポートされます。

エクスポートが完了すると、Discoverer によって次のメッセージが表示されます。

「エクスポートは警告なしで正常に終了しました。」

4. コマンドライン・ウィンドウを閉じます。

EUL がエクスポートされ、EUL を新規データベース・ユーザーにインポートする準備が整いました。

標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法

このオプションは、データベースのダンプ・ファイル (.DMP) から EUL ビジネスエリア、EUL テーブルおよび保存済ワークブックを新規データベースの新規 EUL 所有者にインポートする場合に使用します。

注意: このデータベース・ユーザーには他のテーブルを所有させないことをお勧めします。

標準データベース・インポート・ユーティリティを使用して EUL をインポートする手順は、次のとおりです (EUL が Oracle9i データベース上に存在し、Oracle Developer Suite をインストール済のマシンを使用していることを前提とします)。

1. コマンドライン・ウィンドウを表示します (例: Windows の「スタート」メニューから「コマンドプロンプト」を選択)。

2. EUL をインポートする場所までナビゲートします。

たとえば、EUL を D:¥ORACLE10 にインポートする場合に、コマンド・プロンプト・ウィンドウが現在 C: を表示しているときは、次のようになります。

- 「D:」 と入力して [Enter] キーを押す
- 「cd ¥ORACLE10」 と入力して [Enter] キーを押す

3. 次のコマンドを入力します。

```
imp <eulowner>/<password>@<dbname> file=<filename.dmp> fromuser=<old_eul_owner>
touser=<new_eul_owner>
```

たとえば、データベース・ユーザー `hrmgr` が所有する `hreul.dmp` ファイルの EUL を新規ユーザー `hrmgr2` にインポートするには、次のように入力します。

```
imp hrmgr2/hrpswr@HRDB file=hreul.dmp fromuser=hrmgr touser=hrmgr2
```

EUL テーブル（および関連するシノニム、ビューおよびその他の定義）が `D:\ORACLE10` ディレクトリの指定された `.dmp` ファイルからインポートされます。

インポートが完了すると、Discoverer によって次のメッセージが表示されます。

「インポートは警告なしで正常に終了しました。」

4. コマンドライン・ウィンドウを閉じます。

注意: Discoverer では、一意の参照番号を使用して EUL を識別します。しかし、データベース・エクスポート/インポート・ユーティリティを使用して EUL をコピーすると、新規 EUL は（参照番号も含めて）コピー元の EUL と同一になります。複数の EUL が同じ参照番号を所有すると、次の操作を両方行った場合に、EUL の整合性の問題が起こることがあります。

- コピー元の EUL と新規 EUL の両方でオブジェクトを変更する。
- 両方の EUL でオブジェクトを変更した後、Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザード（あるいは Discoverer の `/export` コマンドおよび `/import` コマンド）を使用して、2 つの EUL 間でオブジェクトをコピーしようとする。

EUL の整合性の問題が起こる可能性を回避するには、新規 EUL の所有者として `eul5_id.sql` スクリプトを実行します。`eul5_id.sql` スクリプトによって新規 EUL に新しい参照番号が与えられることにより、EUL の整合性の問題が起こる可能性が回避されます。

5. 次の手順に従って `eul5_id.sql` スクリプトを実行します。

- a. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、新規 EUL の所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect hrmgr2/hrmgr2@database;
```

`hrmgr2` は EUL 所有者、`hrmgr2` は EUL 所有者のパスワードです。

- b. `eul5_id.sql` スクリプトを実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start d:\<ORACLE_HOME>\discoverer\util\%eul5_id.sql
```

`<ORACLE_HOME>` は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

`eul5_id.sql` スクリプトによって新規 EUL に新しい一意の参照番号が与えられることにより、EUL の整合性の問題が起こる可能性が回避されます。

- c. SQL*Plus セッションを終了します。

注意

- EUL の情報によってサマリー・テーブルの所有者が識別されます。サマリー・テーブルを含む EUL をデータベース・ユーザーからエクスポートして他のデータベース・ユーザーにインポートすると、2 番目のデータベース・ユーザーがそのサマリー・テーブルの所有者になります。したがって、EUL サマリー・テーブルの所有者情報を更新する必要があります。

サマリー・テーブルの所有者情報を更新するには、<ORACLE_HOME>\%discoverer%\util ディレクトリにある eulsown.sql スクリプトを実行します。スクリプトを実行すると、以前のサマリー・テーブル所有者および新しいサマリー・テーブル所有者の名前を入力するように要求されます。

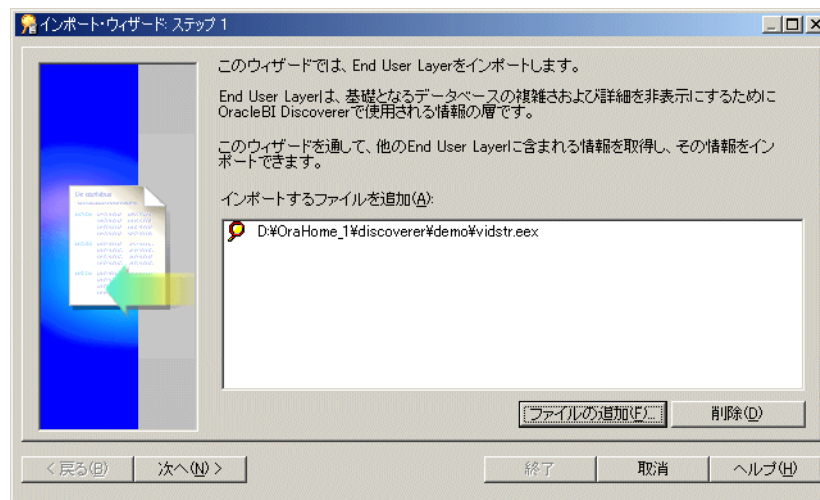
インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法

このオプションは、EUL オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、階層、ユーザー定義アイテムなど）を 1 つの EUL からインポートして他の EUL で再利用する場合に使用します。選択した EUL オブジェクトで既存 EUL を更新するには、エクスポート・ファイル（.EEX）を使用します。たとえば、運用中のビジネスエリアに変更を適用するときなどです。EUL オブジェクトのエクスポートの詳細は、「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」を参照してください。

インポート・ウィザードを使用してファイルから EUL オブジェクトをインポートする手順は、次のとおりです。

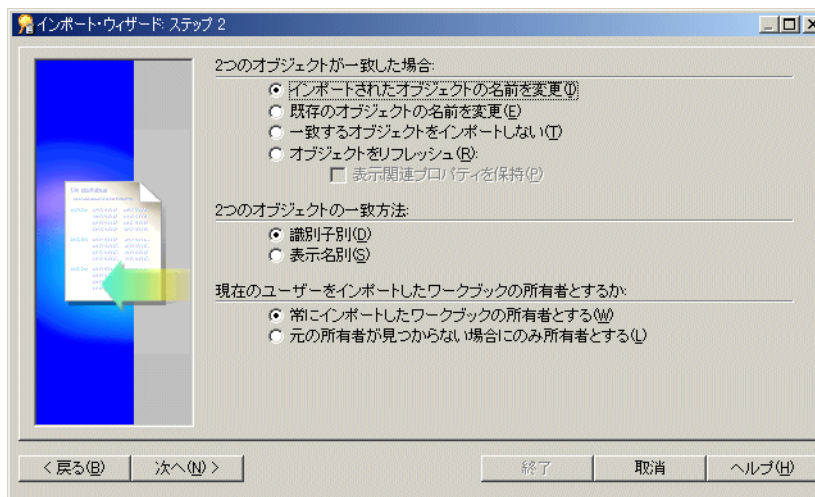
1. 「ファイル」→「インポート」を選択すると、「インポート・ウィザード:ステップ1」ダイアログが表示されます。

図 4-11 「インポート・ウィザード:ステップ1」ダイアログ



2. 「ファイルの追加」をクリックすると、「開く」ダイアログが表示されます。
3. 1 つ以上のファイルの位置を特定して選択し、「開く」をクリックして「インポート・ウィザード:ステップ1」ダイアログに戻ります。
 選択されたファイルが「インポート・ファイル」リストに表示されます。
4. 「次へ」をクリックして、「インポート・ウィザード:ステップ2」ダイアログを表示します。

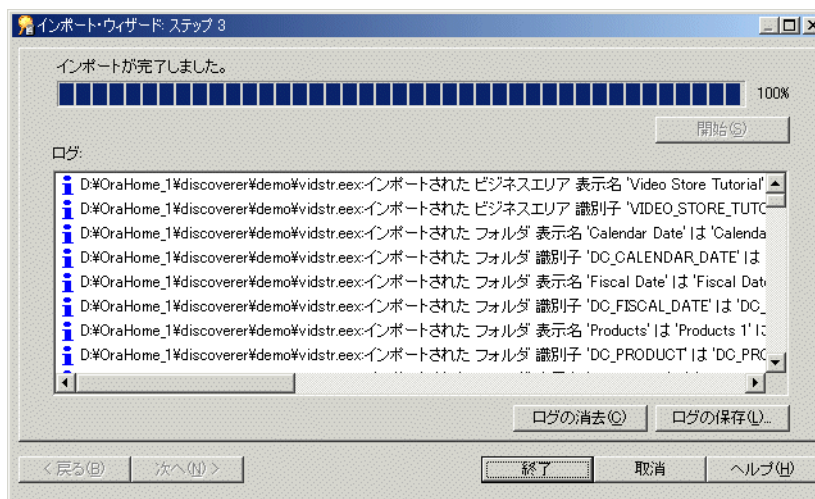
図 4-12 「インポート・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



このダイアログでは、Discoverer Administrator が他の EUL からの一致オブジェクトを処理する方法を指定できます。他の EUL からの一致オブジェクトの詳細は、「識別子」を参照してください。

5. 2つのオブジェクトが一致した場合に発生する処理を指定します。
オブジェクトとは、フォルダ、アイテム、ユーザー定義アイテムなどの任意の EUL オブジェクトです。
6. プロパティに関する表示を保持するかどうかを指定します（「オブジェクトをリフレッシュ」ラジオ・ボタンが選択されている場合のみ使用可能）。
7. オブジェクトの比較方法を指定します。
8. 現行ユーザーがインポートされたワークブックを所有するかどうかを指定します。
9. 「次へ」をクリックして、「インポート・ウィザード: ステップ 3」ダイアログを表示します。

図 4-13 「インポート・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



このダイアログでは、インポートを開始して、各 EUL オブジェクトが処理される時の状態を監視できます。

10. 「開始」をクリックしてインポートを開始します。
ヒント: 「取消」をクリックすると、インポートをいつでも中断できます。たとえば、「インポート・ログ」に警告メッセージが表示された場合などは、インポートの中断が必要になることがあります。
11. (オプション) インポートの完了後に「ログの保存」をクリックすると、ログ情報が指定した場所にテキスト・ファイルとして保存されます。
12. 「終了」をクリックして、「インポート・ウィザード: ステップ 3」ダイアログを閉じます。

注意

- 完全なインポートを実行すると、インポートされた EUL オブジェクトが反映されるように、選択した一致オプションに応じて「ワークエリア」の「データ」タブが更新されます。
- EEX ファイルのインポート中に Discoverer Administrator がフォルダの結合を検出できない場合、「インポート・ログ」に警告メッセージが表示されます (EUL オブジェクトのエクスポートと結合の詳細は、「[/export \(EUL オブジェクト\)](#)」を参照)。

EUL の作成とメンテナンスに関する注意

この項では、EUL の作成とメンテナンスに関する注意について説明します。

- [「識別子」](#)
- [「一般的な EUL の領域要件および記憶域パラメータ」](#)
- [「最初の EUL 開発および継続的なメンテナンスの推奨ワークフロー」](#)
- [「Discoverer ワークブック・ダンプ・ユーティリティの使用」](#)
- [「ロジカル・スタンバイ \(読取り専用\) データベースでの EUL の作成」](#)

識別子

識別子とは、Discoverer Administrator が一意な EUL オブジェクト (および Discoverer Plus と Discoverer Viewer のワークブック・オブジェクト) を識別するために使用する一意な名前です。

Discoverer Administrator は、他の EUL からインポートされたオブジェクトがインポート先の EUL の同じビジネス・オブジェクトを参照している場合に、識別子を使用して認識します。これによって、カスタマイズ (またはパッチ) が行われた EUL オブジェクトが保持されます。たとえば、EUL A の「Sales」という名前のフォルダが、EUL B の「Sales Figures」という名前の同じフォルダを参照する場合があります。両方のフォルダは同じ識別子を持っているため、同じ EUL オブジェクトを参照しているものと認識されます。

識別子は Discoverer Administrator では表示されますが、Discoverer Plus ユーザーには表示されません。

一般に、識別子を変更する必要はありません。むしろ、EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子を変更しないでください。ただし、識別子の変更が必要となる場合もあります。たとえば次のような場合です。

- 命名規則に厳密に従う場合
- 特定の識別子を持つオブジェクトを再度作成する場合 (オブジェクトが EUL から誤って削除され、同じ識別子で再度作成する必要がある場合など)

Discoverer の今後のリリースでは、識別子に使用できる有効な文字が変更されます。次の各文字は、Discoverer の今後のリリースでも識別子での使用がサポートされます。

- 大文字の A から Z まで
- 小文字の a から z まで
- 数字の 0 から 9 まで

- アンダースコア文字 (_)

次の各文字は、Discoverer の今後のリリースではサポートされません。

- 感嘆符 (!)
- チルダ記号 (~)
- アスタリスク記号 (*)
- 左カッコおよび右カッコ文字 ((および))
- 一重引用符 (')
- ハイフン文字 (-)

このリリースに関する注意事項

- サポートされない文字が含まれる識別子を作成すると、警告が表示されます。
- サポートされない文字が含まれる識別子を持つ .eex ファイルをインポートすると、「インポート・ログ」に警告が表示されます。
- サポートされない文字が含まれる識別子を持つ EUL をアップグレードした場合、無効な文字が含まれる識別子を示すメッセージが表示されます。

サポートされない文字を使用した識別子は変更不要です。今後のリリースでは、これらの識別子が自動的に変更されるようになります。

注意: Discoverer Plus のワークブックまたはワークシートの識別子の位置を特定するには、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

一般的な EUL の領域要件および記憶域パラメータ

「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログで推奨されるデフォルト表領域の最小値である 3MB は、EUL に対するデータベース・オブジェクトの作成時に EUL が指定した記憶域パラメータに基づいています。チュートリアルをインストール済の場合は、3MB を超えます。

新しく作成された EUL には、次の領域要件があります。

- チュートリアル・データがない場合は約 2.8MB
- チュートリアル・データがある場合は約 3.8MB

実際に使用される領域は、EUL が作成される表領域に指定されたブロック・サイズなどの他の要因によって異なります。

目安として、一般的なビジネスエリアを EUL に追加すると、EUL のサイズが 1MB 増加します。ビジネスエリアが複雑なほど（サマリー・フォルダが多く、複雑なアイテムが含まれる場合など）、ビジネスエリアで必要とされる領域も多くなります。

通常は 10 ~ 20MB のデフォルト表領域で十分ですが、必要なデフォルト表領域は EUL を定義するメタデータの量によって決定されます。したがって、必要なデフォルト表領域は、選択した表領域で使用できる量とは異なる場合があります。

EUL テーブルのデータベース・テーブル記憶域パラメータは、次のとおりです。

- EUL5_DOCUMENTS および EUL5_QPP_STATS は、次の記憶域パラメータで作成されます。

```
STORAGE (  
    INITIAL 1064960  
    NEXT 1024000  
    PCTINCREASE 0  
)
```


- 他のすべての EUL テーブルは、次の記憶域パラメータで作成されます。

```
STORAGE (
  INITIAL 1064960
  NEXT 81920
  PCTINCREASE 0
)
```

EUL 索引のデータベース索引記憶域パラメータは、次のとおりです。

```
STORAGE (
  INITIAL 4096
  NEXT 8192
  PCTINCREASE 0
)
```

EUL が領域を多く使用する原因には 2 つの要素があります。

- ブロック・サイズ

Discoverer によって初期エクステント 4096 が索引に指定されますが、サーバーは常に最小 2 ブロックをセグメントに割り当てます。したがって、ブロック・サイズが 2K を超えると、索引は Discoverer の計算より多くの領域を使用します。

- 表領域の最小エクステント設定

表領域の作成時には、作成される任意のエクステントに最小エクステントを指定できます。この最小サイズが初期エクステント・サイズを超えた場合は初期エクステント・サイズが上書きされるため、EUL オブジェクトは Discoverer の計算より多くの領域を使用します。

最初の EUL 開発および継続的なメンテナンスの推奨ワークフロー

EUL の作成およびメンテナンスのライフサイクルには、一般に 3 つの手順があります。

- 「[ステップ 1: 開発環境での新規 EUL のプロトタイプ作成および設計](#)」
- 「[ステップ 2: 開発環境から本番環境への新規 EUL の移動](#)」
- 「[ステップ 3: 新規要望に応じるための EUL の変更](#)」

ステップ 1: 開発環境での新規 EUL のプロトタイプ作成および設計

Discoverer マネージャは通常、新規 EUL の最初の部分の作成を、本番データベース上ではなく開発環境で行うことを望みます。そのためには、本番データベースで使用するものと同じデータ・テーブルが、開発環境に用意されている必要があります。

EUL を開発環境で作成することにより、本番システムのパフォーマンスを低下させずにビジネスエリア設計を開発できます。

ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムの作成後は、プロトタイプ・ワークブックを作成できます。これらのプロトタイプは、開発環境でエンド・ユーザーの代表者に確認してもらいます。ワークブック定義で合意が得られたら、開発環境データベースに保存します。

ステップ 2: 開発環境から本番環境への新規 EUL の移動

作成者とエンド・ユーザー代表者の双方が EUL に満足したら、EUL を開発環境から本番データベースに移動する準備が整います。

初めて EUL を開発環境から本番データベースに移動するときは、データベース・エクスポート / インポート・ツールの使用をお勧めします。開発環境データベースから EUL スキーマのデータベース・エクスポートを行い、この EUL スキーマを本番データベースにインポートします。

EUL を本番データベースにインポートできたら、eul5_id.sql スクリプトを実行して新規 EUL に一意の参照番号を付けます。eul5_id.sql スクリプトの実行方法の詳細は、「標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法」を参照してください。

eul5_id.sql スクリプトを実行することにより、Discoverer のエンド・ユーザー・コミュニティ全体に、この EUL へのアクセス権を付与できます。

ステップ 3: 新規要望に応じるための EUL の変更

組織内で EUL をロールアウトすると、通常 EUL 定義の変更に対する要望が出されるようになります。

EUL を変更する場合は、開発環境で変更を行ってから、Discoverer のエクスポート / インポート・ツールを使用して、変更を本番環境に移動することをお勧めします。

EUL のメンテナンス方法としては前述の手順をお勧めしますが、失いたくない更新が本番環境で行われていることもあります。その場合は、次の手順に従ってください。

1. Discoverer のエクスポート / インポート・ツールを使用して、更新を本番環境から開発環境に移動します。
注意: この時点以降に本番環境に対して行われた変更は失われます。したがって、移動期間中は本番環境を読取り専用モードでを使用することをお勧めします。
2. 開発環境で必要な変更を行います。
3. Discoverer のエクスポート / インポート・ツールを使用して、変更を本番環境に戻します。

Discoverer ワークブック・ダンプ・ユーティリティの使用

Discoverer Administrator には、ワークブック・ダンプ・ユーティリティ (d51wkdump.exe) が付属しています。このユーティリティを使用すると、Discoverer Desktop でワークブックを開かずに、ワークブックで使用する EUL 要素を検査できます。このユーティリティは、ワークブックが開かない (結合の欠落など) 場合は特に便利です。

ワークブックを分析するには、コマンド・プロンプト・ウィンドウから d51wkdump.exe ファイルを実行します。d51wkdump.exe ファイルは、%ORACLE_HOME%\bin ディレクトリにあります。

ワークブック・ダンプ・ユーティリティを使用するための構文は、次のとおりです。

```
d51wkdump <Workbook_Name> <Output_File> <DB|FS> <Connect_String> <Eul_Schema> -f
```

次の表に、パラメータの詳細を示します。

パラメータ	必須 / オプション	説明
<Workbook_Name>	「必須」	検査するワークブックの名前 (ワークブックがファイル・システムに格納されている場合は、パスを指定します)。
<Output_File>	「必須」	出力を書き込むファイル。
<DB FS>	「必須」	DB = データベースからワークブックを開く。 FS = ファイル・システムからワークブックを開く。
<Connect_String>	「必須」	ユーザー名、パスワードおよびデータベース SID の組合せ (user/passwd@database など)。
<Eul_Schema>	「必須」	EUL テーブルを所有するデータベース・ユーザーの名前。
-f	「オプション」	指定された EUL で要素を検索できるかどうかを含め、ワークブックで使用する EUL オブジェクトに関する詳細を出力するためのパラメータ。

次の点に注意してください。

- 接続文字列またはワークブック名に空白が使用されている場合は、接続文字列またはワークブック名を二重引用符で囲みます。
- パラメータは、前述の順番で指定します。
- 接続文字列で指定したユーザー名によってワークブックが所有されている場合は、データベースに保存されているワークブックのみを分析できます。
- `eul_schema` パラメータは、大文字 / 小文字を正しく指定する必要があります。つまり、ユーザー `SDC` が EUL を所有している場合は、「`SDC`」と入力する必要があります。「`sdc`」と入力すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

接続エラー - EUL スキーマにアクセスできません。EUL テーブルを含むデフォルト・スキーマまたは指定スキーマにアクセスできません。

次の例では、`Discoverer` チュートリアルの一部として付属している `Video Tutorial Workbook` を使用して、ワークブック・ダンプ・ユーティリティの出力を示します。

例 1: 次のコマンドは、`Video Tutorial Workbook` の内容を `video.txt` ファイルに出力します。この例では、`-f` オプションを使用しません。

```
d51wkdump "Video Tutorial Workbook" video.txt DB disco/disco@orcl.world disco
```

`video.txt` ファイルの内容は、次のとおりです。

```

////////////////////////////////////
Sheet Number 1
////////////////////////////////////
Sheet Name = Tabular Layout
Sheet Unique Name = {8690F66A-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Query(s) used =
Query 1
  Items :-
    EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
    EUL Item - Video Analysis Information.Department
    EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Calculation - Profit SUM
  Sort On EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Filters :-
    EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
////////////////////////////////////
////////////////////////////////////
Sheet Number 2
////////////////////////////////////
Sheet Name = Crosstab Layout
Sheet Unique Name = {8690F66B-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Query(s) used =
Query 2
  Items :-
    EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
    EUL Item - Video Analysis Information.Department
    EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Calculation - Profit SUM
  Filters :-
    EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
////////////////////////////////////

```

例 2: 次のコマンドは、`Video Tutorial Workbook` の内容を `video.txt` ファイルに出力します。この例では、`-f` オプションを使用します。

```
d51wkdump "Video Tutorial Workbook" video.txt DB disco/disco@orcl.world disco -f
```

video.txt ファイルの内容は、次のとおりです。

```
EUL Item Reference
  IoId = 16
  Id = 100177
  Identifier = REGION
  Name = Region
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Item Reference
  IoId = 24
  Id = 100153
  Identifier = DEPARTMENT
  Name = Department
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Item Reference
  IoId = 32
  Id = 100175
  Identifier = PROFIT
  Name = Profit
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Private Item
  Id = -105
  Name = Profit SUM
  Identifier = 1
  Desc = Total profit for one store, one product in one day
  DataType = 2
  Placement = 1
  Hidden = 0
  IsACalc = 0
  IOFormula = [1,1] ([6,32])
  DisplayFormula = SUM(Profit)
EUL Item Reference
  IoId = 41
  Id = 100139
  Identifier = CALENDAR_YEAR
  Name = Calendar Year
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Filter Reference
  Id = 100218
  Identifier = DEPARTMENT_IS_VIDEO_RENTAL_OR_VIDEO_SALE
  Name = Department is Video Rental or Video Sale
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Sort Item Reference
  Item = EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Identifier = 14
  Direction = 1
Query Request QR1
  Distinct = 1
  Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
  Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Department
  Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Measure Item Usage - Name = Calculation - Profit SUM
  Sort Item Usage - Name = Sort On EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Filter Usage - Name = EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video
```

```

Rental or
Video Sale
  Identifier = 58
  //////////////////////////////////////
Sheet Number 1
  //////////////////////////////////////
Sheet Name = Tabular Layout
Sheet Unique Name = {8690F66A-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Sheet Identifier = 7
Query(s) used =
Query 1
  Items :-
  EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
  EUL Item - Video Analysis Information.Department
  EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Calculation - Profit SUM
  Sort On   EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Filters :-
  EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
  //////////////////////////////////////
Query Request QR2
  Distinct = 1
  Axis Item Usage - Name =   EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
  Axis Item Usage - Name =   EUL Item - Video Analysis Information.Department
  Axis Item Usage - Name =   EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Measure Item Usage - Name = Calculation - Profit SUM
  Filter Usage - Name =   EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video
Rental or
Video Sale
  Identifier = 95
  //////////////////////////////////////
Sheet Number 2
  //////////////////////////////////////
Sheet Name = Crosstab Layout
Sheet Unique Name = {8690F66B-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Sheet Identifier = 12
Query(s) used =
Query 2
  Items :-
  EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
  EUL Item - Video Analysis Information.Department
  EUL Item - Video Analysis Information.Region
  Calculation - Profit SUM
  Filters :-
  EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
  //////////////////////////////////////

```

ロジカル・スタンバイ（読取り専用）データベースでの EUL の作成

Discoverer では、パフォーマンスを向上させるために、エンド・ユーザーのクエリーに関する統計が EUL に格納されます。そのため、EUL が格納されているデータベースは書き込み可能でなければなりません。つまり、ロジカル・スタンバイ（読取り専用）データベースでの EUL の作成はサポートされていません。エンド・ユーザーには、次のものへの書き込みアクセス権限を拒否します。

- ビジネス・データ。読取り専用データベースにデータを保存し、EUL が格納されている書き込み可能なデータベースからデータベース・リンクを使用してそのデータにアクセスします。
- EUL 自体。どのユーザーにもワークブックの作成または編集権限を付与しないで、EUL 所有者にのみ管理権限を付与します。

ビジネスエリアの作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用してビジネスエリアを作成およびメンテナンスする方法について説明します。項目は次のとおりです。

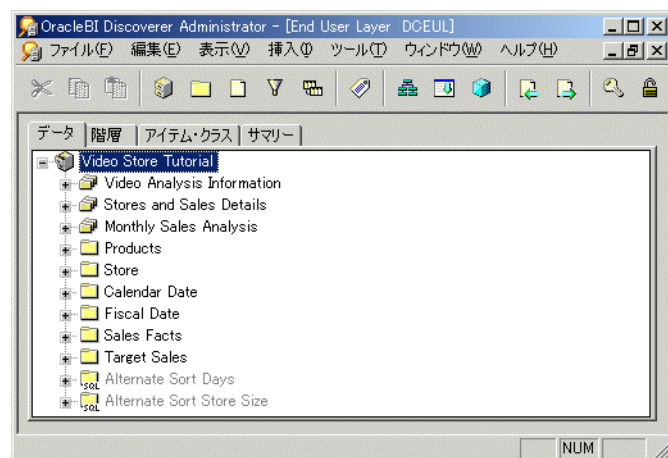
- 「ビジネスエリア」
- 「新規ビジネスエリア作成の準備方法」
- 「ロード・ウィザード」
- 「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」
- 「Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く方法」
- 「Discoverer Administrator に接続済の場合に既存ビジネスエリアを開く方法」
- 「EUL 間のビジネスエリアのコピー方法」
- 「ビジネスエリアのプロパティの編集方法」
- 「ビジネスエリアの削除方法」
- 「ビジネスエリアとデータベースの同期化方法」
- 「ユーザーがビジネスエリア（またはビジネスエリア内のフォルダ）を参照できない理由」

ビジネスエリア

ビジネスエリアとは、Discoverer エンド・ユーザー固有のデータ要件に一致するように設計されたテーブルまたはビュー（あるいはその両方）を概念上グループ化したものです。たとえば、会計部門は予算と財務に関するデータを表す会計ビジネスエリアを必要とします。一方、人事部門のマネージャは、部門と従業員情報専用のビジネスエリアを必要とします。

Discoverer Administrator では、ビジネスエリアは「ワークエリア」の「データ」タブにファイルとして表示されます。ビジネスエリアを開いて、ビジネスエリアのフォルダとアイテムを表示できます（詳細は、「フォルダ」および「アイテム」を参照）。

図 5-1 ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムを表示する「ワークエリア」の「データ」タブ



新規ビジネスエリア作成の準備方法

ロード・ウィザードを使用して、Discoverer Administrator にビジネスエリアを作成します（詳細は、「ロード・ウィザード」を参照）。ロード・ウィザードを開始する前に、ビジネスエリア設計の概略を作成して準備します。Discoverer エンド・ユーザーの目的に合ったビジネスエリアを設計するために、Discoverer エンド・ユーザーの要件を意識するようにしてください。

次のガイドラインを使用してください。

- ユーザーの要件を明確に理解するために、ユーザーに質問をします。ユーザーへの質問のガイドラインとして、「[Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator を使用するための前提条件](#)」の質問リストを使用します。
- データソースを識別して、その設計を明確に理解します。
- 必要なテーブル、ビューおよび列を識別します。複数のビジネスエリアに含まれる可能性のあるテーブル、ビューおよび列を識別します。たとえば、「Employee」フォルダは「Sales」および「Human Resources」ビジネスエリアの両方で必要な場合があります。
- 必要な結合を調べ、それらの結合がデータベースに存在するか、あるいは Discoverer Administrator を使用して作成する必要があるかを判断します。結合が主 / 外部キー制約でデータベースに事前定義されている場合もあれば、異なるテーブル内の列名の一致の仕方によって目的に合った結合条件が決まる場合もあります。詳細は、[第 10 章「結合の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。
- セキュリティ問題とアクセス権限を識別します。ビジネスエリアの対象となるユーザー名を含めてください。

オブジェクトを追加すると、ビジネスエリアは便利で効率的な分析ツールになりますが、設計も変化します。概略を作成しておく、ビジネスエリアの変更および作成のためのフレームワークが提供されます。

ロード・ウィザード

ロード・ウィザードではビジネスエリア作成のためのわかりやすいインターフェースが提供され、次の操作を迅速に行うことができます。

- ビジネスエリアの命名と説明
- ビジネスエリアへのメタデータのロード
- 次の操作を自動的に実行
 - データのフォーマット
 - テーブル間の既存の関係から結合を作成

注意: Oracle9i 以上のデータベースからバルク・ロードを行う場合は、ビュー間の既存の関係（ビューの制約など）から結合を作成することも可能です。
 - サマリーの作成
 - 日付アイテムに対する日付階層の作成
 - データポイント・アイテムに対するデフォルト集計の作成
 - アイテムの値リストの作成
 - フォルダとアイテムのソート

ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法

Discoverer Administrator に接続済の場合

1. 「挿入」→「ビジネスエリア」→「データベースから新規ビジネスエリアを作成」を選択して、次のステップ 2 に進みます。

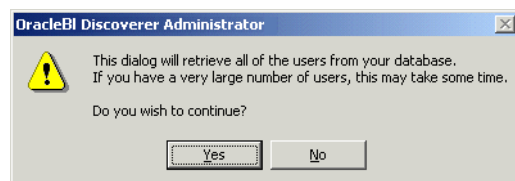
Discoverer Administrator に接続したばかりの場合

1. 「新規ビジネスエリアを作成」をクリックします（Discoverer Administrator に接続したときにのみ表示される条件付きオプション）。

注意: Discoverer Administrator に接続し、ユーザー名に EUL へのアクセス権がある場合は、ロード・ウィザードが自動的に開始されます。

2. 次のオプションのいずれかを選択してメタデータのロード元を指定します。
 - オンライン・ディクショナリ（詳細は、「[オンライン・ディクショナリからのロード](#)」を参照）
 - ゲートウェイ（詳細は、「[ゲートウェイからのロード](#)」を参照）
 オンライン・ディクショナリとゲートウェイの詳細は、「[ロード・ウィザード: ステップ 1](#) ダイアログ」を参照してください。
3. 「次へ」をクリックすると、「[ロード・ウィザード: ステップ 2](#)」ダイアログが表示されます。
 次の警告ダイアログが表示されます。

図 5-2 警告ダイアログ



- 「はい」をクリックすると、「ロード・ウィザード:ステップ2」ダイアログが表示されます。

オンライン・ディクショナリからのロード

「ロード・ウィザード:ステップ2」ダイアログでは、新規ビジネスエリアにロードするユーザー・オブジェクトを定義できます。

図 5-3 「ロード・ウィザード:ステップ2」ダイアログ



注意: 「ロードするテーブルを所有するユーザーを選択してください」リストに表示される最大行数を変更するには、Discoverer のレジストリ設定 MaxNumListRows の値を編集します (詳細は、第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」を参照)。

- 「データベース・リンクを選択してください」ドロップダウン・リストから、データベース・リンクを選択します。
 現行ユーザー ID のデフォルト・データベースが表示されます。ドロップダウン・リストには、ユーザーがアクセス権を持つプライベート・データベース・リンクまたはパブリック・データベース・リンクに基づいて、現行ユーザー ID が接続できるデータベースのみが表示されます。
- (各データベース・ユーザーの) チェックボックスを選択して、選択された各データベース・ユーザーが所有するデータベース・オブジェクトのデータ・ディクショナリ定義をビジネスエリアにロードします。
 表示されるデータベース・ユーザーは、選択したデータベースに存在するデータベース・ユーザーです。
- (オプション) 「パターン・マッチングによる絞り込み」フィールドに、ビジネスエリアにロードされるユーザーのオブジェクトが一致する必要があるパターンを指定します。
 % 記号がデフォルトで表示されますが、これは任意の文字または文字列に一致するワイルドカードです。データベースからロードできるスキーマ・オブジェクトの数を減らすには、次のようにワイルドカードを他の文字と組み合わせて使用します。

ロードするスキーマ・オブジェクト	入力する文字
すべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%
D で始まるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	D%
AND で終わるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%AND

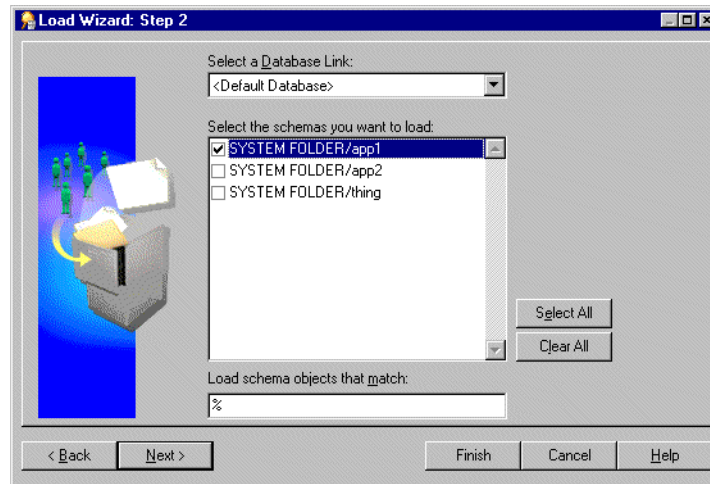
ロードするスキーマ・オブジェクト	入力する文字
A で始まり、5 文字の名前を持つすべてのオブジェクトを検索（各アンダースコアは文字を表す）	A_----

- （オプション）「オプション」をクリックしてロードするテーブルの種類を指定します（詳細は、「[「オンライン・ディクショナリ・オプション」ダイアログ](#)」を参照）。
たとえば、パブリックまたはプライベート、選択したユーザーが所有しているか、あるいは選択したユーザーによってアクセス可能かなどです。
デフォルトでは、ロード・ウィザードは次の項目のみをロードします。
 - 指定されたユーザーが所有するテーブル
 - プライベート・テーブル
- 「次へ」をクリックして、「[ロード・ウィザード：ステップ 3](#)」ダイアログを表示します。

ゲートウェイからのロード

「[ロード・ウィザード：ステップ 2](#)」ダイアログでは、新規ビジネスエリアにロードするスキーマ・オブジェクトを定義できます。

図 5-4 「ロード・ウィザード：ステップ 2」ダイアログ



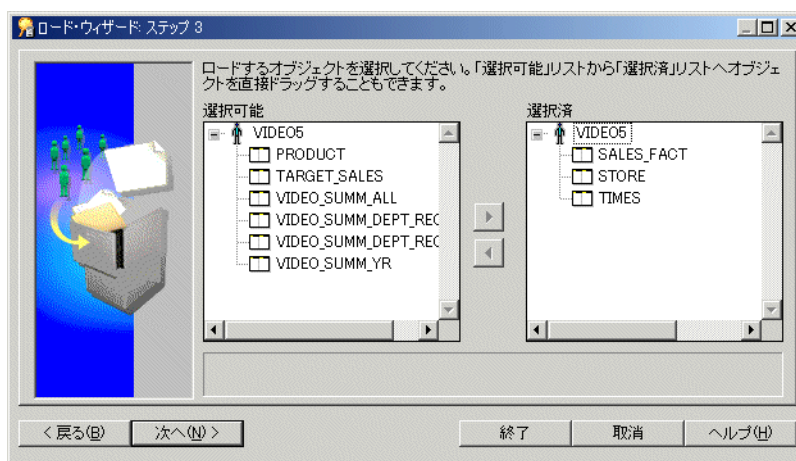
- 「**データベース・リンクを選択してください**」ドロップダウン・リストから、データベース・リンクを選択します。
「**データベース・リンクを選択してください**」フィールドには、現行ユーザー ID のデフォルト・データベースが表示されます。ドロップダウン・リストには、現行ユーザー ID が接続できるデータベースのみが表示されます。
- ビジネスエリアにロードする各スキーマのチェックボックスを選択します。
表示されるスキーマは、選択したデータベースに存在するスキーマです。
- ビジネスエリアにロードされるスキーマ・オブジェクトが一致する必要があるパターンを（「**パターン・マッチングによる絞り込み**」フィールドに）指定して、「次へ」をクリックします。
% 記号がデフォルトで表示されますが、これは任意の文字または文字列に一致するワイルドカードです。データベースからロードできるスキーマ・オブジェクトの数を減らすには、次のようにワイルドカードを他の文字と組み合わせて使用します。

ロードするスキーマ・オブジェクト	入力する文字
すべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%
Dで始まるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	D%
ANDで終わるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%AND
Aで始まり、5文字の名前を持つすべてのオブジェクトを検索（各アンダースコアは文字を表す）	A_----

テーブルおよびビューの選択

「ロード・ウィザード:ステップ3」ダイアログでは、ビジネスエリアにロードするテーブルとビュー（スキーマ・オブジェクト）を選択できます。

図 5-5 「ロード・ウィザード:ステップ3」ダイアログ



「選択可能」リストには、ユーザー（オンライン・ディクショナリを介して）またはスキーマ（ゲートウェイを介して）の階層リストと、ビジネスエリアへのロードに使用できるテーブルとビューが表示されます。「+」および「-」記号をクリックすると、階層レベルを拡張または縮小できます。

テーブルまたはビューを選択してビジネスエリアにロードする手順は、次のとおりです。

1. ビジネスエリアにロードするテーブルまたはビューを「選択可能」リストから「選択済」リストに移動します。

[Ctrl] キーを押しながら他のテーブルまたはビューをクリックすると、一度に複数のテーブルまたはビューを選択できます。

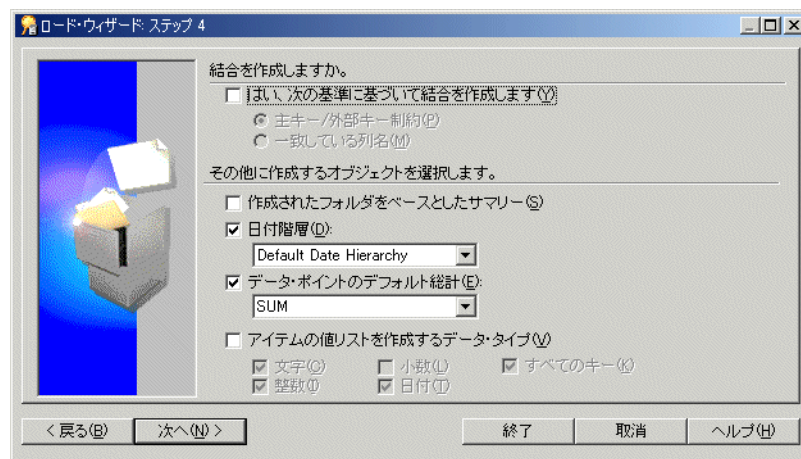
2. 「次へ」をクリックすると、「ロード・ウィザード:ステップ4」ダイアログが表示され、このダイアログで Discoverer Administrator による結合の作成方法および Discoverer Administrator が新規ビジネスエリアに対して生成する追加オブジェクトを指定できます。

「Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目の指定」に進んでください。

Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目の指定

「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログでは、結合、サマリー・フォルダ、日付階層、データポイントのデフォルト総計および値リストに関して、Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目を決定できます。

図 5-6 「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ



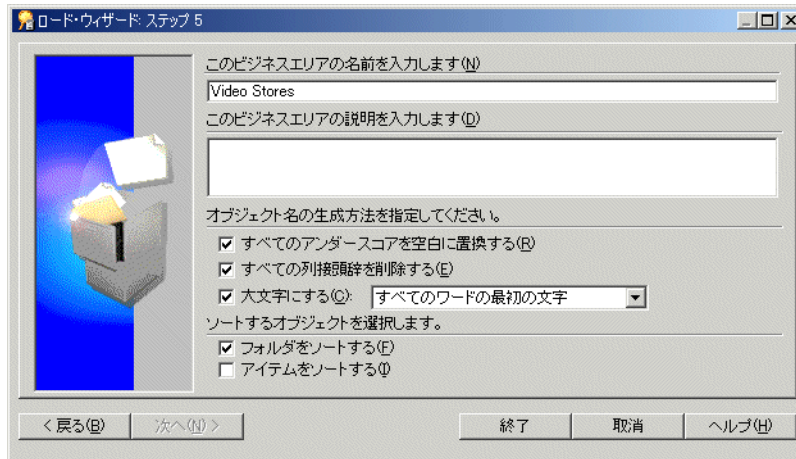
Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目を指定する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Administrator が結合を作成するかどうか、作成する場合は適切な結合オプションを選択します。
2. 作成する追加オブジェクトを選択します（このダイアログのリファレンス情報は、「「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ」を参照）。
3. 「次へ」をクリックして、「ロード・ウィザード: ステップ 5」ダイアログを表示します。「ビジネスエリアの命名、オブジェクト名およびソート・オプションの指定」に進んでください。

ビジネスエリアの命名、オブジェクト名およびソート・オプションの指定

「ロード・ウィザード: ステップ 5」ダイアログでは、名前と説明を入力して、Discoverer Administrator によるオブジェクト名の生成方法とビジネスエリアでソートするオブジェクトを指定できます。

図 5-7 「ロード・ウィザード: ステップ 5」 ダイアログ



ビジネスエリアを命名して、フォルダとアイテム、命名およびソートのオプションを指定する手順は、次のとおりです。

1. 名前と説明を指定し、Discoverer Administrator によるフォルダ名とアイテム名の命名基準およびビジネスエリアのフォルダまたはアイテム（あるいはその両方）をソートするかどうかに関するチェックボックスを選択して「終了」をクリックします。
2. (条件付きステップ) このステップ（および次のステップ）は、「ロード・ウィザード: ステップ 4」で「作成されたフォルダをベースとしたサマリー」チェックボックスを選択した場合にのみ適用されます。

注意: Discoverer Administrator では、自動サマリー管理 (ASM) によって作成されるサマリー・フォルダに関する情報を提供する「推奨サマリー」ダイアログが表示されます (サマリー・フォルダの詳細は、「サマリー・ウィザード (ASM): 「推奨サマリー」ダイアログ」および第 14 章「サマリー・フォルダの管理」を参照)。

3. 「作成」をクリックして選択内容を確認します。

Discoverer Administrator には、新規ビジネスエリア（またはサマリー）の作成中に進行状況バーが表示されます。完了すると進行状況バーが消えて、「ワークエリア: 「データ」タブ」に新規ビジネスエリアが表示されます。

注意: メタデータを Oracle Designer からロードした場合は、ビジネスエリアをリフレッシュしてから使用してください。詳細は、「ビジネスエリアとデータベースの同期化方法」を参照してください。

注意: ユーザー・アクセス

新規ビジネスエリア（および含まれるデータ）には、そのビジネスエリアの作成に使用されたユーザー ID のみがアクセスできます。他のユーザーにアクセス権限を付与する方法の詳細は、「ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法」を参照してください。

Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く方法

注意: Discoverer Administrator に接続すると、ロード・ウィザードが自動的に開始されます。

Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く手順は、次のとおりです。

1. 「ロード・ウィザード: ステップ 1」ダイアログで「既存のビジネスエリアを開く」をクリックすると、接続先データベースの EUL にあるすべてのビジネスエリアが表示されます。
2. 開くビジネスエリアのチェックボックスを選択するか「すべてを選択」をクリックしてすべてのビジネスエリアを選択します。

3. 「終了」をクリックすると、選択されたビジネスエリアが開きます。

Discoverer Administrator に接続済の場合に既存ビジネスエリアを開く方法

Discoverer Administrator に接続済の場合に既存ビジネスエリアを開く手順は、次のとおりです。

1. 「ファイル」→「開く」を選択すると、「[ビジネスエリアを開く](#)」ダイアログが表示されます。
2. オープンするビジネスエリアを「**選択可能**」リストから「**選択済**」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら他のビジネスエリアをクリックすると、一度に複数のビジネスエリアを選択できます。
3. 「OK」をクリックすると、選択されたビジネスエリアが開きます。

EUL 間のビジネスエリアのコピー方法

1つのEULから他のEUL（開発システムから本番システムなど）にビジネスエリアをコピーするには、最初のEULからビジネスエリアをエクスポートして2番目のEULに再接続し、ビジネスエリアのエクスポート・ファイルを2番目のEULにインポートする必要があります。

1. ビジネスエリアをファイルにエクスポートするには、次の参照先で説明されている手順を実行します。
 - [「エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法」](#)
この作業を完了した後、次のステップに進んでください。
2. 「ファイル」→「接続」を選択します。
3. ビジネスエリアの移動先となるEULに接続します。
4. 「ファイル」→「インポート」を選択します。
5. （前述のステップ1でエクスポートされた）ビジネスエリアを現行EULにインポートするには、次の参照先で説明されている手順を実行します。
 - [「インポート・ウィザードによるファイルからのEULオブジェクトのインポート方法」](#)

注意

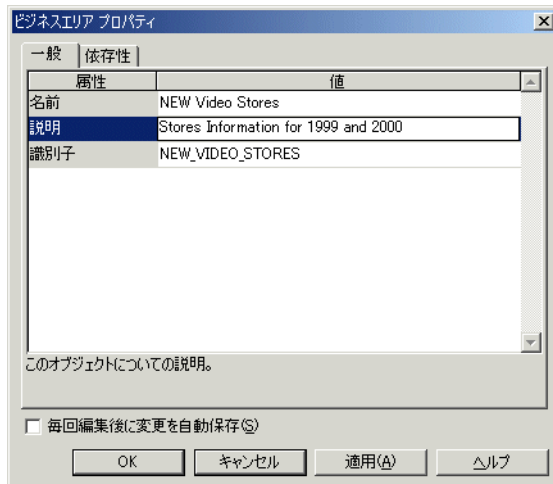
「エクスポート」オプションでは、ビジネスエリアの定義のみがエクスポートされます。データベース、EULテーブル、ワークブックまたはビジネスエリア定義によって参照されるデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。

ビジネスエリアのプロパティの編集方法

ビジネスエリアのプロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「**データ**」タブでビジネスエリアをクリックし、「編集」→「プロパティ」を選択して、「[ビジネスエリア・プロパティ](#)」ダイアログを表示します。

図 5-8 「ビジネスエリア・プロパティ」 ダイアログ



- 必要に応じて、ビジネスエリアの名前と説明を設定します。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子を変更しないでください。変更の影響を理解している場合を除き、識別子を変更しないでください。たとえば、本番環境にインポートする EUL バッチをテスト環境で開発している場合などです。

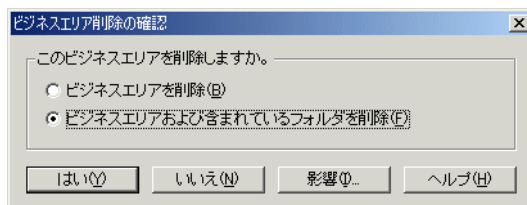
- 「OK」をクリックして変更内容を確認します。

ビジネスエリアの削除方法

ビジネスエリアを削除する手順は、次のとおりです。

- ワークエリア:** 「データ」 タブでビジネスエリアをクリックし、「編集」 → 「削除」を選択して「ビジネスエリア削除の確認」ダイアログを表示します。

図 5-9 「ビジネスエリア削除の確認」 ダイアログ



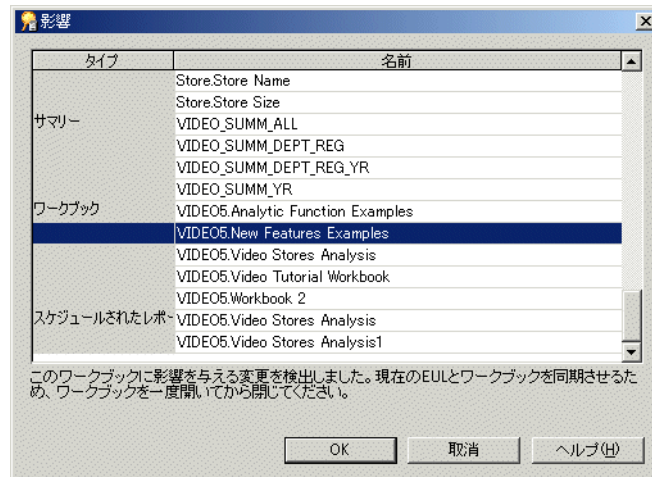
- 必要とする削除の適用範囲を指定します。
 - 「**ビジネスエリアを削除**」 ラジオ・ボタンを選択すると、ビジネスエリアが削除されます。フォルダは削除されず、EUL に残ります。

注意: フォルダは EUL 内に存在できますが、ビジネスエリアには属していません（親なしのフォルダ）。
 - 「**ビジネスエリアおよび含まれているフォルダを削除**」 ラジオ・ボタンを選択すると、ビジネスエリアとそのビジネスエリアに含まれるフォルダがすべて削除されます。

注意: 他のビジネスエリアの一部であるフォルダは削除されません。

注意: これはデフォルト・オプションで、通常はこのオプションをお勧めします。
- (オプション) このビジネスエリアの削除によって影響を受ける可能性があるオブジェクトを確認する手順は、次のとおりです。
 - 「影響」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。

図 5-10 「影響」 ダイアログ



「影響」ダイアログでは、ビジネスエリアの削除による影響を受ける可能性のある他のEULオブジェクトを確認できます。

注意：「影響」ダイアログには、ファイル・システム（.dis ファイル内）に保存されたワークブックに対する影響は表示されません。

- （オプション）行を選択すると、現在の処理がEULオブジェクトに与える影響を示すテキストが、リストの一番下に表示されます。
- ビジネスエリアの削除による影響を確認し終えたら、「閉じる」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
- 「はい」をクリックすると、選択されたビジネスエリアが選択内容に基づいて削除されます。

ビジネスエリアとデータベースの同期化方法

リフレッシュ・コマンドを使用して、データベース・スキーマが変更されるたびにビジネスエリアとソース・ディクショナリを同期化します。

典型的なデータベース変更の例は、次のとおりです。

- テーブルの追加
- 列の追加
- 結合の追加
- テーブルの所有者の変更

ビジネスエリアとデータベースを同期化する手順は、次のとおりです。

- ワークエリア：**「データ」タブで、リフレッシュするビジネスエリアを選択します。
- 「ファイル」→「リフレッシュ」を選択して、「リフレッシュ・ウィザード」ダイアログを開きます。
- 次の「ビジネスエリアのリフレッシュを行いません。比較の元となる基準を指定してください。」オプションから、いずれかを選択します。
 - 「オンライン・ディクショナリ」
 - 「ゲートウェイ」
- 「終了」をクリックすると、ビジネスエリアのリフレッシュ処理が開始されます。

最後のリフレッシュ以降にオブジェクトが変更されている場合は、Discoverer Administrator によって「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログが表示されます。

図 5-11 「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログ



「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログには、次の項目が表示されます。

- 最後のリフレッシュ以降に変更されたオブジェクト名
- 最後のリフレッシュ以降にオブジェクトで発生した変更の種類
- リフレッシュがオブジェクトに与える影響

5. 各オブジェクトをリフレッシュするかどうかを決定する手順は、次のとおりです。
 - リフレッシュする各オブジェクトの隣にあるチェックボックスを選択します。
 - リフレッシュしない各オブジェクトの隣にあるチェックボックスを選択解除します。
6. (オプション) このビジネスエリアのリフレッシュによって削除されるオブジェクトを検討できます。リフレッシュの潜在的な影響を表示する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。
 - b. ビジネスエリアのリフレッシュによる影響を確認し終えたら、「閉じる」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
7. Discoverer Administrator の「OK」をクリックすると、ビジネスエリアまたは選択されたオブジェクトがリフレッシュされます。

ユーザーがビジネスエリア（またはビジネスエリア内のフォルダ）を参照できない理由

ビジネスエリアを作成しても、Discoverer エンド・ユーザーがビジネスエリア（またはビジネスエリア内のフォルダ）を参照できない場合があります。ユーザーがビジネスエリアまたはビジネスエリア内のフォルダを参照するには、次の条件がすべて満たされている必要があります。

- ユーザーは EUL へのアクセス権を持っている必要があります。ユーザーが EUL 所有者でない場合は、EUL がパブリックにアクセス可能であるか、あるいはユーザーが EUL に対する明示的なアクセス権を付与されている必要があります。また、ユーザーがアクセスしている EUL が、ビジネスエリアが作成された EUL であることを確認してください。
- ユーザーはビジネスエリアへのアクセス権を持っている必要があります。ビジネスエリアへのアクセス権限付与の詳細は、次の項目を参照してください。
 - 「ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法」
 - 「ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法」
- ユーザーは、ビジネスエリアのフォルダの基となるテーブルまたはビューへのデータベース SELECT アクセス権を持っている必要があります。

ヒント: 特定のユーザーが特定のデータベース・テーブルまたはビューに対するアクセス権を持っているかどうか不明な場合は、そのユーザーとして SQL*Plus にログインし、次のように入力します。

```
select count(*) from <ownername>.<objectname>;
```

- <ownername> は、テーブルまたはビュー所有者のデータベース・ユーザー名です。
- <objectname> は、テーブルまたはビューの名前です。

ユーザーがデータベース・テーブルまたはビューに対するアクセス権を持っていない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- ビジネスエリアのフォルダは、現行データベース・テーブルまたはビューの定義に基づいている必要があります。テーブルまたはビューの定義が変更されている場合は、ビジネスエリアをリフレッシュする必要があります（詳細は、「[ビジネスエリアとデータベースの同期化方法](#)」を参照）。たとえば、基礎となる列がテーブルから削除されており、その列にフォルダが依存している場合、エンド・ユーザーはフォルダを参照できません。この場合、Discoverer エンド・ユーザーがフォルダを参照できるようにするには、そのフォルダを含むビジネスエリアをリフレッシュする必要があります。

フォルダの作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用してフォルダを作成およびメンテナンスする方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「フォルダ」
- 「単一フォルダ」
- 「複合フォルダ」
- 「カスタム・フォルダ」
- 「フォルダ間の依存性」
- 「ビジネスエリアにおけるフォルダの共有」
- 「複合フォルダのリーチスルー」
- 「ベース・フォルダにリーチスルー可能な複合フォルダの定義方法」
- 「複合フォルダのリーチスルーを使用する際に適用されるルールおよび制限」
- 「ビジネスエリアにおけるフォルダの共有」
- 「データベースからの単一フォルダの作成方法」
- 「複合フォルダの作成方法」
- 「カスタム・フォルダの作成方法」
- 「フォルダ・プロパティの編集方法」
- 「カスタム・フォルダの SQL 文の編集方法」
- 「ビジネスエリアからのフォルダの削除方法」
- 「ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法」
- 「複数ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法」
- 「EUL 内の親なしのフォルダの表示方法」
- 「親なしのフォルダの EUL からの削除方法」
- 「ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法」
- 「フォルダにおけるアイテムのソート方法」
- 「ビジネスエリアにおけるフォルダの順序変更方法」
- 「ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法」

フォルダ

Discoverer フォルダは、結果セットのデータを表したものです。Discoverer フォルダの視覚的概念は Windows のディレクトリに類似しています。フォルダはコンテナであり、アイテムはフォルダに保持されるファイルです。Discoverer フォルダは、関連アイテムのグループを表します。Discoverer エンド・ユーザーは 1 つ以上のフォルダからアイテムを選択して、データベースの情報を取得します。Discoverer マネージャには、Discoverer エンド・ユーザーが必要な情報にアクセスできるように適切なフォルダを作成する責任があります。

次の 3 種類のフォルダがあります。

- 単一データベース・テーブルまたはビューの列に基づくアイテムを含む単一フォルダ
- 複数のデータベース・テーブルまたはビューの列に基づくアイテムを含む複合フォルダ
- SQL 文に基づくカスタム・フォルダ

Discoverer エンド・ユーザーにとっては、特定のフォルダの種類は重要ではありません。フォルダが単一か、カスタムか、あるいは複合であるかどうかは、Discoverer マネージャにとっては重要です。Discoverer Administrator においても、これらのフォルダの動作には、種類による大きな違いはありません。フォルダには、アイテム、ユーザー定義アイテム、結合、条件、アイテム・クラスおよび階層が含まれます。フォルダのアイテムはサマリー・フォルダで使用できます。また、階層の定義に使用できます。

Discoverer エンド・ユーザーは、ビジネスエリアのコンテキスト内でフォルダを使用します。

Discoverer マネージャは、1 つ以上のビジネスエリアにフォルダを割り当てることができます。フォルダを割り当てるビジネスエリアの数にかかわらず、フォルダの定義は単一であることに注意してください。

フォルダは、EUL から削除することなくすべてのビジネスエリアから削除できます。EUL には存在しているがビジネスエリアには現在割り当てられていないフォルダは、親なしのフォルダと呼ばれます。

単一フォルダ

単一フォルダには、単一のデータベース・テーブルまたはビューの列に基づくアイテムが含まれます。単一フォルダのアイテムには、同じ単一フォルダ内の他のアイテムから導出されたユーザー定義アイテムも含まれます。

単一フォルダは、データベースまたはゲートウェイからテーブル定義またはテーブル・メタデータをロードして作成します。

図 6-1 Discoverer Administrator によるテーブルおよびビューの表現方法



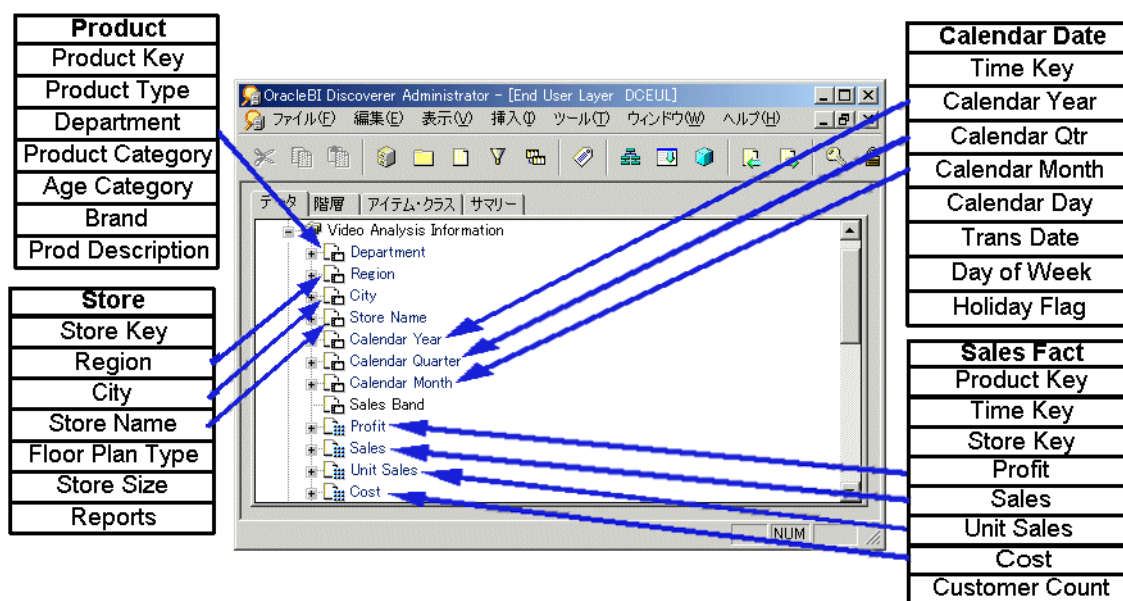
複合フォルダ

複合フォルダには、1つ以上のフォルダのアイテムが含まれます。複合フォルダでは、複数のフォルダのデータを組み合わせたビューを作成できます。これは、データベースのビューと類似しています。

複合フォルダを使用すると、新規データベース・ビューを作成せずにビジネスエリアを簡素化できます。たとえば、DEPT テーブルと EMP テーブル両方の列を持つ「Dept-Emp」という複合フォルダを作成できます。ユーザーは、2つのフォルダではなく1つのフォルダから選択できます。

異なるフォルダの2つのアイテムを同じ複合フォルダに含めるには、2つのフォルダ間に結合条件が存在している必要があります。結合の詳細は、第10章「結合の作成とメンテナンス」を参照してください。

図 6-2 複合フォルダによる複数ソース・テーブルからのアイテムのグループ化方法



データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用する利点

複合フォルダのかわりにデータベース・ビューを使用しても、同じ結果セットを生成できます。ただし、データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用することで、いくつかの利点が提供されます。次のことができます。

- データベース・ビューの作成に必要なデータベース権限なしでの複合フォルダ作成
- フォルダのビジネスエリアを使用しての、複合フォルダへのアクセス制御
- Discoverer Administrator 内での、複合フォルダ全体の管理（データベース・ビューではメンテナンスが複雑）
- 複合フォルダ内のアイテムに対して生成した SQL を最適化する Discoverer の機能を利用した、クエリーのパフォーマンスの向上

カスタム・フォルダ

カスタム・フォルダは、集合演算子（UNION、CONNECT BY、MINUS、INTERSECT など）を含むことのできる SQL 文あるいはダイアログに直接入力するシノニムに基づくフォルダです。

カスタム・フォルダを定義すると、複雑な結果セットを表すフォルダを迅速に作成できます。カスタム・フォルダを保存すると、Discoverer Administrator によって入力された SQL 文の SELECT を使用してアイテムが作成されます。

Discoverer Plus では、カスタム・フォルダと単一フォルダの区別はありません。Discoverer エンド・ユーザーは、カスタム・フォルダを使用して他の種類のフォルダと同じようにクエリーを作成できます。

カスタム・フォルダと単一フォルダの違い

カスタム・フォルダは単一フォルダと非常に似ていますが、次のような点が異なります。

領域	単一フォルダ	カスタム・フォルダ
「リフレッシュ」	単一フォルダは、ビジネスエリアのリフレッシュ時にリフレッシュされます。	カスタム・フォルダは、既存 SQL の編集および検証によってリフレッシュされます。 注意: カスタム・フォルダがビューに基づいている場合は、ビジネスエリアをリフレッシュする必要があります。
アイテム・プロパティ	単一フォルダのアイテムには、「計算式」プロパティがあります。	カスタム・フォルダに生成されたアイテムには、「計算式」プロパティはありません。つまり、カスタム・フォルダでアイテムの計算式を編集する唯一の方法は、フォルダ全体の SQL を編集することです。
フォルダ・プロパティ	単一フォルダには、「データベース」、「所有者」および「オブジェクト」プロパティがあります。単一フォルダには「カスタム SQL」プロパティはありません。	カスタム・フォルダには、「データベース」、「所有者」および「オブジェクト」プロパティはありません。カスタム・フォルダには、カスタム・フォルダの生成に使用された SQL 文を含む「カスタム SQL」プロパティがあります。

カスタム・フォルダの例

この項は、次の例で構成されています。

- 「例 1: カスタム・フォルダ定義のシノニム」
- 「例 2: カスタム・フォルダ定義内のデータベース・リンク」
- 「例 3: カスタム・フォルダ定義の集合演算子」
- 「例 4: カスタム・フォルダ定義のサブクエリー」
- 「例 5: カスタム・フォルダ定義のオブティマイザ・ヒント」
- 「例 6: カスタム・フォルダ定義の CONNECT BY 句」
- 「例 7: カスタム・フォルダ定義の列の式」
- 「例 8: カスタム・フォルダの使用による値リストのパフォーマンスの向上」

例 1: カスタム・フォルダ定義のシノニム

```
SELECT BRAND FROM PROD
```

この例では、PROD は製品テーブルを示すシノニムです。

シノニムが示す基礎となるテーブルまたはビューは、Discoverer でカスタム・フォルダ定義を変更することなく切り替えられます（シノニムが参照するテーブルまたはビューの列の名前が変わらない場合のみ）。

例 2: カスタム・フォルダ定義内のデータベース・リンク

```
SELECT BRAND FROM PRODUCT@DATABASELINK
```

この例では、PRODUCT は他のデータベース内のテーブルであり、DATABASELINK は他のデータベースへのデータベース・リンクです。

例 3: カスタム・フォルダ定義の集合演算子

```
SELECT 'COMPANY1' COMPANY, ENAME, SAL FROM EMP@HQ
UNION
SELECT 'COMPANY2' COMPANY, ENAME, SAL FROM EMP@REGIONA
```

この例では、HQ および REGIONA はリモート・データベースのデータベース・リンクです。結果セットは、「COMPANY1」という列を持つすべての従業員の UNION であり、従業員が属す会社を表します。

例 4: カスタム・フォルダ定義のサブクエリー

```
SELECT ENAME, SAL FROM EMP
WHERE SAL > (SELECT AVG (SAL) FROM EMP)
```

この例では、(SELECT AVG (SAL) FROM EMP) サブクエリーはフォルダ定義に含まれていません。

例 5: カスタム・フォルダ定義のオプティマイザ・ヒント

```
SELECT /*+ FULL(scott_emp) PARALLEL (scott_emp, 5) */
ename
FROM scott.emp scott_emp;
```

この例では、PARALLEL ヒントは emp 定義で指定された並列度を上書きします。

例 6: カスタム・フォルダ定義の CONNECT BY 句

```
SELECT EMPNO, ENAME, JOB FROM EMP
CONNECT BY PRIOR EMPNO=MGR
START WITH KING
```

この例では、CONNECT BY 句は親行の EMPNO 値が子行の MGR 値と等しくなる階層関係を定義します（つまり、PRIOR 条件が TRUE の各行がフィルタ処理されます）。

例 7: カスタム・フォルダ定義の列の式

```
SELECT ENAME, SAL*12+NVL (COMM,0) ANNUAL_SALARY
FROM EMP
```

この例では、別名 ANNUAL_SALARY が SAL*12+NVL (COMM,0) 式に必要です。

カスタム・フォルダには任意の有効な SQL 文を含めることができますが、列の式には SQL ビュー定義と同じ方法で別名を付ける必要があります。この場合、別名はアイテム名として使用されます。

ENAME などの単純な列の式では別名は必要ありません。

例 8: カスタム・フォルダの使用による値リストのパフォーマンスの向上

カスタム・フォルダを使用して、データベース上で値が変更されないフォルダにアイテムの値リストを作成できます。これは、重複を除いた値の数より行の数が多いフォルダのアイテムに対して定義された値リストを使用してクエリーを実行するよりもはるかに効率的です。

静的値の数が少ない場合は、カスタム・フォルダを使用して End User Layer 内にローカル値リストを作成できます。

たとえば、North、South、East および West の値リストが必要な場合は、「Region_lov」というカスタム・フォルダを作成して次の SQL を入力します。

```
SELECT 'NORTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'SOUTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'EAST' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'WEST' REGION FROM sys.dual
```

この SQL によって「Region」という 1 つのアイテムが作成され、このアイテムを値リストとして使用すればパフォーマンスを大幅に向上できます。

値リストの詳細は、「[値リスト](#)」を参照してください。

フォルダ間の依存性

単一フォルダのアイテムをコピーして同じ単一フォルダに貼り付けると、新しいアイテムは元のアイテムと完全に別個になり、新しい名前（例：region1）が生成されます。どちらかのアイテムを変更しても、他方のアイテムには反映されません。

単一フォルダのアイテムをコピーして複合フォルダに貼り付けると、複合フォルダの新規アイテムは元のアイテムに関連付けられたままになります。元のアイテムに変更の影響を与えることなく、新規アイテムの名前とそのプロパティを変更できます。ただし、新規アイテムの計算式は元のアイテムの名前を参照するため、新規アイテムは元のアイテムに依存します。元のアイテムの計算式を変更すると、新規アイテムによって返されるデータも変更されます。同じように、新規アイテムの「計算式」プロパティは元のアイテムを参照するため、元のアイテムを削除すると新規アイテムも削除されます。

アイテムの依存性リストは、「アイテム・プロパティ」ダイアログの「依存性」タブで表示できます。

フォルダに必須条件（Year=2000 など）を適用すると、返されるデータ・セットが変更されません。このフォルダによって作成された複合フォルダは、ソース・フォルダの制限付きデータ・セットを反映します。後でソース・フォルダから必須条件を削除すると、複合フォルダに変更が反映されます。

ビジネスエリアにおけるフォルダの共有

1 つの部門にとって重要なデータは、他の部門でも役に立つ場合があります。Discoverer Administrator では、1 つのビジネスエリアで作成したフォルダを他のビジネスエリアと共有できます。たとえば、販売と会計の両部門に作成するビジネスエリアの「Income」および「Costs」の列が含まれる「Sales Facts」フォルダを共有できます。

1 つのビジネスエリアのフォルダに変更を行うと、そのフォルダを使用するすべてのビジネスエリアのフォルダに変更が反映されます。

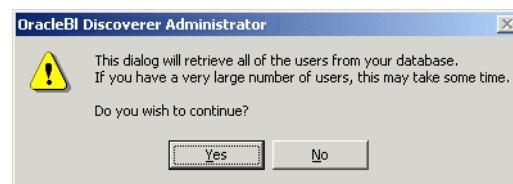
データベースからの単一フォルダの作成方法

既存のビジネスエリアにデータベースから単一フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**: 「**データ**」 タブで、単一フォルダを作成するビジネスエリアを選択します。
2. 「挿入」 → 「フォルダ」 → 「データベースから新規フォルダを作成」を選択すると、「**ロード・ウィザード: ステップ 1**」ダイアログが表示されます。
3. 「**オンライン・ディクショナリ**」をクリックして、単一フォルダの基礎となるテーブルおよびビューの位置を指定します。
4. 「次へ」をクリックすると、「**ロード・ウィザード: ステップ 2**」ダイアログが表示されます。

次の警告ダイアログが表示されます。

図 6-3 警告ダイアログ



5. 「はい」をクリックすると、「**ロード・ウィザード: ステップ 2**」ダイアログが表示されます。
6. 単一フォルダの基礎となるデータベース・テーブルおよびビューを所有するデータベースを指定します。
7. 単一フォルダの基礎となるデータベース・ユーザーのチェックボックスを選択します。
8. (オプション) 「**パターン・マッチングによる絞り込み**」フィールドにオブジェクト名を指定します。
9. 「次へ」をクリックして、「**ロード・ウィザード: ステップ 3**」ダイアログを表示します。
10. 「**選択可能**」リストのプラス記号 (+) を拡張して、ユーザーが所有するオブジェクトを表示します。
11. 単一フォルダの基礎となるオブジェクトを「**選択可能**」リストから「**選択済**」リストに移動します。
12. 次のいずれかの操作を行います。
 - 「次へ」をクリックして、「**ロード・ウィザード: ステップ 4**」ダイアログの単一フォルダのデフォルト設定を変更
 - 「終了」をクリックして、指定したテーブルに基づく単一フォルダをデフォルト設定で作成
13. 手順 12 で「次へ」をクリックした場合は、次のいずれかの操作を行います。
 - 「次へ」をクリックして、「**ロード・ウィザード: ステップ 5**」ダイアログの単一フォルダのデフォルト設定をさらに変更
 - 「終了」をクリックし、デフォルト設定およびそれまでに指定した設定を使用して、指定したテーブルに基づく単一フォルダを作成
14. 手順 13 で「次へ」をクリックした場合は、「終了」をクリックして指定したテーブルに基づく単一フォルダを指定した設定で作成します。

複合フォルダの作成方法

複合フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**: 「データ」タブで、複合フォルダを作成するビジネスエリアを選択します。
2. 「挿入」→「フォルダ」→「新規フォルダの作成」を選択すると、新しい複合フォルダが作成されます。
3. 「データ」タブの新規フォルダのアイコンをクリックして「編集」→「プロパティ」を選択すると、「フォルダ・プロパティ」ダイアログが表示されます。
4. (オプション) 「名前」フィールドに新規フォルダのわかりやすい名前を指定します。
5. (オプション) 「説明」フィールドに新規フォルダの説明を指定します。
6. 「フォルダ・プロパティ」ダイアログが開いている場合は閉じます。
7. **ワークエリア**: 「データ」タブで、開いている任意のビジネスエリア内の任意のフォルダから、アイテムを新規フォルダにドラッグします。

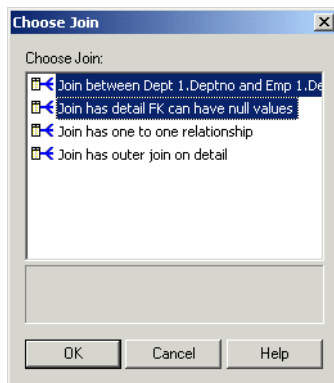
ヒント: 2つのワークエリアが開いている場合は、フォルダ間のアイテムをドラッグした方が便利です。2番目のワークエリアを開くには、「ウィンドウ」→「新しいウィンドウを開く」を選択します。

8. 必要に応じて、アイテムを新規フォルダにドラッグします。

複合フォルダにアイテムを追加する場合、追加するアイテムを含むフォルダが、すでに複合フォルダに存在する他のアイテムを1つ以上含むフォルダに結合されている必要があります。そうでない場合は、Discoverer Administratorによってエラー・ダイアログが表示されます。

複数の結合で結合されている2つのフォルダからアイテムを選択した場合、「結合の選択」ダイアログが表示されます。詳細は、「[複数の結合を使用した2つのフォルダの結合](#)」を参照してください。

図 6-4 「結合の選択」ダイアログ



注意: 既存のアイテムと競合する結合がある単一フォルダからアイテムを選択すると、エラーが表示され、アイテムの追加は許可されません。

9. (オプション) 結合を1つ以上選択し、「OK」をクリックします。

Discovererによって複合フォルダが作成されます。

注意

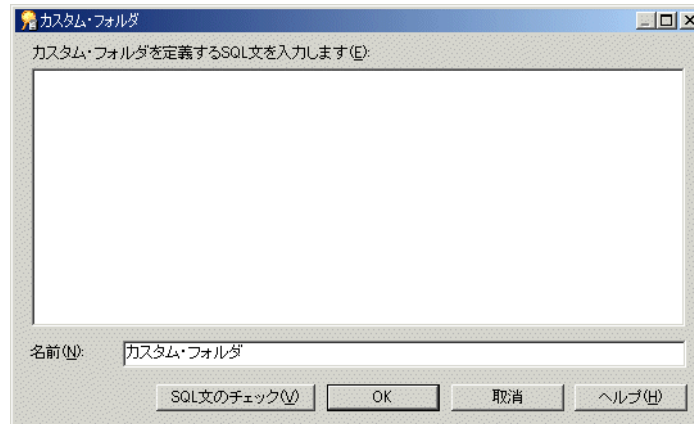
- 単一フォルダのアイテムを複合フォルダに含めると、複合フォルダの新規アイテムは元のアイテムから完全には独立しません。詳細は、「[フォルダ間の依存性](#)」を参照してください。

カスタム・フォルダの作成方法

カスタム・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「データ」タブで、ビジネスエリア（またはビジネスエリア内の任意のオブジェクト）を選択します。
2. 「挿入」→「フォルダ」→「カスタム」を選択すると、「カスタム・フォルダ」ダイアログが表示されます。

図 6-5 「カスタム・フォルダ」ダイアログ



3. カスタム・フォルダの基礎となる SQL 文を指定します。
2 文字のダッシュ (--) でコメント行を開始すると、SQL 文内に別個の行としてコメントを含めることができます。
4. 「名前」フィールドにカスタム・フォルダ名を指定します。
5. 「SQL 文のチェック」をクリックして、有効な SQL を入力したことを確認します。
6. 「OK」をクリックして SQL 文をチェックし、カスタム・フォルダを保存します。

注意

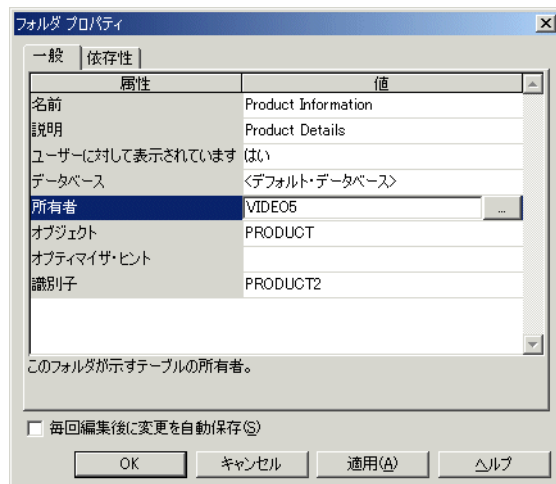
- 基礎となるデータベース・オブジェクトが作成されて使用可能になる前にカスタム・フォルダを作成できるようにするため、Discoverer Administrator では SQL が無効な場合でもカスタム・フォルダの保存が許可されます。Discoverer エンド・ユーザーは、SQL が有効になるまでデータベース・オブジェクトのクエリーを実行できないことに注意してください。
- 入力できる SQL 文の例は、「カスタム・フォルダの例」を参照してください。
- SQL が複数のデータベース・オブジェクトを参照する場合は、それらのオブジェクト間に結合を定義する必要があります。詳細は、第 10 章「結合の作成とメンテナンス」を参照してください。
- カスタム・フォルダの SQL では WITH 句を使用できません。

フォルダ・プロパティの編集方法

フォルダのプロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「データ」タブで、フォルダをクリックして選択します。
[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択すると、「フォルダ・プロパティ」ダイアログが表示されます。

図 6-6 「フォルダ・プロパティ」ダイアログ



複数のフォルダを選択した場合は、「フォルダ・プロパティ」ダイアログに選択したすべてのフォルダと同じ値を持つ各プロパティの値が表示されます。特定のプロパティの値が、選択したすべてのフォルダと同じでない場合、そのプロパティには値が表示されません。

3. 必要に応じて変更を行います。

ヒント: 変更を行うのと同時に変更内容を保存するには、「毎回編集後に変更を自動保存」チェックボックスを選択します。このオプションが選択されている場合、「OK」または「適用」をクリックする必要はありません。

4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

注意

- フォルダは複数のビジネスエリアに割り当てることができます。ただし、EUL には1つのフォルダ定義があり、その定義はフォルダの割当て先となるすべてのビジネスエリアで共有されます。フォルダ定義を変更すると、フォルダの割当て先となるすべてのビジネスエリアに変更が反映されます。詳細は、「[ビジネスエリアにおけるフォルダの共有](#)」を参照してください。
- Discoverer Administrator は識別子と呼ばれる一意の識別ラベルを使用してフォルダを識別するため、フォルダの名前をいつでも変更できます（詳細は、「[識別子](#)」を参照）。フォルダの名前を変更しても、ビジネスエリアの構造は変更されません。ただし、フォルダ名はEUL 内で一意にする必要があります。また、アイテム名も特定のフォルダ内で一意にする必要があることに注意してください。
- アイテムの名前を変更すると、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている2次要素（結合、階層、階層ノード、アイテム・クラスなど）の名前に影響を与える可能性があります（詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照）。
- オブジェクト自体の名前を変更せずに、単一フォルダの基礎となるデータベース・オブジェクトを所有するデータベース・ユーザーを変更できます。たとえば、開発環境から本番環境に推移する際にこの操作を行います。データベース・ユーザーを変更するには、「所有者」フィールドの隣にあるボタンをクリックして[ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ](#)を表示し、新規データベース・ユーザーを指定します。
- テーブルおよびビューを所有するデータベース・ユーザーを指定せずに、テーブルおよびビューを単一フォルダの基礎にできます。この操作の目的は、次のとおりです。
 - 異なる Discoverer Plus ユーザーを、各データベース・ユーザー（Oracle Applications ユーザーなど）内に存在する同名のデータベース・テーブルやビューにアクセス可能にする
 - テーブルまたはテーブルの所有者がまだ使用できない EUL を作成およびメンテナンスする

- Discoverer マネージャがアクセス権を持っていない EUL を作成およびメンテナンスする
- データの所有者が異なるデータベース間の EUL を移動する

データベース・ユーザー名を指定せずに、テーブルおよびビューを単一フォルダの基礎にするには、「所有者」フィールドを空白にします。「所有者」フィールドを空白にすると、テーブル名の前に所有者が含まれない SQL が Discoverer Administrator によって生成されます。

たとえば、「所有者」フィールドにテーブルおよびビューを所有するスキーマ名が含まれている場合、生成される SQL 文は次のようになります。

```
select <列> from <所有者>.<テーブル>
```

「所有者」フィールドが空白の場合、生成される SQL 文は次のようになります。

```
select <列> from <テーブル>
```

オブジェクトが現行スキーマにない場合は、警告が表示されます。

カスタム・フォルダの SQL 文の編集方法

カスタム・フォルダの SQL 文を編集する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「データ」タブで、カスタム・フォルダを選択します。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択すると、「フォルダ・プロパティ」ダイアログが表示されます。
3. 「カスタム SQL」フィールドをクリックすると、**カスタム・フォルダのプロパティ・ダイアログ**が表示されます。

ヒント：「カスタム・フォルダ」ダイアログのサイズを変更すると、より多くの SQL 文を表示できます。

4. 必要に応じて変更を行います。
5. 「SQL 文のチェック」をクリックして、有効な SQL を入力したことを確認します。
6. 「OK」をクリックして SQL 文をチェックし、カスタム・フォルダを保存します。

注意

- 基礎となるデータベース・オブジェクトが作成されて使用可能になる前にカスタム・フォルダを作成できるようにするため、Discoverer Administrator では SQL が無効な場合でもカスタム・フォルダの保存が許可されます。エンド・ユーザーは、SQL が有効になるまでオブジェクトのクエリーを実行できないことに注意してください。
- Discoverer Administrator は変更された SQL 文を分析して、行った変更を評価します。Discoverer Administrator が、変更によって既存アイテムが影響を受けるのか、あるいは新しいアイテムが作成されるのかを判断すると、影響される各アイテムを表示する「影響」ダイアログが表示されます。「影響」ダイアログを使用して、行った変更を確認するか、さらに変更を行うか、あるいは編集を中止するかを決定してください。

複合フォルダのリーチスルー

複合フォルダのリーチスルーとは、Discoverer Plus および Discoverer Desktop のユーザーが、各自のワークシートや選択した複合フォルダにあるワークシートにアイテムを追加できるようにするメカニズムです。ユーザーが複合フォルダからアイテムを選択する場合は、他の複数のフォルダにある他のアイテムが選択対象として使用可能になります。

複合フォルダとそのベース・フォルダとの間に結合を作成することによっても同様の結果が得られます。ただし、このアプローチは、次のような理由で好ましくありません。

- クエリー・パフォーマンスが低下する可能性があります。
- メンテナンス対象の結合が増えます。

Discoverer Administrator では、複合フォルダ内にリーチスルー可能な 1 つ以上のベース・フォルダを定義できます。Discoverer Plus または Discoverer Desktop のユーザーが複合フォルダからアイテムを選択すると、ワークシートでは、関連するリーチスルー可能なベース・フォルダが選択対象として使用可能になります。

複合フォルダのリーチスルーは、複合フォルダの作成後に Discoverer で Oracle Applications のフレックスフィールド（ユーザー定義アイテムなど）を使用して、ベース・フォルダに対してクエリを実行する場合に特に便利です。ベース・フォルダがリーチスルー可能として定義されている場合は、複合フォルダの定義を変更することなく、新しいフレックスフィールド・アイテムをベース・フォルダに追加できます。Oracle Applications ユーザーは、リーチスルー可能なベース・フォルダの新規フレックスフィールド・アイテムを即時に選択できます。

注意

- 複合フォルダには、1 つ以上のベース・フォルダのアイテムが挿入されます。複合フォルダでは、複数のフォルダのデータを組み合わせたビューを作成できます。これは、データベースのビューと類似しています。
- ベース・フォルダは、次のいずれかのフォルダ・タイプにできます。
 - 単一データベース・テーブルまたはビューの列に基づくアイテムを含む単一フォルダ
 - SQL 文に基づくカスタム・フォルダ
 - 1 つ以上のベース・フォルダのアイテムを含む複合フォルダ

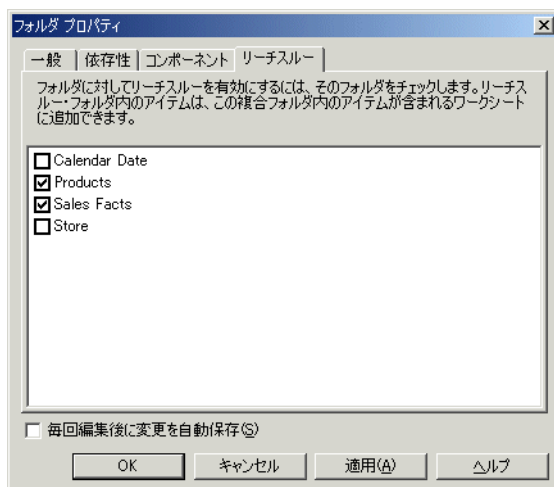
ベース・フォルダにリーチスルー可能な複合フォルダの定義方法

Discoverer ユーザーが複合フォルダにないアイテムをベース・フォルダから選択できるようにするには、ベース・フォルダにリーチスルーできる複合フォルダを定義します。

注意: ユーザーが複合フォルダにないアイテムをベース・フォルダから選択できるのは、最初に複合フォルダからアイテムを選択した場合のみです。

複合フォルダを定義して、リーチスルー可能なベース・フォルダを使用可能にする手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア:** 「データ」タブで複合フォルダを選択し、「編集」→「プロパティ」を選択して、「フォルダ・プロパティ」ダイアログを表示します。
2. 「フォルダ・プロパティ」ダイアログ: 「リーチスルー」タブを表示します。



3. 1 つ以上のチェックボックスを選択し、リーチスルー可能なベース・フォルダを選択します。
4. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「フォルダ・プロパティ」ダイアログを閉じます。

「フォルダ・プロパティ」ダイアログ: 「リーチスルー」タブで選択したフォルダは、選択された複合フォルダに対してリーチスルー可能になり、エンド・ユーザーが複合フォルダからアイテムを選択した際に、このフォルダを使用できるようになります。

複合フォルダのリーチスルーを使用する際に適用されるルールおよび制限

複合フォルダのリーチスルーには、次のような多くのルールおよび制限が適用されます。

- 「エンド・ユーザーに対するベース・フォルダ・アイテムの可用性を判断するルール」
- 「ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義している場合に Discoverer Administrator での結合に適用される制限」
- 「ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義している場合に Discoverer Administrator のサマリー・フォルダに適用される制限」
- 「リーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを使用してワークシートを作成する場合に Discoverer Plus および Discoverer Desktop に適用される制限」
- 「Discoverer エンド・ユーザーがリーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを含むワークブックを開閉する場合に適用される例外」
- 「EUL オブジェクトをインポートする場合に複合フォルダのリーチスルーに適用されるルール」

エンド・ユーザーに対するベース・フォルダ・アイテムの可用性を判断するルール

エンド・ユーザーが複合フォルダからアイテムを選択する際のベース・フォルダ・アイテムの可用性は次のように定義されています。

- ベース・フォルダが複合フォルダ内でリーチスルー可能として定義されている場合、そのベース・フォルダのすべてのアイテムが選択対象として使用可能になります。
- ベース・フォルダが複合フォルダ内でリーチスルー可能として定義されていない場合、そのベース・フォルダのアイテムは複合フォルダにないため、選択対象として使用可能になりません。

ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義している場合に Discoverer Administrator での結合に適用される制限

ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義している場合、Discoverer Administrator での結合には、次の制限が適用されます。

- Discoverer Administrator では、複合フォルダとベース・フォルダ間に結合がすでに存在している場合は、ベース・フォルダをリーチスルー可能にできません。これを実行しようとすると、エラーが表示されます。
- Discoverer Administrator では、複合フォルダのコンテキスト内でベース・フォルダがリーチスルー可能な場合は、ベース・フォルダと複合フォルダ間に結合を作成できません。これを実行しようとすると、エラーが表示されます。

ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義している場合に Discoverer Administrator のサマリー・フォルダに適用される制限

ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義し、サマリー・フォルダの作成に自動サマリー管理 (ASM) を使用する場合、リーチスルー可能として定義されているベース・フォルダのアイテムに基づくサマリー・フォルダの推奨は生成されません。ASM の使用方法の詳細は、「サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法」を参照してください。

リーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを使用してワークシートを作成する場合に Discoverer Plus および Discoverer Desktop に適用される制限

リーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを使用してワークシートを作成する場合、Discoverer Plus および Discoverer Desktop には、次の制限が適用されます。

- 複合フォルダがリーチスルー可能として別の複合フォルダのコンテキストに定義されている場合は、1 レベルのリーチスルーのみを使用できます。

たとえば、ある複合フォルダ (Complex2 など) が別の複合フォルダ (Complex1 など) のコンテキストでリーチスルー可能として定義されているとします。この場合、別の複合フォルダ (Complex3 など) を Complex2 のコンテキストでリーチスルー可能と定義することは許可されません。ユーザーは、Complex1 と Complex2 からのみアイテムを選択できます。

- Discoverer ユーザーがリーチスルー可能なベース・フォルダからアイテムを選択する場合、ベース・フォルダと他のフォルダ間にすでに存在している結合は含まれません。

つまり、Discoverer ユーザーがリーチスルー可能なベース・フォルダを使用できる場合でも、通常、そのベース・フォルダに関連付けられている結合は使用できません。したがって、Discoverer ユーザーは、リーチスルー可能なベース・フォルダに結合されているフォルダ内のアイテムは使用できません。

Discoverer エンド・ユーザーがリーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを含むワークブックを開閉する場合に適用される例外

Discoverer ユーザーが、リーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを含むワークブックを開いたり、保存する場合は、明示的に定義された結合が要求されずに、これらのアイテムが表示されます。リーチスルー・メカニズムにより、通常どおりにワークブックが開きます。ただし、次の例外があります。

- リーチスルー可能なベース・フォルダのすべてのアイテムが複合フォルダから削除されていて、それらのアイテムがワークシートにある場合

この場合は、結合が存在していないかのようにワークシート・アイテムが処理されます。ワークシートを開く際に適切なエラー・メッセージが表示されます。

- ベース・フォルダのリーチスルー可能プロパティが取り消された場合

この場合は、ベース・フォルダ・アイテムを使用するために必要な結合が存在しません。ワークシートを開く際に適切なエラー・メッセージが表示されます。

- ベース・フォルダをリーチスルー可能として定義するために結合を削除した場合。

この場合は、結合を使用する既存のワークブックが開きません。ワークブックを開く際に適切なエラー・メッセージが表示されます。結合を削除する場合は、その前に必ず影響を確認してください。

- エンド・ユーザーが、9.0.4.1 より前のリリースの Discoverer を使用して、リーチスルー可能なベース・フォルダのアイテムを含むワークブックを開こうとした場合

この場合は、ワークブックが開きません。

EUL オブジェクトをインポートする場合に複合フォルダのリーチスルーに適用されるルール

EUL オブジェクトをインポートする場合は、複合フォルダのリーチスルーに次のルールが適用されます。

- 複合フォルダとベース・フォルダ間にすでに結合が存在している EUL に、リーチスルー可能なベース・フォルダをインポートすると、ベース・フォルダがインポートされ、リーチスルー不可として定義されます。Discoverer により、警告がインポート・ログに書き込まれます。

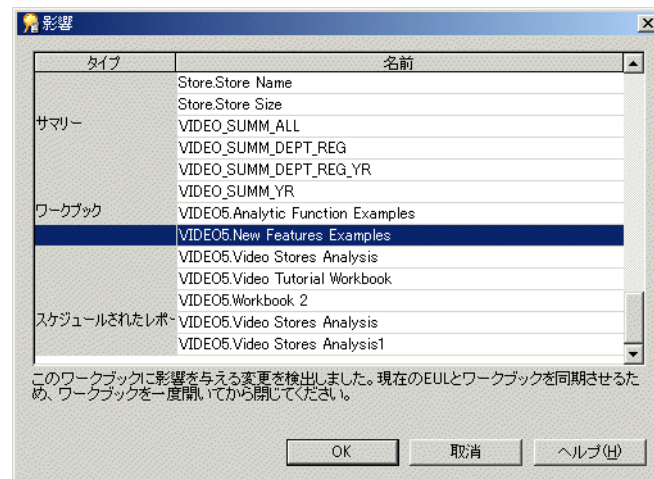
- ベース・フォルダがリーチスルー可能として定義されている EUL に、ベース・フォルダに結合されている複合フォルダをインポートすると、複合フォルダがインポートされて結合されます。ただし、ベース・フォルダは、リーチスルー不可として再定義されます。

ビジネスエリアからのフォルダの削除方法

ビジネスエリアからフォルダを削除する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア：「データ」タブ**で、削除するフォルダを選択します。
[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。
2. 「編集」→「削除」を選択して、「**フォルダ削除の確認**」ダイアログを表示します。
「フォルダ削除の確認」ダイアログでは、フォルダの削除方法を選択し、フォルダの削除による影響を調べることができます。
3. 次のいずれかのラジオ・ボタンを選択して、フォルダの削除方法を指定します。
 - 「**ビジネスエリアから削除**」
 現行のビジネスエリアから、選択したフォルダを削除します。このオプションでは、フォルダが EUL から削除されないことに注意してください。フォルダが他のビジネスエリアと共有されていない場合は、そのフォルダは親なしのフォルダになります。
 - 「**End User Layer から削除**」
 選択したフォルダが、そのフォルダを含むすべてのビジネスエリアから削除されます。このオプションでも、フォルダ定義が EUL から完全に削除されることに注意してください。
4. (オプション) このフォルダの削除によって影響を受ける可能性があるオブジェクトを確認する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響」をクリックして、「**影響**」ダイアログを表示します。

図 6-7 「影響」ダイアログ



「影響」ダイアログでは、フォルダの削除による影響を受ける可能性のある他の EUL オブジェクトを確認できます。

注意：「影響」ダイアログには、ファイル・システム (.dis ファイル内) に保存されたワークブックに対する影響は表示されません。

- b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが、リストの一番下に表示されます。

- c. フォルダの削除による影響を確認し終えたら、「閉じる」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
5. 選択したフォルダを削除する場合は、「はい」をクリックします。
選択したフォルダが指定された方法で削除されます。

注意

- フォルダを削除する前に、フォルダの割当て先となっているビジネスエリアを識別すると役に立ちます。ビジネスエリアを識別するには、「ワークエリア」の「データ」タブで削除するフォルダをクリックして、「ツール」→「フォルダの管理」を選択して「[フォルダの管理](#)」ダイアログ:「[ビジネスエリア](#)」タブを表示します。「フォルダの管理」ダイアログには、選択したフォルダを保持する他のビジネスエリアのドロップダウン・リストが含まれています。
- 親なしのフォルダを EUL から削除するには、「ツール」→「フォルダの管理」を選択して、「[フォルダの管理](#)」ダイアログ:「[ビジネスエリア](#)」タブを表示します。ここで親なしのフォルダを確認および削除できます。詳細は、「[親なしのフォルダの EUL からの削除方法](#)」を参照してください。

ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法

特定のビジネスエリアにフォルダを割り当てる手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「フォルダの管理」を選択すると、「[フォルダの管理](#)」ダイアログ:「[ビジネスエリア](#)」タブが表示されます。
[「フォルダの管理」ダイアログ:「ビジネスエリア」タブ](#)を使用して、任意の数のフォルダ（親なしのフォルダを含む）を特定のビジネスエリアに割り当てます。
2. 「[ビジネスエリア](#)」ドロップダウン・リストから、1つ以上のフォルダを割り当てるビジネスエリアを選択します。
デフォルトでは、現在「ワークエリア」で選択されているビジネスエリアが「[ビジネスエリア](#)」ドロップダウン・リストに表示されます。
3. 必要なフォルダを「[選択可能なフォルダ](#)」リストから「[選択されたフォルダ](#)」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。
4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。
ビジネスエリアには、「[選択されたフォルダ](#)」リストで指定したフォルダが含まれていません。

複数ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法

複数のビジネスエリアにフォルダを割り当てる手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「フォルダの管理」を選択すると、「[フォルダの管理](#)」ダイアログ:「[フォルダ](#)」タブが表示されます。
[「フォルダの管理」ダイアログ:「フォルダ」タブ](#)を使用して、複数のビジネスエリアに特定のフォルダ（親なしのフォルダを含む）を割り当てます。
2. 「[フォルダ](#)」ドロップダウン・リストから、1つ以上のビジネスエリアに割り当てるフォルダを選択します。
3. 必要なビジネスエリアを「[選択可能なビジネスエリア](#)」リストから「[選択されたビジネスエリア](#)」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。

4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

「選択されたビジネスエリア」リストで指定したビジネスエリアにフォルダが割り当てられます。

EUL 内の親なしのフォルダの表示方法

EUL 内の親なしのフォルダを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「フォルダの管理」を選択すると、「フォルダの管理」ダイアログ:「親なしのフォルダ」タブが表示されます。

Discoverer によって、現行 EUL 内に存在するすべての親なしのフォルダが表示されます。

親なしのフォルダの EUL からの削除方法

親なしのフォルダを EUL から削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「フォルダの管理」を選択すると、「フォルダの管理」ダイアログ:「ビジネスエリア」タブが表示されます。

「親なしのフォルダ」タブを使用して、親なしのフォルダを EUL から削除します。

2. 「親なしのフォルダ」フィールドから、削除するフォルダを選択します。

3. 「削除」をクリックして、強調表示されているフォルダを EUL から削除します。

[Ctrl] キーを押しながら別の親なしのフォルダをクリックすると、複数の親なしのフォルダを選択できます。

4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

選択したフォルダが現行 EUL から削除されます。

ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法

選択したビジネスエリアで、フォルダをアルファベット順にソートできます。

ビジネスエリアでフォルダをアルファベット順にソートする手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア:「データ」タブでビジネスエリアを選択します。

2. 「編集」→「フォルダのソート」を選択します。

注意: Discoverer Administrator には「アルファベット順」ダイアログが表示され、アルファベット順にソートされるフォルダ数と、既存の順序が失われることが表示されます。

3. 「はい」をクリックして続行します。

注意

ビジネスエリアをロードするときに、バルク・ロード中もフォルダをソートできます。フォルダをソートするには、次の2通りの方法があります。

- ロード・ウィザードの場合は、「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」を参照してください。
- コマンドライン・インタフェースの場合は、「/load」を参照してください。

フォルダにおけるアイテムのソート方法

選択したフォルダで、アイテムをアルファベット順にソートできます。

フォルダでアイテムをアルファベット順にソートする手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**: 「データ」タブでビジネスエリアからフォルダを選択します。
2. 「編集」 → 「アイテムのソート」を選択します。

注意: Discoverer Administrator には「アルファベット順」ダイアログが表示され、アルファベット順にソートされるアイテム数と、既存の順序が失われることが表示されます。

3. 「はい」をクリックして続行します。

注意

ビジネスエリアをロードするときに、バルク・ロード中にもアイテムをソートできます。アイテムをソートするには、次の2通りの方法があります。

- ロード・ウィザードの場合は、「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」を参照してください。
- コマンドライン・インタフェースの場合は、「/load」を参照してください。

ビジネスエリアにおけるフォルダの順序変更方法

Discoverer Administrator に表示されるフォルダの順序は、Discoverer エンド・ユーザーに対して表示される順序と同じです。デフォルトでは、ビジネスエリア内のフォルダはアルファベット順に表示されます。ただし、デフォルト順序を次の目的で変更できます。

- 論理的に接続されたフォルダのグループ化
- 最も一般的に使用されているフォルダのリスト最上部への移動

ビジネスエリアのフォルダ順序を変更する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**: 「データ」タブを表示します。
2. フォルダ・リスト内の表示する場所へフォルダをドラッグ・アンド・ドロップします。

ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法

Discoverer Administrator フォルダで問題が発生する場合があります。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーがアクセスできないフォルダが Discoverer Administrator に表示されることがあります。「フォルダの妥当性チェック」機能を使用して、問題を診断してください。

ビジネスエリアにおけるフォルダ間のリンクおよびフォルダが参照するデータベース・オブジェクトを検証する手順は、次のとおりです。

1. 「表示」 → 「フォルダの妥当性チェック」を選択します。

「フォルダの妥当性チェック」機能では、関連するテーブルがデータベースに存在すること、および EUL 所有者が関連するテーブルへの SELECT アクセス権を持っていることがデータベース・パーサーを使用してチェックされます。

エラーがある場合は、関連するフォルダの横にメッセージが表示されます。

情報に対するアクセス制御

この章では、Discoverer Administrator を使用して情報へのアクセスを制御する方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Discoverer およびセキュリティ」
- 「Discoverer アクセス権限」
- 「Discoverer と Oracle Advanced Security Option (ASO)」
- 「Discoverer 作業権限」
- 「ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法」
- 「ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法」
- 「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」
- 「特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法」
- 「クエリー取出し制限の設定方法」
- 「スケジュール・ワークブック制限の設定方法」
- 「データベース・ロールを使用した Discoverer ワークブックの共有方法」
- 「透過アプリケーション・フェイルオーバー」

Discoverer およびセキュリティ

Discoverer マネージャには、ユーザーがアクセスできる情報と、その情報を使用して実行できる操作を制御する責任があります。Discoverer アクセス権限および作業権限は、次のように使用します。

- Discoverer アクセス権限を使用した、ビジネスエリアのデータを参照および使用できるユーザーの制御
- Discoverer 作業権限を使用した、各ユーザーに実行が許可される作業の制御

Discoverer アクセス権限および作業権限は、データベース・ロールおよびデータベース・ユーザーに付与できます。アクセス権限または作業権限をロールに付与すると、そのロールのユーザーすべてがそのロールのアクセス権限と作業権限を持ちます。Oracle Applications モードで Discoverer Administrator を実行している場合は、ロールのかわりに Oracle Applications 職責にアクセス権限または作業権限を付与します。Oracle Applications モードの詳細は、「[Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能](#)」を参照してください。

Discoverer Administrator で付与するアクセス権限および作業権限は Discoverer のビジネスエリアのみに適用され、基礎となるデータベース・テーブルには適用されません。データベース・テーブルへのデータ・アクセス権は、データベース管理者が制御します。

Discoverer Administrator で設定するアクセス権限および作業権限に関係なく、Discoverer エンド・ユーザーに次のデータベース権限が（直接またはデータベース・ロール経由で）付与されている場合は、フォルダのみが表示されます。

- フォルダで使用される基礎となるテーブルのすべてに対する SELECT 権限
- フォルダで使用される任意の PL/SQL ファンクションに対する EXECUTE 権限

ユーザーにビジネスエリアの管理権限を付与すると、ユーザーはそのビジネスエリアで管理作業（フォルダ、ユーザー定義アイテム、条件、階層、サマリーの作成など）を実行できます。特定のビジネスエリアで管理権限を持つユーザーは、そのビジネスエリアの管理権限を他のユーザーに付与することもできます。複数のユーザーにビジネスエリア管理を委譲できますが、各ビジネスエリアの制御メンテナンスは単独の管理者が行う方が容易です。

Discoverer アクセス権限

Discoverer アクセス権限を使用して、ビジネスエリアのデータを参照および使用できるユーザーを制御できます。

ビジネスエリアへのアクセス制御方法には2通りあります。

- 特定のユーザーまたはロールがアクセスできるビジネスエリアの指定による制御（詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法](#)」を参照）
- 特定のビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロールの指定による制御（詳細は、「[ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)」を参照）

ビジネスエリアで Discoverer エンド・ユーザーにフォルダが表示される前に、フォルダが参照するテーブルに対するデータベース・アクセスをそのユーザーが持っていることが Discoverer によって確認されます。ユーザーが、フォルダが参照するテーブルに対するアクセス権を持っていない場合、Discoverer ではフォルダが表示されません。ObjectsAlwaysAccessible レジストリ設定値を変更すると（アクセス権限がほとんど変更されない場合にパフォーマンスを向上させる場合など）、この動作を上書きできます（詳細は、[第21章「Discoverer のレジストリ設定」](#)を参照）。

Discoverer と Oracle Advanced Security Option (ASO)

Discoverer は、Oracle データベース（Oracle Enterprise Edition データベースなど）によって提供される Oracle Advanced Security Option (ASO) の暗号化技術を使用して認証されます。認証には、4つの暗号化タイプ（RC4、DES、Triple-DES および AES）があります。Oracle ASO 暗号化によるパフォーマンスへのオーバーヘッドはほとんどありません。ただし、パフォーマンスは、複数の要因（オペレーティング・システム、暗号化アルゴリズムなど）によって変わります。Oracle ASO 暗号化の詳細は、『Oracle セキュリティ概要』を参照してください。

Discoverer 作業権限

Discoverer 作業権限を使用して、各ユーザーに実行が許可される作業を制御できます。

作業権限を使用して、Discoverer エンド・ユーザーが次の操作を実行できるかどうかを指定します。

- 新規ワークシートの作成または既存ワークシートの編集（このオプションがない場合、ユーザーが実行可能なワークシートは事前定義済みのワークシートのみです）
- アイテム・ドリル、関連アイテムへのドリル、サマリーから詳細アイテムへのドリルの使用
- ドリルアウトによる他のアプリケーションの起動
- 他のユーザーに対するワークブックへのアクセス権の付与
- スケジュール・ワークブックの作成および編集
- データベースへのワークブックの保存
- クエリー統計の収集

作業権限を使用して、Discoverer マネージャが次の操作を実行できるかどうかを指定します。

- 既存ビジネスエリアのフォーマット情報のみの編集
- 新規ビジネスエリアの作成および既存ビジネスエリアの編集
- サマリー・テーブルの作成
- EUL 権限の付与および取消し
- エンド・ユーザーのスケジュール・ワークブックのメンテナンス

ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法

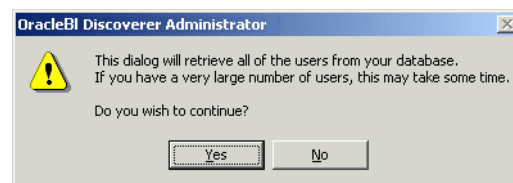
注意: Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer Administrator ではロールではなく職責が表示されます。

特定のビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロールを指定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「セキュリティ」を選択し、「セキュリティ」ダイアログ:「ビジネスエリア->ユーザー」タブを選択します。

次の警告ダイアログが表示されます。

図 7-1 警告ダイアログ



2. 「はい」をクリックすると、「セキュリティ」ダイアログ:「ビジネスエリア->ユーザー」タブが表示されます。

図 7-2 「セキュリティ」ダイアログ：「ビジネスエリア -> ユーザー」タブ



注意：「選択可能なユーザー / ロール」リストに表示される最大行数を変更するには、Discoverer のレジストリ設定 MaxNumListRows の値を編集します（詳細は、[第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」](#)を参照）。

3. 「ビジネスエリア」ドロップダウン・リストから、アクセス権を付与するビジネスエリアを選択します。
4. 「ユーザー」チェックボックスまたは「ロール」チェックボックス（あるいはその両方）を、必要に応じて選択し、「選択可能なユーザー / ロール」リストの内容を指定します。
5. 選択したビジネスエリアへのアクセス権を付与するユーザーまたはロールを、「選択可能なユーザー / ロール」リストから「選択済ユーザー / ロール」リストに移動します。

[Ctrl] キーを押しながら別のユーザーまたはロールをクリックすると、複数のユーザーまたはロールを選択できます。

6. 「選択済ユーザー / ロール」リストに追加する各新規ユーザーまたは新規ロールについて、次の指示に従ってビジネスエリアへの管理アクセス権を持つかどうかを指定します。
 - a. 「選択済ユーザー / ロール」リストのユーザーまたはロールをクリックします。
 - b. 必要に応じて、「管理を許可」チェックボックスを選択または選択解除します。

ユーザーに対する「管理を許可」の設定によって、ユーザーが実行できる管理作業が制御されます。詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照してください。

7. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「セキュリティ」ダイアログを閉じます。

注意

- ユーザーまたはロールからビジネスエリアへのアクセス権を削除するには、ユーザーまたはロールを「選択済ユーザー / ロール」リストから「選択可能なユーザー / ロール」リストに移動します。
- 「選択可能なユーザー / ロール」リストには、PUBLIC というロールが含まれています。権限を定義していないユーザーまたはロールのデフォルト・アクセス権限を表示または編集するには、このロールを選択します。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「セキュリティ」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Applications モードの詳細は、「[Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能](#)」を参照してください。

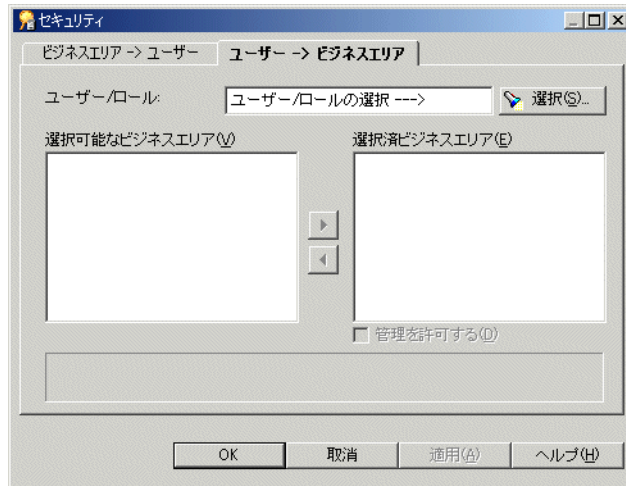
ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法

注意: Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer Administrator ではロールではなく職責が表示されます。

ユーザーまたはロールがアクセスできるビジネスエリアを指定する手順は、次のとおりです。

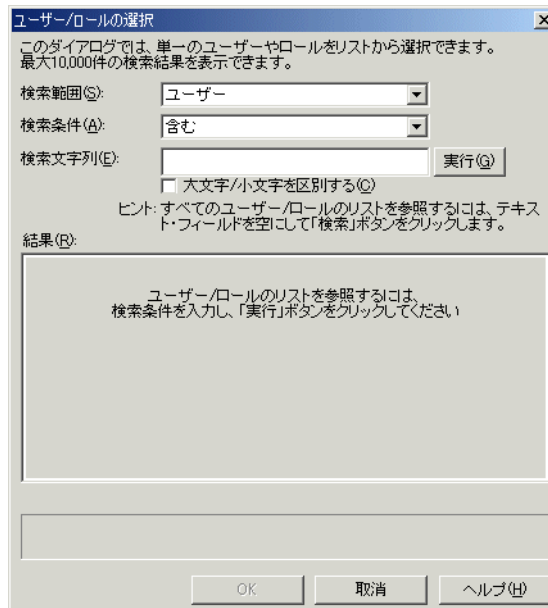
1. 「ツール」 → 「セキュリティ」を選択すると、「セキュリティ」ダイアログ: 「ユーザー → ビジネスエリア」タブが表示されます。

図 7-3 「セキュリティ」ダイアログ: 「ユーザー → ビジネスエリア」タブ



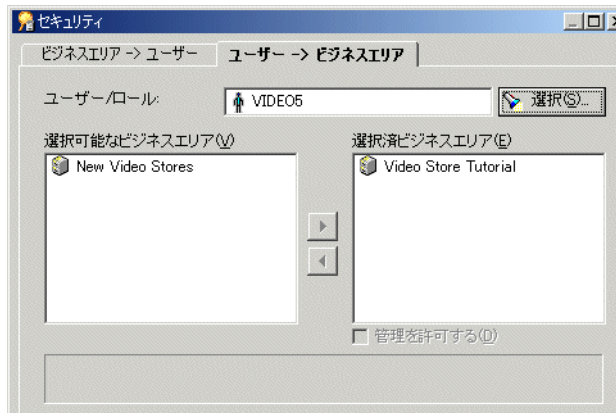
2. 「選択」をクリックすると、「ユーザー / ロールの選択」ダイアログが表示されます。このダイアログで、アクセス権を付与するデータベース・ユーザーまたはロールを検索して選択できます。

図 7-4 「ユーザー / ロールの選択」ダイアログ



3. 「**検索文字列**」フィールドに検索基準を入力し、「実行」をクリックします。
「**結果**」リストに検索結果が表示されます。
4. 「**結果**」リストからユーザーまたはロールを選択します。
5. 「OK」をクリックすると、「**セキュリティ**」ダイアログ:「ユーザー->ビジネスエリア」タブに、選択したユーザーまたはロールのビジネスエリアが表示されます。

図 7-5 「セキュリティ」ダイアログ:「ユーザー->ビジネスエリア」タブ



6. 選択したユーザーまたはロールがアクセス権を持つビジネスエリアを、「**選択可能なビジネスエリア**」リストから「**選択済ビジネスエリア**」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。
7. 「**選択済ビジネスエリア**」リストに追加する各新規ビジネスエリアについて、次の指示に従って選択したユーザーまたはロールがビジネスエリアへの管理アクセス権を持つかどうかを指定します。
 - a. 「**選択済ビジネスエリア**」リストのビジネスエリアをクリックします。
 - b. 必要に応じて、「**管理を許可する**」チェックボックスを選択または選択解除します。
ユーザーに対する「**管理を許可する**」の設定によって、ユーザーが実行できる管理作業が制御されます。詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照してください。
8. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「セキュリティ」ダイアログを閉じます。

注意

- ユーザーまたはロールからビジネスエリアへのアクセス権を削除するには、ビジネスエリアを「**選択済ビジネスエリア**」リストから「**選択可能なビジネスエリア**」リストに移動します。
- 「**選択可能なユーザー / ロール**」のリストには、PUBLIC というロールが含まれています。権限を明示的に定義していないユーザーまたはロールのデフォルト・アクセス権限を表示または編集するには、このロールを選択します。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「セキュリティ」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Applications モードの詳細は、「[Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能](#)」を参照してください。

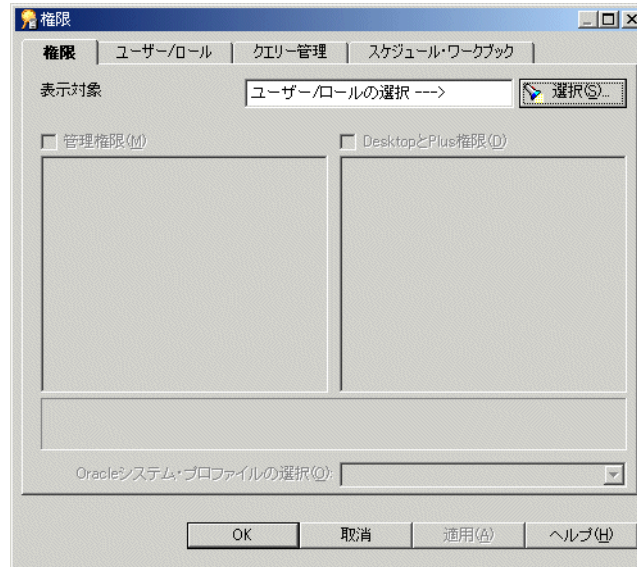
ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法

注意: Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer Administrator ではロールではなく職責が表示されます。

ユーザーまたはロールが実行できる作業を指定する手順は、次のとおりです。

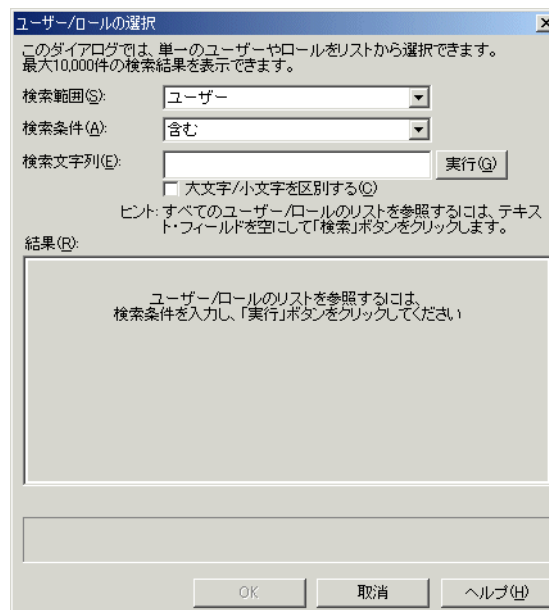
1. 「ツール」 → 「権限」を選択すると、「**権限** ダイアログ: 「権限」タブが表示されます。

図 7-6 「権限」ダイアログ: 「権限」タブ



2. 「選択」をクリックすると、「**ユーザー / ロールの選択**」ダイアログが表示されます。このダイアログで、作業権限を変更するユーザーまたはロールを検索して選択できます。

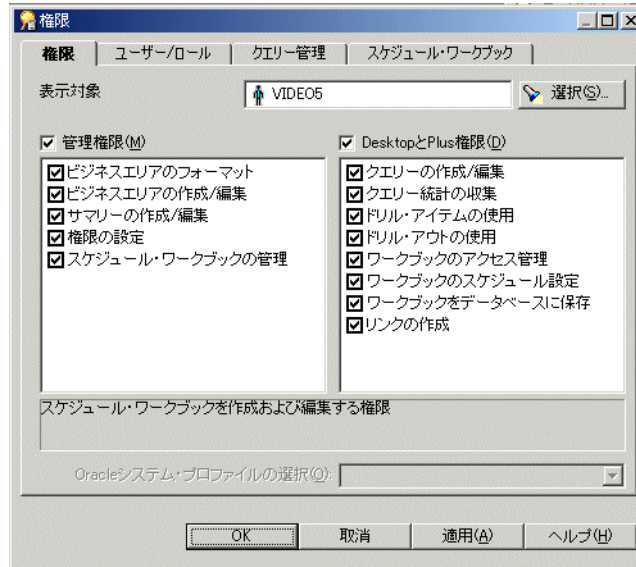
図 7-7 「ユーザー / ロールの選択」ダイアログ



3. 「**検索文字列**」フィールドに検索基準を入力し、「**実行**」をクリックします。
「**結果**」リストに検索結果が表示されます。

4. 「結果」 リストからユーザーまたはロールを選択します。
5. 「OK」 をクリックすると、選択したユーザーまたはロールの「権限」ダイアログ：「権限」タブが表示されます。

図 7-8 「権限」ダイアログ：「権限」タブ



6. 「管理権限」 リストまたは「Desktop と Plus 権限」 リストの適切なチェックボックスを選択または選択解除して、ユーザーまたはロールに対する特定の作業権限を付与または取り消します。

注意：権限を付与するには、「管理権限」チェックボックスまたは「Desktop と Plus 権限」チェックボックスを使用して、最初に親権限を付与する必要があります。Discoverer Desktop または Discoverer Plus へのユーザーのアクセス権が職責経由の場合に「Desktop と Plus」チェックボックスを選択解除しても、権限のリストで選択されているチェックボックスはすべてアクティブになります（ただし表示はグレー表示です）。ユーザーの全体の権限は、職責とユーザー権限の組合せによって決定されます。

ヒント：「管理権限」リストまたは「Desktop と Plus 権限」リストの権限をクリックすると、その権限の簡単な説明がリストの下に表示されます。

7. 「Oracle システム・プロファイルの選択」 ドロップダウン・リストから、ユーザーまたはロールに適用する Oracle システム・プロファイルを選択します。

Oracle システム・プロファイルは、データベース管理者がデータベース・リソースへのアクセスを制御するために作成します。

注意：Discoverer Administrator 内で Oracle システム・プロファイルを割り当てるには、次のデータベース・ビューに対するアクセス権が必要です。

- DBA_PROFILES
- DBA_USERS

8. 「OK」 をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

- 変更内容は、ユーザーが Discoverer に再接続したときに有効になります。
- 「選択可能なユーザー / ロール」のリストには、PUBLIC というロールが含まれています。権限を明示的に定義していないユーザーまたはロールのデフォルト作業権限を表示または編集するには、このロールを選択します。

- ユーザーまたはロールに管理権限を付与するには、そのユーザーにビジネスエリアへの管理アクセス権も付与する必要があります。詳細は、「特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法」を参照してください。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「権限」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Oracle Applications モードの詳細は、第 17 章「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」を参照してください。

特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法

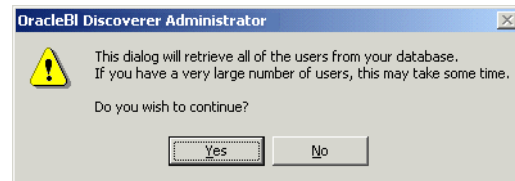
注意: Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer Administrator ではロールではなく職責が表示されます。

特定の作業を実行できるユーザーまたはロールを指定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ:「ユーザー / ロール」タブが表示されます。

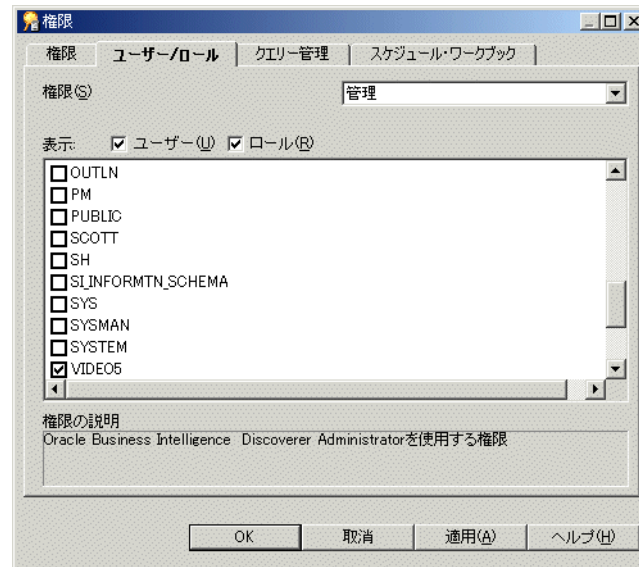
最初に、次の警告ダイアログが表示されます。

図 7-9 警告ダイアログ



2. 「はい」をクリックすると、「権限」ダイアログ:「ユーザー / ロール」タブが表示されます。

図 7-10 「権限」ダイアログ:「ユーザー / ロール」タブ



注意: ユーザーとロールのリストに表示される最大行数を変更するには、Discoverer のレジストリ設定 MaxNumListRows の値を編集します（詳細は、第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」を参照）。

3. ドロップダウン・リストから、ユーザーまたはロールに対して付与する（あるいは取り消す）作業権限を選択します。
ドロップダウン・リストから権限を選択すると、その権限の簡単な説明がダイアログの下部に表示されます。
4. 「ユーザー」チェックボックスまたは「ロール」チェックボックス（あるいはその両方）を必要に応じて選択し、ユーザーとロールのリストの内容を指定します。
ユーザーとロールのリストの内容は、アルファベット順にソートされます。ユーザーとロールが両方含まれる場合は、ユーザーが最初に表示されます。
5. ユーザーとロールのリストの適切なチェックボックスを選択または選択解除して、現在選択されている作業の権限を付与または取り消します。
6. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

- 変更内容は、ユーザーが Discoverer に再接続したときに有効になります。
- ユーザーまたはロールに管理権限を付与する（または取り消す）には、そのユーザーにビジネスエリアへの管理アクセス権も付与する（または取り消す）必要があります。詳細は、「[ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)」を参照してください。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「権限」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Oracle Applications モードの詳細は、[第 17 章「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法](#)」を参照してください。

クエリー取出し制限の設定方法

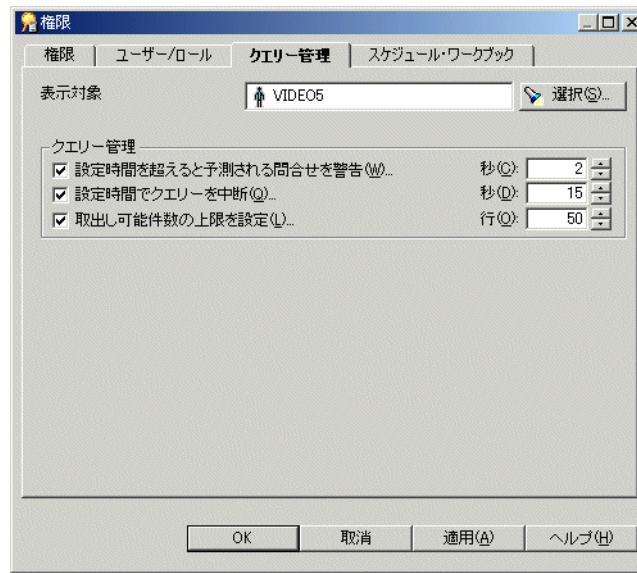
ユーザーおよびロールにクエリー制限を設定すると、全体的なシステム・パフォーマンスをメンテナンスできます。

注意: Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer Administrator ではロールではなく職責が表示されます。

ユーザーまたはロールにクエリー取出し制限を設定する手順は、次のとおりです。

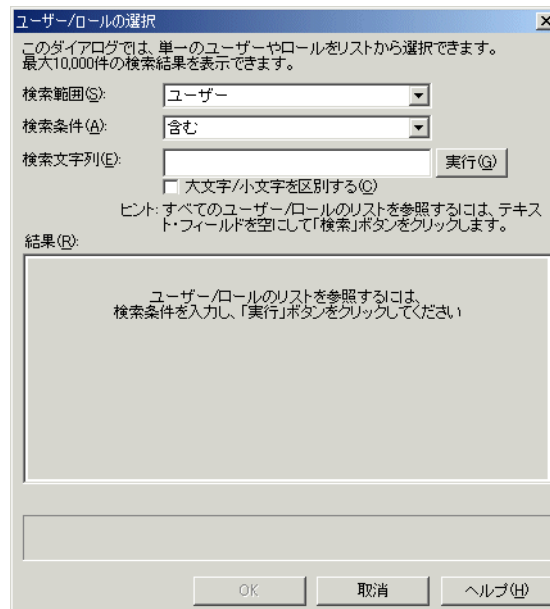
1. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ:「クエリー管理」タブが表示されます。

図 7-11 「権限」 ダイアログ: 「クエリー管理」 タブ



2. 「選択」をクリックすると、「ユーザー/ロールの選択」ダイアログが表示されます。このダイアログで、クエリー制限を指定するユーザーまたはロールを検索して選択できます。

図 7-12 「ユーザー/ロールの選択」ダイアログ



3. 「検索文字列」フィールドに検索基準を入力し、「実行」をクリックします。
「結果」リストに検索結果が表示されます。
4. 「結果」リストからユーザーまたはロールを選択します。
5. 「OK」をクリックすると、選択したユーザーまたはロールの「権限」ダイアログ: 「クエリー管理」タブが表示されます。
6. 必要に応じて、次の「クエリー管理」オプションを指定します。

オプション	用途
設定時間を超えると予測される問合せを警告	クエリーの実行に予測される時間が、指定した上限を超える場合に警告を発行します。
設定時間でクエリーを中断	指定した上限を超えたクエリーを停止します。
取り出し可能件数の上限を設定	クエリーで取り出せる行数を指定した上限に制限します。

7. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

- Discoverer によって、クエリーの実行時間および取り出される行数を予測する方法の詳細は、第 20 章「クエリーのパフォーマンスの予測」を参照してください。
- Discoverer によって、設定された上限を超えてクエリーが実行されると予測された場合、ユーザーが「権限」ダイアログ：「権限」タブのオプションを使用して、スケジュール・ワークブックとしてクエリーを実行するように指定できます。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「権限」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Oracle Applications モードの詳細は、第 17 章「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」を参照してください。

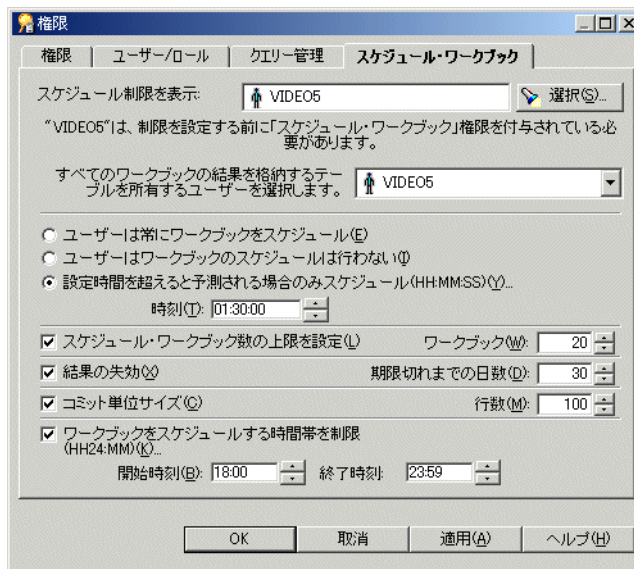
スケジュール・ワークブック制限の設定方法

スケジュール・ワークブックの制限を設定すると、Discoverer エンド・ユーザーによるスケジュール・ワークブックの使用方法を制御できます。

ユーザーまたはロールにスケジュール・ワークブックの制限を設定する手順は、次のとおりです。

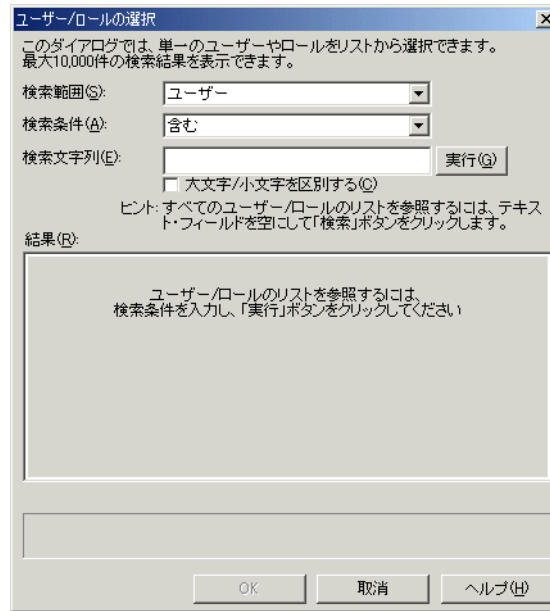
1. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ：「スケジュール・ワークブック」タブが表示されます。

図 7-13 「権限」ダイアログ：「スケジュール・ワークブック」タブ



2. 「選択」をクリックすると、「ユーザー / ロールの選択」ダイアログが表示されます。このダイアログで、スケジュール・ワークブック制限を指定するユーザーまたはロールを検索して選択できます。

図 7-14 「ユーザー / ロールの選択」ダイアログ



3. 「検索文字列」フィールドに検索基準を入力し、「実行」をクリックします。
「結果」リストに検索結果が表示されます。
4. 「結果」リストからユーザーまたはロールを選択します。
5. 「OK」をクリックすると、選択したユーザーまたはロールの「権限」ダイアログ: 「スケジュール・ワークブック」タブが表示されます。
6. データベースに作成される結果テーブル（スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブル）を所有するユーザーを選択します。

スケジュール・ワークブックの結果は、データベース・テーブルに格納されます。これらのテーブルは、スケジュール・ワークブックを実行したユーザーとは異なるユーザーに所属させることができます。

注意: Oracle Applications ユーザーは、Oracle Applications APPS ユーザーを、ワークブックの結果を保存するためのスケジュール・ワークブック結果スキーマとして使用する必要があります。
7. ユーザーがワークブックのスケジュールを行う時期を指定します。
8. 必要に応じて、スケジュール・ワークブックのオプションを設定します。
9. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

- 単一データベース・ユーザーが、すべてのユーザーのスケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルを所有するように指定できます（これには、スケジュール・ワークブックを実行する追加権限が個々のユーザーに必要な、という利点があります）。あるいは、スケジュール・ワークブック結果スキーマが、各ユーザーのスケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルを所有するように指定できます（割当て領域が共有されないため、単一データベース・ユーザーがテーブルを所有する場合よりも領域が消費される可能性が低くなる、という利点があります）。詳細は、「スケジュール・ワークブックの結果の格納場所」を参照してください。

データベース・ロールを使用した Discoverer ワークブックの共有方法

データベース・ロールを使用して、Discoverer ワークブックを End User Layer (EUL) 内で共有できます。たとえば、管理者のデータベース・ロールを付与されているデータベース・ユーザーのみが特定の Discoverer ワークブックにアクセスできるようにします。特定の Discoverer ワークブックを使用できるデータベース・ユーザーを決定するには、次の手順でデータベース・ユーザーをデータベース・ロールに関連付けて、このデータベース・ロールを使用して Discoverer ワークブックを共有します。

- 既存のデータベース・ロールを識別するか、新規データベース・ロールを作成します。
- このデータベース・ロールが、Discoverer ワークブックで使用するデータベース・テーブルからデータを選択できることを確認します。
- データベース・ロールを使用して、共有するワークブックを所有するデータベース・ユーザーに対してこのデータベース・ロールを付与します。
- データベース・ロールを付与されたデータベース・ユーザーを使用して、Discoverer ワークブックを識別または作成します。
- そのデータベース・ロールを使用して、Discoverer ワークブックを共有します。

データベース・ロールを付与された各データベース・ユーザーは、このデータベース・ロールを使用して共有ワークブックにアクセスできます。

データベース・ロールを使用してワークブックを共有する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。
SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger@database;
```


jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。
2. データベース・ロールを EUL 所有者として作成します。
たとえば SQL*Plus では、次のような SQL 文を入力します。

```
SQL> create role role1;
```


この文により、role1 という名前のデータベース・ロールが作成されます。
3. 作成したデータベース・ロールに対し、適切なデータベース・テーブルでの SELECT 権限を付与します。
たとえば SQL*Plus では、次のような SQL 文を入力します。

```
SQL> grant select on product to role1;  
SQL> grant select on store to role1;  
SQL> grant select on sales_fact to role1;
```


この文により、データベース・ロール role1 に対して product テーブル、store テーブルおよび sales_fact テーブルでの選択権限が付与されます。
注意: 選択権限は、Discoverer ワークブックで使用されるアイテムが参照するすべてのテーブルのロールに対して付与する必要があります。
4. 作成したロールを、Discoverer ワークブックを共有する各データベース・ユーザーに付与します。
たとえば SQL*Plus では、次のような SQL 文を入力します。

```
SQL> grant role1 to jchen;
```


この文により、データベース・ロール role1 がデータベース・ユーザー jchen に付与されます。

残りの作業手順は、Discoverer Plus または Discoverer Desktop を使用して実行する必要があります。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

5. Discoverer Plus または Discoverer Desktop で EUL 所有者として接続し、「ファイル」→「ワークブックの管理」→「共有」を選択すると、「ワークブックの共有」ダイアログが表示されます。
6. 作成しておいたデータベース・ロールを選択します（例では role1）。
7. データベース・ロール role1 を使用して共有するワークブックを、「選択可能」フィールドから「共有」フィールドに移動します。
8. 「OK」をクリックしてダイアログを閉じ、変更内容を保存します。

これでデータベース・ロールを付与されたデータベース・ユーザーは、そのデータベース・ロールを使用して共有されている任意の Discoverer ワークブックを使用できます。

透過アプリケーション・フェイルオーバー

Discoverer は、Oracle Enterprise Edition データベースの透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを提供します。項目は次のとおりです。

- [「透過アプリケーション・フェイルオーバー」](#)
- [「Discoverer ユーザーに対する透過アプリケーション・フェイルオーバーの影響」](#)
- [「Discoverer で透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを有効にする方法」](#)
- [「Discoverer による透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートに関する注意」](#)

透過アプリケーション・フェイルオーバー

透過アプリケーション・フェイルオーバーは、Oracle 8.1.7 以上の Enterprise Edition データベースに組み込まれている機能です。データベースに障害が発生すると、透過アプリケーション・フェイルオーバーにより、障害が発生したデータベース・コンポーネントから代替のバックアップ・コンポーネントに処理が再配置され、データベース障害がマスクされます。

Discoverer ユーザーに対する透過アプリケーション・フェイルオーバーの影響

ほとんどのデータベース障害の場合、Discoverer ユーザーは、透過アプリケーション・フェイルオーバーによってデータベース処理が再配置されたことに気付きません。いくつかの状況では、エラー・メッセージが表示されます。エラー・メッセージが表示された場合は、中断された Discoverer 操作をもう 1 度繰り返す必要があります。

Discoverer で透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを有効にする方法

Discoverer で透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートを有効にする手順は、次のとおりです。

1. tnsnames.ora ファイル（通常は、<ORACLE_HOME>%network%admin ディレクトリにあります）の接続記述子の CONNECT_DATA セクションに、FAILOVER MODE パラメータを追加します。
2. TYPE サブパラメータの値を SELECT に設定します。
3. 必要に応じて、FAILOVER_MODE パラメータの他のサブパラメータに値を指定します。
たとえば、次のようになります。

```
MYSERVICENAME=(DESCRIPTION=(ADDRESS_
LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=HOSTNAME)(PORT = 1521)))
```

```
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=MYSERVICENAME)(FAILOVER_
MODE=(TYPE=SELECT)(RETRIES=5))))
```

透過アプリケーション・フェイルオーバーの有効化の詳細は、『Oracle Database Net Services 管理者ガイド』の第 13 章「Oracle Net Services の拡張機能を有効にする方法」を参照してください。

Discoverer による透過アプリケーション・フェイルオーバーのサポートに関する注意

次の点に注意してください。

- 透過アプリケーション・フェイルオーバーでは、Discoverer ワークブックのスケジュール機能とサマリー・フォルダのリフレッシュ機能を提供する PL/SQL パッケージの処理は再配置されません。スケジュール・ワークブックの実行中またはサマリー・フォルダのリフレッシュ中にデータベースで障害が発生すると、それらの操作は失敗となります。
- 透過アプリケーション・フェイルオーバーでは、ワークシート内で参照されるユーザー定義 PL/SQL ファンクションの処理は再配置されません。ユーザーがクエリーを再実行する必要があります。

ワークブックのスケジュール

この章では、ユーザーによるワークブックのスケジュールを可能にする方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「ワークブックおよびスケジュール・ワークブック」
- 「ワークブックをスケジュールする理由」
- 「エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする際の処理」
- 「ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能」
- 「スケジュール・ワークブックの結果の格納場所」
- 「ワークブックをスケジュールするための前提条件」
- 「DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法」
- 「スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルの所有者を指定する方法」
- 「スケジュール・ワークブックを実行可能にするためのシノニム `v$parameter` に対する SELECT 権限の付与方法」
- 「新しいスケジュール済ジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法」
- 「スケジュール・ワークブックの表示および管理方法」

ワークブックおよびスケジュール・ワークブック

ワークブックとは、Discoverer ワークシートの集合です。ワークブックは本来、クエリー定義を含みます。Discoverer エンド・ユーザーは、主にデータベースにワークブックを格納できます。また、Discoverer Plus および Discoverer Desktop では、ユーザーは各自の PC またはネットワーク・ファイル・サーバーにもワークブックを格納できます。

スケジュール・ワークブックとは、特定の日付、時刻および間隔で自動的に実行されるように、ユーザーにより設定されたワークブックです。スケジュール・ワークブックは、データベース・サーバー上のプロセス・キューに配置されます。エンド・ユーザーは、Discoverer Plus および Discoverer Desktop を使用してワークブックをスケジュールできます。Discoverer マネージャは、Discoverer Administrator を使用してスケジュール・ワークブックの監視とメンテナンスを行うことができます。

次の点に注意してください。

- ユーザーは、Discoverer のコマンドライン・オプションを使用してバックグラウンドでワークブックを実行できます (Discoverer Desktop のみ)。このように実行するワークブックは、スケジュール・ワークブックではありません。
- スケジュール・ワークブック、スケジュール情報およびスケジュール・ワークブックの結果は、ビジネスエリアのエクスポート時にエクスポートされません。
- スケジュール・ワークブックで使用される EUL のオブジェクトが、ワークブックのスケジュール時および結果セットの表示時との間に変更された場合、スケジュール・ワークブックの状態が、その EUL が変更されたことを示すように設定されます。
- 以前のリリースの Discoverer との互換性の詳細は、「[スケジュール・ワークブックおよび Discoverer の現行リリースと Oracle9i より前のデータベース・リリースとの間の互換性](#)」を参照してください。

ワークブックをスケジュールする理由

Discoverer エンド・ユーザーにとって、ワークブックをスケジュールできることは次のようなレポートの実行に役立ちます。

- 実行に時間がかかるレポート
- 定期的な間隔で実行する必要があるレポート

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが、完了するまでに時間がかかるレポートを実行する場合について考えます。ユーザーは、レポートを深夜に実行してその結果を翌朝表示するようにスケジュールできます。

Discoverer マネージャにとっては、ワークブックのスケジュールを行うと長時間のクエリー実行によるシステムのパフォーマンス低下を避けられるため、便利です。ユーザーにワークブック (すべてのワークブック、あるいは指定した予測時間を超えるワークブックのみ) をスケジュールさせたり、スケジュール・ワークブックの実行を許可する間隔を指定できます。

エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする際の処理

次の表は、エンド・ユーザーが Discoverer Plus のワークブックをスケジュールするときに行われる処理を示しています。

順序	操作	注意
1.	ユーザーが、スケジュール・ワークブックに含めるワークシート (1 つまたは複数) を選択します。	なし
2.	ユーザーが、スケジュール・ワークブックを実行する日付、時間および間隔を指定します。	なし

順序	操作	注意
3.	Discoverer Plus により、スケジュール・ワークブックの数がユーザーによって指定された制限を超えていないことが確認されます。	スケジュール・ワークブックの数を制限すると、一度にメンテナンスできるスケジュール・ワークブックの数が限定されます。Discoverer マネージャは、「 権限 」ダイアログ:「 権限 」タブでこの制限を指定します。ワークブックの数が制限を超えた場合、Discoverer Plus によりメッセージが表示され、ワークブックはスケジュールされません。 job_queue_processes 値により、サーバー上で一度に実行できるジョブの最大数が制御されます。詳細は、「 ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能 」を参照してください。 スケジュール・ワークブック数の制限設定と、Oracle 初期化ファイルの job_queue_processes 値とは異なります。
4.	Discoverer により、スケジュール・ワークブックが Oracle データベース・カーネル内の DBMS_JOB に追加されます。	なし
5.	ジョブ・キュー・プロセスが定期的にアクティブになり、キュー内の次のジョブが実行されます。	スケジュール・ワークブック全体がサーバー上で処理されます。詳細は、「 新しいスケジュール済ジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法 」を参照してください。
6.	データベース・テーブルが作成され、スケジュール・ワークブックの出力または結果セットがデータベース・テーブルに含められます。	結果セットは、Discoverer マネージャが指定したスキーマの下に格納されます。詳細は、「 スケジュール・ワークブックの結果の格納場所 」を参照してください。
7.	ユーザーが、スケジュール・ワークブックを参照できます。	なし
8.	ユーザーが、不要になった結果セットを削除できます。この時点で、テーブルが削除されます。	Discoverer マネージャは、ユーザーのスケジュール・ワークブックの結果が自動的に削除されるまで残しておく期間を指定できます（「 権限 」ダイアログ:「 権限 」タブ」を参照）。

ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能

Discoverer では、ワークブックをスケジュールするために Oracle データベース固有のスケジュール機能が利用されます。特に、DBMS_JOB パッケージが利用されます。

Oracle データベース初期化ファイル (INIT<SID>.ORA ファイル) の次のパラメータを使用して、DBMS_JOB パッケージの処理を制御します。

INIT<SID>.ORA のパラメータ	用途
job_queue_processes	<p>このパラメータを使用して、DBMS_JOB の処理に使用できる同時処理リクエストの最大数を指定します。デフォルト値は 0 で、処理リクエストが作成されないことを意味します。同時に 10 個の処理リクエストを行う場合は、このパラメータを 10 に設定します。</p> <p>他のアプリケーションで DBMS_JOB を使用する場合は、このパラメータを 2 以上に設定します。</p> <p>ヒント: なんらかの理由で 1 つのジョブが失敗すると、そのジョブが引き続き送られてキュー内のその他のジョブを発行できなくなることがあるため、複数のジョブ・キュー・プロセスが必要です。</p>

INIT<SID>.ORA ファイルのパラメータ設定の詳細は、「[新しいスケジュール済ジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法](#)」を参照してください。

スケジュール・ワークブックの結果の格納場所

Discoverer では、スケジュール・ワークブックの結果はデータベース・テーブルに格納されます。エンド・ユーザーによるワークブックのスケジュールを可能にするには、これらのテーブルを所有するデータベース・ユーザー（スキーマ）を決定する必要があります。次の表に示すように、2 つの選択肢があります。

所有者	注意
スケジュール・ワークブックを実行するスキーマ	<p>結果セットの格納場所をエンド・ユーザーのスキーマに指定するメリットは、データベースの制限をエンド・ユーザーがデータベースに格納できるデータの最大量に指定できることです。結果セットがエンド・ユーザーのスキーマの下に格納された場合、個々のエンド・ユーザーが結果セットを格納できる最大領域を制御してください。この領域に格納されるスケジュール・ワークブックをエンド・ユーザーが作成した場合、そのエンド・ユーザーのスキーマのみが影響を受けます。</p> <p>デメリットは、メンテナンスのオーバーヘッドが増すことです。</p> <p>注意: このオプションは、Oracle Applications ユーザーにはお薦めしません。</p>
スケジュール・ワークブック結果スキーマ	<p>結果セットをスケジュール・ワークブック結果スキーマに格納するメリットは、複数のデータベース・ユーザー・スキーマを使用するよりも一般に管理が簡単であるということです。また、各エンド・ユーザーが、スケジュール・ワークブックを実行するための追加データベース権限を設定する必要がないこともメリットです。</p> <p>デメリットは、割当て領域が共有されるため、単一のエンド・ユーザーにより領域が使い果たされてしまう可能性があることです。</p> <p>注意: Oracle Applications ユーザーは、Oracle Applications APPS データベース・ユーザーを、スケジュール・ワークブック結果スキーマとして使用する必要があります（詳細は、「スケジュール・ワークブック制限の設定方法」を参照）。APPS データベース・ユーザーは、すでに Oracle Applications ユーザーに対するデフォルト・スキーマであるため、SQL スクリプト (batchusr.sql) を実行してスケジュール・ワークブック結果スキーマを作成する必要はありません。</p>

スケジュール・ワークブックの結果を格納する場所を指定する方法の詳細は、「[スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルの所有者を指定する方法](#)」を参照してください。

ワークブックをスケジュールするための前提条件

エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、次の作業が必要です。

- スケジュール・ワークブックの機能を有効にするようにデータベースを構成します。構成手順は、次のとおりです。
 - DBMS_JOB パッケージがデータベースにインストールされていることを確認し、インストールされていない場合はインストールします（詳細は、「[DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法](#)」を参照）。
 - スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルを所有するデータベース・ユーザーを指定します（詳細は、「[スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルの所有者を指定する方法](#)」を参照）。
 - 結果セットを所有するデータベース・ユーザーに、ビュー V_\$PARAMETER に対する SELECT 権限を付与します（詳細は、「[スケジュール・ワークブックを実行可能にするためのシノニム v\\$parameter に対する SELECT 権限の付与方法](#)」を参照）。
 - スケジュール・ワークブックの処理間隔を設定します（詳細は、「[新しいスケジュール済ジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法](#)」を参照）。
- データベース・ユーザーに「ワークブックのスケジュール」権限を付与します（詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照）。

DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法

エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、DBMS_JOB パッケージがデータベースにインストールされている必要があります。DBMS_JOB パッケージがインストールされていない場合は、インストールします。

DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、データベース管理者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT dba_user/dba_pw@database;
```

dba_user はデータベース管理者、dba_pw はデータベース管理者のパスワード、database は接続先データベースです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select * from all_objects where object_name='DBMS_JOB' and object_type = 'PACKAGE';
```

この文で 1 つ以上の行が返された場合、DBMS_JOB パッケージはデータベースにインストールされています。

この文で行が返されなかった場合、DBMS_JOB パッケージはインストールされていません。ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、DBMS_JOB パッケージをインストールする必要があります。

インストールされていない場合に DBMS_JOB パッケージをインストールする手順は、次のとおりです（Oracle9i 以上のデータベースの場合）。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、SYS ユーザーあるいは SYSDBA 権限を付与されたユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys は SYS ユーザー、sys_pw は SYS ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/dbmsjob.sql;
```

3. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/prvtjob.plb;
```

スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルの所有者を指定する方法

スケジュール・ワークブックの結果は、データベース・テーブルに格納されます。Discoverer のデフォルト動作では、スケジュール・ワークブックは EUL 所有者スキーマに格納されます。エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、これらのテーブルを所有するデータベース・ユーザーを決定する必要があります。次の 2 つの選択肢があります。

- スケジュール・ワークブックを実行するデータベース・ユーザー
- スケジュール・ワークブック結果スキーマ

これらの選択肢の詳細は、「[スケジュール・ワークブックの結果の格納場所](#)」を参照してください。

どちらを選択する場合でも、スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルを所有するデータベース・ユーザーは、一定のデータベース権限を持つ必要があります。

ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーが、そのワークブックの結果を含むデータベース・テーブルを所有するように指定する方法

ワークブックの結果を含むデータベース・テーブルを所有するデータベース・ユーザーを指定する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、データベース管理者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT dba_user/dba_pw@database;
```

dba_user はデータベース管理者、dba_pw はデータベース管理者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> grant CREATE PROCEDURE to <user name>;
```

```
SQL> grant CREATE TABLE to <user name>;
```

```
SQL> grant CREATE VIEW to <user name>;
```

<user name> は、ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーの名前です。

これらの権限は、データベース・ロールではなくデータベース・ユーザーに直接付与する必要があります。

スクリプトを使用して、スケジュール・ワークブック結果スキーマ（ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーではなく）が、スケジュール・ワークブックの結果テーブルを所有するように指定する方法

スケジュール・ワークブック結果スキーマが、スケジュール・ワークブックの結果テーブルを所有するように指定する手順は、次のとおりです。

注意: Oracle Applications ユーザーはこのスクリプトを使用できません。かわりに既存の Oracle Applications APPS ユーザーを使用します（詳細は、「[スケジュール・ワークブック制限の設定方法](#)」を参照）。

注意: スクリプト batchusr.sql を実行するには、EUL 所有者のユーザー名とパスワードを知っておく必要があります。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、データベース管理者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT dba_user/dba_pw@database;
```

dba_user はデータベース管理者、dba_pw はデータベース管理者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start<ORACLE_HOME>%discoverer%util%batchusr.sql;
```

3. スクリプト batchusr.sql により作成されるスケジュール・ワークブック結果スキーマのユーザー名、パスワードおよびデータベース接続詳細を入力します。

4. (オプション) スケジュール・ワークブック結果スキーマ用の表領域設定を変更します。

注意: これらの設定に不明な点がある場合は、データベース管理者に問い合せてください。

5. スケジュール・ワークブック結果スキーマがアクセス権を持つ EUL の所有ユーザー名を入力します。

注意: スクリプトにより、スケジュール・ワークブック結果スキーマが作成され、次のデータベース権限が付与されます。

- CREATE PROCEDURE
- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- SELECT ANY TABLE

batchusr.sql スクリプトにより作成されるスケジュール・ワークブック結果スキーマに SELECT ANY TABLE データベース権限が付与され、ワークブックのスケジュールに必要な基礎データにアクセスできるようになります。この権限がないと、このデータベース・ユーザーの基礎データへのアクセスが制限されることがあります。

スケジュール・ワークブック結果スキーマが基礎データに対する SELECT ANY TABLE データベース権限を持たないようにするには、この権限を手動で取り消す必要があります。

6. 前述の手順（スクリプト batchusr.sql の実行時）で使用した EUL 所有者として Discoverer Administrator に接続します。

7. Discoverer Administrator で、「ツール」→「権限」を選択します。「[権限](#)」ダイアログ:「[権限](#)」タブが表示されます。

Discoverer Administrator を使用して、データベースに作成されるスケジュール・ワークブックの結果テーブルを所有するデータベース・ユーザーを選択する必要があります。

8. 「[スケジュール制限を表示](#)」フィールドの隣の「選択」ボタンをクリックすると、EUL 所有者を選択できる「[ユーザー / ロールの選択](#)」ダイアログが表示されます。

9. 「[すべてのワークブックの結果を格納するテーブルを所有するユーザーを選択します。](#)」ドロップダウン・リストを使用して、スクリプト batchusr.sql で作成した、スケジュール・ワークブック結果スキーマを選択します。

10. 「OK」をクリックします。

これで、スケジュール・ワークブック結果スキーマの作成にはスクリプト batchusr.sql を使用し、EUL 所有者に対して使用されるスケジュール・ワークブック結果スキーマの選択には「権限」ダイアログを使用しました。

スケジュール・ワークブックの権限の詳細は、「[スケジュール・ワークブック制限の設定方法](#)」を参照してください。

注意

- スクリプト batchusr.sql により作成されたスケジュール・ワークブック結果スキーマは、1 つの EUL へのアクセス権のみ持つことができます。
- Discoverer エンド・ユーザーは、使用可能な結果セット領域に格納されるスケジュール・ワークブックを実行できることに注意してください。その他のデータベース・ユーザーは、この領域が空くまで、スケジュール・ワークブックを実行できません。
- スクリプト batchusr.sql により作成されたスケジュール・ワークブック結果スキーマで、Discoverer Plus を使用してワークブックを直接スケジュールすることはできません。

スケジュール・ワークブックを実行可能にするためのシノニム v\$parameter に対する SELECT 権限の付与方法

ビュー v_\$parameter に対する SELECT 権限をスケジュール・ワークブック結果セット・スキーマ名に付与することで、シノニム v\$parameter に対する SELECT 権限を付与します。

スケジュール・ワークブックを実行するには、スケジュール・ワークブック結果スキーマに、v_\$parameter に対する SELECT 権限を付与する必要があります。ただし、v_\$parameter は SYS ユーザーが所有するビューで、パブリック・アクセス権がないため、SYS ユーザーは、v_\$parameter に対する SELECT 権限をスケジュール・ワークブック結果スキーマ名に明示的に付与する必要があります。

注意

- 後述の <user> は、batchusr.sql スクリプトによって作成されるスケジュール・ワークブック結果スキーマ名を示します（詳細は、「[スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルの所有者を指定する方法](#)」を参照）。

スケジュール・ワークブックを実行するために、SQL*Plus を使用して v_\$parameter に対する SELECT 権限を手動で付与する手順は、次のとおりです（Oracle9i 以上のデータベースの場合）。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、SYS ユーザーあるいは SYSDBA 権限を付与されたユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys は SYS ユーザー、sys_pw は SYS ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> grant SELECT on v_$parameter to <user>;
```

注意: <user> がシノニム v\$parameter から選択できるようにするには、ビュー v_\$parameter に対する SELECT 権限を付与する必要があります。

注意: v_\$parameter に対する SELECT 権限を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS ユーザーとしてログインできない場合、または SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合せてください。

SQL*Plus を使用して、v_\$parameter に対する SELECT 権限が付与されているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、<user> として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT <user>/<user_pw>@database;
```

user はスケジュール・ワークブック結果スキーマ名、user_pw はユーザー・パスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select count (*) from v$parameter;
```

SELECT 権限が <user> に付与されている場合は、列数が表示されます。

SELECT 権限が <user> に付与されていない場合は、「ORA-01031: 権限が不足しています。」エラー・メッセージが表示されます。

新しいスケジュール済ジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法

INIT<SID>.ORA ファイルの次のパラメータを使用して、スケジュール・ワークブックの処理を制御します。

- job_queue_processes

このパラメータの詳細は、「[ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能](#)」を参照してください。

スケジュール・ワークブックの処理間隔を制御する手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA ファイルの位置を特定します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、<ORACLE_HOME>%dbs にあります。このファイルのデフォルト名は INITORCL.ORA です。ORCL は <SID> 名を表します。

2. 次の行を INIT<SID>.ORA ファイルに追加します。

```
job_queue_processes = <a_value>
```

- <a_value> は、DBMS_JOB の処理に使用できる同時処理リクエストの数です（別のアプリケーションで DBMS_JOB が使用される場合は、このパラメータを 2 以上に設定することをお勧めします）。

たとえば、次の行を INIT<SID>.ORA ファイルに追加します。

```
job_queue_processes = 2
```

注意

- Discoverer のサマリー管理機能とワークブック・スケジュール機能の両方で、Oracle データベース固有のスケジュール機能が使用されます。job_queue_processes で指定する値により、両方の機能が影響を受けます。この変更を有効にするには、データベースを停止してから再起動する必要があります。

スケジュール・ワークブックの表示および管理方法

Discoverer マネージャは、現在スケジュールされているワークブックの状態の監視に加え、次の作業も実行する必要があります。

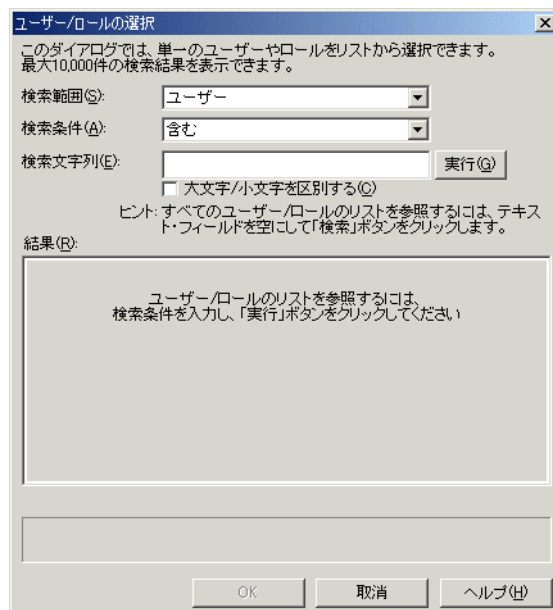
- 正常に実行されなかったスケジュール・ワークブックに関するエラー・メッセージの表示
- スケジュール・ワークブック結果のデータベースからの削除
- スケジュール・ワークブックのプロセス・キューからの削除
- スケジュール・ワークブックの設定の編集

注意: Oracle Applications モード EUL を持っている場合は、EUL 所有者としてログインして、スケジュール・ワークブックの表示と管理を行う必要があります。

スケジュール・ワークブックの表示と管理を行う手順は、次のとおりです。

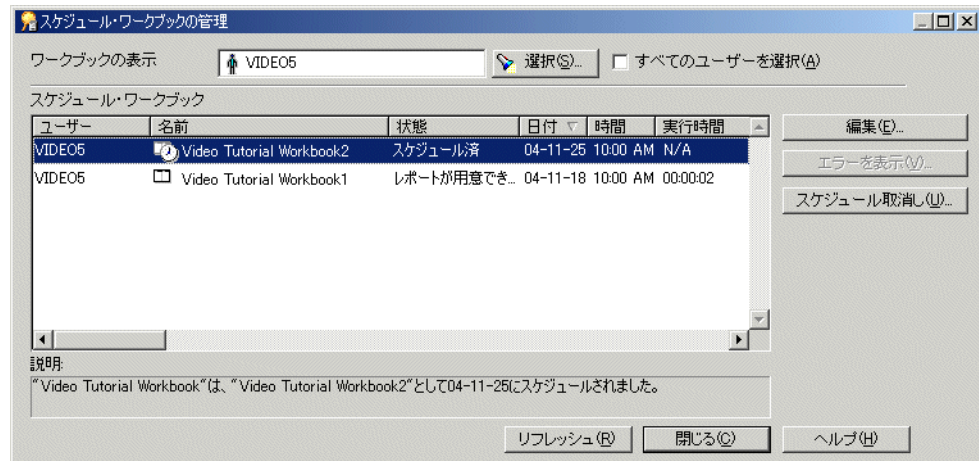
1. 「ツール」→「スケジュール・ワークブックの管理」を選択して、「スケジュール・ワークブックの管理」ダイアログを表示します。
2. 「選択」をクリックすると、「ユーザー / ロールの選択」ダイアログが表示されます。このダイアログで、「ワークブックの表示」フィールドにスケジュール・ワークブックを表示するユーザーまたはロールを検索して選択できます。

図 8-1 「ユーザー / ロールの選択」ダイアログ



3. 「検索文字列」フィールドに検索基準を入力し、「実行」をクリックします。
「結果」リストに検索結果が表示されます。
4. 「結果」リストからユーザーまたはロールを選択し、「OK」をクリックします。
「結果リスト」フィールドで選択したユーザーが所有するスケジュール・ワークブックの結果が、次のスクリーンショットに表示されます。

図 8-2 「スケジュール・ワークブックの管理」ダイアログ



ヒント: 次のことができます。

- 「すべてのユーザーを選択」 チェックボックスを選択することにより、すべてのスケジュール・ワークブックを表示できます。
 - 列ヘッダーをクリックすることにより、様々な列を使用してリストをソートできます。
 - 現在選択されているスケジュール・ワークブックの説明 (1つ) を「説明」フィールドに表示できます。
5. (オプション) 正常に実行されなかったスケジュール・ワークブックに関するエラー・メッセージを表示するには、そのワークブックを選択し、「エラーを表示」ボタンをクリックします。
「エラーを表示」ボタンを使用できるのは、クエリーの実行中にエラーが発生したことをスケジュール・ワークブックの「状態」に示すように設定されている場合のみです。
 6. (オプション) スケジュール・ワークブックが実行されないようにするには、プロセス・キューからそのワークブックを削除します。
 - a. スケジュール・ワークブックを選択します。
 - b. 「スケジュール取消し」をクリックします。
 - c. 「はい」をクリックして、スケジュール・ワークブックを削除することを確認します。
 7. (オプション) スケジュール・ワークブックの結果をデータベースから削除するには (そのワークブックの実行後)、そのワークブックを選択し、「削除」をクリックします。
 8. (オプション) スケジュール・ワークブックのスケジュール情報を編集するには、そのワークブックを選択し、「編集」をクリックして、「ワークブックのスケジュール」ダイアログを表示します。その後、次の作業を行います。
 - 「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「一般」タブを使用して、スケジュール・ワークブックに含まれているシートを表示し、スケジュール時間と繰り返し間隔を設定します。
 - 「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「一般」タブを使用して、スケジュール・ワークブックの名前の表示、説明の表示と編集、最新結果を保存するかどうかの選択、および結果を自動削除するまでの間隔の設定を行います。
 9. (オプション) 「スケジュール・ワークブックの管理」ダイアログで行った変更を反映するには、「リフレッシュ」をクリックします。
 10. 「閉じる」をクリックして、「スケジュール・ワークブックの管理」ダイアログを閉じます。

注意

- 実行されたスケジュール・ワークブックを選択した場合のみ、「削除」ボタンが表示されません。
- スケジュール・ワークブックの使用する EUL のオブジェクトが、ワークブックのスケジュール後、結果セットが表示されるまでに変更された場合、スケジュール・ワークブックの「状態」に、EUL が変更されていることが示されます。

アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用してアイテムとアイテム・クラスをメンテナンスする方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「アイテム」
- 「アイテム・クラス」
- 「値リスト」
- 「値リストの設定」
- 「代替ソート」
- 「代替ソートを実装する様々な方法の例」
- 「ディテール・ドリル」
- 「ディテール・ドリルの設定」
- 「日付アイテム」
- 「日付フォーマット・マスク」
- 「日付アイテムの切捨てと EUL_DATE_TRUNC 関数」
- 「切り捨てられる日付アイテムへの条件の適用」
- 「別のアプリケーションへのドリルアウト」
- 「EUL アイテム名の自動生成および自動更新」
- 「アイテム・プロパティの編集方法」
- 「値リスト・アイテム・クラスの作成方法」
- 「代替ソート・アイテム・クラスの作成方法」
- 「ディテール・ドリル・アイテム・クラスの作成方法」
- 「カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法」
- 「アイテム・クラスの編集方法」
- 「アイテム・クラスにアイテムを追加する方法」
- 「アイテム・クラスからアイテムを削除する方法」
- 「アイテム・クラスを使用するアイテムの表示方法」
- 「アイテムの値リストの表示方法」
- 「アイテム・クラスの値リストの表示方法」
- 「アイテムとアイテム・クラスの削除方法」
- 「エンド・ユーザーがワークシートでパラメータ値を選択したときのパフォーマンスの向上」

- [「索引付きアイテムをアイテムに割り当てる方法」](#)
- [「ユーザー定義データ型の列に基づくアイテムに関する注意」](#)

アイテム

Discoverer のアイテムとは、次のいずれかを End User Layer で表したものです。

- データベース・テーブルまたはデータベース・ビュー内の列
- カスタム・フォルダのコンポーネント（詳細は、「[カスタム・フォルダ](#)」を参照）
- ユーザー定義アイテム（詳細は、[第 11 章「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」](#)を参照）

アイテムはフォルダに格納され、作成、削除およびフォルダ間での移動ができます。アイテムには、変更可能なプロパティがあります（表示名、フォーマット・マスクなど）。アイテムを使用すれば、Discoverer エンド・ユーザーは必要な情報が得られるまで情報にアクセスして操作できます。

アイテム・クラス

アイテム・クラスとは、類似した一部のプロパティを共有するアイテムのグループです。アイテム・クラスを使用すれば、アイテム・プロパティを一度定義して、類似したプロパティを共有する別のアイテムにアイテム・クラスを割り当てることができます。

たとえば、各製品を説明する「Product Name」というアイテムが「Product」フォルダに含まれていると仮定します。同じく「Product Name」と呼ばれる類似のアイテムが、「Sales Revenue」フォルダでも必要になる場合があります。両方のアイテムが共通のプロパティ（値リストなど）を共有できるようにするには、プロパティを定義するアイテム・クラスを1つ作成し、両方のアイテムに適用します。つまり、プロパティを一度定義するだけで済みます。アイテム・クラスがないと、各アイテムについて個別にプロパティの定義が必要になります。

Discoverer では、次の機能を実装するためにアイテム・クラスが使用されます。

- 値リスト
- 代替ソート
- ディテール・ドリルのリンク

Discoverer マネージャは、これらの機能をサポートする適切なアイテム・クラスを作成する責任があります。各機能について異なるアイテム・クラスを作成したり、複数の機能について同じアイテム・クラスを Discoverer で使用するよう指定できます。代替ソートをサポートするアイテム・クラスは値リストもサポートする必要があることに注意してください。

値リスト

値リスト（「LOV」とも呼ばれます）とは、アイテムの有効な値のセットです。これらの値は、アイテムの基礎となるデータベース列の値です。Discoverer エンド・ユーザーは、次の値の表示や入力に値リストを使用します。

- パラメータ
- 条件
- Discoverer アイテム・ナビゲータ
- 「エクスポート」ダイアログ

たとえばアイテムが、次の値を含むデータベース列（例では Region）に基づいていると仮定します。

Region
West
East
South
North
East
North
South

このアイテムに基づく値リストには、次の4つの重複しない値が含まれることになります。

- West
- East
- South
- North

値リストの設定

Discoverer では、値リストを実装するためにアイテム・クラスが使用されます。最初にビジネスエリアを作成するとき、値リストを自動生成するように指定できます（詳細は、「[ロード・ウィザード: ステップ 4](#) ダイアログ」を参照）。以降は、アイテム・クラス・ウィザードを使用して、新規値リストの作成と別のアイテムへの既存値リストの割当てを行うことができます（詳細は、「[値リスト・アイテム・クラスの作成方法](#)」を参照）。

代替ソート

代替ソートとは、アイテム内の値のソート方法に関する Discoverer への指示です。代替ソートにより、デフォルトとは異なるソート順序を指定できます。

デフォルトでは、ASCII 値を使用してアイテムが昇順または降順にソートされます。しかし、Discoverer エンド・ユーザーが他の順序でソートする必要がある場合もあります。

たとえば、デフォルトでは一連の販売地域がアルファベット順に（East、North、South、West の順に）ソートされます。しかし、Discoverer エンド・ユーザーは、販売地域を別の順序で（たとえば、North、South、East、West の順で）ソートすることが必要な場合があります。

代替ソート順序を作成するには、アイテム・クラスを使用して次の2つのアイテムをリンクする必要があります。

- ソート順序を定義するアイテム
- ソートする値リストを定義するアイテム

アイテム・クラスを定義した後、Discoverer エンド・ユーザーがワークシートに含めるアイテムに、このアイテム・クラスを関連付けます。

代替ソートを実装する方法は、次のとおりです。

- カスタム・フォルダを使用する方法（詳細は、「[例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法](#)」を参照）
- 個別のデータベース・テーブルを作成・使用する方法（詳細は、「[例 2: データベース・テーブルを使用した代替ソートの実装方法](#)」を参照）
- ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用する方法（詳細は、「[例 3: ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用した代替ソートの実装方法](#)」を参照）

いずれの実装方法を選択する場合でも、次の点に注意してください。

- 代替ソートの実装に使用するアイテム・クラスには、代替ソートと値リストの両方を含める必要があります。
- アイテム・クラスの代替ソートと値リストに対して選択する2つのアイテムは同じフォルダ内にあり、1対1の関係があることが必要です。

代替ソート・アイテム・クラスの作成方法の詳細は、「[代替ソート・アイテム・クラスの作成方法](#)」を参照してください。

代替ソートを実装する様々な方法の例

この項では、代替ソートを実装する様々な方法の例を示します。項目は次のとおりです。

- [「例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法」](#)
- [「例 2: データベース・テーブルを使用した代替ソートの実装方法」](#)
- [「例 3: ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用した代替ソートの実装方法」](#)

例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法

フォルダの「カスタム SQL」プロパティを使用して2つのアイテムを作成することで、カスタム・フォルダを使用して代替ソートを実装できます。一方のアイテムに値リストを含め、他方のアイテムでソート順序を指定します。次に、アイテム・クラスを作成し、アイテム・クラスの値リストおよび代替ソートとして2つのアイテムをカスタム・フォルダで指定できます。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートに、「Ordered Regions」というアイテムを含めるとします。このアイテム内の値をソートするとき、販売地域の順序をデフォルトのアルファベット順ではなく North、South、East、West の順にする場合があります。カスタム・フォルダを使用してこの代替ソートを実装する手順は、次のとおりです。

- 「Sales Regions Sort Folder」というカスタム・フォルダを作成します。
- このカスタム・フォルダの「カスタム SQL」プロパティとして次のように入力します。

```
select 'North' region_name, 1 region_order from dual union
select 'South' region_name, 2 region_order from dual union
select 'East' region_name, 3 region_order from dual union
select 'West' region_name, 4 region_order from dual union
```
- 「Sales Regions Customized Sort」というアイテム・クラスを作成します。
- 値リスト・アイテムとして region_name を、「Sales Regions Customized Sort」アイテム・クラスの代替ソート・アイテムとして region_order をそれぞれ指定します。
- ユーザーがワークシートに含める「Ordered Regions」アイテムに関連付けられるアイテム・クラスとして「Sales Regions Customized Sort」を指定します。
- ユーザーが「Ordered Regions」アイテムを使用してワークシートをソートすると、ワークシートは新しい順序でソートされます。

例 2: データベース・テーブルを使用した代替ソートの実装方法

値および値に関連付けられた数値順序を含む、2つの列がある新しいデータベース・テーブルを作成することで、データベース・テーブルを使用して代替ソートを実装できます。値および値に関連付けられた数値順序を含む適切なデータベース・テーブルがすでに存在する場合は、そのテーブルの使用を検討してください。パフォーマンスの問題が発生しないように、各値が複数含まれるデータベース・テーブルの使用は避けてください。

テーブルをフォルダとして EUL にロードした後、アイテム・クラスを作成し、そのアイテム・クラスの値リストおよび代替ソートに対して2つのアイテムを指定できます。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートに、「Ordered Regions」というアイテムを含めるとします。このアイテム内の値をソートするとき、販売地域の順序をデフォルトのアルファベット順ではなく North、South、East、West の順にする場合があります。データベース・テーブルを使用してこの代替ソートを実装する手順は、次のとおりです。

- SQL*Plus を使用して、2つの列 REGION_NAME および REGION_NUMBER を含む SALES_REGION_SORT というデータベース・テーブルを作成します。作成するには、次のように入力します。


```
> create table SALES_REGION_SORT (REGION_NAME VARCHAR2(10), REGION_NUMBER
NUMBER(2));
```
- SQL*Plus を使用して、値を SALES_REGION_SORT テーブルに挿入します。挿入するには、次のように入力します。


```
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('North', 1)
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('South', 2)
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('East', 3)
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('West', 4)
```
- SALES_REGION_SORT データベース・テーブルを、アイテム「Name」および「Number」を含む新しいフォルダとして EUL にロードします（詳細は、[第5章「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)を参照）。
- 「Sales Regions Customized Sort」というアイテム・クラスを作成します。
- 値リストとして「Region Name」アイテムを、アイテム・クラスの代替ソート・アイテムとして「Region Name」アイテムをそれぞれ指定します。
- ユーザーがワークシートに含める「Ordered Regions」アイテムに関連付けられるアイテム・クラスとして「Sales Regions Customized Sort」を指定します。
- ユーザーが「Ordered Regions」アイテムを使用してワークシートをソートすると、ワークシートは新しい順序でソートされます。

例 3: ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用した代替ソートの実装方法

ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用して、代替ソートを実装できます。既存のフォルダに2つの新しいアイテムを作成し、値リストとソート順序を含むようにこれらのアイテムの SQL 文を指定します。次に、アイテム・クラスを作成し、アイテム・クラスの値リストおよび代替ソートに対して2つのアイテムを指定できます。

値リストを含むアイテムがすでに存在する場合は、そのアイテムを使用できます。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートに、「Ordered Regions」というアイテムを含めるとします。このアイテム内の値をソートするとき、販売地域の順序をデフォルトのアルファベット順ではなく、North、South、East、West の順にする場合があります。ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用して代替ソートを実装する手順は、次のとおりです。

- 「Ordered Regions」アイテム（このアイテムにより地域の名前が提供されます）を含むフォルダに「Sales Region Order」という新しいユーザー定義アイテムを作成します。
- アイテムの計算式として次の SQL 文を指定します。


```
DECODE(Ordered Regions, 'North', 1, 'South', 2, 'East', 3, 4)
```
- 「Sales Regions Customized Sort」というアイテム・クラスを作成します。
- ユーザーがワークシートに含める「Ordered Regions」アイテムに関連付けられるアイテム・クラスとして「Sales Regions Customized Sort」を指定します。
- ユーザーが「Ordered Regions」アイテムを使用してワークシートをソートすると、ワークシートは新しい順序でソートされます。

注意: パフォーマンスの点では、これが最も効率が悪い方法です。

ディテール・ドリル

ディテール・ドリルとは、複数のアイテム間の関係で、ディテール・ドリルを実行しなければ、これらのアイテムは関連付けられない場合もあります。ディテール・ドリルはアイテム・クラスを使用して実行され、別のフォルダから現在選択されている行に関する詳細情報への直接アクセスを Discoverer エンド・ユーザーに提供します。このため、エンド・ユーザーは階層レベル全体をドリルする必要はありません。

ディテール・ドリルの設定

ディテール・ドリル・アイテム・クラスを作成するときには、それを使用するアイテムを指定します。アイテム・クラスを共有するアイテムを含むフォルダを結合する必要はありません。

ユーザーが1つのアイテムのディテール・ドリル・オプションを選択するとき、同じディテール・ドリル・アイテム・クラスを共有する別のアイテムを含むフォルダをドリルで使用できます。ユーザーがこれらのフォルダの1つを選択した場合、そのフォルダ内のすべてのアイテムがワークシートに含まれ、元のシートと共通のアイテム・クラスすべてに条件が適用されます。

ハイパードリルが機能するには、同じディテール・ドリル・アイテム・クラスを共有するアイテムのデータ型が同じである必要があります。

日付アイテム

日付アイテムとは、日付情報を表示するためにユーザーがワークシートに含めるアイテムです。次のアイテムを日付アイテムにできます。

- データベース列に基づく、日付データ型のアイテム
- 作成済のユーザー定義アイテム
- 日付アイテムの日付階層を指定するときに Discoverer で自動作成されるアイテム

日付フォーマット・マスク

日付フォーマット・マスクとは、日付情報の表示方法に関する指示です。

次の表は、多数の日付をデータベースに格納する方法と、異なる日付フォーマット・マスクをこれらの日付に適用した場合の影響を示しています。

データベースに格納されている日付	DD-MM-YYYY	DD-MONTH	MM/DD	DD-Month-YY HH:MI AM
04-JUN-1999 13:03:45	04-06-1999	04-JUNE	06/04	04-June-99 1:03 PM
05-AUG-2000 23:14:12	05-08-2000	05-AUGUST	08/05	05-August-00 11:14 PM
15-JAN-2001 03:45:38	15-01-2001	15-JANUARY	01/15	15-January-01 3:45 PM
14-APR-2002 09:52:26	14-04-2002	14-APRIL	04/14	14-April-02 9:52 AM

Discoverer マネージャは、ユーザーがワークシートに含める日付アイテムのデフォルト日付フォーマット・マスクを指定できます。

日付フォーマット・マスクは、日付がデータベースに格納される方法には影響を与えません。

日付階層テンプレートに新しいレベルを作成するとき、そのレベルの日付フォーマットを指定します。日付階層に新しいレベルを含めた場合、その日付階層を使用する日付アイテムを含むすべてのフォルダに新しい日付アイテムが自動的に生成されます。

新しい日付アイテムの計算式は、次のとおりです。

`EUL_DATE_TRUNC(item_name, format_mask)`

- `EUL_DATE_TRUNC` は、日付を `format_mask` により指定されるフォーマットに切り捨てる Discoverer 関数です。
- `item_name` は、日付階層を使用するフォルダ内のアイテムの名前です。
- `format_mask` は、日付階層テンプレートの新しいレベルについて指定した日付フォーマットです。

日付階層テンプレートの新しいレベルについて指定した日付フォーマットは、新しい日付アイテムのフォーマット・マスク・プロパティの設定にも使用されます。

日付アイテムの切捨てと EUL_DATE_TRUNC 関数

日付アイテムの切捨てでは、日付の個別要素を抽出し操作します（たとえば、月、四半期、年）。日付アイテムの切捨ては日付の比較に役立ちます。Discoverer では、切り捨てられた日付アイテムが日付階層の実装に使用されます。

`EUL_DATE_TRUNC` 関数により、日付値が指定された日付フォーマット・マスクに切り捨てられます。`EUL_DATE_TRUNC` を使用する利点は、次のとおりです。

- 別の方法（日付を文字列に変換し、日付の一部を削除し、文字列を日付に再変換する方法）よりも `EUL_DATE_TRUNC` を使用して日付を切り捨てるほうが簡単です。
- `EUL_DATE_TRUNC` を使用すれば、切り捨てられた日付を正しい時間順にソートできます（たとえば、日付フォーマット・マスクが Q である場合、四半期のデータが各年内で順序付けられ、次に年別に順序付けられます）。
- `EUL_DATE_TRUNC` を使用すれば、時間間隔を単一の日付で表すことができます。これは、条件を定義するときに役立ちます。

Discoverer では、日付階層の作成時に `EUL_DATE_TRUNC` が自動的に使用されます。また、日付アイテムの計算式を入力するときに `EUL_DATE_TRUNC` を使用することもできます。

`EUL_DATE_TRUNC` では、常に日、月、年の要素で構成される日付が返されることに注意してください。指定されたフォーマット・マスクにこれらの要素の 1 つが含まれていない場合、`EUL_DATE_TRUNC` では 01-JAN-1900 をデフォルトの日付に使用して、足りない要素が表示されます。たとえば、次のような場合です。

- `EUL_DATE_TRUNC (date,'YYYY')` を日付「25-aug-1934」、「11-nov-1934」および「03-feb-1933」に適用すると、結果はそれぞれ「01-jan-1934」、「01-jan-1934」および「01-jan-1933」になります。
- `EUL_DATE_TRUNC (date,'Mon')` を日付「25-aug-1934」、「11-nov-1934」および「03-feb-1933」に適用すると、結果はそれぞれ「01-Aug-1900」、「01-Nov-1900」および「01-Feb-1900」になります。
- `EUL_DATE_TRUNC (date,'DD')` を日付「25-aug-1934」、「11-nov-1934」および「03-feb-1933」に適用すると、結果はそれぞれ「25-jan-1900」、「11-jan-1900」および「03-jan-1900」になります。

足りない日付要素に対して `EUL_DATE_TRUNC` から返されるデフォルト値は、たいていは不適切あるいは不要です。そのため `EUL_DATE_TRUNC` 計算式では、表示するすべての日付要素を指定することをお勧めします。換言すれば、`EUL_DATE_TRUNC` 関数コールで指定した日付要素のみを表示することをお勧めします。

切り捨てられる日付アイテムへの条件の適用

切り捨てられる日付アイテムを条件に含めることができます。条件として指定する値のフォーマットは、切り捨てられる日付アイテムの日付フォーマット・マスクと同じである必要があります。

次の点に注意してください。

- アイテムの日付フォーマット・マスクが、アイテムの切り捨てに使用される計算式で指定される日付フォーマット・マスクと互換性がないというリスクを低減するために、編集可能な計算式を持つ日付アイテムの日付フォーマット・マスクを変更しようとするすると警告が表示されます。
- 標準的な Oracle 日付フォーマットには時間が含まれます (DD-MON-YYYY:HH24:MI:SS)。日付アイテムを EUL にロードするとき、デフォルトの日付フォーマット・マスク DD-MON-YYYY (時間なし) が日付アイテムに適用されます。時間情報がデータベース列に格納されている場合に、ユーザーがその列に基づく日付アイテムに条件を適用すると、次のことが起こります。
 - 時間コンポーネントが条件に含まれる (デフォルトの日付フォーマット・マスクで、時間コンポーネントを含まないように指示されている場合でも)。
 - 結果が返されない。

この状況を解決するには、日付を DD-MON-YYYY に切り捨てるように日付アイテムの計算式を変更します。

例 1

日付アイテムの計算式が EUL_DATE_TRUNC (order_date,'YYYY') であり、そのアイテムが order_date='2001' として条件に含まれている場合は、次のことが起こります。

- 2001 年のすべての注文の日付がアイテム別に返される。
- 各注文の日付が「01-JAN-2001」として示される (EUL_DATE_TRUNC では、日付「01-JAN-1900」が、フォーマット・マスクで指定されていない日付要素のデフォルトに使用されるため)。

例 2

EUL_DATE_TRUNC を使用して order_quarter_date という日付アイテムを切り捨て、order_quarter_date アイテムを条件に含めると仮定します。切り捨てられたアイテムの日付フォーマット・マスクが 'Q' である場合、このアイテムの計算式で同じ日付フォーマット・マスク (つまり、EUL_DATE_TRUNC (order_quarter_date,'Q')) を使用する必要があります。

別のアプリケーションへのドリルアウト

Discoverer の視点から、データ自体 (地域または注文番号など)、あるいはデータがデータベースの外部に配置されている場所へのポインタ (店舗のピクチャを含むファイルの名前や URL など) をデータベース列に含めることができます。アイテム・プロパティを設定して、アイテムがデータベース外部のデータにドリルするための Discoverer Desktop のポインタであることを指定できます。

注意: データベース外部にあるデータへのドリル (および外部アプリケーションの起動によるデータの表示) が可能なのは、Discoverer Desktop を使用している場合のみです。

アイテムの基礎となる列のデータの場所を指定するには、そのアイテムのコンテンツ・タイプ・プロパティを次のように設定します (詳細は、「[「アイテム・プロパティ」ダイアログ](#)」を参照)。

- 列にデータを含むように指定する場合は、「なし」を選択します。
- Discoverer Desktop の使用時に、データベース外部にある情報へのポインタ (Microsoft Word 文書または HTML ページなど) を列に含めるように指定する場合は、「ファイル」を選択します。

コンテンツ・タイプ・プロパティが「ファイル」に設定されたアイテムをユーザーが含めるとき、列に含まれるポインタが表示されます。ユーザーがそのポインタをクリックすると、ポインタに関連付けられたアプリケーションが起動されます。たとえば、次のような場合です。

- ポインタがファイル名である場合、ファイル名の拡張子に関連付けられているアプリケーションが起動され、指定のファイルが表示されます（たとえば、ファイル名の拡張子が .doc である場合、指定のファイルを含む Microsoft Word が起動されます）。
- ポインタが URL である場合、ユーザーの Web ブラウザが起動され、指定のページが表示されます。

アイテムのコンテンツ・タイプが「FILE」である場合は、代替表示値を設定することもできます。Discoverer では、ファイル参照または URL のかわりにワークシートの代替表示値に挿入した値が表示されます。

注意: URL をわかりやすいものに変更する場合は、内容を表すようなタイトルをワークシート・アイテムの値に指定できます。たとえば、デフォルトのワークシート・アイテム値「YReport.doc」を「ここをクリックするとワードパッドにレポートが表示されます」に変更できます。ワークシート・アイテム値にわかりやすいタイトルを指定するには、「**アイテム・プロパティ**」ダイアログを表示して、「**代替表示値**」フィールドにタイトルを入力します。

注意

列のデータ型が LONG RAW である場合、次のような異なる種類のデータを列に含めることができます。

- BFILE データ – データベース外部に格納されている大きいバイナリ・ファイルへのロケータです。BFILE データにより、データベース・サーバーに常駐する外部 LOB（ラージ・オブジェクト）へのバイト・ストリーム I/O アクセスが可能になります。BFILE データの最大サイズは 4GB です。
- BLOB データ – バイナリ・ラージ・オブジェクトです。BLOB データの最大サイズは 4GB です。
- CLOB データ – シングルバイト・キャラクタを含むキャラクタ・ラージ・オブジェクトです。固定幅と可変幅の両方のキャラクタ・セットがサポートされています。両方とも CHAR データベース・データ型を使用します。CLOB データの最大サイズは 4GB です。
- NCLOB データ – マルチバイト・キャラクタを含むキャラクタ・ラージ・オブジェクトです。固定幅と可変幅の両方のキャラクタ・セットがサポートされています。両方とも NCHAR データベース・データ型を使用します。各国語キャラクタ・セット・データが格納されます。NCLOB データの最大サイズは 4GB です。

アイテムの基礎となる列のデータ型が LONG RAW である場合、Discoverer によりアイテムのコンテンツ・タイプ・プロパティの追加オプション（つまり、「ファイル」と「なし」に追加されるオプション）が提供されます。これらのオプションを使用すれば、列の内容を表示するために起動するアプリケーションを Discoverer Desktop が決定する方法を指定できます。たとえば、アイテムのコンテンツ・タイプ・プロパティとして DOC を選択した場合、.doc 拡張子に関連付けられているアプリケーション（通常は Microsoft Word）が起動されます。

EUL アイテム名の自動生成および自動更新

一部の EUL アイテム名は、基礎となるアイテムの名前に基づいて自動的に生成できます。たとえば、結合に関係する 2 つのフォルダ名から、目的に合った結合名を自動的に生成できます。

この項では、次の項目について説明します。

- 「1 次要素と 2 次要素」
- 「名前自動生成」プロパティの機能
- 「2 次要素に対する「名前自動生成」プロパティ値の設定方法」
- 「名前自動生成」プロパティのデフォルト値を「はい」に設定する方法
- 「ロード・ウィザードを使用したビジネスエリアの作成時に行われる処理」

- 「既存のビジネスエリアのすべての2次要素に対して「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定する方法」
- 「「名前の自動生成」プロパティに関する注意」

1 次要素と2次要素

1次要素は、End User Layer (EUL) のフォルダまたはアイテムです。

次の要素は、2次要素として定義されます。

- 結合
- 複合フォルダ・アイテム
- アイテム階層
- アイテム階層ノード
- 日付階層テンプレート
- 日付階層アイテム
- アイテム・クラス

「名前の自動生成」プロパティの機能

「名前の自動生成」プロパティを使用すると、1次要素名の変更に応じて2次要素の名前を自動的に更新できます。「名前の自動生成」プロパティは、Discoverer Administrator を使用して2次要素に適用されます（値を「はい」または「いいえ」に設定できます）。2次要素に対して「名前の自動生成」プロパティの値を「はい」に設定すると、1次要素名（2次要素に使用されているフォルダ名やアイテム名など）を使用して2次要素名が生成されます。

たとえば、DEPT.DEPTNO->EMP.DEPTNO という結合名が表示されているとします。EMP および DEPT は1次要素（フォルダやアイテムなど）、DEPTNO は結合に使用される外部キーです。この結合に対して「名前の自動生成」プロパティの値が「はい」に設定されている場合は、1次要素名を EMP から EMPLOYEE に変更すると、この結合名が DEPT.DEPTNO->EMPLOYEE.DEPTNO に自動的に更新されます。

注意: デフォルトでは、「名前の自動生成」プロパティの値は「いいえ」に設定されています。

2次要素に対する「名前の自動生成」プロパティ値の設定方法

(2次要素名の導出元の) 1次要素名が変更されるたびに2次要素名が自動的に更新されるように、2次要素に対する「名前の自動生成」プロパティの値を「はい」に設定することが必要になる場合があります。

2次要素に対する「名前の自動生成」プロパティの値を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「名前の自動生成」プロパティの値を設定する2次要素を選択します。
詳細は、「1次要素と2次要素」を参照してください。
2. 選択した2次要素の「プロパティ」ダイアログを表示します。
3. 「名前の自動生成」ドロップダウン・リストから値を選択し、「OK」をクリックして選択内容を確認します。

たとえば、「はい」を選択すると、(2次要素名の導出元の) 1次要素名が変更されるたびに、2次要素名が自動的に更新されます。

「名前の自動生成」プロパティのデフォルト値を「はい」に設定する方法

新しい2次要素を作成するために、「名前の自動生成」プロパティのデフォルト値を「はい」に設定することが必要になる場合があります。

「名前の自動生成」プロパティのデフォルト値を「はい」に設定する手順は、次のとおりです。

1. 「[Discoverer Administrator](#) および [Discoverer Desktop](#) のレジストリ設定の編集方法」の手順に従ってください。

注意: レジストリに `AutogenNameOnCreate` レジストリ設定が存在し、その値が1に設定されている必要があります。`AutogenNameOnCreate` レジストリ設定がレジストリにない場合は、その設定を作成して値を1に設定する必要があります。`AutogenNameOnCreate` レジストリ設定は、`HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Oracle¥Discoverer 10¥Database` にあり、タイプは `REG_DWORD` です。

注意

- レジストリに `AutogenNameOnCreate` レジストリ設定があり、値が1に設定されている場合は、次のことが実行されます。
 - `Discoverer` サンプル・データをインストールすると、すべての2次要素に対する「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されます。
 - 2次要素を作成すると、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されます。
- `EUL Command Line for Java` (または `Discoverer` コマンドライン・インタフェース) で `/auto_gen_name` コマンド修飾子を使用して、`EUL` オブジェクトをエクスポートした後にインポートすると、エクスポートおよびインポートした `EUL` オブジェクトに含まれているすべての2次要素に対して、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されます (詳細は、「[既存のビジネスエリアのすべての2次要素に対して「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定する方法](#)」を参照)。`Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java` または `Oracle Business Intelligence Discoverer` コマンドライン・インタフェースを使用して、`EUL` オブジェクトをインポートする場合、`AutogenNameOnCreate` レジストリ設定は、「名前の自動生成」プロパティに影響を与えないことに注意してください。

ロード・ウィザードを使用したビジネスエリアの作成時に行われる処理

ロード・ウィザードを使用してビジネスエリアを作成する際、`AutogenNameOnCreate` レジストリ設定が1に設定されている場合は、すべての2次要素に対する「名前の自動生成」プロパティが自動的に「はい」に設定されます。

`Discoverer` レジストリ設定の編集の詳細は、「[Discoverer Administrator](#) および [Discoverer Desktop](#) のレジストリ設定の編集方法」を参照してください。

既存のビジネスエリアのすべての2次要素に対して「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定する方法

各2次要素に対して一度に1つずつプロパティを設定することで、既存のビジネスエリアのすべての2次要素に対して「名前の自動生成」プロパティを設定することが必要になる場合があります。ただし、すべての2次要素に対して一度にこのプロパティを設定するほうが速やかに実行できます。

既存のビジネスエリアのすべての2次要素に対して「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定する手順は、次のとおりです。

1. 自動生成する2次要素が含まれている `EUL` オブジェクトをエクスポートします。
 .EEX ファイルへの `EUL` オブジェクトのエクスポートの詳細は、「[エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法](#)」を参照してください。

2. EUL Command Line for Java (または Discoverer コマンドライン・インタフェース) を使用して、.EEX ファイルにエクスポートした EUL オブジェクトをインポートします。

.EEX ファイルへの EUL オブジェクトのインポートの詳細は、次のコンポーネントで確認してください。

- Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java
詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース
(「Discoverer コマンドライン・インタフェースによる End User Layer オブジェクトのインポート方法」を参照)

注意: インポート・コマンドには、/auto_gen_name コマンド修飾子を使用する必要があります。/auto_gen_name コマンド修飾子を使用して EUL オブジェクトをインポートすると、各 2 次要素に対する「名前の自動生成」プロパティが (現在の設定に関係なく) 「はい」に設定されます。

注意: Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java または Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して、EUL オブジェクトをインポートする場合、AutogenNameOnCreate レジストリ設定は「名前の自動生成」プロパティに影響を与えません。

次の例は、/auto_gen_name コマンド修飾子を使用して EUL オブジェクトをインポートする典型的な Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンドを示しています。

```
"D:\Oracle\ORA10\dis51adm" /connect username/password@database /import d:\ba_
export.eex /refresh /auto_gen_name /show_progress
```

Discoverer EUL Command Line for Java および Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用方法は、「使用可能な Discoverer コマンドライン・インタフェース」を参照してください。

「名前の自動生成」プロパティに関する注意

- 2 次要素に対して「名前の自動生成」プロパティ値を「はい」に設定すると、「プロパティ」ダイアログの「名前」フィールドは読取り専用になります。ただし、2 次要素名は、ワークエリアで選択して直接編集することで更新できます。2 次要素に対する「名前の自動生成」プロパティは、自動的に「いいえ」にリセットされます。
- 1 次要素に対する「名前の自動生成」プロパティは、「いいえ」に設定され、読取り専用です。
- 「プロパティ」ダイアログで生成された日付階層アイテムに対する「名前の自動生成」プロパティは編集可能です。日付階層テンプレートを日付アイテムに関連付けた場合、生成される日付階層は、Discoverer が生成した日付アイテムになります (日付階層の作成の詳細は、「日付階層」を参照)。
- 別の 2 次アイテムに依存している 2 次アイテムに対して、「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定することもできます。2 次アイテムの名前を変更すると、その「名前の自動生成」プロパティは「いいえ」になります。ただし、依存 2 次アイテムは、その名前変更を引き続き継承します。
- アイテムに対して「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合、そのアイテムは、他のアイテムとは異なる色 (Windows のデフォルトの配色が適用される場合は青など) でワークエリアに表示されます。
- 1 次アイテムを複合フォルダにドラッグすると、複合フォルダ内の新しい 2 次アイテムに対する「名前の自動生成」プロパティは自動的に「はい」に設定されます (AutogenNameOnCreate レジストリ設定がレジストリに存在し、値が 1 に設定されている場合)。詳細は、「「名前の自動生成」プロパティのデフォルト値を「はい」に設定する方法」を参照してください。

- インポート・ウィザードを使用して、既存のビジネスエリアの2次アイテムに対する「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定することはできません（詳細は、「[既存のビジネスエリアのすべての2次要素に対して「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定する方法](#)」を参照）。
- Discoverer リリース 10.1.2 を使用して作成されたビジネスエリアをロードする場合（および AutogenNameOnCreate レジストリ設定に 1 の値が設定されている場合）は、Discoverer リリース 9.0.4 を使用しないでください。

たとえば、Discoverer をリリース 10.1.2 にアップグレードし、（AutogenNameOnCreate レジストリ設定に 1 の値を設定した後に）ビジネスエリアをロードまたはサンプル・データをインストールして、次に Discoverer リリース 9.0.4 を使用してビジネスエリアまたはチュートリアルにアクセスすると、すべてに同じ名前（AUTOGENERATE_NAME など）が使用されているように見えるフォルダが表示されます。これを回避するには、同じ（またはそれ以下の）リリースの Discoverer を使用して作成されたビジネスエリアのみをロードしてください。

アイテム・プロパティの編集方法

アイテム・プロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「データ」ページでアイテムをクリックし、「編集」→「プロパティ」を選択して、「[アイテム・プロパティ](#)」ダイアログを表示します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

注意: 複数のアイテムを選択した場合、それらの各アイテムに共通のプロパティがすべて表示されます。フィールドのデータが、選択された各アイテムに共通でない場合、フィールドには何も表示されません。

図 9-1 「アイテム・プロパティ」ダイアログ



2. 必要な変更を行います。

注意: アイテムの名前を変更すると、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている2次要素名（結合、複合フォルダ内のアイテムなど）も変更されます（詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照）。

3. 「OK」をクリックします。

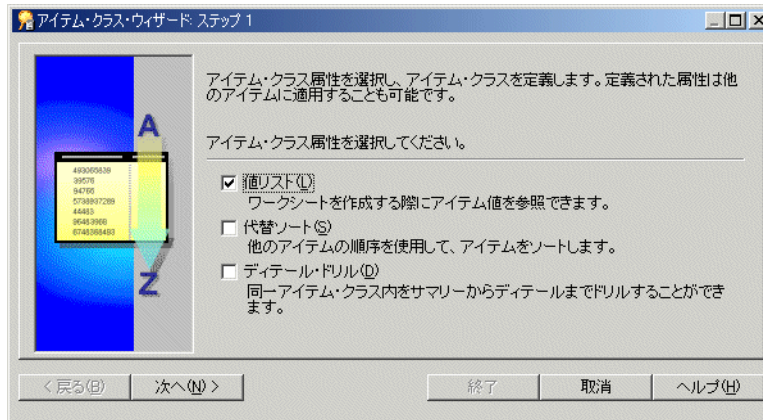
値リスト・アイテム・クラスの作成方法

値リスト・アイテム・クラスを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」 → 「アイテム・クラス」 を選択して、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログを表示します。

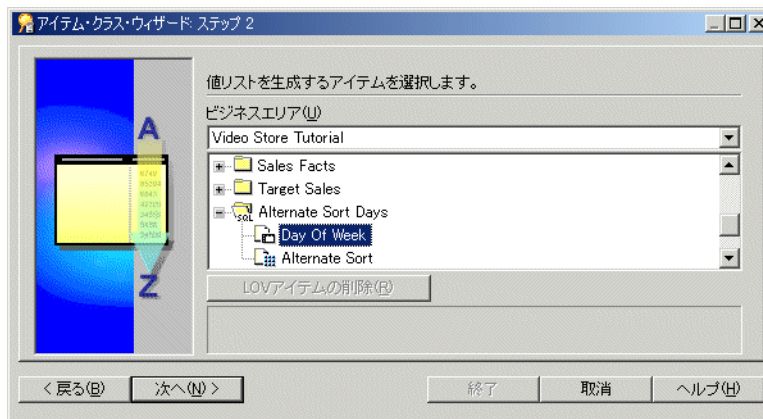
「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ（値リストを生成するアイテムの選択）が表示された場合は、「戻る」 ボタンを押します。

図 9-2 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



2. 「値リスト」 チェックボックスを選択します。
3. 「次へ」 をクリックして、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ（値リストを生成するアイテムの選択） を表示します。

図 9-3 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



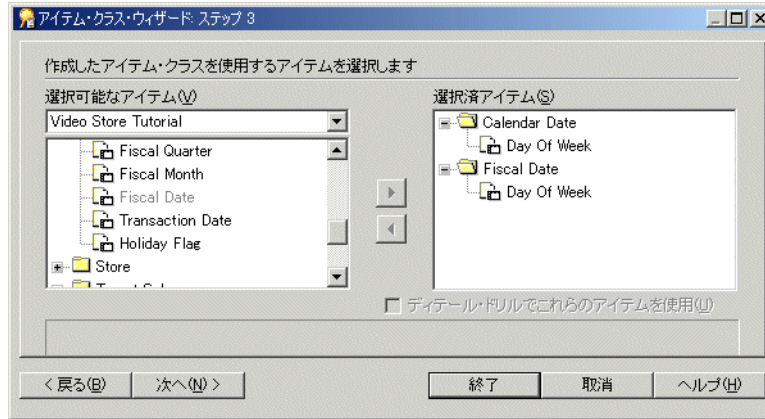
4. ドロップダウン・リストから、値リストの生成に使用するアイテムを含むビジネスエリアを選択します。
5. 値リストの生成に使用するアイテムを選択します。

注意: Discoverer ではデフォルトで、値リストの取出しに SELECT DISTINCT クエリーが使用されます。重複しない値の数と比べて多数の行を含むフォルダ内のアイテムを選択した場合、このクエリーの効率が悪くなることがあります。大きいテーブルを使用するよりも、小さいテーブル（多数の行を含むフォルダに結合されている）からアイテムを選択するほうが効率的です。小さいテーブルがない場合、小さいテーブルを作成すれば値リストの処理速度を向上させることができます。

また、値の数が少ない場合は、カスタム・フォルダを使用して End User Layer 内にローカルな値リストを作成します。詳細は、「[カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法](#)」を参照してください。

- 「次へ」をクリックして、「[アイテム・クラス・ウィザード:ステップ3](#)」ダイアログ (この[アイテム・クラスを使用するアイテムの選択](#)) を表示します。

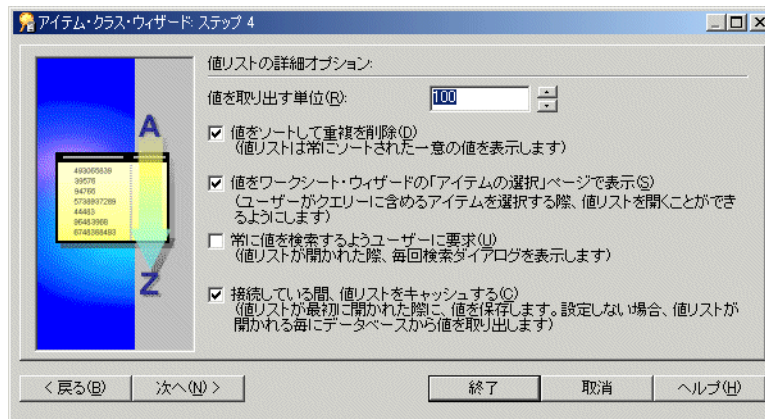
図 9-4 「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ3」ダイアログ



注意: アイテム・クラス・ウィザードの最初のページで「[ディテール・ドリル](#)」チェックボックスも選択した場合、エンド・ユーザーはこのページで選択したアイテム間をドリルできるようになります。

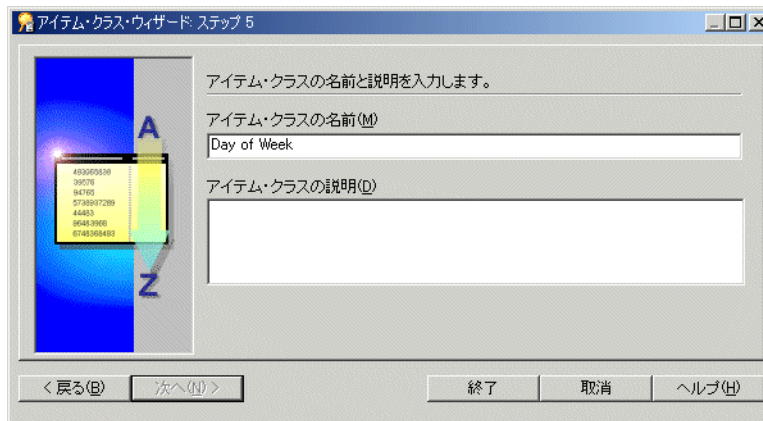
- このアイテム・クラスを使用するアイテムを、「[選択可能なアイテム](#)」リストから「[選択済アイテム](#)」リストに移動します。
- 「次へ」をクリックして、「[アイテム・クラス・ウィザード:ステップ4](#)」ダイアログ ([値リストの詳細オプション](#)) を表示し、Discoverer Plus での値リストの選択および表示方法を制御するオプションを指定します。

図 9-5 「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ4」ダイアログ



- グループとして取り出す値の数を指定し、必要に応じてその他のチェックボックスを選択します。
- 「次へ」をクリックして、「[アイテム・クラス・ウィザード:ステップ5](#)」ダイアログ ([名前と説明の入力](#)) を表示し、新しいアイテム・クラスの名前と説明を指定します。

図 9-6 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 5」 ダイアログ



11. 新しいアイテム・クラスの名前と説明を入力します。
12. 「終了」をクリックします。
Discovererにより、新しい「値リスト」のアイテム・クラスが作成されます。

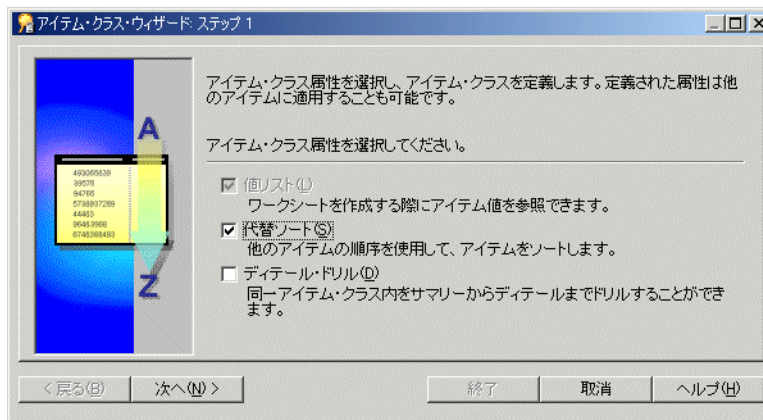
代替ソート・アイテム・クラスの作成方法

代替ソート・アイテム・クラスを使用すれば、代替ソート基準に基づいて値リストをソートできます。

代替ソート・アイテム・クラスを作成する手順は、次のとおりです。

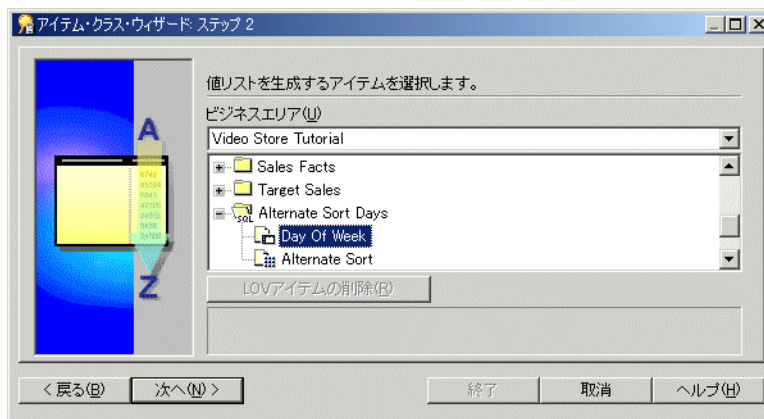
1. 「挿入」→「アイテム・クラス」を選択して、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 1」ダイアログを表示します。

図 9-7 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



2. 「代替ソート」チェックボックスを選択します。
注意: 「代替ソート」チェックボックスを選択すると、「値リスト」チェックボックスが自動的に選択されます。
3. 「次へ」をクリックして、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ (値リストを生成するアイテムの選択) を表示します。

図 9-8 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



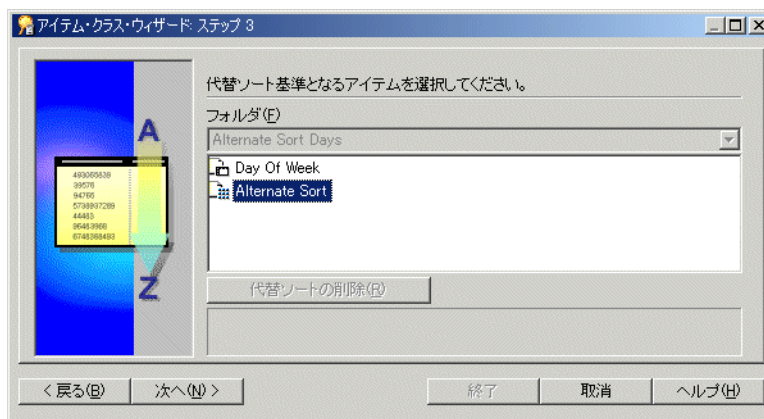
4. ドロップダウン・リストから、値リストの生成に使用するアイテムを含むビジネスエリアを選択します。
5. 値リストの生成に使用するアイテムを選択します。

注意: Discoverer では、値リストの取出しに SELECT DISTINCT クエリーが使用されます。重複しない値の数と比べて多数の行を含むフォルダ内のアイテムを選択した場合、このクエリーの効率が悪くなる場合があります。大きいテーブルを使用するよりも、小さいテーブル（多数の行を含むフォルダに結合されている）からアイテムを選択するほうが効率的です。小さいテーブルがない場合、小さいテーブルを作成すれば値リストの処理速度を向上させることができます。

また、値の数が少ない場合は、カスタム・フォルダを使用して End User Layer 内にローカルな値リストを作成します。詳細は、「[カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法](#)」を参照してください。

6. 「次へ」をクリックして、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ（代替ソート基準となるアイテムの選択）を表示します。

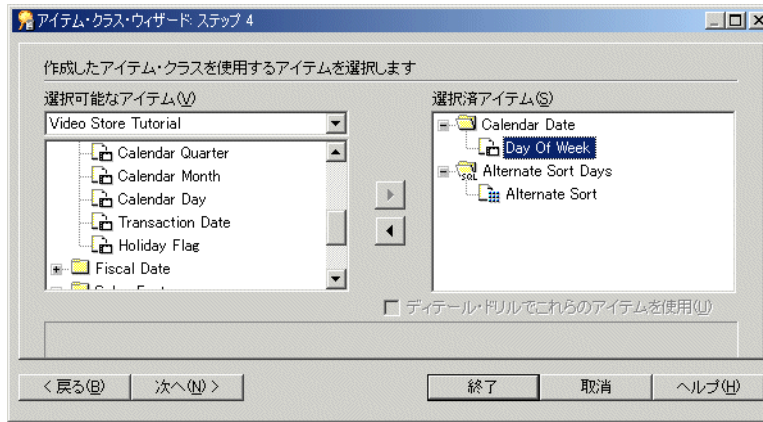
図 9-9 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



7. 代替ソート基準を含んでいるアイテムを選択します。
このアイテムは、次の条件を満たす必要があります。
 - すでにデータベース内に存在していること
 - 値リストを生成するアイテムと同じフォルダ内にあること
 - 値リストを含むアイテムとの 1 対 1 の関係があること

- 「次へ」をクリックすると、「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ4」ダイアログ (このアイテム・クラスを使用するアイテムの選択) が表示されます。

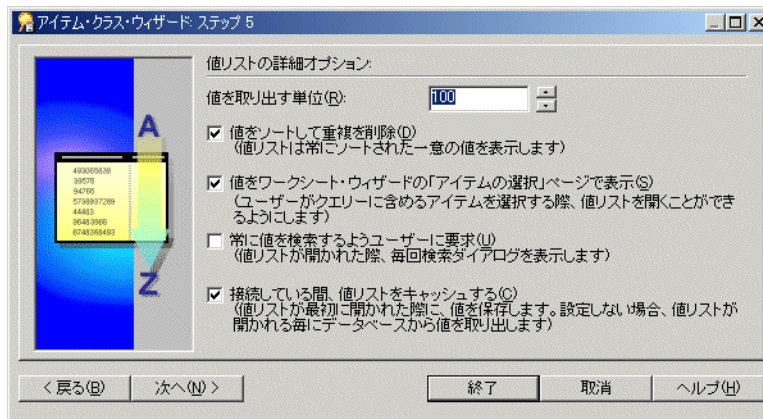
図 9-10 「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ4」ダイアログ



注意: アイテム・クラス・ウィザードの最初のページで「ディテール・ドリル」チェックボックスを選択した場合、エンド・ユーザーはこのページで選択したアイテム間をドリルできるようになります。

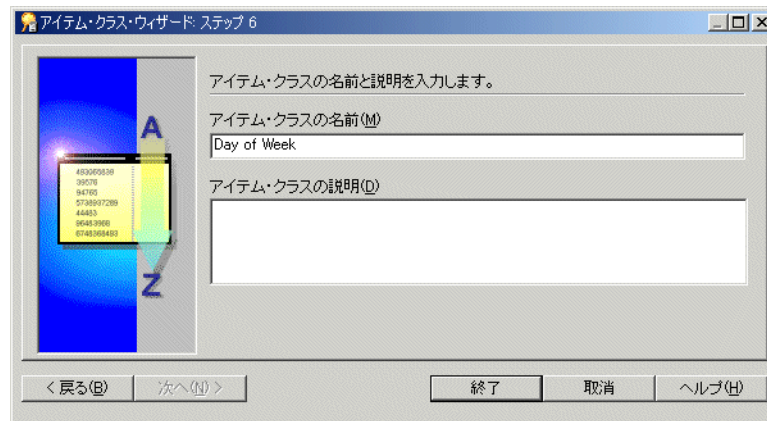
- このアイテム・クラスを使用するアイテムを、「選択可能なアイテム」リストから「選択済アイテム」リストに移動します。
- 「次へ」をクリックして、「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ5」ダイアログ (値リストの詳細オプション) を表示し、Discoverer Plus での値リストの選択および表示方法を制御するオプションを指定します。

図 9-11 「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ5」ダイアログ



- グループとして取り出す値の数を指定し、必要に応じてその他のチェックボックスを選択します。
- 「次へ」をクリックして、「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ6」ダイアログ (名前と説明の入力) を表示します。

図 9-12 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 6」 ダイアログ



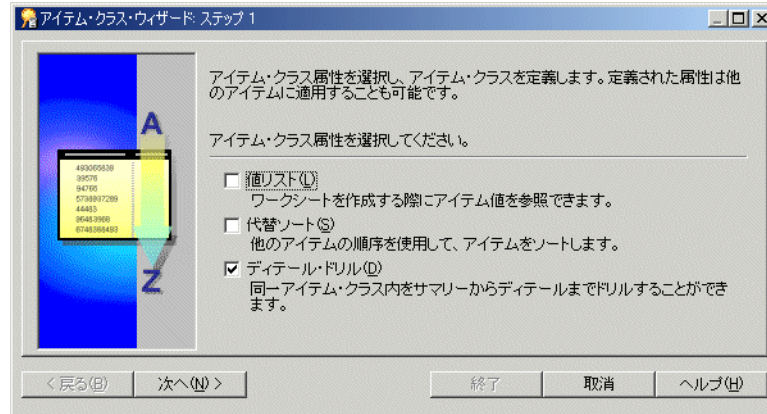
13. 新しいアイテム・クラスの名前と説明を入力します。
14. 「終了」をクリックします。

ディテール・ドリル・アイテム・クラスの作成方法

ディテール・ドリル・アイテム・クラスを作成する手順は、次のとおりです。

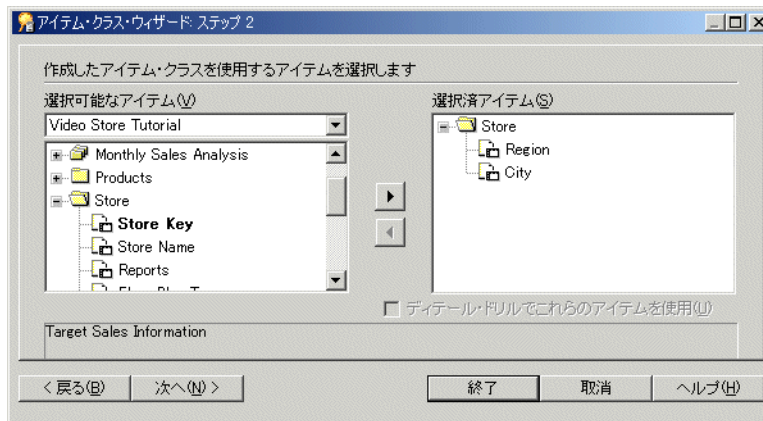
1. 「挿入」 → 「アイテム・クラス」 を選択して、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログを表示します。

図 9-13 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



2. 「ディテール・ドリル」 チェックボックスを選択します。
3. 「次へ」をクリックすると、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ（このアイテム・クラスを使用するアイテムの選択）が表示されます。

図 9-14 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ

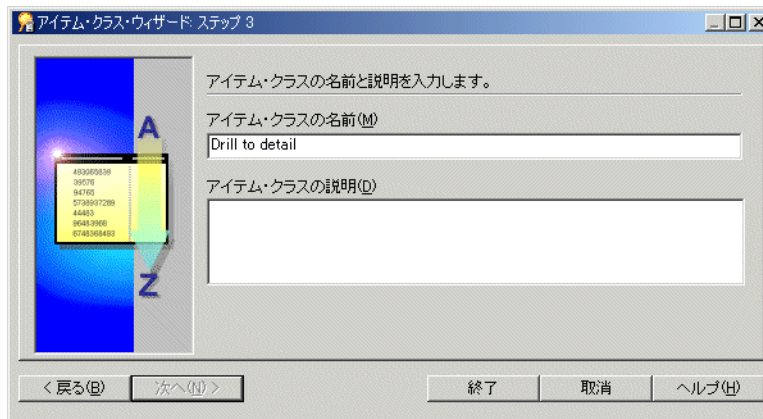


- このアイテム・クラスを使用するアイテムを、「選択可能なアイテム」リストから「選択済アイテム」リストに移動します。

注意: エンド・ユーザーは、このページで選択したアイテム間をドリルできるようになります。

- 「次へ」をクリックすると、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (名前と説明の入力) が表示されます。

図 9-15 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



- 新しいアイテム・クラスの名前と説明を入力します。
- 「終了」をクリックします。

カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法

この代替方法は、値の数が少ない場合に役立ちます。カスタム・フォルダを使用して、End User Layer 内にローカルな値リストを作成できます。

たとえば、North、South、East および West の値リストが必要な場合は、Region_lov というカスタム・フォルダを作成し、次のような SQL 文を入力します。

- 「ワークエリア」の「データ」ページで、「挿入」→「フォルダ」→「カスタム」を選択して、「カスタム・フォルダ」ダイアログを表示します。

2. 「カスタム・フォルダ」ダイアログに次の SQL 文を入力します。

```
SELECT 'NORTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'SOUTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'EAST' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'WEST' REGION FROM sys.dual
```

このクエリーにより、1つのアイテム **Region** が作成されます。このアイテムを、値リストとして使用できます。これにより、パフォーマンスを最適化できます。

カスタム・フォルダの詳細は、「[カスタム・フォルダ](#)」を参照してください。

3. 「検証」をクリックして、SQL 文をチェックします。
4. 「OK」をクリックします。

アイテム・クラスの編集方法

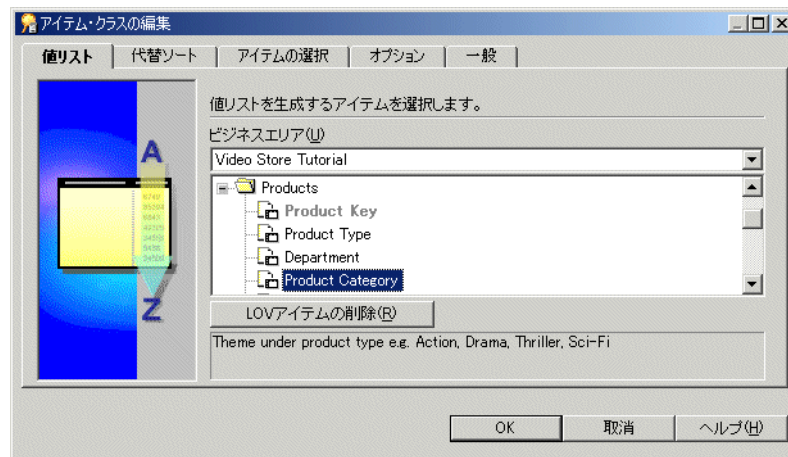
既存のアイテム・クラスを編集する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「[データ](#)」タブで、編集するアイテム・クラスをクリックし、「編集」→「編集」を選択して、「アイテム・クラスの編集」ダイアログを表示します。

注意：「アイテム・クラスの編集」ダイアログは、5つのタブで構成されています。これらのタブは、アイテム・クラス・ウィザードのページと似ています。これらのタブを使用すれば、アイテム・クラスの作成時に指定した設定を編集できます。

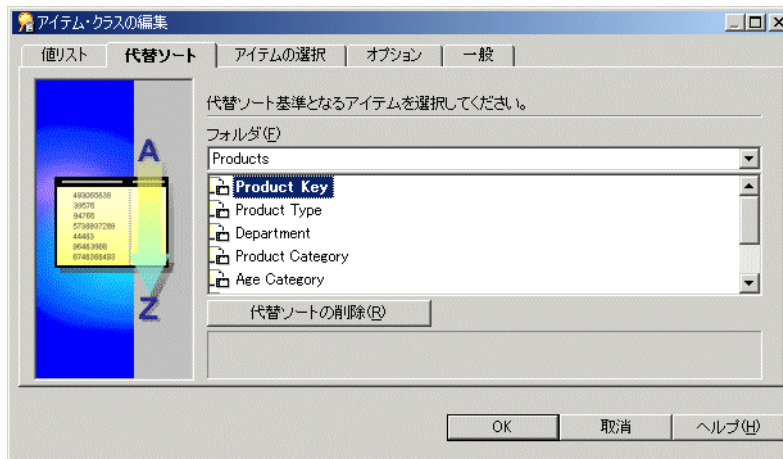
2. 「[アイテム・クラスの編集](#)」ダイアログ：「[値リスト](#)」タブを表示して、選択したアイテム・クラスで使用される値リストを変更します。

図 9-16 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ：「値リスト」タブ



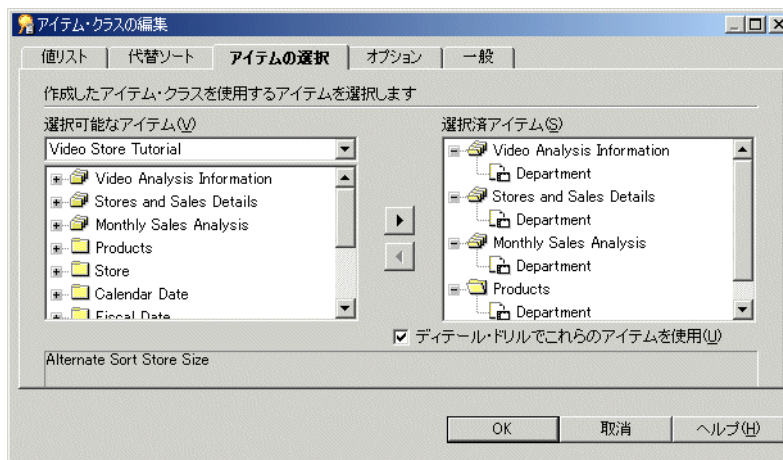
3. 「[アイテム・クラスの編集](#)」ダイアログ：「[代替ソート](#)」タブを表示して、選択したアイテム・クラスの値リストに割り当てられた代替ソート基準を変更します。

図 9-17 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「代替ソート」タブ



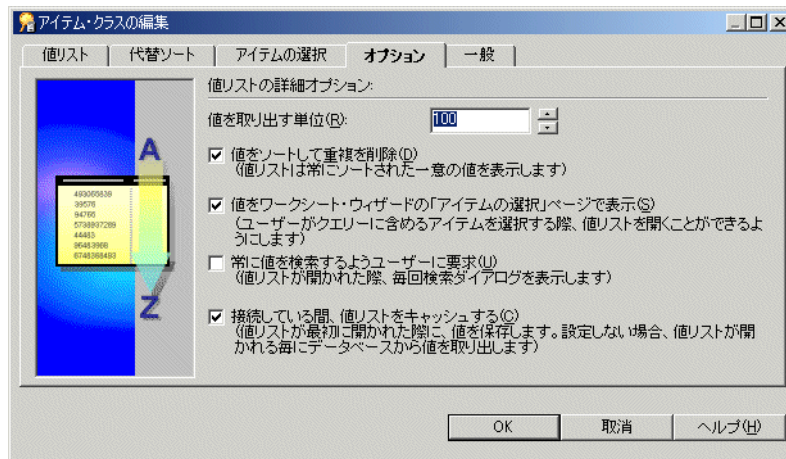
4. 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「アイテムの選択」タブを表示して、選択したアイテム・クラスを使用するアイテムを追加または削除します。

図 9-18 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「アイテムの選択」タブ



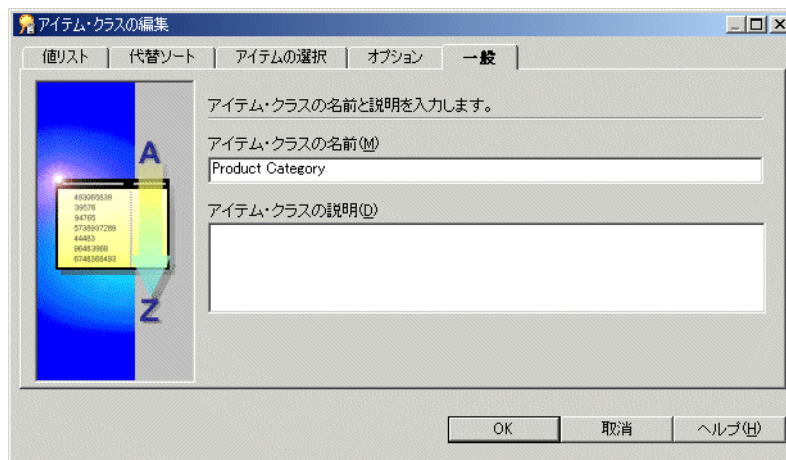
5. 「ディテール・ドリルでこれらのアイテムを使用」チェックボックスを選択して、このアイテム・クラスに所属するアイテム間のディテール・ドリルを可能にします（可能にしない場合は、選択を解除します）。
6. 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブを表示して、必要に応じて値リストの詳細オプションを設定します。

図 9-19 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブ



7. 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「一般」タブを表示して、選択したアイテム・クラスの名前と説明を変更します。

図 9-20 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「一般」タブ



8. 「OK」をクリックします。

アイテム・クラスにアイテムを追加する方法

次のいずれかの方法でアイテムをアイテム・クラスに追加します。

- 「ドラッグ・アンド・ドロップを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法」
- 「「アイテム・クラスの編集」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法」
- 「「アイテム・プロパティ」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法」

ドラッグ・アンド・ドロップを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法

1. 「ウィンドウ」→「新しいウィンドウを開く」を選択して、2つ目の「ワークエリア」を表示します。
2. 一方の「ワークエリア」の「データ」タブを選択します。
3. もう一方の「ワークエリア」の「アイテム・クラス」タブを表示します。
4. アイテム・クラスに追加するアイテム（1つまたは複数）を最初のワークエリアの「データ」タブで選択します。
5. 「データ」タブから2番目のワークエリアの「アイテム・クラス」タブのアイテム・クラスにアイテムをドラッグします。
6. 「ワークエリア」ウィンドウの1つを閉じます。

「アイテム・クラスの編集」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法

1. **ワークエリア:** 「データ」タブで、編集するアイテム・クラスをクリックし、「編集」→「編集」を選択します。
2. **「アイテム・クラスの編集」ダイアログ:** 「アイテムの選択」タブを表示します。
3. アイテムを「選択可能なアイテム」リストから「選択済アイテム」リストに移動して、このアイテム・クラスに追加します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

注意: 「選択可能なアイテム」ドロップダウン・リストを使用すると、開いている任意のビジネスエリアからアイテムを選択できます。

4. 「OK」をクリックします。

詳細は、「[アイテム・クラスの編集方法](#)」を参照してください。

「アイテム・プロパティ」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法

1. **ワークエリア:** 「データ」タブで、アイテム・クラスに追加するアイテム（1つまたは複数）を選択します。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択すると、「アイテム・プロパティ」ダイアログが表示されます。
3. 「アイテム・クラス」フィールドを使用して、選択したアイテム（1つまたは複数）が所属するアイテム・クラスを指定します。
4. 「OK」をクリックします。

詳細は、「[アイテム・プロパティの編集方法](#)」を参照してください。

アイテム・クラスからアイテムを削除する方法

次のいずれかの方法でアイテム・クラスからアイテムを削除します。

- 「ポップアップ・メニューを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法」
- 「[「アイテム・クラスの編集」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法](#)」
- 「[「アイテム・プロパティ」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法](#)」

ポップアップ・メニューを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法

1. ワークエリア: 「データ」 タブを表示します。
2. アイテムを削除するアイテム・クラスの隣のプラス記号 (+) をクリックします。
3. プラス記号 (+) をクリックして、「このアイテム・クラスを使用しているアイテム (ディテール・ドリルを使用)」 オブジェクトを展開します。
4. アイテム・クラスから削除するアイテムを選択します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。
5. 選択したアイテムの1つを右クリックし、ポップアップ・メニューで「アイテムの削除」を選択します。
6. 「削除の確認」 ダイアログが表示されます。
詳細は、「アイテムとアイテム・クラスの削除方法」を参照してください。

「アイテム・クラスの編集」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法

1. ワークエリア: 「データ」 タブをクリックします。
2. 編集するアイテム・クラスをクリックし、「編集」 → 「編集」を選択します。
3. 「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「アイテムの選択」タブを表示します。
4. このアイテム・クラスから削除するアイテムを、「選択済アイテム」リストから「選択可能なアイテム」リストに移動します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。
5. 「OK」をクリックします。
詳細は、「アイテム・クラスの編集方法」を参照してください。

「アイテム・プロパティ」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法

1. ワークエリア: 「データ」 タブで、アイテム・クラスから削除するアイテム (1つまたは複数) を選択します。
2. 「編集」 → 「プロパティ」を選択すると、「アイテム・プロパティ」ダイアログが表示されます。
3. 「アイテム・クラス」フィールドで「なし」を指定します。
4. 「OK」をクリックします。
詳細は、「アイテム・プロパティの編集方法」を参照してください。

アイテム・クラスを使用するアイテムの表示方法

特定のアイテム・クラスを使用するアイテムを表示する手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア: 「データ」 タブで、展開するアイテム・クラスの隣のプラス記号 (+) をクリックします。
アイテム・クラスの下に次の2つのオブジェクトが表示されます。
 - 「値リスト」
 - このアイテム・クラスを使用しているアイテム (ディテール・ドリルを使用)

2. 「このアイテム・クラスを使用しているアイテム (ディテール・ドリルを使用)」の隣のプラス記号 (+) をクリックして、このアイテム・クラスに所属するアイテムのリストを表示します。

アイテムの値リストの表示方法

アイテムの値リストを表示する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**: 「データ」タブで、表示する値リストを持つアイテムを展開します。

注意

- Discoverer では、値リストの取出しに時間がかかることを警告するメッセージが表示されることがあります。値リストの取出し時に、Discoverer によりデータベースに SELECT DISTINCT クエリーが送られます (これにより、アイテムの重複しない値のセットが選択されます)。データベースに多数の値がある場合は、リストの取出しに時間がかかることがあります。End User Layer には、値の取出しにかかる時間が記録されます。この時間が 15 秒以上である場合は、警告が表示されます。この制限時間は、Discoverer Plus の「ツール」→「オプション」→「クエリー管理」で変更できます。
- 値リストを表示するアイテムが複数のフォルダに存在する場合は、行数が最も少ないフォルダ内のアイテムを選択します。これにより、最短時間で値リストが返されます。

アイテム・クラスの値リストの表示方法

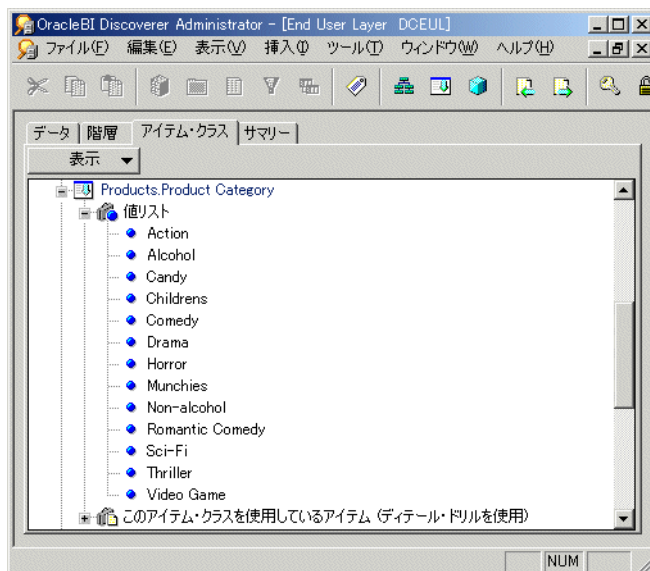
アイテム・クラスに関連付けられた値リストを表示する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**: 「データ」タブを表示します。
2. プラス記号 (+) をクリックして、表示する値リストを持つアイテム・クラスを展開します。

アイテム・クラスの下に次の 2 つアイテムが表示されます。

- 「値リスト」
 - このアイテム クラスを使用しているアイテム
3. プラス記号 (+) をクリックし、「値リスト」オブジェクトを展開して、アイテム・クラスの値リストを表示します。

図 9-21 ワークエリア: 値リストが表示されている「アイテム・クラス」タブ



注意

- Discoverer では、値リストの取出しに時間がかかることを警告するメッセージが表示されることがあります。値リストの取出し時に、Discoverer によりデータベースに SELECT DISTINCT クエリーが送られます（これにより、アイテムの重複しない値のセットが選択されます）。データベースに多数の値がある場合は、リストの取出しに時間がかかることがあります。End User Layer には、値の取出しにかかる時間が記録されます。この時間が 15 秒以上である場合は、警告が表示されます。この制限時間は、Discoverer Plus の「ツール」→「オプション」→「クエリー管理」で変更できます。

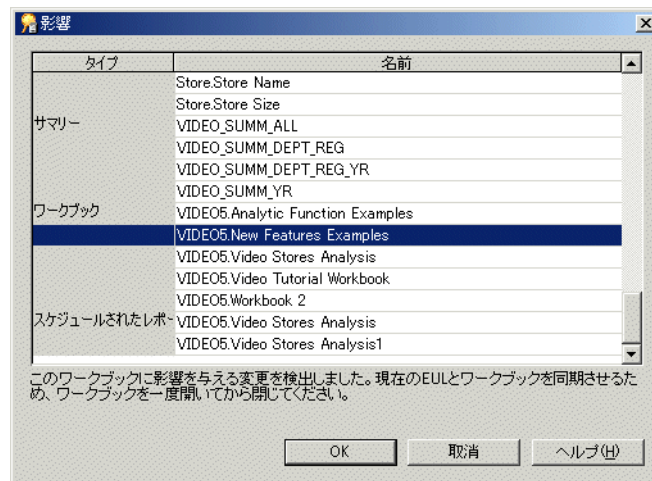
アイテムとアイテム・クラスの削除方法

アイテムとアイテム・クラスを削除する手順は、次のとおりです。

1. 次の手順で、アイテム（1 つまたは複数）またはアイテム・クラス（1 つまたは複数）を選択します。
 - ワークエリア: 「データ」タブから削除するアイテムを選択します。
 - ワークエリア: 「データ」タブから削除するアイテム・クラスを選択します。

同時に複数のアイテムまたはアイテム・クラスを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムまたはアイテム・クラスをクリックします。
2. 「編集」→「削除」を選択して、「削除の確認」ダイアログを開きます。
3. (オプション) 選択したアイテムまたはアイテム・クラスの削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。

図 9-22 「影響」ダイアログ



「影響」ダイアログを使用すれば、アイテムまたはアイテム・クラスの削除による影響を受ける可能性のある他の EUL オブジェクトを確認できます。

注意: 「影響」ダイアログには、ファイル・システム (.dis ファイル内) に保存されたワークブックに対する影響は表示されません。

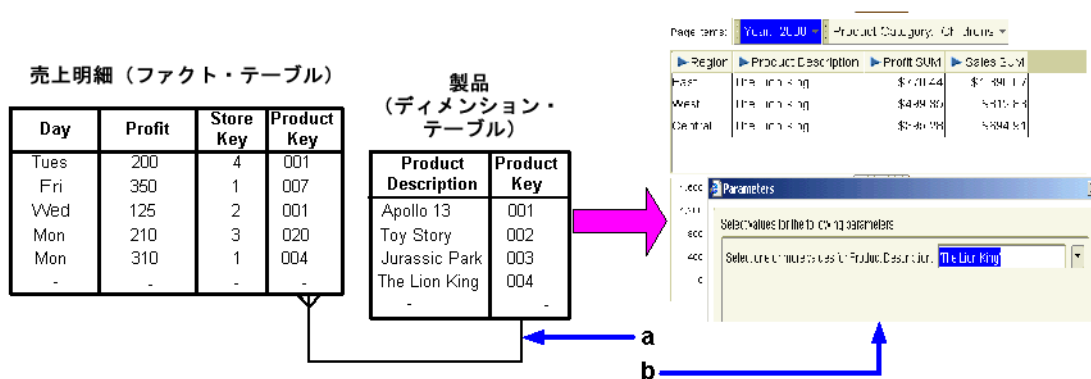
- b. (オプション) 「影響」ダイアログの行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが、リストの一番下に表示されます。
 - c. 削除による影響を確認し、「閉じる」をクリックします。
4. 削除する場合は、「はい」をクリックして、選択したアイテム（1 つまたは複数）またはアイテム・クラス（1 つまたは複数）を削除します。

エンド・ユーザーがワークシートでパラメータ値を選択したときのパフォーマンスの向上

エンド・ユーザーがパラメータの値を選択したときの Discoverer のパフォーマンスを向上させるには、索引付きアイテムをパラメータの基になるフォルダ・アイテムに割り当てます。

次の図は、ワークシート内でパラメータとして使用されるアイテムに対して、索引付きアイテムを割り当てることで、Discoverer のパフォーマンスが向上させる仕組みを示しています。この図は、数百万の行を含む大規模なファクト・テーブル（売上明細）と、ある程度の行を含む非常に小さいディメンション・テーブル（製品）を持つ典型的なデータベース・スキーマを示しています。

図 9-23 典型的なスキーマの一部



図の解説：

- a. 売上明細テーブルと製品テーブルの間には結合があります。
- b. Discoverer Plus ワークシートではパラメータを使用しています。

エンド・ユーザーが前述のスキーマを使用して、「Product Description = The Lion King」というパラメータ値を選択し、売上明細テーブルから（ワークシートに）行を表示するとします。ただし、売上明細テーブルに「Product Description」はなく、あるのは「Product Key」のみです。したがって、売上明細テーブルで特定の「Product Description」の行を見つけるために、Discoverer では最初に製品テーブルで「Product Description」とその「Product Key」を照合し、次にその「Product Key」を使用して売上明細テーブルで一致する行を返す必要があります。クエリーを実行するファクト・テーブルに数十万または数百万の行がある場合、この操作には時間がかかる可能性があります。

パフォーマンスを向上させるには、エンド・ユーザーがパラメータ値を選択したときに、パラメータが基づいているアイテムに関連付けられている番号（「Product Key」など）をかわりに使用して、ファクト・テーブルにクエリーを実行して行を照合するように指定できます。エンド・ユーザーがワークシートでパラメータ値を選択したときの Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法の詳細は、「索引付きアイテムをアイテムに割り当てる方法」を参照してください。

注意：パラメータの基になっているアイテムが複合フォルダ内にある場合、エンド・ユーザーがこのパラメータを使用して値を選択したときのパフォーマンスを向上させるには、次の作業を完了する必要があります。

- パラメータの基になっているアイテムに割り当てる索引付きアイテムを複合フォルダに格納します。

たとえば、「Product Description」がパラメータの基になっている複合フォルダ内のアイテムである場合、索引付きアイテム「Product Key」（「Products」フォルダ内にある）を複合フォルダに追加します。詳細は、「複合フォルダの作成方法」を参照してください。

- パラメータの基になっている複合フォルダ内のアイテムに索引付きアイテムを割り当てます。
たとえば、「Product Key」アイテムを同じ複合フォルダ内の「Product Description」アイテムに割り当てます。詳細は、「[索引付きアイテムをアイテムに割り当てる方法](#)」を参照してください。
- 複合フォルダ内の索引付きアイテムをエンド・ユーザーに対して非表示にします（詳細は、「[アイテム・プロパティの編集方法](#)」を参照）。
たとえば、複合フォルダ内の「Product Key」アイテムの「**ユーザーに表示**」プロパティの値を「いいえ」に設定します。Discoverer Plus および Discoverer Desktop のユーザーは、ワークシートの作成時に索引付きアイテムを確認する必要はありません。

注意

- エンド・ユーザーがワークシートでパラメータ値として選択する可能性があるフォルダまたは複合フォルダ内のアイテムには、索引付きアイテムを割り当てることをお勧めします。
- アイテムとその索引付きアイテムには、1対1の関係が必要です（例：各「Product Description」には対応する一意の「Product Key」値が必要）。
- 索引付きアイテムをアイテムに割り当てることで、サマリー・フォルダに対する照合の可能性も増加します。
- 索引付きアイテムがクエリーで使用されているかどうかを確認するには、「SQL インспекタ」ダイアログで SQL を表示します（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照）。

索引付きアイテムをアイテムに割り当てる方法

エンド・ユーザーがワークシートでパラメータ値を選択したときの Discoverer のパフォーマンスを向上させるために、（同一フォルダ内の）アイテムに対して、索引付きアイテムを割り当てることができます。詳細は、「[エンド・ユーザーがワークシートでパラメータ値を選択したときのパフォーマンスの向上](#)」を参照してください。

注意：次のスクリーンショットは、索引付きアイテムである「Product Key」を「Product」フォルダの「Product Description」アイテムに割り当てることを前提にしています。また、索引付きアイテムを複合フォルダ内のアイテムに割り当てるときには、次の手順に従う必要があります。

索引付きアイテムをアイテムに割り当てる手順は、次のとおりです。

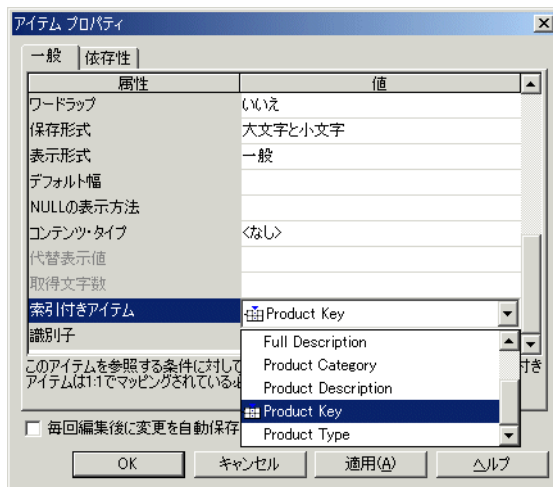
1. **ワークエリア：「データ」タブ**を表示して、索引付きアイテムを割り当てるアイテムが格納されているフォルダを選択します。
2. アイテムをクリックし、「編集」→「プロパティ」を選択して、「[アイテム・プロパティ](#)」ダイアログを表示します。

図 9-24 「アイテム・プロパティ」ダイアログ



3. 「索引付きアイテム」フィールドを選択し、フォルダ内で選択可能な他のアイテムのドロップダウン・リストを表示します。
4. ドロップダウン・リストから、索引付きアイテムとして使用するアイテムを選択します。

図 9-25 索引付きアイテムが表示された「アイテム・プロパティ」ダイアログ



アイテムとその索引付きアイテムには、1対1のマッピングが必要です。この例の場合、各「Product Description」には、対応する一意の「Product Key」値があります。

注意: 次のアイテムを索引付きアイテムとして選択できます。

- データベース内で索引付けされているアイテム

注意: 単一フォルダの場合、このアイテムの隣にアイコンが表示されます。ただし、複合フォルダの場合は、アイテムの隣にアイコンは表示されません。

たいていの場合、アイテムはデータベースの主キーとして定義されます。アイテムが主キーとして定義されているかどうか不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

- データベース内で索引付けされていないアイテム

注意: 単一フォルダの場合、このアイテムの隣にはアイコンが表示されません。ただし、複合フォルダの場合は、データベース内での索引付けの有無に関係なく、アイテムの隣にアイコンは表示されません。したがって、複合フォルダの場合、アイコンが表示されていないことは、アイテムがデータベース内で索引付けされていないことを意味しません。アイテムがデータベース内で索引付けされているかどうか不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

たいていの場合、アイテムは、値の数が少ないアイテムとなります（「Region」、「Department」、「Month」、「Days of the Week」など）。不明点があれば、データベース管理者に問い合わせてください。

5. 「適用」をクリックします。

注意: 同一のアイテムおよび関連する索引付きアイテムが別のフォルダにすでに定義されていることが判明した場合は、「一致する値」ダイアログが表示されます。

注意: 値リスト (LOV) アイテム・クラスが定義されていない「索引付きアイテム」フィールドのドロップダウン・リストからアイテムを選択すると、次の警告ダイアログが表示されます。

図 9-26 警告ダイアログ



6. 前述の警告ダイアログが表示された場合は、「OK」をクリックします。

「索引付きアイテム」フィールドのドロップダウン・リストで選択したアイテムに、LOV アイテム・クラスが自動的に作成されます。LOV アイテム・クラスの作成の詳細は、「値リストの設定」を参照してください。

注意: エンド・ユーザーがワークシート内で、索引付きアイテムに割り当てたアイテムをパラメータとして使用すると、索引付きアイテムにより、Discoverer のパフォーマンスが向上します。

注意: 警告ダイアログで「取消」をクリックすると、「索引付きアイテム」フィールドで選択したアイテムに対して、LOV アイテム・クラスは作成されません。したがって、ワークシート・パラメータのパフォーマンスは向上できません。ただし、索引付きアイテムは、ワークシート内のアイテムをドリルする場合にパフォーマンスを向上させる目的で引き続き使用されます。

7. 「OK」をクリックして、「アイテム・プロパティ」ダイアログを閉じます。

ユーザー定義データ型の列に基づくアイテムに関する注意

テーブルの作成時に、テーブル内の各列についてデータ型を指定する必要があります。Oracle は、多数の組込みデータ型 (NUMBER、DATE、VARCHAR2 など) およびいくつかのカテゴリのユーザー定義データ型 (オブジェクト型、VARRAY、NESTED TABLE など) を提供しています。ユーザー定義データ型は、抽象データ型と呼ばれることがあります。ユーザー定義データ型では、アプリケーションでのデータの構造と動作をモデル化する型の構築ブロックとして、Oracle の組込みデータ型およびその他のユーザー定義データ型が使用されます。

ロード・ウィザードを使用してテーブルに基づく Discoverer フォルダを作成するときには、ユーザー定義データ型の列はすべて無視される (つまり、アイテムがフォルダに作成されない) ことに注意してください。

アイテムとしてユーザー定義データ型の属性を Discoverer フォルダに含める場合は、次のいずれかの処理が必要です。

- カスタム・フォルダを作成し、フォルダの SQL 文を使用して組み込みデータ型で列を定義し、アイテムに適用するユーザー定義データ型の属性にアクセスします（カスタム・フォルダ作成の詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- データベース・ビューを作成し、ビュー定義を使用して組み込みデータ型で列を定義し、アイテムに適用するユーザー定義データ型の属性にアクセスします。ロード・ウィザードの使用時に、そのビューを単一フォルダに基づくオブジェクトとして指定します（ロード・ウィザードの使用方法の詳細は、「[データベースからの単一フォルダの作成方法](#)」を参照）。

ユーザー定義データ型の属性にアクセスするには、適切な構文を熟知する必要があります。ユーザー定義データ型とその属性へのアクセスの詳細は、使用中のデータベースのリリースで提供されている Oracle マニュアルを参照してください。

結合の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用した結合の実装方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「結合」
- 「単一アイテム結合」
- 「マルチアイテム結合」
- 「3つ以上のフォルダの結合」
- 「非等価結合」
- 「1対多結合、1対1結合および多対多結合」
- 「複数の結合を使用した2つのフォルダの結合」
- 「クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響」
- 「複合フォルダからのクエリー結果に結合が影響する例」
- 「外部結合」
- 「結合の作成方法」
- 「結合の表示および編集方法」
- 「結合の削除方法」
- 「ファントラップの概要および Discoverer での処理方法」
- 「ファントラップの例」
- 「複合フォルダ内でファントラップを設定した場合の作業」
- 「結合にデータ型の不一致がある場合の作業」

結合

Discoverer の結合では、1 つ以上の一致するアイテムを使用して 2 つのフォルダを関連付けます。データベースの結合では、一致する列を使用して 2 つのテーブルを関連付けます。

たとえば、DEPT と EMP という 2 つのテーブルを考えてみます。

図 10-1 EMP テーブルと DEPT テーブル

DEPT		EMP		
DEPTNO	DNAME	EMPNO	DEPTNO	ENAME
10	ACCOUNTS	7782	10	CLARK
20	RESEARCH	7934	10	MILLER
30	SALES	7876	20	ADAMS
		7902	20	FORD
		7900	30	JAMES

DEPT テーブルの各部門には、部門名および部門番号が付いています。EMP テーブルの各従業員には名前があり、各自が 1 つの部門に属しています（部門は部門番号で識別します）。

従業員の名前およびその従業員が働く部門の名前を確認するには、両方のテーブルから情報を抽出する必要があります。しかし、同じクエリーで両方のテーブルから情報を抽出できるようにするには、テーブルの間に結合が存在する必要があります。

結合を定義するには、通常は他のテーブルの列と一致する 1 つの列をテーブルの中で指定します。DEPT テーブルと EMP テーブルの例では、DEPT テーブルの DEPTNO 列が EMP テーブルの DEPTNO 列と一致します。つまり、DEPT テーブルの DEPTNO 列の各値には、EMP テーブルの DEPTNO 列に一致する値があります。

図 10-2 DEPTNO 列を使用して結合される EMP テーブルと DEPT テーブル

DEPT		EMP		
DEPTNO	DNAME	EMPNO	DEPTNO	ENAME
10	ACCOUNTS	7782	10	CLARK
20	RESEARCH	7934	10	MILLER
30	SALES	7876	20	ADAMS
		7902	20	FORD
		7900	30	JAMES

結合は、一般にマスター・テーブルとディテール・テーブルで構成されます。マスター・テーブルの 1 行に対し、ディテール・テーブルには複数の行が存在します。前述の例では、DEPT テーブルがマスター・テーブルで EMP テーブルがディテール・テーブルです。各部門には複数の従業員がいるからです。

ディテール・テーブルの一致する列は、一般的に外部キー列と呼ばれます。

Discoverer Administrator を使用して結合を作成するときは、マスター・フォルダ内のアイテムとディテール・フォルダ内の一致するアイテムを識別する結合条件を指定します。次の点に留意することが重要です。

- 正しいフォルダをマスターにして結合を定義すること。クエリーに 2 つ以上のフォルダが使用される場合に不適切なフォルダをマスターに定義していると、誤りやすいまたは誤った結果を受け取る場合があります（詳細は「[ファントラップの概要および Discoverer での処理方法](#)」を参照）。
- 正しい結合オプション詳細を選択すること。これらの詳細により、クエリーの速さを向上するためにサマリー・フォルダを使用できるかどうかも決まります（詳細は「[クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響](#)」を参照）。

2つのフォルダ間に結合を定義すると、次のことが可能になります。

- Discoverer エンド・ユーザーは、両方のフォルダからのアイテムを Discoverer Plus（および Discoverer Desktop）の同じワークシートに含めることができます。
- Discoverer マネージャは、両方のフォルダからのアイテムを含む複合フォルダおよび階層を Discoverer Administrator 内に作成できます。

単一アイテム結合

Discoverer の単一アイテム結合では、両方のフォルダに共通するアイテムを結合条件で指定して、2つのフォルダを関連付けます。結合条件とは、結合演算子によって関連付けられる2つの結合アイテムの組合せです。通常、結合演算子には等号 (=) が使用されるため、このような結合は等価結合と呼ばれます（他の結合演算子の詳細は、「非等価結合」を参照）。

たとえば次のスキーマでは、共通する列である DEPTNO を使用して DEPT テーブルと EMP テーブルを結合します。

図 10-3 単一アイテム結合を使用して結合された2つのテーブルの例

DEPT		EMP		
DEPTNO	DNAME	EMPNO	DEPTNO	ENAME
10	ACCOUNTS	7782	10	CLARK
20	RESEARCH	7934	10	MILLER
30	SALES	7876	20	ADAMS
		7902	20	FORD
		7900	30	JAMES

DEPT テーブルの各部門には、部門名および部門番号が付いています。EMP テーブルの各従業員には名前があり、各自が1つの部門に属しています（部門は部門番号で識別します）。従業員の名前およびその従業員が働く部門の名前を確認するには、EMP テーブルと DEPT テーブルの両方からの情報が必要です。

Discoverer エンド・ユーザーが、すべての従業員の名前と各自が働く部門の名前を次のように表示しようとする場合を想定します。

DNAME	ENAME
ACCOUNTS	CLARK
ACCOUNTS	MILLER
RESEARCH	ADAMS
RESEARCH	FORD
SALES	JAMES

つまり、DEPT.DNAME および EMP.ENAME を表示します。

次の SQL 文により、必要な結果が得られます。

```
select dname, ename
from dept, emp
where
dept.deptno=emp.deptno
```

Discoverer エンド・ユーザーが必要な結果を表示できるようにするには、次のいずれかを行います。

- 前述の SQL 文を含むカスタム・フォルダの作成（詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- DEPT.DEPTNO と EMP.DEPTNO の間の結合条件が1つの結合（単一アイテム結合）の作成（詳細は「[結合の作成方法](#)」を参照）。

結合を定義すると、次のことが可能になります。

- Discoverer Administrator で複合フォルダを作成し、DEPT から DNAME を、EMP から ENAME を複合フォルダにドラッグできます（詳細は「[複合フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- Discoverer エンド・ユーザーがこの複合フォルダを使用できます。あるいは、DEPT から DNAME を、EMP から ENAME を選択することもできます。

マルチアイテム結合

Discoverer のマルチアイテム結合では、すべての結合条件が満たされたときに結合が真になるように、複数の結合条件を使用して2つのフォルダが関連付けられます（結合条件の詳細は、「[単一アイテム結合](#)」を参照）。

たとえば次のスキーマでは、COUNTRY_CODE と PRODUCT_CODE の組合せを使用して、製品を一意に識別します。

図 10-4 マルチアイテム結合を使用して結合された2つのテーブルの例

VIDEO_PRODUCTS		
COUNTRY_CODE	PRODUCT_CODE	DESCRIPTION
10	1000	FR GAME RENTAL
10	2000	FR VIDEO RENTAL
10	3000	FR VIDEO SALES
20	1000	US GAME RENTAL
20	2000	US VIDEO RENTAL
30	1000	UK GAME RENTAL
30	2000	UK VIDEO RENTAL

VIDEO_SALES			
SALES_ORDER_ID	COUNTRY_CODE	PRODUCT_CODE	VALUE
1	30	1000	10
2	20	2000	19
3	10	3000	25
4	10	1000	8

VIDEO_PRODUCTS テーブルのそれぞれの製品には説明があり、国コードと製品コードの組合せで一意に識別されます（製品コードはそれぞれの国コードにおいてのみ一意であることに注意してください）。VIDEO_SALES テーブルのそれぞれの売上は、特定の製品のものです（国コードと製品コードで識別されます）。売上値および販売された製品の説明を確認するには、VIDEO_SALES テーブルと VIDEO_PRODUCTS テーブルの両方からの情報が必要です。

Discoverer エンド・ユーザーが、各売上値および販売された製品の説明を次のように表示しようとする場合を想定します。

「説明」	値
UK GAME RENTAL	10
US VIDEO RENTAL	19
FR VIDEO SALES	25
FR GAME RENTAL	8

つまり、VIDEO_PRODUCTS.DESCRPTION および VIDEO_SALES.VALUE を表示します。

次の SQL 文により、必要な結果が得られます。

```
select description, value
from video_products, video_sales
where
video_products.country_code=video_sales.country_code
and
video_products.product_code=video_sales.product_code
```

Discoverer エンド・ユーザーが必要な結果を表示できるようにするには、次のいずれかを行います。

- 前述の SQL 文を含むカスタム・フォルダの作成（詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- VIDEO_PRODUCTS.COUNTRY_CODE と VIDEO_SALES.COUNTRY_CODE の間および VIDEO_PRODUCTS.PRODUCT_CODE と VIDEO_SALES.PRODUCT_CODE の間の結合条件が 2 つの結合（マルチアイテム結合）の作成（詳細は「[結合の作成方法](#)」を参照）。

マルチアイテム結合を定義すると、次のことが可能になります。

- Discoverer Administrator で複合フォルダを作成し、VIDEO_PRODUCTS から DESCRIPTION を、VIDEO_SALES から VALUE を複合フォルダにドラッグできます（詳細は「[複合フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- Discoverer エンド・ユーザーがこの複合フォルダを使用できます。あるいは、VIDEO_PRODUCTS から DESCRIPTION を、VIDEO_SALES から VALUE を選択することもできます。

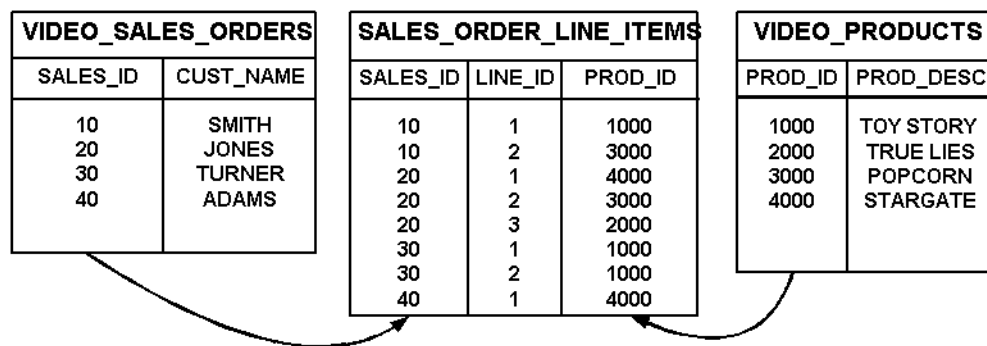
注意: 各テーブルの複数の列を使用して行を識別する結合も、コンポジット結合キーと呼ばれます。

3 つ以上のフォルダの結合

Discoverer で 3 つ以上のフォルダを結合するには、各フォルダの間に別個の結合を定義する必要があります。

たとえば次のスキーマでは、2 つの結合を使用して 3 つのテーブルを関連付けます。1 つの結合が VIDEO_SALES_ORDERS テーブルを SALES_ORDER_LINE_ITEMS テーブルに関連付け、もう 1 つの結合が VIDEO_PRODUCTS テーブルを SALES_ORDER_LINE_ITEMS テーブルに関連付けます。

図 10-5 2 つの結合を使用して結合された 3 つのテーブルの例



VIDEO_SALES_ORDERS テーブルの各販売注文は、特定の顧客に対するものです（販売 ID で一意に識別されます）。SALES_ORDER_LINE_ITEMS テーブルに示されているように、各販売注文は 1 つ以上の行アイテムで構成され、それぞれの行アイテムが特定の製品に対して存在します。VIDEO_PRODUCTS テーブルの各製品には説明があります（製品は製品 ID で一意に識別されます）。

Discoverer エンド・ユーザーが、顧客の名前および顧客がこれまでに購入した製品の説明を次のように表示しようとする場合を想定します。

顧客名	製品の説明
TURNER	TOY STORY
TURNER	TOY STORY
JONES	STARGATE
JONES	POPCORN
JONES	TRUE LIES
SMITH	POPCORN
SMITH	TOY STORY
ADAMS	STARGATE

つまり、VIDEO_SALES_ORDERS.CUST_NAME および VIDEO_PRODUCTS.PROD_DESC を表示します。

次の SQL 文により、必要な結果が得られます。

```
select cust_name, prod_desc
from video_sales_orders, sales_order_line_items, video_products
where
video_sales_orders.sales_id=sales_order_line_items.sales_id
and
sales_order_line_items.prod_id=video_products.prod_id
```

Discoverer エンド・ユーザーが必要な結果を表示できるようにするには、次のいずれかを行います。

- 前述の SQL 文を含むカスタム・フォルダを作成します（詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- Discoverer Administrator の「結合ウィザード」を使用して、3 つ以上のテーブルを結合する 1 つの結合を作成することはできません。そのかわり、2 つの別個の結合を作成する必要があります。VIDEO_SALES_ORDERS と SALES_ORDER_LINE_ITEMS の間に 1 つ、SALES_ORDER_LINE_ITEMS と VIDEO_PRODUCTS の間に 1 つの結合を作成します（詳細は「[結合の作成方法](#)」を参照）。

2 つの別個の結合を定義すると、次のことが可能になります。

- Discoverer Administrator で複合フォルダを作成して、VIDEO_SALES_ORDERS から CUST_NAME を、SALES_ORDER_LINE_ITEMS から 1 つのアイテムを、VIDEO_PRODUCTS から PROD_DESC を複合フォルダにドラッグできます。SALES_ORDER_LINE_ITEMS から選択したアイテムを削除して、希望する 2 つのアイテムが入ったフォルダを得ることができます（詳細は、「[複合フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- Discoverer エンド・ユーザーがこの複合フォルダを使用できます。あるいは、VIDEO_SALES_ORDERS から CUST_NAME を、SALES_ORDER_LINE_ITEMS から 1 つのアイテムを、VIDEO_PRODUCTS から PROD_DESC を選択することもできます。SALES_ORDER_LINE_ITEMS から選択したアイテムを削除して、希望する 2 列を表示するワークシートを得ることができます。

非等価結合

Discoverer では、非等価結合により、テーブルの列の間に直接の対応関係がない 2 つのフォルダを結合できます。非等価結合では、非等価結合演算子を使用する 1 つ以上の結合条件を使用して、2 つのフォルダを関連付けます。

たとえば次のスキーマでは、2 つのテーブルに一致する列がないため、非等価結合を使用して EMP テーブルと SALGRADE テーブルを結合します。

図 10-6 非等価結合を使用して結合された 2 つのテーブルの例

EMP			SALGRADE		
EMPNO	ENAME	SAL	GRADE	LOSAL	HISAL
7839	KING	5000	1	700	1200
7698	BLAKE	2850	2	1201	1400
7782	CLARK	2450	3	1401	2000
7566	JONES	2975	4	2001	3000
7654	MARTIN	1250	5	3001	9999
7499	ALLEN	1600			
7844	TURNER	1500			
7900	JAMES	950			

従業員の等級は給料に依存します。700 ~ 1200 を受け取る従業員はグレード 1、1201 ~ 1400 を受け取る従業員はグレード 2 という具合です。

Discoverer エンド・ユーザーが各従業員のグレードを次のように表示しようとする場合を想定します。

ENAME	グレード
KING	5
BLAKE	4
CLARK	4
JONES	4
MARTIN	2
ALLEN	3
TURNER	3
JAMES	1

つまり、EMP.ENAME および SALGRADE.GRADE を表示します。

次の SQL 文により、必要な結果が得られます。

```
select ename, grade
from emp, salgrade
where
emp.sal >= salgrade.losal
and
emp.sal <= salgrade.hisal
```

Discoverer エンド・ユーザーが必要な結果を表示できるようにするには、次のいずれかを行います。

- 前述の SQL 文を含むカスタム・フォルダを作成します（詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照）。

- 2つの非等価結合条件を持つ結合を作成します。EMPSAL と SALGRADE.LOSAL の間に 1 つ、EMPSAL と SALGRADE.HISAL の間に 1 つの結合を作成します（詳細は、「[結合の作成方法](#)」を参照）。

結合を定義すると、次のことが可能になります。

- Discoverer Administrator で複合フォルダを作成し、EMP から SAL を、SALGRADE から GRADE を、複合フォルダにドラッグできます（詳細は「[複合フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- Discoverer エンド・ユーザーがこの複合フォルダを使用できます。あるいは、EMP から ENAME を、SALGRADE から GRADE を選択することもできます。

1 対多結合、1 対 1 結合および多対多結合

1 対多結合は最も一般的なタイプの結合です。1 対多結合では、マスター・フォルダの 1 行がディテール・フォルダの複数行に結合されます。

1 対 1 結合は、結合で使用される両方のアイテムが主キーになる 2 つのフォルダ間の結合です。そのため、1 つのフォルダの 1 行のみが、別のフォルダの 1 行のみと結合されます（あるいはどの行とも結合されません）。この場合、マスター・テーブルの各行はディテール・テーブルの 1 つの行にのみ対応可能であるため、実際のマスターとディテールは存在しません。1 対 1 結合が有効な構成になる場合もあります。Discoverer では結合を 1 対 1 結合に指定できます。

複数のディテール・フォルダを持つマスター・フォルダにクエリーを行うことは可能ですが、1 つを除くすべてのディテール・フォルダが 1 対 1 結合で結合されている場合に限りです。3 つ以上のディテール・フォルダがマスター・フォルダに 1 対多結合で結合されている場合（ファントラップ・スキーマ）は、マスター・フォルダの 1 行がディテール・フォルダの複数行に結合してデカルト演算になる可能性があります。Discoverer では、予期せぬ結果が返るのを防ぐため、ファントラップ・スキーマは解決されます。詳細は、「[ファントラップの概要および Discoverer での処理方法](#)」を参照してください。

多対多結合は、Discoverer（またはすべてのリレーショナル・システム）では直接サポートされていません。ただし、多対多結合はいつでも作り直して複数の 1 対多結合に変更できます。ごくまれに、多対多結合が有効な構成になる場合があります。

複数の結合を使用した 2 つのフォルダの結合

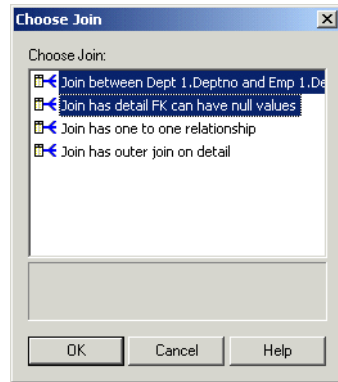
複合フォルダを作成するときに、複数の結合を使用して 2 つのフォルダを結合することが必要になる場合があります。たとえば同じアイテムを含む複合フォルダを複数作成して、各複合フォルダで 1 つ以上の結合を使用する場合などです。これらの結合は、それぞれ異なる結合オプションを使用して定義できます。

次の表は、2 つのフォルダ（例では emp と dept）を 4 つの異なる結合を使用して結合する方法を示しています。複合フォルダにアイテムを追加するときに、これらの結合を 1 つ以上選択できます。

複合フォルダ名	マスター・フォルダ結合アイテム	結合演算子	「ディテール」フォルダ結合アイテム	結合に使用される結合オプション
Complex1	emp.deptno	=	dept.deptno	選択されるオプションなし
Complex2	emp.deptno	=	dept.deptno	ディテール外部キーに NULL 値を使用可
Complex3	emp.deptno	=	dept.deptno	1 対 1 関係
Complex4	emp.deptno	=	dept.deptno	ディテール・フォルダでの外部結合

複合フォルダを作成し、複数の結合を有する2つのフォルダからアイテムをドラッグすると、Discoverer Administrator によって「結合の選択」ダイアログが表示され、使用する結合を1つまたは複数選択できます。

図 10-7 「結合の選択」ダイアログ



詳細は、「複合フォルダの作成方法」を参照してください。

Discoverer Plus または Discoverer Desktop のユーザーが複数フォルダのアイテムを使用するワークシートを作成し、複数の結合を使用して結合された2つのフォルダからアイテムを選択すると、Discoverer では次のいずれかの処理が行われます。

- 利用可能な結合すべてを使用
Discoverer Plus または Discoverer Desktop で「複数の結合パスの検出を使用しない」オプションが選択されているときの処理です。
- 1つ以上の結合を選択できる「フォルダの結合」ダイアログを表示
Discoverer Plus または Discoverer Desktop で「複数の結合パスの検出を使用しない」オプションが選択解除されているときの処理です。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響

状況によっては、マスター・フォルダおよびディテール・フォルダにクエリーを行うときに、常に Discoverer で結合を使用する場合があります。たとえば、次のような場合です。

- クエリーで、マスター・フォルダとディテール・フォルダの両方からの値が返るようになる場合
- クエリーで、マスター・フォルダに一致する値を持つ行のみがディテール・フォルダから返るようになる場合

結合の解決には比較的時間がかかるため、このようなクエリーでは結果が返るまでに比較的長い時間がかかる可能性があります。

他の状況では、Discoverer でマスター・フォルダとディテール・フォルダの両方にクエリーを行う必要はありません。たとえば、次のような場合です。

- ディテール・フォルダの値に対応する値が常にマスター・フォルダにあることがわかっている場合
- 値がマスター・フォルダに存在するかどうかにかかわらず、クエリーでディテール・フォルダの詳細な値がすべて返ることが常に望ましいとわかっている場合

Discoverer でマスター・フォルダにクエリーを行う必要がないことを示す適切なオプションを設定すると、クエリーのパフォーマンスが向上します。ただし、マスター・テーブルにクエリーを行わないことにより、予期せぬ結果が返される可能性がありますので注意してください。マスター・フォルダを含める必要があるかどうか分からない場合は、「複合フォルダからのクエリー結果に結合が影響する例」を参照してください。

複合フォルダ内の3つ以上のフォルダを組み合せる場合（結合を使用）、Discoverer では不要な結合を検出して削除することにより、クエリーのパフォーマンスを向上できます（結合トリミング）。SQLJoinTrim の Discoverer レジストリ設定が有効になっている（デフォルト値である 1 に設定されている）ときは、次の条件の両方が満たされた場合にクエリーから結合が削除されます。

- 結合を使用しないでリクエストされた行を返すことができる場合
- 結合に「ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在」オプションが選択されている場合（詳細は「複合フォルダからのクエリー結果に結合が影響する例」を参照）

Discoverer レジストリ設定の詳細は、第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」を参照してください。

「ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり」オプションが選択されている結合を使用するクエリーを満たすために、Discoverer でサマリー・フォルダが使用されることはありません（詳細は「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブを参照）。

複合フォルダからのクエリー結果に結合が影響する例

次の例は、Discoverer Administrator を使用して Emp_and_Dept という複合フォルダが作成されていることを前提にしています。この複合フォルダは、DEPT テーブルおよび EMP テーブルに基づくもので、結合条件 DEPT.DEPTNO=EMP.DEPTNO を使用します。

次の 2 つの使用例を考えてみます。

■ 使用例 1

使用例 1 では、EMP テーブルの従業員は DEPT テーブルの部門の 1 つに常に属する必要があります。

- DEPT テーブルには部門 10 (ACCOUNTS: 経理)、部門 20 (RESEARCH: 研究) および部門 30 (SALES: 営業) の行が含まれます。
- EMP テーブルには CLARK (部門 10 の従業員)、SMITH (部門 20 の従業員) および ALLEN (部門 30 の従業員) の行が含まれます。

図 10-8 使用例 1: マスター・フォルダがクエリーに含まれるかどうか、返される行が依存しないスキーマの例

DEPT		EMP		
DEPTNO	DNAME	EMPNO	DEPTNO	ENAME
10	ACCOUNTS	7782	10	CLARK
20	RESEARCH	7369	20	SMITH
30	SALES	7499	30	ALLEN

この使用例で示されるスキーマでは、マスター・フォルダをクエリーに含まれるかどうかにかかわらず、ENAME に対するクエリーで同じ結果が生成されます。

■ 使用例 2

使用例 2 では、次に示すように、EMP テーブルの従業員が DEPT テーブルの部門に属する必要はありません。

- DEPT テーブルには部門 10 (ACCOUNTS: 経理) および部門 20 (RESEARCH: 研究) の行が含まれます。
- EMP テーブルには CLARK (部門 10 の従業員)、SMITH (部門 20 の従業員) および ALLEN (すでに存在しない部門 30 の元従業員) の行が含まれます。

図 10-9 使用例 2: マスター・フォルダがクエリーに含まれるかどうか、返される行が依存するスキーマの例

DEPT		EMP		
DEPTNO	DNAME	EMPNO	DEPTNO	ENAME
10	ACCOUNTS	7782	10	CLARK
20	RESEARCH	7369	20	SMITH
		7499	30	ALLEN

この使用例で示されるスキーマでは、マスター・フォルダをクエリーに含めるかどうかにより、ENAME に対するクエリーで異なる結果が生成される可能性があります。

例 1: マスター・フォルダの除外が常に可能

マスター・フォルダを含めても結果に違いがないときや、マスター・フォルダを含めても必要な結果が返らないときは、クエリーからマスター・フォルダを除外します。

注意: マスター・フォルダをクエリーの実行対象 (複合フォルダのアイテムのみを使用するもの) から除外することは、Discoverer Plus または Discoverer Desktop でマスター・フォルダとディテール・フォルダ間の結合を使用しないという意味です。クエリー・アイテムを複合フォルダから選択する場合 (Discoverer Plus または Discoverer Desktop でワークシートを作成する場合)、Discoverer では結合が使用されません。クエリー・アイテムはディテール・フォルダ (例では EMP) からのみ返ります。

Discoverer エンド・ユーザーが、Emp_and_Dept 複合フォルダから ENAME アイテムを選択することにより、EMP テーブルの全従業員の名前を表示しようとする場合を想定します。

使用例 1 では、必要な結果は次のようになります。

ENAME
CLARK
SMITH
ALLEN

マスター・フォルダをクエリーに含めても結果に違いはありません。クエリーによってすべての従業員が返されるためです。クエリーのパフォーマンスを向上させるには、「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブでディテール・アイテムが常にマスター・フォルダに存在するというオプションを選択して、Discoverer でマスター・フォルダにクエリーを行わないように指定します。同時に SQLJoinTrim の Discoverer レジストリ設定も有効になっている場合、Discoverer はマスター・フォルダにクエリーを行いません (詳細は、第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」を参照)。

使用例 2 では、必要な結果は次のようになります。

ENAME
CLARK
SMITH
ALLEN

マスター・フォルダをクエリーに含めると、DEPT テーブルの部門番号に一致する部門番号を持つ従業員のみが返ります。しかし Discoverer エンド・ユーザーは、EMP テーブルの全従業員を表示しようとしています。EMP テーブルの全従業員が返るようにするには、「[結合の編集](#)」ダイアログ: 「[オプション](#)」タブで「[ディテール・アイテムが常にマスター・フォルダに存在する](#)」というオプションを選択して、Discoverer でマスター・フォルダにクエリーを行わないように指定します。同時に SQLJoinTrim の Discoverer レジストリ設定も有効になっている場合、Discoverer はマスター・フォルダにクエリーを行いません（詳細は、[第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」](#)を参照）。

例 2: マスター・フォルダの除外が可能な場合あり

マスター・フォルダの除外によってディテール・テーブルから必要な結果が返らなくなる場合は、クエリーにマスター・フォルダを含めます。

注意: マスター・フォルダをクエリーの実行対象（複合フォルダのアイテムのみを使用する）に含めることは、Discoverer Plus または Discoverer Desktop でマスター・フォルダとディテール・フォルダ間の結合を使用するという意味です。クエリー・アイテムを複合フォルダから選択する場合（Discoverer Plus または Discoverer Desktop でワークシートを作成する場合）、Discoverer では結合が使用されます。クエリー・アイテムはマスター・フォルダまたはディテール・フォルダのいずれか（例ではそれぞれ DEPT または EMP）から返ります。

Discoverer エンド・ユーザーが、Emp_and_Dept 複合フォルダから ENAME アイテムを選択することにより、EMP テーブルの現在の従業員の名前を表示しようとする場合を想定します。DEPT テーブルにない部門に属している従業員はすべて現在の従業員ではないため、必要ではありません。

使用例 1 では、必要な結果は次のようになります。

ENAME
CLARK
SMITH
ALLEN

マスター・フォルダをクエリーに含めても結果に違いはありません。すべての従業員が部門に属しているためです。クエリーのパフォーマンスを向上させるには、「[結合の編集](#)」ダイアログ: 「[オプション](#)」タブで「[ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在](#)」オプションを選択して、Discoverer でマスター・フォルダにクエリーを行わないように指定します。同時に SQLJoinTrim の Discoverer レジストリ設定も有効になっている場合、Discoverer はマスター・フォルダにクエリーを行いません（詳細は、「[Discoverer のレジストリ設定について](#)」を参照）。

使用例 2 では、必要な結果は次のようになります。

ENAME
CLARK
SMITH

マスター・フォルダをクエリーに含めると、DEPT テーブルの部門番号に一致する部門番号を持つ従業員のみが返ります。これは Discoverer エンド・ユーザーが必要としている結果です。[「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)で「**ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり**」オプションを選択することによって、常にマスター・フォルダにクエリーを行うように指定できます。

例 3: マスター・フォルダの除外が常に不可能

マスター・フォルダとディテール・フォルダの両方からの情報が結果に含まれるようにする場合は、常にクエリーにマスター・フォルダを含めます。

注意: マスター・フォルダをクエリーの実行対象（複合フォルダのアイテムのみを使用する）に含めることは、Discoverer Plus または Discoverer Desktop でマスター・フォルダとディテール・フォルダ間の結合を使用するという意味です。クエリー・アイテムを複合フォルダから選択する場合（Discoverer Plus または Discoverer Desktop でワークシートを作成する場合）、Discoverer では結合が使用されます。クエリー・アイテムはマスター・フォルダまたはディテール・フォルダのどちらかあるいはその両方（例では DEPT または EMP）から返ります。

Discoverer エンド・ユーザーが、Emp_and_Dept 複合フォルダから ENAME アイテムと DNAME アイテムを選択することにより、従業員および各自が属する部門を表示しようとする場合を想定します。

使用例 1 では、必要な結果は次のようになります。

ENAME	DNAME
CLARK	ACCOUNTS
SMITH	RESEARCH
ALLEN	SALES

部門の名前を返すには、クエリーにマスター・フォルダを含めることが不可欠です。Discoverer では、[「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)で「**ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在**」オプションが選択されている場合でも、クエリーにマスター・フォルダが含まれます。

使用例 2 では、必要な結果は次のようになります。

ENAME	DNAME
CLARK	ACCOUNTS
SMITH	RESEARCH

部門の名前を返すには、クエリーにマスター・フォルダを含めることが不可欠です。Discoverer では、[「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)で「**ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在**」オプションが選択されている場合でも、クエリーにマスター・フォルダが含まれます。

ALLEN が（部門名の NULL 値とともに）返されるのは、[「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)で「**マスターでの外部結合**」オプションを選択した場合のみです（詳細は、「[外部結合](#)」を参照）。

外部結合

外部結合とは、結合されたテーブルに一致する行が存在しない場合に、テーブルから行が返るようになるための SQL 構文です。

次の使用例を考えてみます。

- マスター・テーブル DEPT には部門 10 (ACCOUNTS: 経理)、部門 20 (RESEARCH: 研究) および部門 40 (OPERATIONS: 業務) の行が含まれます。

- デイテール・テーブル EMP には CLARK (部門 10)、SMITH (部門 20) および ALLEN (すでに存在しない部門 30 の元従業員) の行が含まれます。

図 10-10 マスター・テーブル DEPT およびデイテール・テーブル EMP (クエリーの外部結合構成の場所によって返る行が決まる)

DEPT		EMP		
DEPTNO	DNAME	EMPNO	DEPTNO	ENAME
10	ACCOUNTS	7782	10	CLARK
20	RESEARCH	7369	20	SMITH
40	OPERATIONS	7499	30	ALLEN

次の各例では、前述の図のスキーマを使用して、外部結合の場所によってクエリーから返る行が決まる様子を示します。

例 1: マスター・テーブルでの外部結合

Discoverer エンド・ユーザーが、従業員が現在部門に属していなくても全従業員の記録を表示しようとする場合を想定します。必要な結果は次のようになります。

DNAME	ENAME
ACCOUNTS	CLARK
RESEARCH	SMITH
<NULL>	ALLEN

次の SQL 文により、必要な結果が得られます。

```
select dname, ename
from dept, emp
where
dept.deptno(+) = emp.deptno
```

外部結合がマスター・テーブルにあるとき、一致するマスター行が存在しないデイテール行 (および一致するすべてのデイテール行とマスター行) がデータベースから返ります。SQL 文では、プラス (+) 記号が外部結合を示します。

Discoverer エンド・ユーザーが必要な結果を表示できるようにするには、次のいずれかを行います。

- 前述の SQL 文を含むカスタム・フォルダを作成します (詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照)。
- DEPT.DEPTNO と EMP.DEPTNO の間に結合条件が 1 つの結合を作成し、「[結合の編集](#)」ダイアログ: 「[オプション](#)」タブで「[デイテール・アイテムがマスター・フォルダに存在しない場合あり](#)」というオプションと「[マスターでの外部結合](#)」オプションの両方を選択します (詳細は、「[結合の作成方法](#)」を参照)。

結合を定義すると、次のことが可能になります。

- Discoverer Administrator で複合フォルダを作成し、DEPT から DNAME を、EMP から ENAME を複合フォルダにドラッグできます (詳細は「[複合フォルダの作成方法](#)」を参照)。
- Discoverer エンド・ユーザーがこの複合フォルダを使用できます。あるいは、DEPT から DNAME を、EMP から ENAME を選択することもできます。

例 2: ディテール・テーブルでの外部結合

Discoverer エンド・ユーザーが、部門に従業員がいなくてもすべての部門の記録を表示しようとする場合を想定します。必要な結果は次のようになります。

DNAME	ENAME
ACCOUNTS	CLARK
RESEARCH	SMITH
OPERATIONS	<NULL>

次の SQL 文により、必要な結果が得られます。

```
select dname, ename
from dept, emp
where
dept.deptno=emp.deptno(+)
```

外部結合がディテール・テーブルにあるとき、一致するディテール行が存在しないマスター行（および一致するすべてのマスター行とディテール行）がデータベースから返ります。SQL 文では、プラス (+) 記号が外部結合を示します。

Discoverer エンド・ユーザーが必要な結果を表示できるようにするには、次のいずれかを行います。

- 前述の SQL 文を含むカスタム・フォルダを作成します（詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- DEPT.DEPTNO と EMP.DEPTNO の間に結合条件が 1 つの結合を作成し、「[結合の編集](#)」ダイアログ:「[オプション](#)」タブで「[ディテールでの外部結合](#)」を選択します（詳細は、「[結合の作成方法](#)」を参照）。

結合を定義すると、次のことが可能になります。

- Discoverer Administrator で複合フォルダを作成し、DEPT から DNAME を、EMP から ENAME を複合フォルダにドラッグできます（詳細は「[複合フォルダの作成方法](#)」を参照）。
- Discoverer エンド・ユーザーがこの複合フォルダを使用できます。あるいは、DEPT から DNAME を、EMP から ENAME を選択することもできます。

結合の作成方法

結合を作成し、エンド・ユーザーが、異なるフォルダからのアイテムを同じワークシートに含められるようにします。

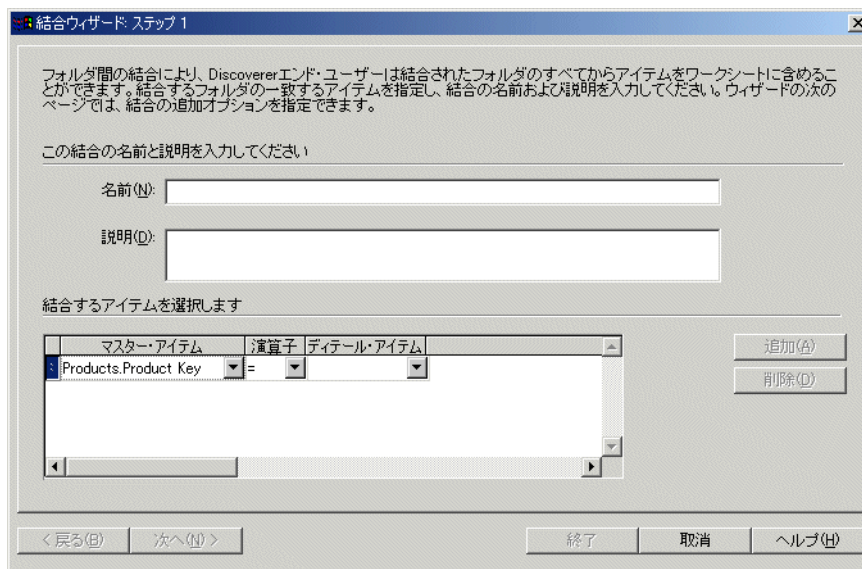
結合を作成する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア:「データ」**タブを表示し、ディテール・フォルダのアイテムに一致するマスター・フォルダのアイテムを選択します。

ヒント: マスター・フォルダとディテール・フォルダの区別の詳細は、「[結合](#)」を参照してください。

2. 「挿入」→「結合」を選択して、「**結合ウィザード:ステップ 1**」ダイアログを表示します。「**マスター・アイテム**」フィールドにマスター・アイテムが表示されます。

図 10-11 「結合ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



ヒント: 「マスター・アイテム」フィールドのフォルダおよびアイテムを変更する場合は、ドロップダウン・リストの最後にある「追加アイテム」オプションを選択します。

3. 「演算子」の下向き矢印をクリックし、ドロップダウン・リストから結合演算子を選択して結合のタイプを指定します。
4. 「ディテール・アイテム」の下向き矢印をクリックして、「新規結合」ダイアログを表示します。
5. 結合するフォルダとディテール・アイテムを選択します。

同じビジネスエリアのフォルダからディテール・アイテムを選択するか、開いている別のビジネスエリアのフォルダから選択できます。

マスター・アイテム、ディテール・アイテムおよび結合演算子を指定することにより、結合条件が作成されます。結合条件が1つのみの結合は、単一アイテム結合と呼ばれます(詳細は、「単一アイテム結合」を参照)。

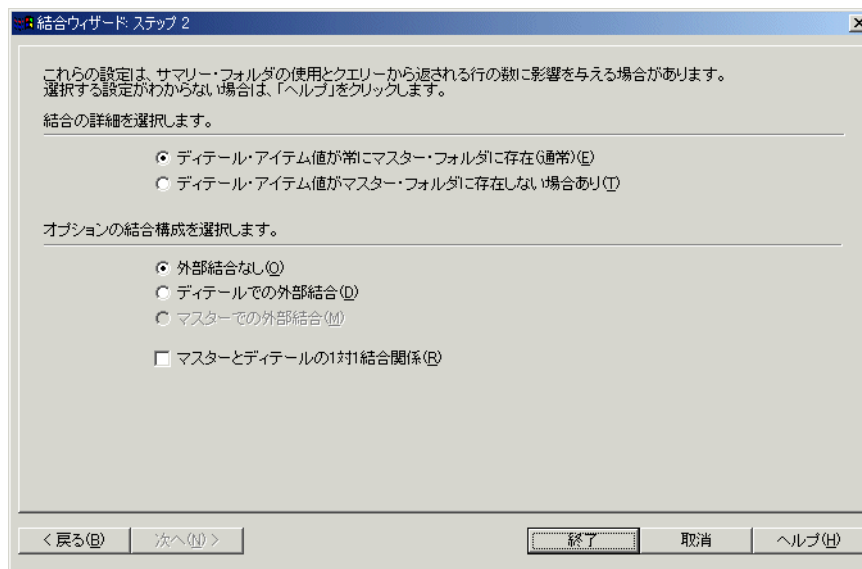
ヒント: 「ディテール・アイテム」フィールドのフォルダおよびアイテムを変更する場合は、ドロップダウン・リストの最後にある「追加アイテム」オプションを選択します。

状況によっては、複数の結合条件を作成する必要があります(詳細は、「マルチアイテム結合」を参照)。

6. (オプション) マルチアイテム結合を作成する手順は、次のとおりです。
 - a. 「追加」をクリックして、新規結合条件のための新しい行を表示します。
 - b. 「マスター・アイテム」および「ディテール・アイテム」のドロップダウン・リストを使用して、すでに作成した結合条件と同じマスター・フォルダおよびディテール・フォルダから新しいアイテムのペアを選択します。

注意:すでに作成した結合条件に含まれていないフォルダからマスター・アイテムまたはディテール・アイテムを指定した場合は、すでに作成した結合条件が削除されます。
 - c. マスター・フォルダおよびディテール・フォルダの一致するアイテムをすべて指定するまで、新規結合条件を追加します。
7. 「次へ」をクリックして、「結合ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 10-12 「結合ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



8. この結合に対する結合の詳細を次のように選択します。

- 「ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在 (通常)」

クエリーのパフォーマンスを向上させるには、このラジオ・ボタンを選択します (詳細は、「クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響」を参照)。

- 「ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり」

ディテール・フォルダのすべての値に対して一致する値がマスター・フォルダにあるかどうか分からない場合は、このラジオ・ボタンを選択します。このオプションを選択すると、予期せぬ結果が返される可能性がありますので注意してください (詳細は、「クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響」を参照)。

9. (オプション) 必要に応じてこの結合に次のオプションを選択します。

- 「外部結合なし」

外部結合を作成せずに、一致するすべてのマスター行およびディテール行を表示するには、このラジオ・ボタンを選択します。

- 「ディテールでの外部結合」

対応するディテール・アイテムのないマスター行を、一致するすべてのマスター行およびディテール行とともに表示するには、このラジオ・ボタンを選択します。

- 「マスターでの外部結合」

対応するマスターのないディテール行を、一致するすべてのディテール行およびマスター行とともに表示するには、このラジオ・ボタンを選択します。このチェックボックスを選択できるのは、「ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり」オプションが選択されている場合のみです。

- 「マスターとディテールの 1 対 1 結合関係」

マスター・テーブルとディテール・テーブルの間に 1 対 1 の関係があることを指定するには、このチェックボックスを選択します。

注意: 外部結合を作成する場合は、このチェックボックスの選択を解除します。

これらのオプションの詳細は、次の各項目を参照してください。

- 「外部結合」
- 「1対多結合、1対1結合および多対多結合」
- 「「結合の編集」ダイアログ:「オプション」タブ」

10. 「終了」をクリックして変更内容を保存し、ダイアログを閉じます。

Discoverer Administrator によって2つのフォルダ間に結合が作成されます。ワークエリアの両方のフォルダの下に結合アイコンが表示されます。

注意

- 結合に関数またはリテラル（テキスト文字列、数値、日付など）を含めるには、使用する関数またはリテラルを含むユーザー定義アイテムを作成します。次に結合を作成し、これらのアイテムを結合で指定します。

結合の表示および編集方法

次の方法のいずれかまたは両方を使用して、結合を表示または編集できます。

- 「結合の編集」ダイアログ:「アイテム」タブおよび「結合の編集」ダイアログ:「オプション」タブを使用すると、次のことができます。
 - 結合アイテムの表示および編集
 - 結合アイテムの追加および削除
 - 結合の名前および説明の編集
 - 結合オプションの表示および編集
- 「結合プロパティ」ダイアログを使用すると、次のことができます。
 - 1つ以上の結合の結合プロパティの表示および編集
 - 1つ以上の結合の依存オブジェクトの表示

次にこれらの方法を説明します。

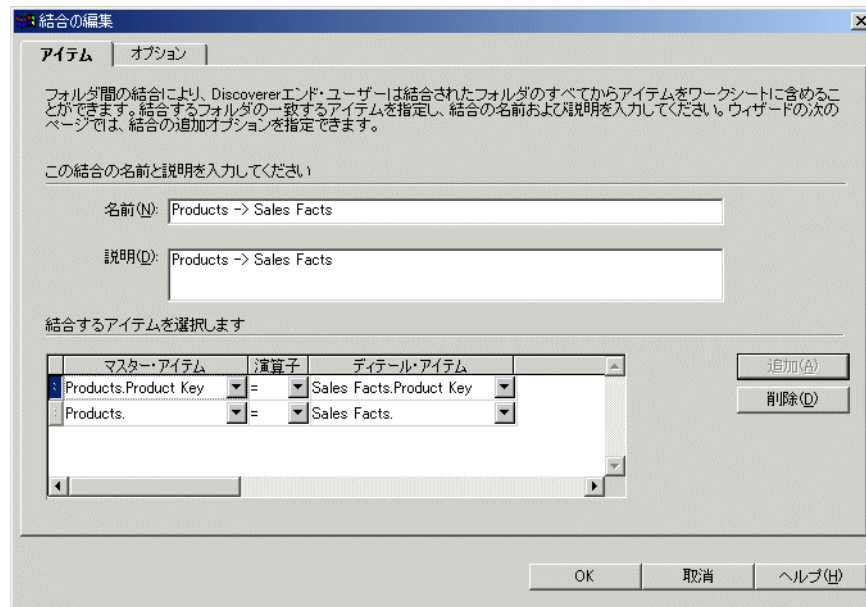
「結合の編集」ダイアログを使用して結合を編集する方法

「結合の編集」ダイアログを使用して、結合を編集することが必要になる場合があります。

「結合の編集」ダイアログを使用して結合を編集する手順は、次のとおりです。

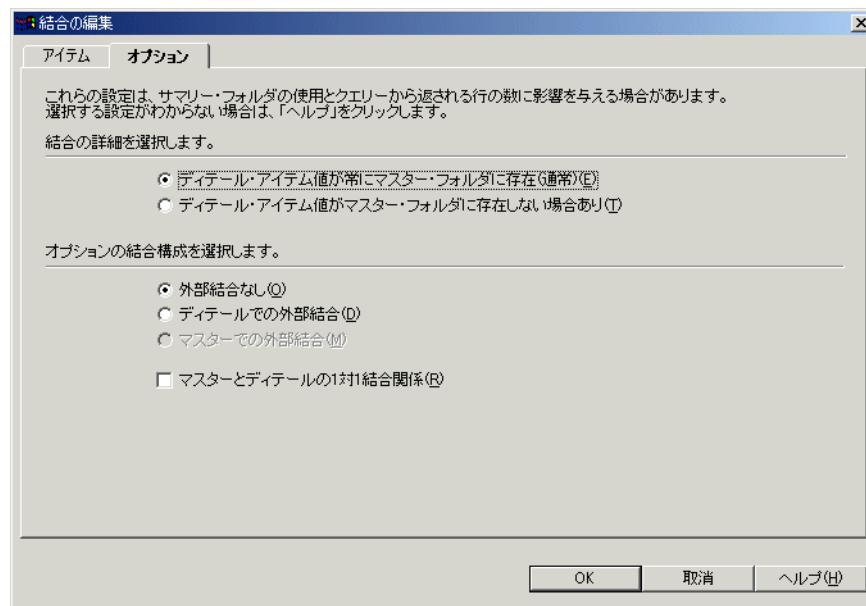
1. ワークエリア:「データ」タブで結合を選択し、「編集」→「編集」を選択して、「結合の編集」ダイアログ:「アイテム」タブを表示します。

図 10-13 「結合の編集」ダイアログ：「アイテム」タブ



- 必要に応じて結合の名前、説明および結合条件を編集します。
- 「結合の編集」ダイアログ：「オプション」タブを表示します。

図 10-14 「結合の編集」ダイアログ：「オプション」タブ



- 必要に応じて結合オプションを編集します。
- 「OK」をクリックし、変更内容を保存してダイアログを閉じます。

「結合プロパティ」ダイアログを使用して結合プロパティを表示または編集する手順は、次のとおりです。

「結合プロパティ」ダイアログを使用して結合を編集する方法

「結合プロパティ」ダイアログを使用して、結合を編集することが必要な場合があります。

1. **ワークエリア**：「データ」タブで結合を選択し、「編集」→「プロパティ」を選択して、「結合プロパティ」ダイアログを表示します。

図 10-15 「結合プロパティ」ダイアログ：「一般」タブ



ヒント：同時に複数の結合を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の結合をクリックします。選択された結合それぞれに共通するプロパティがすべて表示されます。プロパティの値が選択されたすべての結合に共通しない場合、「値」フィールドには何も表示されません。

2. 必要に応じて変更を行います。
3. 「OK」をクリックし、変更内容を保存して「結合プロパティ」ダイアログを閉じます。

結合の削除方法

もはや不要になった結合は削除できます。たとえば、以前に結合した2つのフォルダのアイテムが含まれるワークシートをエンド・ユーザーが作成しないようにする場合などです。

注意：結合を削除すると、その結合を使用する他の EUL オブジェクト（複合フォルダなど）も影響を受ける可能性があります。結合を削除する前に、EUL をエクスポートすることをお勧めします。

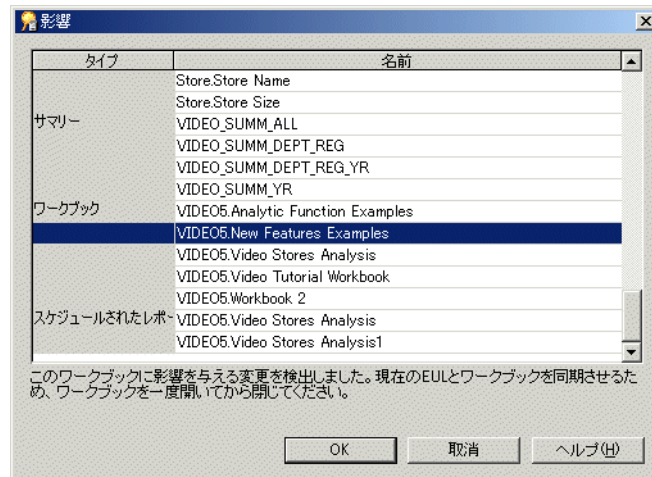
結合を削除する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「データ」タブで結合を選択し、「編集」→「削除」を選択して、「**削除の確認**」ダイアログを表示します。

ヒント：同時に複数の結合を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の結合をクリックします。

2. (オプション) 結合の削除によって影響を受ける可能性があるオブジェクトを確認する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響」をクリックして、「**影響**」ダイアログを表示します。

図 10-16 「影響」 ダイアログ



「影響」ダイアログでは、結合の削除による影響を受ける可能性のある別の EUL オブジェクトを確認できます。

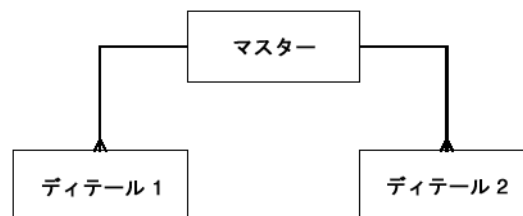
注意: 「影響」ダイアログには、ファイル・システム (.dis ファイル内) に保存されたワークブックに対する影響は表示されません。

- b. (オプション) 「影響」ダイアログの行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが、リストの一番下に表示されます。
 - c. 結合の削除による影響を確認し終えたら、「閉じる」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
3. 選択した結合 (1 つまたは複数) を削除する場合は、「はい」をクリックします。

ファントラップの概要および Discoverer での処理方法

ファントラップとは、予期せぬ結果を返す可能性がある、結合されたデータベース・テーブルのグループです。最も一般的なファントラップは、マスター・テーブルが 2 つ以上のディテール・テーブルに個別に結合される場合に起こります。

図 10-17 単純なファントラップ・スキーマ



このような構成は、関係としては正しくても、簡単な SQL 文を使用してデータ・ポイントを集計するときに不正な結果を返す傾向にあります。

ただし、Discoverer を使用してデータ・ポイントを集計する場合は、不正な結果が返されることはありません (ファントラップ検出を有効にした場合)。Discoverer が生成するすべてのクエリは、ファントラップの可能性がないかどうかを検査されます。ファントラップが検出されると、正しいレベルで集計が行われるように、通常 Discoverer はインライン・ビューを使用してクエリをリライトします。各マスター・ディテール集計について 1 つのインライン・ビューが作成され、次に外部クエリの結果が組み合わせられます。

簡単な SQL 文で不正な結果が返る場合に、Discoverer では正しい結果が返される様子の例は、「ファントラップの例」を参照してください。

状況によっては、次のような解決不可能なファントラップ・スキーマが含まれるクエリーが検出されることもあります。

- デイテール・フォルダで、マスターとは異なるキーが結合に使用されている場合
- デイテール・フォルダ間に直接的な結合関係がある場合（あいまいな循環関係が生じます）
- 2つ以上のデイテール・フォルダから、集計されない値が選択される場合
- 2つ以上のデイテール・フォルダに、異なるマスター・フォルダへの個別の結合関係がある場合

このような場合、Discoverer ではクエリーが禁止され、エラー・メッセージが表示されます。

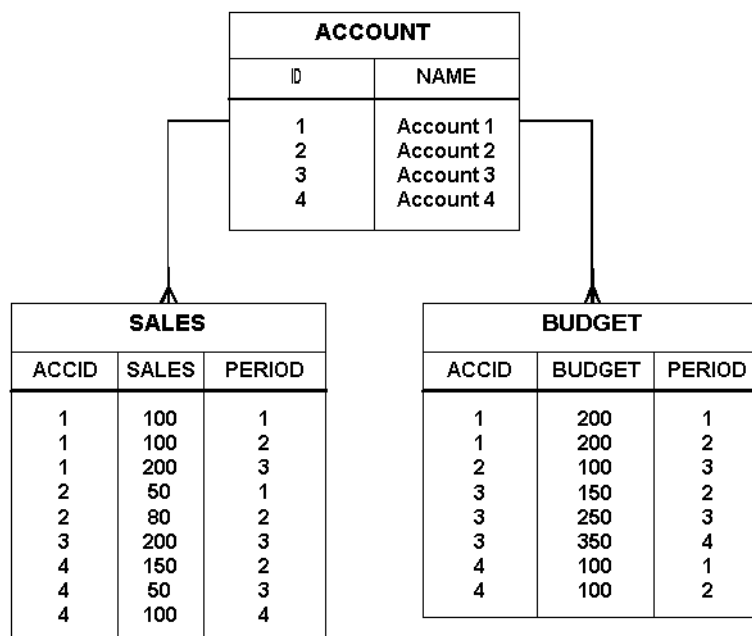
さらに、Discoverer は合計できる列を制御します。マスター・フォルダとデイテール・フォルダの両方のアイテムの値がワークシートに表示されている場合、Discoverer ではこれらの値が合計されません。そのかわりに NULL 文字が表示され、不正な結果や予期せぬ結果が返るのを防ぎます。

Discoverer でファントラップ検出を有効または無効にする場合の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ファントラップの例

1つのマスター・フォルダ（ACCOUNT）と2つのデイテール・フォルダ（SALES および BUDGET）が含まれる次のようなファントラップ・スキーマの例を考えてみます。

図 10-18 ファントラップ・スキーマの例



すべての会計に、各期間の複数の販売数値と複数の予算数値を持つことができます。

Discoverer エンド・ユーザーが「会計ごとの売上合計と予算合計はいくらか」という質問に回答する場合を想定します。2つのデイテール・テーブルの集計（SUM）は、同じマスター・テーブル（ACCOUNT）から得たものです。

この比較的単純なクエリーによって返される結果は次のとおりです。

- Discoverer を使用した場合は正しい結果が返る（ファントラップ検出を有効にした場合）
- 簡単な SQL 文を使用した場合は不正な結果が返る

Discoverer を使用した正しい結果の生成

「会計ごとの売上合計と予算合計はいくらか」という質問に回答するために、Discoverer では次の処理が行われます。

- ACCOUNT (会計) の名前の選択 (ACCOUNT.NAME より)
- SALES (販売) の合計の計算 (SALES.SALES より)
- BUDGET (予算) の合計の計算 (BUDGET.BUDGET より)

Discoverer では、次のような正しい結果が返されます。

Account (会計)	Sales (販売)	Budget (予算)
Account 1	400	400
Account 2	130	100
Account 3	200	750
Account 4	300	200

Discoverer では正しいレベルで集計が行われるように、クエリーの検査、ファントラップの検出、クエリーのリライトが行われます。各マスター・ディテール集計について1回、インライン・ビューを使用してクエリーがリライトされ、次に外部クエリーの結果が組み合されます。

次の例は、正しい結果を返すために Discoverer で使用される SQL を示しています。

```
SELECT inACC as Name, SUM(inSalesSum) as SALES_SUM, SUM(inBudgetSum) as BUDGET_SUM,
FROM
(SELECT masterID AS OutMasterIDSales, SUM(SalesDetailsSales) AS inSalesSum
FROM
(SELECT ID AS masterID, NAME AS masterName FROM ACCOUNT) INLineAccount,
(SELECT ID AS SalesDetailId, ACCID AS SalesDetailAccID, SALES AS SalesDetailsSales FROM
SALES ) INLineSales
WHERE (masterID = SalesDetailAccID(+))
GROUP BY masterID) inner1,
(SELECT masterID AS OutMasterIDBudget, SUM(BudgetDetailBudget) AS inBudgetSum,
masterName AS inACC
FROM
(SELECT ID AS masterID, NAME AS masterName FROM ACCOUNT) INLineAccount,
(SELECT ID AS BudgetDetailId, ACCID AS BudgetDetailAccID, BUDGET AS BudgetDetailsSales
FROM BUDGET ) INLineBudget
WHERE (masterID = BudgetDetailAccID(+))
GROUP BY masterName, masterID ) inner2
WHERE ((OutMasterIDBudget = OutMasterIDSales))
GROUP BY inACC
```

各販売と各予算が個別に (各マスター・ディテール集計について1回) 合計され、次にマスター・キー (1つまたは複数) に基づいて結合と組み合わせられるため、この結果は正しくなります。

簡単な SQL 文を使用した不正な結果の生成

「会計ごとの売上合計と予算合計はいくらか」という質問に回答するために、次のような簡単な SQL 文の使用が考えられます。

```
SELECT Account.Name, SUM(sales), SUM(budget)
FROM
Account, Sales, Budget
Where
Account.id=Sales.accid
AND
Account.id=Budget.accid
GROUP BY
Account.Name
```

このような簡単な SQL 文では、次のような不正な結果が返ります。

Account (会計)	Sales (販売)	Budget (予算)
Account 1	800	1200
Account 2	130	200
Account 3	600	750
Account 4	600	600

この結果は関係上は正しいのですが、あきらかに間違っています。たとえば、この結果では Account 1 の売上合計が 800 となっていますが、SALES テーブルによれば Account 1 の売上合計は 400 (100+100+200) です。

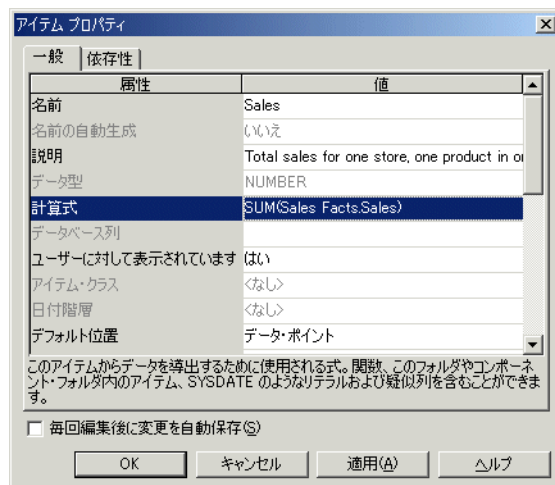
このような不正な結果の原因は、各テーブルが最初に一時的なテーブルに結合されてから集計が行われる単一クエリーにあります。しかしこの処理では、集計が複数回 (不正に) 行われることとなります。

複合フォルダ内でファントラップを設定した場合の作業

Discoverer では、複合フォルダ内でのファントラップ結合設定に関する警告が、無効な結合設定が存在することを示すメッセージとして表示されます。Discoverer で複合ファイルに対して正しい結果が確実に返るようにするには、ディテール・アイテムの「計算式」プロパティを編集して、集計計算式を明示的に指定します。

たとえば次のように、複合フォルダの Sales アイテムの「計算式」プロパティを、Sales Fact.Sales から SUM(Sales Facts.Sales) に設定します。

図 10-19 複合フォルダ内のアイテムについて指定された集計計算式の例



結合にデータ型の不一致がある場合の作業

Discoverer では、異なるデータ型 (VARCHAR、NUMBER または DATE など) のアイテム間の結合は禁止されています。ただし、以前の Discoverer リリースからアップグレードしている場合、異なるデータ型間に既存の結合が存在することがあります。データ型が異なる 2 つのアイテム間の結合が存在する場合、クエリーは実行されますが、エラー・メッセージが表示されて、クエリーは完了しません。また、データ型が異なるアイテムを含む結合の編集を試みると、エラー・メッセージが表示されます。

次の方法で、データ型が異なる 2 つのアイテム間の結合を作成できます。

- データ型が異なる 1 つ目のアイテムを基に新規アイテムを作成し、変換関数 (TO_CHAR(), TO_DATE(), TO_NUMBER() など) を使用して、新規アイテムのデータ型を 2 つ目のアイテムに合わせます。
- 新規アイテムと 2 つ目のアイテムの間に結合を作成します。

詳細は、「[データ型の異なる 2 つのアイテム間に結合を作成する方法の例](#)」を参照してください。

データ型の異なる 2 つのアイテム間に結合を作成する方法の例

この例では、次のアイテムを使用して、「Calendar Date」フォルダと「Store and Sales Detail」フォルダの間に結合を作成します。

- 「Calendar Date」フォルダの「Day of Week」アイテム
- 「Store and Sales Detail」フォルダの「Transaction Date」アイテム

これら 2 つのアイテムは、次のようにデータ型が異なります。

- 「Day of Week」アイテムのデータ型は VARCHAR
- 「Transaction Date」アイテムのデータ型は DATE

これら 2 つのアイテムを使用して 2 つのフォルダ間に結合を作成するには、次の手順を実行する必要があります。

- [「ステップ 1: 「Day of Week」アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムの作成](#)
- [「ステップ 2: 作成した新規アイテムを使用した結合の作成](#)

ステップ 1: 「Day of Week」アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムの作成

「Day of Week」アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムを作成する最初の手順は、次のとおりです。

1. 「Video Store Tutorial」ビジネスエリアから「Calendar Date」フォルダを選択します。
2. 「挿入」→「アイテム」を選択して、「[新規アイテム](#)」ダイアログを表示します。
3. 「アイテム名」フィールドに「New Day of Week」と入力します。
4. 「関数」ラジオ・ボタンを選択して、関数フォルダを表示します。
5. 「変換」フォルダの隣のプラス記号 (+) をクリックして、変換関数を表示します。
6. TO_DATE 関数を選択し、「貼付け >>」をクリックして、TO_DATE 関数を新規アイテムの「[ユーザー定義アイテム](#)」フィールドに貼り付けます。
7. 「[ユーザー定義アイテム](#)」フィールドの TO_DATE 関数のカッコ内のテキストを次のテキストで置き換えます。

```
Day of Week,Day
```

「[ユーザー定義アイテム](#)」フィールドに次のテキストが表示されます。

```
TO_DATE (Day of Week,Day)
```

8. 「OK」をクリックして、新規アイテムを作成します。

「Day of Week」(VARCHAR) アイテムを基に、DATE データ型に変換された新規アイテムが作成されました。

ステップ 2: 作成した新規アイテムを使用した結合の作成

正しいデータ型の新規ユーザー定義アイテムを作成したら、次の手順では新規アイテムを「Store and Sales Details」フォルダの「Transaction Date」アイテムに結合します。

1. 「Calendar Date」フォルダの「New Day of Week」アイテムを選択します。
2. 「挿入」→「結合」を選択して、「[結合ウィザード: ステップ 1](#)」ダイアログを表示します。
3. 「ディテール・アイテム」ドロップダウン・リストをクリックして、「[新規結合](#)」ダイアログを表示します。

「新規結合」ダイアログでは、新規結合のディテール・フォルダおよびアイテムを選択できます。

4. 「Store and Sales Details」フォルダの隣のプラス記号 (+) をクリックして、フォルダのアイテムを展開します。
5. 「Transaction Date」アイテムを選択し、「OK」をクリックして「新規結合」ダイアログを閉じます。
6. 「次へ」をクリックして、「[結合ウィザード: ステップ 2](#)」ダイアログを表示します。
7. 「終了」をクリックしてデフォルトの結合オプションを受け入れ、「[結合ウィザード: ステップ 2](#)」ダイアログを閉じます。

「New Day of Week」アイテムと「Transaction Date」アイテムのデータ型が同じなので、Discoverer ではこれら 2 つのアイテムを使用して、「Calendar Date」フォルダを「Store and Sales Details」フォルダに結合できます。

ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用したユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「ユーザー定義アイテム」
- 「導出ユーザー定義アイテム」
- 「集計ユーザー定義アイテム」
- 「集計ユーザー定義アイテムに適用される制限」
- 「分析関数と集計ユーザー定義アイテムの動作の相違点」
- 「集計導出ユーザー定義アイテム」
- 「集計導出ユーザー定義アイテムの例」
- 「ユーザー定義アイテムの作成方法」
- 「ユーザー定義アイテムのプロパティの編集方法」
- 「ユーザー定義アイテムの編集方法」
- 「ユーザー定義アイテムの削除方法」
- 「エンド・ユーザーが1つのワークシートからドリルアウトして Discoverer Viewer に他のワークシートを表示できるようにするユーザー定義アイテムの作成方法」
- 「PL/SQL ファンクションが必要な理由」
- 「ユーザー定義 PL/SQL ファンクション」
- 「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションの登録」
- 「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを自動的に登録する方法」
- 「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを手動で登録する方法」

ユーザー定義アイテム

ユーザー定義アイテムは、アイテム用のデータを導出する計算式を使用するアイテムです。

ユーザー定義アイテムを使用すると、Discoverer エンド・ユーザーはデータにビジネス計算を適用できます。たとえば、典型的なビジネス計算には次のものがあります。

- 利益マージン
- 月当たりの平均収益
- 予測した売上
- 製品の種類ごとの利益率

ユーザー定義アイテムは（フォルダにある他のアイテムと同様に）、条件、サマリー・フォルダ、値リスト、結合および他のユーザー定義アイテムで使用できます。

Discoverer マネージャは、ユーザー定義アイテムを作成し、ワークブックに含めることができます。

ユーザー定義アイテムを作成することには、次の利点があります。

- Discoverer エンド・ユーザーは、ユーザー定義アイテムを選択するだけで、複雑な計算をワークシートに含めることができます。
- 基礎となるデータベース・テーブルで列として存在しないフォルダに新規アイテムを追加できます。

次のものが含まれる式を使用して、ユーザー定義アイテムを作成します。

- 既存のアイテム
- 演算子
- リテラル
- 関数

3つのタイプのユーザー定義アイテムがあります。

- 導出ユーザー定義アイテム（詳細は、「[導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照）
- 集計ユーザー定義アイテム（詳細は、「[集計ユーザー定義アイテム](#)」を参照）
- 集計導出ユーザー定義アイテム（詳細は、「[集計導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照）

次のソースから Discoverer のユーザー定義アイテムの詳細がわかります。

- ユーザー定義アイテムの作業例の詳細は『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- 関数構文の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』を参照してください。

注意

- 2つ（またはそれ以上）のアイテムを連結する計算式を作成できます。アイテムを連結するには、アイテムの間に `||CHR(10)||` を挿入します。たとえば、「Calendar Year」アイテムと「Department」アイテムが含まれる新規のワークシート列を作成するには、次のような計算式を作成します。

Calendar Year ||CHR(10)|| Department

このアイテムが含まれるワークシートでは、「Calendar Year」と「Department」が1つの列に表示されます。たとえば、次のようになります。

2002 Sales Department

- ユーザー定義アイテム（インターネット・アドレスが含まれるもの）を作成し、そのユーザー定義アイテムを Discoverer Plus で使用することにより、エンド・ユーザーは Web ブラウザで事前定義の Discoverer Viewer ワークシートを起動できます（詳細は、「[エンド・ユーザーが1つのワークシートからドリルアウトして Discoverer Viewer に他のワークシートを表示できるようにするユーザー定義アイテムの作成方法](#)」を参照）。

導出ユーザー定義アイテム

導出ユーザー定義アイテムは、フォルダにある他のアイテムと同様に動作するユーザー定義アイテムで使用される式です。導出ユーザー定義アイテムは、軸アイテムまたはデータ・ポイントにできます。また、通常のアイテムを使用する任意の場所で使用できます。導出ユーザー定義アイテムの値は、ワークブックに含まれる他のアイテムにかかわらず常に同じです。

導出ユーザー定義アイテムの例を次に示します。

- $Sal * 12 + NVL(Comm, 0)$: 1年間の給与 + コミッションを返します
- $Initcap(ENAME)$: ENAME の頭文字を大文字にします
- 1: 値 1 を返します
- $Sysdate - 7$: 今日の日付から 7 日前の日付を返します

集計ユーザー定義アイテム

集計ユーザー定義アイテムは、GROUP 関数が適用される導出アイテムです (SUM、COUNT、MAX、MIN、AVG、DETAIL など)。詳細は「[導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照)。集計ユーザー定義アイテムの値は、ワークシートに含まれる他のアイテムによって異なります。

集計ユーザー定義アイテムの例を次に示します。

- $SUM(Sal) * 12$: 1年間の給与の合計を返します
- $SUM(Comm) / SUM(Sal)$: コミッションの合計を給与の合計で割った結果を返します
- $AVG(Monthly Sales)$: 毎月の給与の平均を返します

軸アイテムがどのようにグループ化されるかが、集合化された行の数に影響します。これは、2つの集計の比率を計算する場合に特に重要です。

たとえば、マージンを計算するには、Profit/Sales ではなく $SUM(Profit) / SUM(Sales)$ の計算を使用します。クエリーで使用される場合、前者は $SUM(Profit/Sales)$ になり、 $SUM(Profit) / SUM(Sales)$ とは異なる値になります。例では SUM 集計を使用していますが、他の任意の集計にも適用可能です (SUM、COUNT、MAX、MIN、AVG、DETAIL など)。

注意: 2つのデータ・ポイントの合計の比率を計算する場合、必ずデータ・ポイントを合計してから比率を計算します。

集計ユーザー定義アイテムに適用される制限

集計ユーザー定義アイテムを作成するときは、多くの制限が適用されることに注意してください。集計ユーザー定義アイテムに適用される制限は次のとおりです。

- データ・ポイントに設定された**デフォルト位置**プロパティを持つこと。
- ディテールに設定された**デフォルト総計**プロパティを持つこと。
- 現在のフォルダのみにあるアイテムを参照すること。
- 結合では使用できません。
- 必須条件では使用できません。
- 階層では使用できません。
- アイテム・クラスを保有できません。
- 複合フォルダの中にドラッグできません。
- Discoverer Plus でこれらに適用される集計関数をさらに持つことはできません。

集計ユーザー定義アイテムは、所属するフォルダによって参照されるデータの行数に影響を与えません。ワークシートで選択された場合にのみ、生成された SQL に影響します。

分析関数と集計ユーザー定義アイテムの動作の相違点

分析関数は、ビジネス・インテリジェンス・データの分析に使用できる数学および統計に基づく高度な計算です。たとえば、次のような質問に答えるために使用します。

- 最もよく売れる製品は何か。
- 現在の売上は昨年の売上と比較してどうか。
- 1年の販売取引数が最大の地域での販売取引の平均額はいくらか。

分析関数は、集計ユーザー定義アイテムとは次の点で動作が異なります。

- 分析関数はデータベース内で集計されます。
- 分析関数はメモリー・キャッシュではなくデータベース内で集計されるため、パフォーマンス・オーバーヘッドがあります。
- 分析関数と集計ユーザー定義アイテムの両方に適用される制限は、「[集計ユーザー定義アイテムに適用される制限](#)」を参照してください。
- 分析関数の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注意: Discoverer では、分析関数を Oracle Enterprise Edition データベースでのみサポートしています。

集計導出ユーザー定義アイテム

集計導出ユーザー定義アイテムは、複合フォルダに含まれる集計ユーザー定義アイテムであり、別の集計ユーザー定義アイテム（同じ複合フォルダにあるもの）を集計します。つまり、集計導出ユーザー定義アイテムは、別の集計ユーザー定義アイテムの中にネストされた単なる集計ユーザー定義アイテムです。

集計導出ユーザー定義アイテムにより、集計（AVG、SUM、COUNT など）を現行レベルの集計に適用し、追加の情報を導出できます。

集計導出ユーザー定義アイテムは、あらゆる点で普通の導出ユーザー定義アイテムと同様に動作します。詳細は、次の項目を参照してください。

- 「[導出ユーザー定義アイテム](#)」
- 「[集計導出ユーザー定義アイテムの例](#)」

集計導出ユーザー定義アイテムの例

この例では、ビデオ・ストア・チェーンで1年にわたって月当たりの平均売上を表示するために集計導出ユーザー定義アイテムをどのように使用するかを説明します。この例の集計導出ユーザー定義アイテムは、同じフォルダで作成された集計ユーザー定義アイテムを使用しています。集計ユーザー定義アイテムの詳細は、「[集計ユーザー定義アイテム](#)」を参照してください。

この例は、「Video Analysis」フォルダと「Monthly Sales Analysis」フォルダという2つの複合フォルダを使用しています。このフォルダは、サンプル・データを使用して作成できます（詳細は、[第27章「Discovererのサンプル・データ EUL、データおよびワークブック」](#)を参照）。

集計導出ユーザー定義アイテムは、複合フォルダ「Monthly Sales Analysis」で作成されます。「Monthly Sales Analysis」複合フォルダは、「Video Analysis」複合フォルダから次のアイテムをドラッグして作成されます。

- 部門
- Region
- 都市
- 店舗名

- Year
- 四半期
- 月

複合フォルダ「Monthly Sales Analysis」は、毎月の全店舗のデータの行を参照します。

集計ユーザー定義アイテム (Monthly Sales Per Store) は、次の計算式を使用して「Monthly Sales Analysis」複合フォルダで作成されます。

SUM(Video Analysis.Sales)

このアイテムは、所定の店舗の所定の月の売上合計を示します。

図 11-1 集計ユーザー定義アイテム「SUM(Video Analysis.Sales)」を使用したクエリーの結果

Month	Monthly Sales per Store SUM	Store Name
Jan	£26,091.99	Store No. 1
Feb	£20,483.19	Store No. 1
Mar	£25,258.85	Store No. 1
Apr	£32,459.99	Store No. 1
May	£30,766.77	Store No. 1
Jun	£22,529.44	Store No. 1
Jul	£13,735.11	Store No. 1
Aug	£14,027.78	Store No. 1
Sep	£12,931.60	Store No. 1
Oct	£11,810.50	Store No. 1
Nov	£10,011.17	Store No. 1
Dec	£10,414.49	Store No. 1
Jan	£2,914.94	Store No. 10

集計導出ユーザー定義アイテム (「Average Monthly Sales per Store」) は、次の計算式を使用して「Monthly Sales Analysis」複合フォルダで作成されます。

AVG(Monthly Sales Per Store)

このアイテムは、所定の店舗の所定の月の平均売上合計を示します。

図 11-2 集計導出ユーザー定義アイテム AVG(Monthly Sales Per Store) を使用したクエリーの結果

Month	Average Monthly Sales per Store	Store Name
Jan	£2,174.33	Store No. 1
Feb	£1,706.93	Store No. 1
Mar	£2,104.90	Store No. 1
Apr	£2,705.00	Store No. 1
May	£2,563.90	Store No. 1
Jun	£1,877.45	Store No. 1
Jul	£1,144.59	Store No. 1
Aug	£2,337.96	Store No. 1
Sep	£2,155.27	Store No. 1
Oct	£1,181.05	Store No. 1
Nov	£1,668.53	Store No. 1
Dec	£1,735.75	Store No. 1
Jan	£264.99	Store No. 10

注意

- 「Average Monthly Sales per Store」アイテムは平均の毎月の売上を示し、地域、四半期、年度にわたって分析できます。これは、傾向を比較するのに便利です。この形式のネストされた集計は、新規フォルダに集計ユーザー定義アイテムを作成することによってのみ可能です。新規フォルダは、元の複合フォルダにあった個々の売上ではなく毎月の売上を表すので、集計ユーザー定義アイテムを新規フォルダに作成する必要があります。

- 集計導出ユーザー定義アイテムは、Discoverer によって作成された SQL が GROUP BY 句を含むようにします。この句により、Discoverer エンド・ユーザーのクエリーはユーザー定義アイテムのクエリーでの使用にかかわらず、非集計アイテムの各組合せの 1 行を返すようになります。これにより、行はその他のアイテムのレベルで集合化されるので、フォルダによって返される行数が少なくなります。

ユーザー定義アイテムの作成方法

この作業を使用して、ユーザー定義アイテム（導出ユーザー定義アイテム、集計ユーザー定義アイテム、集計導出ユーザー定義アイテム）を作成できます。

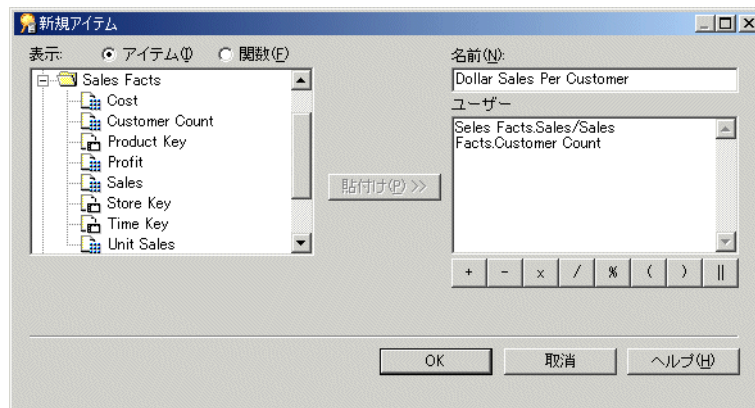
新規ユーザー定義アイテムを作成する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「データ」タブで新規ユーザー定義アイテムを含めるフォルダを選択します。
2. 「挿入」→「アイテム」を選択して、「新規アイテム」ダイアログを表示します。

このダイアログにより、新規ユーザー定義アイテムを作成し、選択したフォルダに追加できます。

注意：フォルダを選択しない場合、Discoverer Administrator は「新規アイテム」ダイアログを表示します。このダイアログで、新規ユーザー定義アイテムを含めるフォルダを選択できます（現在開いているビジネスエリアから任意のフォルダを選択できます）。

図 11-3 「新規アイテム」ダイアログ



3. 新規ユーザー定義アイテムの名前を指定します。
4. 「ユーザー定義アイテム」フィールドに計算式を入力します。

計算構文を扱い慣れている場合は、計算式を「ユーザー定義アイテム」フィールドに入力します。

注意：「ユーザー定義アイテム」フィールドに計算式を入力する場合は、計算式の前に等号 (=) を付ける必要があります。

あるいは、次の方法で計算式を段階的に作成できます。

- アイテムをビジネスエリアから計算式に追加するには、「アイテム」ラジオ・ボタンをクリックして「表示」リストからアイテムを選択し、次に「貼付け」をクリックしてアイテムを「ユーザー定義アイテム」フィールドにコピーします。
- 関数を計算式に追加するには、「関数」ラジオ・ボタンをクリックして「表示」リストから関数を選択し、次に「貼付け」をクリックして関数を「ユーザー定義アイテム」フィールドにコピーします。
- 数学演算子を計算式に含めるには、「ユーザー定義アイテム」フィールドの下にある適切な演算子ボタンをクリックします。

ヒント: アイテムを「ユーザー定義アイテム」フィールドに貼り付ける前に、「ユーザー定義アイテム」フィールドのアイテムを挿入する場所にカーソルを置きます。

注意: ユーザー定義アイテムは、標準の Oracle データベースの構文に従います。この構文の詳細は『Oracle Database SQL リファレンス』を参照してください。

注意: 登録されているユーザー定義 PL/SQL ファンクションは、「データベース」グループに表示されます。詳細は、「ユーザー定義 PL/SQL ファンクション」を参照してください。

5. 「ユーザー定義アイテム」フィールドで詳細を指定し終えたら、「OK」をクリックします。

「ユーザー定義アイテム」フィールド内にエラーがなければ、新規アイテムが作成されます。「ユーザー定義アイテム」フィールドにエラーがある場合、Discoverer Administrator はまずエラーを表示し、「新規アイテム」ダイアログを表示します。これにより詳細を訂正できます。

この時点で、新規ユーザー定義アイテムを使用し、結合や条件、さらに新規のユーザー定義アイテムも作成できます。新規ユーザー定義アイテムを他のユーザー定義アイテムに含めることもできます。

ユーザー定義アイテムのプロパティの編集方法

ユーザー定義アイテムのプロパティ編集の詳細は、「[アイテム・プロパティの編集方法](#)」を参照してください。

ユーザー定義アイテムの編集方法

既存のユーザー定義アイテムを編集する手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア: 「データ」タブでユーザー定義アイテムを選択し、「編集」→「編集」を選択して、「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログを表示します。
2. 必要に応じてユーザー定義アイテムを変更します。
たとえば、次のような場合です。
 - ユーザー定義アイテムの名前の変更
 - アイテム、関数または演算子のユーザー定義アイテムのテキストへの追加または削除
3. 「OK」をクリックし、変更内容を保存してダイアログを閉じます。

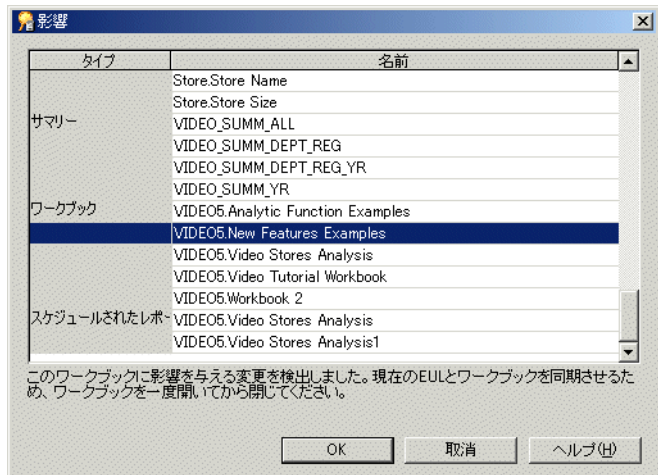
ユーザー定義アイテムの削除方法

1つ以上のユーザー定義アイテムを削除できます。ユーザー定義アイテムを削除する場合は、削除するユーザー定義アイテムを使用している他の EUL オブジェクトが影響を受ける可能性があることに注意してください。「影響」ダイアログを使用すれば、ユーザー定義オブジェクトの削除による影響を受ける可能性がある別のオブジェクトを確認できます。

ユーザー定義アイテムを削除する手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア: 「データ」タブで、削除するユーザー定義アイテムを選択します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。
2. 「編集」→「削除」を選択して、「削除の確認」ダイアログを表示します。
3. (オプション) このアイテムの削除によって影響を受ける可能性があるオブジェクトを確認する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。

図 11-4 「影響」 ダイアログ



「影響」ダイアログを使用すると、アイテムの削除による影響を受ける可能性のある別の EUL オブジェクトを確認できます。

注意: 「影響」ダイアログには、ファイル・システム (.dis ファイル内) に保存されたワークブックに対する影響は表示されません。

- b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが、リストの一番下に表示されます。
 - c. アイテムの削除による影響を確認後、「閉じる」をクリックして、「影響」ダイアログを閉じます。
4. 選択したアイテムを削除する場合は、「はい」をクリックします。

エンド・ユーザーが1つのワークシートからドリルアウトして Discoverer Viewer に他のワークシートを表示できるようにするユーザー定義アイテムの作成方法

エンド・ユーザーがそこからドリルアウトして、Discoverer Viewer の別のワークシートで追加情報や関連情報を表示できるワークシートを作成できます。

インターネット・アドレス (URL) が含まれるユーザー定義アイテムを Discoverer Administrator に作成し、それと同じアイテムをワークシートに含めることができます。エンド・ユーザーはそのアイテムをクリックして、事前定義の Discoverer Viewer ワークシートを表示できます。

エンド・ユーザーが1つのワークシート (ソース) からドリルアウトして、Discoverer Viewer に別のワークシート (ターゲット) を表示できるようにするユーザー定義アイテムを作成する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Plus または Discoverer Desktop でターゲット・ワークシートを作成し、データベースに保存します。

これが、エンド・ユーザーがソース・ワークシートからドリルアウトする先となる事前定義ワークシートです。

ワークシート作成の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

注意: 状況依存の情報 (エンド・ユーザーがドリルアウトする元となるソース・ワークシートの行または列に関連する情報) をターゲット・ワークシートに表示するには、ターゲット・ワークシートでデータをフィルタ処理する方法 (パラメータやページ・アイテムなど) を使用する必要があります。

2. Discoverer Viewer を使用して、ステップ 1 で作成したターゲット・ワークシートを表示します。
3. ターゲット・ワークシートの URL をクリップボードにコピーします。
ターゲット・ワークシートの URL を Discoverer Administrator の新規ユーザー定義アイテムに貼り付けてから、ユーザー定義アイテムの計算式を変更します。
4. Discoverer Administrator で「新規アイテム」ダイアログを表示します（「ユーザー定義アイテムの作成方法」を参照）。
ソース・ワークシートで新規ユーザー定義アイテムを使用して、Discoverer Viewer 内のターゲット・ワークシートにドリルアウトします。
5. 「新規アイテム」ダイアログの「ユーザー定義アイテム」フィールドに URL（クリップボードにコピーしたもの）を貼り付けます。
この時点で新規ユーザー定義アイテムに含まれる URL を編集し、各パラメータの値を対応する EUL アイテム名で置き換えます。EUL アイテムにより、ターゲット・ワークシート内のパラメータで使用する動的な値が提供されます。
6. 「新規アイテム」ダイアログの「ユーザー定義アイテム」フィールドで、URL の最初と最後に一重引用符 (') を入力します。
たとえば、次のようになります。

```
'http://mymachine.com/discoverer/viewer?&cn=cf_a208&pg=1&wbk=PARAMETERS&wsk=26&qp_myRegion=CENTRAL'
```


一重引用符を使用することにより、URL のテキストを Discoverer で正しく処理できるようになります。
7. 「ユーザー定義アイテム」フィールド内の計算式を編集し、URL の各パラメータの値を、対応する EUL のアイテム名で置き換えます。
たとえば、ターゲット・ワークシートで myRegion（EUL アイテムの Region を表す）という名前のパラメータが使用されている場合、「ユーザー定義アイテム」フィールドに貼り付ける URL は、次のようになります。

```
'http://mymachine.com/discoverer/viewer?&cn=cf_a208&pg=1&wbk=PARAMETERS&wsk=26&qp_myRegion=CENTRAL'
```


EUL アイテムで決定された値を持つ URL の一部を置き換えるには、'|<ItemName>|' 構文を使用します。たとえば、前述の URL では、次のように CENTRAL 値が置き換えられます。

```
'http://mymachine.com/discoverer/viewer?&cn=cf_a208&pg=1&wbk=PARAMETERS&wsk=26&qp_myRegion='||Region||''
```


Region は対応する EUL アイテムであり、ターゲット・ワークシート内の myRegion パラメータに必要な値を動的に提供します。
注意: 一重引用符と || 演算子を使用して、最終的な URL を正しく作成してください。
8. 「名前」フィールドに、新規ユーザー定義アイテムに付ける適切な名前を入力します。
たとえば、新規ユーザー定義アイテムに Drill_to_myRegion と命名できます。
9. 「OK」をクリックしてダイアログを閉じ、変更内容を保存します。
10. 「ワークエリア」の「データ」タブで、作成したユーザー定義アイテムを強調表示し、「編集」→「プロパティ」を選択します。
Discoverer により、作成したユーザー定義アイテムの「アイテム・プロパティ」ダイアログが表示されます。

11. 「コンテンツ・タイプ」属性をクリックし、ドロップダウン・リストから FILE を選択します。
「コンテンツ・タイプ」属性により、別のアプリケーションが起動されることが Discoverer に通知されます。この場合は、Discoverer Plus、Discoverer Desktop または Discoverer Viewer によって Web ブラウザが起動され、Discoverer Viewer にターゲット・ワークシートが表示されます。
12. 「OK」をクリックしてダイアログを閉じ、変更内容を適用します。
13. 新規の Discoverer Plus セッションを開始します（あるいは Discoverer Desktop に再接続します）。
14. Discoverer Plus または Discoverer Desktop でワークシートを作成し（ソース・ワークシート）、Drill_to_myRegion ユーザー定義アイテム（前述の手順で Discoverer Administrator で作成したもの）をこのワークシートに含めます。
ワークシート作成の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

エンド・ユーザーが Discoverer Plus、Discoverer Desktop または Discoverer Viewer でこのソース・ワークシートを表示したときに、Drill_to_myRegion ユーザー定義アイテム（前述の手順で作成したもの）をクリックすると、Discoverer Viewer にターゲット・ワークシートを表示できます。EUL アイテム「Region」に対する状況依存値が、myRegion パラメータを使用してターゲット・ワークシートに動的に渡され、正しい結果データが表示されます。

このタスクで使用される URL の例は、次の構成要素に分解できます。

インターネット・アドレスの部分	インターネット・アドレスの部分が表示内容
http://mymachine.com/discoverer/viewer?	Discoverer Viewer のインターネット・アドレス (URL)
&cn=cf_a208	データベースに接続するために使用する接続文字列
&wbk=PARAMETERS	ワークブック識別子
&wsk=26	ワークシート識別子
&qp_myRegion	パラメータ myRegion (Discoverer Plus または Discoverer Desktop で作成)
=CENTRAL	ターゲット・ワークシートのパラメータ myRegion の値 (CENTRAL region)

PL/SQL ファンクションが必要な理由

PL/SQL ファンクションは SQL に対する Oracle のプロシージャ拡張機能の 1 つです。PL/SQL ファンクションを使用すると、SQL 内の PL/SQL 参照を経由して、Oracle Server で実行される PL/SQL ファンクションにアクセスできます。PL/SQL ファンクションにより、データベースにある値を計算できます。PL/SQL ファンクションの詳細は、『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

ユーザー定義 PL/SQL ファンクション

ユーザー定義 PL/SQL ファンクションは、Discoverer マネージャが作成する PL/SQL ファンクションであり、Discoverer エンド・ユーザーの追加要件を満たすように設計されています（複雑なユーザー定義アイテムを用意する場合など）。ユーザー定義 PL/SQL ファンクションは、Oracle が提供する PL/SQL ファンクションを補足し、すべてのデータベース・プロセスに利用できます。

SQL*Plus または プロシージャ・エディタを使用して、ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを作成します。ユーザー定義 PL/SQL ファンクションは Discoverer Administrator では直接作成できません。詳細は、『SQL*Plus ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

注意: Discoverer Plus で、PL/SQL ファンクションを使用する導出ユーザー定義アイテム（詳細は「[導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照）を含むフォルダを表示できるのは、これらのファンクションに対して EXECUTE データベース権限を持つユーザーのみです。

ユーザー定義 PL/SQL ファンクションの登録

Discoverer を使用してユーザー定義 PL/SQL ファンクションにアクセスするには、ファンクションを EUL に登録する必要があります。ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを登録すると、登録したユーザー定義 PL/SQL ファンクションは「[ユーザー定義アイテムの編集](#)」ダイアログのデータベース関数のリストに表示され、標準の Oracle 関数と同じ方法で使用できます。

ユーザー定義 PL/SQL ファンクションは次の 2 つの方法で登録できます。

- ファンクションをインポートして、自動的に登録（推奨）

自動的にインポートして PL/SQL ファンクションを登録することをお勧めします（特に多数のファンクションを登録する場合）。これは、ファンクションに関する情報を手動で入力すると間違いやすいためです。ファンクションをインポートする場合は、各ファンクションに関するすべての情報（名前、データベース・リンク、返される値のタイプ、引数のリストなど）がインポートされます。インポートを使用すると、各ファンクションに手動で情報を入力する必要がないので、ファンクションの情報が正確になります。

- 手動による方法

手動による登録では、ファンクションに関するすべての情報を入力し、各ファンクションを個々に登録する必要があります。

注意: PL/SQL ファンクションを登録するには、そのファンクションに対する EXECUTE 権限が必要です。

ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを自動的に登録する方法

PL/SQL ファンクションを自動的に登録するには、次の方法でインポートする必要があります。

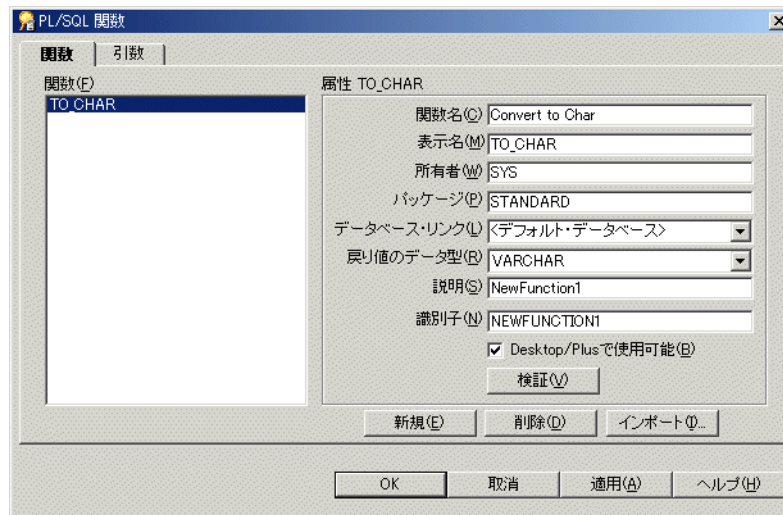
1. 「ツール」 → 「PL/SQL 関数の登録」を選択すると、「[PL/SQL 関数](#)」ダイアログ: 「[関数](#)」タブが表示されます。
2. 「インポート」をクリックすると、「[PL/SQL 関数のインポート](#)」ダイアログが表示されます。
このダイアログを使用して、インポートする PL/SQL ファンクションを選択します。
3. インポートするファンクションを選択します。
同時に複数のファンクションを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のファンクションをクリックします。
4. 「OK」をクリックします。
選択したファンクションがインポートされ、「[PL/SQL 関数](#)」ダイアログ: 「[関数](#)」タブにファンクションの詳細が表示されます。
選択したファンクションに関する情報は、自動的にインポートされます。手動で情報を入力したり、情報を確認する必要はありません。
5. 「OK」をクリックします。
これで、PL/SQL ファンクションは Discoverer で使用できるように登録されました。

ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを手動で登録する方法

Discoverer で PL/SQL ファンクションを手動で登録する手順は、次のとおりです。

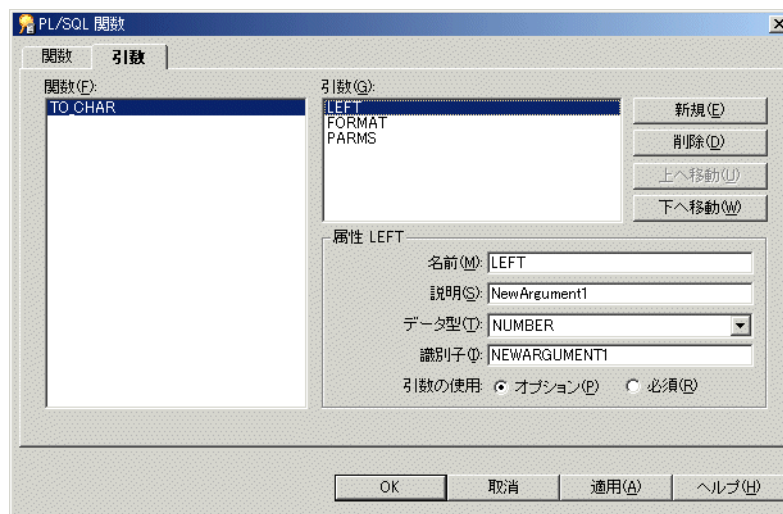
1. 「ツール」 → 「PL/SQL 関数の登録」 を選択すると、「PL/SQL 関数」ダイアログ：「関数」タブが表示されます。

図 11-5 「PL/SQL 関数」ダイアログ：「関数」タブ



2. 「新規作成」 をクリックして、ファンクションの属性を指定します。
3. 「検証」 をクリックして、入力した情報の妥当性と記述の正確さを確認します。
4. ファンクションが無効な場合は、属性を修正し、もう一度「検証」 をクリックします。
5. (オプション) 引数を受け入れるファンクションの場合は、次の操作を実行できます。
 - a. 「PL/SQL 関数」ダイアログ：「引数」タブを表示します。
 - b. 「引数」タブで、「新規作成」 をクリックして、引数の属性を指定します。

図 11-6 「PL/SQL 関数」ダイアログ：「引数」タブ



6. ファンクションの定義を終了したら、「OK」 をクリックします。
これで、ユーザー定義 PL/SQL ファンクションは Discoverer で使用できるように登録されました。

条件の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用した条件の適用方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「条件」
- 「異なるタイプの条件」
- 「単一条件の作成方法」
- 「拡張された条件の作成方法」
- 「条件の編集方法」
- 「条件プロパティの編集方法」
- 「条件の削除方法」
- 「条件の例」
- 「外部結合と `DisableAutoOuterJoinsOnFilters` レジストリの設定」
- 「必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法」
- 「ソース・フォルダが（行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を含む場合にサマリー・フォルダを有効にする方法」

条件

条件によりワークシート・データがフィルタ処理されるため、Discoverer エンド・ユーザーは必要なデータのみを分析できます。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーに 1999 年や 2000 年のデータは除いて 2001 年のデータのみへのアクセスを提供する場合などです。

また、機密性のあるデータへのアクセスを制限するためにも条件を使用します。必須条件を適用することで、機密性のないデータのみが Discoverer ユーザーに使用可能になります（詳細は、「異なるタイプの条件」を参照）。Discoverer エンド・ユーザーに、必要なデータのみを表示させることができます。

Discoverer マネージャは、一般的に使用される条件を予測し、Discoverer エンド・ユーザーがその条件をワークシートに適用できるように条件を使用可能にします。これにより、Discoverer エンド・ユーザーは効率的に作業ができます。

注意

- Discoverer Plus ユーザーは、自分自身の条件も作成できます。

条件のカテゴリ

条件には、次のカテゴリがあります。

- 単一条件: 単一の条件文を含みます。次に例を示します。'display data where year = 2001'
- 拡張された条件: 2 つ以上の条件文を含みます。たとえば、次のようになります。

```
display data where year = 2001 AND quarter = 1 AND region = south
```

- ネストされた条件: これらの条件は、他の条件文の中に定義された条件文を含んでいます。たとえば、次のようになります。

```
display data where year = 2001 AND (region = north OR region = south)
```

この例では、OR 句は AND 句の中にネストされています。

- 拡張され、ネストされた条件: 2 つ以上の条件文を含み、拡張された条件の中に定義された条件文も含んでいます。たとえば、次のようになります。

```
display data where year = 2001 AND quarter = 1 AND region = south AND (region = north OR region = south)
```

この例では、ネストされた条件の例のように、OR 句は AND 句の中にネストされています。

拡張された条件を作成するかわりに、2 つ以上の単一条件を作成し、同時に適用する場合があります。これにより、Discoverer のユーザーは条件のどの部分を使用するかを選択できます。

注意: 拡張された条件の適用と同等の複数の単一条件の適用には、微妙な違いがあります（詳細は『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照）。

Discoverer での条件の使用

Discoverer で条件を使用すると、ワークシート・データに対して条件文を一致させます。

- 条件文に一致するデータはワークブックに表示されます。
- 条件文に一致しないデータはワークブックに表示されません。

たとえば、データの表示を過去 2 年間の売上に限定する場合があります。または、2 種類の販売品目のみのデータを表示する場合があります。これらの各作業では、データをフィルタ処理して条件に一致する情報を検索します。

異なるタイプの条件

条件には2つのタイプがあります。

- 必須条件
- オプション条件

必須条件とオプション条件は同じ方法で作成します。ただし、次のことに注意してください。

- 必須条件は、条件を含むフォルダからのアイテムを1つ以上含むワークシートに常に適用されます。Discoverer Plus ユーザーには必須条件は知らされません。また、必須条件をオフにすることはできません。

たとえば、必須条件を地域販売担当者の売上データに割り当てて、売上の表示内容をそれぞれの担当する地域に制限する場合などです。

- Discoverer Plus ユーザーは、必要に応じてオプション条件をオンまたはオフにできます。Discoverer Plus ユーザーは条件の式を表示できますが、編集はできません。

たとえば、全販売地域を担当する副社長は、すべての売上データを確認でき、条件を適用して特定の販売地域に関連する販売データも確認する必要があります。

次の表は、必須条件とオプションの条件の違いについて詳細を示しています。

必須条件	オプション条件
常にフォルダの結果に適用されます。	Discoverer Plus で選択された場合のみフォルダの結果に適用されます。
Discoverer マネージャにより使用され、フォルダによって返される行を永続的に制限します。	条件の作成を容易にするショートカットとして、Discoverer Administrator によりユーザーに提供されます。
Discoverer Plus では表示されません。	Discoverer Plus で表示されます（編集はできません）。
複合フォルダに作成された場合、ソース・フォルダのアイテムを参照できます。	複合フォルダに作成された場合、複合フォルダのアイテムのみを参照できます。
EUL のフォルダ定義の（データベースにある）結果セットに影響を与えます。	EUL のフォルダ定義の（データベースにある）結果セットに影響を与えません（Discoverer Plus で適用された場合のみ、オプション条件が使用されるため）。
追加、変更または削除された場合、フォルダに基づくすべてのサマリーは無効になります。これは、フォルダの条件に結果セットが一致しなくなるからです。 これらのサマリーは、「更新必須」に設定され、もう一度使用できるようにリフレッシュされる必要があります。	追加、変更または削除された場合、フォルダに基づくサマリーに影響を与えません。

注意

- 必須条件を含むフォルダにあるアイテムから複合フォルダを作成する場合、複合フォルダの結果は元のフォルダの必須条件によって制限されます。複合フォルダの「プロパティ」ダイアログの「コンポーネント」タブを使用して、複合フォルダに影響を与えるすべての必須条件を表示できます。

単一条件の作成方法

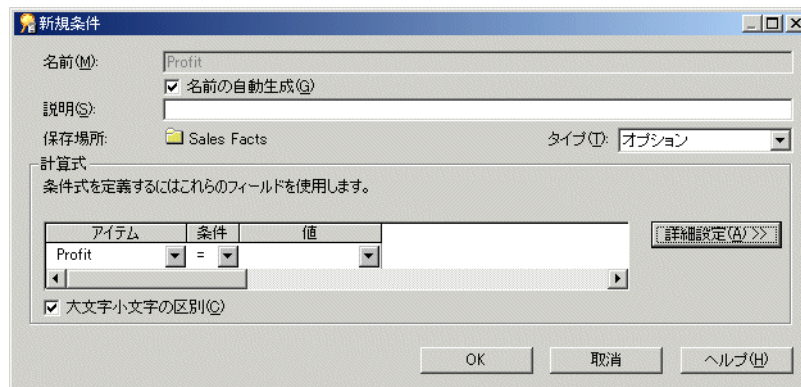
Discoverer エンド・ユーザーが新しい方法でワークシートのフィルタ処理をできるようにするには、単一条件を作成します。Discoverer エンド・ユーザーが、フォルダに基づくワークブックを使用するときに新しい条件を適用できるように、フォルダに条件を追加します。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが今年のデータのみが必要なため、データをフィルタ処理してその年の結果を表示するオプション条件を作成する場合があります。または、データの特定のエリアに必須条件を設定して、機密性のあるデータへのアクセスを制限する場合があります（詳細は、「異なるタイプの条件」を参照）。

単一条件を作成する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「データ」タブで、次のいずれかを実行します。
 - 条件を作成するフォルダを選択します。
 - 条件の一部を形成するアイテムを選択します。
2. 「挿入」→「条件」を選択して、「新規条件」ダイアログを表示します。

図 12-1 「新規条件」ダイアログ



注意：最初にフォルダまたはアイテムを選択しないで「挿入」→「条件」を選択した場合、ダイアログが表示される前にフォルダまたはアイテムを選択するように要求されます。

3. (オプション) 条件名が自動的に生成されるようにするには、「名前自动生成」チェックボックスを選択します。

注意：デフォルトで、Discoverer Administrator は条件に基づいて条件名を作成します。ただし、条件にユーザー独自の名前を指定できます。

4. (オプション) 条件にユーザー独自の名前を指定する手順は、次のとおりです。
 - a. 「名前自动生成」チェックボックスの選択を解除します。
 - b. 条件の名前を「名前」フィールドに入力します。

5. (オプション) 条件の簡単な説明を「説明」フィールドに入力します。

ここに入力したテキストは、Discoverer Administrator で条件が編集される場合またはエンド・ユーザーが条件を強調表示する場合に表示されます。

6. 「タイプ」ドロップダウン・リストで条件のタイプを指定します。
 - Discoverer エンド・ユーザーが条件をオンまたはオフできるようにするには、「オプション」を選択します。
 - 条件を常時適用する場合は、「必須」を選択します。

7. 「計算式」エリアで次のように条件文を定義します。
 - a. 「アイテム」ドロップダウン・リストで、データのフィルタ処理に使用するアイテムまたはユーザー定義アイテムを選択します。たとえば、特定の年のデータを表示するには、「Year」を選択します。データのフィルタ処理に使用するユーザー定義アイテムを作成するには、「ユーザー定義アイテムの作成」をクリックします（詳細は、[第11章「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」](#)を参照）。
 - b. 「条件」ドロップダウン・リストを使用して、アイテムに対してデータを一致させる方法を選択します。たとえば、より大きい (>) 記号を選択して、アイテムの値が特定の数字よりも大きいデータをフィルタ処理します。
 - c. 「値」フィールドを使用して、どのデータまたはアイテムを一致させるか定義します。たとえば、「2002」と入力すると2002年のデータのみが対象になります。アイテムの値リストが作成済である場合、これらのアイテムはドロップダウン・リストに表示されます（値リストの詳細は、[第9章「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)を参照）。データのフィルタ処理に使用するユーザー定義アイテムを作成するには、「ユーザー定義アイテムの作成」をクリックします。一致させるアイテムを選択するには、「アイテムの選択」をクリックして、リストからアイテムを選択します。
8. 「大文字小文字の区別」チェックボックスを使用して、次のようにテキスト・データの大きくと小文字を一致させるかどうかを指定します。
 - 「大文字小文字の区別」チェックボックスを選択し、条件で大文字と小文字が区別されるようにします。
 - 「大文字小文字の区別」チェックボックスの選択を解除し、条件で大文字と小文字が区別されないようにします。

たとえば、「大文字小文字の区別」チェックボックスが選択されている場合、一致させる値が 'New York' の場合は 'new york' のデータを返しません。
9. 「OK」をクリックして詳細を保存し、「新規条件」ダイアログを閉じます。

新規条件は、[ワークエリア：「データ」タブ](#)に表示されます。Discoverer のユーザーがこのビジネスエリアにアクセスする場合、この条件アイテムはフォルダに表示されます。フォルダに条件が表示されていても、フォルダがフィルタ処理されているわけではないので注意してください。エンド・ユーザーは、ワークブックの条件を選択して使用する必要があります。

注意

- 分析関数（行のグループに基づく集計値を計算する関数）に基づいて条件を作成する場合は、オプションとして条件の「タイプ」を指定する必要があります（詳細は、「[異なるタイプの条件](#)」を参照）。「必須」を選択すると、分析関数は必須条件で使用できないことを通知するメッセージが表示されます。

拡張された条件の作成方法

拡張された条件とは、2つ以上の条件文を含む条件のことをいいます。たとえば、都市 New York の1999年または2000年のデータに絞り込む場合は、City = New York AND (Year = 1999 or 2000) のような条件を作成します。さらに、既存の条件を既存の拡張された条件にネストすることがあります。たとえば、「Department = Video AND Rental Profit > \$100」などのようにします。Discoverer では、必要なだけ条件文を追加して、強力な条件アイテムを容易に作成できます。

拡張された条件を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「[単一条件の作成方法](#)」の手順に従って、最初の条件文を作成します。
2. 「[詳細設定](#)」をクリックして、条件文を追加します。

図 12-2 「新規条件」ダイアログ (詳細設定)



「追加」、「削除」、「AND」、「OR」および「NOT」ボタンが追加されます。これらのボタンを使用して、拡張された条件を作成します。

3. 次のように、拡張された条件を作成します。

- a. 「追加」をクリックして、新規条件文を追加します。
- b. 次のように、新規条件文のアイテムを指定します。
 - 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、表示されたアイテムのリストからアイテムを選択します。
 - 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、「ユーザー定義アイテムの作成」オプションを選択して、ユーザー定義アイテムを拡張された条件に含めます。
 - 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、「条件のコピー」オプションを選択して、既存の条件のコピーを拡張された条件に含めます。これは元の条件のコピーであるため編集が可能です。
 - 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、「条件の選択」オプションを選択して、既存の条件を拡張された条件に含めます。既存の条件は、ここでは編集できません。
- a. 新規条件文の条件と値を指定します。
- b. 条件文の組合せを指定します。

注意: 各条件文の隣のハンドルを使用して条件文を強調表示し、次のアクションを実行できます。

- グループを選択し、「AND」をクリックして、すべての条件文が一致することを条件に指定します。
- グループを選択し、「OR」をクリックして、条件文の1つが一致することを条件に指定します。
- グループを選択し、「NOT」をクリックして、条件文が条件に一致しないことを条件に指定します。
- 「削除」をクリックして、条件文の行を条件から削除します。
- (条件文の隣の) ハンドルをドラッグ・アンド・ドロップし、ネストされた階層に条件文を移動します。
- グループをダブルクリックして、「AND」を「OR」に変えるなどの変更を加えます。

注意: 条件文の移動は、拡張された条件内での条件文の適用順序に影響を与えます（ネストされた条件文は最初に適用されます）。

- 完了後に「OK」をクリックし、拡張された条件を保存してダイアログを閉じます。

新規条件は、ワークエリア:「データ」タブに表示されます。Discoverer のユーザーがこのビジネスエリアにアクセスする場合、この条件アイテムはビジネスエリア・フォルダに表示されます。

条件の編集方法

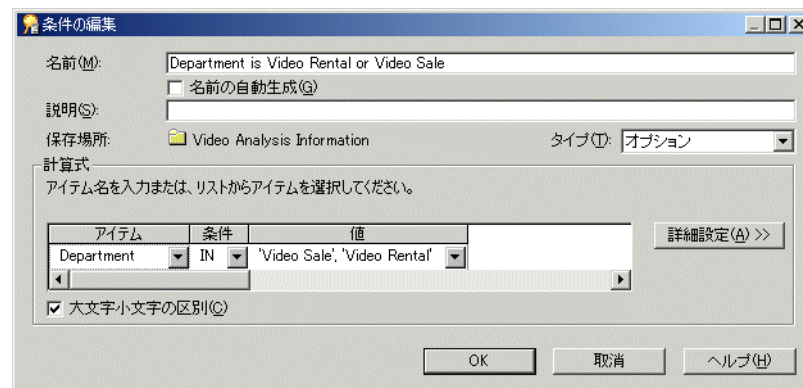
条件を編集して、その動作を変更します。たとえば、次の操作を行うことができます。

- 条件の名前の変更
- 条件によって返されるデータの変更
- さらに拡張された条件の作成

条件を編集する手順は、次のとおりです。

- ワークエリア:「データ」タブで、編集する条件を選択します。
- 「編集」→「編集」を選択して、「新規条件」ダイアログを表示します。

図 12-3 「条件の編集」ダイアログ



- 必要に応じて条件の詳細を編集します。
 - 「OK」をクリックして詳細を保存し、ダイアログを閉じます。
- 更新された条件は、ワークエリア:「データ」タブに表示されます。

注意

- 「条件プロパティ」ダイアログを使用して、条件を変更することもできます。

条件プロパティの編集方法

条件プロパティを編集して、条件の動作や識別子を変更します（詳細は、「識別子」を参照）。識別子は、Discoverer の一意な識別ラベルです。また、条件自体を編集して、条件が動作する方法を変更することもできます（詳細は、「条件の編集方法」を参照）。

条件プロパティを編集する手順は、次のとおりです。

- ワークエリア:「データ」タブで、編集する条件を選択します。
- 「編集」→「プロパティ」を選択して、「条件プロパティ」ダイアログが表示します。
- 条件プロパティを編集します。
- 「OK」をクリックして詳細を保存し、ダイアログを閉じます。

ワークエリア: 「データ」 タブは更新され、条件に加えた変更が反映されます。

条件の削除方法

ビジネスエリアから条件を永続的に削除するときは、条件を削除します。たとえば、以前は2000年のデータがフィルタ処理されていて、今回は使用可能なすべての年のデータにアクセスできるようにする場合があります。

条件を削除する手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア: 「データ」 タブで、削除する条件を選択します。
2. 「編集」 → 「削除」 を選択して、「削除の確認」 ダイアログを表示します。
3. 確認画面で「はい」をクリックして、条件を永続的に削除します。

条件はビジネスエリアから削除されます。

注意

- 削除された条件を使用しているワークブックを Discoverer ユーザーが次に開くまたはリフレッシュする場合は、以前にフィルタ処理されたデータを利用できます。

条件の例

次の例は、Discoverer Administrator で条件がどのように使用されるかを示しています。

注意

- 条件の例の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

例 1: 2002 年のデータを検索する条件の使用

2002年のデータのみを返す条件を作成するには、「新規条件」ダイアログの「計算式」エリアに次のように入力します。

アイテム	条件	値
Year	=	2002

例 2: 過去 7 日間の売上を検索する条件の使用

過去 7 日間の売上のみを返す条件（ユーザー定義アイテム「Transaction Age (in Days)」を使用）を作成するには、「新規条件」ダイアログの「計算式」エリアに次のように入力します。

アイテム	条件	値
Transaction Age (in days)	<	7

ユーザー定義アイテム「Transaction Age」は、次の式を含んでいることに注意してください。

FLOOR (SYSDATE - Transaction Date)

このタイプの条件は、条件が返す行のウィンドウが日によって変わるため、ローリング・ウィンドウ条件ともいいます。

例 3: 第 3 四半期の出荷を検索する条件の使用

年にかかわらず第 3 四半期 (Q3) の出荷のみを返す条件 (ユーザー定義アイテム「Ship Quarter」を使用) を作成するには、「新規条件」ダイアログの「計算式」エリアに次のように入力します。

アイテム	条件	値
Ship Quarter	=	'Q3'

ユーザー定義アイテム「Ship Quarter」は、次の式を含んでいることに注意してください。

EUL_DATE_TRUNC(Ship Date, "Q")

外部結合と DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリの設定

2 つのテーブルの間で外部結合を定義する場合は、条件 (フィルタ) と DisableAutoOuterJoinsOnFilters の Discoverer レジストリ設定の組合せが、エンド・ユーザーのクエリーで返されるデータの行にどのように影響するかを理解している必要があります。

2 つのテーブル間で外部結合を定義し、次のものを表示します。

- ディテール・テーブルに対応する行がないマスター・テーブルの行
 - マスター・テーブルに対応する行があるディテール・テーブルの行
- たとえば、次を表示する場合があります。
- 部門名と所属する従業員、ただし従業員がいない部門名も含む
 - 従業員名と所属する部門、ただし部門に属さない従業員の名前も含む

SQL では、外部結合はプラス記号 (+) で示します。

Discoverer は、次の場合に SQL に外部結合を含みます。

- Discoverer Administrator で明示的に定義された場合。
詳細は、「[結合の編集](#)」ダイアログ:「[オプション](#)」タブを参照してください。
- 一部の状況で自動的に SQL に外部結合を含みます。
たとえば、Discoverer は条件を含むエンド・ユーザーのクエリーに対して、SQL に外部結合を自動的に作成します。

条件を含むクエリーを実行している場合、ユーザーは結果を次のようにする場合があります。

- 外部結合によって結合されるテーブルに対応する値を持たない 1 つのテーブルからの値を含めます。
- 外部結合によって結合されるテーブルに対応する値を持たない 1 つのテーブルからの値を含めません。

DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定により、エンド・ユーザーのクエリーで条件が使用されるときに、自動的に生成された外部結合の使用を無効にできます。次の表は、その後を示す例を要約したものです。

例番号	条件の適用	DisableAutoOuterJoinsOnFilters の値	すべての値を表示
例 1	いいえ	0 または 1	する
例 2	する	0	いいえ
例 3	する	1	する

次の例は、外部結合、条件および DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定の値が、エンド・ユーザーのクエリーから返されたデータの行にどのように影響を与えるかを示しています。

Discoverer レジストリ設定の詳細は、第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」を参照してください。

例 1: 条件を適用しない場合

この例は、2つのテーブルに対してクエリーを実行したときに返された結果を示しています。マスター・テーブルとディテール・テーブルは外部結合で結合されています。

Discoverer が表示するのは、次のとおりです。

- マスター・テーブル (dept) とディテール・テーブル (emp) からのデータの行
- ディテール・テーブル (emp) のデータがないマスター・テーブル (dept) からのデータの行

クエリーは、次の SQL 文を使用して定義されます。外部結合はプラス記号 (+) で示されます。

```
select dname, ename, job from dept, emp where dept.deptno = emp.deptno(+);
```

DNAME	ENAME	JOB
SALES	GRIMES	DIRECTOR
SALES	PETERS	MANAGER
SALES	SCOTT	CLERK
SUPPORT	MAJOR	MANAGER
SUPPORT	SCOTT	CLERK
ADMIN		
MARKETING		
DISTRIBUTION		

前述のクエリーから返された結果は、DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定をオンまたはオフに切り替えても変わりません。

例 2: クエリーに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 1 に設定（オフに切替え）する場合

この例では、例 1 のクエリーに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定をオフに切り替えています。

Discoverer が表示するのは、次のとおりです。

- 条件で指定されたデータ

Discoverer が表示しないのは、次のとおりです。

- ディテール・データのないマスター行

次の SQL 文が使用されます。外部結合はプラス記号 (+) で示されます。

```
select dname, ename, job from dept, emp where dept.deptno = emp.deptno(+) and job = 'CLERK';
```

DNAME	ENAME	JOB
SALES	SCOTT	CLERK
SUPPORT	SCOTT	CLERK

例 3: クエリーに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 0 に設定（オンに切替え）する場合

この例では、例 1 のクエリーに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定をオンに切り替えています。

Discoverer が表示するのは、次のとおりです。

- 条件で指定されたデータ
- デイテール・データのない (NULL 値) マスター行

次の SQL 文が使用されます。外部結合はプラス記号 (+) で示されます。

```
select dname, ename, job from dept, emp where dept.deptno = emp.deptno(+) and job = 'CLERK';
```

DNAME	ENAME	JOB
SALES	SCOTT	CLERK
SUPPORT	SCOTT	CLERK
ADMIN		
MARKETING		
DISTRIBUTION		

注意

- データベースは、IS NULL 句と IS NOT NULL 句への外部結合の配置をサポートしますが、IN 句と OR 句への外部結合の配置はサポートしていません。

必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法

エンド・ユーザーに対し、Discoverer ワークブックで表示できるデータを制限する場合があります。

たとえば、すべての地域の利益データを含む 1 つのテーブルを持っているとします。利益データの各行は、1 つの地域のトランザクションに適用されています。西地域のマネージャが西地域の利益データを含む行のみにアクセスできるようにするとします。

REGION	PROFIT	DATE
East	\$100	8/7
West	\$50	8/7
South	\$65	8/10
North	\$100	8/6

行レベルのセキュリティを作成するには、次の作業を完了する必要があります。

- 「SYS ビューから行レベルのセキュリティを適用するフォルダを含むビジネスエリアへの、ALL_USERS テーブルのロード」
- 「行レベルのセキュリティを適用するフォルダへの、新規ユーザー定義アイテムの作成」
- 「(ALL_USERS テーブルにある) Username アイテムから新規ユーザー定義アイテムへの、値リストの適用」
- 「データベース・ユーザーを指定してフォルダで行レベルのセキュリティを定義するための、拡張された必須条件の作成」

SYS ビューから行レベルのセキュリティを適用するフォルダを含むビジネスエリアへの、ALL_USERS テーブルのロード

この作業により、すべてのデータベース・ユーザーのリストを取得し、条件を適用して行レベルのセキュリティを達成できます。

行レベルのセキュリティを適用するビジネスエリアに ALL_USERS テーブルをロードする手順は、次のとおりです。

1. 行レベルのセキュリティを作成するフォルダを含むビジネスエリアを選択します。
2. 「挿入」 → 「フォルダ」 → 「データベースから新規フォルダを作成」を選択し、「ロード・ウィザード: ステップ 1」ダイアログを表示します。
3. 「オンライン・ディクショナリ」チェックボックスを選択し、「次へ」をクリックして「ロード・ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。
4. 「ロードする表を所有するユーザーを選択してください」リスト・ボックスから SYS ユーザーを選択し、「次へ」をクリックして「ロード・ウィザード: ステップ 3」ダイアログを表示します。

SYS ユーザーは、すべてのデータベース・ユーザーの名前を保持するビューを含んでいます。

5. 「選択可能」リスト・ボックスで SYS ユーザーを拡張し、ALL_USERS ビューを「選択済」リスト・ボックスの中にドラッグします。次に、「次へ」をクリックして「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログを表示します。

これにより、ALL_USERS ビューは現行のビジネスエリアにロードされます。ALL_USERS ビューは、すべてのデータベース・ユーザー・アカウントの名前を含んでいます。

6. 「アイテムの値リストを作成するデータ・タイプ」チェックボックスと「文字」チェックボックスを選択し、このエリアの他のすべてのチェックボックスの選択を解除します。

これにより、すべてのデータベース・ユーザーの名前の値リストが作成されます。

7. 「終了」をクリックします。

これにより、SYS テーブルから現行のビジネスエリアに ALL_USERS ビューがロードされます。

8. (オプション) ALL_USERS のフォルダのプロパティを編集し、「ユーザーに表示」プロパティを「いいえ」に設定します (詳細は、「フォルダ・プロパティの編集方法」を参照)。

これにより、ALL_USERS フォルダはエンド・ユーザーに表示されなくなります。

行レベルのセキュリティを適用するフォルダへの、新規ユーザー定義アイテムの作成

ユーザー定義アイテムを作成すると、それ以降の SYS テーブルからすべてのデータベース・ユーザーの値リストのアイテム・クラスを適用できます。

行レベルのセキュリティを適用するフォルダにユーザー定義アイテムを作成する手順は、次のとおりです。

1. 行レベルのセキュリティを作成するフォルダを強調表示します (「Video Analysis」フォルダなど)。
2. 「挿入」 → 「アイテム」を選択します。
3. 「名前」フィールドに「Username」と入力します。
4. 「ユーザー定義アイテム」フィールドに「USER」と入力します。
5. 「OK」をクリックして、新規ユーザー定義アイテムを作成します。

(ALL_USERS テーブルにある) Username アイテムから新規ユーザー定義アイテムへの、値リストの適用

前述の作業で作成したユーザー定義アイテムに値リストのアイテム・クラスを適用する手順は、次のとおりです。

1. 行レベルのセキュリティを適用するフォルダを強調表示します（「Video Analysis」フォルダなど）。
2. 「挿入」→「アイテム・クラス」をクリックして、「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ1」ダイアログを表示します。
3. 「値リスト」チェックボックスを選択し、「次へ」をクリックして「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ2」ダイアログ（値リストを生成するアイテムの選択）を表示します。
4. 前述の手順でビジネスエリアにロードした ALL_USERS テーブルから Username アイテムを選択し、「次へ」をクリックして「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ3」ダイアログ（名前と説明の入力）を表示します。
5. 「選択可能なアイテム」リストから（前述の手順で作成した）ユーザー定義アイテム「Username」を選択し、「選択済」リストの中にドラッグします。
6. 「終了」をクリックして、値リストをユーザー定義アイテム「Username」に適用します。

データベース・ユーザーを指定してフォルダで行レベルのセキュリティを定義するための、拡張された必須条件の作成

拡張された必須条件を作成します。これにより、データの条件を指定されたデータベース・ユーザーに適用できます。

次の両方を含む拡張された必須条件を作成する必要があります。

- データベース・ユーザーを定義する条件文
- 指定したデータベース・ユーザーに対しデータ・アクセスを制限する1つ以上の条件文

拡張された必須条件を作成し、指定したデータベース・ユーザーの行レベルのセキュリティを定義する手順は、次のとおりです。

1. 行レベルのセキュリティを作成するフォルダを強調表示します。
2. 「挿入」→「条件」を選択して、「新規条件」ダイアログを表示します。
3. (オプション) 新規条件の説明を入力します。
4. 「タイプ」ドロップダウン・リストをクリックして、「必須」を選択します。
タイプ「必須」を指定すると、条件が常にエンド・ユーザーに適用されます。
5. 「アイテム」ドロップダウン・リストをクリックして、ユーザー定義アイテムの「Username」を選択します。
6. 「値」ドロップダウン・リストをクリックして、「値の選択」を選択して「値」ダイアログを表示します。
7. 行レベルのセキュリティを適用する各データベース・ユーザーのチェックボックスを選択して、次に「OK」をクリックします。

Discoverer は、「値」フィールドに選択したデータベース・ユーザーを表示します。

注意: これで、1人以上のデータベース・ユーザーの名前を指定する必須単一条件が作成できました。ただし、現行フォルダのデータベース・ユーザーに行レベルのセキュリティを適用する前に、指定したデータベース・ユーザーに適用するデータ条件を指定する必要があります。

残りの手順では、指定したデータベース・ユーザーに行レベルのセキュリティを適用する方法について説明します。これにより、データベース・ユーザーは西地域からのデータのみを表示できるようになります。

8. 「詳細設定」 ボタンを選択して、次に「追加」 ボタンをクリックします。
これにより、新規条件文を現行の条件に追加し、データ条件を指定したデータベース・ユーザーに適用できます。
9. (例) 「アイテム」 ドロップダウン・リストをクリックして、Store.Region を選択します。
このデータ条件は、指定したデータベース・ユーザーに適用されます。
10. (例) 「値」 ドロップダウン・リストをクリックして、地域 'West' を選択します。
注意: データベース・ユーザー (Username) をデータ条件 (Region) に関連付けるには、Username 条件文と Region 条件文を、AND 句を使用してグループ化する必要があります。
各 Username 条件文とデータ条件文は、AND 句を使用してグループ化する必要があります。Username 条件文とデータ条件文のペアは、OR 句を使用して他のペアと互いにグループ化する必要があります。OR 句を使用して Username 条件文とデータ条件文のペアをグループ化し、各条件文のペアを適用できます (次の図を参照)。

図 12-4 データベース・ユーザーの1つのグループが 'West' 地域のデータを表示し、その他のグループが 'East' 地域のデータを表示する条件

Name: [Username IN ('ADMINTUTOR','ADMINTUTORNF','NICK') AND Region = 'West' OR Username IN ('ADMTEST','BUG4','BUGOUT4130NF') AND Region = 'East']

Generate name automatically

Description: 3 users can see data for the 'West' region, 3 other users can see data for the 'East' region.

Location: Video Analysis Information Type: Mandatory

Formula

Group	Group	Item	Condition	Value(s)
OR	AND	Username	IN	'ADMINTUTOR','ADMINTUTORNF','NICK'
		Region	=	'West'
	AND	Username	IN	'ADMTEST','BUG4','BUGOUT4130NF'
		Region	=	'East'

Match case

{ Username IN ('ADMINTUTOR','ADMINTUTORNF','NICK') AND Region = 'West' OR Username IN ('ADMTEST','BUG4','BUGOUT4130NF') AND Region = 'East' }

OK Cancel Help

11. 「OK」 をクリックします。
これにより、('West' または 'East' 地域にユーザーのグループをバインドして) 指定したデータベース・ユーザーに行レベルのセキュリティを適用する、拡張された必須条件が作成されます。前述の例では、データベース・ユーザー ADMTEST は 'West' 地域のデータのみを表示できます。
12. (オプション) 新規条件のプロパティを編集し、「ユーザーに表示」プロパティを「いいえ」に設定します (詳細は、「条件プロパティの編集方法」を参照)。
これにより、Discoverer はエンド・ユーザーに条件を表示しませんが、この条件は常に適用されます。

ソース・フォルダが（行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を含む場合にサマリー・フォルダを有効にする方法

フォルダに必須条件を作成した場合、データベース・ユーザーのクエリーには必須条件を含むフォルダに基づくサマリー・フォルダを使用しないようにしてください。これは、サマリー・テーブルのデータが、サマリー・フォルダを作成したデータベース・ユーザーに対するデータのみになるためです。

ソース・フォルダが（行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を使用している場合、そのサマリー・フォルダをデータベース・ユーザーが使用できるようにするには、必須条件を作成する前に次の手順を実行する必要があります。

ソース・フォルダに必須条件を含むサマリー・フォルダを、データベース・ユーザーのクエリーで有効にする手順は、次のとおりです。

1. （行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を設定する前に、フォルダに基づくサマリー・フォルダを作成します。

サマリー・フォルダの作成方法の詳細は、[第 14 章「サマリー・フォルダの管理」](#) および [第 15 章「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#) を参照してください。

2. サマリーの「クエリーで使用可能」プロパティを「いいえ」に設定します。

このサマリー・フォルダは、サマリー・フォルダを作成したデータベース・ユーザーのデータを参照します。エンド・ユーザーのクエリーがこのサマリー・フォルダにアクセスしないように、このプロパティを「いいえ」に設定します。

3. （オプション）サマリー・フォルダのプロパティ「**次のリフレッシュ**」と「**リフレッシュ間隔**」を適切な値に設定します。

詳細は、「[サマリー・プロパティ](#)」ダイアログを参照してください。

4. サマリー・フォルダに対してデータベース・ビューを作成します。

この作業は、Discoverer の外部で実施されるので、詳細はデータベース管理者に問い合わせてください。

作成したビューに（行レベルのセキュリティなどの）必須条件を適用するには、WHERE 句を使用します。

たとえば、次のようになります。

```
SQL> WHERE Userid='SMITH' AND Region='WEST'
```

5. 外部サマリーとしてビューを Discoverer に登録します。

詳細は、「[外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)」を参照してください。

6. サマリーの「クエリーで使用可能」プロパティを「はい」に設定します。

データベース・ユーザーがこのサマリー・フォルダにアクセスできるようにするには、このプロパティを「はい」に設定します。

Discoverer で、「**次のリフレッシュ**」と「**リフレッシュ間隔**」のサマリー・フォルダ・プロパティを「無期限」に設定する必要があります。

詳細は、「[サマリー・プロパティ](#)」ダイアログを参照してください。

7. Discoverer Administrator のフォルダで必要な（行レベルのセキュリティなどの）条件を作成します（詳細は、「[必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法](#)」を参照）。

これで、必須条件のないデータ・フォルダに基づくフォルダと、ビューに基づくフォルダの 2 つのサマリー・フォルダが用意されました。最初のサマリー・フォルダの作成後に必須条件をフォルダに追加することで、後続するクエリーは、フォルダに基づくサマリー・フォルダではなく、ビューに基づくサマリー・フォルダを使用するようにリライトされます。サマリー・リライトの詳細は、[第 16 章「サマリー・フォルダに関する追加情報」](#) を参照してください。

注意

- 外部サマリー・フォルダの分析関数は利用できません（詳細は、「[分析関数](#)」を参照）。

階層の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator による階層の実装とメンテナンスの方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「階層」
- 「アイテム階層」
- 「日付階層」
- 「アイテム階層の作成方法」
- 「日付階層とテンプレートの作成方法」
- 「アイテム階層の編集方法」
- 「日付階層テンプレートの編集方法」
- 「日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法」
- 「デフォルト日付階層テンプレートの設定方法」
- 「アイテム階層または日付階層テンプレートの削除方法」
- 「日付フォーマット「RR」を使用するデフォルト日付階層を、Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator へのアップグレード後に変更する方法」
- 「カスタム・フォルダで CONNECT BY 句を使用して階層を作成する方法」
- 「[Scott] スキーマの「emp」テーブルを使用して、カスタム・フォルダと CONNECT BY 句で階層を作成する方法」

階層

階層とは、Discoverer Administrator で定義するアイテム間のデフォルトのドリル・パスです。ビジネスエリア内のアイテム間の階層を作成して、Discoverer エンド・ユーザーにデフォルトのドリル階層を提供します。

次の 2 種類の階層があります。

- アイテム階層
- 日付階層

Discoverer エンド・ユーザーは、階層を使用して次のことができます。

- より集合的なレベルへのドリルアップ（たとえば店舗から都市、都市から地域、地域から国）
- より詳細なレベルへのドリルダウン（たとえば国から地域、地域から都市、都市から店舗）

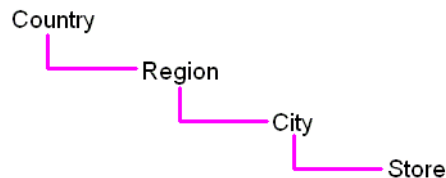
階層により、データベースで関係が定義されていないビジネスエリア内のアイテムをリンクできます。ビジネスエリアの詳細は、第 5 章「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」を参照してください。

アイテム階層

アイテム階層とは、日付以外のアイテム間の関係です。

アイテム階層の例は次のとおりです。

図 13-1 販売アイテム階層

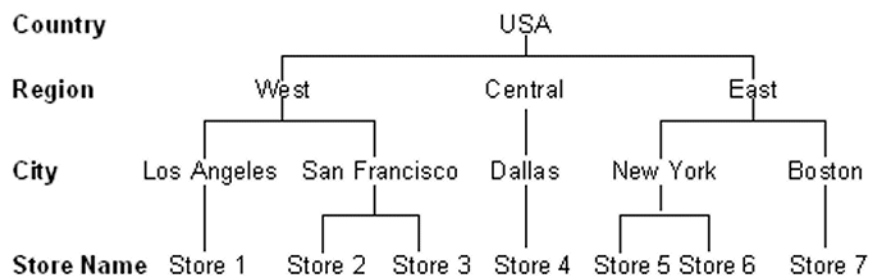


販売アイテム階層では、国がその地域、都市および店舗とリンクされます。

この階層を使用すると、Discoverer エンド・ユーザーは国のレベルでの販売を示すレポートを使用できます。さらに、国からドリルダウンして、地域ごと、都市ごとまたは店舗ごとの販売を参照し、再び国レベルにドリルアップできます。

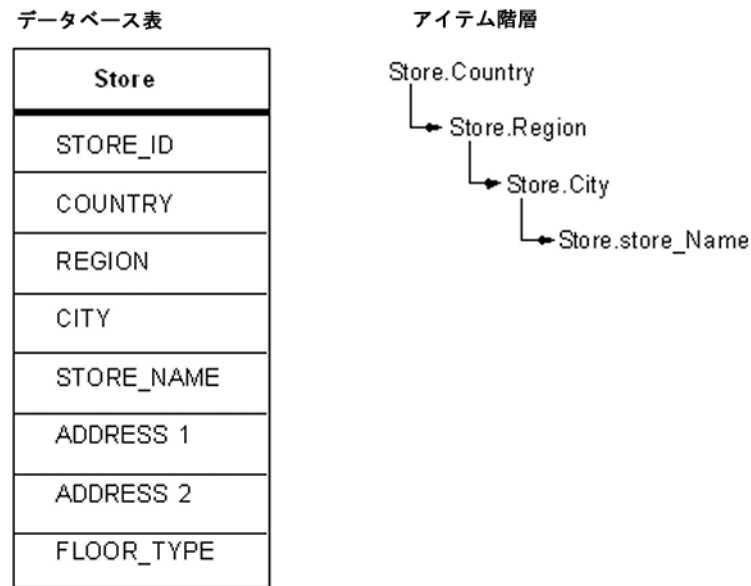
Discoverer エンド・ユーザーから見た販売アイテム階層は、次のとおりです。

図 13-2 販売アイテム階層 – Discoverer エンド・ユーザーの視点



次の図は、データベースから見た販売アイテム階層です。

図 13-3 販売アイテム階層 – データベースの視点



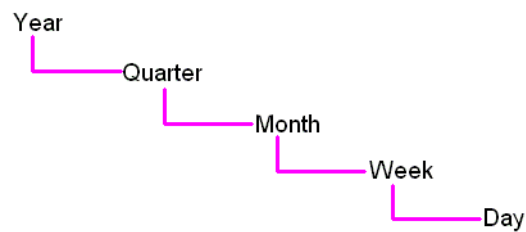
ロサンゼルスが 'West' (西部) であることを指定する必要はありません。指定する必要があるのは、都市がアイテム階層の 'Region' (地域) の下にあることです。

日付階層

日付階層とは、日付アイテム間の関係です。

日付階層の例は次のとおりです。

図 13-4 販売日付階層

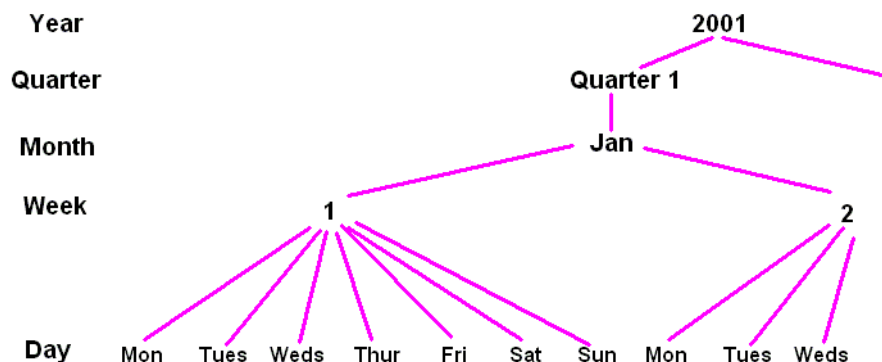


販売日付階層により、年が四半期、月、週および日とリンクされます。

この階層を使用すると、Discoverer エンド・ユーザーは毎年の売上合計を示すレポートを使用できます。さらに、年からドリルダウンして、四半期ごと、月ごと、週ごとまたは日ごとの販売を参照し、再び年ごとの販売にドリルアップできます。

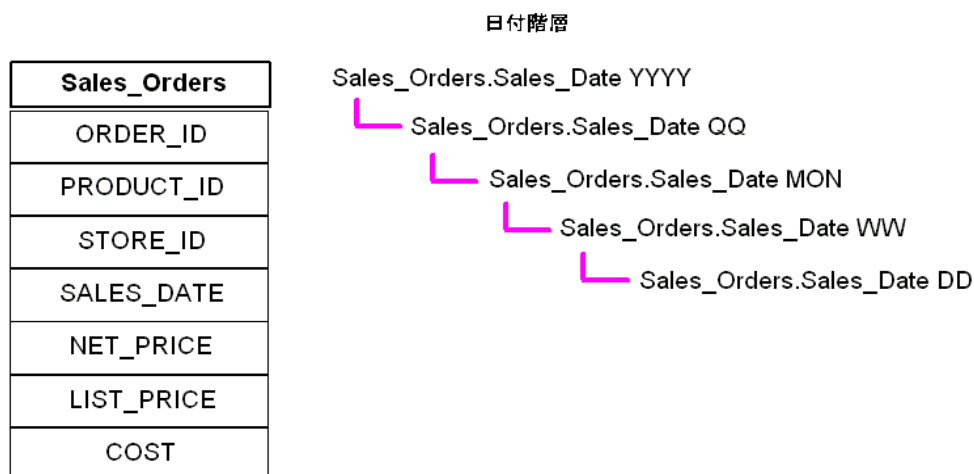
Discoverer エンド・ユーザーから見た販売日付アイテム階層のセクションは、次のとおりです。

図 13-5 販売日付階層 – Discoverer エンド・ユーザーの視点



次の図は、データベースから見た販売日付階層です。

図 13-6 販売日付階層 – データベースの視点



注意: 日付階層の各レベルは、「Sales_Orders.SALES_DATE」列に基づくユーザー定義アイテムです。ユーザー定義アイテムは、日付階層テンプレートにより作成されます（詳細は、「日付階層テンプレート」を参照）。

日付階層テンプレート

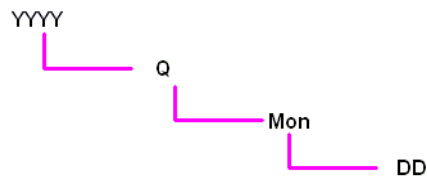
日付階層テンプレートを使用すれば、日付アイテムに適用する日付階層を定義できます。日付アイテムでは、日付、月、年および時刻を指定する情報が使用されます。Discoverer では、この情報を使用して四半期、週および曜日などが計算されます。日付階層テンプレートにより、年または月などを表すアイテムが日付アイテムに基づいて自動的に作成されます。

各日付アイテムについて同じ日付階層を繰り返し再定義するよりも、日付階層テンプレートの日付アイテムに適用することによって、日付階層テンプレートを効率的に再使用できます。

日付階層テンプレート（Discoverer Administrator で提供されています）を使用して多くの共通日付階層を定義することも、カスタマイズされた日付階層を作成することもできます。

Discoverer Administrator で提供されているデフォルトの日付階層テンプレート（次の日付階層テンプレートの図を参照）を使用すれば、年から四半期、四半期から月、月から日にドリルダウンできます。

図 13-7 日付階層テンプレート



日付階層とパフォーマンス

索引付きテーブルからの日付アイテムに日付階層を適用した場合、これらの日付アイテムを含むクエリでは索引が使用されません（このため、パフォーマンスが低下することがあります）。索引に依存しないテーブルからの日付アイテムに日付階層を適用すれば、Discoverer Plus のパフォーマンスを最適化できます。

日付階層が Discoverer Plus のパフォーマンスに与える影響の例

日付列（`transaction_date` など）を含む大きなファクト・テーブル（行が多いテーブル）をロードするとき、Discoverer によりデフォルトの日付階層が日付アイテムに適用されます（詳細は、「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログを参照）。

Discoverer では、`EUL_DATE_TRUNC` 関数を使用して年、四半期および月などの日付アイテムを含むフォルダが作成されます（詳細は、「日付アイテムの切捨てと `EUL_DATE_TRUNC` 関数」を参照）。Discoverer エンド・ユーザーがこれらのアイテムを含むクエリを実行するとき、ファクト・テーブルに日付アイテムを含む索引は使用されません。索引が使用されない場合、パフォーマンスが影響を受けることがあります。

ファクト・テーブルは索引を持つことがあるため、ファクト・テーブルに基づいているフォルダ内の日付アイテムに日付階層を適用しないことをお勧めします。

パフォーマンスを維持する方法の例

パフォーマンスを維持するために、日付階層を個別のディメンション・テーブルに適用してください。

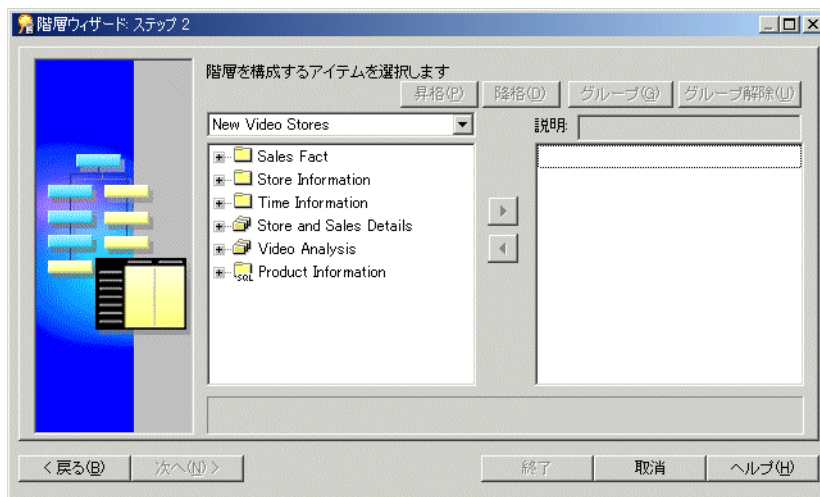
たとえば、ファクト・テーブル内の「`transaction_date`」アイテムを、時間間隔を指定する別のディメンション・テーブル（「Time Period」など）に結合することがあります。ロード・ウィザードを使用してこのディメンション・テーブルをロードし、日付階層をこのテーブルに適用できます。次に、ディメンション・テーブルとファクト・テーブルの両方からのアイテム（年または四半期などの、日付階層別に作成されたアイテムなど）を含む複合フォルダを作成できます。Discoverer エンド・ユーザーが日付階層アイテムを含めるクエリを使用するとき、Discoverer ではファクト・テーブルの日付列索引を使用できます。これにより、パフォーマンスを大幅に向上できます。

アイテム階層の作成方法

アイテム階層を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「階層」を選択して、「階層ウィザード: ステップ 1」ダイアログを表示します。
2. 「アイテム階層」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして、「階層ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 13-8 「階層ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



ここで、このアイテム階層で使用するアイテムを選択します。

- このアイテム階層に含めるアイテムを左側のリストから右側のリストに移動します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

注意: 階層リスト内のアイテムの順序により、Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析に使用するドリルダウン順序が決まります。アイテム階層は、アイテムを含める際の順序で配列されます。たとえば、地域 - 都市 - 店舗の順序で配列されます。

注意: 複数のフォルダからアイテムを選択できますが、それらのフォルダは結合されている必要があります。フォルダが複数の結合により結合されている場合、「結合の選択」ダイアログで正しい結合を選択するプロンプトが表示されます。

- (オプション) 階層内のアイテムを別の位置に移動するには、右側のリスト内のアイテムを選択し、次の操作を行います。
 - 階層内の上方にアイテムを移動する場合は、「昇格」をクリックします。
 - 階層内の下方にアイテムを移動する場合は、「降格」をクリックします。
- (オプション) 階層内の同じレベルに表示されるように複数のアイテムをグループ化するには、それらのアイテムを選択し、「グループ化」をクリックします (詳細は、「[「階層ウィザード: ステップ 2」ダイアログ](#)」を参照)。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

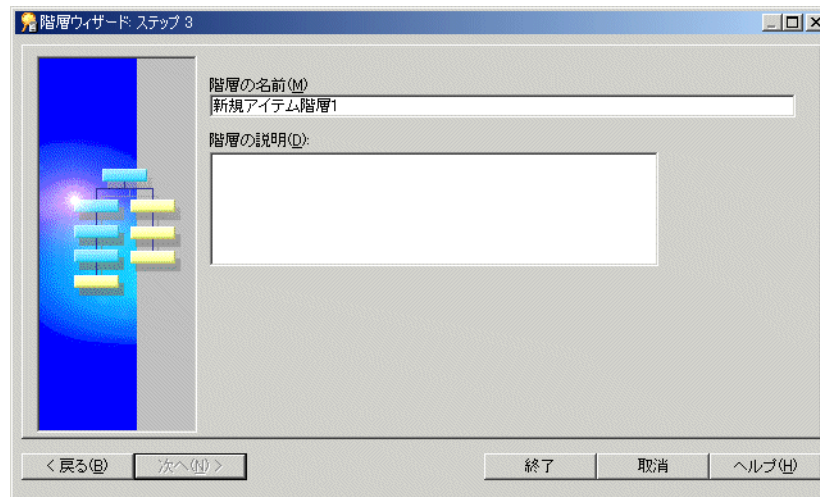
注意: 階層内のアイテムのグループ化を解除するには、そのグループを選択し、「グループ解除」をクリックします。

- (オプション) アイテムの名前を変更するには、右側のリスト内のアイテムをクリックし、「説明」フィールドで名前を指定します。

指定した説明は、Discoverer Plus でラベルとして表示されます。名前を指定しないと、デフォルトでアイテム名がアイテム階層の各レベルで使用されます。

- 「次へ」をクリックして、「階層ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (名前階層) を開きます。

図 13-9 「階層ウィザード: ステップ3」 ダイアログ



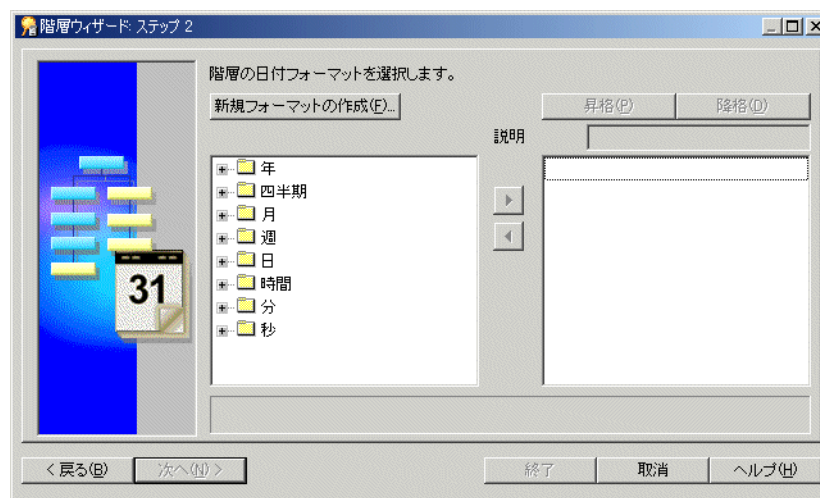
8. 新規アイテム階層の名前と説明を指定します。
9. 「終了」をクリックして、アイテム階層を作成します。
「ワークエリア」の「階層」タブにアイテム階層が表示されます。

日付階層とテンプレートの作成方法

日付階層を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「階層」を選択して、「階層ウィザード: ステップ1」ダイアログを表示します。
2. 「日付階層」オプションを選択し、「次へ」をクリックして、「階層ウィザード: ステップ2」ダイアログを開きます。

図 13-10 「階層ウィザード: ステップ2」 ダイアログ



3. (オプション) 新規日付フォーマットを作成するには、「新規フォーマットの作成」をクリックして、「新規日付フォーマット」ダイアログを表示します。
4. この日付階層に含める日付フォーマットを左側のリストから右側のリストに移動します。
同時に複数の日付フォーマットを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の日付フォーマットをクリックします。

5. (オプション) 階層内の日付フォーマットを別の位置に移動するには、右側のリスト内の日付フォーマットを選択し、次の操作を行います。
 - 階層内の上方に日付フォーマットを移動する場合は、「昇格」をクリックします。
 - 階層内の下方に日付フォーマットを移動する場合は、「降格」をクリックします。
6. (オプション) 日付フォーマットの名前を変更するには、右側のリスト内の日付フォーマットをクリックし、「説明」フィールドで新しい名前を指定します。
指定した説明は、Discoverer Plus でラベルとして表示されます。
7. 「次へ」をクリックして、「階層ウィザード: ステップ 3」ダイアログを表示します。

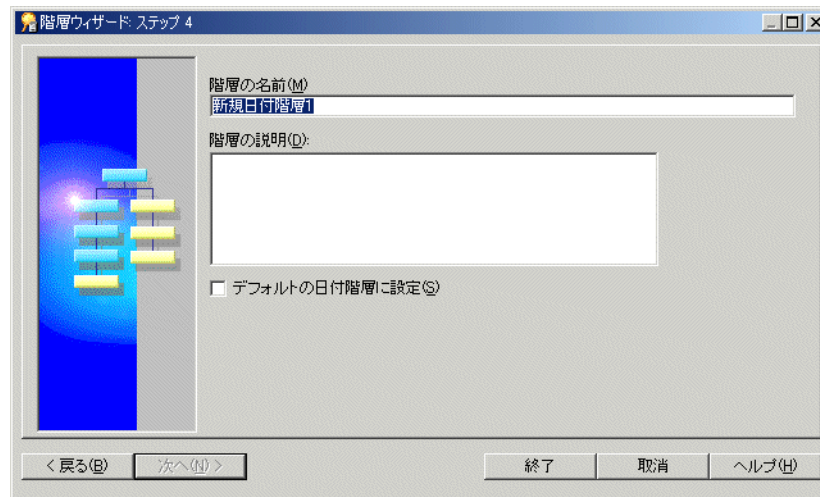
図 13-11 「階層ウィザード: ステップ 3」ダイアログ



ここで、この日付階層で使用する日付アイテムを選択します。

8. この日付階層で使用する日付アイテムを「**選択可能なアイテム**」リストから「**選択済アイテム**」リストに移動します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。
ヒント: 日付階層テンプレートのみを作成する場合は、このページで日付アイテムを選択しないでください。後で、日付アイテム・プロパティを変更すれば、このテンプレートを日付アイテムに適用できます (詳細は、「日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法」を参照)。
9. 「次へ」をクリックして、「階層ウィザード: ステップ 4」ダイアログ (名前階層) を開きます。

図 13-12 「階層ウィザード: ステップ 4」 ダイアログ



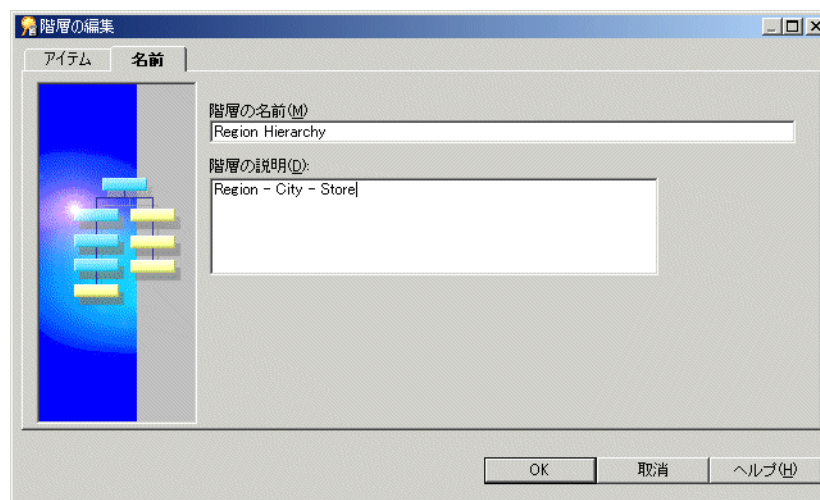
10. 新規日付階層の名前と説明を指定します。
11. (オプション) この日付階層テンプレートをデフォルトにするには、「デフォルトの日付階層に設定」チェックボックスを選択します。
「デフォルトの日付階層に設定」チェックボックスを選択すると、この日付階層テンプレートが「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログのデフォルトとして「日付階層」チェックボックスの下のドロップダウン・リストに表示されます。
12. 「終了」をクリックして、日付階層を作成し、「階層ウィザード: ステップ 3」ダイアログで選択した日付アイテムにこの日付階層を適用します。
日付階層と日付階層テンプレートがワークエリア: 「階層」タブに表示されます。

アイテム階層の編集方法

既存のアイテム階層を編集する手順は、次のとおりです。

1. 「階層」タブで階層を選択し、「編集」→「編集」を選択して、「階層の編集」ダイアログ: 「名前」タブを表示します。

図 13-13 「階層の編集」ダイアログ: 「名前」タブ



2. 必要に応じて階層を編集します。

「階層の編集」ダイアログには、次の2つのタブがあります。

- 「アイテム」

このタブは、この階層を使用するアイテムの追加または削除に使用します。

- 「名前」

このタブは、階層の名前と説明の編集に使用します。

これらのタブの詳細は、「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブまたは「階層の編集」ダイアログ:「アイテム」タブ (この日付階層を使用する日付アイテムの選択) を参照してください。

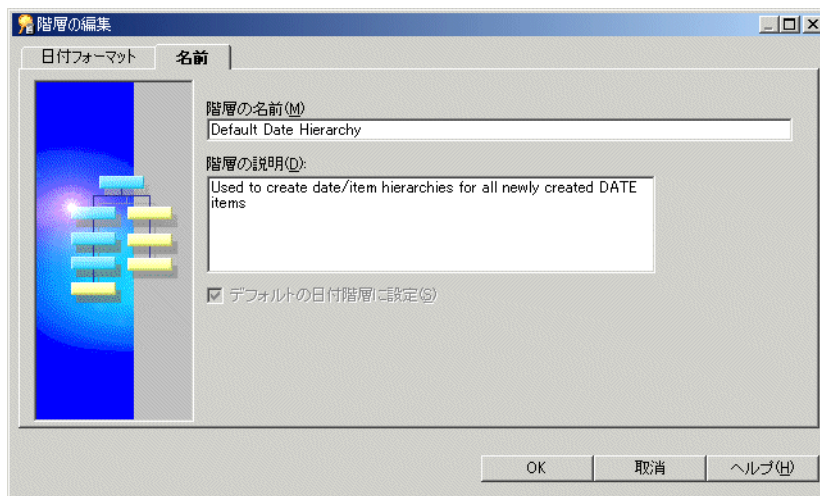
3. 「OK」をクリックします。

日付階層テンプレートの編集方法

この項では、既存の日付階層テンプレートを編集する方法について説明します。日付階層テンプレートを編集すると、その日付階層テンプレートを使用するすべての日付アイテムが、この変更を反映するように変更されます。

1. 「階層」ページで日付階層テンプレートをクリックし、「編集」→「編集」を選択して、「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブを表示します。

図 13-14 「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブ



2. 必要に応じて階層を編集します。

「階層の編集」ダイアログには、次の2つのタブがあります。

- 「日付フォーマット」

このタブは、日付フォーマットとこの日付階層テンプレートでの日付フォーマットの位置を変更するために使用します。

- 「名前」

このタブは、日付階層テンプレートの名前と説明の編集に使用します。

これらのタブの詳細は、「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブまたは「階層の編集」ダイアログ:「アイテム」タブ (この日付階層を使用する日付アイテムの選択) を参照してください。

3. 「OK」をクリックします。

日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法

この項では、日付階層テンプレートを既存の日付アイテムに適用する方法について説明します。

日付階層テンプレートを既存の日付アイテムに適用するとき、日付階層の完成に必要な日付アイテムがすべて自動的に作成されます。これらの新規日付アイテムは、元の日付アイテムと同じフォルダに入ります（元の日付アイテムの名前が前に付けられます）。日付アイテムに適用される日付階層テンプレートを変更すると、この新規日付階層テンプレートを反映するように新しい日付アイテムが作成されます。ただし、**Discoverer** では以前の日付階層から日付アイテムが削除されません。以前の日付階層から日付アイテムを削除するには、手動で削除する必要があります。

たとえば、日付階層「YY/QQ/MM」を作成して、日付アイテム「Transaction Date」に割り当てると、次のアイテムがフォルダに作成されます。

- 「Transaction Date YY」
- 「Transaction Date QQ」
- 「Transaction Date MM」

次に新規日付階層「WW/DD」を作成して、「Transaction Date」に割り当てると、次の追加アイテムがフォルダに作成されます。

- 「Transaction Date WW」
- 「Transaction Date DD」

Discoverer では、以前に作成されたその他の3つの日付アイテムは削除されません。

日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する手順は、次のとおりです。

1. 「データ」タブで日付アイテムをクリックし、「編集」→「プロパティ」を選択して、「[アイテム・プロパティ](#) ダイアログを表示します。

ヒント: 単一の日付階層テンプレートを同時に複数の日付アイテムに適用する場合は、「プロパティ」ダイアログを開く前にこれらの日付アイテムをすべて選択します。詳細は、「[アイテム・プロパティの編集方法](#)」を参照してください。

2. 「日付階層」フィールドのドロップダウン・リストから、この日付アイテムに使用する日付階層テンプレートを選択します。

「なし」を選択して、この日付アイテムで日付階層テンプレートを使用しないようにします。

3. 「OK」をクリックします。

デフォルト日付階層テンプレートの設定方法

デフォルトの日付階層テンプレートは、「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログのデフォルト選択として「日付階層」ドロップダウン・リストに表示されます。詳細は、「[ロード・ウィザード: ステップ 4](#) ダイアログ」を参照してください。

デフォルトの日付階層テンプレートを設定する手順は、次のとおりです。

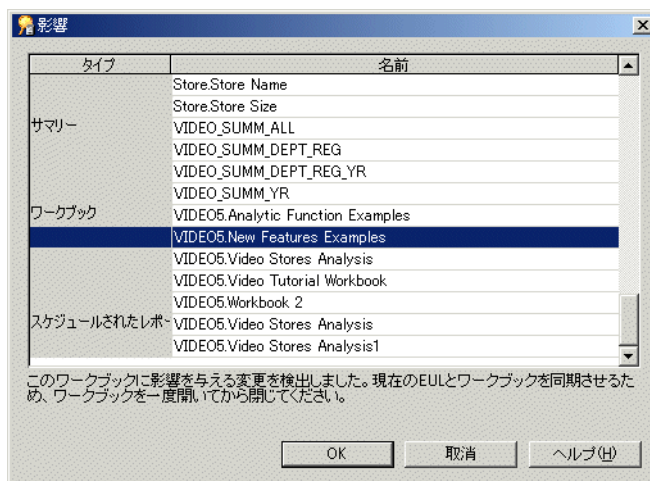
1. **ワークエリア:** 「階層」タブで日付階層テンプレートを展開して、日付階層テンプレートをすべて表示します。
2. デフォルトとして設定する日付階層テンプレートを選択します。
3. 「編集」→「編集」を選択して、「[階層の編集](#) ダイアログ: 「名前」タブを表示します。
4. 「名前」タブの「デフォルトの日付階層に設定」チェックボックスを選択します。
5. 「OK」をクリックします。

アイテム階層または日付階層テンプレートの削除方法

アイテム階層または日付階層テンプレートを削除する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**：「階層」タブで、アイテム階層または日付階層テンプレートを選択します。
同時に複数の階層を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の階層をクリックします。
2. 「編集」→「削除」を選択して、「削除の確認」ダイアログを開きます。
3. (オプション) この階層または階層テンプレートの削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。

図 13-15 「影響」ダイアログ



「影響」ダイアログでは、階層または階層テンプレートの削除による影響を受ける可能性のある他の EUL オブジェクトを確認できます。

注意：「影響」ダイアログには、ファイル・システム (.dis ファイル内) に保存されたワークブックに対する影響は表示されません。

- b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが、リストの一番下に表示されます。
 - c. 階層または階層テンプレートの削除による影響を確認した後、「閉じる」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
4. 選択した階層または階層テンプレートを削除する場合は、「はい」をクリックします。

日付フォーマット「RR」を使用するデフォルト日付階層を、Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator へのアップグレード後に変更する方法

Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator へのアップグレード後、デフォルト日付階層の日付フォーマットで「RR」が使用されている場合は、日付フォーマットを「YYYY」に変更し、影響を受ける日付アイテム（つまり、日付フォーマット「RR」を使用する日付アイテム）をビジネスエリアから削除する必要があります。この操作は、マテリアライズド・ビューの作成を確実に実行するために必要です（マテリアライズド・ビューの詳細は「マテリアライズド・ビュー」を参照）。

日付フォーマット「RR」を使用するデフォルト日付階層を、「YYYY」を使用するように変更するには、次の作業を完了する必要があります。

- 「デフォルト日付階層の日付フォーマット「RR」の「YYYY」への変更」
- 「日付フォーマット「RR」を使用する残っている日付アイテムの削除」

デフォルト日付階層の日付フォーマット「RR」の「YYYY」への変更

日付フォーマット「YYYY」を使用するようにデフォルト日付階層を変更する手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア: 「階層」タブをクリックします。
2. 日付階層テンプレートを展開し、日付フォーマット「RR」を使用するデフォルト日付階層を強調表示します。
3. 「編集」→「編集」を選択して、「階層の編集」ダイアログ: 「名前」タブを表示します。
4. 「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ (この日付階層を使用する日付アイテムの選択) をクリックし、各日付フォーマット「RR」を「YYYY」で置き換えます。
注意: 影響を受けるそれぞれのデフォルト日付階層について、前述の手順を繰り返します。
5. 「OK」をクリックして、変更を保存します。

影響を受けるデフォルト日付階層に日付フォーマット「YYYY」を適用した後は、日付フォーマット「RR」を使用する残っている日付アイテムを削除できます。

日付フォーマット「RR」を使用する残っている日付アイテムの削除

日付フォーマット「RR」を使用する日付アイテムを削除する手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア: 「データ」タブをクリックします。
2. 日付フォーマット「RR」を使用する日付アイテムを強調表示します。
3. 「編集」→「削除」を選択して、影響を受ける日付アイテムを削除します。
4. 日付フォーマット「RR」を使用する残っている日付アイテムのそれぞれについて、前述の手順を繰り返します。

カスタム・フォルダで CONNECT BY 句を使用して階層を作成する方法

データベース・テーブルに再帰的階層が含まれる場合があります。再帰的階層とは、1つのテーブルの中の異なるレコード間に関係が存在する階層です。この形式の階層は、一連の内部結合とは異なり、Discoverer で直接使用することはできません (値階層と呼ばれる場合もあります)。ただし、カスタム・フォルダを作成して CONNECT BY 句を使用すると、Discoverer で再帰的階層を使用できます。

たとえば、「Scott」スキーマ内の「emp」テーブル (Oracle データベースに付属) を見ると、一部の数字は「empno」列と「mgr」列の両方に表示されます。数字が両方の列に表示されるのは、従業員のマネージャが従業員番号で識別されているからです。このことは、再帰的階層が「emp」テーブル内に存在する様子を表しています。

次の表は、「emp」テーブル内の列「empno」、「ename」および「mgr」列の行の間に存在する関係を表しています。

EMPNO	ENAME	MGR
7369	SMITH	7902
7499	ALLEN	7698
7521	WARD	7698
7566	JONES	7839

EMPNO	ENAME	MGR
7654	MARTIN	7698
7698	BLAKE	7839
7782	CLARK	7839
7788	SCOTT	7566
7839	KING	
7844	TURNER	7698
7876	ADAMS	7788
7900	JAMES	7698
7902	FORD	7566
7934	MILLER	7782

Discoverer でこのテーブルを直接使用して、階層を作成することはできません。しかし、最初に SELECT 文の CONNECT BY 句を使用してカスタム・フォルダを作成すると、このテーブルから階層を作成できます。次にこのカスタム・フォルダを、Discoverer が使用できる階層の基礎として使用できます。

前述のテーブルの情報を使用する階層を Discoverer に作成するには、Discoverer で階層を作成するために使用する次のようなテーブルが必要です。

TOP_LEVEL	2nd_LEVEL	Nth_LEVEL	EMPNO	ENAME
KING	CLARK		7934	MILLER

このテーブルには従業員の名前 (ename) およびその従業員のマネージャ全員が表示されています。このテーブルでは、Miller に 2 つのレベルのマネージャがいます。直属の上司は Clark です。

このようなテーブルを作成し (「emp」テーブルの列に基づいて)、続いてレベル間に階層を作成するには、次の作業を完了します。

- 「Scott」スキーマの「emp」テーブルを使用して、カスタム・フォルダと CONNECT BY 句で階層を作成する方法

「Scott」スキーマの「emp」テーブルを使用して、カスタム・フォルダと CONNECT BY 句で階層を作成する方法

テーブル (「scott」スキーマの「emp」テーブルなど) の各値に基づいて階層を作成できます。Discoverer Plus ユーザーは、ワークブックを作成し、この階層を使用して従業員の異なるレベル間でドリルアップおよびドリルダウンできるようになります。

「Scott」スキーマの「emp」テーブルを使用して、カスタム・フォルダと CONNECT BY 句で階層を作成する手順は、次のとおりです。

1. カスタム・フォルダを作成し、次の SQL 文を使用して「Recursive Hierarchy」という名前を付けます (詳細は、「[カスタム・フォルダの作成方法](#)」を参照)。

```
SELECT DISTINCT empno, mgr, level
FROM scott.emp
CONNECT BY mgr = PRIOR empno
START WITH mgr IS NULL
```

この SQL 文により、次の結果セットが含まれるテーブルが作成されます。

EMPNO	MGR	LEVEL
7369	7902	4
7499	7698	3
7521	7698	3
7566	7839	2
7654	7698	3
7698	7839	2
7782	7839	2
7788	7566	3
7839		1
7844	7698	3
7876	7788	4
7900	7698	3
7902	7566	3

前述の手順で作成したカスタム・フォルダに含まれる SQL 文について、次の点に注意してください。

- 「Level」という名前の列

これは CONNECT BY 関数によって生成された擬似列で、Discoverer 内で階層を定義するために使用します。

- CONNECT BY 文で使用される単語 PRIOR

この単語により、「mgr」列が前の行の「empno」列の値と等しくなる次の行が、SQL によって検索されます。

- START WITH 文

「mgr」が NULL である場所（最高経営者）から SQL を開始するように命令します。

CONNECT BY 文の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』を参照してください。

2. カスタム・フォルダ・プロパティ「ユーザーに表示」を「いいえ」に設定します（詳細は、「フォルダ・プロパティの編集方法」を参照）。

これで、エンド・ユーザーはこのカスタム・フォルダにアクセスできなくなります。

注意: 階層を作成するために必要な情報は「Level」列で得られますが、最初に行を「Level」ごとに分ける必要があります。これは、各レベルに複合フォルダを作成して行います。

3. 各レベルに複合フォルダを作成します（詳細は、「複合フォルダの作成方法」を参照）。

この例では、4つの複合フォルダを作成します。

ヒント: 各複合フォルダを作成するには、3つのアイテムすべて（「Empno」、「Mgr」および「Level」）をカスタム・フォルダ「Recursive Hierarchy」からそれぞれの新規複合フォルダに順番にドラッグします。

4. 4つの新規複合フォルダにそれぞれ「Level1」、「Level2」、「Level3」および「Level4」という名前を付けます（詳細は、「フォルダ・プロパティの編集方法」を参照）。

5. 各複合フォルダに必須条件を適用します（詳細は、「[単一条件の作成方法](#)」を参照）。
ヒント:たとえば、レベル3のデータを含む複合フォルダに適用する条件は、次のようになります。
 Level = 3
6. 複合フォルダを相互に結合するための結合を作成します（詳細は、「[結合の作成方法](#)」を参照）。
ヒント:このためには、「empno」アイテムと「mgr」アイテムを使用します。複合フォルダ「Level1」と複合フォルダ「Level2」の間の結合を、次のように作成します。
 Level1.empno = Level2.mgr
 この方法で、「Level2」フォルダを「Level3」フォルダに、「Level3」フォルダを「Level4」フォルダに結合します。これらの結合は、作成する階層を反映します。
7. 各複合フォルダのフォルダ・プロパティ「**ユーザーに表示**」を「いいえ」に設定します（詳細は、「[フォルダ・プロパティの編集方法](#)」を参照）。
8. 別の複合フォルダを作成し、適切な名前（Chain of Command など）を付けます。
注意:これが、エンド・ユーザーに表示される複合フォルダです。
9. ステップ3で作成した4つの複合フォルダそれぞれの「Empno」アイテムを、「Chain of Command」フォルダ内にドラッグし、ドラッグしたらすぐに名前を変更します。
ヒント:「Level1」、「Level2」、「Level3」および「Level4」の各フォルダからドラッグしたそれぞれの「Empno」アイテムに対し、名前を適切に変更する必要があります（「Empno1」、「Empno2」、「Empno3」および「Empno4」など）。
 これにより、Discoverer が階層を作成するのに使用する次のような結果セットが完成します。

Empno1	Empno2	Empno3	Empno4
7839	7698	7499	
7839	7698	7521	
7839	7698	7654	
7839	7698	7788	
7839	7698	7844	
7839	7782	7900	
7839	7566	7902	7369

10. このテーブルの列によって表されるこのフォルダのアイテムに基づいて階層を作成します（詳細は、「[アイテム階層の作成方法](#)」を参照）。
 Discoverer Plus ユーザーは、ワークブックを作成し、この階層を使用して従業員の異なるレベル間でドリルアップおよびドリルダウンできるようになります。

サマリー・フォルダの管理

この章では、サマリー・フォルダと、Discoverer Administrator を使用したサマリー・フォルダの管理方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」
- 「サマリー・フォルダ」
- 「Discoverer サマリー・テーブル」
- 「マテリアライズド・ビュー」
- 「自動サマリー管理 (ASM)」
- 「ASM の機能」
- 「ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件」
- 「様々な ASM 実行方法とその使用状況」
- 「ASM ポリシー」
- 「サマリー・データをリフレッシュする理由」
- 「サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理」
- 「サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法」
- 「ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法」
- 「コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法」
- 「バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法」
- 「サマリー・フォルダのデータベースの構成方法」

Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ

Discoverer では、次の 2 種類のフォルダが使用されます。

- フォルダ – データを表します。
Discoverer のフォルダは、単一フォルダ、複合フォルダまたはカスタム・フォルダに分類されます。詳細は、[第 6 章「フォルダの作成とメンテナンス」](#)を参照してください。
- サマリー・フォルダ – クエリーが行われたデータと、再利用するために保存された結果を表します。
Discoverer では、エンド・ユーザーのクエリー・レスポンス時間を短縮するためにサマリー・フォルダが使用されます。

サマリー・フォルダ

サマリー・フォルダとは、再利用のために保存されたクエリー済データ (Discoverer Administrator で作成) です。データは、次のいずれかのデータベースに格納されます (Oracle の Edition に応じて異なります)。

- マテリアライズド・ビュー
Discoverer では、マテリアライズド・ビューを使用して、サマリーに使用するデータが Oracle Enterprise Edition データベースに格納されます。
- テーブル
Discoverer ではテーブルを使用して、サマリーに使用するデータを Oracle Standard Edition データベースに格納します。
サマリーに使用するデータを格納するために Discoverer で作成されるテーブルを Discoverer サマリー・テーブルと呼びます。Discoverer サマリー・テーブルの詳細は、[「Discoverer サマリー・テーブル」](#)を参照してください。

サマリー・フォルダの利用により、詳細なデータベース・テーブルにクエリーを行うのではなく、事前に集計および結合されたデータにアクセスしてクエリーが行われるため、クエリーのレスポンス時間が短縮されます。

また、Discoverer では、他のアプリケーションで作成されたサマリー・データを含むテーブルに基づくサマリー・フォルダを使用できます。これらのテーブルは、外部サマリー・テーブルと呼ばれています。外部サマリー・テーブルをリフレッシュするように Discoverer に指定できます。

サマリー・フォルダを作成するには 2 つの方法があります。

- 自動サマリー管理 (ASM) 機能を使用する方法 (詳細は、[「自動サマリー管理 \(ASM\)」](#)を参照)
- 手動による方法 (詳細は、[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)を参照)

Discoverer でサマリー・フォルダを作成する場合は、自動サマリー管理 (ASM) を使用する方法をお勧めします。

Discoverer サマリー・テーブル

Discoverer サマリー・テーブルは、Discoverer Administrator によって作成されるデータベース・テーブルで、サマリーに使用するデータが格納されています。Discoverer サマリー・テーブルには、事前に集計および結合されたデータが含まれるため、Discoverer Plus と Discoverer Viewer でのクエリーのパフォーマンスが向上します。

Discoverer では、サマリー・テーブルが使用できる状況が自動的に認識され、サマリー・テーブルを使用するようにクエリーがリライトされます。詳細は、[「クエリー・リライト」](#)を参照してください。

たとえば、Discoverer Plus で最初にクエリーが実行されるときは、ディテール・テーブルからデータが検索されます。これには、複数のテーブルの結合および数千、数百万の行の集計が必要になることがあります。この処理にはかなりの時間がかかることがあります。Discoverer で適切なサマリー・テーブルが作成されていれば、同じクエリーでサマリー・テーブルからデータが検索され、数秒で結果が返ります。どちらのクエリーでも同じ結果が得られます。

Discoverer の詳細および Oracle Standard Edition データベースでサマリー・テーブルに対するクエリーをリライトする詳細は、「クエリー・リライトしてサマリー・テーブルを使用する場合の利点を示す例」を参照してください。

注意: マテリアライズド・ビューの作成が不可能なため、Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースに対する実行時に Discoverer サマリー・テーブルが作成される場合もあります。詳細は、「Oracle Enterprise Edition データベースで EUL アイテムにマッピングする場合の外部サマリー・テーブルとビューとの相違点」を参照してください。

マテリアライズド・ビュー

マテリアライズド・ビューは、Oracle Enterprise Edition データベースによって作成されたクエリーの結果を含むデータベース・オブジェクトです。クエリーの結果には、事前に集計および結合されたデータが含まれるため、Discoverer Plus および Discoverer Viewer でのクエリーのパフォーマンスが向上します。

Oracle Enterprise Edition データベースでは、クエリー・リクエストを満たすためにマテリアライズド・ビューを使用できる場合が自動的に認識されます。データベースでは、マテリアライズド・ビューを使用するようにクエリーがリライトされます。次に、クエリーがマテリアライズド・ビューにダイレクトされますが、基礎となるディテール・テーブルまたはビューにはダイレクトされません。

マテリアライズド・ビューには、次の特性があります。

- マテリアライズド・ビューにより記憶域が消費されます。

通常のビューと異なり、マテリアライズド・ビューには1つ以上のディテール・テーブルに対するクエリーの結果データが含まれます。

- データ変更時にマテリアライズド・ビューをリフレッシュする必要があります。

Oracle データベースでは、ディテール・テーブルの変更後にマテリアライズド・ビューをリフレッシュすることで、マテリアライズド・ビューのデータがメンテナンスされます。

この目的で Discoverer を次のように設定できます。

- リフレッシュ・タイプを、増分（高速リフレッシュ。ディテール・テーブルの変更分のみがリフレッシュされます）または完全（完全リフレッシュ。データベースによりマテリアライズド・ビューのサブクエリーの定義が行われます）に設定します。
- マテリアライズド・ビューがディテール・テーブルと同じデータベースにある場合は、リフレッシュをオンデマンド（Discoverer マネージャが手動でメンテナンス）またはコミット時（データベース・トランザクションによって変更がディテール・テーブルにコミットされるたびに実行）に設定します。
- マテリアライズド・ビューは、Discoverer ユーザーにとっては透過的です。

クエリー・リライトにより、ディテール・テーブルに対して表現された SQL 文が、ディテール・テーブルで定義されている1つ以上のマテリアライズド・ビューにアクセスする文に変換されます。詳細は、「クエリー・リライト」を参照してください。

注意

- エンド・ユーザーが外部マテリアライズド・ビューを使用するために、外部マテリアライズド・ビューを Discoverer に登録する必要はありません。マテリアライズド・ビューを使用してクエリーを満たすことができるかどうかはデータベースによって認識されます。Discoverer マネージャのかわりに Discoverer でリフレッシュをメンテナンスする場合のみ、外部マテリアライズド・ビューを Discoverer に登録します（外部サマリー・テーブルおよび外部サマリー・ビューの登録の詳細は、「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法」を参照）。

- Discoverer Plus の SQL インспекタおよび EXPLAIN PLAN により、クエリーのために生成された SQL でサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューが使用されたかどうかユーザーに示されます (詳細は、「[Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示](#)」を参照)。
- Discoverer でのサマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューの使用に関するこれまでの背景は、「[Discoverer でのサマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来](#)」を参照してください。

Discoverer サマリー・テーブルとマテリアライズド・ビューの違いは次を参照してください。

- 「[Oracle Standard Edition データベースと Oracle Enterprise Edition データベースのサマリー・フォルダの特性の相違点](#)」
- 「[外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの相違点](#)」
- 「[Oracle Enterprise Edition データベースで EUL アイテムにマッピングする場合の外部サマリー・テーブルとビューとの相違点](#)」

自動サマリー管理 (ASM)

自動サマリー管理 (ASM) とは、ユーザーにかかわってサマリー・フォルダの作成と管理を行う Discoverer の機能です。

ASM により、サマリー・フォルダ管理のための完全に自動化されたソリューションが提供されるため、サマリー・フォルダの作成とメンテナンスを簡単に行うことができます。ASM を定期的に行えば、ユーザーのクエリーから Discoverer で収集されるクエリー統計を使用して作成されるサマリー・フォルダが自動的に詳細化されます。また、ASM により、サマリー・フォルダの作成またはメンテナンスを行う際にデフォルト値の指定を制御する場合の指針も提供されます。

ASM の機能

ASM による次の処理で、サマリー・フォルダの作成方法が決定されます。

- データベース・テーブルの分析
- クエリー統計の使用 (使用可能な場合)
- ASM ポリシーと呼ばれるデフォルト値の使用 (詳細は、「[ASM ポリシー](#)」を参照)

ASM では、前述の処理の組合せに基づいてサマリー・フォルダの最適なセットの作成とメンテナンスが自動的に行われます。

ASM により、サマリー・ポリシーが、推奨されるサマリー・フォルダ定義のリストに変換されます。他に操作を行わずにこれらの推奨定義を実装するか (サマリー・テーブルの実際のセットがシステム使用状況に応じて動的に調整されます)、あるいは実行を一時中断して、1 つ以上の推奨定義を特別に含めることができます。

ASM ではサマリー・フォルダを作成するための表領域が必要ですが、サマリー・ウィザードで表領域を調整できます (詳細は、「[サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法](#)」を参照)。

注意: ASM は、現在選択されているビジネスエリアのみでなく EUL 全体で機能します。これは、現行の EUL 内のすべてのビジネスエリアからのフォルダを ASM で使用できることを意味しています。

ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件

ASM でサマリー・フォルダを作成するには、次の前提条件を満たす必要があります。

- データベースが PL/SQL をサポートしていること。
- サマリー・フォルダの作成とリフレッシュのスケジュールを設定するために DBMS_JOB パッケージがインストールされていること（詳細は「[サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法](#)」を参照）。
- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID が次のデータベース権限を持っていること（これらの権限付与の詳細は「[SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法](#)」を参照）。
 - CREATE TABLE
 - CREATE VIEW
 - CREATE PROCEDURE
 - SELECT ON V_\$PARAMETER
 - CREATE/DROP/ALTER ANY MATERIALIZED VIEW（Oracle Enterprise Edition データベース）
 - GLOBAL QUERY REWRITE（Oracle Enterprise Edition データベース）
 - ANALYZE ANY
- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID が、サマリー・テーブルを作成するために十分な表領域割当て制限を持っていること（詳細は「[表領域割当て制限を決定しリセットする方法](#)」を参照）。
- EUL 所有者として Discoverer Administrator に接続していること。
- Oracle Enterprise Edition データベースを使用している場合、フォルダに集合演算子（UNION、UNION ALL、MINUS、INTERSECT など）を含めないこと。集合演算子を含むフォルダが ASM で検出されると、そのフォルダのサマリー・データは作成されません。

注意：Oracle の集合演算子の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』を参照してください。

注意：Discoverer で作成されたデータベース・ユーザーには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要になる場合があります。追加権限が必要になる状況の詳細は次の表に示されています。Discoverer で作成されたデータベース・ユーザーがサマリー・フォルダを作成するために追加権限を必要とする場合を示しています。

データベース・ユーザーの作成に使用された Discoverer またはデータベース（あるいはその両方）のリリース	データベース・ユーザーに、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要かどうか	必要なアクション
Discoverer 3.1	データベース・ユーザーには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要です。	必要な権限をデータベース・ユーザーに明示的に付与する必要があります（これらの権限を付与方法の詳細は、「 SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法 」を参照）。
Discoverer 4i と Oracle Standard Edition データベース	データベース・ユーザーには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要です。	Discoverer 3.1 の場合と同じ。
Discoverer 4i と Oracle Enterprise Edition データベース	データベース・ユーザーには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限は必要ありません。	不要

様々な ASM 実行方法とその使用状況

多くの方法で ASM を実行できます。次の表は、様々な ASM 実行方法とその使用状況を示しています。

ASM の実行方法	この方法で ASM を実行する利点	参照
サマリー・ウィザードを使用する方法	すべての処理を Discoverer がガイドします。	「サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法」
バルク・ロード後にロード・ウィザードを使用する方法	ASM にアクセスせずに、ビジネスエリアのロード時にサマリー・フォルダを作成できます。	「ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法」
コマンドライン・インタフェースを使用する方法	Discoverer を起動せずに、サマリー・フォルダを作成できます。	「コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法」
バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用する方法	コマンドラインにより ASM サマリー・フォルダ作成のスケジューリングが自動化されます。	「バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法」

ASM ポリシー

ASM ポリシーは、ユーザー定義の制約とオプションのセットです。このポリシーにより、ASM の動作と、ASM で生成されるサマリー・フォルダを制御できます。

ASM ポリシーは、領域オプションと詳細設定に分けられます。多くの場合、領域オプションの設定のみが必要になります。

領域オプションと詳細設定の詳細は、次を参照してください。

- 「サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ 3 (領域の割当て) ダイアログ」
- 「サマリー・ウィザード (ASM) : ダイアログのリスト」

Discoverer には、ユーザーが操作を行わなくても適切なサマリー・フォルダの作成とメンテナンスが確実に実行されるデフォルト設定があります。

ASM ポリシーに必要な最低限の情報は、表領域名と割り当てられたディスク領域です。デフォルトの表領域はユーザー表領域であり、デフォルトのディスク領域が使用されます。これらの値は、必要に応じて変更できます (詳細は、「サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ 3 (領域の割当て) ダイアログ」を参照)。

サマリー・データをリフレッシュする理由

サマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューとデータベースとの一貫性を保つために、サマリー・データを定期的にはリフレッシュする必要があります。またデータベースが頻繁に変更される場合は、基礎となるデータベースとデータの同期を保つために、サマリー・テーブルとマテリアライズド・ビューをリフレッシュする必要があります。

サマリー・フォルダ・リフレッシュの詳細は、次を参照してください。

- 「サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理」
- 「サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法」
- 「Oracle Enterprise Edition データベースのリフレッシュ・オプション」
- 「Oracle データベース間のインポート後のサマリー・フォルダのリフレッシュ」

注意: 変更が行われた後で (データ・ウェアハウスへのデータのロードなど)、サマリー・フォルダをリフレッシュすると有益な場合があります。Discoverer のコマンドライン・インタフェース機能を使用して、サマリー・フォルダを自動的にリフレッシュできます (詳細は、第 22 章「Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース」を参照)。

サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理

サマリー・フォルダのリフレッシュ時（Oracle Enterprise Edition データベースへの実行時）には、リフレッシュ設定に応じてデータベース・サーバー自体のリフレッシュ機能が使用されず（増分リフレッシュの場合もあります）。

サマリー・フォルダのリフレッシュ時には、Discoverer により次の処理が実行されます。

- サマリー・フォルダが使用不可とマークされます。
- サマリー・フォルダに関連付けられたマテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルが EUL メタデータにあわせて調整され、必要に応じて定義が更新されます。
- リフレッシュされる既存のサマリー・データがすべて削除されます。
- サマリー・データが再生成され、対応するマテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルに挿入されます。
- サマリー・フォルダが使用可能とマークされます。

サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法

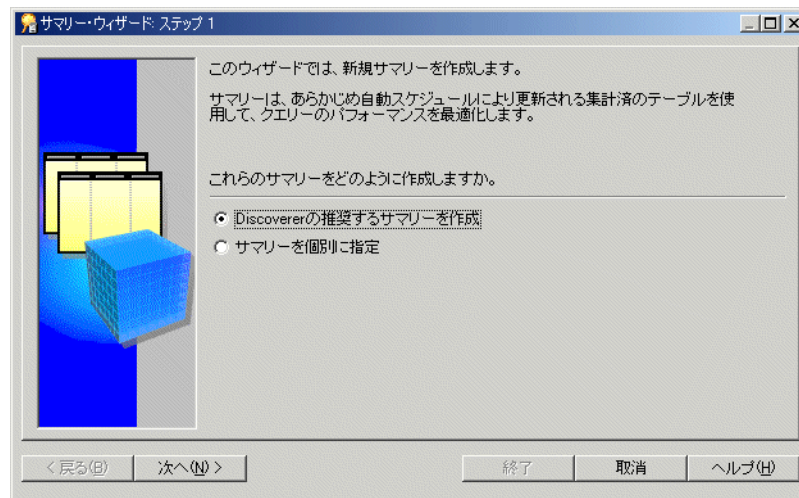
ASM を実行するには、特定のデータベース権限が必要です（ASM を実行するために必要な権限の詳細は、「[ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件](#)」を参照）。

「サマリー・ウィザード」ダイアログの詳細を指すヘッダーのリストを表示するには、「[サマリー・ウィザード \(ASM\) : ダイアログのリスト](#)」を参照してください。

サマリー・ウィザードを起動する手順は、次のとおりです。

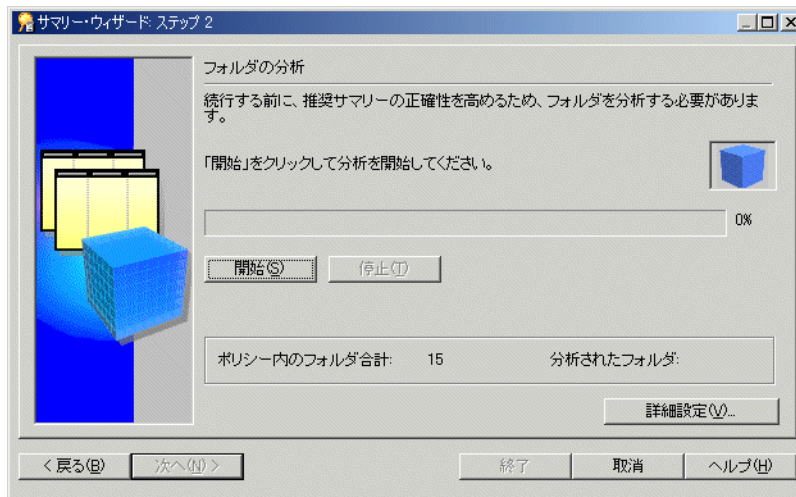
1. 「挿入」 → 「サマリー」 を選択して、「サマリー・ウィザード: ステップ 1」ダイアログを表示します。

図 14-1 「サマリー・ウィザード: ステップ 1」ダイアログ



2. 「Discoverer の推奨するサマリーを作成」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。

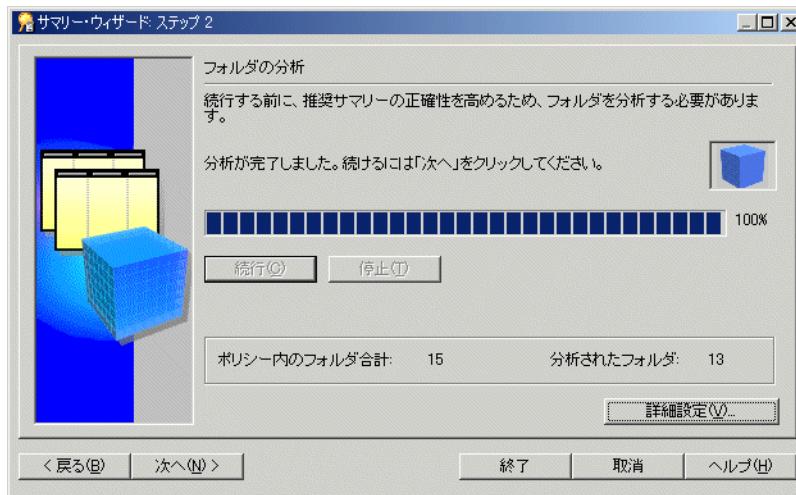
図 14-2 「サマリー・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



注意: Discoverer では、作成するサマリー・フォルダを決定するために、サマリー・フォルダ処理にかかわるすべてのフォルダが分析されます。分析されるフォルダの数とサイズによっては、この処理に時間がかかることがあります。Discoverer では、この処理の開始と停止をユーザー自身が決定できます。

3. 「開始」ボタンをクリックして分析を開始します。
分析処理中に進行状況が表示されます。
4. (オプション) 「停止」ボタンをクリックすれば、分析を中断できます。
テーブルの分析を再開する前に、「詳細設定」ボタンを使用して) デフォルト設定を変更するために分析を中断する場合があります。
5. (オプション) 「続行」ボタンをクリックすれば、分析を再開できます。
分析は、「停止」ボタンをクリックした時点から再開されます。

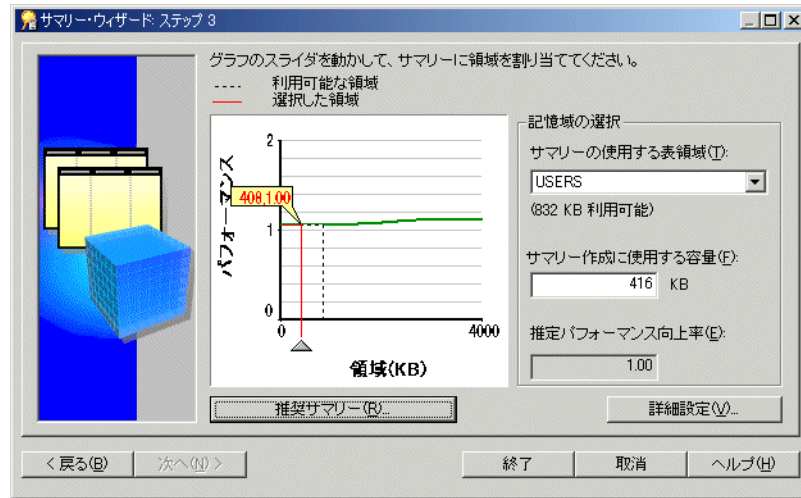
図 14-3 「サマリー・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



注意: 分析できないフォルダがある場合は、「分析されませんでした。」ダイアログが表示されます。

6. 分析が完了した後、「次へ」をクリックしてサマリーに領域を割り当てます。

図 14-4 「サマリー・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



サマリー・フォルダに割り当てられた領域から予測されるパフォーマンスが、グラフに描画されます。

ここで表示される情報がフォルダ分析時に計算されます（前の手順を参照）。「デフォルト設定の変更」ダイアログのいずれかのタブを使用して変更を行うと、Discovererによりグラフが再計算されることがあります。

設定の詳細は、「サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: ダイアログのタブのリスト」を参照してください。

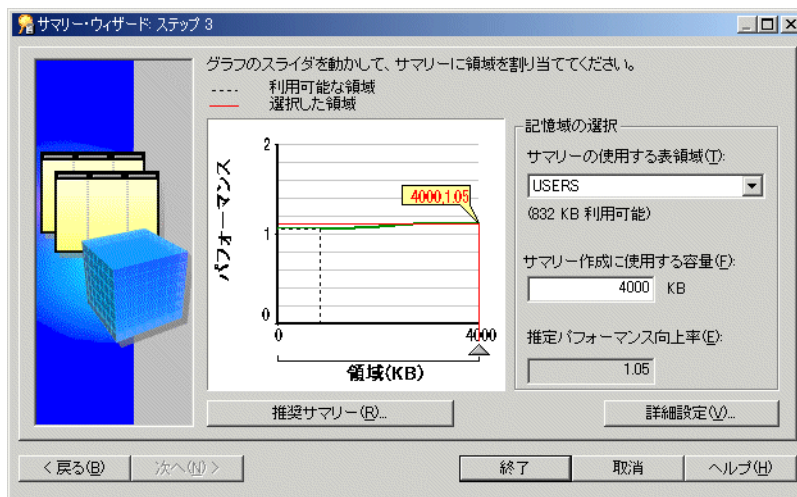
7. 「サマリーの使用する表領域」リスト・ボックスで、サマリー・データを格納する表領域を選択します。

注意: サマリー・データ用の表領域とは別の表領域を使用することをお勧めします。そのような表領域がない場合でも、SYSTEM または TEMP 表領域を使用しないことをお勧めします。詳細はデータベース管理者に問い合わせてください。

8. 次のいずれかの方法で、サマリー・データに割り当てる領域を指定します。
 - グラフをクリックし、ポインタまたは赤い線をドラッグして、サマリーに割り当てる領域を選択します。
 - 「サマリー作成に使用する容量」フィールドで数字を指定します。

注意: 「サマリーの使用する表領域」フィールドの下の値は、「サマリー作成に使用する容量」フィールドで指定した値を下回ることがあります。この場合でも、表領域が自動拡張に設定されていれば問題ありません。表領域が自動拡張に設定されている場合、必要な領域がデータベースに自動的に追加されます。表領域が自動拡張に設定されていない場合、領域 (KB) の値は使用可能領域未満である必要があります。

図 14-5 「サマリー・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



9. (オプション) ユーザーにかわって ASM により作成または削除されるサマリー・フォルダを表示するには、「推奨サマリー」ボタンをクリックします。
推奨サマリーの詳細は、「[「推奨サマリー」ダイアログ](#)」を参照してください。
10. (オプション) 「デフォルト設定の変更」ダイアログを表示するには、「詳細設定」ボタンをクリックします。
詳細設定の詳細は、「[サマリー・ウィザード \(ASM\) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: ダイアログのタブのリスト](#)」を参照してください。
11. 「終了」をクリックすると、現在の設定に基づいてサマリー・フォルダが生成されます。
これらの設定には、「推奨サマリー」ダイアログまたは「デフォルト設定の変更」ダイアログで行われた設定が含まれます。

注意

- 現行の EUL 内のサマリー・フォルダをすべて表示するには、[ワークエリア: 「サマリー」タブ](#)を表示します。

ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法

ロード・ウィザードを使用してビジネスエリアを現行の EUL にロードするとき、この新規ビジネスエリア用のサマリー・フォルダ・セットを作成するかどうかを選択できます。

このオプションを選択すると、適切なサマリーがバルク・ロード後に作成されます。

ロード・ウィザードを使用してバルク・ロード後に ASM を実行する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「ビジネスエリア」→「データベースから新規ビジネスエリアを作成」を選択して、ロード・ウィザードを起動します (ロード・ウィザードの使用の詳細は「[ロード・ウィザード](#)」を参照)。
2. 「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログで、オプション「作成されたフォルダをベースとしたサマリー」をクリックします。

詳細は、「[「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ](#)」を参照してください。

注意

- ビジネスエリアのバルク・ロード時に作成されるサマリー・フォルダは、テーブルの分析とデフォルトのサマリー・ポリシーにより導出されます。
ASM ポリシーの詳細は、「[ASM ポリシー](#)」を参照してください。
- バルク・ロード処理でデータベース・テーブルがロードされた直後には、クエリー統計を利用できません。Discoverer をしばらく使用すると、クエリー統計が収集されます。クエリー統計が使用可能になると、ASM でクエリー統計が利用されてより適切なサマリー・フォルダが作成されます。
- バルク・ロードの ASM 処理に対するサマリー・ポリシーを変更する必要はありません。使用されるデフォルト設定で十分です。ただし、変更した場合は、それらの設定がデフォルトになります。

コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法

コマンドライン・インタフェースを使用して ASM を実行する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 適切なコマンドを入力します。

コマンドライン・インタフェースの詳細は、[第 22 章「Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース」](#)を参照してください。ASM コマンドとコマンド修飾子の詳細は「[/asm](#)」を参照してください。

バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法

オペレーティング・システムのバッチ・ファイル機能またはスケジューラ機能を利用して ASM を実行できます。この方法では、処理を繰り返す場合のスケジュールされた間隔など、ASM を実行する時期を指定します。

バッチ・ファイル内でコマンドライン構文を使用すれば、夜間または週末に自動的に処理できます。これにより、システムの自己メンテナンスが可能になります。

バッチ・ファイルから ASM を実行する前に、次の 2 つの処理が必要です。

1. テキスト・エディタ（メモ帳など）でテキスト・ファイルを作成します。
2. 適切なコマンドライン構文で、バッチ・ファイルにテキストとしてコマンドラインの詳細を入力します。

ASM コマンドライン構文の詳細は、「[/asm](#)」を参照してください。

3. .bat という拡張子を付けて（たとえば、asmshed.bat という名前）ファイルを保存します。
4. 適切なオペレーティング・システムのコマンドを使用して、バッチ・ファイルのスケジュールを設定します。

バッチ・ファイルのスケジュールを設定する方法は、オペレーティング・システムのドキュメントまたはヘルプを参照してください。

サマリー・フォルダのデータベースの構成方法

Discoverer のサマリー管理機能では、Oracle データベース管理システム (DBMS) の機能が使用されます。この機能では、ワークブック・スケジュール機能と同じスケラブルで信頼性の高い処理手順が使用されており、両方の機能の設定は似ています。これらの手順では、DBMS_JOB と呼ばれる DBMS の標準パッケージが使用されます。

次の作業を確認すれば、Discoverer でサマリー管理の処理手順を有効にできます。

- 「サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法」
- 「SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法」
- 「表領域割当て制限を決定しリセットする方法」
- 「スキーマ・オブジェクト名を確認する方法」
- 「サマリー処理の開始時間を設定する方法」

サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法

サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、データベース管理者として接続します。SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT dba_user/dba_pw@database;
```

dba_user はデータベース管理者、dba_pw はデータベース管理者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select * from all_objects where object_name='DBMS_JOB' and object_type = 'PACKAGE';
```

文によって行が返されない場合は、データベース管理者として必要なパッケージを作成します。

DBMS_JOB をインストールし、サマリー管理に必要なパッケージを作成する手順は、次のとおりです（Oracle9i 以上のデータベースの場合）。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、SYS ユーザーあるいは SYSDBA 権限を付与されたユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys は SYS ユーザー、sys_pw は SYS ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbs/admin/dbmsjob.sql;
```

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbs/admin/prvtjob.plb;
```

SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法

SQL*Plus を使用して、次の方法でサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与できます。

- 「SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を手動で付与する方法」
- 「SQL*Plus と eulasm.sql スクリプトを使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法」

注意

- 後述の <user> は、Discoverer Administrator を使用する管理者のデータベース・ユーザーを示しています。

SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を手動で付与する方法

SQL*Plus を使用して、サマリー・フォルダの作成に必要な権限を手動で付与する手順は、次のとおりです (Oracle9i 以上のデータベースの場合)。

1. SQL*Plus を起動し (まだ実行されていない場合)、SYS ユーザーあるいは SYSDBA 権限を付与されたユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys は SYS ユーザー、sys_pw は SYS ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> grant CREATE TABLE to <user>;
SQL> grant CREATE VIEW to <user>;
SQL> grant CREATE PROCEDURE to <user>;
SQL> grant CREATE ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant DROP ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant ALTER ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant GLOBAL QUERY REWRITE to <user> with admin option;
SQL> grant ANALYZE ANY to <user>;
SQL> grant SELECT ON V_$PARAMETER to <user>;
```

注意: SELECT ON v_\$parameter を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS ユーザーとしてログインできない場合、または SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

SQL*Plus と eulasm.sql スクリプトを使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法

SQL*Plus と eulasm.sql スクリプトを使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し (まだ実行されていない場合)、データベース管理者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT dba_user/dba_pw@database;
```

dba_user はデータベース管理者、dba_pw はデータベース管理者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> @'<ORACLE_HOME>%discoverer%util%eulasm.sql'
```

3. スクリプトによりプロンプトが表示されたら、このスクリプトで権限を付与するデータベース・ユーザーを入力します。

```
ENTER value for username: <username>
```

注意: SELECT ON v_\$parameter を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS ユーザーとしてログインできない場合、または SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

4. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、SYS ユーザーあるいは SYSDBA 権限を付与されたユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys は SYS ユーザー、sys_pw は SYS ユーザーのパスワードです。

5. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> grant SELECT ON V_$PARAMETER to <user>;
```

表領域割当て制限を決定しリセットする方法

データベース・ユーザーは、サマリー・テーブルを作成するために十分なデフォルト表領域割当て制限を持っている必要があります。必要な場合は、次の作業により表領域割当て制限を決定できます。

表領域割当て制限を決定する手順は、次のとおりです（Oracle9i 以上のデータベースの場合）。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、SYS ユーザーあるいは SYSDBA 権限を付与されたユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys は SYS ユーザー、sys_pw は SYS ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select * from dba_ts_quotas where username = <user>;
```

<user> は Discoverer Administrator を使用する管理者のユーザー ID を示しています。

表領域割当て制限をリセットする手順は、次のとおりです。

1. 次の SQL 文を実行して表領域割当て制限をリセットします。

```
SQL> alter user <user> quota <n> on <tablespace>;
```

<user> は Discoverer Administrator を使用する管理者のユーザー ID を示しています。

<n> は、割当ての単位 K (KB)、M (MB) または U (無制限) を示しています。

<tablespace> は、デフォルトの表領域名 (USERS など) を示しています。

スキーマ・オブジェクト名を確認する方法

ユーザーは、ユーザー名と同じ名前のオブジェクトをスキーマ内に持つことはできません。この作業は、データベース・ユーザー名と同じ名前のオブジェクトをスキーマ内で検索する方法を示しています。

ユーザー名と同じ名前のオブジェクトがスキーマ内にあるかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、データベース・ユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT jchan/tiger@database;
```

jchan はデータベース・ユーザー、tiger はデータベース・ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select object_name from user_objects where object_name = <user>;
```

<user> は SQL*Plus に接続するログインの場合と同じです。

サマリー処理の開始時間を設定する方法

サマリー管理処理はサーバー上のデータベース内で実行され、Oracle DBMS の初期化ファイル (INIT<SID>.ORA) 内のパラメータにより制御されます。

同時に実行できる処理リクエスト数の制限

DBMS_JOB の処理に使用する同時処理の数は、パラメータ `job_queue_processes` で指定します。つまり、同時に扱うことができる処理リクエストの数をこのパラメータで制御します。デフォルト値はゼロであり、処理リクエストが作成されないことを意味しています。別のアプリケーションで DBMS_JOB を使用する場合は、この値を 2 以上に設定してください。

なんらかの理由で 1 つのジョブが失敗すると、そのジョブは再実行を依頼され続けてキュー内のその他のジョブを完了できなくなることがあるため、複数のジョブ・キュー・プロセスが必要です。同時に 10 の処理リクエストを扱う場合は、値を 10 に設定する必要があります。

これらのパラメータの詳細は、「[ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能](#)」を参照してください。

前述のパラメータを有効にする手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA ファイルの位置を特定します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、<ORACLE_HOME>%dbms にあります。このファイルのデフォルト名は INITORCL.ORA です。ORCL は <SID> 名を表します。

2. このファイルに 1 行入力します。たとえば、次のようになります。

```
job_queue_processes = 2
```

注意

- サマリー管理機能とワークブック・スケジュール機能の両方で、Oracle DBMS 内のこのスケジュール機能が使用されます。同時リクエストの数によって両方の機能が影響を受けます。

手動によるサマリー・フォルダの作成

この章では、（自動サマリー管理を使用するかわりに）Discoverer Administrator を使用してサマリー・フォルダを手動で作成する方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「手動によるサマリー・フォルダの作成について」
- 「Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件」
- 「サマリー組合せ」
- 「サマリー組合せを定義するときに考慮する事項」
- 「サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン」
- 「式がサマリー・フォルダを使用する時期」
- 「EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法」
- 「ユーザーのクエリーに基づくサマリー・フォルダの作成方法」
- 「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法」
- 「サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法」
- 「サマリー・フォルダのプロパティの編集方法」
- 「サマリー・フォルダの編集方法」
- 「サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法」
- 「サマリー・フォルダの削除方法」
- 「サマリー・フォルダのサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法」

手動によるサマリー・フォルダの作成について

手動によるサマリー・フォルダの作成は、Discoverer の自動サマリー管理 (ASM) 機能を使用するかわりにユーザー自身でサマリー・フォルダを作成する処理です (詳細は第 14 章「サマリー・フォルダの管理」を参照)。サマリー・フォルダの作成には ASM を使用することをお勧めします。ただし、次の場合にはサマリー・フォルダをユーザー自身で作成できます。

- EUL アイテムの組合せを手動で選択する場合 (サマリー・フォルダで使用するアイテムがわかっている場合など)
- クエリー統計を使用して、(実行されたクエリーに基づく) サマリー・フォルダから選択する場合
- 外部アプリケーションにより作成またはメンテナンスされたサマリー・テーブルを使用する場合 (外部サマリー・テーブルなど)

サマリー・ウィザードの最初の手順で、ASM を使用してサマリー・フォルダを作成するかまたは手動で作成するかを指定します。サマリー・フォルダを手動で作成するには、「サマリーを個別に指定」オプションを選択して、次のいずれかの作業を完了する必要があります。

- 「EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法」
- 「ユーザーのクエリーに基づくサマリー・フォルダの作成方法」
- 「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法」

サマリー・フォルダと Discoverer がサマリー・フォルダを自動的に作成およびメンテナンスする方法の詳細は、第 14 章「サマリー・フォルダの管理」を参照してください。

Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件

サマリー・フォルダを作成するには、次の前提条件を満たす必要があります。

- データベースが PL/SQL をサポートしていること。
- サマリー・フォルダの作成とリフレッシュのスケジュールのための DBMS_JOB パッケージがインストールされていること。詳細は、「サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法」を参照してください。
- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID には、次のデータベース権限があること。

- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- CREATE PROCEDURE
- SELECT ON V_\$PARAMETER
- CREATE/DROP/ALTER ANY MATERIALIZED VIEW (Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースの場合)
- GLOBAL QUERY REWRITE (Oracle Enterprise Edition データベース)

詳細は、「SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法」を参照してください。

- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID には、デフォルト表領域に十分な割当てを保有していること。詳細は、「表領域割当て制限を決定しリセットする方法」を参照してください。

注意

- Oracle Enterprise Edition データベースに対してデータベース・ユーザーを Discoverer 3.1 で作成した場合、データベース・ユーザーはサマリー・フォルダを作成できる追加の権限を付与されている必要があります (詳細は、「ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件」を参照)。

- Discoverer で外部サマリー・テーブルを使用する場合、EUL の所有者は次の要件を満たしている必要があります。
 - 外部サマリー・テーブルへの SELECT WITH GRANT アクセス権を保有していること。
 - SELECT WITH GRANT アクセス権を明示的に（データベース・ロール経由ではなく）付与されていること。

サマリー組合せ

サマリー組合せは、サマリー・フォルダを構成するアイテムのグループです。サマリー組合せは、データベースのマテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルに直接マップします。Discoverer では、作成したサマリー組合せに基づいてマテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルが作成されます。各サマリー組合せは、サマリー・フォルダで複数のアイテムを組み合わせる異なる方法を定義します。Discoverer Plus ユーザーが、特定の組合せで指定されたアイテムにかなり一致するアイテムの組合せを含むクエリーを実行する場合、ディテール・データのかわりにサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに対してクエリーが実行されるため、レスポンス時間が短縮されます。

たとえば、「Product Key」（製品キー）および「Product Type」（製品タイプ）という 2 つのフォルダ・アイテムに対するサマリー・フォルダを作成するとします。

「Product Key」（製品キー）および「Product Type」（製品タイプ）というアイテムが同時に使用される場合のみサマリー・フォルダを使用できます。

この例ではサマリー組合せを追加しませんが、デフォルトの組合せを次のように受け入れます。

組合せ	組合せ 1（デフォルト）
製品キー	選択
製品タイプ	選択

かわりに、次の組合せの場合にサマリー・フォルダを使用することもできます。

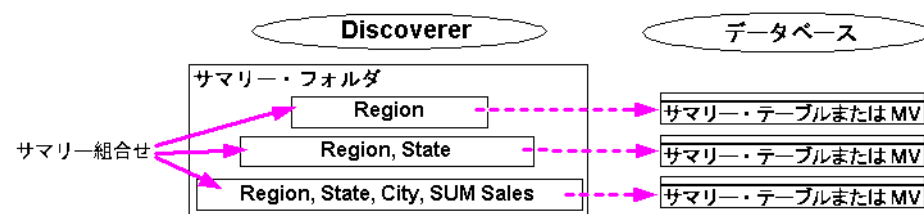
- 製品キーと製品タイプ（組合せ 1）
- 製品キー（組合せ 2）
- 製品タイプ（組合せ 3）

この場合は 2 つのサマリー組合せを追加して、使用するアイテムの隣にあるチェックボックスを次のように選択します。

組合せ	組合せ 1（デフォルト）	組合せ 2	組合せ 3
製品キー	選択	選択	選択解除
製品タイプ	選択	選択解除	選択

サマリー・ウィザードを使用して、各サマリー・フォルダに必要なだけ組合せを定義できます。

図 15-1 サマリー組合せ、サマリー・フォルダ、サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューの関係



このテーブルは、Discoverer ではそれぞれのサマリー組合せに対して、マテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルがデータベースに作成されることを示しています。

複数のサマリー組合せを追加する場合、Discoverer は（可能であれば）低レベルの組合せ（少数のアイテムを含む組合せ）を使用して、高レベルの組合せ（多数のアイテムを含む組合せ）を作成します。これは、次の理由によりパフォーマンスを向上します。

- ディテール・テーブルに頻繁にクエリーを行う必要がありません。
- サマリー・フォルダは迅速にリフレッシュされます。

たとえば、サマリー・フォルダに次のような2つのサマリー組合せが含まれる場合があります。

- 月、地域および収益
- 年、地域および収益

Discoverer は、ディテール・データに直接アクセスして、月と地域により収益のデータを集計します。次に、Discoverer は第1の組合せで集計されたデータを使用して第2の組合せのデータを集計し、処理とCPUの両方のオーバーヘッドを省きます。

注意: サマリー組合せは、Discoverer がサマリー・フォルダのリフレッシュを管理する場合のみ使用できます。

サマリー組合せを定義するときに考慮する事項

サマリー組合せを定義するときに考慮するのは次の3点です。

- サマリー・データの格納に必要なデータベース領域の大きさ
- クエリーを実行する速度
- クエリーを実行する頻度

良好なサマリー・フォルダ設計の鍵は、システムの使用パターンに応じて最適なサマリー組合せを作成することにあります。

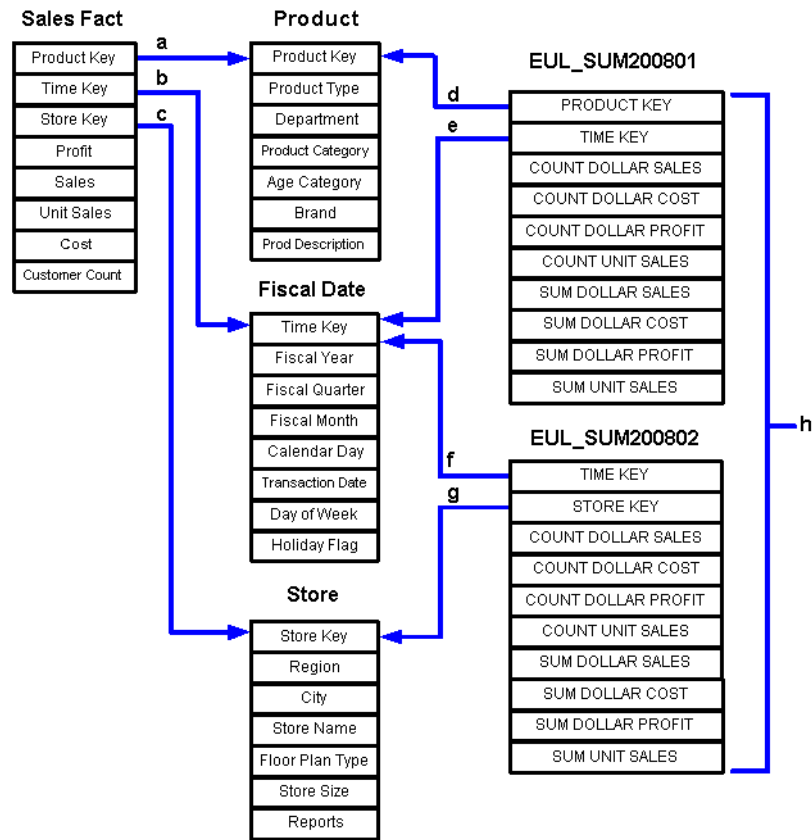
一般に、クエリーは、頻度の高いものであれば、データベース領域がより必要になるとしても、できるだけ高速で実行されることが求められます。一方、頻度の低いクエリーであれば、実行速度が遅くなるとしても、使用するデータベース領域ができるだけ少ないことが求められます。

サマリー組合せを作成するときは、次の点を確認します。

- 汎用性があり、頻度の高いクエリーに対応するサマリー組合せ
汎用のクエリーに対応するサマリー組合せを作成している場合は、使用されるすべてのアイテムと結合をクエリーに含めます。このようなサマリー組合せには、かなり大きなデータベース領域が必要になる場合があります。
- 非定型で頻度の低いクエリーに対応するサマリー組合せ
より非定型な環境（クエリーの予測がきわめて難しい環境）に対応するサマリー組合せは、一般的に主ファクト・テーブルのキーの異なる組合せに基づいています。

たとえば、次のサマリー・テーブルでは、列「EUL_SUM200801」と列「EUL_SUM200802」が、「Sales Fact」フォルダの該当するアイテムにマップされています。

図 15-2 ファクト・テーブルとディメンション・テーブルに対するサマリー・テーブルと結合の例



前述の図では、次のことに注目してください。

- a. 「Product Key」を使用した「Sales Fact」テーブルから「Product」テーブルへの結合
- b. 「Time Key」を使用した「Sales Fact」テーブルから「Fiscal Date」テーブルへの結合
- c. 「Store Key」を使用した「Sales Fact」テーブルから「Store」テーブルへの結合
- d. 「Product Key」を使用したサマリー・テーブル「EUL_SUM200801」から「Product」テーブルへの結合
- e. 「Time Key」を使用したサマリー・テーブル「EUL_SUM200801」から「Fiscal Date」テーブルへの結合
- f. 「Time Key」を使用したサマリー・テーブル「EUL_SUM200802」から「Fiscal Date」テーブルへの結合
- g. 「Store Key」を使用したサマリー・テーブル「EUL_SUM200802」から「Store」テーブルへの結合
- h. 「EUL_SUM200801」および「EUL_SUM200802」は、Discoverer がデータベースに作成するサマリー・テーブルを表しています。

クエリに応じて、Discoverer は 1 つ以上のディメンション・テーブル（「Store」、「Product」または「Fiscal Date」）に対してサマリー・テーブルを結合します。ディメンション・テーブルは EUL で定義されたアイテムによってファクト・テーブルに結合される必要があります。サマリー・テーブルはファクト・フォルダに外部キー・アイテムを含む必要があります。

たとえば、ユーザーが「Product Category」、「Month」および「SUM」（ドル利益）をリクエストすると、Discoverer は「EUL_SUM200801」を「Product」および「Fiscal Date」に結合して結果を取得します。Discoverer では「Sales Fact」テーブルと「Product」および「Fiscal Date」との間の外部キーおよび主キーがわかっているため、これらのキーを「EUL_SUM200801」に適用できます。

サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン

サマリー組合せは、段階的に作成することをお勧めします。最初は頻繁に使用されるクエリーに、次は頻繁に使用されないクエリーに注目し、最後に「キャッチオール」（すべてを集めた）サマリー組合せを作成します。サマリー組合せをセットアップするガイドラインは次のとおりです。

クエリーの対象範囲	アイテムの数	注意
頻繁に使用されるクエリー	3-4	3つまたは4つの軸アイテム（ディメンション値）のみを組み合わせる多数のサマリー組合せを作成します。これにより、領域が最小化され、パフォーマンス向上が最大化されます。
頻繁に使用されないクエリー	5-7	たとえば、5～7個の軸アイテムを組み合わせた頻繁に使用されないサマリー組合せを作成します。領域がさらに必要になりますが、大幅なパフォーマンス向上が実現します。サマリー組合せでアイテムを多く作成するほど、機能するクエリーの種類が増加します。
キャッチオール	すべて	ユーザーが自分でサマリーを指定する場合は、サマリー・フォルダにすべてのアイテム（合計数はソース・フォルダにあるアイテムの数よりも少なくする必要があります）を含む1つのサマリー組合せを作成します。クエリー結果の速度は遅くなりますが、それでもディテール・テーブルへのクエリーに比べると、パフォーマンスは良好です。Discoverer Administrator は、このサマリー組合せを次のように自動的に作成します。

サマリー組合せに次のアイテムを含めます。

- データ・ポイント・アイテム
追加のデータ・ポイント・アイテムはサマリー・テーブルの領域をほとんど使用しません。
- 集計（使用されることがまれな STDEV と VARIANCE は除外される場合もあります）
複数の集計は多くの領域を必要とせず、パフォーマンスを大幅に向上できます。AVG は、Discoverer が平均を計算するのに使用する SUM と COUNT を含める必要があることに注意してください。

注意

- サマリー組合せの階層のすべてのレベルにアイテムを含める必要はありません。最下位レベルにアイテムを含めると、階層の上位にあるアイテムを使用するクエリーであってもサマリー・テーブルを使用できます。ただし、このように機能するためには、サマリー・フォルダが階層を含むフォルダへの外部キーを含んでいる必要があります。階層のすべてのレベルに対するサマリー組合せを作成しても、達成できるパフォーマンス向上はごくわずかです。たとえば、「Year」から「Quarter」までの階層では、集計が節約される割合は 4:1 程度です。これは、四半期を合計して年が計算されるためです。

式がサマリー・フォルダを使用する時期

特定の条件を除き、式はサマリー・フォルダを使用します。このため、式がいつサマリー・フォルダを使用するかを判別できるのは便利です。次の例では、次の場合に式がサマリー・フォルダをいつ使用するかを示しています。

- サマリー・フォルダがアイテム「SUM(Salary)」と「SUM(Comm)」を含む場合
- 式が COUNT(DISTINCT, X) の場合

式	サマリー・ テーブルの使用	注意
SUM(Salary + Comm)	いいえ	この式は、「SUM(Salary)」と「SUM(Comm)」がサマリーに使用するアイテムとして使用可能であってもサマリー・フォルダを使用しません。これは、SUM(Salary + Comm) が SUM(Salary) + SUM(Comm) と関係上同等ではないことから生じます。つまり、結果が間違いになるので、式は使用されません。
SUM(Salary) * 12	する	このように式をクエリーすることができます。また、「SUM(Salary)」はサマリーされるので、式はサマリー・フォルダを使用します。
NVL(SUM(Comm),0)	する	NVL(SUM(Comm),0) などのような SQL 関数を使用する式はサマリーを使用します。これは、「SUM(Comm)」をサマリーで使用できるからです。
SUM(NVL(Comm,0))	いいえ	SUM(NVL(Comm,0)) などのような式はサマリーを使用しません。これは、式の一部と使用可能なサマリーに使用するアイテム「SUM(Comm)」の間で直接一致しないからです。
COUNT(DISTINCT, <folder_name.item_name>)	する	COUNT(DISTINCT, STORE.STORE_NAME) などのような式がサマリー・フォルダを使用するのは、COUNT(DISTINCT) 式自体ではなく COUNT(DISTINCT) 式の基礎となるアイテムがサマリー・フォルダに含まれている場合のみです。たとえば、次の式を含むクエリーを考えてみます。 count(distinct Store.Store name)、sum(Sales Facts.Sales)、count(Sales Facts.Sales) サマリー・フォルダには次のアイテムが含まれます。 Store.Store name、sum(Sales Facts.Sales)、count(Sales Facts.Sales)

本質的に、式は、式または式の一部とサマリーに使用する式が関係上等しい場合のみサマリー・フォルダを使用します。

EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法

このオプションを使用して、サマリー・フォルダに含める EUL アイテムの組合せを手動で選択します。

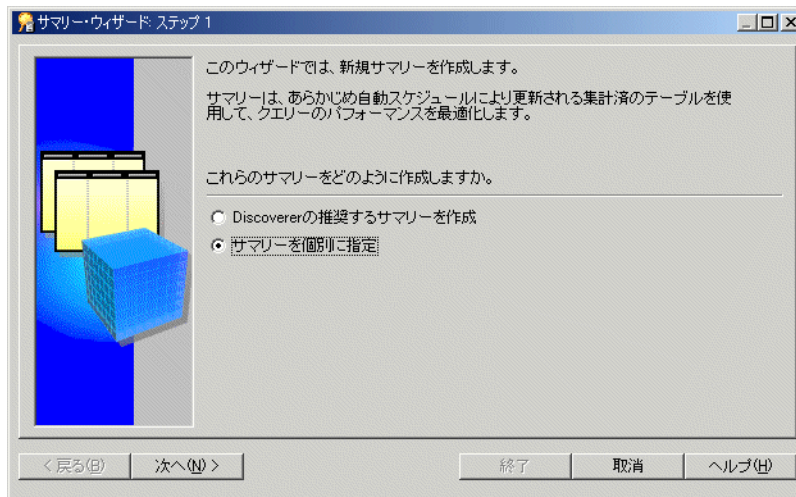
たとえば、次の場合にこのオプションを選択します。

- 「クエリー統計の収集」権限をオフに切り替えた場合（詳細は、「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」を参照）。
- サマリー・フォルダを形成する EUL アイテムの組合せを手動で選択する場合

EUL のアイテムに基づいてサマリー・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

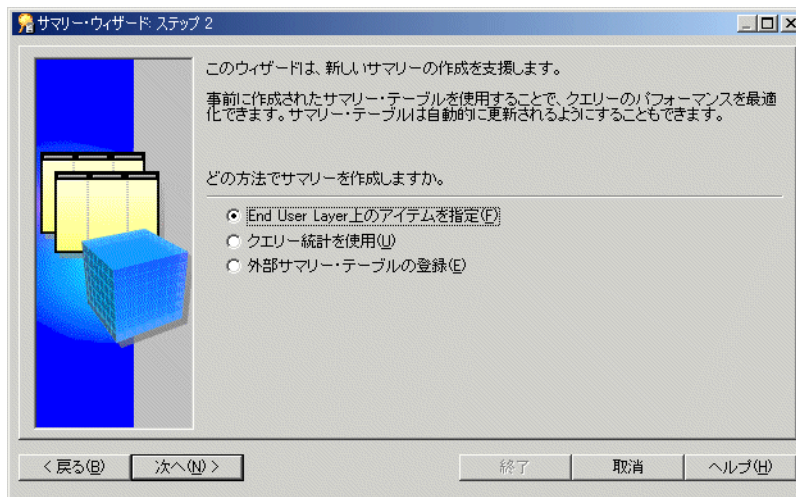
1. 「挿入」→「サマリー」を選択して、「サマリー・ウィザード: ステップ 1」ダイアログを表示します。

図 15-3 「サマリー・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



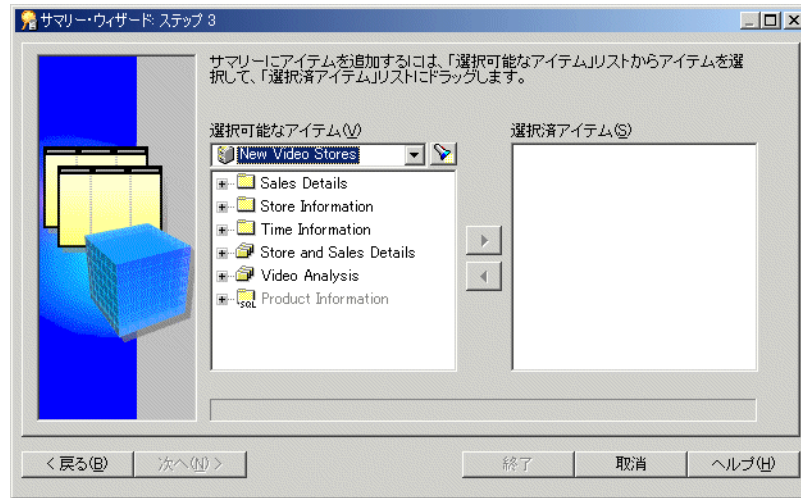
2. 「サマリーを個別に指定」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして「サマリー・ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 15-4 「サマリー・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



3. 「End User Layer 上のアイテムを指定」を選択し、サマリー・フォルダを作成します。
サマリー・フォルダ機能が有効である場合のみ、このオプションを使用できます。詳細は、「サマリー・フォルダのデータベースの構成方法」を参照してください。
4. 「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (サマリー・フォルダへのアイテムの追加) を表示します。

図 15-5 「サマリー・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



5. 新規サマリー・フォルダに含めるアイテムを「選択可能なアイテム」リストから「選択済アイテム」リストに移動します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

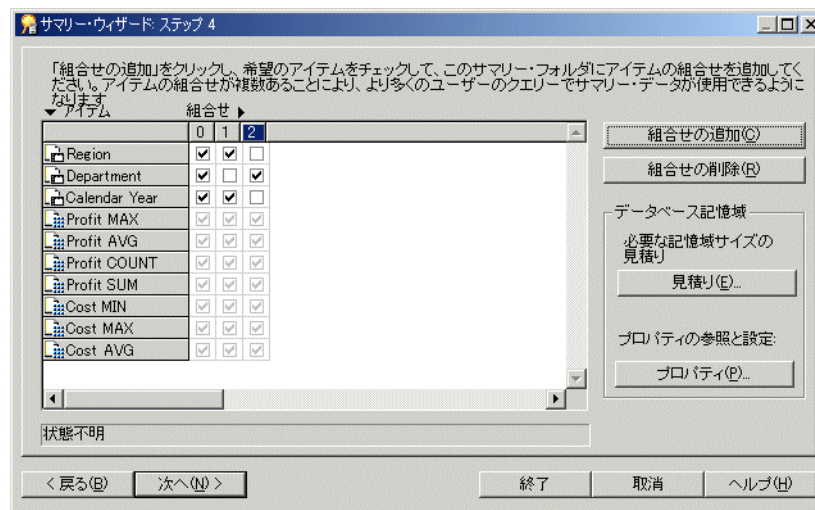
次のものを含めることを覚えておいてください。

- 各データ・ポイント・アイテムのすべての集計関数 — 詳細は、「サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン」を参照してください。
- 複合フォルダからのアイテム (必要な場合) — 詳細は、「Discoverer によるクエリー・リライトの条件」を参照してください。
- 導出ユーザー定義アイテム (必要な場合) — 詳細は、「Discoverer によるクエリー・リライトの条件」を参照してください。

注意: 任意のアイテムと関数を選択できます。ただし、異なるフォルダからのアイテムを選択する場合は、フォルダ間にすでに結合が存在する必要があります。

6. 「次へ」をクリックし、「サマリー・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ (アイテムの組合せの追加) を表示して、新規サマリー・フォルダでサマリー組合せを定義します。

図 15-6 「サマリー・ウィザード: ステップ 4」 ダイアログ



「サマリー・ウィザード: ステップ 4」ダイアログにより、新規サマリー・フォルダでサマリー組合せを定義できます。

デフォルトでは、「サマリー・ウィザード: ステップ 3」で選択されたすべてのアイテムは最初のサマリー組合せ (列 0) に含まれます。

- 「組合せの追加」をクリックし、新規サマリー組合せを追加します。

サマリー組合せは、新しい番号を付けられた列に表示されます。

- 関連するチェックボックスを選択し、サマリー組合せにアイテムを含めます。

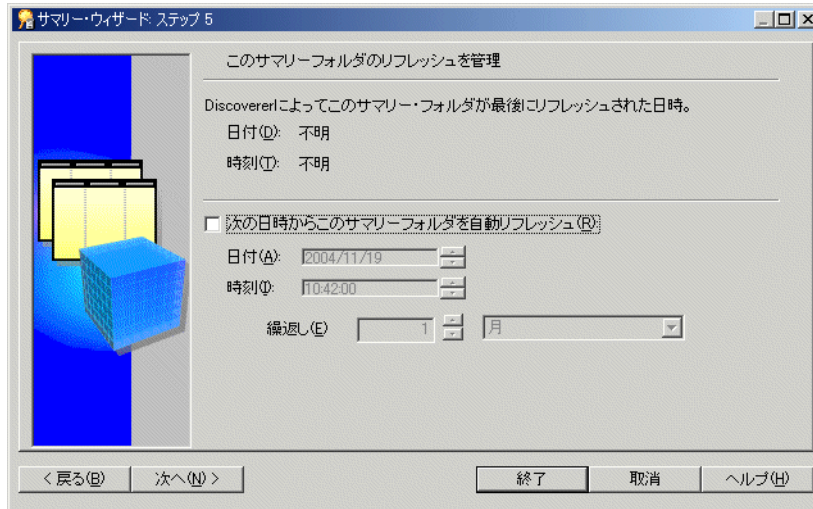
- 必要なだけサマリー組合せを追加します。

詳細は、「[サマリー組合せ](#)」を参照してください。

ヒント:

- 指定したサマリー組合せを使用することによって得られるパフォーマンス向上に対して、サマリー組合せが占める表領域サイズの重要度が高いかどうか明確でない場合は、「見積り」をクリックします。
 - 「プロパティ」をクリックして、選択したサマリー組合せのデータベース記憶域のプロパティを表示および編集できます。詳細は、「[サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法](#)」を参照してください。
 - 不要なサマリー組合せを削除するには、関連する列番号を選択し、「組合せの削除」をクリックします。
- 「次へ」をクリックし、「サマリー・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ (サマリー・フォルダのリフレッシュ) を表示して、サマリー・フォルダのリフレッシュ・スケジュールを指定します。

図 15-7 「サマリー・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ



- 「次の日時からこのサマリー・フォルダを自動リフレッシュ」チェックボックスを選択し、Discoverer がこのサマリー・フォルダを自動的にリフレッシュする日付、時刻および頻度を指定します。

ヒント: データが静的で変化しない場合、またはサマリー・フォルダを手動でリフレッシュする場合は、このチェックボックスを選択しないでください。手動でサマリー・フォルダをリフレッシュする方法の詳細は、「[サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法](#)」を参照してください。

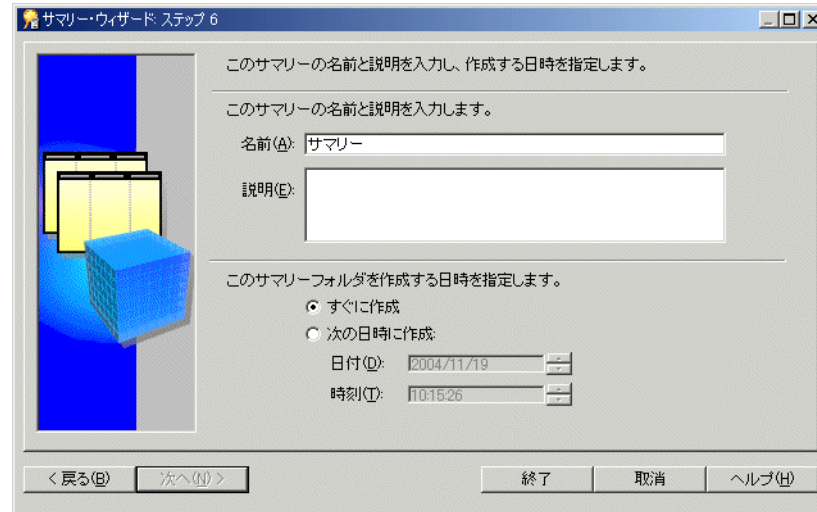
- Discoverer が最初にリフレッシュする日付と時刻を設定します。

13. 必要なリフレッシュ間隔を「**繰返し**」フィールドに設定します。

ここで指定するリフレッシュ間隔は、Discoverer がデータをリフレッシュおよび更新する間隔です。このパターンは、設定を変更するまで変わりません。

14. 「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード:ステップ6」ダイアログ (サマリー・フォルダの名前付け) を表示します。

図 15-8 「サマリー・ウィザード:ステップ6」ダイアログ



15. サマリー・フォルダの名前と説明を指定します。

16. このサマリー・フォルダをいつ作成するか次のように指定します。

- 小規模なサマリー・テーブルを保有している場合またはサマリー・テーブルをすぐに作成する場合は、「**すぐに作成**」ラジオ・ボタンを選択します。
- サマリー・フォルダをオフピーク時間に作成するのが最適な大規模なサマリー・テーブルを保有している場合は、「**次の日時に作成**」ラジオ・ボタンを選択します。サマリー・テーブルを作成する時刻と日付を入力します。

17. 「終了」をクリックします。

Discoverer では、サマリー・フォルダの作成時に次のものが作成されます。

- サマリー・フォルダとサマリー・テーブル (Oracle Standard Edition データベースの場合)
- サマリー・フォルダとマテリアライズド・ビュー (Oracle Enterprise Edition データベースの場合)

作成プロセスでは、サマリー・データが生成され、サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに使用準備完了のマークが付けられます。

プロセスが完了すると、Discoverer はワークエリア: 「サマリー」タブに新規サマリー・フォルダを表示します。

ユーザーのクエリーに基づくサマリー・フォルダの作成方法

クエリー統計は、ユーザーに対して「**統計の収集**」権限がオンに切り替えられたときに自動的に生成されます (詳細は、「**ユーザーまたはロール (職責) が実行できる作業の指定方法**」を参照)。

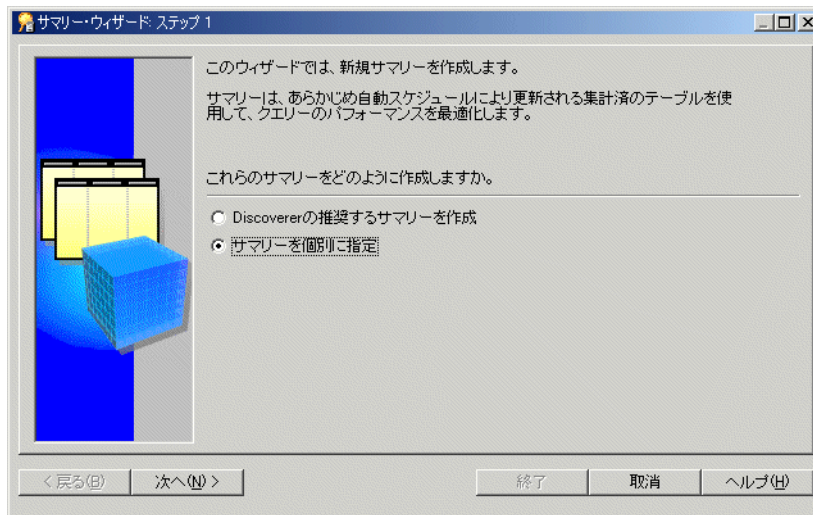
アイテムをユーザー自身で選択するのではなく、クエリー統計に基づいて新規サマリー・フォルダを作成できます。Discoverer は、Discoverer エンド・ユーザーのクエリーから生成されたクエリー統計に基づいて、推奨されるサマリー・フォルダ・アイテムをユーザーに示します。

特定のクエリーに基づいて1つ以上のサマリー・フォルダを作成し、Discovererで他のサマリー・フォルダを作成する必要がない場合はこのオプションを選択します。

クエリー統計に基づくサマリー・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

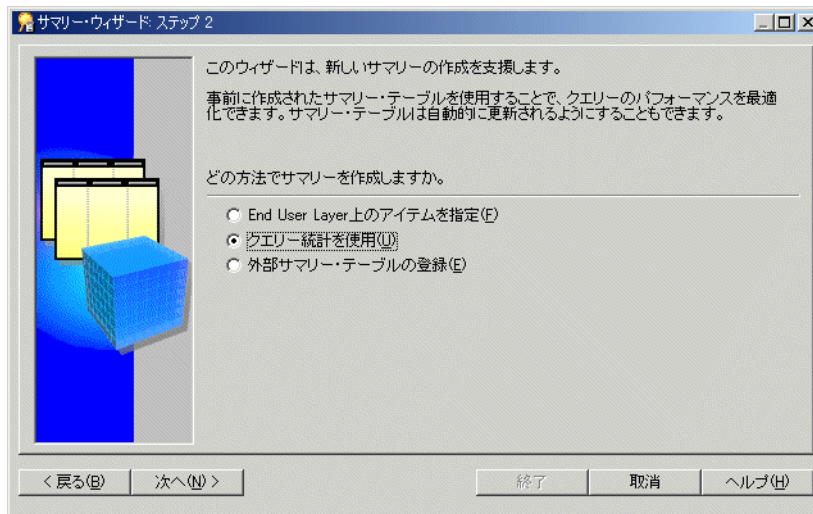
1. 「挿入」→「サマリー」を選択し、「サマリー・ウィザード:ステップ1」ダイアログを表示します。

図 15-9 「サマリー・ウィザード:ステップ1」ダイアログ



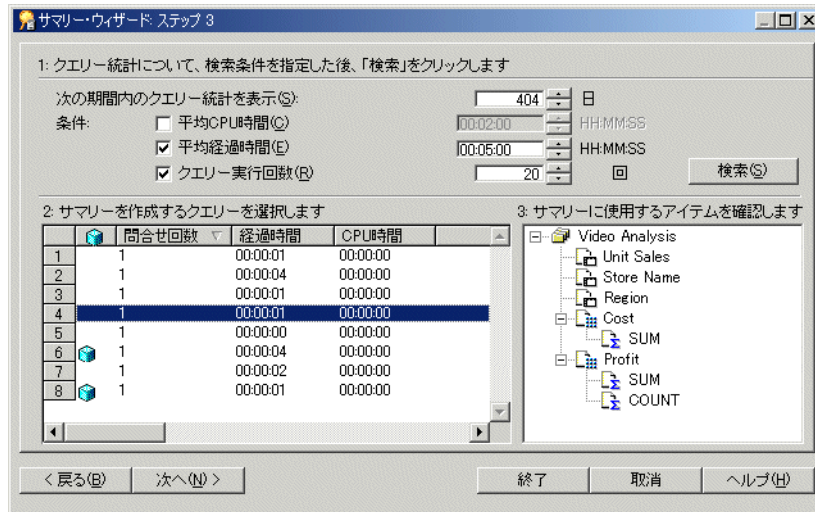
2. 「サマリーを個別に指定」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして「サマリー・ウィザード:ステップ2」ダイアログを表示します。

図 15-10 「サマリー・ウィザード:ステップ2」ダイアログ



3. 「クエリー統計を使用」オプションを選択します。
このオプションにより、サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューが作成されます。このオプションは、サマリー管理機能が有効な場合のみ使用できます。詳細は、「サマリー・フォルダのデータベースの構成方法」を参照してください。
4. 「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード:ステップ3」ダイアログを表示します。

図 15-11 「サマリー・ウィザード: ステップ3」 ダイアログ



「サマリー・ウィザード: ステップ3」 ダイアログは、次の3つのセクションに分かれています。

セクション番号	目的
セクション1	クエリー統計について、検索条件を指定した後、「検索」をクリックします。 このセクションにより、検索条件を指定し、クエリーのパフォーマンスの統計を取得できます。
セクション2	サマリーを作成するクエリーを選択します。 このセクションは、検索条件に一致するクエリーを表示します。
セクション3	サマリーに使用するアイテムを確認します。 このセクションは、選択されたクエリーのフォルダ、結合およびアイテムを表示します。

5. クエリーの検索に使用する前に実行した値をセクション1に指定します。

6. 「検索」をクリックします。

検索時間が長くなる場合、Discoverer は進行状況を示すバーを表示します。

セクション1のしきい値に一致するすべてのクエリーは、セクション2に表示されます。このリストをさらに絞り込んだり拡張するには、しきい値を再度指定します。

リストのクエリーが、すでにサマリーを作成されたアイテムを使用する場合は、クエリーの隣に形のアイコンが表示されます。

セクション2の列にあるアイテムの表示順序をソートするには、関連する列ヘッダーをクリックします。

7. サマリーを作成するクエリーを表す行をセクション2のリストから選択します。

クエリーのフォルダ、結合およびアイテムがセクション3に表示されます。

8. 「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード: ステップ4」ダイアログ (サマリー・フォルダへのアイテムの追加) を表示します。

図 15-12 「サマリー・ウィザード: ステップ 4」 ダイアログ



「サマリー・ウィザード: ステップ 4」ダイアログにより、サマリー・フォルダに含めるアイテムを選択できます。デフォルトでは、「**選択済アイテム**」リストに、サマリー・ウィザードの前のページで選択したクエリーからのアイテムが含まれています。

9. 新規サマリー・フォルダに含めるアイテムを「**選択可能なアイテム**」リストから「**選択済アイテム**」リストに移動します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

次のものを含めることを覚えておいてください。

- 各データ・ポイント・アイテムのすべての集計関数（詳細は、「[サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン](#)」を参照）
- 必要な場合、複合フォルダからのアイテム（詳細は、「[Discoverer によるクエリー・リライトの条件](#)」を参照）
- 必要な場合、導出ユーザー定義アイテム（詳細は、「[Discoverer によるクエリー・リライトの条件](#)」を参照）

注意: 任意のアイテムと関数を選択できます。ただし、異なるフォルダからのアイテムを選択する場合は、フォルダ間にすでに結合が存在する必要があります。

10. 「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ（アイテムの組合せの追加）を表示します。

図 15-13 「サマリー・ウィザード: ステップ 5」 ダイアログ

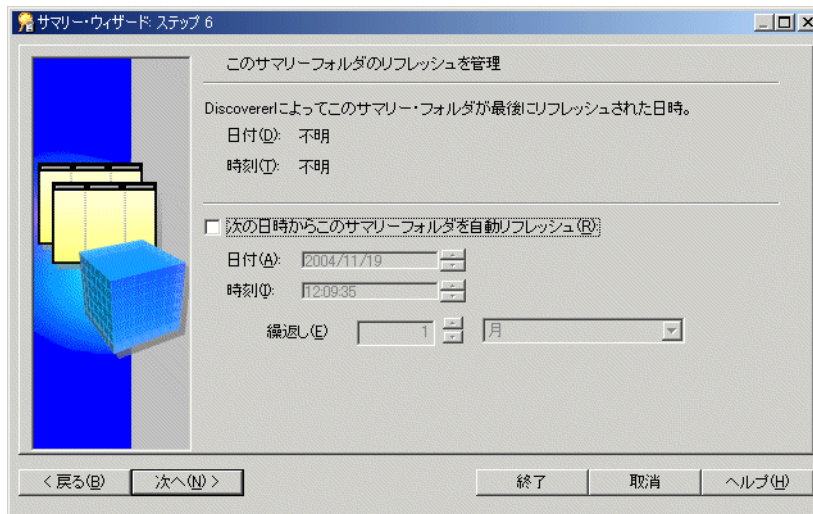


「サマリー・ウィザード: ステップ 5」 ダイアログにより、新規サマリー・フォルダでサマリー組合せを定義できます。

デフォルトでは、「サマリー・ウィザード: ステップ 4」で選択されたすべてのアイテムは最初のサマリー組合せ（列 0）に含まれます。

11. 「組合せの追加」をクリックし、新規サマリー組合せを追加します。
サマリー組合せは、新しい番号を付けられた列に表示されます。
12. 関連するチェックボックスを選択し、新規サマリー組合せにアイテムを含めます。
13. 必要なだけサマリー組合せを追加します。
詳細は、「[サマリー組合せ](#)」を参照してください。
14. 「見積り」をクリックし、指定したサマリー組合せを使用して得られるパフォーマンス向上に対して、サマリー組合せが占める表領域サイズの重要度が高いかどうかを判断できます。
15. 「OK」をクリックします。
注意: 「プロパティ」をクリックして、選択したサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを表示および編集できます。詳細は、「[サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法](#)」を参照してください。
ヒント: 不要なサマリー組合せを削除するには、関連する列番号を選択し、「組合せの削除」をクリックします。
16. 「次へ」をクリックし、「サマリー・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ（サマリー・フォルダのリフレッシュ）を表示して、サマリー・フォルダのリフレッシュ・スケジュールを指定します。

図 15-14 「サマリー・ウィザード: ステップ 6」 ダイアログ

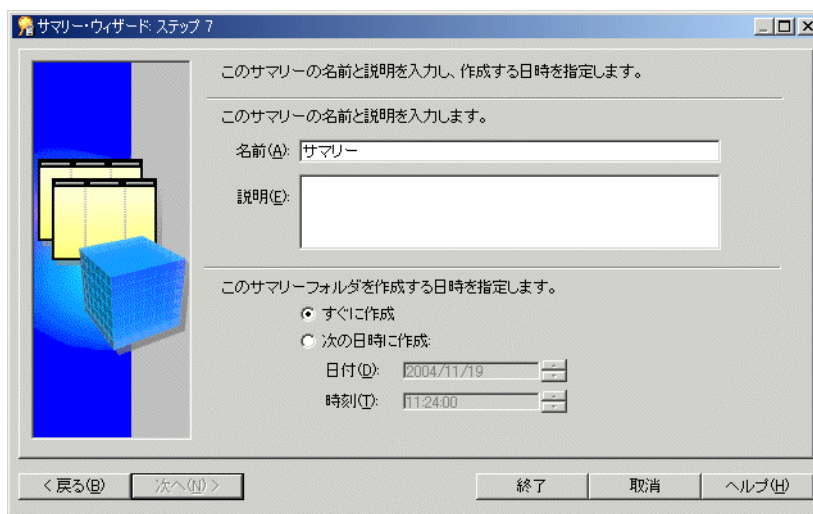


- 「次の日時からこのサマリー・フォルダを自動リフレッシュ」チェックボックスを選択し、このサマリーの自動リフレッシュの日付、時刻および頻度を指定します。

ヒント: データが静的で変化しない場合、またはサマリー・フォルダを手動でリフレッシュする場合は、このチェックボックスを選択しないでください。手動でサマリー・フォルダをリフレッシュする方法の詳細は、「サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法」を参照してください。

- Discoverer が最初のリフレッシュを開始する「日付」と「時刻」を設定します。
- 必要なリフレッシュ間隔を「繰返し」フィールドに設定します。
ここで指定するリフレッシュ間隔は、Discoverer がデータをリフレッシュおよび更新する間隔です。このパターンは、設定を変更するまで変わりません。
- 「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード: ステップ 7」ダイアログ (サマリー・フォルダの名前付け) を表示します。

図 15-15 「サマリー・ウィザード: ステップ 7」 ダイアログ



- サマリー・フォルダの名前と説明を指定します。
- このサマリー・フォルダをいつ作成するかを指定します。

23. 「終了」をクリックします。

Discoverer では、サマリー・フォルダの作成時に次のものが作成されます。

- サマリー・フォルダとサマリー・テーブル (Oracle Standard Edition データベースの場合)
- サマリー・フォルダとマテリアライズド・ビュー (Oracle Enterprise Edition データベースの場合)

作成プロセスでは、サマリー・データが生成され、サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに使用準備完了のマークが付けられます。

プロセスが完了すると、Discoverer はワークエリア: 「サマリー」 タブに新規サマリー・フォルダを表示します。

注意

Discoverer が提供するクエリー統計の収集用ビジネスエリアには、次のものを分析するワークブックが付属しています。

- クエリーの使用方法
- クエリーで最も頻繁に使用されるアイテム
- アイテムを含んでいるフォルダ
- クエリーの実行回数

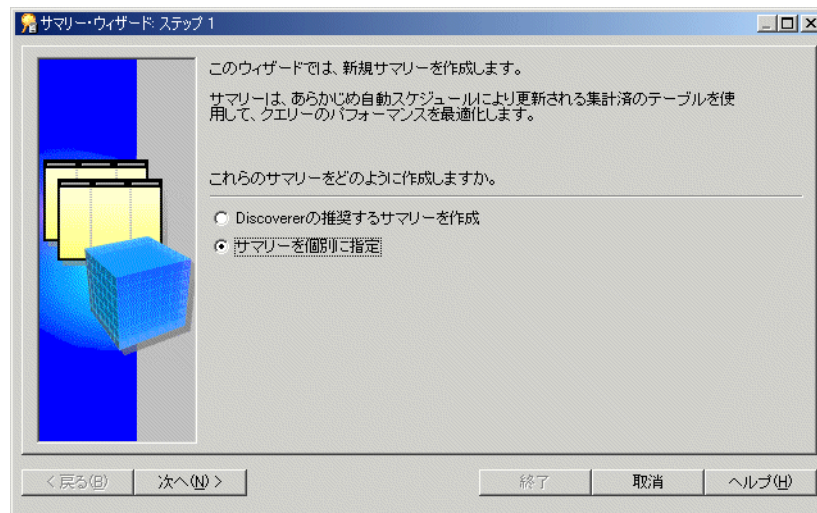
外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法

この項では、Discoverer 以外のアプリケーションにより作成されたサマリー・テーブルに基づいて新規サマリー・フォルダを作成する方法について説明します。Discoverer 以外のアプリケーションによって作成されたサマリー・テーブルを外部サマリー・テーブルといいます。この作業は、外部ビューに基づくサマリー・フォルダの作成にも適用されることに注意してください。

外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

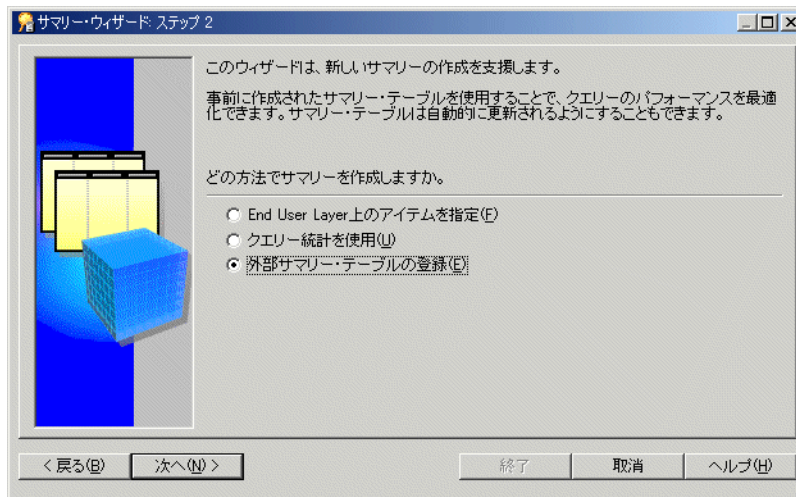
1. 「挿入」 → 「サマリー」 を選択し、「サマリー・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログを表示します。

図 15-16 「サマリー・ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



2. 「サマリーを個別に指定」 ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして「サマリー・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログを表示します。

図 15-17 「サマリー・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



3. 「外部サマリー・テーブルの登録」 ラジオ・ボタンを選択します。

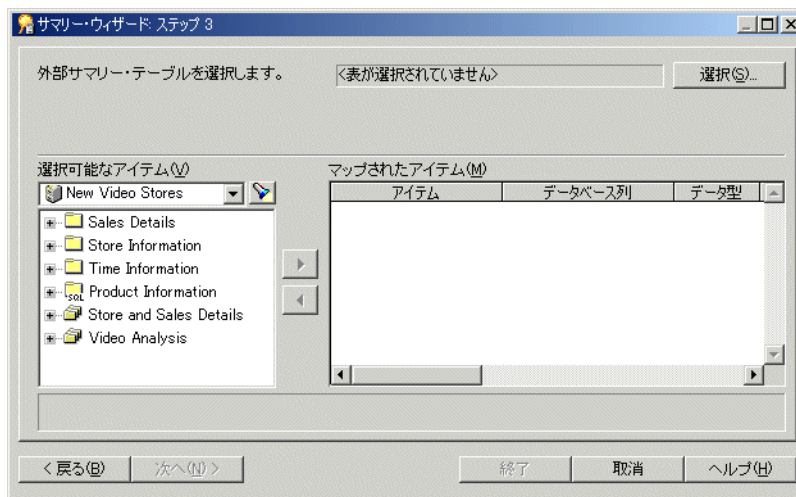
この作業が完了すると、外部アプリケーションによって作成されたサマリー・テーブルからマテリアライズド・ビューがデータベースによって作成されます。

Discoverer は、次の条件下でサマリー・テーブルの作成を続行することに注意してください。

- Oracle Standard Edition データベースに対して Discoverer を実行する場合。
詳細は、「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの相違点」を参照してください。
- Oracle Enterprise Edition データベースで、外部ビューを EUL アイテムにマップする場合。
詳細は、「Oracle Enterprise Edition データベースで EUL アイテムにマッピングする場合の外部サマリー・テーブルとビューとの相違点」を参照してください。

4. 「次へ」をクリックして、「サマリー・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログを表示します。

図 15-18 「サマリー・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



5. 「選択」をクリックし、「ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ」を表示します。

図 15-19 「テーブルまたはビューの選択」 ダイアログ

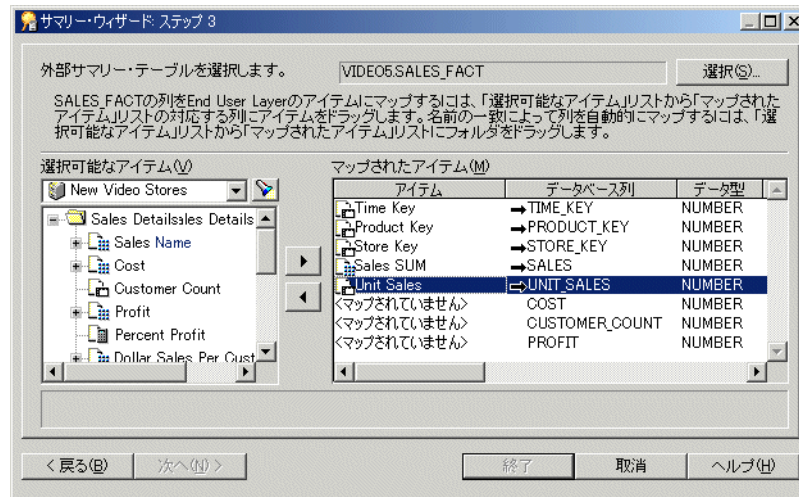


6. 登録する外部サマリー・テーブルを含むデータベースを（ドロップダウン・リストから）選択します。

注意: Oracle Enterprise Edition データベースに接続した場合、ユーザーはデータベース・リンクを経由して外部サマリーを登録できません。これは、データベース・リンクを経由してマテリアライズド・ビューが作成されるのをデータベースが許可しないからです。ただし、EUL が存在し、ビューの外部サマリーを参照しているデータベースにビューを作成することによって、マテリアライズド・ビューを作成できます。このビューは、Discoverer 内に外部サマリーとして登録できます。

7. Discoverer Administrator で登録する外部サマリー・テーブルを選択します。
8. 「OK」をクリックし、マップされたアイテム・リストの外部サマリー・テーブルで検索されたすべてのデータベース列を表示します。

図 15-20 「サマリー・ウィザード：ステップ 3」 ダイアログ



外部サマリー・テーブルの各データベース列を EUL の該当するアイテムにマップします。

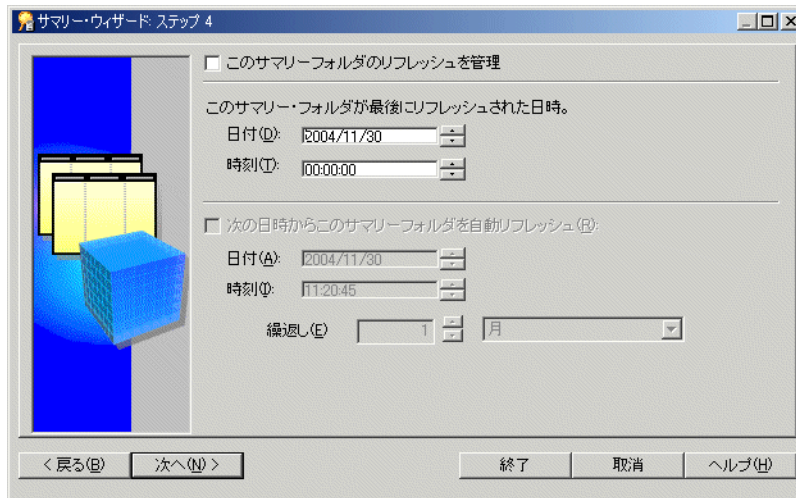
9. 各データベース列について、該当するアイテムを「選択可能なアイテム」リストから「マップされたアイテム」リストのデータベース列にドラッグします。

ヒント: 同じフォルダからの複数のアイテムが外部サマリー・テーブルの列に対応する場合、フォルダを「マップされたアイテム」リストのアイテムにドラッグ・アンド・ドロップできます。Discoverer Administrator は、アイテム名を使用して、正しいアイテムをデータベース列にマップします。Discoverer Administrator が対応するアイテムを識別できない列については、アイテムをマップする必要があります。

ヒント: 外部サマリー・テーブルのデータベース列と EUL のアイテムとの間のマッピングを削除するには、「マップされたアイテム」リストの該当する列を選択し、左矢印ボタンをクリックします。

- 「次へ」をクリックし、「サマリー・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ (サマリー・フォルダのリフレッシュ) を表示して、サマリー・フォルダのリフレッシュ・スケジュールを指定します。

図 15-21 「サマリー・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ

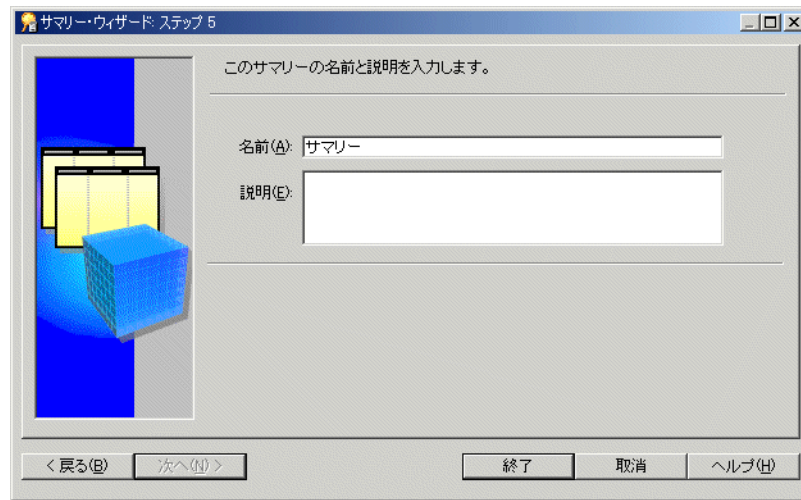


- Discoverer によってこの外部サマリー・テーブルのリフレッシュを管理する場合は、「このサマリー・フォルダのリフレッシュを管理」チェックボックスを選択します。
- 「次の日時からこのサマリー・フォルダを自動リフレッシュ」チェックボックスを選択し、このサマリーの自動リフレッシュの日付、時刻および頻度を指定します。

ヒント: データが静的で変化しない場合、またはサマリー・フォルダを手動でリフレッシュする場合は、このチェックボックスを選択しないでください。手動でサマリー・フォルダをリフレッシュする方法の詳細は、「サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法」を参照してください。

- Discoverer が最初のリフレッシュを開始する「日付」と「時刻」を設定します。
- 必要なリフレッシュ間隔を「繰返し」フィールドに設定します。
ここで指定するリフレッシュ間隔は、Discoverer がデータをリフレッシュおよび更新する間隔です。このパターンは、設定を変更するまで変わりません。
- 「次へ」をクリックし、「サマリー・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ (サマリー・フォルダの名前付け) を表示します。

図 15-22 「サマリー・ウィザード: ステップ 5」 ダイアログ



16. サマリー・フォルダの名前と説明を指定します。

17. 「終了」をクリックし、ビジネスエリアにサマリー・フォルダを作成して外部サマリー・テーブルを Discoverer で登録します。

プロセスが完了すると、Discoverer はワークエリア: 「サマリー」 タブに新規サマリー・フォルダを表示します。

注意

- サマリー組合せは、Discoverer がサマリー・フォルダのリフレッシュを管理する場合のみ使用できます。Discoverer が外部サマリー・テーブルを使用する場合、サマリー組合せは使用できません。
- Discoverer では「外部テーブルに対してサマリーを作成できません。サマリーはすでに存在しています。」というメッセージが表示される場合があります（詳細は、「[Oracle Enterprise Edition データベースで 1 つの外部サマリー・テーブルに対して 1 つのマテリアライズド・ビューのみ登録可能な理由](#)」を参照）。

サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法

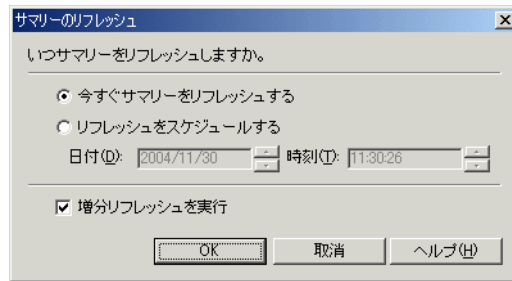
この項では、サマリー・フォルダをリフレッシュする方法について説明します。データベースが変更された場合は、サマリー・フォルダをリフレッシュする場合があります。

サマリー・フォルダを手動でリフレッシュする手順は、次のとおりです。

1. ワークエリア: 「サマリー」 タブで、リフレッシュするサマリー・フォルダを選択します。
2. 「ツール」 → 「サマリーのリフレッシュ」 を選択し、「サマリーのリフレッシュ」 ダイアログを表示します。

注意: Discoverer は、外部管理サマリー・フォルダについては「サマリーのリフレッシュ」ダイアログを表示しません。

図 15-23 「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ



3. 選択したサマリー・フォルダをいつリフレッシュするかを次のように指定します。
 - すぐにサマリー・フォルダをリフレッシュする場合は、「**今すぐサマリーをリフレッシュする**」ラジオ・ボタンを選択します。
 - 指定した時刻にサマリー・フォルダをリフレッシュする場合は、「**リフレッシュをスケジュールする**」ラジオ・ボタンを選択します。
4. 「**リフレッシュをスケジュールする**」を選択した場合は、リフレッシュを開始する日付と時刻を指定します。
5. 増分リフレッシュを実行するには、「**増分リフレッシュを実行**」チェックボックスを選択します。

前回のリフレッシュからデータベース・テーブルのディテール・データが少ししか変更されていない場合には、増分リフレッシュを実行できます。増分リフレッシュは、前回のリフレッシュからデータベースにコミットされた変更のみを更新するので、このリフレッシュを実行すると時間が節約されます。

増分リフレッシュに必要な条件の詳細は、『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

注意

- Discoverer 外の処理が完了したときに（データ・ウェアハウスにデータをロードするなど）、サマリー・フォルダをリフレッシュする場合があります。Discoverer のコマンドライン・インタフェース・オプションを使用して、バッチ・コマンド・ファイルからサマリー・フォルダをリフレッシュできます（詳細は「[/refresh_summary](#)」を参照）。

サマリー・フォルダ・リフレッシュの詳細は、次の項目を参照してください。

- [「Oracle Enterprise Edition データベースのリフレッシュ・オプション」](#)
- [「Oracle データベース間のインポート後のサマリー・フォルダのリフレッシュ」](#)

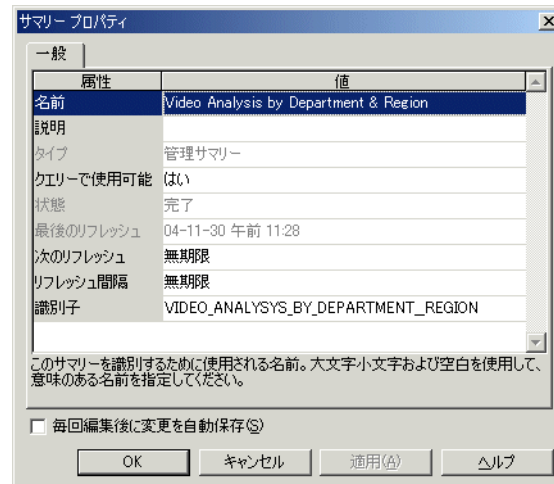
サマリー・フォルダのプロパティの編集方法

この項では、サマリー・フォルダのプロパティの編集方法について説明します。

サマリー・フォルダのプロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア**: 「サマリー」タブで、1つ以上のサマリー・フォルダを選択します。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択すると、「サマリー・プロパティ」ダイアログが表示されます。

図 15-24 「サマリー・プロパティ」ダイアログ



ヒント: 同時に複数のサマリー・フォルダを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のサマリー・フォルダをクリックします。選択したすべてのフォルダが特定のプロパティに同じ値を持つ場合は、その値が表示されます。選択したフォルダが特定のプロパティに異なる値を持つ場合、そのプロパティの値は表示されません。ここで加えた変更は、選択したすべてのサマリー・フォルダに適用されます。

3. 必要な変更を行います。
4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

サマリー・フォルダの編集方法

サマリー・フォルダを変更して、次の操作を行う場合があります。

- サマリー・フォルダの名前または説明の変更
- サマリー・フォルダのプロパティの表示または変更
- サマリー・フォルダのリフレッシュ
- サマリー・フォルダの構成内容の変更（アイテムまたは組合せなど）
- データベース記憶域プロパティの表示または変更
- 破損したサマリー・フォルダの構成内容の調査と破損したフォルダの削除

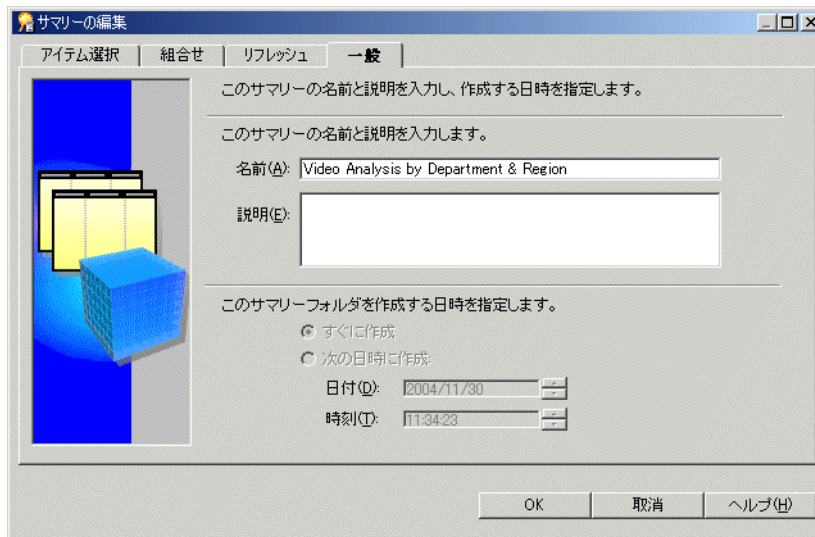
注意

- サマリー・フォルダは、有効であるかまたは破損しているかにかかわらず変更できます。

サマリー・フォルダを編集する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア:** 「サマリー」タブを表示します。
2. ビジネスエリアの隣のプラス記号 (+) を選択し、使用可能なサマリー・フォルダを表示します。
3. (オプション) 「表示」 → サマリーの検証を選択し、必要に応じて診断サマリー・フォルダ情報を表示します。
4. サマリー・フォルダをクリックし、「編集」 → 「編集」を選択します。

図 15-25 「サマリーの編集」ダイアログ：「一般」タブ



5. 必要に応じてサマリー・フォルダを編集します。

「サマリーの編集」ダイアログには、4つのタブがあります。各タブは、サマリー・ウィザードのステップに次のように対応しています。

- 「サマリーの編集」ダイアログ：「アイテム選択」タブ — このタブを使用して、サマリー・フォルダのアイテムを指定します。
- 「サマリーの編集」ダイアログ：「組合せ」タブ — このタブを使用して、サマリー組合せを編集、追加または削除します。このタブを使用して、マテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブル（データベースのリリースに応じて異なります）のデータベース記憶域プロパティを表示および構成することも可能です。

注意：「組合せ」タブは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには表示されません。

- 「サマリーの編集」ダイアログ：「リフレッシュ」タブ — このタブを使用して、サマリー・フォルダのリフレッシュとリフレッシュ間隔を設定します。
- 「サマリーの編集」ダイアログ：「一般」タブ — このタブを使用してサマリー・フォルダの名前と説明を編集し、サマリー・フォルダの作成時刻を表示します。

6. 「OK」をクリックします。

注意

- サマリー・フォルダが破損している場合は、「表示」→サマリーの検証を選択し、サマリー・フォルダ内のフォルダのステータスを表示できます。Discoverer がサマリー・フォルダ内のフォルダで問題を検出した場合は、フォルダの隣にエラー・メッセージが表示されます。
- 編集してもサマリー・フォルダが破損したままである場合は、Discoverer での変更はマテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルに書き込まれません。サマリー・フォルダが編集後に有効になった場合は、Discoverer での変更がマテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルにも書き込まれます。

サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法

Discoverer Administrator を使用してデータベース記憶域プロパティを編集し、サマリー組合せがデータベースに格納される方法を制御できます。

注意: データベース記憶域プロパティは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには使用できません。詳細は、「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの相違点」を参照してください。

サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア:** 「サマリー」タブからサマリー・フォルダを選択します。
2. 「編集」 → 「編集」を選択し、「サマリーの編集」ダイアログを表示します。
3. 「サマリーの編集」ダイアログ: 「組合せ」タブを表示します。
4. 編集するデータベース記憶域プロパティを含むサマリー組合せを選択します。
5. 「プロパティ」をクリックし、「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログを表示します（詳細は、「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト」を参照）。
6. 該当するタブを表示して、必要に応じてプロパティを編集します。

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログのタブの詳細は、次を参照してください。

- 「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マテリアライズド・ビュー」タブ
- 「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブ
- 「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブ
- 「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「表領域」タブ

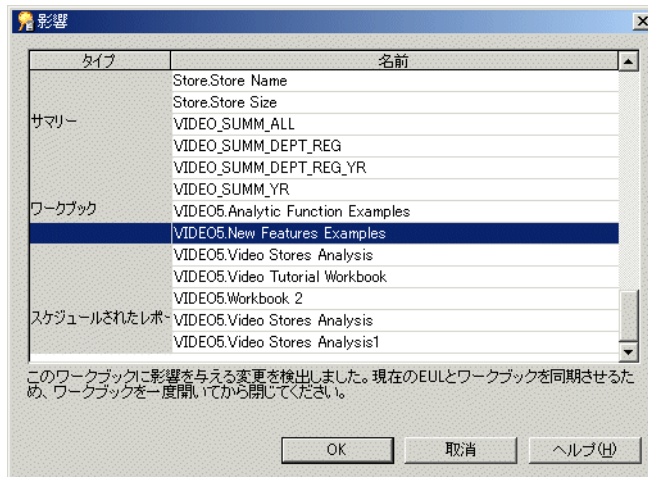
サマリー・フォルダの削除方法

この項では、サマリー・フォルダを削除する編集方法について説明します。サマリー・フォルダを削除する場合は、基礎となるサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューも削除されます。

サマリー・フォルダを削除する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア:** 「サマリー」タブから、削除するサマリー・フォルダを選択します。
ヒント: 同時に複数のサマリー・フォルダを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のサマリー・フォルダをクリックします。
2. 「編集」 → 「削除」を選択して、「削除の確認」ダイアログを表示します。
このサマリー・フォルダの削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認できます。
3. (オプション) 削除の潜在的な影響を表示する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。

図 15-26 「影響」 ダイアログ



「影響」ダイアログでは、サマリー・フォルダの削除による影響を受ける可能性のある他の EUL オブジェクトを確認できます。

注意: 「影響」ダイアログには、ファイル・システム (.dis ファイル内) に保存されたワークブックに対する影響は表示されません。

- b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが、リストの一番下に表示されます。
 - c. サマリー・フォルダの削除による影響を確認し終えたら、「閉じる」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
4. 選択したサマリー・フォルダを削除する場合は、「はい」をクリックします。

Discoverer Administrator は、選択したサマリー・フォルダを EUL から削除し、サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューをデータベースから削除します。

サマリー・フォルダのサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法

この項では、サマリー・フォルダのサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法について説明します。

サマリー・フォルダのサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する手順は、次のとおりです。

1. **ワークエリア:** 「サマリー」タブから、必要なサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューを含むサマリー・フォルダを選択します。
2. 「編集」 → 「編集」を選択し、「サマリーの編集」ダイアログを表示します。
3. 「サマリーの編集」ダイアログ: 「組合せ」タブを表示します。
4. 必要なサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに該当する、サマリー組合せの番号付き列ヘッダーを選択します。

ダイアログ下部のステータス・バーに、サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューのステータスが表示されます。

5. サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューのステータスの表示 (サマリー組合せにより表示) を完了した時点で、「OK」をクリックし、「サマリーの編集」ダイアログを閉じます。

注意

- このステータスは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには使用できません。
- [ワークエリア: 「サマリー」タブ](#)で他の診断情報を確認するには、「表示」→「フォルダの妥当性チェック」オプションを選択します。このオプションにより、サマリー・フォルダ内に存在するエラーが表示されます。

フォルダとサマリー・ステータス・メッセージの確認の詳細は次を参照してください。

- [「サマリー・プロパティ」ダイアログ](#)
- [「ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法」](#)

サマリー・フォルダに関する追加情報

この章では、Discoverer のサマリー・フォルダに関する追加情報について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Discoverer でのサマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来」
- 「クエリー・リライト」
- 「Discoverer によるクエリー・リライトの条件」
- 「Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示」
- 「Discoverer で「SQL インспекタ」ダイアログに SQL を表示する方法の構成」
- 「(Discoverer で) マテリアライズド・ビューを使用 / 使用しない実行計画の例」
- 「Discoverer がクエリー・リライトする場合の SQL の例」
- 「クエリー・リライトしてサマリー・テーブルを使用する場合の利点を示す例」
- 「Oracle Standard Edition データベースと Oracle Enterprise Edition データベースのサマリー・フォルダの特性の相違点」
- 「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの相違点」
- 「Oracle Enterprise Edition データベースで EUL アイテムにマッピングする場合の外部サマリー・テーブルとビューとの相違点」
- 「Oracle Enterprise Edition データベースで 1 つの外部サマリー・テーブルに対して 1 つのマテリアライズド・ビューのみ登録可能な理由」
- 「Oracle Enterprise Edition データベースのリフレッシュ・オプション」
- 「Oracle データベース間のインポート後のサマリー・フォルダのリフレッシュ」

Discoverer でのサマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来

Discoverer では、クエリー・リライトし、サマリー・テーブルを使用する概念が考案されました。オラクル社は、サマリー・テーブルを作成し、SQL に自動的にリライトさせるアイデアの特許を獲得しました。

この機能がすべてのデータベース・ユーザーに便利であることが明確になったため、Oracle ではこの機能をデータベースに取り入れました。Discoverer では、可能な場合は必ずマテリアライズド・ビューとクエリー・リライトを使用します。そうでない場合でも、Discoverer のサマリー・テーブルに対する従来のクエリー・リライトもサポートしています。

長期的な方向としては、サーバーのクエリー・リライト機能を使用して作業し、徐々に Discoverer 固有の機能をなくしていきます。

クエリー・リライト

Discoverer は次のデータベース条件下でクエリー・リライトを使用します。

- Oracle Enterprise Edition データベースでは、Discoverer はデータベースにクエリーを送信し、データベースはディテール・データ・テーブルにアクセスすることなく、そのクエリーに適したマテリアライズド・ビューの存在の有無を判定します。存在する場合、データベースはクエリー・リライトして、マテリアライズド・ビューを使用します。
- Oracle Standard Edition データベース Discoverer はクエリー・リライトして、ディテール・データベース・テーブルにアクセスすることなく、適切なサマリー・テーブルを使用します。

Oracle Enterprise Edition データベースでビューを EUL のアイテムにマッピングする場合、Discoverer はクエリー・リライトして適切なサマリー・テーブルを使用します。

クエリー・リライトは、Discoverer エンド・ユーザーにとって透過的であり、ディテール・テーブルに対して実行するクエリーと同じ結果を提供しますが、それよりも大幅に短い時間で結果を返します。

注意: クエリー・リライトを使用する前に、Discoverer Plus でサマリー・フォルダを使用するオプションを設定する必要があります（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照）。

Oracle Enterprise Edition データベースのリライト・シナリオに関するルールの詳細は『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

Discoverer によるクエリー・リライトの条件

Discoverer は、次のすべての条件を満たす場合、クエリー・リライトして、ディテール・データではなくサマリー・テーブルを使用します。

- クエリーで指定されたすべてのアイテムが次のいずれかである場合。
 - 単一のサマリー組合せの中に存在する場合
詳細は、「[サマリー組合せ](#)」を参照してください。
 - サマリー組合せに存在する外部キーを介してサマリー・テーブルに結合できる場合
- 導出ユーザー定義アイテムが使用される場合は、サマリー組合せに含める必要があります。
 - 導出ユーザー定義アイテム
 - 導出ユーザー定義アイテムの作成に使用されるコンポーネント
導出ユーザー定義アイテムの詳細は、「[導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照してください。
- 複合フォルダからのアイテムの場合、アイテムの同じ組合せを使用して、ソース（単一）フォルダから別のサマリー・フォルダを作成します。

複合フォルダの詳細は、「[複合フォルダ](#)」を参照してください。

- クエリーで指定された結合パスは、クエリーを満足するサマリー組合せで指定された結合パスと一致する必要があります。これにより、サマリー結果セットのデータはディテール・データ・テーブルのデータと一致します。

ただし、「[結合の編集](#)」ダイアログ:「[オプション](#)」タブの「[ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在](#)」ラジオ・ボタンを選択していれば、サマリー・テーブルで指定されているよりも少ない結合を使用してクエリーを定義できます。

- サマリー・フォルダは、「[クエリーで使用可能](#)」プロパティを「はい」に設定する必要があります。

サマリー・フォルダのプロパティの詳細は、「[サマリー・フォルダのプロパティの編集方法](#)」を参照してください。

- Discoverer Plus の「[オプション](#)」ダイアログの「[クエリー管理](#)」タブで指定された条件が満たされる必要があります。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- クエリーを実行している Discoverer エンド・ユーザーは、サマリー・テーブルへのデータベース SELECT アクセス権が必要です。

サマリー・フォルダの作成に必要な権限の詳細は、「[Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件](#)」を参照してください。

Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示

Discoverer Plus で「SQL インспекタ」ダイアログを使用して、データベース・サーバーに送信される SQL と、データベース・サーバーがクエリーから結果データを返すための実行計画を表示します。「SQL インспекタ」ダイアログには SQL が表示されます。マテリアライズド・ビューの名前または使用されたサマリー・テーブルが含まれています。「SQL インспекタ」ダイアログの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Discoverer で「SQL インспекタ」ダイアログに SQL を表示する方法の構成

Oracle Business Intelligence Discoverer Plus および Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop では、Discoverer によって生成された SQL をエンド・ユーザーが確認してワークシートを作成できます。「SQL インспекタ」に表示される SQL は、RDBMS に送信されるものと同一とは限りません。

Discoverer は、常にインライン・ビューを含む SQL を RDBMS に送信します。エンド・ユーザーがインライン・ビューを読むのは困難なため、Discoverer を構成して容易に読めるように SQL を再フォーマットできます。再フォーマットされた SQL は、「フラット化」された SQL とも呼ばれます。

Discoverer で SQL を表示する方法を構成するには、SQLType レジストリ設定を編集します(詳細は、[第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」](#) および「[Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法](#)」を参照)。

インライン・ビューを含む SQL が RDBMS に渡されても、データベース内ですべて実行されるわけではありません。RDBMS オプティマイザは、インライン・ビューのすべての列から SQL を分離します。データベースから返される列は、外部の SELECT 文にある列のみです。たとえば、次の SQL 文を考えてみます。

```
select dname from
```

```
(select dname, deptno, manager_id, manager_name, location, address,
phone, zip from departments)
```

RDBMS オプティマイザは、この SQL 文を次のように変換します。

```
select dname from departments
```

この SQL 文では、Discoverer に返される列は dname 列のみです。

データベースで実行される SQL を確認するには、Discoverer Plus または Discoverer Desktop の「SQL インスペクタ」ダイアログでフラット化された SQL を参照します。

(Discoverer で) マテリアライズド・ビューを使用 / 使用しない実行計画の例

Discoverer Plus で「SQL インスペクタ」ダイアログを呼び出して、クエリーがクエリー・リライトの対象かどうかを指定できます。次の表は、適切なマテリアライズド・ビューが存在しないクエリーで使用されるときに、サーバーの実行計画がどのように表示されるかを示しています。この例で、サーバーは3つの VIDEO5 データ・テーブルの全テーブル検索を完了して、結果セットを返しています。

Discoverer の「SQL インスペクタ」ダイアログの「プラン」タブに表示される SQL 文

```
SELECT STATEMENT  
SORT GROUP BY  
TABLE ACCESS FULL VIDEO5.Sales  
TABLE ACCESS FULL VIDEO5.Product  
TABLE ACCESS FULL VIDEO5.Time
```

次の表は、適切なマテリアライズド・ビューが存在するクエリーで使用されるときに、サーバーの実行計画がどのように表示されるかを示しています。この例で、サーバーはマテリアライズド・ビューを使用して結果セットを返しています。

Discoverer の「SQL インスペクタ」ダイアログの「プラン」タブに表示される実行計画

```
SELECT STATEMENT  
SORT GROUP BY  
TABLE ACCESS FULL NICK.EUL5_MV101510
```

前述のテーブルの SQL 文は、サーバーがどのようにクエリー・リライトし、適切なマテリアライズド・ビューを使用するかを示しています。

マテリアライズド・ビューは、テーブル名 EUL5_MV{ 識別子 } により実行計画の中で識別されます。

Discoverer がクエリー・リライトする場合の SQL の例

Oracle Standard Edition データベースに対して Discoverer を実行する場合、Discoverer はクエリー・リライトを制御して適切なサマリー・テーブルを使用します。Discoverer は、データベースに送信された SQL 文を「SQL インスペクタ」ダイアログの「SQL」タブに表示します。

次の表に、Video Analysis フォルダからのアイテムを使用している Discoverer ワークシートに使用された SQL 文を示します (詳細は、第 27 章「Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブック」を参照)。SQL 文は、サマリー・テーブル「EUL5_SUM100750」が参照されていることを示しています。

Discoverer Plus の「SQL インспекタ」ダイアログの「SQL」タブに表示される SQL 文

```
SELECT EUL5_SUM100750,"Department", EUL5_SUM100750, "Region", EUL5_
SUM100750,"Calendar Date Year", SUM(EUL5_SUM100750,"Profit SUM")
FROM ADMIN_TUTORNF806.EUL5_SUM100750 EUL5_SUM100750
GROUP BY EUL5_SUM100750."Department", EUL5_SUM100750."Region", EUL5_
SUM100750."Calendar Date Year";
```

Discoverer は、最も適切なサマリー・テーブルを自動選択してクエリーを効率的に処理します。このアクションは、Discoverer エンド・ユーザーにとって完全に透過的です。

次の表は、エンド・ユーザーが年から月までをドリルダウンしたことを除き、前述と同じ Discoverer ワークシートの SQL 文を示しています。

SQL 文は、Discoverer がサマリー・テーブル EUL5_SUM100750（前述と同じ）に対するクエリーの最初の部分をリライトしたことを示しています。ただし、サマリー・テーブル「EUL5_SUM100774」に対するクエリーの 2 番目の部分（ドリルダウン）をリライトしました。

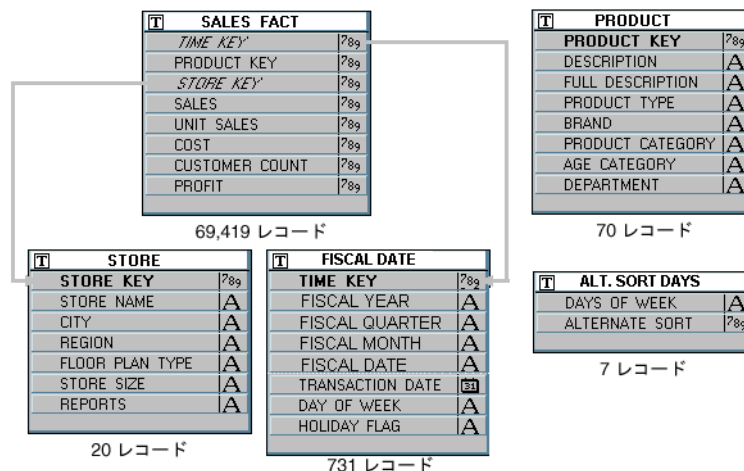
Discoverer Plus の「SQL インспекタ」ダイアログの「SQL」タブにドリルダウンに続いて表示される SQL 文

```
SELECT EUL5_SUM100750,"Department", EUL5_SUM100750, "Region", EUL5_
SUM100750,"Calendar Date Year", SUM(EUL5_SUM100750,"Profit SUM")
FROM ADMIN_TUTORNF806.EUL5_SUM100750 EUL5_SUM100750
GROUP BY EUL5_SUM100750."Department", EUL5_SUM100750."Region", EUL5_
SUM100750."Calendar Date Year";
SELECT EUL5_SUM100774,"Department", EUL5_SUM100774, "Region", EUL5_
SUM100774,"Calendar Date Month", EUL5_SUM100774,"Calendar Date Year",
SUM(EUL5_SUM100774,"Profit SUM")
FROM ADMIN_TUTORNF806.EUL5_SUM100774 EUL5_SUM100774
WHERE (EUL5_SUM100774."Calendar Date Year" = TO_
DATE('200001011000000', 'YYYYMMDDHH24MISS'))
GROUP BY EUL5_SUM100774."Department", EUL5_SUM100774."Region", EUL5_
SUM100774,"Calendar Date Month", EUL5_SUM100774."Calendar Date Year";
```

クエリー・リライトしてサマリー・テーブルを使用する場合の利点を示す例

この例は 5 つのテーブルから成り立っていて、その 1 つには約 70,000 のレコードがあります（詳細は次の図を参照）。スキーマとデータはチュートリアル・データから取得されます。

図 16-1 スキーマとデータの例



次のアイテムを必要とするクエリーを考えてみます。

- 地域 - (「STORE」テーブルから)
- 部門 - (「PRODUCT」テーブルから)
- 年度 - (「FISCAL DATE」テーブルから)
- 合計値 (Dollar_Profit) - (「SALES FACT」テーブルから)

これには、4つのテーブルの結合と、「SALES_FACT」(約70,000の行を持つテーブル)にある一致するすべての行の集計が必要です。サーバーの能力に応じて、クエリーの結果の生成に数分かかることもあります。

一方、クエリーが、地域、部門、年度、合計値(利益)のデータをすでに含んでいる1つのテーブルを使用するようにリライトされると(サンプル・サマリー・テーブルの図を参照)、クエリーは瞬時にレスポンスを生成します。

図 16-2 サンプル・サマリー・テーブル

EUL5_SUM100801	
DEPARTMENT	A
REGION	A
YEAR	Q1
QUARTER	Q1
MONTH	Q1
COUNT SALES	?89
COUNT COST	?89
COUNT PROFIT	?89
COUNT UNIT SALES	?89
SUM SALES	?89
SUM COST	?89
SUM PROFIT	?89
SUM UNIT SALES	?89

前述のサンプル・サマリー・テーブルには、月レベルのクエリーで必要とされる情報が格納され、年レベルに集合化する必要があります。したがって、Discovererは4つのテーブルの結合から集合化するのではなく、また全テーブル検索を実行することなく、1つのテーブルを使用します。

Oracle Standard Edition データベースと Oracle Enterprise Edition データベースのサマリー・フォルダの特性の相違点

次の表に、異なるリリースのデータベースを使用している場合のサマリー・フォルダの特長の違いと比較を示します。

サマリー・フォルダの詳細は、「Discovererのフォルダとサマリー・フォルダ」および第15章「手動によるサマリー・フォルダの作成」を参照してください。次の表に、Oracle Standard Edition データベースと Oracle Enterprise Edition データベースのサマリー・フォルダの比較を示します。

質問	Oracle Standard Edition データベース	Oracle Enterprise Edition データベース
サマリー・フォルダはどのようにデータベースに格納されますか。	サマリー・テーブルとして格納。	マテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルとして格納。
サマリー・フォルダはどのようにリフレッシュされますか。	完全リフレッシュのみ。	完全リフレッシュまたは増分リフレッシュ。
どのような種類のリフレッシュが利用できますか。	リフレッシュはオンデマンドのみ。	リフレッシュはオンデマンドまたはコミット時に可能。

質問	Oracle Standard Edition データベース	Oracle Enterprise Edition データベース
リフレッシュはどのように実行されますか。	Discoverer がリフレッシュを実行。	サーバーがリフレッシュを実行。
サマリーのリライトを実行するのは何ですか。	Discoverer がサマリーのリライトを実行。	サーバーがクエリー・リライトを実行。
サマリー・フォルダを定義する用語は何ですか。	サマリー・フォルダはアイテムとフォルダで定義されます。	サマリー・フォルダはテーブルと列で定義されます。
他のアプリケーションはこれらを利用できますか。	いいえ、Discoverer のみです。	はい、他のアプリケーションもマテリアライズド・ビューを利用できます。

注意

- マテリアライズド・ビューはサーバーに格納されるので、他のクライアント・アプリケーションはマテリアライズド・ビューをリフレッシュに利用できます。たとえば、Discoverer を使用しているときに作成されたマテリアライズド・ビューは、提供された DBMS_MVIEW パッケージを使用し、SQL*Plus を通じてリフレッシュできます。

外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの相違点

Discoverer は、次に基づいてサマリー・フォルダを作成します。

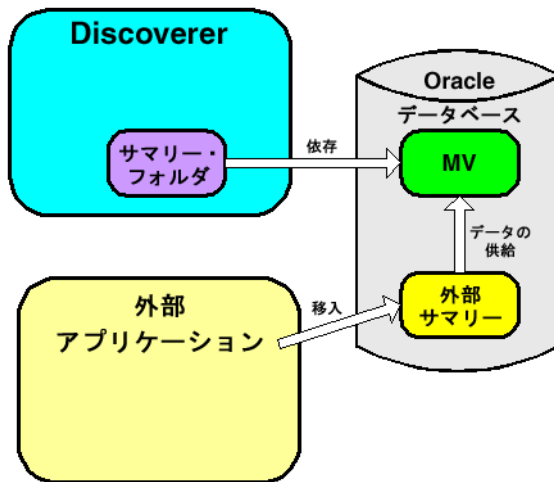
- Discoverer のサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビュー
- 外部サマリー・テーブル

Discoverer のサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダと外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダとの主な相違点を次に示します。

質問	Discoverer のサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダ	外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダ
どのように作成され、メンテナンスされますか。	Discoverer Administrator または Oracle Enterprise Edition データベースにより自動的に作成されます。	別のアプリケーション (SQL*Plus など) を使用。
どのように作成されますか。	Discoverer Administrator を使用。	別のアプリケーションを使用。
どのようにリフレッシュされますか。	自動的に一定間隔でリフレッシュされます (Discoverer Administrator のサマリー画面で定義)。	別のアプリケーションを使用。

次の図は、Discoverer がマテリアライズド・ビューに基づいたサマリー・フォルダをどのように作成するかを示しています。マテリアライズド・ビューは外部サマリーからのデータを使用して提供されます。外部サマリーは外部アプリケーションによって作成されます。

図 16-3 外部サマリーを使用する Discoverer



Discoverer Administrator を使用してサマリーを作成する場合、次のいずれかの方法でサマリーをリフレッシュします。

- Discoverer により — 「サマリーの編集」ダイアログ: 「リフレッシュ」タブの「このサマリー・フォルダのリフレッシュを管理」チェックボックスが選択されています。
- 外部アプリケーションにより — 「サマリーの編集」ダイアログ: 「リフレッシュ」タブの「このサマリー・フォルダのリフレッシュを管理」チェックボックスの選択が解除されています。

外部サマリー・テーブルは次の場合に役立ちます。

- 他のいくつかの方法で作成されたサマリー・テーブルを持つウェアハウス・アプリケーションで作業をしていて、これらを外部からメンテナンスする場合。

Oracle Enterprise Edition データベースで EUL アイテムにマッピングする場合の外部サマリー・テーブルとビューとの相違点

Oracle Enterprise Edition データベースで、外部サマリー・テーブルまたはビューを EUL アイテムにマッピングして、Discoverer Administrator にサマリー・フォルダを作成できます。ただし、ビューを EUL アイテムにマッピングする場合、マテリアライズド・ビューは作成されません。この制限は Oracle Enterprise Edition データベースに適用されます。マテリアライズド・ビューが作成されない場合は、かわりに Discoverer サマリー・テーブルが使用されます。クエリー・リライトの詳細は、「クエリー・リライト」を参照してください。

Oracle Enterprise Edition データベースで EUL アイテムにマッピングする場合の外部サマリー・テーブルとビューとの相違点を次の表に示します。

テーブルのマッピング	ビューのマッピング
外部サマリー・テーブルを EUL アイテムにマッピングする場合、マテリアライズド・ビューの定義が作成されます。 この場合、マテリアライズド・ビューの定義は Oracle Enterprise Edition データベースのクエリー・リライトに使用されます。	外部ビューを EUL アイテムにマッピングする場合、マテリアライズド・ビューは作成されません。 この場合、サマリー・フォルダは Oracle Standard Edition データベースと同じ方法で動作します。つまり、Discoverer はクエリー・リライトして、Discoverer サマリー・テーブルを使用します。

Oracle Enterprise Edition データベースで1つの外部サマリー・テーブルに対して1つのマテリアライズド・ビューのみ登録可能な理由

Discoverer Administrator に外部サマリー・テーブルを登録すると、データベースに1つのマテリアライズド・ビューが作成されます（詳細は、「[外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)」を参照）。マテリアライズド・ビューの名前は、常に外部サマリー・テーブルの名前と同一になります。Create Materialized View DDL コマンドのこの制限によって（Database サーバー内）、1つのテーブルに対して登録可能なのは1つのマテリアライズド・ビューのみになります。同じテーブルに対して複数の外部サマリー・フォルダを登録しようとすると、この制限を示すエラー・メッセージが表示されます。

1つのサマリー・テーブルに対して複数の外部サマリー・フォルダを登録するには、サマリー・テーブル以外にデータベース・ビューを作成し、Discoverer Administrator 内でそのデータベース・ビューを外部サマリーとして登録します。この場合、マテリアライズド・ビューはデータベース内で作成されず、かわりに Discoverer のサマリー管理またはクエリー・リライトのメカニズムが使用されます（詳細は、「[クエリー・リライト](#)」を参照）。データベース・ビューの作成方法の詳細は、データベース管理者に問い合わせてください。

Oracle Enterprise Edition データベースのリフレッシュ・オプション

Oracle Enterprise Edition データベースは、大規模なデータ・ウェアハウスまたはデータベースでの作業を可能にする増分リフレッシュをサポートします（使用可能な場合）。リフレッシュ操作では並列性（詳細は次を参照）もサポートされています。

増分リフレッシュに必要な条件の詳細は、『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

Oracle データベース間のインポート後のサマリー・フォルダのリフレッシュ

Oracle Standard Edition データベースから Oracle Enterprise Edition データベースへのエクスポート

Oracle Standard Edition データベースからサマリー・フォルダを使用してビジネスエリアをエクスポートし、Oracle Enterprise Edition データベースにインポートする場合、これらのサマリー・フォルダに対してマテリアライズド・ビューを作成する必要があります。マテリアライズド・ビューを作成するデータベース・サーバーでは、Discoverer でサマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。

Oracle Enterprise Edition データベースから Oracle Standard Edition データベースへのエクスポート

Oracle Enterprise Edition データベースからサマリー・フォルダを使用してビジネスエリアをエクスポートし、Oracle Standard Edition データベースにインポートする場合、Discoverer ではサマリー・フォルダに基づいてサマリー・テーブルを作成する必要があります。Discoverer でサマリー・テーブルを作成するには、サマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。

Discoverer を Oracle Applications とともに 使用方法

この章では、Oracle Applications セキュリティを使用して Oracle Applications データベースへのアクセスを Discoverer がサポートする方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Oracle Applications」
- 「Oracle Applications の職責」
- 「Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能」
- 「Oracle Applications とともに Discoverer を使用するための前提条件」
- 「Discoverer を Oracle Applications モードで実行する場合の相違点」
- 「Oracle Applications ユーザー用に「接続」ダイアログを設定する方法」
- 「Oracle Applications EUL の作成方法」
- 「Oracle Applications EUL をメンテナンスするユーザー」
- 「Oracle Applications ユーザーが Oracle Applications EUL をメンテナンスできるようにする方法」
- 「パブリック・ユーザーを介してすべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する方法」
- 「ビジネスエリアにアクセスできる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法」
- 「Oracle Applications のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定する方法」
- 「Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法」
- 「特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法」
- 「Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責をワークブックに表示する方法」

Oracle Applications

Oracle Applications は、Oracle の統合 ERP およびカスタマ・リレーションシップ・マネジメント (CRM) のソリューションです。Oracle Applications を使用すれば、企業は中央から世界的な運用の実行と管理を行うことができます。詳細は、<http://www.oracle.co.jp/> を参照してください。

Oracle Applications の職責

Oracle Applications の職責は、データベースのロールに似ています。職責とは、権限を割り当てて多くのユーザーに適用することを抽象化したものです。Oracle Applications の職責は、Oracle Applications ユーザーの機能アクセスおよびデータ・アクセスの制御に使用されます。

Oracle Applications ユーザーは Oracle Applications データベースに接続し、Oracle Applications の単一の職責を選択します。Oracle Applications の各職責は、関連付けられた権限セットを持つことができます。

すなわち、Oracle Applications ユーザーは、デフォルトで、選択した職責に付与された作業権限を行います (詳細は、「[特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法](#)」を参照)。同じユーザーのまま職責を変更するには、再接続する必要があります。

注意

- ユーザーが利用できる Discoverer アイテムに異常が起こった場合 (Discoverer Administrator と Discoverer Plus との間で、同じ Appuserid または職責に対して表示されるフォルダまたはアイテムが異なるなど)、Oracle Applications セキュリティの設定方法が原因である可能性があります。Oracle Applications セキュリティの詳細は、Oracle Applications 管理者に問い合せてください。

Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能

Discoverer では、Oracle Applications ユーザーに対する次の機能がサポートされています。

- Oracle Applications のユーザー名、パスワードおよび職責を使用した、Oracle Applications データベースへの非定型なクエリー
- Oracle Applications モード EUL
Oracle Applications モード EUL は、Oracle Applications スキーマ (Oracle Applications の FND (Foundation) テーブルおよびビューを含む) に基づく Discoverer End User Layer です。標準的な EUL ではデータベースのユーザーおよびロールが使用されていますが、Oracle Applications EUL では Oracle Applications のユーザー名および職責が使用されています。
Oracle Applications モード EUL に接続できるデータベース・ユーザー (つまり、Oracle Applications 以外のユーザー) のみが、EUL 所有者です。EUL 所有者とは、EUL の作成に使用されるデータベース・ユーザーです。EUL 所有者は、Oracle Applications ユーザーに管理権限を付与できます。許可された Oracle Applications ユーザーは、Discoverer Administrator を使用して Oracle Applications モード EUL に接続できます。
- Oracle Applications の行レベル・セキュリティ
Oracle Applications のテーブルとビューの多くは、アクセスするユーザーまたは職責に応じて返される結果が異なるため、ユーザー依存です。Discoverer では、これらのユーザー依存のテーブルとビューを考慮して、クエリーが適切に実行されます。
- Oracle Applications の複数通貨レポート
Oracle Applications のユーザーまたは職責で Discoverer に接続すると、複数通貨レポート機能を実装した Oracle Applications のインスタンスをサポートする適切なスキーマ (APPS または APPS_MRC) に、自動的に接続されます。

- Oracle Applications の複数組織

Discoverer で Oracle Applications の複数組織サポートを使用すると、複数の組織からのデータを処理できます。Discoverer エンド・ユーザーは、アクセス権を付与された一連の組織からのデータに対してクエリーと分析ができます。接続している EUL 内のフォルダは、Oracle Business Views (Oracle Applications 11i で使用可能) に基づいている必要があります。

これらの機能は、Discoverer が Oracle Applications モードで実行されている場合のみ使用できます。つまり、Oracle Applications データベースに対して Discoverer が Oracle Applications モード EUL とともに実行されている場合のみ使用可能です。

Oracle Applications とともに Discoverer を使用するための前提条件

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer を起動するには、次の条件を満たす必要があります。

- Discoverer を Oracle Applications モードで使用する前に Oracle Applications をインストールしていること
- 次の Oracle Applications リリースのいずれかに対して Discoverer を実行すること
 - リリース 10.7
 - リリース 11
 - リリース 11i

Discoverer を Oracle Applications モードで実行する場合の相違点

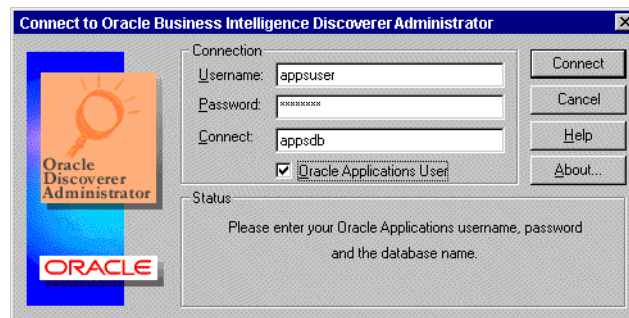
Oracle Applications モードで実行されているときの Discoverer には、次の相違点があります。

- 「Oracle Applications モードでの Discoverer の「接続」ダイアログの相違点
- 「Oracle Applications モードでの Discoverer セキュリティの相違点
- 「Oracle Applications モードでの Discoverer サマリー・フォルダの相違点
- 「Oracle Applications モードでの Discoverer および Secure Views/ 言語設定の相違点

Oracle Applications モードでの Discoverer の「接続」ダイアログの相違点

Discoverer を Oracle Applications モードで実行するとき、「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログ (Oracle Applications ユーザー向け) に「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示される場合と表示されない場合があります。

図 17-1 「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログ (Oracle Applications ユーザー向け)



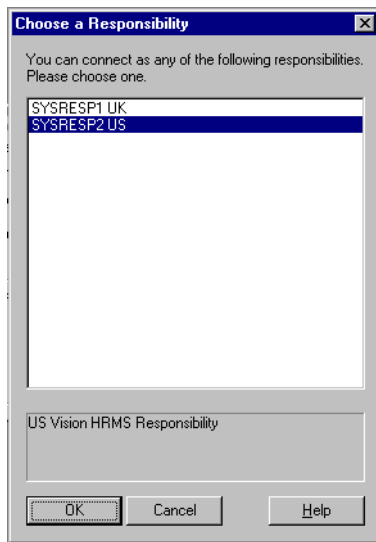
詳細は、「Oracle Applications ユーザー用に「接続」ダイアログを設定する方法」を参照してください。

「接続」ダイアログが Oracle Applications ユーザー用に設定されている場合は、次の条件が適用されます。

- 「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示されない場合は、Oracle Applications データベースのユーザーとして Discoverer に接続しています。
- 「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示される場合は、このチェックボックスを選択して Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続します。あるいは「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスを選択解除して、Oracle データベース・ユーザーとして接続します。

「接続」ダイアログに詳細を入力して「OK」をクリックすると、Discoverer によって「職責」ダイアログが表示され、どの職責で接続するかを選択できます（接続する Oracle Applications ユーザーが複数の職責を持っている場合）。

図 17-2 「職責の選択」ダイアログ



Oracle Applications ユーザーと職責の両方を 'user:responsibility' の形式で「ユーザー名」フィールドに入力すれば、「職責の選択」ダイアログを使用する必要はありません。

Oracle Applications モードでの Discoverer セキュリティの相違点

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行すると、Discoverer の「権限」ダイアログと「セキュリティ」ダイアログに Oracle Applications のユーザー名および職責が表示されます。Oracle Applications のユーザー名および職責に権限とセキュリティを割り当てることができます。データベース・ユーザーとして Discoverer Administrator を実行すると、Discoverer の「権限」ダイアログと「セキュリティ」ダイアログにデータベースのユーザーおよびロールが表示されます。

権限を使用して情報へのアクセスを制御する方法の詳細は、[第7章「情報に対するアクセス制御」](#)を参照してください。

Oracle Applications モードでの Discoverer サマリー・フォルダの相違点

Oracle Applications モード EUL の Discoverer マネージャとして、次のことに注意する必要があります。

- Oracle Applications の一部のデータベース・ビューには行レベル・セキュリティが含まれ、現在アクティブな職責に応じて異なる結果が返されます。これは、マテリアライズド・ビュー（Oracle Standard Edition データベースのサマリー・テーブル）に、外部サマリー・フォルダをリフレッシュするユーザーの職責に応じて異なるデータが含まれることを意味します。

- Oracle Applications の Secure Views または Business Views に基づくサマリー・フォルダを、外部サマリー・フォルダとして Discoverer で登録する必要があります（詳細は、「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法」を参照）。
- Discoverer マネージャは、テーブルまたはビューに対し、Oracle Applications の行レベル・セキュリティを使用して外部サマリー・フォルダがマッピングされている場合、外部テーブルまたはビューによるアクセスが安全なものであるようにする必要があります。不明点があれば、データベース管理者に問い合わせてください。
- Discoverer では、(Oracle Applications の行レベル・セキュリティをあるデータに基づく)クエリーを満たす管理対象のサマリー・フォルダが検出された場合、エンド・ユーザーに対してはクエリー基準を満たす行がないと通知されます。この通知の目的は、エンド・ユーザーがアクセスする必要のないデータを表示しないようにすることです。
- Discoverer では、(Oracle Applications の行レベル・セキュリティがないデータに基づく)クエリーを満たす管理対象のサマリー・フォルダが検出された場合、影響を受けない行が返されます。この目的は、すべてのエンド・ユーザーがデータに安全にアクセスできるようにすることです。
- 行レベル・セキュリティがある一部の Oracle Applications ビューは、「パブリック」行（特に Human Resources）をサポートしています。

Oracle Applications モードでの Discoverer および Secure Views/ 言語設定の相違点

Oracle Applications の Secure Views にアクセスするワークブックを Discoverer エンド・ユーザーが使用するとき、マシン間でローカル言語設定 (NLS) が異なると、結果が異なることがあります（同じ接続情報を使用している場合でも）。

Oracle Applications の Secure Views の使用時、Discoverer により取り出されるデータは、マシンのローカル言語設定の影響を受けます。Discoverer では、言語設定が同じマシン間の場合に、一貫性のあるデータが表示されます。

マシンのローカル言語設定を変更する (Windows 上) には、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「地域のオプション」を選択し、言語値を変更します。

Secure Views の詳細は、「[Secure Views でクエリー予測を使用する方法](#)」を参照してください。

また、Oracle Applications のプロファイル設定を使用して、ユーザー、職責、アプリケーションまたはサイトに対し言語設定 (NLS) を定義することもできます。詳細は、Oracle Applications のドキュメントを参照してください。

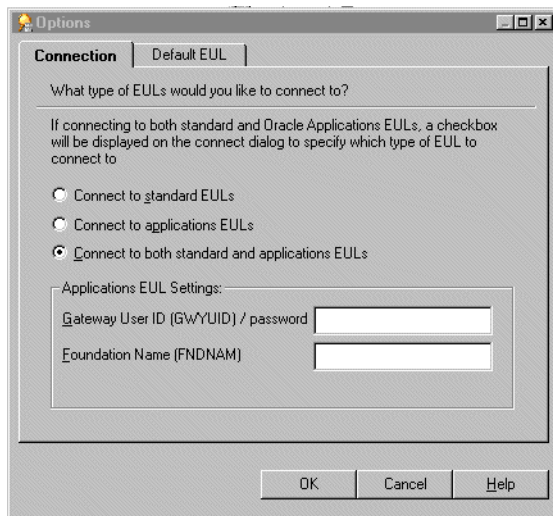
Oracle Applications ユーザー用に「接続」ダイアログを設定する方法

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続する前に、デフォルトで Oracle Applications ユーザーになるように「接続」ダイアログを設定する必要があります。

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop 用に「接続」ダイアログを設定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「オプション」を選択して、「オプション」ダイアログ:「接続」タブを表示します。

図 17-3 「オプション」ダイアログ: 「接続」タブ



2. 次のいずれかのオプションを選択して、EUL のタイプを指定します。

オプション	影響
標準 EUL	「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「接続」ダイアログに表示されず、標準的なデータベース・ユーザーとみなされます。
Oracle Applications EUL Applications EULs	「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「接続」ダイアログに表示されませんが、ユーザーが Oracle Applications のユーザー ID とパスワード、および Oracle Applications データベース接続文字列を使用して接続するとみなされます。
標準 EUL および Oracle Applications EUL の両方	「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが「接続」ダイアログに表示され、(このチェックボックスの選択または選択解除に応じて) 標準 EUL または Oracle Applications データベース EUL のいずれかに接続できます。

注意

- Discoverer Desktop 用に「接続」ダイアログを設定するには、Discoverer Administrator 用の前述の手順を Discoverer Desktop で繰り返します。
- 「接続」ダイアログを設定して、Discoverer Plus および Viewer で Oracle Applications ユーザー名とパスワードを確認するように設定する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

フィールド「Gateway User ID (GWYUID) / パスワード」と「Foundation Name (FNDNAM)」に詳細を入力する方法

「オプション」ダイアログの「接続」タブで「Oracle Applications EUL」ラジオ・ボタンまたは「標準 EUL および Oracle Applications EUL の両方」ラジオ・ボタンを選択すると、これらのフィールドに値を入力できますが、入力しない場合は Discoverer でデフォルト値が使用されます。これらのフィールドとデフォルト値は次のとおりです。

- 「Gateway User ID (GWYUID) / パスワード」
ここで Gateway User ID およびパスワードを入力できます (入力しない場合はデフォルト値 'applsypub/pub' が使用されます)。
- 「Foundation Name (FNDNAM)」
Foundation Name を入力できます (入力しない場合はデフォルト値 'apps' が使用されます)。

これらのフィールドに入力する値が不明な場合は、Oracle Applications データベース管理者に問い合わせてください。

Oracle Applications EUL の作成方法

Oracle Applications EUL を作成する方法は次の 2 つです。

- EUL の作成ダイアログを使用する方法
- コマンドライン・インタフェースを使用する方法

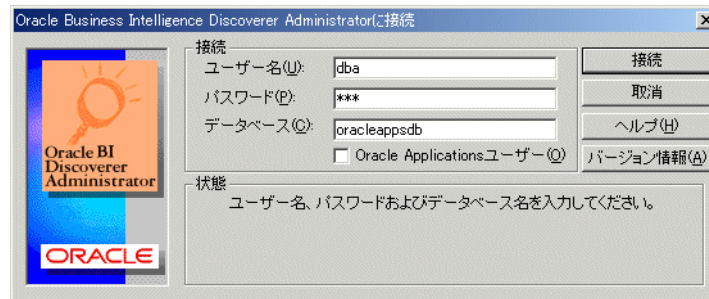
EUL の作成ダイアログを使用して Oracle Applications EUL を作成する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Administrator を起動します。「接続」ダイアログが表示されます。
2. DBA ユーザーのユーザー名、パスワードおよび接続文字列を入力します。

たとえば、「dba/dbapassword@oracleappsdb」と入力します。

注意: Oracle Applications ユーザーのユーザー名を指定しないでください。EUL 所有者は常にデータベース・ユーザーです。

図 17-4 「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログ



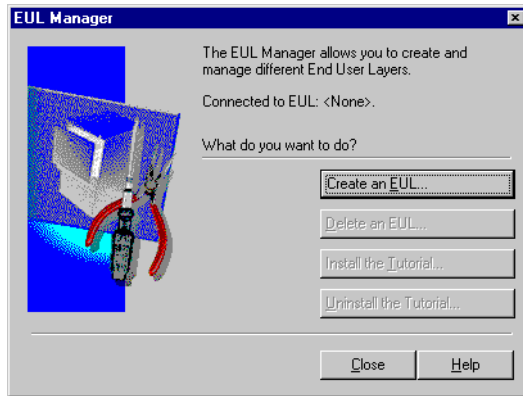
注意: Oracle Applications ユーザーの「接続」ダイアログに「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示されることがあります。詳細は、「Oracle Applications ユーザー用に「接続」ダイアログを設定する方法」を参照してください。

3. 「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスを選択解除します（チェックボックスが表示されている場合）。
4. 「接続」をクリックします。

EUL が存在しないことを示すメッセージがダイアログに表示された場合は、EUL をすぐに作成するかどうかを選択します。

5. 「はい」をクリックします。
6. 「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

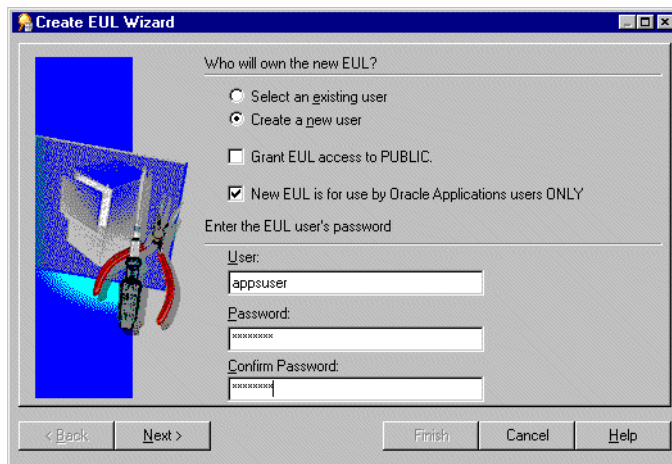
図 17-5 「EUL マネージャ」 ダイアログ



7. 「新しい EUL を作成」をクリックすると、「EUL 作成ウィザード」ダイアログが表示されます。

ここで、新しいデータベース・ユーザーと Oracle Applications EUL を作成します。

図 17-6 「EUL 作成ウィザード」 ダイアログ



8. 次のラジオ・ボタンのいずれかを選択して、既存ユーザーまたは新規ユーザーのどちらが Oracle Applications EUL を所有するかを指定します。

- 「既存のユーザーを指定」

次に、「ユーザー」フィールドのドロップダウン・リストからユーザーを選択します。

- 「新規ユーザーを作成」

次に、新規ユーザーのユーザー名とパスワードを入力し、パスワードを確認します。

注意: EUL 所有者は常にデータベース・ユーザーです。データベース・ユーザーを指定してください。

9. (オプション) 「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択解除します。

ヒント: 「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスの選択を解除して、EUL テーブルへのパブリック・アクセスを制限することをお勧めします。「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択しないで、他のデータベース・ユーザーに EUL テーブルへのアクセスを許可する場合は、EUL テーブルに手動でアクセスを付与する必要があります。

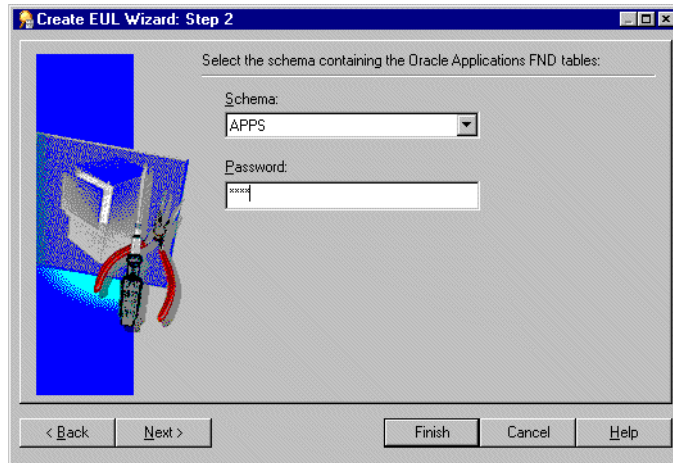
すべてのデータベース・ユーザーに EUL テーブルへのアクセスを付与する場合は、「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択する必要があります。

10. 「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」チェックボックスを選択して、Oracle Applications モード EUL を作成します。

注意: ここでの選択は、最終的な選択です。Oracle Applications EUL を標準的な EUL に変更することはできません（逆の変更もできません）。

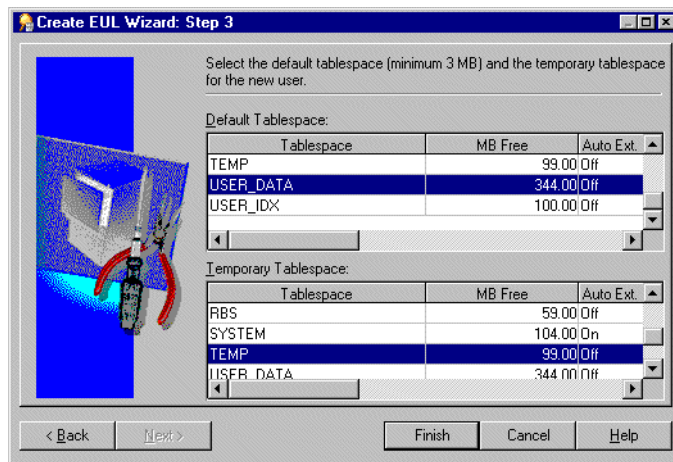
11. 「次へ」をクリックして、「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。ここで、Oracle Applications スキーマを選択し、スキーマ・パスワードを入力します。

図 17-7 「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログ



12. 「スキーマ」ドロップダウン・リストを使用して、Oracle Applications FND テーブルを含む Oracle Applications スキーマを選択します。
13. Oracle Applications スキーマのパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。
14. 新規ユーザーを作成する場合、「EUL 作成ウィザード: ステップ 3」ダイアログが表示されます。ここで、新しいデータベース・ユーザーまたはデータベース・スキーマ用のデフォルト表領域および一時表領域を選択します。

図 17-8 「EUL 作成ウィザード: ステップ 3」ダイアログ



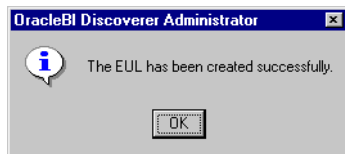
15. (新規ユーザーを作成する場合) Oracle Applications EUL 所有者用に使用するデフォルト表領域および一時表領域を強調表示します。

ヒント: 不明な点があれば、Oracle Applications データベース管理者に問い合わせてください。

16. 「終了」をクリックすると、新しい Oracle Applications モード EUL 用のテーブルとビューが作成され、これらにデフォルト・データが移入されます。

新規 EUL の作成を確認するダイアログが表示されます。

図 17-9 EUL 作成ウィザードの成功を示すダイアログ



17. 「OK」をクリックして、確認ダイアログを閉じます。

新規 EUL にチュートリアル・データをインストールするかどうかを選択するダイアログが表示されます。

18. 「はい」または「いいえ」をクリックして、チュートリアル・データをインストールするかどうかを指定します。

作成した新規 Oracle Applications EUL の所有者でデータベースに再接続するか、あるいは DBA で接続したままにするかを選択するダイアログが表示されます。

注意

- Oracle Applications EUL の作成が完了すると、次のことができます。
 - この Oracle Applications EUL を使用して、Oracle Applications ユーザーが Discoverer Administrator または Discoverer Plus で作業を実行できるように、作業権限を付与できます (詳細は、「Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法」を参照)。
 - Oracle Applications テーブルを使用して、新規ビジネスエリアを作成できます (詳細は、第 5 章「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」を参照)。
 - チュートリアル用ビジネスエリアへのアクセス権を Oracle Applications ユーザーおよび職責に付与できます (詳細は、「ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール (職責) の指定方法」を参照)。チュートリアル用ビジネスエリアへのアクセス権を付与すると、Oracle Applications ユーザーおよび職責がサンプル・データにアクセスできるようになります。
 - APPS スキーマにサンプル・データをインストールしていない場合は、APPS スキーマの所有者にサンプル・データ・テーブルの選択権限を付与する必要があります (権限付与の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』を参照)。選択権限が必要になるのは、APPS スキーマの所有者が、Applications ユーザーがプロキシとして使用するデータベース・ユーザーになるからです。そのため、APPS スキーマの所有者は、サンプル・データ・テーブルへのアクセス権を持つ必要があります。
- データベース・ユーザー (EUL 所有者など) を使用して Oracle Applications EUL をメンテナンスできません (詳細は、「Oracle Applications EUL をメンテナンスするユーザー」を参照)。
- 新規 Oracle Applications ビジネスエリアを作成するには、ビジネスエリアにロードするスキーマ・オブジェクトが Secure Views に基づいている必要があります。これにより、Oracle Applications の特定の職責に関連付けられた行レベル・セキュリティが保持されます。詳細は、Oracle Applications データベース管理者に問い合わせてください。
- また、コマンドラインを使用して Applications モード EUL を作成することもできます (詳細は、「/create_eul /apps_mode」を参照)。

Oracle Applications EUL をメンテナンスするユーザー

Discoverer Administrator で Oracle Applications EUL をメンテナンスする場合は、データベース・ユーザー（EUL 所有者など）を使用しないことをお勧めします。Oracle Applications ユーザー（SYSADMIN など）または職責（システム管理者など）を使用してください。データベース・ユーザーのかわりに Oracle Applications ユーザーを EUL 管理者として使用すると、Discoverer では必要な Oracle Applications オブジェクトに適切なアクセスが提供されます（ビジネスエリアやフォルダのリフレッシュ、インポート、作成時など）。

Oracle Applications ユーザーが Oracle Applications EUL をメンテナンスするために必要な権限を付与する方法は、「[Oracle Applications ユーザーが Oracle Applications EUL をメンテナンスできるようにする方法](#)」を参照してください。

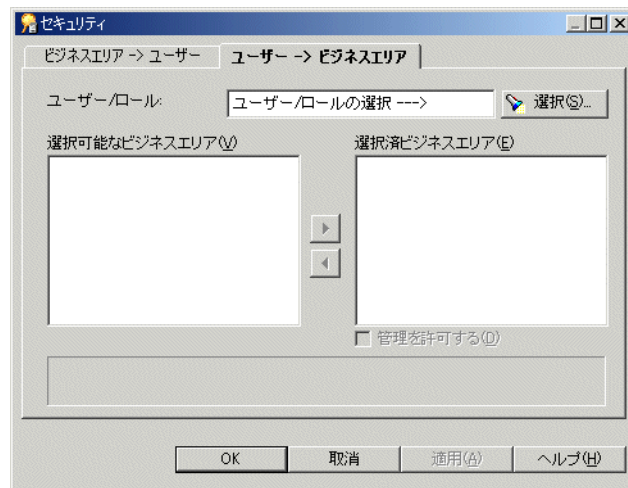
Oracle Applications ユーザーが Oracle Applications EUL をメンテナンスできるようにする方法

Oracle Applications EUL をメンテナンスする Oracle Applications ユーザーは、必要な Oracle Applications オブジェクトへの適切なアクセスを提供するために管理権限を持つ必要があります（ビジネスエリアやフォルダのリフレッシュ、インポート、作成時など）。

Oracle Applications ユーザーが Oracle Applications EUL をメンテナンスできるようにする手順は、次のとおりです。

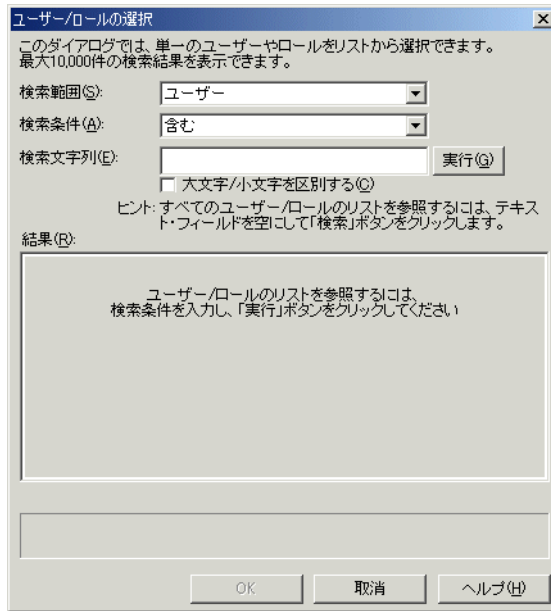
1. EUL 所有者として Discoverer Administrator に Applications モードで接続します（詳細は、「[Discoverer を Oracle Applications モードで実行する場合の相違点](#)」を参照）。
2. 「ツール」→「セキュリティ」を選択すると、「セキュリティ」ダイアログ：「ビジネスエリア->ユーザー」タブが表示されます。

図 17-10 「セキュリティ」ダイアログ：「ユーザー->ビジネスエリア」タブ



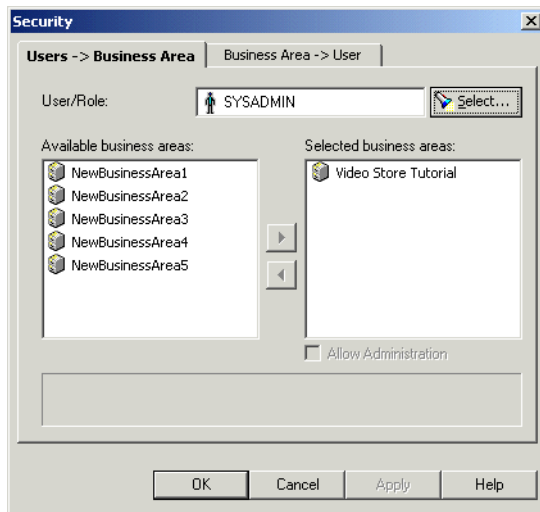
3. 「選択」をクリックすると「ユーザー / ロールの選択」ダイアログが表示されます。このダイアログで、アクセス権を付与する Oracle Applications ユーザーを検索して選択できます。

図 17-11 「ユーザー/ロールの選択」ダイアログ



4. 「検索文字列」フィールドに検索基準を入力し、「実行」をクリックします。
「結果」リストに検索結果が表示されます。
5. 「結果」リストから Oracle Applications ユーザーを選択します。
6. 「OK」をクリックすると、「セキュリティ」ダイアログ: 「ユーザー -> ビジネスエリア」タブに、選択した Oracle Applications ユーザーのビジネスエリアが表示されます。

図 17-12 「セキュリティ」ダイアログ: 「ユーザー -> ビジネスエリア」タブ



7. 選択した Oracle Applications ユーザーがアクセス権を持つビジネスエリアを「選択可能なビジネスエリア」リストから「選択したビジネスエリア」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。

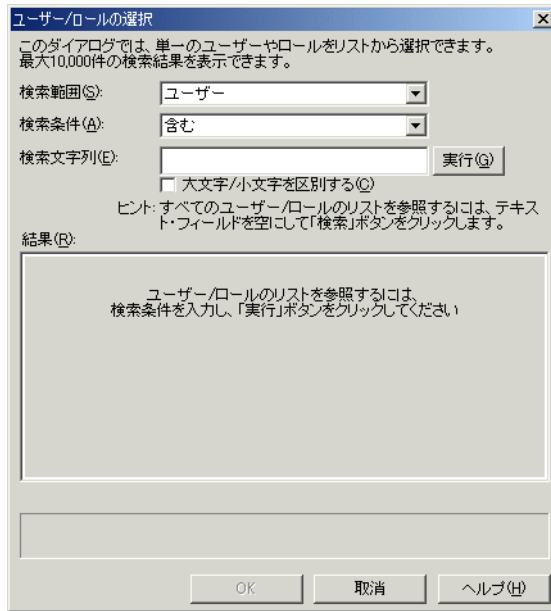
8. 「**選択したビジネスエリア**」リストに追加する各新規ビジネスエリアについて、次の指示に従って選択した Oracle Applications ユーザーがビジネスエリアへの管理アクセス権を持つかどうかを指定します。
 - a. 「**選択したビジネスエリア**」リストのビジネスエリアをクリックします。
 - b. 必要に応じて、「**管理を許可する**」チェックボックスを選択します。ユーザーに対する「**管理を許可する**」の設定によって、Oracle Applications ユーザーが実行できる管理作業が制御されます。詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照してください。
9. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「セキュリティ」ダイアログを閉じます。
10. 「ツール」 → 「権限」を選択すると、「**権限**」ダイアログ：「**権限**」タブが表示されます。

図 17-13 「権限」ダイアログ：「権限」タブ



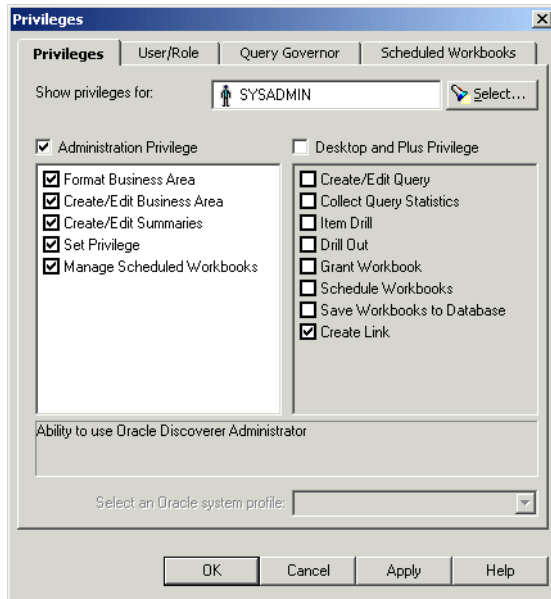
11. 「**選択**」をクリックすると「**ユーザー / ロールの選択**」ダイアログが表示されます。このダイアログで、管理権限を付与する Oracle Applications ユーザーを検索して選択できます。

図 17-14 「ユーザー/ロールの選択」 ダイアログ



12. 「検索文字列」フィールドに検索基準を入力し、「実行」をクリックします。
「結果」リストに検索結果が表示されます。
13. 「結果」リストから必要な Oracle Applications ユーザーを選択します。
14. 「OK」をクリックすると、選択した Oracle Applications ユーザーの「権限」ダイアログ:
「権限」タブが表示されます。

図 17-15 「権限」ダイアログ: 「権限」タブ



15. Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与するには、「管理権限」チェックボックス、および「管理権限」リスト内のチェックボックスを選択します。

注意: 作業権限を付与するには、「**管理権限**」チェックボックスを使用して、最初に親権限を付与する必要があります。詳細は、「**ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法**」を参照してください。

ヒント: 「**管理権限**」リストまたは「**Desktop と Plus 権限**」リストの権限をクリックすると、その権限の簡単な説明がリストの下に表示されます。

16. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

これで、Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator に再接続して、Oracle Applications EUL に対してメンテナンス作業を実行できます（ビジネスエリアやフォルダのリフレッシュ、インポート、作成など）。

パブリック・ユーザーを介してすべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する方法

パブリック・ユーザーを使用すれば、1回のアクションですべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与できます。

すべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Administrator を起動し、Oracle Applications ユーザーで接続します。
2. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ:「権限」タブが表示されます。

「権限」ダイアログにはパブリック・ユーザーが表示されます。パブリック・ユーザーは単一の Oracle Applications ユーザーではなく、すべての Oracle Applications ユーザーを表します。パブリック・ユーザーに権限を付与すれば、すべての Oracle Applications ユーザーに権限を付与できます。後から、必要に応じて、個々のユーザーの権限を変更できます。

3. 必要に応じて、パブリック・ユーザーに権限を付与します。

詳細は、「**ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法**」を参照してください。

ビジネスエリアにアクセスできる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法

この作業で、特定のユーザーまたは職責に対してビジネスエリアへのアクセス権限を付与（または拒否）します。

Oracle Applications の職責の詳細は、「**Oracle Applications の職責**」を参照してください。

注意: この作業が完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、「**ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法**」を参照してください。

Oracle Applications のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定する方法

この作業で、Oracle Applications の特定のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定します。

Oracle Applications の職責の詳細は、「[Oracle Applications の職責](#)」を参照してください。

注意: この作業が完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法](#)」を参照してください。

Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法

この作業で、特定のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定します。

Oracle Applications の職責の詳細は、「[Oracle Applications の職責](#)」を参照してください。

注意: この作業が完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照してください。

特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法

この作業で、特定の作業を実行できるユーザーまたは職責を指定します。

Oracle Applications の職責の詳細は、「[Oracle Applications の職責](#)」を参照してください。

注意: この作業が完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、「[特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)」を参照してください。

Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責をワークブックに表示する方法

カスタム・フォルダを使用して、Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責を Discoverer ワークブックに表示できます。Discoverer ワークブックでは、ワークブックを実行する Oracle Applications データベース・ユーザーの名前と職責によって異なる結果を表示できるため便利です。この作業により、特定の Discoverer ワークブックを実行している Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責を識別できます。

カスタム・フォルダを使用して Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責を Discoverer ワークブックに表示する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Administrator を起動します。「**接続** ダイアログ」が表示されます。
2. Oracle Applications データベース・ユーザーの名前、パスワードおよび接続文字列を入力します。
たとえば、「apps1/apps1password@oracleappsdb」と入力します。
3. 指定した Oracle Applications データベース・ユーザーに複数の職責がある場合は、「**職責** ダイアログ」に表示される「**職責**」リストから職責を選択します。
4. 「ツール」→「PL/SQL 関数の登録」を選択すると、「**PL/SQL 関数** ダイアログ: 「**引数**」タブが表示されます。

注意: PL/SQL ファンクションの FND_GLOBAL.USER_NAME および FND_GLOBAL.RESP_NAME を後でカスタム・フォルダで使用できるようにするには、「**PL/SQL 関数** ダイアログ: 「**引数**」タブで選択可能になっている必要があります。

5. FND_GLOBAL.USER_NAME および FND_GLOBAL.RESP_NAME のどちらかのファンクションがファンクション・リストに表示されない場合はインポートできます。

PL/SQL ファンクションをインポートする手順は、次のとおりです。

- a. 「インポート」をクリックすると、「**PL/SQL 関数のインポート**」ダイアログが表示されます。
 - b. リストから両方の PL/SQL ファンクションを選択し、「OK」をクリックして、「**PL/SQL 関数のインポート**」ダイアログを閉じます。
注意: それぞれの PL/SQL ファンクションは、デフォルトの Oracle Applications ユーザーである Apps の接頭辞が付きます (例: Apps.FND_GLOBAL.USER_NAME)。
 - c. 「OK」をクリックして「**PL/SQL 関数**」ダイアログの「**関数**」タブを閉じ、変更を適用します。
6. (オプション) PL/SQL ファンクションの FND_GLOBAL.USER_NAME および FND_GLOBAL.RESP_NAME をインポートしない場合は、それらのファンクションを作成できます。

注意: データベースで情報を表示するのに時間がかかる場合は、インポートするかわりに、これら 2 つの PL/SQL ファンクションを作成できます。

PL/SQL ファンクションを作成する手順は、次のとおりです。

- a. 「新規作成」をクリックして、新規 PL/SQL ファンクションを作成します。各フィールドにデフォルトのデータを移入します。
- b. 「**関数名**」フィールドに「FND_GLOBAL.USER_NAME」と入力します。
- c. 「**表示名**」フィールドに「FND_GLOBAL.USER_NAME」と入力します。
- d. 「**所有者**」フィールドに「APPS」と入力します。
- e. 「**戻り値のデータ型**」フィールドで VARCHAR を選択します。
- f. 「**識別子**」フィールドに意味のあるテキストを入力します。
- g. 「適用」をクリックして変更内容を保存します。

- h. 前述の手順を繰り返して、もう1つの PL/SQL ファンクションである FND_GLOBAL.RESP_NAME を作成します (手順 b の FND_GLOBAL.USER_NAME を FND_GLOBAL.RESP_NAME に置き換えます)。
 - i. 「OK」をクリックしてダイアログを閉じ、変更内容を保存します。
7. 新規ビジネスエリアを作成するか、既存のビジネスエリアを開きます。
- 詳細は、第5章「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」を参照してください。
- 注意:**以降の手順では、「User Name」および「Resp Name」というアイテムを含むカスタム・フォルダを作成し、これらのアイテムをワークブックに含めます。このカスタム・フォルダを他の Oracle Applications ビジネスエリアで利用しやすくするためには、このカスタム・フォルダのみを含む新規ビジネスエリアを作成します。
8. 「挿入」→「フォルダ」→「カスタム」を選択すると、「カスタム・フォルダ」ダイアログが表示されます。
 9. カスタム・フォルダの意味のある名前を入力します (例: UserResp_Name)。
 10. 「カスタム・フォルダを定義する SQL 文を入力してください」フィールドに次の SQL 文を入力します。


```
Select fnd_global.user_name, fnd_global.resp_name from dual;
```

この SQL 文により、2つのアイテム「User Name」および「Resp Name」を含むカスタム・フォルダが作成されます。Discoverer では PL/SQL ファンクション (前述の手順でインポートまたは作成したもの) を使用して、「User Name」および「Resp Name」で表される Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責が表示されます。

詳細は、「カスタム・フォルダの作成方法」を参照してください。
 11. Oracle Applications データベース・ユーザーの名前および職責名を使用して、Discoverer Plus または Discoverer Desktop に接続します。
- 各コンポーネントの使用の詳細は、次のマニュアルを参照してください。
- Discoverer Plus の場合は『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
 - Discoverer Desktop の場合は『Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
12. 既存のワークブックを開くか、新規ワークブックを作成します。
 13. カスタム・フォルダ・アイテム「User Name」および「Resp Name」のみが含まれる新規ワークシートを作成します。
- 注意:**このカスタム・フォルダは他のフォルダに結合されていないため、アイテム「User Name」および「Resp Name」はワークシート上のみ存在するアイテムである必要があります。
14. Discoverer Plus、Discoverer Desktop または Discoverer Viewer でワークブックを実行します。
- Discoverer ワークブックには、Oracle Applications データベースのユーザー名および職責名を表示するワークシートが含まれます。

Oracle Application Server のコンポーネント とともに Discoverer を使用する 方法

この章では、Oracle Application Server のコンポーネントである Oracle Application Server Web Cache および Oracle Application Server Portal などとともに Discoverer を使用する 方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Discoverer を Oracle Application Server Control とともに使用する 方法」
- 「Discoverer を Oracle Application Server Reports とともに使用する 方法」
- 「Discoverer を Oracle Application Server Web Cache とともに使用する 方法」
- 「Oracle Warehouse Builder とともに Discoverer を使用する 方法」
- 「Discoverer を Oracle Application Server Login Server とともに使用する 方法」
- 「Discoverer を Oracle Application Server Portal とともに使用する 方法」

Discoverer を Oracle Application Server Control とともに使用する方法

Oracle Application Server Control は、Oracle Application Server 中間層の Web コンポーネントを単一のツールで構成するための共通のロック・アンド・フィール、動作およびセキュリティのインフラストラクチャを提供します。すべての Oracle Application Server コンポーネントに対して単一のツールを使用することにより、管理と構成にかかる時間を短縮できます。Oracle Application Server Control を使用して、中間層の Discoverer Web コンポーネントを構成できます。

詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』
- Oracle Application Server Control Discoverer ヘルプ

Discoverer を Oracle Application Server Reports とともに使用する方法

Discoverer ユーザーはワークブックを共有し、Oracle Application Server Reports (リリース 7.0 以上) はワークブックをエクスポートできるため、Reports ユーザーは Discoverer ワークブックを開くことができます。ワークブック SQL、追加のフォーマット設定およびユーザー定義アイテムが、XML ベースのワークブックを使用して Oracle Application Server Reports に渡されます。ワークブックは、Oracle Application Server Reports を使用して変更できる Oracle Application Server Reports 互換のフォーマットに変換されます。

Oracle Application Server Reports では元の Discoverer ワークブックのロック・アンド・フィールが保持されるため、Oracle Application Server Reports ユーザーはスタンドアロンで Reports の作業を継続できます。つまり、OracleAS Reports ユーザーがファイルを拡張するために、Discoverer サーバーに引き続き接続する必要はありません。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Discoverer を Oracle Application Server Web Cache とともに使用する方法

Oracle Application Server Web Cache を使用すると、Web サイトのパフォーマンス問題の改善に役立ちます。Oracle Web Cache は、Web サイトのパフォーマンス、拡張性および可用性を向上する、コンテンツを意識したサーバー・アクセラレータで、Oracle Application Server および Oracle8i 以上のデータベース上で実行されます。Oracle Application Server Web Cache が提供する最新のキャッシング技術を採用することで、高速なアクセス可能性を達成できます。

Oracle Application Server Web Cache を使用すると、頻繁にアクセスされる URL がメモリーに格納されるため、Web アプリケーション・サーバー上でこれらの URL に対するリクエストを繰り返し処理する必要がなくなります。静的な文書のみを扱うレガシー・プロキシ・サーバーとは異なり、Oracle Application Server Web Cache では、1 台以上の Web アプリケーション・サーバーで静的および動的に生成されたコンテンツがキャッシュされます。Oracle Application Server Web Cache ではレガシー・プロキシ・サーバーよりも多くのコンテンツをキャッシュできるため、Web アプリケーション・サーバーに対する負荷が大幅に軽減され、最適なパフォーマンスが実現されます。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』および『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Warehouse Builder とともに Discoverer を使用する方

Oracle Warehouse Builder (OWB) は、Discoverer のメタデータを生成できます。OWB および Discoverer Bridge を使用して OWB のメタレイヤーに Discoverer EUL を作成後、Discoverer のエクスポート・ファイル (.EEX ファイル) を作成します。.EEX ファイルは、Discoverer Administrator を使用して Discoverer EUL にインポートできます (詳細は、「[インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法](#)」を参照)。Discoverer の EUL に、OWB からのフォルダとアイテムの系統が保持されます。Discoverer Lineage ワークブックを使用して、OWB からのフォルダとアイテムの系統を表示できます。

Oracle Warehouse Builder とともに使用する Lineage ワークブックをインストールする手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Administrator に Discoverer EUL スキーマ所有者としてログインします。
2. lineage.eex ファイルをインポートします。
3. SQL*Plus に Discoverer EUL スキーマ所有者としてログインします。

たとえば、次のようになります。

```
> SQLPLUS myeul/myeul@myconnection
```

4. lineage.sql ファイルを実行します。

たとえば、次のようになります。

```
SQL> start d:¥<ORACLE_HOME>¥discoverer¥lineage.sql
```

このスクリプトでは、次の項目の入力および確認が必要です。

- OWB の URL (Machine Name.Domain Name:Port)
例: http://myserver.us.mycompany.com:7777
- OWB の mod_plsql への仮想パス (デフォルトは pls)
例: pls
- OWB のデータベース・アクセス記述子 (DAD) (デフォルトは portal30)
例: portal30
- OWB のブラウザ・スキーマ
例: myowbinstall
- OWB のホスト名 (つまり、OWB リポジトリを実行するマシンの名前)
例: myserver
名前は、OWB のブラウザ登録で使用された名前と同一であることが必要です。
- OWB の SID (つまり、データベース・インスタンス名)
例: ASdB
- OWB リポジトリが存在する OWB スキーマ
例: owbrep

5. OracleBI Discoverer Plus、OracleBI Discoverer Viewer または OracleBI Discoverer Desktop に EUL スキーマ所有者としてログインし、Lineage ワークブックを開きます。

EUL をエクスポートして再度インポートした場合は、lineage.sql を再実行する必要があります。

以前に EUL5.eex をインポートしている場合は、すでに Lineage ワークブックがデータベースに保存されています。その場合に必要な作業は、lineage.sql の実行のみです。

Discoverer を Oracle Application Server Login Server とともに使用する方

Oracle Application Server Login Server は、Oracle Application Server Portal の内部または外部の Web ベース・クライアントが Oracle の Single Sign-On (SSO) サービスを利用できるようにするフレームワークを提供します。Oracle Application Server Login Server は、すべてのユーザー資格証明の格納と管理のための手段を提供する LDAP サーバーとともに使用することを目的としています。

Discoverer を Oracle Application Server Portal とともに使用する方

Discoverer のワークブックとワークシートを Oracle Application Server Portal に迅速かつ簡単に公開できます。Oracle Application Server Portal の直観的なユーザー・インターフェースによって公開プロセスがステップごとに示されるため、強力なビジネス・インテリジェンス・ポータルを簡単に作成できます。

Oracle Application Server Portal への公開の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

EUL ステータス・ワークブック

この章では、Discoverer Administrator の EUL ステータス・ワークブックの使用方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「EUL ステータス・ワークブックについて」
- 「Discoverer EUL V5 のビジネスエリア」
- 「標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法」
- 「Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法」
- 「Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックの実行方法」
- 「Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンインストール方法」
- 「EUL データ定義ワークブック」
- 「EUL クエリー統計ワークブック」
- 「EUL アクセス・ワークブック」
- 「EUL ワークブック管理ワークブック」
- 「EUL ステータス・ワークブックと DBA_JOBS_RUNNING テーブルに関する注意」

EUL ステータス・ワークブックについて

EUL ステータス・ワークブックとは、Discoverer End User Layer (EUL) の管理と文書化に役立つレポートを提供する Discoverer ワークブックです。EUL ステータス・ワークブックによって Discoverer EUL V5 ビジネスエリアのフォルダからの情報がクエリーされます。Discoverer Plus または Discoverer Viewer で EUL ステータス・ワークブックを分析できます。

任意の Discoverer ユーザーに EUL ステータス・ワークブックへのアクセス権を付与できます。ただし、EUL ステータス・ワークブックの主要な用途は管理です。

Discoverer では、次の EUL ステータス・ワークブックが提供されています。

- EUL データ定義: このワークブックには EUL 内のデータに関する情報が含まれます。
- EUL クエリー統計: このワークブックには Discoverer により収集されるクエリー統計が含まれます。
- EUL アクセス: このワークブックにはユーザー、データベース・オブジェクトへのアクセス、およびセキュリティに関する情報が含まれます。
- EUL ワークブック管理: このワークブックには EUL に保存されているワークブックおよびワークシートに関する情報が含まれます。

各ワークブックの使用方法は、個別のワークシートに記載されています。

Discoverer ではこれらの EUL ステータス・ワークブックが提供されていますが、デフォルトではインストールされません。ワークブックのインストール方法は、次のように EUL の種類によって異なります。

- 標準的な EUL に対して Discoverer を実行する場合は、「[標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法](#)」の指示に従ってください。
- Oracle Applications EUL に対して Discoverer を実行する場合は、「[Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法](#)」の指示に従ってください。

EUL ステータス・ワークブックは、<ORACLE_HOME>%discoverer ディレクトリにインストールされます。

EUL ステータス・ワークブックをインストールすると、次の処理が可能になります。

- Discoverer EUL V5 のビジネスエリアの編集
- 提供されている EUL ステータス・ワークブックの編集
- ユーザー自身の EUL ステータス・ワークブックの作成

Discoverer EUL V5 のビジネスエリア

要件に応じてワークブックまたは Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを編集できます。また、ユーザー自身の EUL ステータス・ワークブックを作成することもできます。

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアは、EUL 内のその他のビジネスエリアに似ています。Discoverer EUL V5 のビジネスエリア内のフォルダは次のとおりです。

フォルダ	説明
BA & Folders	EUL 内の定義済ビジネスエリアおよびフォルダ
Folders & Items	EUL 内の定義済フォルダおよびアイテム
ユーザー・クエリー	EUL に記録されたユーザー・クエリー
結合	EUL 内の定義済結合の構造
条件	EUL 内の必須およびオプションの条件の構造
階層	階層の構造
Item Classes	アイテム・クラスまたは値リストの構造

フォルダ	説明
サマリー・マッピング	フォルダへのサマリー・テーブルのマッピング
セキュリティ	ビジネスエリアへのユーザー・アクセス
権限	ユーザーの Discoverer 権限
ワークブック管理	データベースに保存されたワークブックとそれらのワークブックにアクセスできるユーザーのリスト

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを使用すると、Discoverer ビジネスエリアの構造の分析と文書化のために独自のワークブックを作成できます。

Discoverer EUL V5 の一部のフォルダでは、EUL 所有者に DBA_JOBS_RUNNING データベース・テーブルへの SELECT アクセス権限が必要であることに注意してください。詳細は、「[EUL ステータス・ワークブックと DBA_JOBS_RUNNING テーブルに関する注意](#)」を参照してください。

提供されている EUL ステータス・ワークブックを変更する場合は、異なる名前でコピーを保存し、そのコピーを変更することをお勧めします。そうしないと、提供されている EUL ステータス・ワークブックが Discoverer の各新規リリースで置き換えられるため、変更が失われることがあります。

標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法

標準的な EUL に対して Discoverer を実行する場合は、次の手順に従います。

注意: EUL をインストールしている必要があります（詳細は、[第 4 章「End User Layer の作成とメンテナンス」](#)を参照）。

標準的な EUL ステータス・ワークブックをインストールする手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger@database;
```

jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

2. SQL ファイル eul5.sql を実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start d:¥<ORACLE_HOME>¥discoverer¥util¥eul5.sql
```

<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

eul5.sql ファイルにより、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアで必要とされる一部のユーザー定義 PL/SQL ファンクションが作成されます。

3. SQL*Plus セッションを終了します。
4. Discoverer Administrator を起動します。
5. ファイル eul5.eex を次のようにインポートします。
 - a. 「ファイル」→「インポート」を選択すると、「インポート・ウィザード: ステップ 1」ダイアログが表示されます。
 - b. 「ファイルの追加」ボタンをクリックすると、「開く」ダイアログが表示されます。
 - c. ファイル <ORACLE_HOME>¥discoverer¥eul5.eex を選択します。<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

- d. 「開く」をクリックすると、「[インポート・ウィザード:ステップ 1](#)」ダイアログに戻ります。
選択した SQL ファイル `eul5.eex` がインポート・ファイル・リストに表示されます。
- e. 「次へ」をクリックして、「[インポート・ウィザード:ステップ 2](#)」ダイアログを表示します。
デフォルト設定を受け入れます。
- f. 「次へ」をクリックして、「[インポート・ウィザード:ステップ 3](#)」ダイアログを表示します。
このダイアログでは、インポートを開始して、各 EUL オブジェクトが処理されるときの状態を監視できます。
- g. 「開始」をクリックして、EUL ステータス・ワークブックのインポートを開始します。
インポートが完了すると、「インポートに成功しました。」というメッセージが表示されます。
- h. 「終了」をクリックして、「[インポート・ウィザード:ステップ 3](#)」ダイアログを閉じます。

EUL ステータス・ワークブックのインポートが完了すれば、Discoverer Plus または Discoverer Viewer を使用して EUL ステータス・ワークブックを開くことができます。

注意

- Discoverer リリース 4 からアップグレードした場合は、EUL に EUL for Discoverer V4 と呼ばれるビジネスエリアが含まれることがあります。このビジネスエリアは必要ないので、削除しても構いません。EUL for Discoverer V4 ビジネスエリアを削除する際、関連する次の PL/SQL ファンクションも削除します。

```
EUL4_GET_ANALYZED
EUL4_GET_COMPLEX_FOLDER
EUL4_GET_HEIRLVL
EUL4_GET_HIERORD
EUL4_GET_ITEM
EUL4_GET_ITEM_NAME
EUL4_GET_OBJECT
EUL4_GET_OBJECT_NAME
EUL4_GET_SIMPLE_FOLDER
```

ヒント: PL/SQL ファンクションの削除方法の詳細は、「[Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンインストール方法](#)」を参照してください。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法

Oracle Applications の EUL に対して Discoverer を実行する場合は、次の手順に従います。

注意: Oracle Applications の EUL をインストールしている必要があります (詳細は、[第 17 章「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」](#)を参照)。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックをインストールする手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し (まだ実行されていない場合)、EUL 所有者として接続します。
SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger@database;
```


jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

2. SQL ファイル eul5.sql を実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start d:¥<ORACLE_HOME>¥discoverer¥util¥eul5.sql
```

<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

eul5.sql ファイルにより、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアで必要とされる一部のユーザー定義 PL/SQL ファンクションが作成されます。

3. SQL ファイル eul5_apps.sql を実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start d:¥<ORACLE_HOME>¥discoverer¥util¥eul5_apps.sql
```

<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

eul5_apps.sql ファイルにより、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアで必要とされる一部のユーザー定義 PL/SQL ファンクションが作成されます。

Oracle Applications の FNDNAM スキーマのユーザー名を入力するように要求されます。

4. FNDNAM スキーマのユーザー名を入力します。

注意: FNDNAM スキーマのユーザー名のみ入力してください。パスワードは入力しないでください。

入力したユーザー名を確認するように要求されます。

5. 入力したユーザー名が正しいことを確認します。

ユーザー名が正しくない場合は、スクリプトを再実行します。

6. Discoverer Administrator を起動します。

7. ファイル eul5.eex を次のようにインポートします。

a. 「ファイル」 → 「インポート」を選択すると、「インポート・ウィザード: ステップ 1」ダイアログが表示されます。

b. 「ファイルの追加」ボタンをクリックすると、「開く」ダイアログが表示されます。

c. ファイル <ORACLE_HOME>¥discoverer¥eul5.eex を選択します。<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

d. 「開く」をクリックすると、「インポート・ウィザード: ステップ 1」ダイアログに戻ります。

選択した SQL ファイル eul5.eex がインポート・ファイル・リストに表示されます。

e. 「次へ」をクリックして、「インポート・ウィザード: ステップ 2」ダイアログを表示します。

デフォルト設定を受け入れます。

f. 「次へ」をクリックして、「インポート・ウィザード: ステップ 3」ダイアログを表示します。

このダイアログでは、インポートを開始して、各 EUL オブジェクトが処理されるときの状態を監視できます。

g. 「開始」をクリックして、EUL ステータス・ワークブックのインポートを開始します。

インポートが完了すると、「インポートに成功しました。」というメッセージが表示されます。

h. 「終了」をクリックして、「インポート・ウィザード: ステップ 3」ダイアログを閉じます。

EUL ステータス・ワークブックのインポートが完了すれば、Discoverer Plus または Discoverer Viewer を使用して EUL ステータス・ワークブックを開くことができます。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックの実行方法

Discoverer Plus で Oracle Applications の EUL とともに EUL ステータス・ワークブックを実行するには、Oracle Applications のユーザーまたは職責で接続する必要があります。EUL 所有者として EUL ステータス・ワークブックを実行することはできません。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックを実行する手順は、次のとおりです。

1. EUL 所有者として Discoverer Administrator を起動します。
2. Oracle Applications のユーザーまたは職責のいずれかに、EUL5 ビジネスエリアへのアクセス権限を付与します。
ビジネスエリアへのアクセス権限付与の詳細は、第7章「情報に対するアクセス制御」を参照してください。
3. アクセス権限を付与したユーザーまたは職責で Discoverer Plus または Discoverer Viewer を起動します。

注意

- EUL ステータス・ワークブックは PUBLIC ユーザーと共有され、EUL 所有者により所有されます。つまり、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアにアクセスできるすべてのユーザーが、EUL データ定義ワークブックおよびクエリー統計ワークブックの両方を実行できます。

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンインストール方法

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアをアンインストールする手順は、次のとおりです。

1. EUL 所有者として Discoverer Plus に接続し、次のワークブックを削除します。
 - EUL データ定義
 - EUL クエリー統計
 - EUL アクセス
 - EUL ワークブック管理

注意: EUL ステータス・ワークブックが Oracle Applications の EUL にインストールされている場合は、EUL の所有者として Discoverer Plus に接続してこのワークブックを削除することはできません。かわりに、Discoverer Administrator のコマンドライン・インタフェースを使用し、コマンド・プロンプトで次のように入力して、ワークブックを削除します。

```
<ORACLE_HOME1>\%bin%\dis51adm.exe /connect <eulowner>/password>@<database> /delete /workbook "<workbook name>"
```

"<workbook name>" は、EUL データ定義、EUL クエリー統計、EUL アクセスまたは EUL ワークブック管理のいずれかです。

2. Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを含む EUL の所有者として Discoverer Administrator を起動します。
3. Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを開きます。
4. ワークエリア内の Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを強調表示します。
5. 「編集」 → 「削除」を選択すると、「ビジネスエリア削除の確認」ダイアログが表示されません。
6. 「ビジネスエリアおよび含まれているフォルダを削除」を選択します。
7. 「はい」をクリックして、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアとその中に含まれているフォルダを削除します。

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアに関連する PL/SQL ファンクションを削除できます。

8. 「ツール」 → 「PL/SQL 関数の登録」を選択すると、「PL/SQL 関数」ダイアログが表示されます。
9. 次のファンクション名を持つファンクションを強調表示します。

```

EUL5_GET_ANALYZED
EUL5_GET_APPS_USERRESP
EUL5_GET_AUTOGEN_ITEM_NAME
EUL5_GET_COMPLEX_FOLDER
EUL5_GET_DATEHIER_TMPLT_NAME
EUL5_GET_EUL_DETAILS
EUL5_GET_FOLDERNAME
EUL5_GET_FORJ_ITEMID
EUL5_GET_HIER_EXPID
EUL5_GET_HEIRLVL
EUL5_GET_HIERNODE_EXPID
EUL5_GET_HIERORD
EUL5_GET_ISITAPPS_EUL
EUL5_GET_ITEM
EUL5_GET_ITEM_NAME
EUL5_GET_JOIN
EUL5_GET_JOIN_EXPID
EUL5_GET_LINURL
EUL5_GET_OBJECT
EUL5_GET_OBJECT_NAME
EUL5_GET_SIMPLE_FOLDER
eul5_post_save_document

```

10. 各ファンクションについて「削除」をクリックして、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアに関連するユーザー定義 PL/SQL ファンクションを削除します。

EUL ステータス・ワークブックが削除されます。

EUL データ定義ワークブック

EUL データ定義ワークブックにより、EUL に含まれるオブジェクトに関するレポートが提供されます。EUL データ定義ワークブックを使用すると、EUL オブジェクトの構成方法について詳しく知ることができます。このワークブックは、次のワークシートから構成されます。

ワークシート	説明
EUL リリース	現在使用中の Discoverer EUL のリリース
ビジネスエリアとフォルダ	各ビジネスエリア内のフォルダ
フォルダとアイテム	各ビジネスエリア内の各フォルダ内のアイテム
結合	各ビジネスエリア内の定義済結合
条件	各ビジネスエリア内の定義済条件
階層	各ビジネスエリア内の定義済階層
アイテム・クラス - 値リスト	各ビジネスエリア内の定義済値リスト
セキュリティ	ユーザー、ロールまたは職責別の、ビジネスエリアへのアクセス
権限	ユーザー、ロールまたは職責別の、アクセス権限
サマリー・マッピング	ビジネスエリア別の、サマリーへのフォルダのマッピング

EUL クエリー統計ワークブック

EUL クエリー統計ワークブックには、エンド・ユーザーが実行したクエリーに関する統計情報が表示されます。EUL クエリー統計ワークブックを使用すると、エンド・ユーザー・クエリーの特性について詳しく知ることができます。このワークブックは、次のワークシートから構成されます。

ワークシート	説明
クエリー統計	現在接続している Discoverer EUL のリリース
ユーザーがクエリーを行ったワークブック	ユーザーがクエリーを行ったワークブック
ワークブック・クエリー統計	各ワークブックに関するクエリー統計
サマリーを使用したワークブック	サマリーを使用したワークブック
ユーザーによる非定型なクエリー	クエリーは行われたがデータベースに保存されていないユーザー、フォルダおよびアイテム
ワークブックによる非定型なクエリー	クエリーは実行されたがデータベースに保存されていないワークブック
サマリーを使用した非定型のクエリー	サマリーを使用した、データベースに保存されていないクエリー
詳細なクエリー統計	ユーザーがワークブックおよびワークシートを調整できるクエリー統計 注意: このワークシートは、EUL クエリー統計ワークブックの高度なユーザー向けです。

EUL アクセス・ワークブック

EUL アクセス・ワークブックにより、データベース・オブジェクトへのユーザーのデータベース・アクセス権限に関する次の情報が提供されます。

- ユーザーがアクセス権を持つ EUL およびスキーマ
- ユーザーがアクセスできるデータベース・オブジェクト
- ユーザーが所有するデータベース・オブジェクトに対して付与された権限
- 他のユーザーのオブジェクトに対してユーザーが持っているアクセス権限

このワークブックは、次のワークシートから構成されます。

ワークシート	説明
EUL へのアクセス	このデータベース・スキーマおよび他のデータベース・スキーマ内でユーザーがアクセスできる EUL
データベース・オブジェクトへのアクセス	ユーザーがアクセスできるスキーマおよびオブジェクト
所有するオブジェクトに付与されたアクセス権限	ユーザーが所有するデータベース・オブジェクトについて、他のユーザーに付与されたアクセス権限
他のユーザー・オブジェクトに付与されたアクセス権限	他のユーザー・オブジェクトに付与されたアクセス権限

EUL ワークブック管理ワークブック

EUL ワークブック管理ワークブックには、EUL に保存されているワークブックおよびワークシートに関する情報が含まれます。このワークブックは、次のワークシートから構成されます。

ワークシート	説明
EUL リリース	現在接続している Discoverer EUL のリリース
ワークブック・アクセス	データベースに保存されたワークブックとそれらのワークブックにアクセスできるユーザー
ワークシートの SQL インスペクタ	データベースに保存されたワークシートの SQL
ワークブックの依存性	ワークブックおよびワークシートのアイテム、結合および条件への依存性
ワークブックの依存性 - フォルダおよびアイテムの参照	現在 EUL に存在するフォルダおよびアイテムの識別子の参照
ワークブックの依存性 - 結合の参照	現在 EUL に存在する結合の識別子の参照
ワークブックの依存性 - 条件の参照	現在 EUL に存在する条件の識別子の参照

EUL ステータス・ワークブックと DBA_JOBS_RUNNING テーブルに関する注意

Discoverer EUL V5 のビジネスエリア内の一部のフォルダ（特に、EUL5_DBA_JOBS_RUNNING フォルダ）では、EUL 所有者が DBA_JOBS_RUNNING データベース・テーブルへの SELECT アクセス権限を持つ必要があります。このテーブルへの SELECT アクセス権限がない場合は、権限が不十分であることを示す ORA-01031 メッセージが表示されます。

DBA_JOBS_RUNNING への SELECT アクセス権限を付与する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、DBA 権限を持つユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect dba_user/dba_password@database;
```

dba_user は DBA 権限のあるユーザー、dba_pw はパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力して、DBA_JOBS_RUNNING への SELECT アクセス権限を EUL 所有者に付与します。

```
SQL> grant select on dba_jobs_running to <EUL owner>;
SQL> commit;
```

EUL 所有者が DBA_JOBS_RUNNING データベース・テーブルへのアクセス権限を持っていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger@database;
```

jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力して、DBA_JOBS_RUNNING データベース・テーブルを記述します。

```
SQL> desc DBA_JOBS_RUNNING
```

EUL 所有者が DBA_JOBS_RUNNING へのアクセス権限を持っている場合、テーブルに列リストが表示されます。持っていない場合、オブジェクトが存在しないことを示すメッセージが表示されます。

クエリーのパフォーマンスの予測

この章では、Discoverer Administrator でのクエリー予測の使用方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「クエリーのパフォーマンスの予測について」
- 「Discoverer Plus でのクエリー予測の機能」
- 「クエリー予測が使用できなくなる理由」
- 「クエリー予測の速度と精度を向上する方法」
- 「クエリー予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法」
- 「クエリー予測のための `timed_statistics` パラメータの確認および変更方法」
- 「データ・テーブルの分析方法」
- 「クエリー予測のための `optimizer_mode` パラメータの確認および変更方法」
- 「クエリー予測にかかる時間を短縮する方法」
- 「Secure Views でクエリー予測を使用する方法」
- 「古いクエリー予測統計の削除方法」

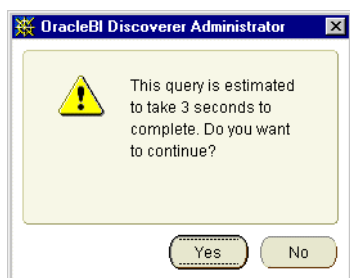
クエリーのパフォーマンスの予測について

Discoverer には、Discoverer クエリーによる情報の取得に必要な時間を予測する機能が備わっています。クエリーの開始前にクエリー予測が表示されるため、Discoverer ユーザーはクエリーを実行するかどうかを判断できます。この強力な機能により、Discoverer ユーザーはサイズの大きいレポートの待機に必要な時間を制御できます。

クエリー予測では、Oracle データベースでコストベースのオプティマイザ（CBO）が使用されます。このため、ルールベースのオプティマイザ（RBO）を使用して実行するデータベースに対して実行されているときは、クエリー予測を使用できません。

Discoverer Plus でのクエリー予測の機能

Discoverer エンド・ユーザーは、クエリーが設定した時間を超えると予測される場合にそのことを通知するように指定できます。ダイアログに、クエリー予測の詳細とクエリーをキャンセルするオプションが表示されます。



クエリーを取り消す場合、ユーザーはそのクエリーが後で（深夜などに）実行されるようにワークブックをスケジュールできます。深夜に実行すると、翌朝にワークシートを開くことができます（Discoverer Plus でのワークブックのスケジュール方法の詳細は『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照）。Discoverer Administrator を使用したエンド・ユーザーによるワークブックのスケジュールを可能にする方法の詳細は第 8 章「ワークブックのスケジュール」を参照してください。

クエリー予測が使用できなくなる理由

Discoverer エンド・ユーザーが、ワークシートの実行時にクエリー予測を使用できない場合があります。この理由を参照するには、Discoverer Administrator で「ヘルプ」→「データベース情報」を選択して、「データベース情報」ダイアログを表示します。クエリー予測が使用できなくなる理由は、次のとおりです。

理由	解決策
クエリー予測をサポートしていないデータベース（Oracle 7.1.x など）に接続している。	データベースをアップグレードしてください。
クエリー予測に必要なビューが使用できない。	「クエリー予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法」を参照してください。
init<sid>.ora の timed_statistics パラメータが FALSE（デフォルト値）に設定されている。	「クエリー予測のための timed_statistics パラメータの確認および変更方法」を参照してください。
データ・テーブルが分析されていない。	「データ・テーブルの分析方法」を参照してください。
init<sid>.ora の optimizer_mode パラメータが CHOOSE ではなく RULE に設定されている。	「クエリー予測のための optimizer_mode パラメータの確認および変更方法」を参照してください。

クエリー予測の速度と精度を向上する方法

クエリー予測の速度と精度に信頼性がある場合、ユーザーは実行に時間がかかるクエリーを後で実行するようにスケジューリングする傾向があります。クエリー予測が正確であれば、一般にサーバーへの負荷が軽減されるため、すべてのユーザーにとってクエリーのパフォーマンスが向上します。

クエリー予測を効果的に実装する手順は、次のとおりです。

- `ANALYZE TABLE` コマンドを使用して、ユーザーがクエリーを行うテーブルを分析します。EUL データ定義ワークブックの「ビジネスエリアおよびフォルダ」ワークシートを使用して、EUL のフォルダがいつ分析されたかを表示します。データ・テーブルの分析方法の詳細は、「[データ・テーブルの分析方法](#)」を参照してください。
- システム・ビュー `V_$SQL` へのアクセス権をユーザーに付与します（詳細は、「[Secure Views でクエリー予測を使用する方法](#)」を参照）。

クエリー予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法

Discoverer でクエリー予測を有効にする前に、様々なデータベース・ビューでパブリック・ユーザーに `SELECT` 権限を付与する必要があります。詳細は、Oracle10g データベースのドキュメントを参照してください。

クエリー予測に必要なビューを使用できるようにする手順は、次のとおりです（Oracle9i 以上のデータベースの場合）。

1. `SQL*Plus` を起動し（まだ実行されていない場合）、`SYS` ユーザーあるいは `SYSDBA` 権限を付与されたユーザーとして接続します。

`SQL*Plus` がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

`sys` は `SYS` ユーザー、`sys_pw` は `SYS` ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力して、クエリー予測に必要なビューでの `SELECT` アクセス権限を付与します。

```
SQL> grant select on v_$session to public;
SQL> grant select on v_$sesstat to public;
SQL> grant select on v_$parameter to public;
```

注意: `SELECT ON v_$parameter` を付与するには、`SYS` ユーザーとしてログインする必要があります。`SYS` ユーザーとしてログインできない場合、または `SYS` のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

クエリー予測のための `timed_statistics` パラメータの確認および変更方法

Discoverer でクエリー予測を有効にするには、データベース・ビュー `v_$parameter` にある `timed_statistics` パラメータを `TRUE` に設定する必要があります。

`timed_statistics` が `TRUE` に設定されていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. `SQL*Plus` を起動し（まだ実行されていない場合）、データベース管理者として接続します。

`SQL*Plus` がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT dba_user/dba_pw@database;
```

`dba_user` はデータベース管理者、`dba_pw` はデータベース管理者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select value from v$parameter where name = 'timed_statistics';
```

クエリーにより値 TRUE が返された場合、`timed_statistics` パラメータはクエリー予測が使用できるように正しく設定されています。値 FALSE が返された場合、`init<sid>.ora` ファイルの `timed_statistics` パラメータの値を変更するまでクエリー予測を使用できません。

注意: `v$parameter` はビュー `v_$parameter` を表示するシノニム（ポインタ）です。

`init<sid>.ora` ファイルを編集する手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA ファイルの位置を特定します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、`<ORACLE_HOME>%dbs` にあります。このファイルのデフォルト名は `INITORCL.ORA` です。ORCL は `<SID>` 名を表します。

2. 次の行が含まれるようにファイルを編集します。

```
timed_statistics = TRUE
```

3. 変更を有効にするには、データベースをシャットダウンしてから再起動します。

データ・テーブルの分析方法

Discoverer では、クエリー予測にデータ・テーブルの分析結果が使用されます。データ・テーブル分析により、データベース・テーブルに関する情報（テーブルのサイズなど）が生成されます。詳細は、Oracle10g データベースのドキュメントを参照してください。

データ・テーブルを分析する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、分析するデータ・テーブルの所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect tab_owner/tab_pw@database;
```

`tab_owner` はデータ・テーブルの所有者のユーザー名、`tab_pw` はそのパスワードです。

2. 次のクエリーを入力します。

```
SQL> analyze table <tabowner.tablename> compute statistics for all columns;
```

注意

- 時間の経過に伴ってテーブルの内容が大幅に変更されると予想される場合は、データ・テーブルを定期的に分析してください。
- クエリー予測に時間がかかる（10秒を超える）場合は、テーブルが分析されていません。たとえば、Discoverer でのクエリー予測の表示に 25 秒程度かかっても、クエリーが 2 秒未満で実行される場合があります。

クエリー予測のための optimizer_mode パラメータの確認および変更方法

optimizer_mode パラメータが CHOOSE に設定されていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、データベース管理者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT dba_user/dba_pw@database;
```

dba_user はデータベース管理者、dba_pw はデータベース管理者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select value from v$parameter where name = 'optimizer_mode';
```

注意: v\$parameter はビュー v_\$parameter を表示するシノニム（ポインタ）です。

クエリーにより値 CHOOSE が返された場合、optimizer_mode パラメータはクエリー予測が使用できるように正しく設定されています。テーブルが分析されている場合はシステムでコストベースのオプティマイザが使用され、テーブルが分析されていない場合はルールベースのオプティマイザが使用されます。

クエリーにより値 FIRSTROWS または ALLROWS が返された場合も、optimizer_mode パラメータはクエリー予測が使用できるように正しく設定されています。

テーブルが分析されていない場合でも、FIRSTROWS および ALLROWS の両方が返されると、コストベースのオプティマイザが使用されます。

値 RULE が返された場合、init<sid>.ora ファイルの optimizer_mode パラメータの値を変更するまでクエリー予測を使用できません。

init<sid>.ora ファイルを編集する手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA を検索します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、<ORACLE_HOME>%dbms にあります。このファイルのデフォルト名は INITORCL.ORA です。ORCL は <SID> 名を表します。

2. 次の行が含まれるようにファイルを編集します。

```
optimizer_mode = CHOOSE
```

3. 変更を有効にするには、データベースをシャットダウンしてから再起動します。

クエリー予測にかかる時間を短縮する方法

クエリー予測の処理にかかる時間は短縮できます。

Discoverer では、クエリー予測の処理中にコストベースのオプティマイザが使用されます。コストベースのオプティマイザではクエリー文のみが解析され、クエリーの実行は通常、サーバーのデフォルト・オプティマイザ・モードで管理されることに注意してください。

スキーマが大きい環境（Oracle Applications など）では、コストベースのオプティマイザを使用したデータベースによる文の解析に時間がかかることがあります。この場合、クエリー予測処理が完了するまで数分かかることがあります。

クエリー予測の処理が完了するまでユーザーが長い時間待機する必要がある場合は、次の解決策を検討してください。

- Discoverer の適切なレジストリ設定を使用して、クエリー予測を無効にできます。次に例を示します。

- Discoverer Desktop の場合

Windows レジストリで、`HKEY_CURRENT_USER\Software\Oracle\Discoverer 10\Database\QPPEnable` レジストリ・キーの `DWORD` 値を 0 (ゼロ) に設定します。

クエリー予測を再度有効にする場合は、このレジストリ・キーを削除するか、値を 1 に設定します。

Windows レジストリに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、「[Discoverer Administrator](#) および [Discoverer Desktop のレジストリ設定](#)」を参照してください。

- Discoverer Plus および Discoverer Viewer の場合

`pref.txt` ファイルの `QPPEnable` レジストリ設定の値を変更します。変更を有効にするには、プリファレンスを適用する必要があります。プリファレンスを適用すると、新しい値が `reg_key.dc` ファイルに書き込まれます (プリファレンスの設定方法の詳細は、『[Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド](#)』を参照)。QPPEnable を 1 に設定すると、クエリー予測が有効になります。クエリー予測を無効にするには、QPPEnable を 0 に設定します。

`.reg_key.dc` ファイルに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、「[Discoverer Plus](#) および [Discoverer Viewer のレジストリ設定](#)」を参照してください。

- Discoverer の適切なレジストリ設定を使用して、クエリー予測でコストベースのオプティマイザが強制的に使用されないようにできます。次に例を示します。

- Discoverer Desktop の場合

Windows レジストリで、`HKEY_CURRENT_USER\Software\Oracle\Discoverer 10\Database\QPPCBOEnforced` レジストリ・キーの `DWORD` 値を 0 (ゼロ) に設定します。

このレジストリ・キーを 0 に設定すると、コストベースのオプティマイザ (CBO) が強制的に使用されず、データベース・サーバーの通常のルールが適用されます。

クエリー予測で再度コストベースのオプティマイザが強制的に使用されるようにする場合は、このレジストリ・キーを削除するか、値を 1 に設定します。

Windows レジストリに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、「[Discoverer Administrator](#) および [Discoverer Desktop のレジストリ設定](#)」を参照してください。

- Discoverer Plus および Discoverer Viewer の場合

`pref.txt` ファイルの `QPPCBOEnforced` レジストリ設定の値を変更します。変更を有効にするには、プリファレンスを適用する必要があります。プリファレンスを適用すると、新しい値が `reg_key.dc` ファイルに書き込まれます (プリファレンスの設定方法の詳細は、『[Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド](#)』を参照)。

QPPCBOEnforced を 1 に設定すると、クエリー予測でコストベースのオプティマイザが強制的に使用されます。クエリー予測でデフォルトのオプティマイザを使用するように指定するには、QPPCBOEnforced を 0 に設定します。

`.reg_key.dc` ファイルに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、「[Discoverer Plus](#) および [Discoverer Viewer のレジストリ設定](#)」を参照してください。

- コストベースのオプティマイザにおける索引の使用方法を調整できます。たとえば、次のデータベース・パラメータを調整できます。
 - optimizer_index_cost_adj
 - optimizer_index_caching
 データベース・パラメータの詳細は、Oracle10g データベースのドキュメントを参照してください。
- 統計テーブルから既存の統計を削除できます。
 - 詳細は、「古いクエリー予測統計の削除方法」を参照してください。

Secure Views でクエリー予測を使用する方法

Discoverer のクエリー予測機能では、EXPLAIN PLAN 文を使用してクエリーが分析されます。ただし、EXPLAIN PLAN 文では Secure Views に対するクエリーの分析ができません。このため、Secure Views に対するクエリーを行う場合はクエリー予測が正常に機能できなくなります。この制限を回避するには、システム・ビュー V_\$SQL へのアクセス権限をユーザーに付与してください。

システム・ビュー V_\$SQL へのアクセス権限をユーザーに付与する手順は、次のとおりです (Oracle9i 以上のデータベースの場合)。

1. SQL*Plus を起動し (まだ実行されていない場合)、SYS ユーザーあるいは SYSDBA 権限を付与されたユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT sys/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys は SYS ユーザー、sys_pw は SYS ユーザーのパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力して、クエリー予測に必要なビューでの SELECT アクセス権限を付与します。

```
SQL> grant select on v_$sql to public;
```

注意: SELECT ON V_\$SQL を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS ユーザーとしてログインできない場合、または SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合せてください。

注意

- SQL*Plus で次のスクリプトを実行しても、システム・ビュー V_\$SQL へのアクセス権限をユーザーに付与できません。

```
<ORACLE_HOME>%discoverer%util%eulsuqpp.sql
```

このスクリプトを使用するには、SYSTEM パスワードを知っている必要があります。

古いクエリー予測統計の削除方法

様々な理由により、クエリー予測統計が不要になる場合があります。指定した日付より前に作成されたクエリー予測統計をすべて削除できます。

データベースから古いクエリー予測を削除する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger@database;
```

jchan と tiger はそれぞれ EUL 所有者のユーザー名とパスワードです。

2. SQL ファイル eulstdel.sql を実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>%discoverer%util%eulstdel.sql
```

<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

データベースに格納されているクエリー統計のサマリーが表示されます。指定した日数を超える期間が経過したクエリー統計を削除するオプションがあります。

3. (オプション) 何日後にクエリー統計を削除するかを入力します（統計を削除しない場合は空白のままにしておきます）。

日数を指定しない場合、クエリー統計は削除されません。

Discoverer のレジストリ設定

この章では、Discoverer のレジストリ設定について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Discoverer のレジストリ設定について」
- 「Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定」
- 「Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定」
- 「Discoverer Desktop のパフォーマンスを向上させるレジストリ設定」
- 「Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細」
- 「Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法」

Discoverer のレジストリ設定について

Discoverer のレジストリ設定により、特定の条件下での Discoverer の動作を制御します。Discoverer のレジストリ設定には、次のものが含まれます。

- レジストリ設定の名前。通常、これは文字列（例: QPPEnable）です。
- レジストリ設定の値（1、0、文字列など）。

デフォルトでは、各レジストリ設定は最も一般的に必要なとされる値に設定されます。ただし、レジストリ設定の値を変更する場合があります。

Discoverer のレジストリ設定を行う場所は、使用中の Discoverer 製品によって異なります。

- Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定は、.reg_key.dc というレジストリ・ファイルに格納されています。
- Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定は、Windows のレジストリに格納されています。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定

Discoverer Plus および Discoverer Viewer では、.reg_key.dc というレジストリ・ファイルに格納されているレジストリ設定が使用されます。この .reg_key.dc ファイルは、次の場所のいずれかにある中間層サーバー・マシンに配置されています。

- %bin ディレクトリ（デフォルト）
- 環境変数 DC10_REG によって指定されるディレクトリ

エンド・ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Viewer のユーザー設定項目を変更すると、Discoverer により、現行ユーザーに対するその変更が次のレジストリ・キーの下の .reg_key.dc ファイルに書き込まれます。

```
%%HKEY_LOCAL_MACHINE%Software%Oracle%WebDisco 10%...
```

このレジストリ・キーには、現行ユーザーのユーザー名が含まれます。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop では、Windows のレジストリに格納されたレジストリ設定が使用されます。

エンド・ユーザーが Discoverer Administrator または Discoverer Desktop のユーザー設定項目を変更すると、Discoverer により、現行ユーザーに対するその変更が次のレジストリ・キーの下の Windows レジストリに書き込まれます。

```
%%HKEY_CURRENT_USER%Software%Oracle%Discoverer 10%...
```

Windows のレジストリ設定を変更する場合は、次の点に注意してください。

- 変更前に Windows レジストリのコピーをとる
- 誤った変更を行わないように注意する
- 作業について不明な点がある場合は、システム管理者に問い合わせる

Discoverer Desktop のパフォーマンスを向上させるレジストリ設定

次のレジストリ設定は、Discoverer Desktop のパフォーマンスに影響を与える可能性があります。

- BusinessAreaFastFetchLevel
- ObjectsAlwaysAccessible

これらの設定の詳細は、「[Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細](#)」の該当する項目を参照してください。

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細

次の表は、変更が必要な場合の Windows レジストリにおける Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を示しています。

ヒント: レジストリ設定の値を変更するか、Windows のレジストリ・エディタで表示できないレジストリ設定を追加するには、「[Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法](#)」を参照してください。次の表は、Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を示しています。

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
AggregationBehavior	Application	<p>この設定により、Desktop の「オプション」ダイアログにある「集計」タブで、Discoverer Desktop ユーザーが「デフォルトの集計動作を使用します」チェックボックスを選択したときのデフォルトの集計動作が決定します。</p> <p>このレジストリ設定の値を 0 (ゼロ) に設定してあるときに、Desktop の「オプション」ダイアログにある「集計」タブで、Discoverer Desktop ユーザーが「デフォルトの集計動作を使用します」チェックボックスを選択した場合、Discoverer Desktop は、Desktop の「オプション」ダイアログの「フォーマット」タブにある「集計できない値オプションの表示」フィールドで選択した値を使用します。</p> <p>このレジストリ設定の値を 1 に設定してあるときに、Desktop の「オプション」ダイアログにある「集計」タブで、Discoverer Desktop ユーザーが「デフォルトの集計動作を使用します」チェックボックスを選択した場合、Discoverer Desktop は、コントリビュート・セルに表示されている値の合計を表示します。</p> <p>注意: Desktop の「オプション」ダイアログにある「集計」タブで、Discoverer Desktop ユーザーが「デフォルトの集計動作を使用します」チェックボックスの選択を解除すると、このレジストリ設定による現在のワークブックへの影響はなくなります。かわりに、現在のワークシートの集計動作は、ユーザーが選択するラジオ・ボタンによって決定します (詳細は、Discoverer Desktop のヘルプを参照)。</p> <p>注意: AggregationBehavior レジストリ設定は、Discoverer Plus には適用されません。Discoverer Plus に対してデフォルトの集計動作を指定する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。</p>	0	<p>0: Discoverer Desktop は、Desktop の「オプション」ダイアログの「フォーマット」タブにある「集計できない値オプションの表示」で選択された値を表示</p> <p>1: Discoverer Desktop は、コントリビュート・セルに表示された値の合計を表示</p>

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
ArchiveCacheFlushInterval	Database	この設定により、.eex ファイルのエクスポートおよびインポート時の EUL キャッシュ・フラッシュ間隔を制御できます。大規模なアーカイブのエクスポートまたはインポート時の過度なメモリー使用量を防ぐために使用します。	1000	>=0: .eex ファイルのインポートおよびエクスポート時の EUL キャッシュ・フラッシュ間に処理されるオブジェクトの数
AutogenNameOnCreate	Database	この設定により、次のアイテムに対する「名前の自動生成」プロパティのデフォルト値が決定されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 新しくロードされた 2 次要素 ■ 新しく作成された 2 次要素 ■ Oracle Business Intelligence Discoverer のコマンドライン・インタフェース（または Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java インタフェース）と /auto_gen_name コマンド修飾子を使用してインポートされた .EEX ファイル <p>詳細は、「EUL アイテム名の自動生成および自動更新」を参照してください。</p>	0	0: 2 次要素の名前を生成しない 1: 2 次要素の名前を生成する
BusinessAreaFastFetchLevel	Database	この設定により、ビジネスエリアがフェッチされるたびにフォルダおよびアイテムに対して行われる事前キャッシュの量を制御できます。 一般に、この値が低いほど、各種ダイアログにすぐに表示されるフォルダおよびアイテムの数が少なくなります。	1	0: 高速フェッチなし 1: 各ビジネスエリア内のフォルダを高速フェッチ 2: Discoverer Desktop のみで各ビジネスエリア内のフォルダおよびアイテムを高速フェッチ 3: Discoverer Administrator のみで各ビジネスエリア内のフォルダおよびアイテムを高速フェッチ 4: 各ビジネスエリア内のフォルダおよびアイテムを高速フェッチ
CreateJoinInOtherBAs	Administrator	この設定により、フォルダのロードまたはリフレッシュ時に Discoverer Administrator が生成する結合の範囲を制御できます。デフォルトでは、同じビジネスエリア内のフォルダ間でのみ結合が自動生成されます。ただし、異なるビジネスエリア間で結合を自動生成するように指定することもできます。 この設定により、このオプションを制御できます。	0	0: 現行ビジネスエリア外のフォルダへ結合を生成および確認をしない >0: 現行ビジネスエリア外のフォルダへ結合を生成および確認をする
DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh	Database	リフレッシュ時に、更新されたアイテムの説明を破棄して元の説明に置き換えるか、または更新された説明を保持するかを指定します。	0	0: 更新された説明を使用する 1: 元の説明を使用する

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
DisableAlternateSortOptimisation		この設定により、最適化された代替ソート・クエリーを Discoverer で書き込むかどうかを指定します。 ヒント : 外部で登録されたサマリーを使用する場合のみ 1 を設定します。	0	0: 最適化された代替ソート・クエリーを書き込まない 1: 最適化された代替ソート・クエリーを書き込む
DisableAutoOuterJoinsOnFilters	Database	この設定により、1 つまたは複数の条件が適用された外部結合を含むクエリーの実行時における Discoverer の動作を切り替えることができます。この設定の影響は、第 10 章「結合の作成とメンテナンス」で例をあげて説明されています。	0	0: フィルタへの外部結合を無効にしない 1: フィルタへの外部結合を無効にする
DisableMultiJoinDetection	Database	この設定により、Discoverer Desktop でのワークシートの作成時における複数の結合パスの検出を切り替えることができます。 1 に設定すると、ワークシート作成時に Discoverer Desktop ですべての結合オプションが選択されます。 設定値が 0 で、複数の結合が存在する場合、Discoverer Desktop により「フォルダの結合」ダイアログが表示されます。ここで、ワークシートで使用する結合 (1 つまたは複数) を選択します。 注意 : Discoverer で正確な結果データを表示できるように、使用可能なすべての結合を Discoverer Desktop ユーザーが選択することをお勧めします。	0	1: 複数の結合の検出を無効にする 0: 複数の結合の検出を無効にしない
EnableTriggers	Database	データベース・トリガーを無効にするかどうかを指定します。 たとえば、Discoverer では、リフレッシュ時に検索されたすべての新しい列に対してデータベースのコールが試行されます。この値を 0 (ゼロ) に設定した場合、Discoverer によるデータベースのコールはありません。	0	0: データベース・トリガーを無効にする 1: データベース・トリガーを有効にする
EULUpgradeForceCommitForAllSteps	Database	この設定によりコミット処理が影響を受けるため、以前の EUL をアップグレードするときのロールバック領域使用量も影響を受けます。ロールバック領域が制限されているために EUL のアップグレードに問題がある場合、この設定を使用すればより頻繁なコミットが可能になります。	0	
EULUpgradeRollbackSegment	Database	この設定を定義すると、その値が、アップグレード中に使用するロールバック・セグメントの名前になります。つまり、Large_RB1 と設定すると、"SET TRANSACTION USE ROLLBACK SEGMENT Large_RB1" という文が発行されます。	デフォルトなし	

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
ExportJoinFromMaster	Database	ビジネスエリアのエクスポート時に、マスター・フォルダからの結合もエクスポートするかどうかを指定します。	0	0: マスター・フォルダからの結合をエクスポートする 0 (ゼロ) 以外の任意の値: マスター・フォルダからの結合をエクスポートしない
FormatXML	Database	XML エクスポート・ファイルにスペースを入れて読みやすくする場合は 1 に設定してください。ただし、ファイルのサイズが大きくなります。 0 に設定したり、エントリが存在しない場合は、エクスポート・ファイルでインデントが使用されなくなるため、ファイルのサイズが小さくなります。	0	0: インデントを使用しない 1: スペースを含む
MaxNumberJoinPredicates	Database	バルク・ロード時に、主キーまたは外部キーではなく列名に基づいて自動結合を作成することもできます。同じテーブルをすでにロードしている場合、そのテーブル内のすべての列に一致する結合が作成されます。バルク・ロード時に一致する列名を使用して 1 つの結合内の述語の最大数を指定すれば、これらの結合の作成を中止できます。	20	
ObjectsAlwaysAccessible	Database	基礎となるデータベース・テーブルが存在しない（またはなんらかの理由でアクセスできない）場合でも、ビジネスエリア・オブジェクトおよびアイテムを表示するかどうかを（Discoverer Desktop で）指定します。 この確認を無効にすると、ビジネスエリア・オブジェクトおよびアイテムの表示速度が向上します。ユーザーによるクエリの実行時、データベース・オブジェクトが存在しないか、ユーザーがデータベース・オブジェクトへのアクセス権を持たない場合にこの値を 1 に設定すると、Discoverer Desktop によりエラー・メッセージ（例: ORA-00942 「テーブルまたはビューが存在しません。」）が表示されます。	1	0: 確認する 1: 確認せず、オブジェクトおよびアイテムが存在すると仮定する

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
QPPCBOEnforced	Database	<p>1 に設定すると、コストベースの 옵ティマイザが使用されます。0 に設定すると、デフォルトの 옵ティマイザが使用されます。</p> <p>コストを取得する文をクエリー予測で解析する必要があります。コストベースの 옵ティマイザで解析している場合にのみコストを取得できます (ルールベースの 옵ティマイザによる解析時にはコストは生成されません)。Discoverer では、これらの文の解析時にデフォルトでコストベースの 옵ティマイザが強制的に使用されます。</p> <p>このレジストリ設定を 0 に設定すると、データベースおよびクエリーに含まれるテーブルに対してデフォルトの 옵ティマイザが使用されます。つまり、ルールベースの 옵ティマイザがデフォルトであり、テーブルが分析されていない場合、クエリー予測が使用できなくなります。</p>	1	<p>0: デフォルトのクエリー 옵ティマイザを使用</p> <p>1: コストベースの 옵ティマイザを使用</p>
QPPCreateNewStats	Database	<p>1 に設定すると、新規統計が記録されます。これらの統計は、クエリー予測で使用されます。</p> <p>0 に設定すると、クエリー予測用の新規統計は作成されません。</p>	1	<p>0: FALSE</p> <p>1: TRUE</p>
QPPEnable	Database	<p>クエリー予測を有効化または無効化できます。</p> <p>1 に設定すると、クエリー予測 (QPP) が使用されます。</p>	1	<p>0: FALSE</p> <p>1: TRUE</p>
RdbFastSQLOff	Database	<p>この設定は、RDB に対して実行される Discoverer にのみ適用されます。1 に設定すると、RDB サーバー上で "fast sql" が無効になります。</p> <p>Oracle RDB に対してエラーが検出された場合のみこのレジストリ設定を使用してください。これにより、一部の問題を回避できることがあります。Oracle RDB のサポートの詳細は、第 23 章「Oracle 以外のデータベースおよび Oracle RDB に対する Discoverer サポート」を参照してください。</p>	1	<p>0: FALSE</p> <p>1: TRUE</p>
SetNULLItemHeadingOnBulkLoad	Database	<p>バルク・ロードの実行時に、アイテムのヘッダーをアイテムの表示名と同じ値に設定するか、または NULL に設定するかを指定します。</p>	0	<p>0: アイテムのヘッダーをアイテムの表示名に設定する</p> <p>1: アイテムのヘッダーを NULL に設定する</p>

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
ShowReadOnlyPrompt	Application	ファイル・ベースのワークブックを読み取り専用にするようにオペレーティング・システム権限を設定できます。この例では、ユーザーがワークブックを開くとき、「読み取りまたは書き込み用にこのワークブックを開くことができないため、変更は別のワークブックに保存してください」という警告メッセージが表示されます。このレジストリ設定により、警告メッセージを表示しないようにできます。	0	0: FALSE 1: TRUE
SQLFlatten	Database	Discoverer で SQL をフラット化して、クエリー SQL 内のインライン・ビューの使用を最小限にするかどうかを制御します。	1	1: 有効 0: 無効
SQLItemTrim	Database	無関係あるいは使用しないアイテムについて、Discoverer で SQL をトリミングするかどうかを制御します。	1	1: 有効 0: 無効
SQLJoinTrim	Database	Discoverer で SQL から結合を削除するかどうかを制御します (詳細は「クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響」を参照)。	1	1: 有効 0: 無効
SqlTrace	Database	<p>Oracle サーバー・トレース・ファイルが作成され、データベース・サーバーに送信されたすべての Discoverer SQL 文がこのトレース・ファイルに書き込まれます。</p> <p>サーバー・トレース・ファイル (拡張子: .trc) のデフォルトの場所は次のとおりです。</p> <p><ORACLE_HOME>%rdbms%trace (Windows の場合)</p> <p>%ORACLE_HOME%/log (UNIX の場合)</p> <p>注意: トレース・ファイルが作成され、必要な SQL 文がトレース・ファイルに書き込まれた後は、SqlTrace の値を数値ゼロ (0) にリセットして、それ以上の SQL 文がファイルに書き込まれないようにする必要があります。SqlTrace の値をゼロ (0) にリセットすることにより、トレース・ファイルが書き込まれた後で不要な処理が行われるのを防止できます。</p> <p>注意: この設定が有効になっている Discoverer をデータベース・ユーザーが使用するには、DBA 権限が必要です。</p> <p>詳細は、第 26 章「SQL ファイルおよびトレース・ファイルの使用」を参照してください。</p>	0	1: 有効

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
SQLType	Database	<p>「SQL インспекタ」ダイアログでの SQL の表示方法を決定します。</p> <p>詳細は、「Discoverer で「SQL インспекタ」ダイアログに SQL を表示する方法の構成」を参照してください。</p>	0	<p>0: フラット化された SQL (つまり、Oracle の標準フォーマット)</p> <p>2: ネイティブな SQL (つまり、インライン・ビューとともにカーネルに送られる Discoverer SQL)</p> <p>3: オブジェクトの別名がないフラット化された SQL (つまり、Oracle の標準フォーマット)</p>
SummariesAlwaysAccessible	Database	<p>「サマリー」タブからのサマリー・フォルダを迅速に表示し、実際にアクセス可能かどうかにかかわらず、これらのサマリー・フォルダをすべてアクセス可能と表示します。この設定により、時間がかかる可能性のある検証および確認を回避して、サマリー・フォルダの表示または変更を迅速に行うことができます。この設定を使用する必要があるのは、サマリー・フォルダの数が多い場合の設定のみです。</p> <p>注意: この設定を有効にすると、実際にはアクセスできないサマリー・フォルダが UI ではアクセス可能と表示され、この設定を無効にするまで、UI には実際のアクセス可能性が反映されません。このため、Discoverer マネージャが必要な処置を見落とす可能性があります。</p> <p>「サマリー」タブからのサマリー・フォルダを迅速に表示するには、1 に設定してください。</p> <p>「サマリー」タブで表示する前にサマリー・フォルダを検証するには、0 に設定してください。</p>	0	<p>0: FALSE</p> <p>1: TRUE</p>
MaxNumListRows	Administrator	<p>表示するユーザー / ロールの最大数を指定します。たとえば、システムに 100 万人のユーザーがいる場合、すべてのユーザーを表示するには時間がかかり、大量のメモリーを使用することになります。</p> <p>このレジストリ設定で指定した制限を超えた場合、Discoverer では、最大の結果数が取り出されたことを通知するエラー・メッセージが表示されます。さらに多くの結果を Discoverer で表示するには、このレジストリ設定で指定する行数を増やす必要があります。</p> <p>注意: このレジストリ設定を UserRoleFilter レジストリ設定とともに使用すると、表示されるユーザーまたはロールのリストを詳細化できます。</p>	設定しない場合、結果の制限は 100,000 行にデフォルト設定される	

レジストリ設定の名前	ディレクトリ	説明	デフォルト値	有効な値
UserRoleFilter	Administrator	<p>この設定に使用された値で始まるユーザーおよびロールのみが、Discoverer Administrator に表示されます。この設定では大文字と小文字が区別されません。</p> <p>この設定を有効にすると、Discoverer の「権限」ダイアログや「セキュリティ」ダイアログでデータベース・ユーザーやロールの非常に長いリストが表示される時間を短縮できます。たとえば、この値を SYS に設定すると、Discoverer では SYS という文字で始まるユーザーおよびロールのみが表示されます (SYS、SYSMAN、SYSTEM など)。</p> <p>変更を有効にするために、Discoverer Administrator を再起動する必要はありません。「セキュリティ」ダイアログまたは「権限」ダイアログを閉じ、レジストリを更新し、再びダイアログを表示するだけで変更が有効になります。この設定に値がない場合 (デフォルト)、Discoverer ではすべてのユーザーとロールが表示されます。</p> <p>注意: この設定は、権限を付与されているユーザーおよびロール、あるいは PUBLIC ユーザーの表示には影響を与えません (設定にかかわらず表示されます)。</p> <p>注意: このレジストリ設定を MaxNumListRows とともに使用すると、表示されるユーザーまたはロールのリストを詳細化できます。</p>	デフォルトなし	

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法

Windows レジストリ・エディタを使用して、Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を編集します。

レジストリ・エディタの起動方法とレジストリ設定の編集方法は、使用中の環境によって異なります。

Windows 環境でレジストリ・エディタを起動し、Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を編集する手順は、次のとおりです。

- Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- 「ファイル名を指定して実行」ダイアログで、「regedt32」と入力し、「OK」をクリックします。
- ¥¥HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Oracle¥Discoverer 10¥ レジストリ・キーを開いて、Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を参照します。
- レジストリ・エディタに表示されている Discoverer Administrator または Discoverer Desktop のレジストリ設定の値を編集する場合は、次の操作を行います。
 - レジストリ・エディタの右側のペインに表示されているレジストリ設定をダブルクリックして、DWORD エディタ・ダイアログを表示します。
 - レジストリ設定の既存の値を新しい値で置き換え、「OK」をクリックします。

5. レジストリ・エディタに現在表示されていない Discoverer Administrator または Discoverer Desktop のレジストリ設定の値を編集する場合は、次の操作を行います。
 - a. レジストリ設定の上に表示されているキー名をクリックします。

たとえば、QPPEnable を 0 (ゼロ) に設定するときに、レジストリ・エディタに QPPEnable が表示されていない場合は、¥¥HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Oracle¥Discoverer 10¥Database¥key をクリックして選択します。特定のレジストリ設定のレジストリ・キーの詳細は、「[Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細](#)」を参照してください。
 - b. 「編集」 → 「値の追加」を選択すると、「値の追加」ダイアログが表示されます。
 - c. 追加する Discoverer のレジストリ設定の名前 (例: QPPEnable) を入力し、「OK」をクリックします。

「文字列エディタ」ダイアログが表示されます。

注意: Discoverer Administrator のレジストリ設定は、「[Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細](#)」のテーブルに指定された事例に限定する必要があります。
 - d. Discoverer のレジストリ設定の値 (1 など) を入力し、「OK」をクリックします。

レジストリ・エディタに、指定した値のレジストリ設定が表示されます。
6. 「レジストリ」 → 「レジストリ エディタの終了」を選択して、レジストリ・エディタを閉じます。

Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース

この章では、Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェースの概要を説明します。項目は次のとおりです。

- 「使用可能な Discoverer コマンドライン・インタフェース」
- 「Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース」
- 「Discoverer コマンドライン・インタフェースと Discoverer EUL command line for Java の相違点」
- 「Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド」
- 「Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド修飾子」
- 「Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用」
- 「Discoverer コマンドライン・インタフェースの実行に必要な権限」
- 「コマンドの使用に関する注意」
- 「このガイドで使用されるコマンド構文規則」
- 「コマンドの構文」
- 「コマンドの例」
- 「コマンド・ファイル」
- 「コマンド・ファイルの作成方法」
- 「コマンド・ファイルの実行方法」
- 「コマンド・ファイルの例」
- 「Discoverer Administrator コマンドのクイック・ガイド」
- 「Discoverer Administrator コマンド・リファレンス」
- 「Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス」
- 「Discoverer Desktop コマンド・リファレンス」

使用可能な Discoverer コマンドライン・インタフェース

Discoverer には、次のコマンドライン・インタフェースがあります。

- Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース
詳細は、「[Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース](#)」を参照してください。
- Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java
詳細は、『[Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド](#)』を参照してください。

Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェース

Oracle Business Intelligence Discoverer コマンドライン・インタフェースは、一連のテキスト・ベースのコマンドです。これを利用すると、Discoverer EUL を作成および操作できます。

注意: Oracle 以外のデータベースへの接続には異機種間サービスを使用します。ただし、EUL は Oracle データベースに格納されます。Oracle 以外のデータベースを使用する方法の詳細は、[第 23 章「Oracle 以外のデータベースおよび Oracle RDB に対する Discoverer サポート」](#)を参照してください。

Discoverer コマンドライン・インタフェースは、Windows プラットフォーム上でのみ実行されます。

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用すると、Discoverer Administrator または Discoverer Desktop のグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) を実行しなくても作業ができます。たとえば、Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して次のことができます。

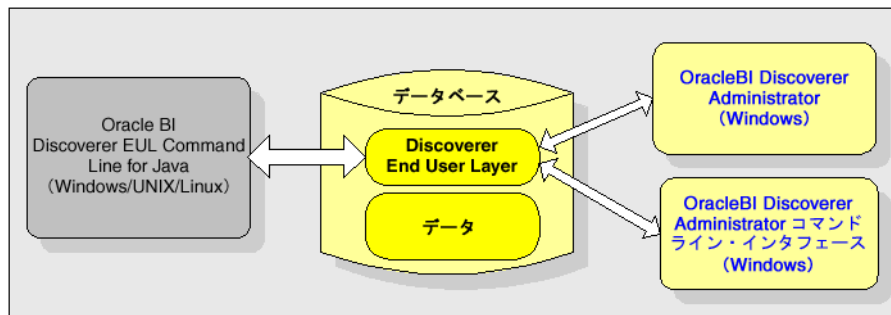
- EUL オブジェクトのインポート
- EUL オブジェクトのエクスポート
- EUL オブジェクトのリフレッシュ

さらに、(MS-DOS バッチ・ファイルまたは Unix スクリプト・ファイルと同様に) 複数のコマンドを含むコマンド・ファイルを作成し、グループ化された管理作業を自動的に実行できます。

次の図は、Discoverer EUL を操作する 3 つの異なる方法を示しています。

- Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java インタフェースを Windows、UNIX または Linux マシンで使用
- Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator を Windows マシンで使用
- Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator コマンドライン・インタフェースを Windows マシンで使用

図 22-1 Discoverer EUL に対する Discoverer の各インタフェース



注意：

- Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド・リストは、「[Discoverer Administrator コマンド・リファレンス](#)」および「[Discoverer Desktop コマンド・リファレンス](#)」を参照してください。

Discoverer コマンドライン・インタフェースと Discoverer EUL command line for Java の相違点

Discoverer コマンドライン・インタフェースの多くは、Discoverer EUL command line for Java と互換性があります。Discoverer コマンドライン・インタフェース用に記述されたコマンドやスクリプトは、Discoverer EUL command line for Java で実行するために簡単に変換できます。

Discoverer コマンドライン・インタフェースと Discoverer EUL command line for Java の違いは次のとおりです。

- Discoverer EUL command line for Java は、すべてのプラットフォームで実行できます。Discoverer コマンドライン・インタフェースは、Windows でのみ実行されます。
注意： Discoverer EUL Command Line for Java Interface を実行するために、Discoverer Administrator をインストールする必要はありません。
- Discoverer EUL command line for Java のコマンドには、eulapi という接頭辞が付きます。
- Discoverer コマンドライン・インタフェースの一部のコマンドには、構文にわずかな違いがあります（詳細は、『Oracle Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』を参照）。
- Discoverer EUL command line for Java 修飾子の先頭にはダッシュが付いています。Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド修飾子の先頭にはスラッシュが付いています。

Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド

Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンドは、なんらかの方法で Discoverer EUL を操作するための命令です。次に例を示します。

- /CONNECT コマンドを使用すると、指定されたユーザー名、パスワード、データベース名を使用してデータベースに接続できます。次に例を示します。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database
```
- /IMPORT コマンドを使用すると、指定された Discoverer エクスポート・ファイル（.EEX ファイル）から現在の EUL に EUL オブジェクトをインポートできます。ファイル c:\data\sales.eex から EUL オブジェクトがインポートされる例を次に示します。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database /import c:\data\sales.eex
```

注意： コマンドは大文字と小文字を区別しません（詳細は、「[コマンドの使用に関する注意](#)」を参照してください）。

Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド修飾子

Discoverer コマンドライン・インタフェースのコマンド修飾子は、コマンドを修飾すなわち詳細化する命令です。次に例を示します。

- コマンド修飾子 /LOG により、コマンドの実行中に、処理している情報を格納するログ・ファイルが作成されます。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database /import c:\data\sales.eex /log sales_import_logfile
```

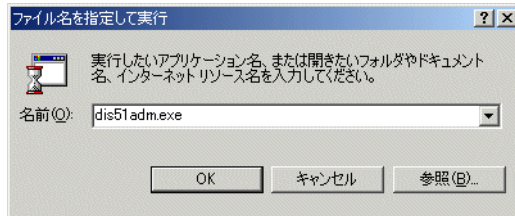
- コマンド修飾子 /ITEM をコマンド /DELETE と使用して、EUL から削除する EUL アイテムを指定します。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database /delete /item sales.profit
```

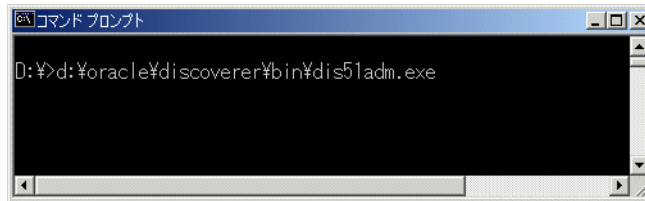
Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用

Discoverer コマンドは次の方法で実行できます。

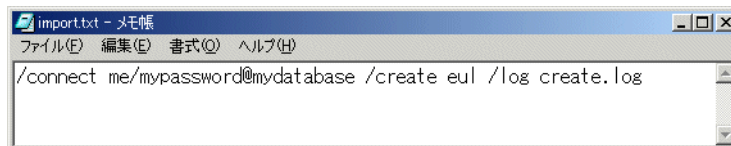
- Windows の「ファイル名を指定して実行」ダイアログ（Windows の「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」を選択して表示）でコマンドを直接入力できます。



- コマンド・プロンプト・ウィンドウを開き、コマンドを直接入力できます。たとえば、Discoverer Administrator で使用可能なすべてのコマンドを表示するには、次のように入力します。



- 一連のコマンドをテキスト・ファイル（コマンド・ファイルとも呼ばれます）に格納し、Discoverer 実行ファイルの引数としてテキスト・ファイルを実行できます。たとえば、テキスト・ファイル Import.txt に格納されたコマンドを実行するには、次のように入力します（次のメモ帳のコマンド・ファイルの例を参照してください）。



前述のコマンド・ファイルを実行するには、コマンドラインに次のように入力します。

```
dis51adm.exe /cmdfile import.txt
```

Discoverer コマンドライン・インタフェースの実行に必要な権限

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用するには、Discoverer グラフィカル・ユーザー・インタフェースを使用するときと同じ Discoverer 権限を必要とします。

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して EUL で操作を実行するには、正しい権限を持っている必要があります。正しい権限を持たない場合、操作は失敗します。

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用する場合は、修飾子 /eul を使用して、EUL を明示的に指定できます（詳細は「/eul」を参照）。EUL を指定しないと、Discoverer はデフォルトの EUL をデータベース・ユーザーの EUL として識別します。

コマンドの使用に関する注意

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用する場合は、次の規則が適用されます。

- コマンド `dis51adm.exe /?` を Windows の「ファイル名を指定して実行」ダイアログに入力すると、Discoverer Administrator で使用可能なすべてのコマンドを表示できます。
- コマンドは大文字と小文字を区別しません。大文字と小文字を入れ換えても使用できます。
- コマンドは、後に引数をどのような順序にも定義して続けることができます。
- コマンド修飾子は、後に引数をどのような順序にも定義して続けることができます。
- オブジェクト名が必要なエリア（EUL またはビジネスエリアなど）でオブジェクト名を指定しない場合、Discoverer はデフォルトで Discoverer マネージャが所有するオブジェクトに設定します。
- Discoverer EUL オブジェクトを指定する場合は、表示名または識別子を使用できます。たとえば、Discoverer フォルダが表示名「Sales」と識別子「SALES_132388」を持つ場合、`/refresh_folder` コマンドの引数としてこのフォルダを 2 通りの方法で指定できます。
 - `/refresh_folder Sales`
 - `/refresh_folder SALES_132388 /identifier`

識別子の詳細は、「識別子」を参照してください。

特殊な文字（スペースなど）を含むオブジェクトの表示名または識別子を指定する場合は、二重引用符（"）で文字列全体を囲みます。たとえば、フォルダ・オブジェクト「Sales Figures」の場合は「`/folder "Sales Figures"`」と入力します。

- コマンドを使用する場合は、一度に 1 つのコマンドを実行します。一度に複数のコマンドを実行しようとする、エラーが発生することがあります。
- `/connect` コマンドを使用して、「接続 ダイアログ」をバイパスする場合は、スラッシュで始まる引数を二重引用符で囲む必要があります。次に例を示します。


```
/connect "/[@<dbname>]"
```
- Discoverer Desktop コマンドライン・インタフェースを使用してデータベースからワークブックを開く場合（`/opendb` コマンドを使用）、ワークブック名にピリオドを含めないようにします。

このガイドで使用されるコマンド構文規則

このガイドでは、次のコマンド構文規則を使用します。

- Discoverer コマンドと修飾子はプレーン・テキストで表示されます。
- 必須のコマンド引数は山カッコ <> で囲みます。
- オプションのコマンド引数は角カッコ [] で囲みます。
- パイプ文字（|）でコマンド引数が区切られている場合は、どちらか 1 つを選んで入力します。たとえば、コマンド `'/refresh | /rename'` では、`'/refresh'` または `'/rename'` を入力します。

図 22-2 このマニュアルで使用されるコマンド規則



コマンドの構文

Discoverer コマンドライン・インタフェースでは、次の構文を使用します（改行またはキャリッジ・リターンなしで 1 行に入力します）。

```
dis51adm.exe  
[/connect <user>/<password>[@<dbname>]]  
/<command> [/<argument(s)>]  
[/<modifier(s)> [/<argument(s)>]]
```

- dis51adm.exe: Discoverer 実行ファイルの名前。名前は、次のように Discoverer のリリースによって異なります。
 - Discoverer 3.1: dis31adm.exe
 - Discoverer 4.1: dis4adm.exe
 - Discoverer 9.0.4/10.1.2: dis51adm.exe
- [/connect <userid>/<passwd>[@<dbname>]]: このオプションのコマンド引数により、「接続 ダイアログ」をバイパスできます。
- /<command> [/<argument(s)>]: 有効な Discoverer コマンドとそれに続く必要な引数。
- [/<modifier(s)> [/<argument(s)>]]: 1 つ以上の有効な Discoverer 修飾子とそれに続く必要な引数。

コマンドの例

例 1

「eul_sales」EUL から「Sales」フォルダと「Sum1」サマリーを削除するには、次のコマンドを使用します。

```
dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /delete /folder "Sales" /summary "Sum1"  
/eul eul_sales /log del.log
```

例 2

「Sales1」フォルダと「Sales2」フォルダをリフレッシュするには、次のコマンドを使用します。

```
dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /refresh_folder "Sales1, Sales2" /log  
refsum.log
```

例 3

データベースに Applications モード EUL を作成し、これにアクセス権を付与するには、次のコマンドを使用します。

```
dis51adm.exe /connect eul_owner:appsresp/appspwd@appsdb /create_eul /apps_mode /apps_  
grant_details apps/apps
```

コマンド・ファイル

コマンド・ファイルは、コマンドラインから自動的に実行できる 1 つ以上の Discoverer コマンドを含むテキスト・ファイルです。コマンド・ファイルは、MS-DOS バッチ・ファイルや UNIX スクリプト・ファイルと同じように機能します。

コマンド・ファイルのコマンドは、コマンドラインに直接入力された順序で処理されます。テキスト・ファイルに埋め込まれたキャリッジ・リターンは無視されます。

コマンド・ファイルは、その中で他のコマンド・ファイルを呼び出すことができます。これは、コマンドラインを半角 255 文字までとしている Microsoft Windows の制限を回避する便利な方法です。

コマンド・ファイルの作成方法

コマンド・ファイルはテキスト・エディタを使用して作成できます。テキスト・エディタにコマンドを入力し、拡張子 `.txt` を使用して保存します。

コマンド・ファイルの実行方法

コマンド・ファイルを実行するには、`/cmdfile` コマンドの引数としてコマンド・ファイル名を持つ Discoverer Administrator 実行ファイル (`dis51adm.exe` など) を起動します。たとえば、テキスト・ファイル `Import.txt` に格納されたコマンドを実行するには、次のように入力します。

```
dis51adm.exe /cmdfile Import.txt
```

`/cmdfile` コマンドを繰り返して、2 つ以上のコマンド・ファイルを実行することもできます。たとえば、テキスト・ファイル `Login.txt` に格納されたコマンドを実行し、次にテキスト・ファイル `Import.txt` に格納されたコマンドを実行するには、次のように入力します。

```
dis51adm.exe /cmdfile Login.txt /cmdfile Import.txt
```

コマンド・ファイルの例

コマンド・ファイルは、モジュール化コマンドを格納するのに便利です。これにより、モジュール化コマンドを異なる組合せで使用できます。たとえば、次の 3 つのコマンド・ファイルは次のコマンドを含んでいます。

- `connect.txt`
行 `/connect me/mypassword@mydatabase` を含んでいます。
- `create.txt`
行 `/create eul /log create.log` を含んでいます。
- `delete.txt`
行 `/delete eul /log delete.log` を含んでいます。

これら 3 つのファイルは、次の 3 つの組合せのいずれかのコマンドラインから実行できます。

- `dis51adm.exe /cmdfile connect.txt`
これにより、コマンドラインからの接続が単純化されます。
- `dis51adm.exe /cmdfile connect.cmd /cmdfile create.txt`
これにより、接続したユーザーの EUL への接続と作成が行われ、`create.log` という名前のログ・ファイルにすべての出力が格納されます。
- `dis51adm.exe /cmdfile connect.cmd /cmdfile delete.txt`
これにより、接続したユーザーが所有する EUL に接続して削除し、`delete.log` という名前のログ・ファイルにすべての出力が格納されます。

Discoverer Administrator コマンドのクイック・ガイド

Discoverer Administrator コマンドの簡単な説明を次の表に示します。

コマンド	説明
<code>/?</code>	オンライン・ヘルプを表示します。
<code>/apps_fndnam <foundation name></code>	接続の詳細を上書きします。
<code>/apps_gwyuid <gateway user id/password></code>	接続の詳細を上書きします。
<code>/apps_user</code>	Oracle Applications ユーザーとして接続します。
<code>/asm <modifier(s)></code>	サマリー管理を自動化します (ASM)。
<code>/cmdfile</code>	コマンド・ファイルを実行します。
<code>/connect <user-name>/<password> [@<database>]</code>	EUL に接続します。
<code>/create_eul</code>	EUL を作成します。
<code>/create_eul /apps_mode</code>	APPS EUL を作成します。
<code>/delete <modifier(s)></code>	EUL オブジェクトを削除します。
<code>/delete_bus_area <business area></code>	ビジネスエリアを削除します。
<code>/delete_eul</code>	EUL を削除します。
<code>/export (EUL オブジェクト) <export file> <modifier(s)></code>	EUL オブジェクトをエクスポートします。
<code>/import (ビジネスエリア) <business area></code>	ビジネスエリアをインポートします。
<code>/import (EUL オブジェクト) <import file(s)> <modifier(s)></code>	EUL オブジェクトをインポートします。
<code>/load <business_area></code>	ビジネスエリアをロードします。
<code>/refresh_bus_area <bus area name(s)></code>	ビジネスエリアをリフレッシュします。
<code>/refresh_folder <folder name(s)></code>	フォルダをリフレッシュします。
<code>/refresh_summary <summary name(s)> <bus area name></code>	サマリー・フォルダをリフレッシュします。

次の表を使用して、特定の作業に使用するコマンドを確認してください。

作業	使用するコマンド
サマリー管理を自動化 (ASM) します。	<code>/asm <modifier(s)></code>
Oracle Applications ユーザーとして接続します。	<code>/apps_user</code>
EUL に接続します。	<code>/connect <user-name>/<password> [@<database>]</code>
EUL を作成します。	<code>/create_eul</code>
APPS EUL を作成します。	<code>/create_eul /apps_mode</code>
ビジネスエリアを削除します。	<code>/delete_bus_area <business area></code>

作業	使用するコマンド
EUL を削除します。	<code>/delete_eul</code>
EUL オブジェクトを削除します。	<code>/delete <modifier(s)></code>
オンライン・ヘルプを表示します。	<code>/?</code>
EUL オブジェクトをエクスポートします。	<code>/export (EUL オブジェクト) <export file> <modifier(s)></code>
ビジネスエリアをインポートします。	<code>/import (ビジネスエリア) <business area></code>
EUL オブジェクトをインポートします。	<code>/import (EUL オブジェクト) <import file(s)> <modifier(s)></code>
ビジネスエリアをロードします。	<code>/load <business_area></code>
接続の詳細を上書きします。	<code>/apps_fndnam <foundation name></code>
ビジネスエリアをリフレッシュします。	<code>/refresh_bus_area <bus area name(s)></code>
フォルダをリフレッシュします。	<code>/refresh_folder <folder name(s)></code>
サマリーをリフレッシュします。	<code>/refresh_summary <summary name(s)> <bus area name></code>
コマンド・ファイルを実行します。	<code>/cmdfile <command file name(s)></code>

Discoverer Administrator コマンド・リファレンス

この項では、Discoverer Administrator コマンドライン・インタフェースの各コマンドに関するリファレンス情報について詳細に説明します。次の点に注意してください。

- コマンドはアルファベット順に記載されています。
- コマンドは、コマンド修飾子により詳細化できます（詳細は、「[Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス](#)」を参照してください）。

`/?`

このコマンドは、Discoverer コマンドのリストとその構文および引数を表示します。

情報	詳細
■ 構文:	<code>/?</code>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	なし
■ 制限:	なし
■ 例:	<code>dis51adm.exe /?</code>

/apps_fndnam

このコマンドは、「オプション」ダイアログの「接続」タブにあるフィールド FNDNAM の値を上書きします。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_fndnam <foundation name>
■ 構文:	/apps_gwyuid <gateway user id>/<password>
■ 例:	dis51adm.exe /connect appsuser:appsresp/appspwd@appsdb /apps_fndnam apps /apps_gwyuid applsyspub/pub

/apps_gwyuid

このコマンドは、「オプション」ダイアログの「接続」タブにあるフィールド GWYUID (ゲートウェイ・ユーザー ID のパスワードを含む) の値を上書きします。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_gwyuid <gateway user id>/<password>
■ 例:	dis51adm.exe /connect appsuser:appsresp/appspwd@appsdb apps /apps_gwyuid applsyspub/pub

/apps_user

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続します。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_user
■ 修飾子:	/apps_responsibility /apps_security_group
■ 例	dis51adm.exe /connect appsuser/appspwd@appsdb /apps_user /apps_responsibility "UK_Purchasing" /apps_security_group "UK_Managers" または dis51adm.exe /connect appsuser:UK_ Purchasing/appspwd@appsdb /apps_user /apps_security_group "UK_Managers"

/asm

Discoverer の自動サマリー管理機能 (ASM) を実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/asm [/asm_space <bytes> /asm_space <bytes> /asm_tablespace <tablespace name>]
■ 修飾子:	/asm_space 、 /asm_tablespace
■ 制限:	/asm_tablespace 引数を指定する場合は、asm_space 引数を指定する必要があります。
■ 例:	dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /asm /asm_ space 2182 /asm_tablespace user_data

/cmdfile

テキスト・ファイルに格納されているコマンドを自動的に実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/cmdfile <file name>
■ 注意:	コマンド・ファイルを作成するには、一般的なテキスト・エディタを使用して1つ以上の Discoverer コマンドを含むテキスト・ファイルを作成する必要があります。テキスト・ファイルのコマンドを実行するには、コマンドラインに次のように入力します。 dis51adm.exe /cmdfile <file name> 詳細は、「 コマンド・ファイル 」を参照してください。
■ 例:	テキスト・ファイルの myFile に格納されているコマンドを実行するには、コマンドラインに次のコマンドを入力します。 dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /cmdfile myFile

/connect

「[接続](#)」ダイアログにユーザー名とパスワードを入力せずに EUL に接続します。

情報	詳細
■ 構文:	/connect <userid>/<passwd>[@<dbname>]]
■ 修飾子:	/eul <eul> /apps_user /apps_responsibility <responsibility> /apps_gwyuid <gwyuid> /apps_fndnam <fndnam> /apps_security_group <security_group>
■ 注意:	第 17 章「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方 法」 も参照してください。
■ 例:	dis51adm.exe /connect user/password@database

/create_eul

Discoverer EUL を作成します。

情報	詳細
■ 構文:	/create_eul
■ 修飾子:	/apps_mode /apps_grant_details /default_tablespace /eul_language <language> /log /overwrite /password /private /show_progress /temporary_tablespace /user

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 注意: 	<p>/create_eul コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新規 EUL の所有者のユーザー名とパスワードを指定します。ユーザー名とパスワードを指定しないと、ユーザー ID に対して所有権を取得できません。 新規 EUL の所有者が持つ既存の EUL を上書きするかどうかを指定します。 新規 EUL がパブリック (デフォルト) であるかまたはプライベートであるかを指定します。 <p>End User Layer の作成と削除の詳細は、第 4 章「End User Layer の作成とメンテナンス」を参照してください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 例: 	<p>既存の EUL を上書きし、すべてのログ・エントリを create.log という名前のファイルに記録して、ユーザー名が "Bob"、パスワードが welcome であるプライベート EUL を作成するには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /create_eul /overwrite /user bob /password welcome /private /log create.log</pre>

/create_eul /apps_mode

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して Oracle Applications モード EUL を作成します。このコマンドは (Oracle Applications モードで) Discoverer Administrator を起動し、データベースに Applications モード EUL を作成して、この Applications モード EUL にユーザーを接続します。例には、スキーマおよびパスワードの記述も含まれています。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 構文: 	/create_eul /apps_mode
<ul style="list-style-type: none"> 修飾子: 	/apps_grant_details
<ul style="list-style-type: none"> 例 	<pre>dis51adm.exe /connect system/manager /create_eul /apps_mode /apps_grant_details apps/apps</pre>

/delete

データベースから EUL オブジェクトを削除します。また、「/delete_eul」コマンドを使用して EUL 全体を削除することもできます。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 構文: 	/delete <modifier(s)> [/identifier]

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> ■ 修飾子: 	Modifiers for configuring the deletion: <code>/log <log file name> [/log_only]</code> <code>/show_progress</code> Modifiers for defining which EUL object(s) to delete: <code>/asm_policy <asm policy></code> <code>/business_area <business area></code> <code>/ba_link <business area> <folder></code> <code>/condition <folder>.<condition></code> <code>/folder <folder></code> <code>/function <PL/SQL function></code> <code>/hierarchy < hierarchy></code> <code>/hier_node <hierarchy>.<hierarchy_node></code> <code>/identifier</code> <code>/item <folder>.<item></code> <code>/item_class <item class></code> <code>/join <join name></code> <code>/parameter <folder>.<parameter></code> <code>/summary <summary></code> <code>/workbook <workbook></code>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 注意: 	一度に1つ以上の EUL オブジェクトを削除できます (次の例を参照)。パラメータ (ビジネスエリア、フォルダなど) には明示的に名前を付ける必要があります。また、ワイルドカードは使用できません。
<ul style="list-style-type: none"> ■ 例: 	「eul_sales」という名前の EUL にある「Test BA」と「Final BA」という名前の2つのビジネスエリアを削除し、delba.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。 <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /delete /business_area "Test BA, Final BA" /eul eul_sales /log delba.log</pre> 「eul_sales」という名前の EUL にある「Sales」という名前のフォルダと「Sum1」という名前のサマリーを削除し、del.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。 <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /delete /folder Sales /summary Sum1 /eul eul_sales /log del.lo</pre>

/delete_bus_area

データベースから Discoverer ビジネスエリアを削除します。「/delete_eul」および「/delete」も参照してください。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> ■ 構文: 	<code>/delete_bus_area <business area></code>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 修飾子: 	Modifiers for configuring the deletion: <code>/keep_folder</code> <code>/log <log file name> [/log_only]</code> <code>/show_progress</code>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 注意: 	このコマンドは「/delete」コマンドに置き換わっており、下位互換性のために含まれています。/delete コマンドの詳細は「/delete」を参照してください。
<ul style="list-style-type: none"> ■ 例: 	「Test BA」と「Final BA」という名前のビジネスエリアを削除し、delba.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。 <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /delete_bus_area "Test BA, Final BA" /log delba.log</pre>

/delete_eul

現行の Discoverer EUL を削除します。また、「/delete」コマンドを使用して、個々の EUL オブジェクトを選択して削除することもできます。

情報	詳細
■ 構文:	/delete_eul
■ 例:	現在の eul を削除し、deleul.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。 dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /delete_eul /log deleul.log

/export (EUL オブジェクト)

EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル (EEX ファイル) にエクスポートします。個々の EUL オブジェクト (フォルダ、ビジネスエリア、関数など) または EUL 全体 (/all 修飾子を使用) を選択して削除できます。複数のファイルをインポートする場合、Discoverer は自動的にファイル間の参照を解決します。たとえば、fileA.eex にある「Emp」フォルダと fileB.eex にある「Dept」フォルダをエクスポートできます。「Emp」と「Dept」が結合されている場合、結合情報は実際に両方のファイルにありますが、両方のフォルダの情報はいずれのファイルにも含まれません。両方のファイルをインポートする場合、結合は 2 番目のファイルが処理されるときに再び作成されます。

情報	詳細
■ 構文:	/export <filename> [<bus_area_name>] Or /export <filename> <modifier(s)> [/identifier]
■ 修飾子:	/all /asm_policy <asm policy> /audit_info <audit details> /business_area <business area> /external_element <filename> (this filename refers to an xml file, not the export filename) /folder <folder> /function <function> /hierarchy <hierarchy> /identifier /item_class <item_class> /log <log file name> [log_only] /summary <summary> /set_created_by <creator name> /set_updated_by <updated name> /show_progress /workbook <workbook> [XML_workbook] /xmlworkbook (takes no parameters)

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 注意: 	<p><filename>: ターゲット*.EEX ファイルの名前。ディレクトリ・パスを指定しない場合、ターゲット・ファイルはデフォルトの Discoverer フォルダに作成されます。デフォルトのターゲット・ディレクトリ設定を上書きするには、ファイルのディレクトリ・パスを指定します。たとえば、c:\data\sales.eex などです。ディレクトリ・パスは相対パスではなく、絶対パスである必要があります。</p> <p>ワイルドカードは、パラメータ（ビジネスエリア、フォルダなど）に使用できません。パラメータは、明示的に名前を付ける必要があります。</p> <p>[<bus_area_name>]: このオプションを使用して、ビジネスエリアとコンテンツ全体（ビジネスエリア内のすべての EUL オブジェクト）をエクスポートします。ビジネスエリアの定義とコンテンツのメタデータのみをエクスポートする場合は、/business_area 修飾子を使用します。</p> <p>/business_area 修飾子を使用してビジネスエリアをエクスポートする場合、Discoverer はビジネスエリアの定義（ビジネスエリアの名前、説明など）とビジネスエリアにあるフォルダへのリンクのみをエクスポートします。Discoverer は、名前が指定された場合のみフォルダとワークブックをエクスポートします。</p> <p><modifiers>: パラメータを指定する場合は、パラメータの表示名または識別子を使用できます。</p> <p>データの関係を維持するには、リンクされたオブジェクト（または結合されたオブジェクト）もエクスポートする必要があります。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 例: 	<p>「eul_sales」という名前の EUL にある「Test BA」と「Final BA」という名前の 2 つのビジネスエリアを export.eex という名前のファイルにエクスポートし、export.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /export export.eex /business_area "Test BA" /business_area "Final BA" /all /eul eul_sales /log import.log</pre>

/import（ビジネスエリア）

EEX ファイルの Discoverer ビジネスエリアをデータベースにインポートします。Discoverer EUL オブジェクトを選択してインポートする方法の詳細は、「[/import \(EUL オブジェクト\)](#)」を参照してください。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 構文: 	<pre>/import <file name></pre>
<ul style="list-style-type: none"> 修飾子: 	<pre>/log <log file name> [log_only] /rename <rename-policy> /show_progress</pre>
<ul style="list-style-type: none"> 注意: 	<p>このコマンドは /import (EUL オブジェクト) コマンドに置き換わっており、下位互換性のために含まれています。/import コマンドの詳細は「/import (EUL オブジェクト)」を参照してください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 例: 	<p>ファイル myBA.eex にあるビジネスエリアをインポートし、impba.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /import myBA.eex /log impba.log</pre>

/import (EUL オブジェクト)

1つ以上の Discoverer エクスポート・ファイル (EEX ファイル) から EUL オブジェクトをインポートします。Discoverer エクスポート・ファイルは、/export コマンドを使用して作成され、EUL オブジェクト (フォルダ、ビジネスエリア、関数または EUL 全体など) を含みます。

情報	詳細
■ 構文:	/import <"sourcefilename1.eex sourcefilename2.eex etc."> <modifier(s)> [/identifier]
■ 修飾子:	/eul<EUL> /identifier /keep_format_properties /log <log file name> [log_only] /preserve_workbook_owner /refresh /rename /show_progress /auto_gen_name
■ 注意:	<source filename(s)>: ソース *.EEX ファイルの名前。ファイルのフル・パス名を指定する必要があります (例: c:\data\sales.eex)。ディレクトリ・パスは相対パスではなく、絶対パスである必要があります。 ワイルドカードは、パラメータ (ビジネスエリア、フォルダなど) に使用できません。パラメータは、明示的に名前を付ける必要があります。 複数のファイルをインポートする場合は、すべてのファイルを一对の二重引用符内に囲み、各ファイルをスペースで区切る必要があります (次の例を参照してください)。
■ 例	dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /import "file1.eex file2.eex"

/load

データベースから Discoverer ビジネスエリアにデータをバルク・ロードします。

情報	詳細
■ 構文:	/load <bus_area>
■ 修飾子:	/aggregate<aggregate> /auto_gen_name /capitalize /date_hierarchy <date_hier> /db_link <db_link> /description <descrip> /eul <eul_name> /insert_blanks /join <join_policy> /log <log_file> /lov <lov> /object <obj_name> /remove_prefix /show_progress /sort_folders /sort_items /source <source> /user <user_id>

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> ■ 注意: 	<p>/load コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データのソースを指定します (デフォルトは現行のデータベース・サーバーです)。EUL ゲートウェイからデータをロードしている場合、ソース名は EUL ゲートウェイ名に完全に一致する必要があります。 ■ オブジェクトをロードする EUL を指定します (デフォルトは Discoverer マネージャ自身の EUL です)。EUL を指定する場合、操作が正常に実行されるためには、名前付きの EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。 ■ データをフェッチする代替データベース・リンクを指定します (デフォルトは現行の接続です)。 ■ スキーマ名 (/user) でロードをフィルタ処理します。(デフォルトではフィルタは使用されません)。 ■ オブジェクト名でロードをフィルタ処理します (デフォルトではフィルタは使用されません)。 ■ 大文字と小文字の使い分け、接頭辞および空白について、データのフォーマットを指定します (デフォルトではフォーマットは適用されません)。 ■ 日付階層を指定します (デフォルトは Discoverer のデフォルト日付階層です)。 ■ 関連付けられた値リストを持っているのはどのデータ型かを指定します (デフォルトではデータ型は関連付けられた値リストを持ちません)。 ■ データ・ポイントで使用するデフォルトの集計を指定します (デフォルトは SUM です)。 ■ 新規ビジネスエリアの説明を入力します (デフォルトは NULL です)。 ■ 結合のポリシー (デフォルトは主キー) とログ・ファイルを指定します。 ■ 注意: Oracle9i 以上のデータベースからバルク・ロードを実行している場合は、Discoverer が結合を作成するときにビュー上の制約も考慮されます。
<ul style="list-style-type: none"> ■ 例: 	<p>次の条件を持つ「Test BA」という名前の新規ビジネスエリアを作成し、現行接続の Oracle Designer ソースから「eul_sales」という名前の EUL にバルク・ロードします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザー Bob によって所有されたパターン test% に一致するテーブルを含む。 ■ 列を事前フォーマットして、接頭辞と空白を削除し、頭文字を大文字にする。 ■ 日付階層を含まない。 ■ 集計として AVG を使用し、CHAR、INTEGER および DECIMAL の値リストを含む。 ■ load.log という名前のログ・ファイルに書き込む。 <p>前述のバルク・ロードを実行するには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /load "Test BA" /source "Designer - bobworkarea" /eul eul_sales /user bob /object test% /capitalize /remove_prefix /replace_blanks /date_hierarchy "" /lov "CHAR, INTEGER, DECIMAL" /aggregate AVG /log load.log /description "Test BA"</pre>

/refresh_bus_area

データベースから最新の EUL 構造を取り出して、1 つ以上の Discoverer ビジネスエリアをリフレッシュします。

情報	詳細
■ 構文:	/refresh_bus_area <bus_area>
■ 修飾子:	/db_link /eul /log /schema /source /show_progress
■ 注意:	<p>/refresh_bus_area コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前付きのビジネスエリアをリフレッシュするデータソースを指定します。 ■ リフレッシュするビジネスエリアを検索する EUL を指定します。デフォルトは、Discoverer マネージャが所有する EUL です。EUL を指定する場合、操作が正常に実行されるためには、名前付きの EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。 ■ スキーマ名でリフレッシュをフィルタ処理します。デフォルトでは、フィルタは使用されません。 ■ ログ・ファイルを指定します。
■ 例:	<p>「eul_sales」という名前の EUL にある「Test BA」と「Final BA」という名前の 2 つのビジネスエリアを、ユーザー Bob が所有するパターン test% に一致するテーブルを含む現行接続の Oracle Designer ソースからリフレッシュし、refba.log という名前のログ・ファイルに情報を集計するには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /refresh_bus_area "Test BA, Final BA" /source "Designer - bobsworkarea" /eul eul_sales /user bob /log refba.log</pre>

/refresh_folder

1 つ以上の Discoverer フォルダをリフレッシュします。フォルダの基礎となるクエリーが、最新のデータを取得するために再実行されます。

情報	詳細
■ 構文:	/refresh_folder <folder>
■ 修飾子:	/log /show_progress /source /user <username>
■ 注意:	<p>/refresh_folder コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デフォルトの検索対象は、Discoverer マネージャが所有する EUL です。 ■ ログ・ファイル・パスを指定します (オプション)。 ■ パスを指定すると、操作の成功または失敗を示すステータス・メッセージは指定されたログ・ファイルに出力され、指定しない場合はデフォルトのログ・ファイルに出力されます。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 例: 	<p>「eul_sales」という名前の EUL にある「Sales1」と「Sales2」という名前の 2 つのフォルダをリフレッシュし、reffol.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /refresh_folder "Sales1, Sales2" /eul eul_sales /log reffol.log</pre>

/refresh_summary

1 つ以上の Discoverer サマリー・フォルダをリフレッシュします。サマリーの基礎となるクエリが、最新のデータを取得するために再実行されます。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 構文: 	<pre>/refresh_summary <summary> <bus_area></pre>
<ul style="list-style-type: none"> 修飾子: 	<pre>/log /show_progress</pre>
<ul style="list-style-type: none"> 注意: 	<p>/refresh_summary コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ビジネスエリアが存在する EUL を指定します。デフォルトの検索対象は、Discoverer マネージャが所有する EUL です。EUL を指定する場合、操作が正常に実行されるためには、名前付きの EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。 少なくとも 1 つのサマリー・フォルダに名前を付け、サマリーが存在するビジネスエリアに明示的に名前を付ける必要があります。 ログ・ファイル・パスを指定します (オプション)。 パスを指定すると、操作の成功または失敗を示すステータス・メッセージは指定されたログ・ファイルに出力され、指定しない場合はデフォルトのログ・ファイルに出力されます。
<ul style="list-style-type: none"> 例: 	<p>「eul_sales」という名前の EUL にある「Summary1」と「Summary2」という名前の 2 つのサマリーをリフレッシュし、refsum.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /refresh_summary "Summary1, Summary2" /eul eul_sales /log refsum.log /eul eul31</pre>

Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス

この項では、Discoverer コマンドライン・インタフェースで使用できるオプションの Discoverer Administrator コマンド修飾子に関するリファレンス情報について詳細に説明します。コマンド修飾子は、コマンドを詳細化すなわち修飾するために使用されます。次の点に注意してください。

- コマンド修飾子はアルファベット順に記載されています。
- コマンドの詳細は、「[Discoverer Administrator コマンド・リファレンス](#)」を参照してください。

/aggregate

コマンドで使用されるデフォルトの集計を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/aggregate <SUM MAX MIN COUNT AVG DETAIL>

/all

インポート、エクスポートまたは削除する EUL 内のすべてのオブジェクトを選択します。

情報	詳細
■ 構文:	/all

/apps_grant_details

Oracle Applications モード EUL を作成するときの Oracle Applications スキーマとパスワードを指定します。たとえば、Oracle Applications Foundation Name とパスワードを指定するには、「<fndnam>/<password>」と入力します。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_grant_details <schema>/<password>

/apps_responsibility

Oracle Applications データベース・ユーザーとして接続しているときの Oracle Applications の職責を指定します。この修飾子は、Oracle Applications ユーザー名の後、パスワードの前に配置されたコロン (:) のすぐ後ろに含めることもできます。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_responsibility <"Oracle Applications responsibility name">

/apps_security_group

Oracle Applications データベース・ユーザーとして接続しているときの Oracle Applications のセキュリティ・グループを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_security_group <"Oracle Applications security group name">

/asm_space、/asm_tablespace

/asm_tablespace 修飾子は、ASM ポリシーで設定された表領域の値を無視し、かわりにこの表領域の制約を使用します。/asm_space 修飾子は、ASM ポリシーで設定された領域の値を無視し、かわりにこの領域の制約を使用します。表領域の値と領域の値の有効な組合せを次に示します。

- コマンドライン修飾子がない場合 — ASM ポリシー表領域と領域が使用されます。
- /asm_space — ASM ポリシー表領域が指定された領域の値とともに使用されます。
- /asm_tablespace /asm_space — 指定された表領域と領域の値が使用されます。無効な表領域を指定すると、エラーが発生します。

情報	詳細
■ 構文:	/asm [/asm_space <bytes> /asm_space <bytes> /asm_tablespace <tablespace name>]

/audit_info

すべてのオブジェクトとともに監査フィールド (Created By、Created Date、Updated By、Updated Date など) をエクスポートします。追加の修飾子 /set_created_by と /set_updated_by を使用すると、Created By フィールドと Updated By フィールドを上書きできます。

情報	詳細
■ 構文:	/audit_info [:/set_created_by<name of creator>] [:/set_updated_by<name of updater>]

/auto_gen_name

インポートしたすべての 2 次要素の「名前の自動生成」プロパティを「はい」に設定します (AutogenNameOnCreate レジストリ設定がレジストリに存在し、その値が 1 に設定されている場合のみ)。詳細は、「[1 次要素と 2 次要素](#)」を参照してください。

たとえば、「Performance」というビジネスエリアを EEX ファイルにエクスポートできます。次に、この EEX ファイルから「Performance」ビジネスエリアをインポートして、このコマンド修飾子を指定すると、Discoverer では、インポートしたすべての 2 次要素の「名前の自動生成」プロパティが、エクスポートしたファイルに存在している値に関係なく、「はい」に設定されます。詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。

情報	詳細
構文:	/auto_gen_name
併用:	/import (EUL オブジェクト)

/ba_link

削除するビジネスエリアとフォルダを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/ba_link <business area>.<folder>

/business_area

インポート、エクスポートまたは削除するビジネスエリアを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/business_area <business area>
■ 注意:	When used with the /export command, this modifier only exports the business area definition (e.g. business area name and description). If you want to export the entire business area (i.e. including folders, item classes, hierarchies etc), use with the /all modifier also.

/capitalize

バルク・ロード中に個々の列からフォルダ名が生成されるときに、フォルダ名の最初の文字を大文字にするようリクエストします。

情報	詳細
■ 構文:	/capitalize

/condition

削除の条件を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/condition <condition>

/date_hierarchy

バルク・ロード中に使用されるデータ階層を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/date_hierarchy <date_hier>
■ 注意:	任意の有効なデータ階層名または "" を指定します。<date_hier> を "" に設定すると、Discoverer Administrator はバルク・ロード中に日付階層を作成しません。

/db_link

コマンドで使用されるデータベース・リンクを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/db_link <db_link>
■ 注意:	<db_link> は任意の有効なデータベース・リンクです。

/description

オブジェクトの説明を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/description <description>
■ 注意:	<description> は任意の文字列です。

/eul

コマンドを実行する EUL を指定します。指定した EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。指定しない場合は、データベース・ユーザーのデフォルトの EUL が使用されます。

情報	詳細
■ 構文:	/eul <EUL>
■ 注意:	<EUL> は、有効な EUL の名前である必要があります。

これにより、ユーザーのデフォルトの EUL は変更されないことに注意してください。

/eul_language

/create_eul コマンドとともに（現在 Oracle Applications で）使用して、EUL の言語を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/eul_language <language>

/external_element

/export command とのみ使用します。external_element 修飾子により、指定したファイルの XML コードをエクスポート・ファイルの一番上に置くことができます。

情報	詳細
■ 構文:	/external_element <filename>
■ 注意:	この修飾子を使用するには、（エクスポート・ファイルの一番上に置く）XML を別のファイルに入力し、次に <filename> 引数としてこのファイル名を含めます。 /external_element 修飾子は、同じエクスポート操作で複数回使用できます（次の例を参照してください）。 <filename> は、.eex ファイルに含める xml があるファイルの名前です。
■ 例	dis51adm.exe /connect me/mypassword@database /export myBA.eex bus_area1 /external_element custom1.xml /external_element custom2.xml これにより、custom1.xml と custom2.xml ファイルの xml はエクスポート・ファイル myBA.eex の一番上に置かれます。

/folder

インポート、エクスポートまたは削除するフォルダを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/folder <folder>

/function

インポート、エクスポートまたは削除する関数を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/function <PL/SQL function>

/hier_node

削除する階層のノードを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/hier_node <hierarchy>.<hierarchy node>

/hierarchy

階層を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/hierarchy <hierarchy>

/identifier

表示名ではなく識別子により EUL オブジェクトを指定します。指定しない場合は、オブジェクトはデフォルトで表示名で識別されます。

情報	詳細
■ 構文:	/identifier <identifier>

/insert_blanks

バルク・ロード中に個々の列名からフォルダ名が生成されるときに、フォルダ名がアンダースコア文字のかわりにスペースを持つようリクエストします。

情報	詳細
■ 構文:	/insert_blanks

/item

削除するアイテムを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/item <item>

/item_class

インポート、エクスポートまたは削除するアイテム・クラスを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/item_class <item class>

/join

/join 修飾子には、使用するコマンドに応じて 2 つの用途があります。

- **[/load]** コマンドと使用した場合、Discoverer Administrator によるバルク・ロード中の結合の作成方法を指定できます。
- **[/delete]** コマンドと使用した場合、特定の結合を削除できます。

情報	詳細
■ 構文:	/load コマンドと使用した場合の構文 /join <NONE COLUMN_NAME PRIMARY_KEY> /delete コマンドと使用した場合の構文 /join <join name>

/keep_folder

ビジネスエリアを削除するときにフォルダをその位置に残します。指定しない場合、フォルダはビジネスエリアとともに削除されます。

情報	詳細
■ 構文:	/keep_folder

/keep_format_properties

インポート時に既存のフォーマット・プロパティ（表示名、説明など）を維持します。デフォルトでは、フォーマット・プロパティは変更されます。

情報	詳細
■ 構文:	/keep_format_properties

/log

コマンド・ステータス・メッセージを格納するログ・ファイルの名前を指定します。各コマンドが実行された後、Discoverer Administrator はコマンドが成功したかどうかを示すステータス・メッセージを書き込みます。/log 修飾子を使用して、ログ・ファイルの名前と場所を上書きできます。

情報	詳細
■ 構文:	/log <filename>
■ 注意:	任意の有効なファイル名を指定できます（オペレーティング・システムに応じて異なります）。

/log_only

データを変更せずにコマンドをシミュレーションし、ログを生成します。これにより、データを変更する前にエラーと例外をチェックできます。

情報	詳細
■ 構文:	/log <filename> [/log_only]
■ 注意:	任意の有効なファイル名を指定できます（オペレーティング・システムに応じて異なります）。 オプションの log_only 引数により、データをインポートせずにインポートをシミュレーションし、ログを生成できます。これにより、データを変更する前にインポート・エラーをチェックできます。

/lov

バルク・ロード中に生成される値リストのデータ型を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/lov [CHAR DATE DECIMAL INTEGER KEY]

/object

バルク・ロード、インポート、エクスポートまたは削除するオブジェクトを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/object <mask>
■ 注意:	任意の有効なオブジェクト名を指定できます。ワイルドカード文字を使用できます。

/overwrite

所有者が持つ既存の EUL を上書きします。使用しない場合は、デフォルトで、既存の EUL は上書きされません。

情報	詳細
■ 構文:	/overwrite

/parameter

削除するパラメータを指定します。パラメータを指定する場合は、パラメータの表示名または識別子を使用できます。

情報	詳細
■ 構文:	/parameter <folder>.<parameter>

/password

操作で使用する新しいパスワードを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/password <password>
■ 注意:	/user 修飾子が指定した操作に対応する有効なパスワードを指定します。

/private

EUL を作成する場合に、Discoverer マネージャに対してプライベートとして EUL のステータスを定義できます。使用しない場合、ステータスはデフォルトでパブリックに設定されます。

情報	詳細
■ 構文:	/private

/refresh

インポートされたオブジェクトを既存のオブジェクトとマージします。デフォルトでは、マージされたオブジェクトは表示名に一致します。「/identifier」修飾子を使用して、識別子に一致させます。

情報	詳細
■ 構文:	/refresh

/remove_prefix

バルク・ロード中に個々の列名からアイテム名が生成されるときにアイテム名に列名接頭辞を含めないようにリクエストします。

情報	詳細
■ 構文:	/remove_prefix
■ 例:	列: EMP_EMPNO EMP_ENAME アイテム: EMPNO ENAME

/rename

オブジェクトのインポートで、既存のオブジェクトと一致する場合、どちらのオブジェクトの名前を変更するかを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/rename <NEW OLD NONE>
■ 注意:	NEW: インポート・オブジェクトの名前が変更されます。 OLD: 既存のオブジェクトの名前が変更されます。 NONE: オブジェクトをインポートせずに操作を中止します。

/schema

操作のスキーマ (ユーザー) を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/schema <schema>

/show_progress

実行中のコマンドを監視します。

情報	詳細
■ 構文:	/show_progress

/sort_folders

バルク・ロード中に Discoverer がアルファベット順にフォルダをソートするように指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/sort_folders <ON OFF>
■ 注意:	ON がデフォルトです。

/sort_items

バルク・ロード中に Discoverer がアルファベット順にアイテムをソートするように指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/sort_items <ON OFF>
■ 注意:	OFF がデフォルトです。

/source

操作のソースを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/source <server gateway>
■ 注意:	<server> は、Oracle データベースの固有の名前です。 <gateway> は、Oracle Designer オブジェクトまたは他のゲートウェイの名前です。 ゲートウェイ名は、ロード・ウィザードに表示されたゲートウェイ名に正確に一致する必要があります。Oracle Designer の場合、"Designer 6i - <workarea name>" を指定します (Oracle Designer 6i より前のリリースの Oracle Designer を使用している場合は、単に "Oracle Designer repository" と指定します)。

/summary

インポート、エクスポートまたは削除するサマリーを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/summary <summary>

/user

操作で使用するユーザー ID を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/user <user_id>
■ 注意:	任意の有効なユーザー ID を指定できます。

/workbook

インポート、エクスポートまたは削除するワークブックを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/workbook <workbook>

/xmlworkbook

/export コマンドとともに使用して、すべてのワークブックを XML フォーマットとバイナリ・ラーズ・オブジェクト (BLOB) フォーマットの両方でエクスポートします。/xmlworkbook 修飾子により、エクスポートされたワークブックを XML ブラウザで表示できます。

情報	詳細
■ 構文:	/xmlworkbook
■ 注意:	パラメータは取得しない。

Discoverer Desktop コマンド・リファレンス

この項では、Discoverer Desktop コマンドライン・インタフェースの各コマンドに関するリファレンス情報について詳細に説明します。コマンドは、アルファベット順に記載されていることに注意してください。

/?

このコマンドは、Discoverer Desktop コマンドのリストを表示します。

情報	詳細
■ 構文:	/?
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	なし
■ 制限:	なし
■ 例:	dis51usr.exe /?

/apps_fndnam

このコマンドは、「オプション」ダイアログの「接続」タブにあるフィールド FNDNAM の値を上書きします。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_fndnam <foundation name>
■ 構文:	/apps_gwyuid <gateway user id>/<password>
■ 例:	dis51usr.exe /connect appsuser:appsresp/appspwd@appsdb /apps_fndnam apps /apps_gwyuid applsyspub/pub

/apps_gwyuid

このコマンドは、「オプション」ダイアログの「接続」タブにあるフィールド GWYUID (ゲートウェイ・ユーザー ID のパスワードを含む) の値を上書きします。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_gwyuid <gateway user id>/<password>
■ 例:	dis51usr.exe /connect appsuser:appsresp/appspwd@appsdb apps /apps_gwyuid applsyspub/pub

/apps_user

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続します。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_user
■ 修飾子:	/apps_responsibility
■ 例	dis51usr.exe /connect appsuser/appspwd@appsdb /apps_user /apps_responsibility "UK_Purchasing" 「OR」 dis51usr.exe /connect appsuser:UK_ Purchasing/appspwd@appsdb /apps_user

/batch

後続のワークブックの処理を遅延することなく、ワークブックを実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/batch
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	このコマンドでは、UI はエンド・ユーザーの入力を待たずに続行します。これにより、前のワークブックまたはワークシートの処理が失敗しても、後続の処理が行われます。
■ 制限:	なし

/cmdfile

テキスト・ファイルに格納されているコマンドを自動的に実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/cmdfile <file name>
■ 注意:	コマンド・ファイルを作成するには、一般的なテキスト・エディタを使用して1つ以上の Discoverer コマンドを含むテキスト・ファイルを作成する必要があります。テキスト・ファイルのコマンドを実行するには、コマンドラインに次のように入力します。 dis51usr.exe /cmdfile <file name> 詳細は、「コマンド・ファイル」を参照してください。
■ 例:	テキスト・ファイルの myFile に格納されているコマンドを実行するには、コマンドラインに次のコマンドを入力します。 dis51usr.exe /connect me/mypassword@database /cmdfile c:¥myFile

/connect

「接続」ダイアログを使用せずに Discoverer Desktop に直接接続します。

情報	詳細
■ 構文:	/connect <username>/<password> [@<database>]
■ 修飾子:	なし

情報	詳細
■ 注意:	指定したユーザー名とパスワードを持つデータベースに接続します。このコマンドは、username/password@database 情報が正しいことを条件に「接続」ダイアログをスキップします。
■ 制限:	ログインの詳細がデータベースへの接続に不十分である場合、Discoverer コマンドライン・インタフェースで指定した情報を含む「接続」ダイアログが Desktop により表示されます。 たとえば、Discoverer コマンドライン・インタフェースで次のように指定した場合、 username@dbname Discoverer は、ユーザー・フィールドが 'username'、データベース・フィールドが 'dbname'、パスワード・フィールドが空欄である「接続」ダイアログを表示します。
■ 例:	dis51usr.exe /connect jchan/jchan@dbname

/export

指定したファイルにワークブックの結果をエクスポートします。

情報	詳細
■ 構文:	/export <format> <export-file>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	指定したファイル（つまり、wks、syk、dif、csv、text、html、xls）にワークブックの結果をエクスポートします。
■ 制限:	エンド・ユーザーが Discoverer コマンドライン・インタフェースでシートを指定しない場合、有効なシートのみがファイルにエクスポートされます。 エンド・ユーザーが Discoverer コマンドライン・インタフェースでシートを指定した場合、そのシートのみがエクスポートされます。 エンド・ユーザーが Discoverer コマンドライン・インタフェースですべてのシートを指定した場合、各シートは次の名前のファイルにそれぞれエクスポートされます。 <file> <sheet-name>.<ext>
■ 例:	dis51usr.exe /export wks worksheet2.wks

/open

.dis ファイルからワークブックを開きます。

情報	詳細
■ 構文:	/open <file-workbook>
■ 修飾子:	なし
■ 例:	dis51usr.exe /open workbook1.dis

/opendb

データベースからワークブックを開きます。

情報	詳細
■ 構文:	/opendb <db-workbook>
■ 修飾子:	なし
■ 例:	dis51usr.exe /opendb workbook1.dis

/parameter

指定したパラメータを指定した値に設定します。

情報	詳細
■ 構文:	/parameter <parameter name> <parameter value>
■ 修飾子:	なし
■ 制限:	エンド・ユーザーがワークブックのパラメータの値を指定しない場合、Discoverer はデフォルトの値を使用します。
■ 例:	dis51usr.exe /parameter year 2001

/p

ワークブックをファイルからデフォルトのプリンタに印刷します。

情報	詳細
■ 構文:	/p <file>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	印刷オプションは、ワークブックの一部として保存されます。

/pt

ワークブックをファイルから、指定したプリンタに、指定したプリンタ・ドライバとポートで印刷します。

情報	詳細
■ 構文:	/pt <file> <printer> <driver> <port>
■ 修飾子:	なし

/savedb

ワークブックをファイル・システムからデータベースにコピーします。

情報	詳細
■ 構文:	/savedb <filesystem-workbook>
■ 修飾子:	/batch
■ 注意:	ファイル・システムから .dis ファイルがコピーされ、データベースに保存されます。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 例: 	<p>ワークブック「sales.dis」をファイル・システムからデータベースにコピーする例を次に示します。</p> <pre>dis51usr.exe /connect user/password@database /savedb "c:¥myworkbooks¥sales.dis"</pre> <p>ワークブック「sales.dis」をファイル・システムからデータベースにコピーし、Discoverer Desktop を表示しない場合に、/batch 修飾子を使用する例を次に示します。</p> <pre>dis51usr.exe /connect user/password@database /savedb "c:¥myworkbooks¥sales.dis" /batch</pre> <p>複数のワークブック（「2001_sales.dis」、「2002_sales.dis」および「2003_sales.dis」）をファイル・システムからデータベースにコピーする例を次に示します。</p> <pre>dis5usr.exe /connect user/password@database /savedb "c:¥myworkbooks¥2001_sales.dis" /savedb "c:¥myworkbooks¥2002_sales.dis" /savedb "c:¥myworkbooks¥2003_sales.dis"</pre> <p>ヒント: この複数のワークブックの例は、Discoverer Desktop から Discoverer Plus に移動し、多数のワークブックをファイル・システムからデータベースにコピーする必要がある場合に特に便利です。</p>

/sheet

指定したシートのクエリーを実行します。

情報	詳細
<ul style="list-style-type: none"> 構文: 	/sheet {<sheet-name> <sheet-number> ALL}
<ul style="list-style-type: none"> 修飾子: 	なし
<ul style="list-style-type: none"> 注意: 	<p>Discoverer は次のクエリーを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> シート名 <sheet-name> 指定したシート番号 <sheet-number> すべてのシート (ALL)

Discoverer Desktop コマンド修飾子リファレンス

この項では、Discoverer コマンドライン・インタフェースで使用できるオプションの Discoverer Desktop コマンド修飾子に関するリファレンス情報について詳細に説明します。コマンド修飾子は、コマンドを詳細化すなわち修飾するために使用されます。次の点に注意してください。

- コマンド修飾子はアルファベット順に記載されています。
- コマンドの詳細は、「[Discoverer Desktop コマンド・リファレンス](#)」を参照してください。

/all

インポート、エクスポートまたは削除する EUL 内のすべてのオブジェクトを選択します。

情報	詳細
■ 構文:	/all

/apps_responsibility

Oracle Applications データベース・ユーザーとして接続しているときの Oracle Applications の職責を指定します。この修飾子は、Oracle Applications ユーザー名の後、パスワードの前に配置されたコロン (:) のすぐ後ろに含めることもできます。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_responsibility <"Oracle Applications responsibility name">

/eul

コマンドを実行する EUL を指定します。指定した EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。指定しない場合は、データベース・ユーザーのデフォルトの EUL が使用されます。

情報	詳細
■ 構文:	/eul <EUL>
■ 注意:	<EUL> は、有効な EUL の名前である必要があります。

これにより、ユーザーのデフォルトの EUL は変更されないことに注意してください。

Oracle 以外のデータベースおよび Oracle RDB に対する Discoverer サポート

この章では、Oracle 以外のデータベースおよび Oracle RDB で Discoverer を使用方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「異機種間サービス」
- 「Generic Connectivity を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続」
- 「Transparent Gateway を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続」
- 「Oracle RDB に対する Discoverer サポート」

異機種間サービス

異機種間サービスとは、Oracle 以外のデータベースに接続できるようにするために Oracle データベースに備えられた共通アーキテクチャおよび管理メカニズムです。

異機種間サービスを使用して Oracle 以外のデータベースに接続するには、次の 2 通りの方法があります。

- Generic Connectivity を使用（詳細は、「[Generic Connectivity を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続](#)」を参照）
- Transparent Gateway を使用（詳細は、「[Transparent Gateway を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続](#)」を参照）

異機種間サービスの詳細は、『Oracle Database Heterogeneous Connectivity 管理者ガイド』を参照してください。

Generic Connectivity を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続

Generic Connectivity は、Oracle 以外のデータベースにアクセスするために、Oracle データベースの異機種間サービス機能でサポートされるメカニズムの 1 つです。

Discoverer ユーザーは Generic Connectivity を使用して、ODBC データベースや OLE DB（オブジェクト・リンクおよび埋込みデータベース）データベースにアクセスできます。

Oracle 以外のデータベースは ODBC 標準に正しく準拠している必要があります（ODBC および OLE DB の接続要件の詳細は、『Oracle Database Heterogeneous Connectivity 管理者ガイド』を参照）。

この項では、次の項目について説明します。

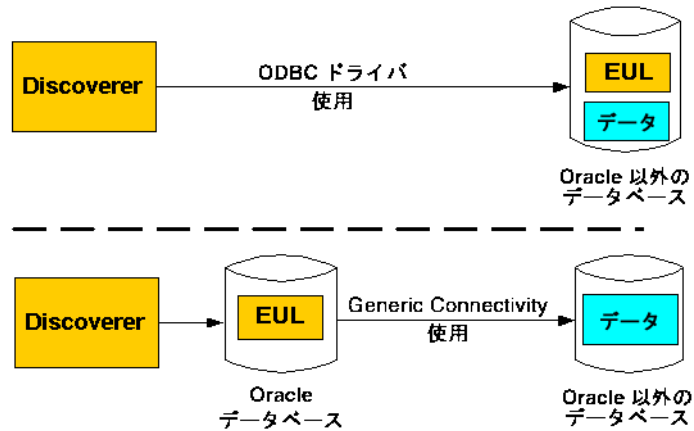
- 「[Oracle 以外のデータベースに接続するための Generic Connectivity の使用と ODBC ドライバの使用の相違点](#)」
- 「[Generic Connectivity を使用する利点](#)」
- 「[Oracle Application Server Control を使用して Discoverer に Generic Connectivity を設定する方法](#)」
- 「[Oracle 以外のデータベース（システム固有の ODBC ドライバを使用してアクセス）から Oracle データベース（Generic Connectivity をサポート）に EUL を移行する方法](#)」
- 「[Discoverer Administrator で異機種間データ・サービスを使用する場合の ORA-3113 エラー](#)」

Oracle 以外のデータベースに接続するための Generic Connectivity の使用と ODBC ドライバの使用の相違点

Discoverer の前のリリースでは、ユーザーは ODBC ドライバを使用して Oracle 以外のデータベースに接続できました。Oracle 以外のデータベースに接続するために、ODBC ドライバを使用する場合と、Oracle データベースの Generic Connectivity 機能を使用する場合の主な違いは、次のように EUL の場所にあります。

- ODBC ドライバの場合は、EUL は Oracle 以外のデータベースに格納されます。
- Generic Connectivity では、EUL は Oracle データベースに格納されます。

図 23-1 ODBC ドライバを使用する場合と Generic Connectivity を使用する場合の EUL の場所



この図から次のことがわかります。

- Discoverer で ODBC ドライバを使用して Oracle 以外のデータベースに接続したときは、EUL とデータの両方が Oracle 以外のデータベースに存在します。
- Discoverer で Generic Connectivity を使用して Oracle 以外のデータベースに接続したときは、データは引き続き Oracle 以外のデータベースに置かれますが、EUL は Oracle データベースに存在する必要があります。

Discoverer では、Oracle 以外のデータベースへの接続に、システム固有の ODBC ドライバの使用がサポートされなくなりました。Oracle 以外のデータベースからデータを取り出すには、Generic Connectivity を使用する必要があります。つまり、EUL は Oracle データベースに格納する必要があります。EUL を Oracle 以外のデータベースから Oracle データベースに移動する方法は、「[Oracle 以外のデータベース（システム固有の ODBC ドライバを使用してアクセス）から Oracle データベース（Generic Connectivity をサポート）に EUL を移行する方法](#)」を参照してください。

Generic Connectivity を使用する利点

Discoverer を使用して Oracle 以外のデータベースに接続する場合に、システム固有の ODBC ドライバではなく、Oracle データベースの Generic Connectivity 機能を使用する利点は次のとおりです。

- より数多くの ODBC データベースへの接続が可能です。

Generic Connectivity では、ODBC 標準に準拠したすべての ODBC データベースへのアクセスが提供されます。準拠の程度は、データベースや ODBC ドライバによって異なります。

- Discoverer エンド・ユーザーは、複数の異なるデータベースのデータを同時にクエリーすることができます。

たとえば、Sybase、DB2 および Oracle データベースに保持されているテーブルに基づくフォルダを使用して、1 つのビジネスエリアを作成できます。エンド・ユーザーからのクエリーでは、複数のデータベースからのデータを結合して結果を返すことができます。

- ODBC データを使用したクエリー予測ができます。

Discoverer のクエリー予測では、エンド・ユーザーがクエリーを実行したときに生成されて EUL 内に保存される、クエリー統計が使用されます。EUL は Oracle データベース内にあるため、Discoverer は Oracle データベース上で ODBC データのクエリー予測を実行できます。

- ワークブック・スケジュールのバッチ・サポートが可能です。
Discoverer は Oracle データベースでバッチ・スケジューラを使用します。EUL は Oracle データベース内にあるため、Discoverer は ODBC データのワークブックをスケジュールできます。
- ユーザーは ODBC データベースから提供されたデータに Oracle 分析関数（およびその他の Oracle 関数）を適用できます。
データは Oracle データベースに取り込まれるため、Oracle 以外のデータベースでサポートされる関数に限定されることなく、あらゆる Oracle 関数をデータに適用できます。

Oracle Application Server Control を使用して Discoverer に Generic Connectivity を設定する方法

Generic Connectivity を使用する前に、Generic Connectivity をサポートするように Oracle データベースを構成する必要があります。

注意: Discoverer に Generic Connectivity を設定する作業は、データベース管理者とともに行う必要があります。ただし、セントラル・コンソールを使用して Discoverer に Generic Connectivity を設定する場合は、次の例を使用できます（Oracle Application Server Control リリース 2.2 を使用）。

セントラル・コンソールを使用して Discoverer に Generic Connectivity を設定する手順は、次のとおりです。

1. Global Names パラメータを FALSE に設定するには、Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle ホーム」→「セントラル・コンソール」を選択し、セントラル・コンソールのログイン・ダイアログを表示します。

注意: Oracle Enterprise Edition データベースに Global Names パラメータを設定するには、次の手順で `init.ora` ファイルの `global_names` パラメータを FALSE に変更してから、ステップ 9 に進みます。

- a. `init.ora` ファイルをテキスト・エディタで開きます。
`init.ora` の場所を特定して編集する作業は、データベース管理者とともに行ってください。
- b. `global_names` パラメータを FALSE に変更します。
- c. `init.ora` ファイルを閉じて保存します。

`init.ora` ファイルは、Oracle データベースを起動したときに Oracle データベースで使用される初期化ファイルです。

2. 「スタンドアロンで起動」ラジオ・ボタンを選択し、「OK」をクリックして、セントラル・コンソールを表示します。
3. セントラル・コンソールの左側のペインで、プラス記号 (+) をクリックしてツリーを開き、「Database」→「インスタンス」→「構成」を選択します。
セントラル・コンソールに「一般」タブが表示されます。
4. 「すべての初期化パラメータ」をクリックして、データベース構成の編集ページを表示します。
5. 「SPFile」ラジオ・ボタンを選択して、SPFile パラメータのリストを表示します。
SPFile パラメータは、サーバー側の永続ファイル (`spfile`) に保存されているパラメータです。
6. Global Names パラメータまで下へスクロールし、「値」フィールドをクリックして FALSE に設定します。
7. 「適用」をクリックします。

セントラル・コンソールにより、パラメータが変更されたことを確認するメッセージが表示されます。

8. 「OK」をクリックします。
 9. `inithsodbc.ora` ファイルを変更するには、`inithsodbc.ora` ファイルのコピーを作成します。
Windows の場合、`inithsodbc.ora` ファイルは通常 `<ORACLE_HOME>\hs\admin` ディレクトリにあります。
`inithsodbc.ora` ファイルは、異機種間サービス接続のために Oracle データベースで使用される初期化ファイルの一例です。
 10. `inithsodbc.ora` ファイルのコピーの名前を `init<database name>.ora` に変更します。`<database name>` は Oracle 以外のデータベースの名前です。
たとえば、データベースの名前が `DD1` であれば、`inithsodbc.ora` ファイルのコピーの名前を `initDD1.ora` に変更します。
 11. `init<database name>.ora` ファイル（前述の手順で名前を変更した `inithsodbc.ora` ファイル）をテキスト・エディタで開き、次のように変更します。
 - a. 次の行の最初に # 記号を挿入し、行をコメント・アウトします。
`HS_FDS_TRACE_LEVEL = <trace_level>`
変更後の行は次のようになります。
`# HS_FDS_TRACE_LEVEL = <trace_level>`
 - b. 次の行に Oracle 以外のデータベースの名前を挿入します。`<data source name>` は ODBC データソースの名前です。
`HS_FDS_CONNECT_INFO = <data source name>`
たとえば、ODBC データソースの名前が `DD1` であれば、行を次のように変更します。
`HS_FDS_CONNECT_INFO = DD1`
 12. `init<database name>.ora` ファイルを閉じて保存します。
 13. Oracle 以外のデータベースの新規エントリを、`listener.ora` ファイルに次のように作成します。
 - a. `listener.ora` ファイルをテキスト・エディタで開きます。
Windows の場合、`listener.ora` ファイルは通常 `<ORACLE_HOME>\network\admin` ディレクトリにあります。
 - b. `SID_LIST_LISTENER` ヘッダーの下に、Oracle 以外のデータベースの `SID_DESC` エントリを作成します。
たとえば、次のようになります。

```
(SID_DESC =
(SID_NAME=DD1)
(ORACLE_HOME=E:\ORACLE\ORA10)
(PROGRAM=hsodbc)
)
```

 - `DD1` は Oracle 以外のデータベースの名前です。
 - `E:\ORACLE\ORA10` は `<ORACLE_HOME>` です。
 - `PROGRAM=hsodbc` は、`hsodbc.exe` ファイルを実行可能ファイルとして定義し、指定された Oracle 以外のデータベースに異機種間サービスでアクセスできるようにします。
- ヒント:** `listener.ora` ファイルに新規エントリを追加する作業を容易にするために、オラクル社ではサンプル・ソース・ファイルを提供しています。サンプル・ファイルからテキストをコピーし、該当する `listener.ora` ファイルに貼り付けてから、エントリを適切に変更できます。Windows の場合、`listener.ora.sample` ファイルは通常 `<ORACLE_HOME>\hs\admin\sample` ディレクトリにあります。

14. listener.ora ファイルを保存して閉じます。
15. Oracle 以外のデータベースの新規エントリーを、次のように tnsnames.ora ファイル内に作成します。

- a. tnsnames.ora ファイルをテキスト・エディタで開きます。

Windows の場合、tnsnames.ora ファイルは通常 <ORACLE_HOME>%network%admin ディレクトリにあります。

- b. tnsnames.ora ファイル内に Oracle 以外のデータベースのエントリーを作成します。

たとえば、次のようになります。

```
SALES =
  (DESCRIPTION=
    (ADDRESS_LIST=
      (Address= (PROTOCOL=TCP) (HOST=localhost) (PORT=1521))
      (CONNECT_DATA= (SID=DD1))
      (HS=)
    )
  )
```

– SALES は、Oracle 以外のデータベースの tnsnames エントリーの名前です。

– DD1 は Oracle 以外のデータベースの SID です。

– (HS=) は、これが異機種間サービス接続であることを示します。

ヒント : tnsnames.ora ファイルに新規エントリーを追加する作業を容易にするために、オラクル社ではサンプル・ソース・ファイルを提供しています。サンプル・ファイルからテキストをコピーし、該当する tnsnames.ora ファイルに貼り付けてから、エントリーを適切に変更できます。Windows の場合、tnsnames.ora.sample ファイルは通常 <ORACLE_HOME>%hs%admin%sample ディレクトリにあります。

16. tnsnames.ora ファイルを保存して閉じます。
17. データベースと tnslistener を再起動します。
データベースと tnslistener の再起動は、データベース管理者とともに行ってください。
18. オペレーティング・システムのコマンド・プロンプトを表示します。
19. コマンド・プロンプトで次のように入力し、リスナーが正しく動作していることをテストします。

```
tnsping <data source name>
```

<data source name> は、テスト対象となる Oracle 以外のデータベースの名前です。

たとえば、データベースの名前が DD1 であれば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
tnsping DD1
```

tnsping コマンドによって OK メッセージが表示されるはずですが、tnsping コマンドがうまく機能しない場合は、その理由を示すエラー・メッセージが表示されます。

20. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT jchan/tiger@database;
```

jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

21. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> create [public] database link <name> connect to <odbcuser> identified by
<odbcpassword> using '<tnsnames entry>';
```

[public] は、パブリック・データベース・リンクを作成するオプションの引数です。
[public] 引数を使用されない場合は、プライベート・データベース・リンクが作成されます。パブリック・データベース・リンクでは、プライベート・データベース・リンクを作成した場合よりも低いレベルのセキュリティが使用されます（詳細はデータベース管理者に確認してください）。

<name> は、データベース・リンクの名前です。

<odbcuser> は、Oracle 以外のデータベース上のユーザーです。

<odbcpassword> は、Oracle 以外のデータベース上の <odbcuser> のパスワードです。

<tnsnames entry> は、tnsnames.ora ファイルの各 tnsnames エントリの最初で使用される名前です（前述の例の <tnsnames entry> は SALES になります）。

たとえば、次のようになります。

```
SQL> create database link sales_link connect to odbc_username identified by odbc_
userpassword using 'SALES';
```

次の点に注意してください。

- プライベート・データベース・リンクを作成するには、EUL 所有者が CREATE DATABASE LINK 権限を持つ必要があります。

たとえば、SQL*Plus でプライベート・データベース・リンクを作成する権限を付与するには、次のような文を発行します。

```
SQL> grant create database link to hdsuser;
```

hdsuser は、EUL 所有者です。

- パブリック・データベース・リンクを作成するには、EUL 所有者が CREATE PUBLIC DATABASE LINK 権限を持つ必要があります。

たとえば、SQL*Plus でパブリック・データベース・リンクを作成する権限を付与するには、次のような文を発行します。

```
SQL> grant create public database link to hdsuser;
```

hdsuser は、EUL 所有者です。

- リンク名にドメインを含めることができます（例：SALES.mycompany.com）。

ドメイン名をデータベース・リンク名の一部として含める必要があるかどうかは、SQL*Net の構成方法によって異なります（SQL*Net の構成の詳細は、データベース管理者に確認してください）。

- Oracle 以外のデータベースで usernames がサポートされない場合は、connect to <odbcuser> identified by <odbcpassword> の部分を省略できます。

22. SQL*Plus では、Oracle 以外のデータベース上のテーブルに対して SELECT 文を発行して、Oracle 以外のデータベースへの接続をテストします。

たとえば、次のようになります。

```
SQL> select * from PRODUCT@sales_link;
```

PRODUCT は Oracle 以外のデータベース上のテーブルの名前、sales_link は前述の手順で指定された Oracle 以外のデータベースへのデータベース・リンクの名前です。

注意: SQL 文の中で DESC を使用しないでください。DESC は ODBC に対してサポートされていないため、予期しない結果が返されます。

Generic Connectivity の詳細は、『Oracle9i Heterogeneous Connectivity 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle 以外のデータベース（システム固有の ODBC ドライバを使用してアクセス）から Oracle データベース（Generic Connectivity をサポート）に EUL を移行する方法

Oracle 以外のデータベースから Oracle データベースに EUL を移行する手順は、次のとおりです。

1. Oracle 以外のデータベースから .eex ファイルに EUL オブジェクトをエクスポートします。
詳細は、「[使用するエクスポート / インポート方法](#)」を参照してください。
注意: これは、直接 ODBC 接続をサポートする Discoverer のリリース（9.0.4 以下）を使用して実行する必要があります。
2. EUL を格納する Oracle データベースで Generic Connectivity を設定します。
詳細は、「[Oracle Application Server Control を使用して Discoverer に Generic Connectivity を設定する方法](#)」を参照してください。
3. Oracle データベース上で EUL を作成します。
EUL の作成方法の詳細は、[第 4 章「End User Layer の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。
4. ステップ 1 で作成した .eex ファイルを、Oracle データベースにインポートします。
詳細は、「[使用するエクスポート / インポート方法](#)」を参照してください。
5. マッピング（Discoverer のビジネスエリアと基礎となるオブジェクト）を解決します。
 - a. 「表示」 → 「検証」 → 「フォルダ」を選択します。
 - b. エラーが表示されている最初のフォルダを選択し、「編集」 → 「プロパティ」を選択すると「[フォルダ・プロパティ](#)」ダイアログが表示されます。
 - c. 「データベース」フィールドをクリックすると、「[ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ](#)」が表示されます。
 - d. 「[Oracle Application Server Control を使用して Discoverer に Generic Connectivity を設定する方法](#)」の作業で作成したデータベース・リンクを選択します。
 - e. Oracle 以外のデータベース上の正しいユーザーを選択します。
 - f. 「OK」をクリックして、「ユーザーの選択」ダイアログを閉じます。
 - g. 「OK」をクリックして「データベース」フィールドの新しい値を適用し、「[フォルダ・プロパティ](#)」ダイアログを閉じます。
 - h. エラーが表示されている各フォルダに対して手順 a. ~ g. を繰り返します。
6. Oracle データベース上でデータベース・ユーザーにセキュリティを設定します。
詳細は、[第 7 章「情報に対するアクセス制御」](#)を参照してください。

これで Discoverer ユーザーは Generic Connectivity を使用して Oracle 以外のデータベースに接続し、既存のワークブックやワークシートの使用を継続できます。

Discoverer Administrator で異機種間データ・サービスを使用する場合の ORA-3113 エラー

Discoverer Administrator を使用して、(たとえば、ビジネスエリアを作成するために) Oracle 以外のデータベースのデータにアクセスすると、ORA-3113 エラーが表示されます。次のいずれかの処理が必要です。

- 最新のリリース (リリース 9.0.1.4 以上) の Oracle データベースを使用してください。
- オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡して、Oracle データベースの以前のリリース用パッチが使用可能かどうかを確認してください。

Transparent Gateway を使用した Oracle 以外のデータベースへの接続

Transparent Gateway は、Oracle 以外のデータベースにアクセスするために、Oracle データベースの異機種間サービス機能でサポートされるメカニズムの 1 つです。

Discoverer ユーザーは Oracle Transparent Gateways を異機種間サービスとともに使用して、ベンダー固有の Oracle 以外の特定のデータベースにアクセスできます。たとえば、Oracle Transparent Gateway for Sybase を Solaris 上で使用して、Sun Solaris プラットフォーム上で稼働する Sybase データベースにアクセスできます。

適切な Oracle Transparent Gateways ソフトウェアをインストールしておく必要があります。

Oracle Transparent Gateways およびその設定方法の詳細は、Oracle9i データベースのインストール・ガイドを参照してください。

Oracle RDB に対する Discoverer サポート

Discoverer では、オープン・データベース接続性 (ODBC) を必要とすることなく、またその制限を受けることなく、Oracle RDB へアクセスできます。

この項では、次の項目について説明します。

- 「[Oracle RDB で Discoverer を使用するためのソフトウェア要件](#)」
- 「[Oracle RDB でサポートされない Discoverer 機能](#)」
- 「[Oracle RDB で部分的にサポートされる Discoverer 機能](#)」

Oracle RDB で Discoverer を使用するためのソフトウェア要件

Oracle RDB で Discoverer を直接使用するには、次のものをインストールする必要があります。

- Discoverer リリース 9.0.4 以上、Discoverer Administrator または Discoverer Desktop
- Oracle Rdb リリース 7.0.1.3 以上
- SQL*Net for Oracle Rdb7 リリース 1.0.2 以上

SQL*Net for Oracle Rdb7 のリリースでは、Discoverer 専用、バグ修正のための特別なパッチが必要になることがあります (詳細はデータベース管理者に確認してください)。必要なサポート契約が結ばれている場合には、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してこのパッチを入手できます。

SQL*Net for Oracle Rdb7 を使用すると、クライアントに対して Oracle Rdb7 サーバーを Oracle Server のように見せることができます。

各サーバー・システムに 1 度のみ SQL*Net for Oracle Rdb7 ソフトウェアをインストールする必要があります。また、SQL*Net for Oracle Rdb7 で使用できるように Oracle の機能およびエミュレートした Oracle データ・ディクショナリを定義して、Oracle Rdb7 データベース環境を準備する必要があります。

SQL*Net for Oracle Rdb7 の詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Guide to SQL*Net for Rdb7』
これは、SQL*Net クライアントと Oracle Rdb7 データベースの間で適切な接続を構成および設定するために SQL*Net for Oracle Rdb7 ソフトウェアを設定し使用するためのガイドです。
- 『Oracle SQL/Services Release Notes (7.1.2)』
このマニュアルは、SQL*Net for Oracle Rdb7 リリース 7.1.2 に固有の Oracle SQL/Services のリリース・ノートを含みます。ノートの内容は次のとおりです。
 - 変更および強化された機能
 - アップグレードおよび互換性の情報
 - 新規および既存のソフトウェアの問題および制限事項
 - その他のソフトウェア・マニュアル
- 『Comparison of SQL Dialects for Oracle and Rdb』
このマニュアルの主な目的は、(SQL*Net for Oracle Rdb ソフトウェアを使用する) Discoverer マネージャが、Oracle と Oracle Rdb7 との SQL 言語の相違を理解できるようにすることです。このマニュアルでは、SQL 言語の相違が発生する状況について説明し、意図した機能を実行するために役立つ追加情報を提供します。

Oracle RDB でサポートされない Discoverer 機能

Oracle RDB で Discoverer を使用する場合、次の Discoverer 機能はサポートされません。

機能	サポートされない理由
クエリー予測	Oracle のコストベース・オブティマイザが使用される。
Discoverer EUL リリース 5 のワークブック - eul5.eex	Oracle の PL/SQL が使用される。
PL/SQL ファンクションの登録	Oracle の PL/SQL が使用される。
Discoverer がリフレッシュを管理するサマリー・フォルダ	Oracle の PL/SQL が使用される。
データベース・ロール	Oracle RDBMS に固有。
フォルダのパーサー・ヒント	Oracle RDBMS に固有。
サーバー側のスケジュールされたレポート	Oracle の PL/SQL が使用される。
Oracle 分析関数	Oracle RDBMS に固有。

Oracle RDB で部分的にサポートされる Discoverer 機能

次の機能は、Oracle RDB で部分的にサポートされています。

機能	サポートされない理由
一部の関数： <ul style="list-style-type: none"> ■ INSTR ■ INSTRB ■ VSIZE ■ UID ■ DUMP ■ TRANSLATE ■ SOUNDEX ■ STDDEV ■ VARIANCE ■ STDDEV_DISTINCT ■ VARIANCE_DISTINCT 	Oracle RDBMS に固有。
セキュリティ ロールおよびユーザー	直接にはサポートされない。RDB 管理者による設定が必要。

前のリリースの Discoverer からのアップグレード

この章では、このリリースの Discoverer へのアップグレード方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「アップグレード・パスの選択」
- 「Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードの前提条件」
- 「Discoverer と EUL のリリース」
- 「アップグレード・プロセスの概要」
- 「Discoverer リリース 3.1 以下から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード」
- 「Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード」
- 「Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード」
- 「Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードに関する注意」
- 「スケジュール・ワークブックおよび Discoverer の現行リリースと Oracle9i より前のデータベース・リリースとの間の互換性」

アップグレード・パスの選択

アップグレード・パスの選択は、アップグレード前の Discoverer のリリースによって次のように異なります。

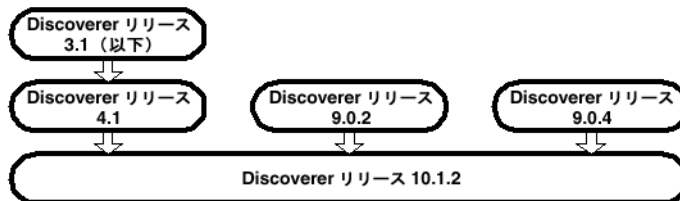
- リリース 3.1 以下からアップグレードする場合は、リリース 4.1 にアップグレードする必要があります（詳細は、「[Discoverer リリース 3.1 以下から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード](#)」を参照）。
- リリース 4.1 からアップグレードする場合は、直接リリース 10.1.2 にアップグレードできません（詳細は、「[Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード](#)」を参照）。
- リリース 9.0.2 または 9.0.4 からアップグレードする場合は、直接リリース 10.1.2 にアップグレードできます（詳細は、「[Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード](#)」を参照）。

このオプションの場合、EUL アップグレードによって操作が中断されることに注意してください。

Discoverer リリース 10.1.2 に関する記述は、リリース 10.1.2.0.0 および 10.1.2.1 にも適用されます。

次のフローチャートに、異なるアップグレード・パスを示します。

図 24-1 Discoverer アップグレードのフローチャート



Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードの前提条件

Discoverer リリース 10.1.2 にアップグレードするには、事前に Discoverer Administrator リリース 10.1.2 をインストールしておく必要があります。

また、End User Layer をアップグレードするには、EUL 所有者が次のデータベース権限を所有している必要があります。

- CREATE PROCEDURE
- CREATE SESSION
- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- CREATE SEQUENCE

Discoverer を Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースにアップグレードする場合は、サマリーがマテリアライズド・ビューとして実装されるため、EUL 所有者には次の権限が必要になります。

- CREATE ANY MATERIALIZED VIEW
- DROP ANY MATERIALIZED VIEW
- ALTER ANY MATERIALIZED VIEW
- GLOBAL QUERY REWRITE

重要: アップグレードされた EUL に転送されるデータの整合性を保つために、アップグレードの実行中は、前のリリースの EUL で Discoverer Administrator セッションを開始しないでください。

Discoverer と EUL のリリース

Discoverer の特定のリリースが、EUL の特定のリリースと互換性があります。

Discoverer エンド・ユーザーは、使用している Discoverer 製品のリリースと互換性のない EUL には接続できません。

Discoverer のリリース番号と EUL のリリース番号は、次に示すように、完全に一致しているわけではありません。

Discoverer のリリース番号	EUL のリリース番号
リリース 3.1.x/3.3.x	リリース 3.1.x
リリース 4.1.x	リリース 4.1.x
リリース 9.0.2.52 以下	リリース 5.0.0.x
リリース 9.0.2.53 以上	リリース 5.0.2.x
リリース 9.0.4.x	リリース 5.0.2.x
リリース 10.1.2.x	リリース 5.1.x.x

Discoverer Administrator リリース 10.1.2 を使用して、リリース 4.1.x EUL またはリリース 5.0.x.x EUL (Discoverer リリース 9.0.2 または 9.0.4) に接続しようとすると、EUL を現在のリリースにアップグレードするように要求されます。この EUL アップグレード・オプションによって操作が中断されることに注意してください。

Discoverer 10.1.2 の前のバージョンからこのバージョンにアップグレードする場合は、EUL をアップグレードする必要はありません。

アップグレード・プロセスの概要

アップグレード・プロセスでは、多くの手順を実行することになります。手順の中には、アップグレード前の Discoverer のリリースによって異なるものもあります。

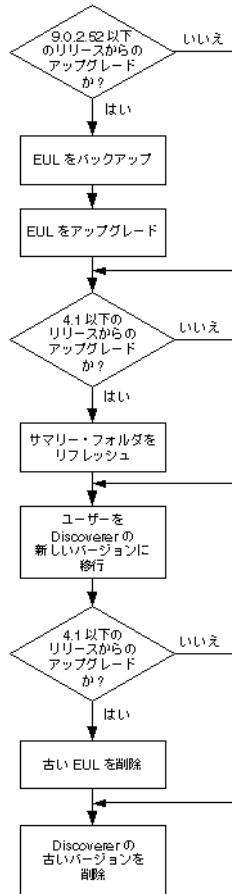
実行する各手順の概要を次に示します。

- データベース・エクスポート・ユーティリティを使用して、アップグレードする各 EUL のバックアップを作成します。EUL エクスポートではなく、データベース・エクスポートを使用して、EUL 表自体 (データベースに保存されているワークブック定義およびクエリ統計を含む) と EUL メタデータを含める必要があります。
- 各 EUL を Discoverer Administrator の最新リリースで開いて、EUL をアップグレードします。リリース 4.1 EUL またはリリース 5.0.x.x EUL の所有者として Discoverer Administrator にログインすると、EUL を現在のリリースにアップグレードするように自動的に要求されます。
- サマリー・フォルダをリフレッシュします。
- ユーザーを新しいリリースの Discoverer に移行します。古いリリースの Discoverer のユーザーは、アップグレード後の EUL にアクセスできません。次の点に注意してください。
 - Discoverer リリース 4.1 のユーザーは、前のリリースであるリリース 4.1 EUL にアクセスできますが、ユーザーが行った変更はアップグレード後のリリース 5.1.x.x EUL では表示されません。
 - リリース 5.0.x.x EUL にアクセスしていた Discoverer リリース 9.0.2 および 9.0.4 のユーザーは、その EUL がリリース 5.1.x.x にアップグレードされた後はアクセスできなくなります。

- 古い EUL をデータベースから削除します (リリース 9.0.x からのアップグレードでは不要です)。初めのうちは、前の EUL へのアクセスを禁止して、ユーザーのアクセスをアップグレード後の EUL のみに許可するようにお勧めします。すべてのユーザーがアップグレード後の EUL に正常にアクセスできることを確認できたら、古い EUL を削除します。
- 古いリリースの Discoverer をクライアント・マシンから削除します。すべてのユーザーが最新リリースの Discoverer を使用してアップグレード後の EUL に正常にアクセスできることを確認できたら、古いリリースの Discoverer を削除できます。

これらの手順を次のフローチャートに示します。

図 24-2 Discoverer アップグレードのフローチャート



Discoverer システムの設定方法により、他にも考慮すべき問題がある場合があります (詳細は「Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードに関する注意」を参照)。

Discoverer リリース 3.1 以下から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード

Discoverer リリース 3.1 以下から Discoverer リリース 10.1.2 に直接アップグレードできるアップグレード・パスはありません。かわりに次のアップグレード・パスを使用します。

- リリース 3.1 よりも前の Discoverer からアップグレードする場合は、Discoverer リリース 3.1 にアップグレードします (詳細は、Oracle Discoverer 3.1 のインストールおよびアップグレード・ガイドを参照)。
- Discoverer リリース 3.1 から Discoverer リリース 4.1 にアップグレードします (詳細は、Oracle Discoverer 4.1 のインストールおよびアップグレード・ガイドを参照)。

- Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 にアップグレードします（詳細は「Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード」を参照）。

Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード

この項では、Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード方法について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード」
- 「アップグレード手順 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ」
- 「アップグレード手順 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード」
- 「アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ」
- 「アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行」
- 「アップグレード手順 5: リリース 4.1 EUL の削除」
- 「アップグレード手順 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除」

Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード

何よりも先に、次のアップグレード手順に従ってリリース 4.1 EUL をバックアップします。

- 「アップグレード手順 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ」

Discoverer リリース 10.1.2 を使用するには、Discoverer ユーザーが Discoverer リリース 5.1 の End User Layer (EUL) へのアクセス権を持っている必要があります。Discoverer リリース 4.1 EUL を使用していたユーザーが Discoverer リリース 10.1.2 を使用してアクセスするには、EUL をアップグレードする必要があります。

EUL アップグレード・プロセスにより新しいリリース 5.1 の EUL テーブルが作成され、リリース 4.1 の EUL テーブルから新しいテーブルにメタデータがコピーされます。アップグレード・プロセスは中断を必要とするものではないため（リリース 4.1 の EUL テーブルは削除されません）、既存ユーザーはアップグレード・プロセス中も Discoverer リリース 4.1 を引き続き使用できます。

次のアップグレード手順に従い、Discoverer Administrator を使用して EUL をアップグレードします。

- 「アップグレード手順 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード」
- 「アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ」

リリース 4.1 の EUL がすべて正常にアップグレードされたことを確認した後、次のアップグレード手順を実行します。

- 「アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行」
- 「アップグレード手順 5: リリース 4.1 EUL の削除」

すべてのユーザーをアップグレードし、すべてのリリース 4.1 EUL を削除した後、次のアップグレード手順を実行します。

- 「アップグレード手順 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除」

アップグレード手順 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ

Discoverer リリース 4.1 EUL を Discoverer リリース 5.1 EUL にアップグレードするには、まず標準のデータベース・エクスポート・ユーティリティを使用して EUL 所有者をエクスポートすることによって、EUL テーブルをバックアップしておく必要があります。

EUL 所有者のエクスポート方法は次の条件により異なります。

- ユーザーのマシンにインストールされている Oracle クライアント・ソフトウェアのリリース
- リリース 4.1 EUL が存在する Oracle データベースのリリース

Oracle データベースのリリースとユーザーのマシンにインストールされた Oracle データベース・クライアント・ソフトウェアのリリースを同じにすることをお勧めします。リリースが異なる場合（EUL が Oracle9i データベースにあり、Oracle10g クライアント・ソフトウェアがマシンにインストールされている場合など）は、以降の指示に従うことができない可能性があります。EUL をエクスポートできない場合は、データベース管理者に連絡し、EUL をエクスポートするように依頼してください。

リリース 4.1 EUL をバックアップするには（EUL が Oracle9i データベース上に存在し、Discoverer マネージャは Oracle Developer Suite がインストールされたマシンを使用していると想定）、[「標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法」](#)の手順に従ってください。

リリース 4.1 EUL をバックアップした後、リリース 5.1 へのアップグレードを開始できます。

アップグレード手順 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード

リリース 4.1 EUL をバックアップした後、EUL をリリース 5.1 にアップグレードできます。

EUL をアップグレードする手順は、次の指示に従って最新リリースの Discoverer Administrator で EUL を開くのみです。リリース 4.1 EUL を所有していたデータベース・ユーザーがリリース 5.1 EUL を所有します。

リリース 4.1 のエンド・ユーザーはアップグレードの影響を受けずに、リリース 4.1 EUL を引き続き使用できます。ただし、アップグレード・プロセスの開始後にリリース 4.1 EUL でエンド・ユーザーが行った変更（ワークブックの変更など）は、リリース 5.1 EUL では表示されません。

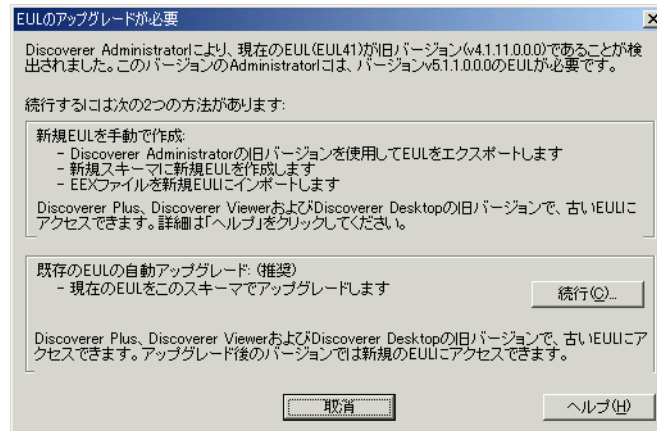
重要: リリース 5.1 EUL に転送されるデータの整合性を保つために、アップグレードの実行中は、リリース 4.1 EUL で Discoverer Administrator セッションを開始しないでください。

リリース 4.1 EUL をリリース 5.1 にアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューで「プログラム」→「Oracle Business Intelligence - <BI TOOLS HOME NAME>」→「Discoverer Administrator」を選択すると、「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログが表示されます。
2. アップグレードする Discoverer リリース 4.1 EUL の所有者のデータベース・ユーザー名およびパスワードを入力します。
3. 「OK」をクリックします。

「EUL のアップグレードが必要」ダイアログが表示されます。

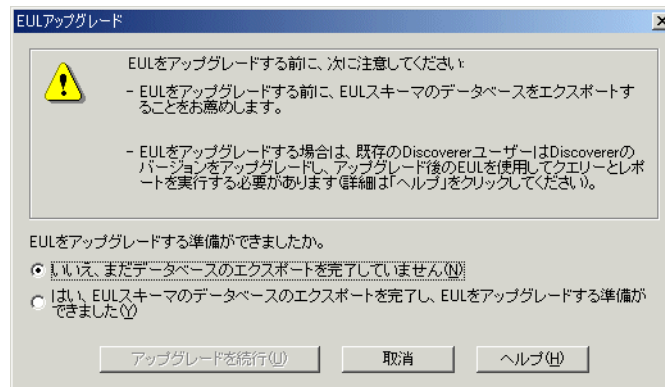
図 24-3 「EULのアップグレードが必要」ダイアログ

**注意:**

- リリース 4.1 EUL をまだエクスポートしていない場合は、「取消」をクリックして EUL をエクスポートしてください（詳細は、「アップグレード手順 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ」を参照してください）。
- 「EUL アップグレード」ダイアログが表示されない場合、リリース 4.1 EUL はすでにアップグレードされています。EUL を再度アップグレードする必要はないので、直接「アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ」に進んでください。

4. 「続行」をクリックすると、「EUL アップグレード」ダイアログが表示されます。

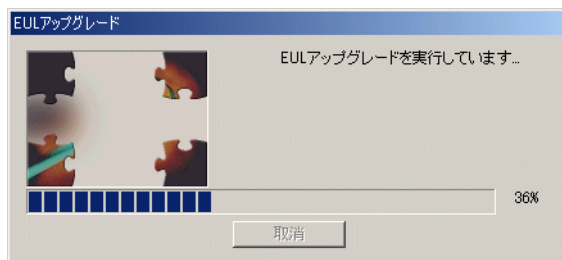
図 24-4 「EUL アップグレード」ダイアログ



5. 「はい、EUL スキーマのデータベースのエクスポートを完了し、EUL をアップグレードする準備ができました」ラジオ・ボタンを選択し、Discoverer リリース 4.1 EUL がエクスポートされていることを確認します。
6. 「アップグレードを実行」をクリックし、リリース 4.1 EUL からコピーしたデータを使用して新しいリリース 5.1 EUL を作成します。

「EUL アップグレード」進行状況ウィンドウに、アップグレードのステータスが表示されます。

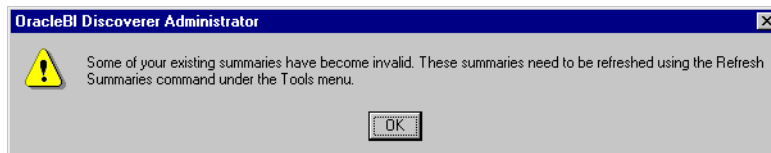
図 24-5 「EUL アップグレード」 進行状況ウィンドウ



アップグレード・プロセス時に出力されたメッセージは、「End User Layer アップグレードのログ」ダイアログに表示されます。このダイアログはプロセスの最後に表示されます。識別子に含まれる無効な文字を参照するメッセージの詳細は、「[無効な文字が含まれた識別子のアップグレードに関する注意](#)」を参照してください。

アップグレードされた EUL の中にサマリー・フォルダがある場合は、サマリー・フォルダが無効であり、リフレッシュが必要であることを示す次のメッセージ・ダイアログが表示されます。

図 24-6 無効なサマリーの警告メッセージ・ダイアログ



7. 前述のメッセージ・ダイアログが表示された場合は、「OK」をクリックします。

ロード・ウィザードが表示されます。

8. 「取消」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。

EUL アップグレードは完了しました。この EUL を使用すると、Discoverer Administrator リリース 10.1.2 を使用してデータベースに接続できます。

アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ

アップグレードした EUL の中にサマリー・フォルダがある場合には、サマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。

リリース 4.1 のサマリー・フォルダの定義が新しいリリース 5.1 EUL にコピーされ、アップグレードされたサマリー・フォルダのステータスが「リフレッシュ必須」に変更されます。アップグレードされたサマリー・フォルダの基礎となっているデータベース・テーブルまたはマテリアライズド・ビューは、サマリー・フォルダがリフレッシュされるまでは実際に作成されません。

アップグレードされたサマリー・フォルダをリフレッシュすると、次の処理が行われます。

- Oracle Standard Edition データベースでは、Discoverer によりサマリー・テーブルが作成されます。
- Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースでは、Discoverer によりマテリアライズド・ビューが作成されます。

サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューが作成された時点で、Discoverer によりサマリー・フォルダを使用して最適化クエリーを作成できます。

サマリー・フォルダ、サマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューの詳細は、[第 14 章「サマリー・フォルダの管理」](#)を参照してください。

アップグレードされたサマリー・フォルダをリフレッシュする手順は、次のとおりです。

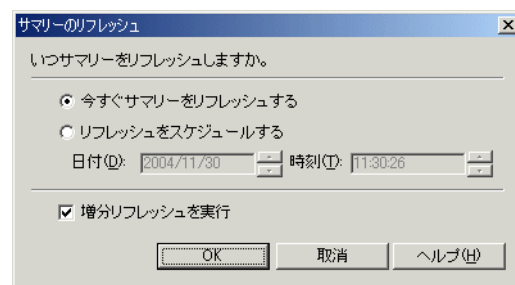
1. アップグレードされた EUL の所有者として Discoverer Administrator に接続します。
2. リフレッシュするサマリー・フォルダを含むビジネスエリアを開きます。
3. 「ワークエリア」の「サマリー」タブを表示します。
4. リフレッシュするサマリー・フォルダを選択します。

サマリー・フォルダを Discoverer で使用できるようにするためには、まず、すべてのサマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。しかし、データの量によっては、すべてのサマリー・フォルダを同時にリフレッシュしたくない場合もあります。

5. 「ツール」→「サマリーのリフレッシュ」を選択します。

外部サマリー・テーブルに基づいていないサマリー・フォルダについて、「サマリーのリフレッシュ」ダイアログが表示されます。

図 24-7 「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ



6. 必要に応じてリフレッシュ・オプションを指定します。

すぐにリフレッシュすることも、時間を指定してリフレッシュすることもできます。データの量に応じて、ピークを避けた時間帯にスケジュールすることも可能です。

7. 「OK」をクリックしてサマリー・フォルダをリフレッシュします。

注意

- アップグレードされた EUL に、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダが含まれる場合は、これらのサマリー・フォルダもリフレッシュする必要があります。Discoverer はリフレッシュ中に、外部サマリー・テーブルに基づいてサマリー・フォルダの EUL メタデータを更新します。Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースを使用している場合は、Discoverer により外部サマリー・テーブルを参照するマテリアライズド・ビューが作成されます。

アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行

リリース 4.1 EUL をすべてアップグレードし、アップグレード後の EUL が使用可能な状態にあることを確認した後は、Discoverer ユーザーを Discoverer リリース 10.1.2 に移行します。

組織で順次移行作業を行う間、ユーザーは Discoverer リリース 4.1 (前の EUL へのアクセス) または Discoverer リリース 10.1.2 (アップグレード後の EUL へのアクセス) で作業を続けることができます。しかし、あるリリースの Discoverer Administrator を使用して行った変更は、別のリリースの Discoverer ユーザーは使用できませんので注意してください。

Discoverer ユーザーを Discoverer リリース 10.1.2 に移行する方法は、使用されている Discoverer ツールによって異なります。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーを移行する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Business Intelligence Discoverer をインストールします。
2. Oracle Application Server のアップグレード・ガイドの手順に従って中間層の Discoverer コンポーネントをアップグレードします。

Discoverer Desktop ユーザーを移行する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Business Intelligence ツールに付属している CD を使用して、クライアント・マシンに Discoverer Desktop をインストールします。

Oracle Installer は、Discoverer Desktop リリース 10.1.2 を Discoverer リリース 4.1 のディレクトリとは異なるディレクトリにインストールします。

注意

ユーザーが初めて Discoverer にログインすると (Discoverer Plus、Discoverer Desktop または Discoverer Viewer を使用)、Discoverer ではそのユーザーがアクセス権を持っているすべてのリリース 5.1 EUL が次のように検索されます。

- 有効な EUL が検出された場合、ユーザーは、Discoverer リリース 10.1.2 に接続して作業を開始できます。
- 有効な EUL が検出されない場合は、ユーザーがデータベースに接続できないことが Discoverer により警告されます。EUL がアップグレードされていない可能性があるため、ユーザーはこの時点で Discoverer マネージャに連絡する必要があります。なお、既存のリリース 4.1 EUL に対して Discoverer リリース 4.1 を使用することは可能です。

アップグレード手順 5: リリース 4.1 EUL の削除

リリース 4.1 EUL をアップグレードし、すべてのユーザーを Discoverer 10.1.2 に移行した後は、リリース 4.1 EUL を削除できます。

初めのうちは、前の EUL へのアクセスを禁止して、ユーザーのアクセスをアップグレード後の EUL のみに許可するようにお勧めします。すべてのユーザーがアップグレード後の EUL に正常にアクセスできることが確認できたら、古い EUL を削除できます。

Discoverer は `eul4del.sql` という名前の SQL スクリプトを提供しています。このスクリプトを使用すると、リリース 4.1 の EUL および関連するテーブル (サマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューを含む) を削除できます。

次の点に注意してください。

- `eul4del.sql` スクリプトを実行すると、SYSTEM ユーザーのパスワードを入力するように要求されます。SYSTEM ユーザーのパスワードがわからない場合は、データベース管理者に問い合わせてください。SYSTEM ユーザーのパスワードを教えるかわりに、データベース管理者がスクリプトを実行する場合があります。
- EUL 所有者以外のユーザーが所有するサマリー・フォルダがある場合、`eul4del.sql` スクリプトは正常に終了しません。このスクリプトはこのようなサマリー・フォルダおよびその所有者をリスト表示します。リリース 4.1 EUL を削除するには、これらのサマリー・フォルダ所有者が自分のサマリー・フォルダを削除する必要があります。
- Discoverer Administration Edition リリース 4.1 へのアクセス権がある場合は、`eul4del.sql` スクリプトのかわりに EUL Manager を使用して EUL を削除できます。
- アップグレード後にユーザーがリリース 4.1 EUL を変更した場合、その変更はリリース 10.1.2 EUL では反映されません。多くの変更が行われた可能性がある場合は、リリース 4.1 EUL を削除する前にバックアップすることをお勧めします (詳細は「[アップグレード手順 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ](#)」を参照)。

`eul4del.sql` スクリプトを使用してリリース 4.1 EUL を削除する手順は、次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューから ORACLE → Application Development → SQL*Plus を選択し、SQL*Plus ダイアログを表示します。
2. 削除する Discoverer リリース 4.1 EUL の所有者のデータベース・ユーザー名、パスワードおよびデータベースを入力します。

3. コマンド・プロンプトに次のように入力し、リリース 4.1 EUL の削除スクリプトを開始します。

```
SQL> @<ORACLE_HOME>%discoverer%util%eul4del.sql
```

削除スクリプトは指定されたリリース 4.1 EUL と、サマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューを含めて関連するデータベース・オブジェクトをすべて削除します。

削除スクリプトの概要が表示されます。

```
Removing summary refresh jobs ...
Discoverer End User Layer Database Tables (4.x Production) deinstallation
This script will remove a version 4.x EUL and any associated database objects.
It will:
```

1. Ask you to enter the ORACLE SYSTEM password and connect string.
2. Ask you to enter the name and password of the 4.x EUL owner.
3. Confirm that you wish to drop the 4.x EUL.
4. Check for database jobs for users other than the 4.x EUL owner.
5. Confirm whether to drop 4.x tutorial tables (if any).
6. Log in as the 4.x EUL owner and remove any database jobs for it.
7. Remove all summary database objects for the 4.x EUL.
8. Remove all scheduled workbook database objects for the 4.x EUL.
9. Remove the 4.x EUL tables.
10. Remove user and public synonyms (if any) for the 4.x EUL tables.

4. プロンプトが表示された時点で、SYSTEM ユーザーのパスワードおよびデータベース接続文字列を入力します。

SYSTEM ユーザーのパスワードがわからない場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

5. リリース 4.1 EUL の所有者の名前とパスワードを入力します。

次のテキストが表示されます。

```
Preparing to remove EUL 4.x owned by <username> at <today's date>
If you continue, the specified 4.x End User Layer will be PERMANENTLY dropped. All
End User Layer information and workbooks stored in the database will be deleted.
Any 5.x End User Layer tables will NOT be affected by this process.
THIS PROCESS IS NON-REVERSIBLE.
Do you wish to continue [N]:
```

EUL 削除プロセスは元に戻すことはできませんので注意してください。

6. 「Y」と入力して、リリース 4.1 EUL を削除することを確認します。

スクリプトによりリリース 4.1 のチュートリアル・テーブルが検出された場合は、テーブルを削除するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

このスクリプトはリリース 4.1 EUL の削除プロセス中に、EUL 所有者以外のユーザーが所有するサマリー・フォルダがあるかどうかを確認します。

- 他のユーザーが所有するサマリー・フォルダがない場合は、リリース 4.1 EUL は削除されます。削除プロセスの様々な段階を示す次のような多数のメッセージが表示されます。

```
Removing summary refresh jobs ...
Dropping internally managed summary data ...
Removing scheduled workbook jobs ...
Dropping scheduled workbook data ...
Dropping 4.x End User Layer Tables ...
Removing public synonyms (if any) ...
Connected.
```

```
Finished removing 4.x End User Layer.
```

- EUL 所有者以外のユーザーが所有するサマリー・フォルダがある場合、スクリプトは停止し、次のテキストが表示されます。

```
The following users have managed summaries which must be dropped before this
EUL can be deinstalled:
User: SCOTT, Summary: Scott's Summary
User: FRED, Summary: Fred's Summary
etc.
Quitting - no changes made.
```

このメッセージが表示された場合、指定されたユーザーは Discoverer Administration Edition リリース 4.1 にログインし、指定されたサマリー・フォルダを削除する必要があります（詳細は、「[サマリー・フォルダの削除方法](#)」を参照してください）。これらのサマリー・フォルダを削除した後、`eul4del.sql` スクリプトを再実行し、リリース 4.1 EUL を削除します。

アップグレード手順 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除

ユーザーとともに Discoverer リリース 10.1.2 に正常に接続し、サマリー・フォルダが正しく機能していることを確認した後は、Discoverer リリース 4.1 製品（Discoverer Administration Edition、Discoverer Desktop Edition）をクライアント・マシンから削除できます。

クライアント・マシンから Discoverer リリース 4.1 製品を削除する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer リリース 4.1 製品のインストールに使用した CD をコンピュータに挿入します。
Oracle Installer が自動的に起動します。Installer が自動的に起動しない場合は、Windows Explorer から CD-ROM にアクセスし、CD ルート・ディレクトリから `setup.exe` を実行します。
2. Oracle Installer のダイアログを使用して Discoverer リリース 4.1 製品を削除します。
Discoverer リリース 4.1 で作成され、`<ORACLE_HOME>%discvr4` ディレクトリに保存されているワークブックは削除されません。
3. (オプション) 後で使用するために `<ORACLE_HOME>%discvr4` ディレクトリのワークブックを保持するには次のようにします。
 - a. Discoverer リリース 4.1 のワークブックを、`<ORACLE_HOME>%discvr4` ディレクトリから Discoverer リリース 10.1.2 で使用する新しいディレクトリに移動します。
 - b. `%discvr4` ディレクトリを削除します。

Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード

この項では、Discoverer リリース 9.0.2 または Discoverer リリース 9.0.4（総称して Discoverer リリース 9.0.x と呼びます）から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード方法について説明します。項目は次のとおりです。

[「Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード」](#)

[「アップグレード手順 1: リリース 5.0 EUL のバックアップ」](#)

[「アップグレード手順 2: リリース 5.0 EUL のアップグレード」](#)

[「アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ」](#)

[「アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行」](#)

[「アップグレード手順 5: クライアント・マシンからの Discoverer Version 9.0.x 製品の削除」](#)

Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレード

Discoverer リリース 10.1.2 を使用するには、Discoverer ユーザーが Discoverer リリース 5.1 の End User Layer (EUL) へのアクセス権を持っている必要があります。

アップグレードが必要な各 EUL について、次のアップグレード手順を実行します。

- 「アップグレード手順 1: リリース 5.0 EUL のバックアップ」
- 「アップグレード手順 2: リリース 5.0 EUL のアップグレード」
- 「アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ」

警告: EUL アップグレード・プロセスによって既存のリリース 5.0 EUL テーブルが変更されます。既存のユーザーは、アップグレード・プロセス中またはアップグレード・プロセスの完了後に、Discoverer リリース 9.0.x を使用して EUL にアクセスすることはできません。

アップグレードが必要なリリース 5.0 EUL がすべてアップグレードされたことを確認した後で、次のアップグレード手順を実行します。

- 「アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行」
- すべてのユーザーをアップグレードした後で、次のアップグレード手順を実行します。
- 「アップグレード手順 5: クライアント・マシンからの Discoverer Version 9.0.x 製品の削除」

アップグレード手順 1: リリース 5.0 EUL のバックアップ

EUL をアップグレードする前に、まず標準のデータベース・エクスポート・ユーティリティを使用して EUL 所有者をエクスポートし、EUL テーブルをバックアップしておく必要があります。

EUL 所有者のエクスポート方法は次の条件により異なります。

- ユーザーのマシンにインストールされている Oracle クライアント・ソフトウェアのリリース
- EUL が存在する Oracle データベースのリリース

Oracle データベースのリリースとユーザーのマシンにインストールされた Oracle データベース・クライアント・ソフトウェアのリリースを同じにすることをお勧めします。リリースが異なる場合 (EUL が Oracle9i データベースにあり、Oracle10g クライアント・ソフトウェアがマシンにインストールされている場合など) は、以降の指示に従うことができない可能性があります。EUL をエクスポートできない場合は、データベース管理者に連絡し、EUL をエクスポートするように依頼してください。

リリース 5.0 EUL をバックアップするには (EUL が Oracle9i データベース上に存在し、Discoverer マネージャは Oracle Developer Suite がインストールされたマシンを使用していると想定)、「標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法」の手順に従ってください。

EUL をバックアップした後は、EUL をアップグレードできます。

アップグレード手順 2: リリース 5.0 EUL のアップグレード

EUL をアップグレードする手順は、次の指示に従って最新リリースの Discoverer Administrator で EUL を開くのみです。

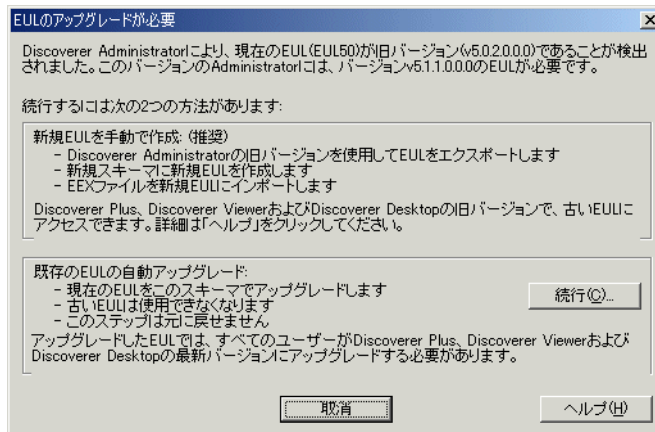
EUL をアップグレードした後、Discoverer リリース 9.0.x のユーザーはアップグレード後の EUL を使用できなくなることに注意してください。

リリース 5.0 EUL をリリース 5.1 にアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューで「プログラム」→「Oracle Business Intelligence Tools - <BI TOOLS HOME NAME>」→「Discoverer Administrator」を選択すると、「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator に接続」ダイアログが表示されます。
2. アップグレードする EUL の所有者のデータベース・ユーザー名およびパスワードを入力します。

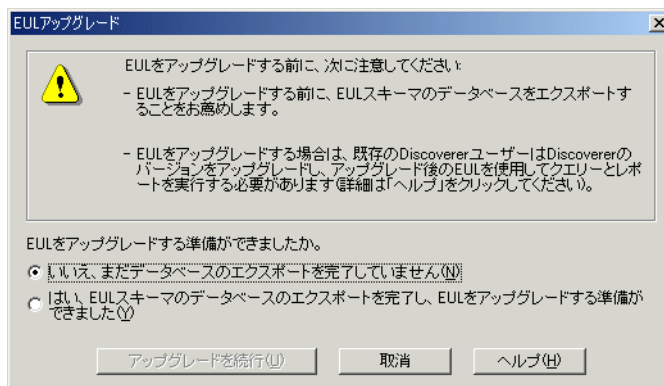
- 「OK」をクリックします。
「EUL のアップグレードが必要」ダイアログが表示されます。

図 24-8 「EUL のアップグレードが必要」

**注意:**

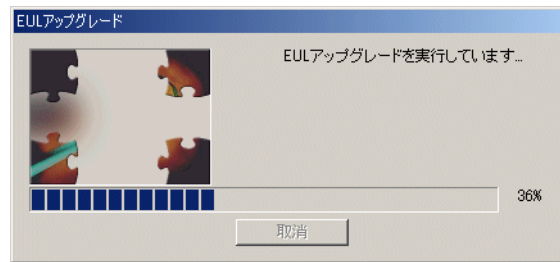
- EUL をまだエクスポートしていない場合は、「取消」をクリックして EUL をエクスポートしてください（詳細は、「[アップグレード手順 1: リリース 5.0 EUL のバックアップ](#)」を参照してください）。
 - 「EUL のアップグレードが必要」ダイアログが表示されない場合、リリース 5.0 EUL はすでにアップグレードされています。EUL を再度アップグレードする必要はないので、直接「[アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行](#)」に進んでください。
- 「続行」をクリックすると、「EUL アップグレード」ダイアログが表示されます。

図 24-9 「EUL アップグレード」ダイアログ



- 「はい、EUL スキーマのデータベースのエクスポートを完了し、EUL をアップグレードする準備ができました」ラジオ・ボタンを選択し、Discoverer リリース 5.0 EUL がエクスポートされていることを確認します。
- 「アップグレードを実行」をクリックして、リリース 5.0 EUL をアップグレードします。
「EUL アップグレード」進行状況ウィンドウに、アップグレードのステータスが表示されます。

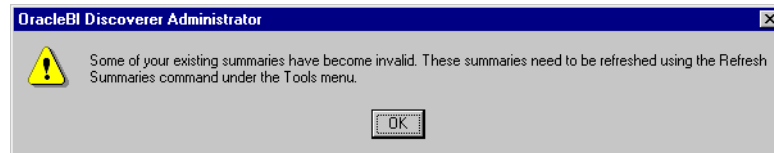
図 24-10 「EUL アップグレード」 進行状況ウィンドウ



アップグレード・プロセス時に出力されたメッセージは、「End User Layer アップグレードのログ」ダイアログに表示されます。このダイアログはプロセスの最後に表示されます。識別子に含まれる無効な文字を参照するメッセージの詳細は、「[無効な文字が含まれた識別子のアップグレードに関する注意](#)」を参照してください。

アップグレードされた EUL の中にサマリー・フォルダがある場合は、サマリー・フォルダが無効であり、リフレッシュが必要であることを示す次のメッセージ・ダイアログが表示されます。

図 24-11 無効なサマリ-の警告メッセージ・ダイアログ



7. 前述のメッセージ・ダイアログが表示された場合は、「OK」をクリックします。

ロード・ウィザードが表示されます。

8. 「取消」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。

EUL アップグレードは完了しました。この EUL を使用すると、Discoverer Administrator リリース 10.1.2 を使用してデータベースに接続できます。

アップグレード手順 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ

アップグレードした EUL の中にサマリー・フォルダがある場合には、サマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。

リリース 9.0.x のサマリー・フォルダの定義が新しいリリース 5.1 EUL にコピーされ、アップグレードされたサマリー・フォルダのステータスは「リフレッシュ必須」に変更されます。アップグレードされたサマリー・フォルダの基礎となっているデータベース・テーブルまたはマテリアライズド・ビューは、サマリー・フォルダがリフレッシュされるまでは実際に作成されません。

アップグレードされたサマリー・フォルダをリフレッシュすると、次の処理が行われます。

- Oracle Standard Edition データベースでは、Discoverer によりサマリー・テーブルが作成されます。
- Oracle Enterprise Edition データベースでは、Discoverer によりマテリアライズド・ビューが作成されます。

サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューが作成された時点で、Discoverer によりサマリー・フォルダを使用して最適化クエリを作成できます。

サマリー・フォルダ、サマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビューの詳細は、[第 14 章「サマリー・フォルダの管理」](#)を参照してください。

アップグレードされたサマリー・フォルダをリフレッシュする手順は、次のとおりです。

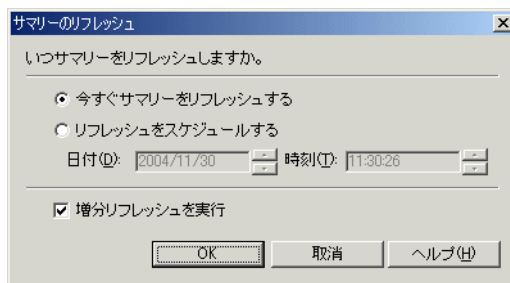
1. アップグレードされた EUL の所有者として Discoverer Administrator に接続します。
2. リフレッシュするサマリー・フォルダを含むビジネスエリアを開きます。
3. 「ワークエリア」の「サマリー」タブを表示します。
4. リフレッシュするサマリー・フォルダを選択します。

サマリー・フォルダを Discoverer で使用できるようにするためには、まず、すべてのサマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。しかし、データの量によっては、すべてのサマリー・フォルダを同時にリフレッシュしたくない場合もあります。

5. 「ツール」→「サマリーのリフレッシュ」を選択します。

外部サマリー・テーブルに基づいていないサマリー・フォルダについて、「サマリーのリフレッシュ」ダイアログが表示されます。

図 24-12 「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ



6. 必要に応じてリフレッシュ・オプションを指定します。

すぐにリフレッシュすることも、時間を指定してリフレッシュすることもできます。データの量に応じて、ピークを避けた時間帯にスケジュールすることも可能です。

7. 「OK」をクリックしてサマリー・フォルダをリフレッシュします。

注意

- アップグレードされた EUL に、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダが含まれる場合は、これらのサマリー・フォルダもリフレッシュする必要があります。Discoverer はリフレッシュ中に、外部サマリー・テーブルに基づいてサマリー・フォルダの EUL メタデータを更新します。Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースを使用している場合は、Discoverer により外部サマリー・テーブルを参照するマテリアライズド・ビューが作成されます。

アップグレード手順 4: Discoverer リリース 10.1.2 へのユーザーの移行

リリース 5.0 EUL をすべてアップグレードし、アップグレード後の EUL が使用可能な状態にあることを確認した後は、Discoverer ユーザーを Discoverer リリース 10.1.2 に移行します。

ユーザーを Discoverer リリース 10.1.2 に移行するまで、ユーザーはアップグレード後の EUL にアクセスできません。

Discoverer ユーザーを Discoverer リリース 10.1.2 に移行する方法は、使用されている Discoverer ツールによって異なります。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーを移行する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Business Intelligence Discoverer をインストールします。
2. Oracle Application Server のアップグレード・ガイドの手順に従って中間層の Discoverer コンポーネントをアップグレードします。

Discoverer Desktop ユーザーを移行する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Business Intelligence ツールに付属している CD を使用して、クライアント・マシンに Discoverer Desktop をインストールします。

Oracle Installer は、Discoverer Desktop リリース 10.1.2 を Discoverer リリース 9.0.x のディレクトリとは異なるディレクトリにインストールします。

注意

ユーザーが初めて Discoverer リリース 10.1.2 にログインしたとき (Discoverer Plus、Discoverer Desktop または Discoverer Viewer を使用)、Discoverer ではそのユーザーがアクセス権を持っているすべてのリリース 5.1 EUL が次のように検索されます。

- 有効な EUL が検出された場合、ユーザーは、Discoverer リリース 10.1.2 に接続して作業を開始できます。
- 有効な EUL が検出されない場合は、ユーザーがデータベースに接続できないことが Discoverer により警告されます。EUL がアップグレードされていない可能性があるため、ユーザーはこの時点で Discoverer マネージャに連絡する必要があります。ユーザーはアップグレードされていない EUL に対し、引き続き Discoverer リリース 9.0.x を使用できます。

Discoverer リリース 10.1.2 がインストールされ、データベースへの接続がリリース 5.1 EUL を通じて正常に確立された後は、Discoverer リリース 9.0.x 製品 (Discoverer Desktop、Discoverer Administrator) をクライアント・マシンから削除できます。

アップグレード手順 5: クライアント・マシンからの Discoverer Version 9.0.x 製品の削除

Discoverer マネージャとユーザーが Discoverer リリース 10.1.2 を使用してリリース 5.1 EUL に正常に接続できたら、Discoverer リリース 9.0.x 製品 (Discoverer Administrator、Discoverer Desktop) をクライアント・マシンから削除できます。

Discoverer リリース 9.0.x 製品をクライアント・マシンから削除する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer リリース 9.0.x 製品のインストールに使用した CD をコンピュータに挿入します。

Oracle Installer が自動的に起動します。Installer が自動的に起動しない場合は、Windows Explorer から CD-ROM にアクセスし、CD ルート・ディレクトリから setup.exe を実行します。

2. Oracle Installer のダイアログを使用して Discoverer リリース 9.0.x 製品を削除します。

Discoverer リリース 9.0.x で作成され、<ORACLE_HOME>%discoverer902 ディレクトリ (リリース 9.0.2) または <ORACLE_HOME>%discoverer ディレクトリ (リリース 9.0.4) に保存されているワークブックは削除されません。

3. (オプション) 後で Discoverer リリース 10.1.2 で使用するために Discoverer リリース 9.0.x のワークブックを保持する手順は、次のとおりです。
 - a. Discoverer リリース 9.0.x のワークブックを新しいディレクトリに移動します。
 - b. 元のディレクトリを削除します。

Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードに関する注意

この項では、Discoverer リリース 10.1.2 へのアップグレードに関する注意を説明します。

- 「Oracle Applications EUL のアップグレードに関する注意」
- 「分析関数を含む EUL のアップグレードに関する注意」
- 「Video Stores チュートリアルへのアップグレードに関する注意」
- 「スケジュール・ワークブックのアップグレードに関する注意」
- 「.dis ファイルに保存されたワークブックのアップグレードに関する注意」
- 「EUL Gateway を使用する Discoverer システムのアップグレードに関する注意」
- 「集合演算子を含むサマリー・フォルダのアップグレードに関する注意」
- 「無効な文字が含まれた識別子のアップグレードに関する注意」

Oracle Applications EUL のアップグレードに関する注意

Oracle Applications EUL をアップグレードするときには、EUL テーブルの MAXEXTENTS 記憶域プロパティが、EUL が作成された表領域の MAXEXTENTS 記憶域プロパティよりも大きな値になっている可能性がありますので注意してください。このような場合には、EUL のアップグレードは次の理由により失敗します (ORA-01631 エラー)。

- アップグレード・プロセスは、新しい EUL テーブルを作成するときに、元の EUL 表領域の MAXEXTENTS 値を使用します。
- このため、新しい EUL テーブルは、元の EUL テーブルからのデータを含めるだけの十分な大きさを持たないものになります。

EUL テーブルの MAXEXTENTS 値が EUL の表領域の MAXEXTENTS 値よりも大きいときには、EUL をアップグレードする前に、元の EUL の表領域の MAXEXTENTS 値を増加するようにデータベース管理者に依頼してください。新しい EUL 表領域および新しい EUL テーブルは、より大きな MAXEXTENTS 値を持つように作成されます。

分析関数を含む EUL のアップグレードに関する注意

Discoverer リリース 4.1 EUL を Discoverer リリース 5.1 EUL にアップグレードすると、新しい Oracle9i 分析関数が EUL テーブルに追加されます。

新しい関数と同じ名前 (または同じ意識別子) の既存のユーザー定義関数がある場合、Discoverer は次の処理を実行します。

- 既存のユーザー定義関数の名前を変更
- アップグレード・プロセスの最後にログ・メッセージを表示
- ログ・ファイルにメッセージを保存するオプションの提供

注意: Discoverer の内部参照システムにより、Discoverer エンド・ユーザーは名前を変更されたユーザー定義関数を含むワークブックを引き続き使用できます。

Video Stores チュートリアルへのアップグレードに関する注意

Video Stores チュートリアルは、Discoverer の特定のリリースに固有のものです。

そのため、Discoverer の新しいリリースにアップグレードしたときは、チュートリアルをアップグレードするのではなく、適切なリリースの Discoverer Administrator を使用して、Video Stores サンプル・データをインストールすることをお勧めします。

スケジュール・ワークブックのアップグレードに関する注意

リリース 3.1 EUL をリリース 4.1 EUL にアップグレードしたときは、別個の実行可能ファイル (dis4sch.exe) を実行してスケジュール・ワークブックをアップグレードする必要があります (詳細は Discoverer 4.1 のリリース・ノートを参照してください)。

リリース 4.1 EUL をリリース 5.1 EUL にアップグレードすると、スケジュール・ワークブックは自動的にアップグレードされます。ただし、スケジュール・ワークブックの結果はリリース 5.1 EUL にコピーされません。アップグレード後のスケジュール・ワークブックの結果は、スケジュール・ワークブックが次に実行されるまで利用できません。

.dis ファイルに保存されたワークブックのアップグレードに関する注意

Discoverer Desktop ユーザーが .dis ファイル内のファイル・システムにワークブックを保存した場合、.dis ファイルをアップグレードするまで最新リリースの Discoverer でワークブックを使用できません。

.dis ファイルをアップグレードする手順は、ユーザーが .dis ファイルを最新リリースの Discoverer で開き、そのファイルを再びファイル・システムまたはデータベース (ファイルを Discoverer Plus および Discoverer Viewer で開く場合) に保存するのみです。.dis ファイルがアップグレードされると、前のリリースの Discoverer Desktop のユーザーはファイルを開くことができなくなります。

EUL Gateway を使用する Discoverer システムのアップグレードに関する注意

Discoverer システムでは、EUL Gateway を使用して、データベースのオンライン・ディクショナリ以外のソース (Oracle Designer など) からのメタデータが EUL に移入されることがあります。

このようなシステムをアップグレードする場合は、アップグレード・プロセスの完了後に EUL Gateway を再インストールして再構成する必要があります。EUL Gateway のインストールおよび構成の詳細は、<ORACLE_HOME>%discoverer%kits ディレクトリにある eulgatew.doc ドキュメントを参照してください。

集合演算子を含むサマリー・フォルダのアップグレードに関する注意

リリース 3.1 EUL を、Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベース上のリリース 4.1 EUL にアップグレードする場合は、集合演算子 (UNION、UNION ALL、MINUS、INTERSECT など) に基づくサマリー・フォルダが無効になる可能性があります。

アップグレード・プロセスの間に、サマリー・フォルダはマテリアライズド・ビューに変換されます。しかし、Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースでは、マテリアライズド・ビュー内の集合演算子 (UNION、UNION ALL、MINUS、INTERSECT など) の使用が制限されます。

マテリアライズド・ビュー内の集合演算子の使用に関する制限は、Oracle 9.2 以上のデータベースでは削除されています。

無効な文字が含まれた識別子のアップグレードに関する注意

Discoverer の今後のリリースでは、識別子で使用できる有効な文字が変更され、一部の文字はサポートされない可能性があります (詳細は「[識別子](#)」を参照)。文字がサポートされなくなる場合、Discoverer では、変更が必要なリリースでの無効な文字が自動的に変更されます。

注意: 9.0.2 から 9.0.4 へのアップグレード中に、Discoverer では、識別子に含まれる無効な文字が検出され、今後のリリースでは文字の変更が必要なことを警告するメッセージが表示されます。実際には、Discoverer によって、変更が必要となるリリースでの無効な文字が自動的に変更されます。

スケジュール・ワークブックおよび Discoverer の現行リリースと Oracle9i より前のデータベース・リリースとの間の互換性

新しいバッチ PL/SQL パッケージがユーザーのスキーマにインストールされます。

Oracle9i より前のデータベース上の EUL をこのリリースの Discoverer にアップグレードすると、既存のパッケージに加えて、新しいバッチ PL/SQL パッケージがユーザーのスキーマにインストールされます。既存の PL/SQL パッケージが保持されるため、既存のスケジュール・ワークブックのバッチ・ジョブが破壊されることはありません。ただし、新しいバッチ PL/SQL パッケージ内の関数名は、既存のバッチ PL/SQL パッケージと同じままです。

スクリプトを実行して、スケジュール・ワークブック結果スキーマが結果テーブルを所有するように指定します。

EUL を、Oracle9i より前のデータベース・リリースからこのリリースの Discoverer にアップグレードするときは、次の条件が考慮されます。

- ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーが、ワークブックの結果を含むデータベース・テーブルを所有しない。
- 別のデータベース・ユーザー（スケジュール・ワークブック結果スキーマ）が、ワークブックの結果を含むデータベース・テーブルを所有する。

この場合は、SQL スクリプト `batchusr.sql` を使用して、新しいバッチ PL/SQL パッケージ (EUL5_BATCH_REPOSITORY) をインストールする必要があります。このスクリプトは、`<ORACLE_HOME>\discoverer\util` ディレクトリにあります。新しいバッチ PL/SQL パッケージは、スケジュール・ワークブック結果スキーマ（ワークブックの結果を含むテーブルを所有するユーザーのスキーマ）にインストールできます。詳細は、「[スクリプトを使用して、スケジュール・ワークブック結果スキーマ（ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーではなく）が、スケジュール・ワークブックの結果テーブルを所有するように指定する方法](#)」を参照してください。

注意: EUL を、Oracle9i より前のデータベースからこのリリースの Discoverer にアップグレードする場合、バッチ PL/SQL パッケージは同一のためアップグレードする必要はありません。

スケジュール・ワークブックの詳細は、[第 8 章「ワークブックのスケジュール」](#)を参照してください。

第 IV 部

リファレンス情報

第IV部では、Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator のすべてのダイアログの説明とともに一般的なリファレンス情報について説明します。

ダイアログのリファレンス

この章では、Discoverer Administrator の各ダイアログに関する包括的なリファレンス情報について説明します。

ダイアログのリファレンス一覧

この項では、Discoverer Administrator で使用されるダイアログのリファレンスへのリンクをリストします。

[「アルファベット順」ダイアログ](#)

[「ビジネスエリア・プロパティ」ダイアログ](#)

[識別子の変更の警告ダイアログ](#)

[「フォルダの選択」ダイアログ \(アイテム、条件、結合の場合\)](#)

[ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ](#)

[「条件プロパティ」ダイアログ](#)

[「条件」ダイアログ](#)

[「ビジネスエリア削除の確認」ダイアログ](#)

[「削除の確認」ダイアログ](#)

[「フォルダ削除の確認」ダイアログ](#)

[「接続」ダイアログ](#)

[「EUL 作成ウィザード」ダイアログ](#)

[「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログ](#)

[「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログ \(Oracle Applications EUL\)](#)

[「カスタム・フォルダ」ダイアログ](#)

[カスタム・フォルダのプロパティ・ダイアログ](#)

[「データベース情報」ダイアログ](#)

[「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト](#)

[「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マテリアライズド・ビュー」タブ](#)

[「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブ](#)

[「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブ](#)

[「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「表領域」タブ](#)

[「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ](#)

[「EUL の削除」ダイアログ](#)

[「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログ](#)

[「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ \(この日付階層を使用する日付アイテムの選択\)](#)

[「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ \(階層を構成するアイテムの選択\)](#)

[「階層の編集」ダイアログ: 「名前」タブ](#)

[「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「代替ソート」タブ](#)

[「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「一般」タブ](#)

[「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「値リスト」タブ](#)

[「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)

[「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「アイテムの選択」タブ](#)

[「結合の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ](#)

[「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)

「サマリーの編集」ダイアログ: 「アイテム選択」タブ
「サマリーの編集」ダイアログ: 「組合せ」タブ
「サマリーの編集」ダイアログ: 「一般」タブ
「サマリーの編集」ダイアログ: 「リフレッシュ」タブ
「EUL マネージャ」ダイアログ
「EUL アップグレードのエラー」ダイアログ
「EUL アップグレード」ダイアログ
「エクスポート・ウィザード: ステップ 1」ダイアログ
「エクスポート・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ (選択したビジネスエリアのエクスポート)
「エクスポート・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ (選択したオブジェクトのエクスポート)
「エクスポート・ウィザード: ステップ 2/3」ダイアログ
「フォルダ・プロパティ」ダイアログ
「階層プロパティ」ダイアログ
「階層ウィザード: ステップ 1」ダイアログ
「影響」ダイアログ
「PL/SQL 関数のインポート」ダイアログ
「インポート・ウィザード: ステップ 1」ダイアログ
「インポート・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ
「インポート・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ
「サンプル・データ・インストール・ウィザード / サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 1」ダイアログ
「サンプル・データ・インストール・ウィザード / サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 2」ダイアログ
「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ
「アイテム・クラス・プロパティ」ダイアログ: 「一般」タブ
「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 1」ダイアログ
「アイテム階層ノード・プロパティ」ダイアログ
「アイテム・プロパティ」ダイアログ
「アイテム」ダイアログ
「結合プロパティ」ダイアログ
「ロード・ウィザード: ステップ 1」ダイアログ
「ロード・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ
「ロード・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ
「ロード・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ
「ロード・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ
「フォルダの管理」ダイアログ: 「ビジネスエリア」タブ
「フォルダの管理」ダイアログ: 「フォルダ」タブ
「フォルダの管理」ダイアログ: 「親なしのフォルダ」タブ
「スケジュール・ワークブックの管理」ダイアログ

「一致する値」ダイアログ
「新規条件」ダイアログ (詳細設定)
「新規条件」ダイアログ (アイテムまたはフォルダの選択)
条件の新規作成 / 編集ダイアログ
「新規日付フォーマット」ダイアログ
「新規アイテム」ダイアログ
「新規アイテム」ダイアログ (フォルダの選択)
「新規結合」ダイアログ (フォルダの選択)
「オンライン・ディクショナリ・オプション」ダイアログ
「ビジネスエリアを開く」ダイアログ
「オプション」ダイアログ: 「接続」タブ
「オプション」ダイアログ: 「デフォルト EUL」タブ
「オプション」ダイアログ: 「クエリー管理」タブ
「PL/SQL 関数」ダイアログ: 「引数」タブ
「PL/SQL 関数」ダイアログ: 「関数」タブ
「権限」ダイアログ: 「権限」タブ
「権限」ダイアログ: 「クエリー管理」タブ
「権限」ダイアログ: 「スケジュール・ワークブック」タブ
「権限」ダイアログ: 「ユーザー / ロール」タブ
「プロパティ」ダイアログ
「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログ
「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ
「リフレッシュ・ウィザード」ダイアログ
「リポジトリ・ユーザー」ダイアログ
「職責」ダイアログ
「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「一般」タブ
「スケジュール・ワークブック」ダイアログ: 「パラメータ値」
「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「スケジュール」タブ
「セキュリティ」ダイアログ: 「ビジネスエリア -> ユーザー」タブ
「セキュリティ」ダイアログ: 「ユーザー -> ビジネスエリア」タブ
「ユーザー / ロールの選択」ダイアログ
「サマリー・プロパティ」ダイアログ
サマリー・ウィザード (ASM) : ダイアログのリスト
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: ダイアログのタブのリスト
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「フォルダ」タブ
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「分析」タブ
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「削除」タブ
サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「クエリーの使用方法」タブ

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「クエリー・ユーザー」タブ

サマリー・ウィザード (ASM) : 「分析されませんでした。」ダイアログ

サマリー・ウィザード (ASM) : 「推奨サマリー」ダイアログ

サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ 2 「フォルダの分析」ダイアログ

サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ 3 (領域の割当て) ダイアログ

「サマリー・ウィザード: ステップ 1」ダイアログ

「サマリー・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ

「サマリー・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (クエリー統計の使用)

「サマリー・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (外部テーブルの使用)

「サマリー・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (クエリー統計の使用)

「ヘルプの使用方法」

「値」ダイアログ

ワークエリア: 「データ」タブ

ワークエリア: 「階層」タブ

ワークエリア: 「アイテム・クラス」タブ

ワークエリア: 「サマリー」タブ

「アルファベット順」ダイアログ

ソートを試みると、この警告ダイアログが表示されます。

- ビジネスエリア内のフォルダ
- フォルダ内のアイテム

フォルダおよびアイテムの詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「アイテム」](#)

「フォルダ/アイテムはアルファベット順にソートされます。既存の表示順は失われます。」

このメッセージでは、アルファベット順にソートされるフォルダまたはアイテムの数 (n) が表示されます。また、「はい」 ボタンをクリックすると既存の表示順が失われることを示しています。

「続行しますか。」

「このダイアログを再度表示しない」

このチェックボックスを選択して、前述の警告を、現行セッション中に再び表示されないように無効にします。

「はい」

このボタンを使用して、変更を続けます。

Discoverer によりフォルダ / アイテムがソートされます。

「いいえ」

このボタンを使用して、アルファベット順のソートを中止します。

「ワークエリア」が表示されます。

「ビジネスエリア・プロパティ」ダイアログ

ビジネスエリアのプロパティを表示または変更するには、このダイアログを使用します。たとえば、ビジネスエリアの名前、説明または識別子を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリア」](#)

[「ビジネスエリアのプロパティの編集方法」](#)

このダイアログには「一般」と「依存性」という2つのタブがあります。それぞれのタブをクリックすると、該当するプロパティの設定を確認または編集できます。

「一般」タブ

「名前」

このフィールドには、ビジネスエリア名が表示されます。

「説明」

このフィールドには、ビジネスエリアを説明するテキストが表示されます。

このフィールドの内容は、Discoverer Plus のクエリー・ウィザードの「説明」行に表示されません（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照）。

「識別子」

Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前です。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクトを検索します。詳細は、「[識別子](#)」を参照してください。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子を変更しないでください。

「依存性」タブ

依存性は、ビジネスエリアのレベルでは適用されないので注意してください。

「毎回編集後に変更を自動保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

識別子の変更の警告ダイアログ

このダイアログは、ユーザーがアイテムの識別子の変更を保存するときに、識別子の変更の影響を警告するために表示されます。

識別子は、EUL およびワークブック・オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、アイテム、ワークシート、パラメータ、結合、条件、ユーザー定義アイテム）を識別するために Discoverer で使用される一意の名前です。たとえば、「A」という EUL 中の「Sales」という名前のフォルダと、「B」という EUL 中の「Sales Figures」フォルダが、どちらも同じビジネス・オブジェクトを参照しているとします。この2つのフォルダは同じ識別子を持っています。したがって同じオブジェクトとみなすことができます。

警告 : EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子を変更しないでください。

識別子を変更する必要があるのは、次のような場合です。

- 命名規則に厳密に従う場合
- オブジェクトが削除されてしまったため、オブジェクトを再作成して同じ識別子を付ける場合

識別子を変更したときは、他の EUL の一致する識別子も同様に変更する必要があります。

「続行しますか。」

「はい」

このボタンを使用して、変更を続けます。識別子の変更が可能になります。

「いいえ」

変更を中止するには、このボタンを使用します。

「プロパティ」ダイアログが表示されます。

「このセッション中にこの警告を再度表示しない」

セッション中にこの警告が再び表示されないように無効にするには、このチェックボックスを選択します。

「フォルダの選択」ダイアログ（アイテム、条件、結合の場合）

新規のアイテム、条件または結合を格納するフォルダを選択するには、このダイアログを使用します。Discoverer では次のような場合に「フォルダの選択」ダイアログが表示されます。

- 現在選択されているフォルダが、作成しようとする条件を使用しない場合
- 結合マネージャ・ダイアログでフォルダが選択されていないときに、ドロップダウン・リストから異なるフォルダが選択された場合

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規結合」ダイアログ
「新規アイテム」ダイアログ
「新規条件」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「アイテム」](#)

[「結合」](#)

[「条件」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。

その下の拡張可能なリストからフォルダを選択します。

「結合の選択」ダイアログ

複合フォルダにアイテムを追加した後は、このダイアログを使用して1つ以上の結合を選択します。

複数の結合を使用して結合された2つのフォルダからアイテムを選択すると、「結合の選択」ダイアログが表示されます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「複数の結合を使用した2つのフォルダの結合」](#)

[「複合フォルダの作成方法」](#)

「結合の選択」

このフィールドを使用して、1つ以上の結合を選択します。

ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ

このダイアログは次の目的で使用します。

- データベースおよびユーザーの選択

たとえば、フォルダの所有者としてデータベース・ユーザーを選択する場合（詳細は、「[「フォルダ・プロパティ」ダイアログ](#)」を参照）

- テーブルまたはビューの選択

たとえば、外部サマリー・フォルダの作成時にテーブルまたはビューを選択する場合（詳細は、「[外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)」を参照）

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「ユーザーの選択」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

「データベース」

このドロップダウン・リストを使用して、必要なユーザーまたはテーブルおよびビューを含むデータベースを選択します。

このリストを使用して、必要なユーザーあるいはテーブルまたはビューを選択します。

「条件プロパティ」ダイアログ

条件のプロパティを表示または変更するには、このダイアログを使用します。

注意: 複数の条件を選択した場合、「プロパティ」オプションを選択すると、プロパティに対するすべての変更は、選択されたすべての条件に影響を与えます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、条件の説明的な名前を入力します。この名前が条件リストおよび Discoverer のワークシートに表示されます。

「説明」

このフィールドを使用して、条件の簡単な説明を入力します。Discoverer ユーザーが使用する条件を選択できるように、条件リストにこの説明が表示されます。

「タイプ」

このドロップダウン・リストを使用して、次のように必須条件またはオプション条件を指定します。

- 必須条件は、常にフォルダに適用されます。エンド・ユーザーは、Discoverer Plus で条件を表示または非表示できません。
- オプション条件は、適用することもできますし、適用しないこともできます。Discoverer エンド・ユーザーは、Discoverer Plus で条件をオンまたはオフにできます。

「順序」

このフィールドには、Discoverer Plus のオブジェクトの選択ウィザードでアイテムが表示される順序が表示されます。たとえば、すべての条件アイテムを他のアイテムの前に表示するには、順序をアイテムより前に設定します。

「計算式」

このフィールドには、条件を定義する計算式が表示されます。

このフィールドをクリックすると、「[条件の編集](#)」ダイアログが表示されます。

構文の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』を参照してください。

「識別子」

Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前です。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクトを検索します。詳細は、「[識別子](#)」を参照してください。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

「依存性」タブには、次の 2 つの列が表示されます。

「タイプ」

選択された条件への依存性を持つ、1 つ以上のオブジェクト・タイプ（たとえばフォルダ、アイテムなど）が表示されます。

「名前」

「タイプ」列にリストされたそれぞれのオブジェクトの名前が表示されます。

「自動的に変更を保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

「条件」 ダイアログ

条件の作成または編集に使用する既存の条件を選択するには、このダイアログを使用します。
詳細は、次の項目を参照してください。

「条件」

「条件の新規作成 / 編集」ダイアログの「**アイテム**」フィールドのドロップダウン・リストから「**条件の選択**」オプションを選択すると、このダイアログが表示されます。

「条件の選択」

「条件の新規作成 / 編集」ダイアログの「**アイテム**」フィールドに表示するアイテムを選択します。

「OK」ボタンを使用して、選択したアイテムを「**アイテム**」フィールドに表示します。

ここで選択した条件は、この条件の現行の条件文で使用されます。

「ビジネスエリア削除の確認」ダイアログ

ビジネスエリアの削除方法を管理するダイアログです。たとえば、ビジネスエリアを削除する前に、その影響を確認します。

注意: ビジネスエリアが削除されて残ったフォルダは、親なしのフォルダとなります。これらのフォルダは EUL には存在していますが、「ワークエリア」には表示されません。親なしのフォルダを表示および削除するには、Discoverer のメイン・メニューから「ツール」→「フォルダの管理」を選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリア」](#)

[「ビジネスエリアの削除方法」](#)

「このビジネスエリアを削除しますか。」

■ 「ビジネスエリアを削除」

このボタンを使用すると、ビジネスエリアのみが削除され、ビジネスエリアの内容は削除されません。

■ 「ビジネスエリアおよび含まれているフォルダを削除」

このボタンを使用して、ビジネスエリアおよびすべてのフォルダを削除します。このオプションでは、他のビジネスエリアのフォルダは削除されません。

「はい」

このボタンを使用して、選択したビジネスエリアを削除します。

「いいえ」

このボタンを使用すると、操作が取り消され、このダイアログが閉じますが、ビジネスエリアまたは EUL は変更されません。

「影響」

このボタンを使用して、「[影響](#)」ダイアログを表示します。「影響」ダイアログには、選択したビジネスエリアを削除した場合に、影響を受ける、または削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

「削除の確認」ダイアログ

アイテムの削除方法を管理するには、このダイアログを使用します。たとえば、アイテムを削除する前に、その影響の確認に使用します。

「はい」

このボタンを使用して、選択したアイテムをビジネスエリアから削除します。

「いいえ」

このボタンを使用すると、操作が取り消され、ダイアログが閉じますが、ビジネスエリアは変更されません。

「影響」

このボタンを使用して、「[影響](#)」ダイアログを表示します。「影響」ダイアログには、選択したアイテムを削除したときに影響を受ける、または削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

「フォルダ削除の確認」ダイアログ

フォルダの削除方法を管理するには、このダイアログを使用します。たとえば、フォルダを削除する前の影響を確認するために使用します。

注意: ビジネスエリアから削除されても EUL からは削除されず、他のビジネスエリアから参照されないフォルダは親なしのフォルダと呼ばれます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「ビジネスエリアからのフォルダの削除方法」](#)

「フォルダの削除」

■ 「ビジネスエリアから削除」

このラジオ・ボタンを使用すると、選択されたフォルダが現行のビジネスエリアから削除されますが、EUL からフォルダが削除されることはありません。つまり、他のビジネスエリア内でこれらのフォルダを引き続き使用できます。

■ 「End User Layer から削除」

このラジオ・ボタンを使用すると、選択されたフォルダが現行のビジネスエリアおよび EUL から削除されます。フォルダは、このビジネスエリアでも、EUL 中の他のビジネスエリアでも使用できなくなります。

「影響」

このボタンを使用して、「[影響](#)」ダイアログを表示します。「影響」ダイアログには、選択したフォルダを削除した場合に影響される、または削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

「接続」ダイアログ

別の End User Layer に接続するときには、「接続」ダイアログを使用します。Discoverer Administrator を初めて実行する場合にも、このダイアログが表示されます。EUL に接続しなければ、Discoverer Administrator では作業できません。

注意

- Oracle Applications の EUL に接続すると、「接続」ダイアログが表示され、Oracle Applications の接続の詳細を入力するように要求されます（「接続」ダイアログの「状態」エリアを参照）。Oracle Applications の EUL を使用するように Discoverer が設定されていない場合は、「接続」ダイアログを再設定する必要があります。「ツール」→「オプション」を選択して、Oracle Applications の EUL に接続するように Discoverer を構成します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Oracle Applications モードでの Discoverer の「接続」ダイアログの相違点」](#)

「ユーザー名」

このフィールドを使用して、許可を受けたデータベース・ユーザー名を入力します。

「パスワード」

このフィールドを使用して、ユーザー名に対応する、許可を受けたデータベース・パスワードを入力します。

「接続」

このフィールドを使用して、接続先のデータベースの名前を入力します。

「Oracle Applications ユーザー」

このオプションのチェックボックスが表示されるのは、Discoverer の標準の EUL および Oracle Applications の EUL の両方を使用するように Discoverer を構成している場合です。

Oracle Applications の EUL に接続しない場合は、このオプションを選択しないでください。

Oracle Applications の EUL に接続する場合は、このオプションを必ず選択してください。

「接続」ボタン

このボタンを使用して、入力した接続詳細を使用してデータベースに接続します。

注意: 一度に複数の End User Layer に接続することはできません。新しい接続を確立させるときには、開いているビジネスエリアはすべて閉じられ、現行データベースへの接続が終了します。そのため、新規の接続を確立する前に、変更内容を保存するように要求されます。新しい接続が失敗した場合は、もとのユーザー ID での接続が継続されます。

「EUL 作成ウィザード」ダイアログ

新しい End User Layer (EUL) を作成するには、EUL 作成ウィザードを使用します。このダイアログでは、新しい EUL の所有者を定義します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

新しい EUL の所有者を選択してください

■ 「既存のユーザーを指定」

このラジオ・ボタンを使用して、すでに現行データベースに存在しているデータベース・ユーザーの EUL を作成します。「ユーザー」ドロップダウン・リストからデータベース・ユーザーを選択します。

注意: データベース・ユーザーがすでに EUL を所有している場合は、既存の EUL が新しい EUL に置き換えられます。

■ 「新規ユーザーを作成」

このラジオ・ボタンを使用して、新規データベース・ユーザーおよびそのデータベース・ユーザーの EUL を作成します。新規ユーザーを作成するには、十分なデータベース権限が必要です (詳細は、「[Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限](#)」を参照)。

「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」

このチェックボックスを選択して、現行データベースの全ユーザーが、この新規の EUL にアクセスできるように指定します。

このチェックボックスの選択を解除すると、この EUL を通じてデータにアクセス可能なデータベース・ユーザーに EUL 所有者のみが指定されます。

注意: セキュリティを考慮する必要がある場合は、「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスの選択を解除することをお勧めします。EUL 所有者は、必要に応じて、ユーザーやロールまたは職責に対してビジネスエリアのアクセス権と権限を後で定義できます (詳細は、「[情報に対するアクセス制御](#)」を参照)。

「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」

このチェックボックスを選択して、Oracle Applications ユーザーへの EUL アクセスを制限します。標準 EUL を作成する場合は、このチェックボックスを選択解除します。

注意: ここでの選択は、最終的な選択です。標準的な EUL を Oracle Applications EUL に変更することはできません (逆の変更もできません)。

「EUL を所有するユーザーのユーザー名およびパスワードを入力してください」

「ユーザー」

新規のデータベース・ユーザーが新しい EUL を所有するように指定する場合は、このフィールドに新規のデータベース・ユーザーのユーザー名を入力します。新規データベース・ユーザーが作成されます。

「選択」

既存のデータベース・ユーザーが新しい EUL を所有するように指定する場合は、このボタンを使用して「[ユーザーの選択](#)」ダイアログを表示し、新しい EUL を所有するデータベース・ユーザーを検索および選択します。

「パスワード」

新規のデータベース・ユーザーが新しい EUL を所有するように指定する場合は、このフィールドに新規のデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。

既存のデータベース・ユーザーが新しい EUL を所有するように指定する場合は、このフィールドにそのユーザーのパスワードを入力します。

現行のユーザー（Discoverer Administration の起動に使用したユーザー名）が EUL を所有するように指定している場合は、このフィールドはグレー表示されます。

「パスワードの確認」

新規のデータベース・ユーザーが新しい EUL を所有するように指定する場合は、このフィールドに新規ユーザーのパスワードを再度入力します。

既存のユーザーが新しい EUL を所有するように指定している場合は、このフィールドはグレー表示されます。

「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログ

新規のデータベース・ユーザーに新しい EUL を所有するよう指定するときは、このダイアログを使用します。このダイアログを使用して、新規ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を選択します。

注意: これらの設定はデータベースの設定です。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「EUL 作成ウィザード: ステップ 3」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

「デフォルト表領域」

このフィールドを使用して、このユーザーの Discoverer の EUL テーブル、メタデータ、ワークブックおよびワークシートを格納するデータベース表領域を選択します。

EUL 領域の要件および記憶域パラメータの詳細は、「[一般的な EUL の領域要件および記憶域パラメータ](#)」を参照してください。

デフォルト構成の場合、ここで **USR** 表領域を選択するのが一般的です。

- 「表領域」
データベースの使用可能な表領域がリストされます。
- 「空き領域 (MB)」
表領域で使用可能な容量が表示されます。
- 「自動拡張」
データベースの表領域について、自動拡張機能の状態 (オンまたはオフ) が表示されます。自動拡張機能がオンに設定されていると、必要に応じて表領域のサイズが自動的に増加します。

「一時表領域」

このフィールドを使用して、このユーザーに関する一時データが格納されるデータベース表領域を選択します。デフォルト構成の場合、ここで **TEMP** 表領域を選択するのが一般的です。

「EUL 作成ウィザード : ステップ 2」 ダイアログ (Oracle Applications EUL)

Oracle Applications EUL を新規作成するときには、このダイアログを使用します。このダイアログを使用して、スキーマ (Oracle Applications FND (Foundation) テーブルを含む) を選択し、このスキーマのパスワードを入力します。FND テーブルには、Oracle Applications のメタデータが格納されています。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「Oracle Applications」](#)

Oracle Applications FND テーブルを含むスキーマの選択

「スキーマ」

このドロップダウン・リストを使用して、FND テーブルが含まれるスキーマを選択します。

「パスワード」

このフィールドには、スキーマのパスワードを入力します。

「カスタム・フォルダ」ダイアログ

カスタム・フォルダを作成および編集するには、このダイアログを使用します。これを行うには、SQL の SELECT 文を入力します。他のフォルダと同様、ビジネスエリアでデータを別のフォルダのデータに関連付ける結合が必要です。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「カスタム・フォルダ」](#)

[「カスタム・フォルダの作成方法」](#)

「カスタム・フォルダを定義する SQL 文を入力してください」

このフィールドを使用して、フォルダを定義する SQL 文を入力します。たとえば、次のようになります。

```
SELECT ENAME, JOB, SAL FROM EMP@ORCL
```

選択されたリスト・アイテムごとにアイテムが作成されます。Discoverer Desktop または Discoverer Plus では、エンド・ユーザーはカスタム・フォルダを使用して、他のフォルダとまったく同じ方法でクエリーを作成できます。

このフィールドには、最大 2,000,000,000 個の文字を入力できます。

「名前」

このフィールドを使用して、フォルダの名前を入力します。

「SQL 文のチェック」

このボタンを使用して、SQL 文に、保存する前のチェックをします。SQL 文が無効な場合は、エラー・メッセージが表示されます。

「OK」

このボタンを使用して、SQL 文をチェックし、カスタム・フォルダを保存します。

注意

- SQL 文が無効でもカスタム・フォルダは保存できます。これは、実際のデータベース・オブジェクトが作成または利用可能になる前に SQL 文を EUL に挿入する必要がある状況が考慮されているためです。ただし、ユーザーは SQL 文が修正されるまでクエリーを行えません。
- SQL 文が無効でこれを修正する場合には、「データ」タブでカスタム・フォルダを選択し、マウスの右ボタンをクリックして「プロパティ」ダイアログを開きます。「カスタム SQL」フィールドをダブルクリックして「カスタム・フォルダ」ダイアログを表示します。
- 現行のユーザーにビジネスエリアの作成 / 編集権限がない場合、このダイアログは読取り専用になります（詳細は、「権限」ダイアログ: 「権限」タブを参照）。このダイアログが読取り専用の場合でも、SQL 文をコピーして別の文書に貼り付けることはできます。
- カスタム・フォルダがビューに基づいていて、そのビューを更新した場合（新規列の追加など）、Discoverer で更新が有効になるのは、ビジネスエリアをリフレッシュした場合のみです。詳細は、「ビジネスエリアとデータベースの同期化方法」を参照してください。
- カスタム・フォルダの SQL で WITH 句を使用することはできません。

カスタム・フォルダのプロパティ・ダイアログ

現在選択されているカスタム・フォルダのプロパティを表示または変更するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「カスタム・フォルダ」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、フォルダの名前を入力します。

「説明」

このフィールドを使用して、フォルダの簡単な説明を入力します。

「ユーザーに対して表示されています」

このフィールドを使用して、Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer Plus の中でこのフォルダを表示できるようにするかどうかを選択します。

「有効」

この読取り専用フィールドには、カスタム・フォルダの作成に使用された SQL 文が有効な場合は「はい」と表示されます。

「カスタム SQL」

このフィールドを使用して、カスタム・フォルダの作成に使用する SQL 文を変更する「[「カスタム・フォルダ」ダイアログ](#)」を表示します。

「識別子」

Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前です。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクトを検索します。詳細は、[「識別子」](#)を参照してください。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

「自動的に変更を保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

注意

- 「カスタム SQL」フィールドには、フォルダを定義する SQL 文が含まれています。SQL 文が適切でない場合、Discoverer Plus でカスタム・フォルダは機能しません。
- SQL 文全体を表示するには「プロパティ」ウィンドウのサイズを調整します。

「データベース情報」ダイアログ

現在の接続先のデータベースの名前および使用可能な機能を表示するには、このダイアログを使用します。たとえば、データベースが正しく構成されているか確認するときに使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator を使用するための前提条件」](#)

「接続先」

このフィールドを使用して、接続先のデータベースの名前を確認します。このフィールドは、ユーザー名、@ 記号およびデータベース名の連結です。

リスト・ボックスは、データベースの構成情報や、このデータベース・ユーザーが使用できない機能および機能を使用できない理由を表示します。

注意

サマリー管理が使用できない場合

- 新しく作成された EUL 所有者はサマリー管理を使用できません。
サマリー管理を使用するには、EUL 所有者に次の権限が付与されている必要があります。
 - analyze any
 - create any materialized view
 - drop any materialized view
 - alter any materialized view
 - global query rewrite

上記の権限は、スクリプト `eulasm.sql` (`<ORACLE_HOME>\discoverer\util` ディレクトリ内) から設定することもできます。

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト

サマリー・フォルダのデータベース記憶域のプロパティを編集するには、これらのタブを使用します。たとえば、表領域の割当て、キャッシュの設定またはリフレッシュ・タイプを変更する場合に使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ

注意: データベース記憶域のプロパティは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには適用されません。

サマリー・フォルダの詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法」](#)

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログには4つのタブがあります。

「プロパティ」

データベース記憶域のプロパティを表示および設定するには、「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブを使用します。

「マッピング」

サマリー組合せの中のアイテムとデータベースの列とのマッピングを表示するには、「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブを使用します。

「表領域」

各表領域で使用可能な表領域など、使用可能な表領域の記憶域に関する属性値を表示するには、「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「表領域」タブを使用します。この情報を使用して、「プロパティ」タブで表領域を選択できます。

「マテリアライズド・ビュー」 (Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベース)

Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースに特有のデータベース記憶域プロパティを表示および設定するには、「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ: 「マテリアライズド・ビュー」タブを使用します。

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ:「マテリアライズド・ビュー」タブ

このタブを使用して、Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースに特有のデータベース記憶域プロパティを表示および設定します。

注意: データベース記憶域のプロパティは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには適用されません。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「マテリアライズド・ビュー」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法」](#)

次の表にプロパティとそのデフォルト値を示します。プロパティを選択すると、ダイアログの下部のパネルに、このプロパティの用途の説明が表示されます。

プロパティ	デフォルト値	範囲	作成 / 編集
パラレル挿入	いいえ	はい / いいえ / デフォルト	可能
プロセス数	1		パラレル挿入が有効に設定されている場合は可能
ロギング	ユーザーの表領域と同一	はい / いいえ	可能
キャッシュ	いいえ	はい / いいえ	ロギングが有効に設定されている場合は可能
リフレッシュ・タイプ	完全	完全 / 増分	可能
リフレッシュ	要求時	要求時 / コミット時	可能
最終リフレッシュ			不可能
増分ロード			不可能
古い			不可能

パラレル挿入

このプロパティを使用して、サマリー・フォルダをリフレッシュするときにパラレル挿入を使用するかどうかを選択します。

「プロセス数」

パラレル挿入が「はい」に設定されている場合は、このプロパティを使用して、サマリー・フォルダのリフレッシュ時に使用されるパラレル処理の数を設定します。

「ロギング」

このプロパティを使用して、データベースのロギングを有効または無効にします。

「キャッシュ」

このプロパティを使用して、データベースのキャッシュ機能を有効または無効にします。

「リフレッシュ・タイプ」

このプロパティを使用して、サマリー・フォルダの「リフレッシュ・タイプ」を「増分」または「完全」に指定します。

- 「増分」

ディテール・テーブルに変更があった行のみがサマリー・フォルダに適用されます。

増分リフレッシュに必要な条件の詳細は、『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

- 「完全」

サマリー・フォルダを完全に再構築します。

リフレッシュ・モード

このプロパティを使用して、サマリー・フォルダのリフレッシュ・モードを「要求時」または「コミット時」に指定します。

- 「要求時」

このオプションを選択して、リフレッシュを手動で実行するか、スケジュールされた時間に実行するかを指定します。

- 「コミット時」

このオプションを選択して、ディテール・テーブルの更新ごとにリフレッシュをします。リフレッシュをスケジュールする必要はありません。また、サマリー・ウィザードのスケジュール・オプションは使用できません。

コミット時のリフレッシュの実行には制限事項があります。詳細は、『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

最終リフレッシュ

この読取り専用のプロパティには、サマリー・フォルダが最後にリフレッシュされた日付が示されます。

増分ロード

この読取り専用のプロパティには、増分リフレッシュが可能なディテール・テーブルおよびファクト・テーブルへの挿入のタイプが示されます。

- 「なし」

マテリアライズド・ビューは、増分リフレッシュできません。

- 「ダイレクト・ロード」

ダイレクト・ロードのみを処理できます。

- 「DML」

DML（データ操作言語）文のみを処理できます。

- 「ダイレクト・ロードと DML」

ダイレクト・ロードと DML の両方を処理できます。

- 「ダイレクト・ロードと DML の一部」

ダイレクト・ロードと DML の一部を処理します（詳細は、Oracle9i データベースのドキュメントを参照してください）。

「古い」

この読取り専用のプロパティには、サマリー・フォルダが最後にリフレッシュされてからディテール・テーブルが変更されたかどうかを示されます。

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ:「マッピング」タブ

データベース内でサマリー組合せがどのように格納されているかを確認するには、この読取り専用のタブを使用します。このマテリアライズド・ビューでは、組合せアイテムが列にどのようにマップされているかを表示できます。

注意: データベース記憶域のプロパティは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには適用されません。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー組合せ」](#)

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

[「サマリー組合せを定義するときに考慮する事項」](#)

[「サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン」](#)

[「サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法」](#)

「アイテム」

この列には、ビジネスエリア内のアイテムの名前が表示されます。

「データベース列」

この列には、アイテムがマッピングされる列が表示されます。

「データ型」

この列には、アイテムのデータ型が表示されます。

注意

- このタブの情報は読取り専用です。
- この「マッピング」タブは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには適用されません。

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ:「プロパティ」タブ

データベース記憶域のプロパティおよびマテリアライズド・ビューの名前 (Oracle Standard Edition データベースの場合はサマリー・テーブルの名前) を表示および設定するには、このダイアログを使用します。

注意: データベース記憶域のプロパティは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには適用されません。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法」](#)

次の表にプロパティとそのデフォルト値を示します。プロパティを選択すると、ダイアログの下部にあるパネルに、プロパティの用途と使用可能なデータ型の説明が表示されます。

プロパティ	データ型	デフォルト値	範囲	作成 / 編集
所有者 注 1	英数字	現行のユーザー		可能
名前	アルファベット	EUL により生成		可能
表領域 注 1	英数字	SYSTEM		可能
初期エクステン ト 注 1	数字	10K		可能
次エクステン ト	数字	10K	最小データ・ ブロック	可能
PCTINCREASE (%)	数字	50%	>=0%	可能
最小エクステン ト 注 1	数字	1	1- 最大エク ス テ ン ト	可能
最大エクステン ト	数字	121	> 最小エク ス テ ン ト	可能
PCTFREE (%)	数字	10%	0-100%	可能
PCTUSED (%)	数字	40%	0-99%	可能
状態	アルファベット			不可能
行数	数字			不可能
エラー	アルファベット			不可能
前回のリフレッ シュ				不可能

注意: 前述のテーブルで、既存のサマリー・データに影響を与える非動的な記憶域プロパティ (注 1) を変更すると、サマリー・フォルダが再作成されるため、変更には時間がかかることがあります。

属性である「状態」、「行数」、「エラー」および「前回のリフレッシュ」の値は、作成済のサマリー・フォルダに対してのみ有効です。したがって、サマリー・ウィザードを使用するときは、これらのフィールドはグレー表示されていますが、サマリー・フォルダを編集するときは、これらのフィールドには適切な値が表示されます。

「データベース記憶域のプロパティ」ダイアログ:「表領域」タブ

各表領域で使用可能な表領域も含め、使用可能な表領域のデータベース記憶域に関する属性値を表示するには、この読取り専用のタブを使用します。

注意: データベース記憶域のプロパティは、外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダには適用されません。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶域プロパティを編集する方法」](#)

「表領域」

この列には、表領域の名前が表示されます。

「空き領域」

この列には、表領域の空き領域の量が表示されます。

「使用中」

この列には、現在使用中の領域の量が表示されます。

「拡張」

この列には、追加の領域が必要なときに自動的に表領域を拡張するかどうかを示されます。

「EUL の削除」ダイアログ

削除する EUL の名前を確認するには、このダイアログを使用します。Discoverer Administrator では、現在接続中の EUL のみを削除できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「End User Layer の削除方法」](#)

「EUL」

このフィールドには、削除する EUL の名前が表示されます。削除できるのは現行の EUL のみのため、このフィールドに表示される名前は、現在接続中の EUL の名前です。

「OK」

このボタンを使用して、現行の EUL を削除します。

「取消」

「EUL」テキスト・ボックスに表示されている名前が削除する EUL 名でないときは、このボタンをクリックします。

別の EUL を削除するには、「EUL マネージャ」ダイアログを閉じ、削除する EUL に再接続します。

「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログ

アイテムおよびユーザー定義アイテムを編集するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテム」](#)

[「ユーザー定義アイテム」](#)

[「ユーザー定義アイテムの編集方法」](#)

たとえば、次のような場合です。

- アイテムの名前または説明の変更
- ユーザー定義アイテムの名前の変更
- ユーザー定義アイテム内の計算式の変更

「表示」

このラジオ・ボタンを使用して、ユーザー定義アイテムの作成に使用可能な計算、関数およびアイテムを表示します。ユーザー定義アイテムにアイテムを追加するには、アイテムを「ユーザー定義アイテム」フィールドに貼り付けます。

- 「アイテム」

このラジオ・ボタンを使用して、使用可能な EUL アイテムを表示します。

- 「関数」

使用可能な関数を表示するには、このラジオ・ボタンを使用します。

「貼付け」

このボタンを使用して、「表示」リストで現在選択しているアイテムを、「ユーザー定義アイテム」フィールドに追加します。アイテムは、「ユーザー定義アイテム」フィールドのカーソルの位置にコピーされます。

「名前」

このフィールドを使用して、アイテムまたはユーザー定義アイテムの名前を編集します。

「ユーザー定義アイテム」

このフィールドを使用して、ユーザー定義アイテムの詳細を入力します（ユーザー定義アイテムの例については、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。

ユーザー定義アイテムを作成するには、次の方法を実行します。

- 「ユーザー定義アイテム」フィールドに直接計算式を入力する。

注意: 「ユーザー定義アイテム」フィールドに式を入力する場合は、式の前に等号 (=) を付ける必要があります。たとえば、「=Sales SUM-Costs SUM」と入力します。

- 左側の「表示」フィールドからユーザー定義アイテムに、アイテムや関数を貼り付ける。
- 「ユーザー定義アイテム」フィールドの下にある演算子ボタンをクリックして計算に使用する。

演算子ボタン (+ - x / % ())

これらのボタンを使用して、計算に演算子を追加します。演算子は前述の「ユーザー定義アイテム」フィールドにコピーされます。

注意: ユーザー定義アイテムの中で算術表現を使用した場合、乗算と除算は、その位置に関係なく最初に計算されます。優先順位と同じ演算子が複数ある場合は、左から右へ計算されます。

たとえば、値段 - 値引き × 個数という計算式では、値段から値引き × 個数が減算されてしまいます。減算をカッコで囲み（値段 - 値引き）とすれば、乗算より先に減算が計算されます。

「OK」

このボタンを使用して、次のようにユーザー定義アイテムを検証し、保存します。

- ユーザー定義アイテムの構文が有効な場合、ユーザー定義アイテムが保存され、「ユーザー定義アイテム」ダイアログに表示されます。
- ユーザー定義アイテムの構文が無効な場合は、エラー・メッセージが表示されます。ユーザー定義アイテムを保存する前に、構文エラーを訂正する必要があります。

注意

- 次の表に、「表示」フィールドの下にあるフィールドで使用できる関数を示します。

カテゴリ	説明
すべての関数	すべての関数のアルファベット順のリスト
分析	RANK、NTILE、CORR など、統計分析用の関数
変換	RAWTOHEX、TO_CHAR、TO_DATE など、データ型を別のデータ型に変換する関数
データベース	ユーザー定義関数が使用可能な場合に表示されるオプションのカテゴリ（「ツール」メニューの「PL/SQL 関数の登録」機能を使用して作成）
「日付」	ADD_MONTHS、NEW_TIME、SYSDATE、NEXTDATE など、日付アイテムの操作用の関数
「グループ」	SUM、COUNT、MAX、MIN、VARIANCE などを含む集合関数および統計関数
数値	数値アイテム用の関数。COS、LOG、MOD、POWER など、超越関数および浮動小数点関数
その他	LEAST、USER、DECODE、ROWNUM など、その他の関数
文字列	文字列アイテム用の関数。INITCAP、LPAD、NLS_UPPER などのテキスト操作

- Discoverer で使用可能なすべての関数の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』および『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。
- 一般的に使用される関数の例は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ

Discoverer のワークブックで使用する日付階層を管理するには、このダイアログを使用します。このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザード: ステップ 2」ダイアログ

日付階層を作成するには 2 つの方法があります。

- ユーザー独自のカスタム・フォーマット・マスクを作成する（詳細は、次の「新規フォーマットの作成」ボタンを参照）。
- 事前定義された日付フォーマット・マスクのセットから選択する

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「日付アイテム」](#)

[「日付フォーマット・マスク」](#)

「階層の日付フォーマットを選択してください。」

「新規フォーマットの作成」

このボタンを使用して、カスタマイズされた日付フォーマット・マスクを定義する「[新規日付フォーマット](#)」ダイアログを開きます。

注意: このボタンは、階層ウィザードを使用して日付階層を作成している場合にのみ表示されます。

「説明」

この編集可能なフィールドには、右側のペインで現在選択されているデータ・フォーマットの簡単な説明が表示されます。

フォーマット・ペイン

事前定義されたフォーマットを使用するには、左側のペインにリストされたアイテムを選択し、右側のペインに移動します。

[Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「昇格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル上の階層に移動します。

「降格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル下の階層に移動します。

「グループ」

このボタンを使用して、選択したアイテムを同一レベルの階層にグループ化します。

「グループ解除」

このボタンを使用して、以前にグループ化したアイテムのグループ化を解除して、以前のレベルの階層に戻します。

「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ (この日付階層を使用する日付アイテムの選択)

定義された階層を使用するビジネスエリア内のアイテムを指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、年、月、週、日という階層を作成した場合、ここで年、月、週および日のアイテムを指定します。Discoverer ユーザーはこれらのアイテムでドリルを行うときに、ドリル・パスの中でこの階層を使用できます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザード: ステップ 3」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「日付階層とテンプレートの作成方法」](#)

「選択可能なアイテム」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。

この階層を使用するアイテムを下の拡張可能なリストから選択します。

アイテムを選択するには、「**選択可能なアイテム**」リストから「**選択済アイテム**」リストへアイテムを移動します。

[Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「選択済アイテム」

このフィールドには、この階層を使用する選択済のアイテムが表示されます。

アイテムを選択するには、「**選択可能**」フィールドから「**選択済**」フィールドへアイテムを移動します。

「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ (階層を構成するアイテムの選択)

Discoverer のワークブックで使用するために階層に含めるアイテムを作成または編集するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザード: ステップ 2」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「アイテム階層」](#)

「階層を構成するアイテムを選択します。」

このドロップダウン・リストを使用して、階層で使用するアイテムを含むビジネスエリアを選択します。

次の拡張可能なリストを使用して、1 つ以上のアイテムを選択します。階層にアイテムを追加するには、アイテムを左側のリストから右側のリストへ移動します。

「説明」

このフィールドには、現在右側のリストで選択されているアイテム・フォーマットの簡単な説明が表示されます。

「昇格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル上の階層に移動します。

「降格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル下の階層に移動します。

「グループ」

このボタンを使用して、選択したアイテムを同一レベルの階層に配置します。グループ化されたアイテムを使用すると、Discoverer エンド・ユーザーは 1 つのアイテムから 2 レベルのディテールにドリルできます (たとえば、「製品」から「説明」と「詳細説明」の両方にドリルできます)。

「グループ解除」

このボタンを使用して、選択したアイテムのグループ化を解除します。これは、同一レベルの階層ではなくなることを意味します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「階層の編集」ダイアログ: 「名前」タブ

階層の名前および説明を入力するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (名前階層)

「階層ウィザード: ステップ 4」ダイアログ (名前階層)

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

「階層の名前」

このフィールドを使用して、階層の名前を入力します。

「階層の説明」

このフィールドを使用して、階層の追加情報を入力します。

「デフォルトの日付階層に設定」

(日付階層を作成したときに表示されます)

この日付階層をデフォルトの日付階層として使用するには、このチェックボックスを選択します。

「アイテム・クラスの編集」ダイアログ:「代替ソート」タブ

代替ソートの基準とするアイテムを選択するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ2」ダイアログ (代替ソート基準となるアイテムの選択)

「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ3」ダイアログ (代替ソート基準となるアイテムの選択)

「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ4」ダイアログ (代替ソート基準となるアイテムの選択)

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「代替ソート基準となるアイテムを選択してください。」

「フォルダ」

このフィールドを使用して、代替ソートの基準となるアイテムを選択します。

注意:代替ソート・アイテムは、値リストと同じフォルダに入れる必要があります。

「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「一般」タブ

新しいアイテム・クラスの名前および説明を入力するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ (名前と説明の入力)

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ (名前と説明の入力)

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 6」ダイアログ (名前と説明の入力)

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「アイテム・クラスの名前」

このフィールドを使用して、新規アイテム・クラスの名前を入力します。Discoverer Administrator はユーザーが使用できるようにデフォルト名を表示します。この名前は、その他のダイアログでアイテム・クラスを識別するために使用されます。

「アイテム・クラスの説明」

(オプション) このフィールドを使用して、新規アイテム・クラスの説明を入力します。

「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「値リスト」タブ

値リストを生成するアイテムを選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ (値リストを生成するアイテムの選択)

「値リストを生成するアイテムを選択します。」

「ビジネスエリア」

このフィールドを使用して、値リストを生成するアイテムを選択します。EUL 内の任意のビジネスエリアから選択できます。

注意

- ビジネスエリアを選択すると、その中に含まれるフォルダが表示されます。
- フォルダを展開し、その中に含まれるアイテムを表示するには、プラス記号 (+) をクリックします。

「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブ

アイテム・クラスの値リストの詳細オプションを変更するには、このダイアログを使用します。ここで指定した設定値は、Discoverer Plus ユーザーが値リスト・オプションを選択および表示する方法に影響します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ (値リストの詳細オプション)
「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ (値リストの詳細オプション)

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「値を取り出す単位」

このスピン・ボックスを使用して、Discoverer Plus で値リストを拡張したときに (データベースからデータが配列フェッチされるたびに) エンド・ユーザーに対して表示される最大行数を指定します。

Discoverer エンド・ユーザーは、各データベースの配列フェッチの結果を、上下にスクロールするデータのブロックとして参照できます。エンド・ユーザーは、次のデータ・ブロックも簡単に表示できます (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください)。

この設定は、データベースからすべての値を一度に取り出すための待ち時間が発生するリスクを回避できるため、値リストに多くの行が含まれるような場合に便利です。値リストの値は、指定された行数のブロック単位で表示されます。

注意: ここで設定した値は、「値の検索を毎回行う」チェックボックスの選択が解除された場合にデフォルトとして使用されます (詳細は、後述の「常に値を検索するようユーザーに要求」フィールドを参照してください)。

注意: Discoverer Plus では、サーバーは必ずデータベースからフェッチするため、「値を取り出す単位」フィールドで指定した値がどのように大きなものであっても関係ありません。しかし、クライアントがサーバーからフェッチできる最大値は 100 です。

つまり、Discoverer マネージャがフェッチ・サイズを 1000 (前述の 100 という最大値より大きい) に設定した場合でも、Discoverer Plus のクライアントは必ず 100 というグループで行をフェッチします。Discoverer マネージャがフェッチ・サイズを 50 (100 という最大値よりも小さい) に設定した場合、Discoverer Plus では、行は常に 50 というグループでフェッチされます。

「値をソートして重複を削除」

このチェックボックスを選択して、重複値を排除し、Discoverer の (アイテム・クラスの) 値リストの表示順をアルファベット順にソートします。

重複値を表示し、データベース内に格納されている値と同じ順序で値を表示するには、このチェックボックスを選択解除します。

このオプションを使用して、値リスト文に DISTINCT 句および ORDER BY 句を自動的に追加するかどうかを決定できます。データの重複がなく、正しい順序になっていることがわかっている場合 (またはデータがこのように戻されても問題でない場合) は、この設定をオフにできます。

注意: 大量の値リストを表示するために必要な時間は、データベース・テーブルの検索を完了するために必要な時間によって異なります。このチェックボックスを選択解除すると、値リストの表示に必要な時間を短縮できます。

「値をワークシート・ウィザードの「アイテムの選択」ページで表示」

このチェックボックスを選択して、Discoverer Desktop または Discoverer Plus のワークシート・ウィザード (アイテム・ナビゲータ) の「アイテムの選択」ダイアログで値リスト・アイテムを表示します。

Discoverer Desktop または Discoverer Plus のワークシート・ウィザード (アイテム・ナビゲータ) の「アイテムの選択」ダイアログで値リスト・アイテムを表示しない場合は、このチェックボックスを選択解除します。

注意: アイテム・ナビゲータでは、値リストは (「値を取り出す単位」 スピン・ボックスで指定された) 配列フェッチ・サイズを使用しません。Discoverer ではこの場合にのみ、表示される前に最初にすべての値がフェッチされます。何百万もの行がある場合には、これに長い時間がかかることがあるため、このオプションを選択することをお勧めします。

「常に値を検索するようユーザーに要求」

パフォーマンス上の理由から、値リストのサブセットを使用したクエリーの実行をエンド・ユーザーに強制する必要があることもあります。この場合は、このチェックボックスを使用します。

値リストをリスト全体のサブセットに縮小するための検索基準の入力をエンド・ユーザーに強制する「**検索基準**」フィールドを表示するには、このチェックボックスを選択します。

「**値を取り出す単位**」 スピン・ボックスで指定した行数を表示する場合は、このチェックボックスの選択を解除します (詳細は、「**値を取り出す単位**」を参照してください)。

「接続している間、値リストをキャッシュする」

このチェックボックスを選択して、値リストが最初に表示された後に、(現行セッションの間に) キャッシュします。セッション中はデータが静的な場合は、キャッシュを使用してください。この設定をお勧めします。

データベースから毎回値リストを取り出す場合は、このチェックボックスを選択しないでください。データが非常に動的であり、エンド・ユーザーに対して常に最新の (秒単位の) 値リストを表示する場合はこのオプションを選択しないようにします。

「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「アイテムの選択」タブ

新しいアイテム・クラスを使用するビジネスエリア内のアイテムを指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、月の値リスト（1月、2月、3月など）を作成した場合、ここですべての月アイテムを指定します。Discoverer エンド・ユーザーは月をクエリーするときに、1月、2月、3月、などから選択できます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 2」ダイアログ（このアイテム・クラスを使用するアイテムの選択）

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 3」ダイアログ（このアイテム・クラスを使用するアイテムの選択）

「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ（このアイテム・クラスを使用するアイテムの選択）

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「作成したアイテム・クラスを使用するアイテムを選択します。」

「選択可能なアイテム」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。

このフィールドを使用して、アイテム・クラスを使用するアイテムを下の拡張可能なリストから選択します。

アイテムを選択するには、「選択可能なアイテム」リストから「選択済アイテム」リストへアイテムを移動します。

[Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「選択済アイテム」

このフィールドには、このアイテム・クラスを使用するアイテムが表示されます。

アイテムを選択するには、「選択可能なアイテム」リストから「選択済アイテム」リストへアイテムを移動します。

注意

- アイテム・クラスを使用するアイテムを選択しない場合は、後でそのアイテム・クラスを特定のアイテムに適用する必要があります。

「結合の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ

新規結合の作成、または既存の結合の編集には、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「結合ウィザード: ステップ 1」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「結合」](#)

[「単一アイテム結合」](#)

[「結合の作成方法」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、結合の名前を入力します。この名前は、Discoverer Administrator の「ワークエリア」に表示されます。2つのフォルダ間に複数の結合が存在するためにフォルダ間で選択する必要があるときにのみ、Discoverer エンド・ユーザーにはこの名前が表示されます。

「説明」

このフィールドを使用して、結合についての追加情報を入力します。この説明は、Discoverer Administrator の「ワークエリア」に表示されます。2つのフォルダ間に複数の結合が存在するためにフォルダ間で選択する必要があるときにのみ、Discoverer エンド・ユーザーにはこの説明が表示されます。

「マスター・アイテム」

このフィールドを使用して、結合するマスター・フォルダ内のアイテムを選択します。フィールドの先頭にはフォルダ名が付けられ、たとえば、Products.Product Key となります。

EUL 内のどこからでもフォルダまたはアイテムを選択できる「[新規結合](#)」ダイアログを表示するには、「追加アイテム」を選択します。

「演算子」

このドロップダウン・リストを使用して、マスター・フォルダとディテール・フォルダのアイテムを照合する方法を選択します。たとえば、完全一致する2つのアイテムを検出するには、等価演算子 (=) を選択します。

結合演算子のリストを次に示します。

演算子	等価結合 または非 等価結合	説明
=	等価	指定されたアイテムの値が同じである行を関連付ける
<>	非等価	等しくない
<	非等価	より小さい
<=	非等価	より小さいか等しい
>=	非等価	より大きいか等しい
>	非等価	より大きい

注意: 非等価結合の詳細は、「[非等価結合](#)」を参照してください。

「ディテール・アイテム」

このドロップダウン・リストを使用して、マスター・フォルダのアイテムに一致するディテール・フォルダのアイテムを選択します。ディテール・アイテムのフォルダは、マスター・フォルダと同じビジネスエリアまたは異なるビジネスエリアのどちらにあってもかまいません。

EUL内のどこからでもフォルダまたはアイテムを選択できる「[新規結合](#)」ダイアログを表示するには、「追加アイテム」を選択します。

「ファイルの追加」

このボタンを使用して、結合アイテムを結合に追加します。これにより、別のマスター・フォルダ、演算子およびディテール・フォルダを選択して、複数のアイテムの結合を作成できます。

「削除」

このボタンを使用して、現在選択している結合アイテムを結合から削除します。

「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ

ディテール・アイテムがマスター・フォルダに存在するかどうかを指定し、必要に応じて外部結合と結合との関係（結合のカーディナリティとも呼ばれます）を指定するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「結合ウィザード: ステップ 2」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「結合」](#)

[「単一アイテム結合」](#)

[「クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響」](#)

[「結合の作成方法」](#)

「結合の詳細を選択します。」

このオプションを使用して、この結合についてマスター・フォルダにディテール・アイテムの値が存在するかどうかを指定します。選択するラジオ・ボタンの詳細は、「[複合フォルダからのクエリー結果に結合が影響する例](#)」を参照してください。

■ 「ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在（通常）」

このラジオ・ボタンを使用して、ディテール・フォルダの値が対応するマスター・フォルダの値を常に保持することを前提として、ディテール・アイテムの行を表示します（詳細は、「[クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響](#)」を参照してください）。

■ 「ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり」

このラジオ・ボタンを使用して、ディテール・フォルダの値が対応するマスター・フォルダの値を常に保持しないことを前提として、ディテール・アイテムの行を表示しないようにします（詳細は、「[クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響](#)」を参照してください）。

どのような場合にこれらの設定を使用するかについての詳細は、「[複合フォルダからのクエリー結果に結合が影響する例](#)」を参照してください。

「外部結合なし」

外部結合を作成せずに、一致するすべてのマスター行およびディテール行を戻すには、このラジオ・ボタンを使用します。

「ディテールでの外部結合」

このラジオ・ボタンを使用して、ディテール・テーブルの外部結合を作成します。対応するディテール・アイテムのないマスター行、一致するマスター行およびディテール行のすべてが戻されます。詳細は、「[外部結合](#)」を参照してください。

「マスターでの外部結合」

このラジオ・ボタンを使用して、マスター・テーブルの外部結合を作成します。対応するマスター・アイテムのないディテール行、一致するディテール行およびマスター行のすべてが戻されます。実際のビジネスのシナリオでは、このような構造体はまれです。この構造体を使用するには、「[ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり](#)」ラジオ・ボタンを選択します。詳細は、「[外部結合](#)」を参照してください。

「マスターとディテールの1対1結合関係」

マスター・テーブルとディテール・テーブルの間で、1対多の関係でなく、1対1の関係を作成するには、このチェックボックスを選択します。この場合、マスター・テーブルの各行はディテール・テーブルの1つの行にのみ対応可能であるため、実際のマスターとディテールは存在しません。

SQLは結合のカーディナリティを認識しないため、この設定がDiscovererで生成されるSQLに影響することはありません。この設定は、ファントラップの検出にのみ影響します（詳細は、「[ファントラップの概要およびDiscovererでの処理方法](#)」を参照）。

結合関係の詳細は、「[1対多結合、1対1結合および多対多結合](#)」を参照してください。

「サマリーの編集」ダイアログ:「アイテム選択」タブ

サマリー・フォルダへ追加するアイテムを選択するには、このダイアログを使用します。

注意: どのような軸アイテムや関数でも選択できますが、異なるテーブルに属するアイテムを選択する場合は、テーブル間に結合を設定しておく必要があります。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー・ウィザード:ステップ3」ダイアログ (サマリー・フォルダへのアイテムの追加)

「サマリー・ウィザード:ステップ4」ダイアログ (サマリー・フォルダへのアイテムの追加)

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

「選択可能なアイテム」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダへ追加するアイテムを選択します。

サマリー・フォルダに追加するアイテムを選択するには、「**選択可能なアイテム**」フィールドから「**選択されたアイテム**」フィールドにアイテムを移動します。

[Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「選択されたアイテム」

このフィールドには、サマリー・フォルダ用に選択されたアイテムが格納されています。

「サマリーの編集」ダイアログ:「組合せ」タブ

Discoverer がいつサマリー・フォルダを使用するか指定するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

- 「サマリー・ウィザード: ステップ 4」ダイアログ (アイテムの組合せの追加)
- 「サマリー・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ (アイテムの組合せの追加)

詳細は、次の項目を参照してください。

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

[「サマリー組合せ」](#)

[「サマリー組合せを定義するときに考慮する事項」](#)

[「サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン」](#)

[「EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)

「組合せの追加」をクリックして目的のアイテムを選択し、このサマリー・フォルダにアイテムの組合せを追加します。

End User Layer で事前に作成され、管理されるサマリー組合せを選択します。各サマリー組合せには、ユーザーが希望する分析のタイプが反映される必要があります。サマリー・ウィザードには、軸アイテムとサマリーの各組合せが 1 列で表示されます。

「アイテム」

この列には、このサマリー・フォルダ用に選択された軸アイテムが表示されます。

「組合せ」

各列で、サマリー組合せの軸アイテムのチェックボックスを選択すると、要件が反映されたサマリー・フォルダが作成されます。このウィザードを閉じると、Discoverer によってサマリー・フォルダの結果データが構築されます。結果データが使用可能になるのは、Discoverer のエンド・ユーザーが、このサマリー・フォルダのサマリー組合せとクエリーが一致するワークシートを実行したときです。

「組合せの追加」

このボタンを使用して、新しいサマリー組合せの列を追加します。

「組合せの削除」

このボタンを使用して、選択したサマリー組合せの列を削除します。

「見積り」

このボタンを使用して、作成したサマリー組合せの保存に必要なデータベース領域を表示します。

「プロパティ」

このボタンを使用して、選択したサマリー組合せに対するデータベース記憶域のプロパティを表示および編集します。詳細は、「[データベース記憶域のプロパティ](#)」ダイアログを参照してください。

「状態」

このフィールドには、選択したサマリー組合せの状態およびデータベース・エラー・メッセージが表示されます。この組合せのサマリー・フォルダが作成されていない場合は、ここにサーバー・エラー・メッセージが表示されます。「状態」フィールドの値の詳細は、「サマリー・プロパティ」ダイアログの「注意」を参照してください。

「サマリーの編集」ダイアログ: 「一般」タブ

サマリー・フォルダの名前および説明を入力するには、このダイアログを使用します。マテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの場合は、サマリー・フォルダをいつ作成するかも構成できます。たとえば、即時にサマリー・フォルダを作成できます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

- 「サマリー・ウィザード: ステップ 5」ダイアログ (サマリー・フォルダの名前付け)
- 「サマリー・ウィザード: ステップ 6」ダイアログ (サマリー・フォルダの名前付け)
- 「サマリー・ウィザード: ステップ 7」ダイアログ (サマリー・フォルダの名前付け)

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダの場合

サマリー・フォルダに名前を付け、作成時間をスケジュールできます。

「このサマリーの名前と説明を入力します。」

「名前」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダの名前を入力します。Discoverer Administrator はユーザーが使用できるようにデフォルト名を作成します。

「説明」

(オプション) このフィールドを使用して、サマリー・フォルダについての追加情報を入力します。

「このサマリー・フォルダを作成する日時を指定します。」

■ 「すぐに作成」

サマリー・フォルダが小さい場合または即時にサマリー・フォルダを作成する場合は、このラジオ・ボタンをクリックします。

■ 「次の日時に作成」

サマリー・フォルダが大きいため、ピークを避けた時間に作成する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。サマリー・フォルダを作成する日付と時刻を入力します。

外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの場合

ここで、サマリー・フォルダに名前を付け、説明を付加できます。

「このサマリーの名前と説明を入力します。」

「名前」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダの名前を入力します。Discoverer Administrator はユーザーが使用できるようにデフォルト名を作成します。

「説明」

(オプション) このフィールドを使用して、サマリー・フォルダについての追加情報を入力します。

「サマリーの編集」ダイアログ:「リフレッシュ」タブ

サマリー・フォルダのリフレッシュの日付および時刻を設定するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

- 「サマリー・ウィザード:ステップ 4」ダイアログ (サマリー・フォルダのリフレッシュ)
- 「サマリー・ウィザード:ステップ 5」ダイアログ (サマリー・フォルダのリフレッシュ)
- 「サマリー・ウィザード:ステップ 6」ダイアログ (サマリー・フォルダのリフレッシュ)

サマリー・フォルダ・リフレッシュの詳細は、次の項目を参照してください。

[「ASM の機能」](#)

[「サマリー・データをリフレッシュする理由」](#)

[「サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理」](#)

Discoverer によりリフレッシュされるサマリー・フォルダ (Discoverer のサマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューに基づく) の場合

Discoverer によりリフレッシュされるサマリー・フォルダの場合、サマリーを自動的にリフレッシュするかどうかを指定できます。その場合、リフレッシュを繰り返す日付、時刻および間隔を指定できます。

「Discoverer によってこのサマリー・フォルダが最後にリフレッシュされた日時。」

この読取り専用のフィールドには、前回のリフレッシュの日付と時刻が表示されます。

「次の日時からこのサマリー・フォルダを自動リフレッシュ」

このチェックボックスを使用して、このサマリー・フォルダのリフレッシュを行う日付、時刻および繰り返しの間隔を指定します。

別のアプリケーションによりリフレッシュされるサマリー・フォルダ（外部サマリー・テーブルに基づく）の場合

別のアプリケーションでリフレッシュされる（外部サマリー・テーブルを使用する）サマリー・フォルダの場合は、Discoverer でサマリー・フォルダを自動的にリフレッシュするかどうかを指定できます。その場合は、リフレッシュを繰り返す日付、時刻および間隔を指定します。

「このサマリー・フォルダのリフレッシュを管理」

このサマリー・フォルダのリフレッシュを Discoverer で管理する場合は、このチェックボックスを使用します。

注意: このオプションを使用した場合、外部サマリー・テーブルに関する全制御を Discoverer に託すこととなりますので注意してください。たとえば、管理される外部サマリーに基づくサマリー・フォルダを削除した場合は、外部サマリー・テーブルも削除されます。

「このサマリー・フォルダが最後にリフレッシュされた日時。」

「日付 / 時刻」

このフィールドを使用して、サマリー・データが最後にリフレッシュされた時刻と日付を入力します。Discoverer はこの情報を使用して、サマリー・フォルダをいつ使用するかを判断します。

「次の日時からこのサマリー・フォルダを自動リフレッシュ」

このチェックボックスを使用して、このサマリー・フォルダのリフレッシュを行う日付、時刻および繰り返しの間隔を指定します。

「EUL マネージャ」ダイアログ

End User Layer (EUL) の作成および保守を行うには、このダイアログを使用します。また、現行の EUL に Discoverer のサンプル・データをインストールすることもできます。Discoverer のサンプル・データは、ビジネスエリアのサンプルです。これを Discoverer のエンド・ユーザーが利用できるようにすると、ユーザーはワークブックとワークシートを作成および表示できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法」](#)

[「End User Layer の削除方法」](#)

「接続先 EUL: <EULName>」

このフィールドには、現在接続している EUL の名前が表示されます。

「新しい EUL を作成」

このボタンを使用すると、「EUL 作成ウィザード」ダイアログが表示されます。このダイアログでは、次の作業を実行できます。

- 現行ユーザーまたはデータベースの別のユーザーに新規 EUL を作成。
- 十分なデータベース権限がある場合に新規ユーザーおよびそのユーザーの EUL を同時に作成（詳細は、「Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限」を参照）。

「既存の EUL を削除」

このボタンを使用して、現行 EUL を削除する「EUL の削除」ダイアログを表示します。現行の EUL のみを削除できます。

「サンプル・データのインストール」

このボタンを使用して、現行 EUL にサンプル・データをインストールするための「サンプル・データ・インストール・ウィザード / サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 1」ダイアログを表示します。サンプル・データが 1 度もインストールされていない場合は、サンプル・データ・ユーザーを作成するための十分なデータベース権限が必要です（詳細は、「Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限」を参照）。

「サンプル・データを削除」

このボタンを使用して、現行 EUL からサンプル・データのビジネスエリア、およびオプションでサンプル・データ、データベース・テーブルとデータを削除するための「サンプル・データ・インストール・ウィザード / サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 1」ダイアログを表示します。サンプル・データ・データベースのユーザーは削除されません。

「EUL アップグレード」ダイアログ

このダイアログは、現行リリースの Discoverer Administrator の使用には EUL テーブルをアップグレードする必要があることを示しています。

EUL テーブルのアップグレードにあたり、クエリーやレポートの実行を継続するために、既存のユーザーが同じリリースの Discoverer Plus、Discoverer Desktop または Discoverer Viewer をインストールする必要があります。

アップグレードのプロセスを開始する前に、EUL テーブルをエクスポートすることをお勧めします。

処理方法は次の 2 通りあります。

- 「新規 EUL を手動で作成」

リリース 9.0.2、9.0.4 または 9.0.4.1 の EUL からアップグレードする場合は、このオプションをお勧めします。以前のリリースの Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Desktop は、古い EUL に引き続きアクセスできます。

リリース 4.1 の EUL からアップグレードする場合、以前のリリースの Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Desktop は古い EUL に引き続きアクセスできるため、このオプションは必須ではありません。

- 「既存の EUL の自動アップグレード」

リリース 4.1 の EUL からアップグレードする場合、以前のリリースの Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Desktop は古い EUL に引き続きアクセスできるため、このオプションをお勧めします。

警告: リリース 9.0.2、9.0.4 または 9.0.4.1 の EUL からアップグレードする場合は、EUL テーブルのエクスポートを完了するまで、このオプションは使用しないでください。アップグレード・プロセス実行前に 9.0.2、9.0.4 または 9.0.4.1 の EUL テーブルをエクスポートしない場合、リリース 9.0.2、9.0.4 または 9.0.4.1 の EUL は失われる可能性があります。リリース 9.0.2、9.0.4 または 9.0.4.1 の EUL からアップグレードする場合は、すべてのユーザーが最新リリースの Discoverer Plus、Viewer および Desktop にアップグレードする必要があります。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「前のリリースの Discoverer からのアップグレード」](#)

[「End User Layer」](#)

[「標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法」](#))

「はい、データベースのエクスポートを完了しました」

このラジオ・ボタンを選択して、データベースのエクスポートを実行して EUL をバックアップしたことを確認します。このラジオ・ボタンを選択すると、「アップグレード」ボタンが使用可能になります。

「続行」

このボタンを使用して、EUL アップグレードを開始します。

「EUL アップグレードのエラー」ダイアログ

EUL アップグレード・プロセスで発生したエラーを調べるには、このダイアログを使用します。このダイアログは、アップグレード・プロセスでエラーが発生した場合に自動的に表示されます。このダイアログに表示されるエラー・メッセージを利用すると、アップグレードの問題を診断および修正できます。

注意

- ダイアログを閉じる前に、エラー・メッセージを必ず記録してください。
- エラーを解決し、EUL に再接続すると、アップグレードが自動的に再開されます。

通常、エラー・メッセージには Oracle データベース・エラー番号が含まれています。たとえば、テーブルに親のない子レコードがある場合は、エラー番号 ORA-02298 が表示されます。Oracle Database エラー・メッセージの詳細は、Oracle ドキュメント・ライブラリの中の『Oracle Database エラー・メッセージ』を参照してください。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「前のリリースの Discoverer からのアップグレード」](#)

[「End User Layer」](#)

「エクスポート・ウィザード:ステップ1」ダイアログ

ファイルにエクスポートする Discoverer オブジェクトを選択するには、このダイアログを使用します。EUL 全体、1つ以上のビジネスエリア、1つ以上の EUL オブジェクト（フォルダ、アイテム・クラス、ワークブック、自動サマリー管理（ASM）ポリシーなど）をエクスポートできます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」](#)

[「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)

「エクスポート対象を指定してください。」

■ 「End User Layer 全体」

このラジオ・ボタンを使用して、EUL 全体（すべてのビジネスエリア定義、フォルダ、アイテム・クラス、アイテム階層、日付階層、PL/SQL ファンクション登録情報、サマリー・フォルダ、ワークブックおよび自動サマリー管理（ASM）ポリシー）をファイルにエクスポートします。

■ 「選択したビジネスエリア」

このラジオ・ボタンを使用して、1つ以上のビジネスエリア（選択したビジネスエリア定義とそのフォルダ、アイテム・クラス、アイテム階層、日付階層、PL/SQL ファンクション登録情報、サマリー・フォルダ、ワークブックおよび自動サマリー管理（ASM）ポリシー）をファイルにエクスポートします。

■ 「End User Layer 上の選択したオブジェクト」

このラジオ・ボタンを使用して、1つ以上の EUL オブジェクト（選択したビジネスエリア定義、フォルダ、アイテム・クラス、アイテム階層、日付階層、PL/SQL ファンクション登録情報、サマリー・フォルダ、ワークブックおよび自動サマリー管理（ASM）ポリシー）をファイルにエクスポートします。

注意

- エクスポートする EUL、ビジネスエリアまたはオブジェクトの定義のみがエクスポートされます。EUL テーブルが含まれるデータベース、または EUL テーブル自体はエクスポートされません。また、EUL オブジェクトによって参照されるデータベース・オブジェクトもエクスポートされません。ビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトをデータベースにインポートする場合は、次の条件に該当しないと、Discoverer のエンド・ユーザーはインポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータを表示できません。
 - インポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータベース・テーブルがデータベースに存在する
 - データベース・ユーザーが、インポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータベース、EUL テーブルおよびデータベース・オブジェクトにアクセスするための十分な権限を所有している（詳細は、「[情報に対するアクセス制御](#)」および「[データ・アクセスの前提条件](#)」を参照）

「エクスポート・ウィザード:ステップ2」ダイアログ (選択したビジネスエリアのエクスポート)

エクスポートするビジネスエリアを選択するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「エクスポート・ウィザード:ステップ2」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」](#)

「エクスポートするビジネスエリアを指定してください。」

「選択可能」

このフィールドには、EUL 内のアクセス可能なビジネスエリアがすべて表示されます。

ビジネスエリアをエクスポートするには、「**選択可能**」フィールドから「**選択済**」フィールドにビジネスエリアを移動します。

「選択済」

このフィールドには、エクスポートされるビジネスエリアが表示されます。

ビジネスエリアを選択するには、「**選択可能**」フィールドから「**選択済**」フィールドにビジネスエリアを移動します。

「エクスポート・ウィザード:ステップ2」ダイアログ (選択したオブジェクトのエクスポート)

エクスポートする EUL オブジェクト (ビジネスエリア定義、フォルダ、ワークブックなど) を選択するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「エクスポート・ウィザード:ステップ2」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」](#)

「エクスポートするオブジェクトを指定してください。」

このドロップダウン・リストを使用して、「**選択可能**」フィールドに表示するオブジェクトの種類 (ビジネスエリア定義、フォルダ、アイテム・クラス、アイテム階層、日付階層など) を選択します。

「**選択可能**」

このフィールドには、EUL 内の使用可能なオブジェクトのうち、現在選択されているオブジェクト・タイプのオブジェクトがすべて表示されます (たとえば、「**エクスポートするオブジェクトを指定してください。**」ドロップダウン・リストからアイテム・クラスを選択した場合、EUL 内のすべてのアイテム・クラスがこのフィールドに表示されます)。

EUL オブジェクトをエクスポートするには、「**選択可能**」フィールドから「**選択済**」フィールドに EUL オブジェクトを移動します。

「**選択済**」

このフィールドには、エクスポートする EUL オブジェクトが表示されます。

この「**選択済**」フィールドには、ビジネスエリアとフォルダとの関係が表示されます。

EUL オブジェクトを選択するには、「**選択可能**」フィールドから「**選択済**」フィールドに EUL オブジェクトを移動します。

「エクスポート・ウィザード:ステップ 2/3」 ダイアログ

エクスポート・ファイルを保存する場所を指定するには、このダイアログを使用します。

また、次のこともできます。

- XML へのワークブック保存
- エクスポート・コマンドをテキスト・ファイル (*.txt) 化して保存

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「エクスポート・ウィザード:ステップ 2」 ダイアログ
「エクスポート・ウィザード:ステップ 3」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」](#)

「ファイルを保存する場所」

このフィールドを使用して、エクスポートしたオブジェクトが保存されるエクスポート・ファイルの名前と場所を指定します。エクスポート・ファイルには、.eex という拡張子が付きます。

「名前を付けて保存」ダイアログを使用してエクスポート・ファイルの名前と場所を指定するには、「参照」ボタンを使用します。

ヒント:エクスポート・ファイルには、そのファイルに含まれる EUL オブジェクトの種類を示唆する名前を付けることをお勧めします。わかりやすい名前を付けると、後で別の EUL にインポートするときに、ファイルを簡単に探すことができます。

「次のオブジェクトがエクスポートされます」

このフィールドには、エクスポート・ファイルにエクスポートされるすべてのオブジェクトが表示されます。

「エクスポートしたワークブックの XML を生成」

このチェックボックスを選択して、.eex ファイルに XML フォーマットでワークブックを保存します。

.eex ファイルにバイナリ・フォーマットでのみワークブックを保存するには、このチェックボックスを選択解除します。

Discoverer Administrator では、ワークブックを除き、エクスポートした EUL オブジェクトは XML フォーマットでエクスポート・ファイルに保存されます。デフォルトでは、ワークブックはバイナリ・フォーマットで保存されます。ワークブックをさらに XML フォーマットで保存すると、ワークブック定義を XML ブラウザで表示できます。

「エクスポート・コマンドをテキスト・ファイル (*.txt) に保存」

このチェックボックスを選択して、このエクスポートの作成に使用されたコマンドを含む追加のテキスト・ファイルを作成します。エクスポート・コマンドは、Discoverer のコマンドライン・インタフェースで再度使用するために、テキスト・ファイルとして保存できます（詳細は、「[Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用](#)」を参照）。

注意

- エクスポートする EUL、ビジネスエリアまたはオブジェクトの定義のみがエクスポートされます。EUL テーブルが含まれるデータベース、または EUL テーブル自体はエクスポートされません。また、EUL オブジェクトによって参照されるデータベース・オブジェクトもエクスポートされません。ビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトをデータベースにインポートする場合は、次の条件に該当しないと、Discoverer のエンド・ユーザーはインポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータを表示できません。
 - インポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータベース・テーブルがデータベースに存在する
 - データベース・ユーザーが、インポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータベース、EUL テーブルおよびデータベース・オブジェクトにアクセスするための十分な権限を所有している（詳細は、「[情報に対するアクセス制御](#)」および「[データ・アクセスの前提条件](#)」を参照）

「フォルダ・プロパティ」ダイアログ

現在選択しているフォルダのプロパティを設定するには、このダイアログを使用します。たとえば、フォルダの名前の変更、またはエンド・ユーザーがフォルダを表示できるかどうかの指定を行います。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「フォルダ・プロパティの編集方法」](#)

[「複合フォルダのリーチスルー」](#)

単一フォルダの場合、「フォルダ・プロパティ」ダイアログには次のタブが表示されます。詳細は、次の項目を参照してください。

- [「フォルダ・プロパティ」ダイアログ：「一般」タブ](#)
- [「フォルダ・プロパティ」ダイアログ：「依存性」タブ](#)

複合フォルダの場合、「フォルダ・プロパティ」ダイアログには次の追加タブが表示されます。詳細は、次の項目を参照してください。

- [「フォルダ・プロパティ」ダイアログ：「コンポーネント」タブ](#)
- [「フォルダ・プロパティ」ダイアログ：「リーチスルー」タブ](#)

「フォルダ・プロパティ」ダイアログ: 「一般」タブ

このタブを使用して、現行フォルダのプロパティを構成します。

詳細は、「[フォルダ](#)」を参照してください。

「名前」

このフィールドを使用して、フォルダの一意の名前を入力します。このフィールドの内容は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus のフォルダ選択ダイアログで表示されます。フォルダ名は、End User Layer 内で一意でなければいけません。ビジネスエリアが異なっても、同じフォルダ名を使用することはできません。

注意: アイテムの名前を変更すると、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている 2 次要素（結合、階層、階層ノード、アイテム・クラスなど）の名前に影響を与える可能性があります（詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照）。

「説明」

このフィールドを使用して、フォルダの簡単な説明を入力します。このフィールドの内容は、クエリー・ウィザードの「説明」行に表示されます。

「ユーザーに対して表示されています」

このフィールドは、Discoverer Plus のクエリー・ウィザードで、フォルダをエンド・ユーザーに表示するかどうかを指定するために使用されます。フォルダをユーザーに表示する場合は、「はい」を選択します。ユーザー定義アイテムに使用するためにフォルダを残す必要があってもエンド・ユーザーに直接必要ない場合や、表示するには不適切な場合には非表示にします。エンド・ユーザーに対して非表示に設定されているフォルダは、Discoverer Administrator では非表示の状態を示すグレーで表示されます。

「データベース」

このフィールドでは、フォルダに対応するテーブルが格納されているソース・データベースの場所を指定します。データベースを変更するには、このフィールドをクリックして「データベースの選択」ダイアログを表示し、ドロップダウン・リストから選択します。

注意: このフィールドは、複合フォルダの場合は読取り専用です。

「所有者」

このフィールドでは、フォルダに対応するテーブルまたはビューの所有者のデータベース・ユーザー ID を指定します。

注意: このフィールドは、複合フォルダの場合は読取り専用です。

所有者を変更する場合は、所有者を直接入力するかまたはこのフィールドをクリックし、ボタンをクリックして「ユーザーの選択」ダイアログを表示し、リストから所有者を選択します。

「所有者」項目は空白のままでもかまいません。その場合、このフォルダに対する (Discoverer Desktop または Discoverer Plus からの) SQL 参照では、所有者のプロパティが指定されません。たとえば、SQL の select 文は次のようになります。

```
select <column> from <table>
```

次のようにはなりません。

```
select <column> from <owner>.<table>
```

このようにすると、テーブルまたはテーブルの所有者が利用できない EUL や、EUL の管理者がアクセスできない EUL を作成およびメンテナンスする場合に便利です。さらに、1 つの EUL 内に固有のスキーマを持つ複数のユーザー (Oracle Applications のユーザーなど) は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus でクエリーを行ったときに自分のスキーマ・テーブルにアクセスできるようになります。

「オブジェクト」

このフィールドには、このフォルダに対応するデータベース・オブジェクトの名前が表示されます。クリックすると、「テーブルまたはビューの選択」ウィンドウが表示されます。オブジェクトを変更する場合は、このフィールドをクリックして「ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ」を表示し、リストからオブジェクトを選択します。異なるビジネスエリアまたは異なる所有者からオブジェクトを選択できます。

オブジェクト名を選択すると、「データベース」フィールドおよび「所有者」フィールドの値も（「所有者」フィールドが空白かどうかにかかわらず）、選択したオブジェクトのデータベースおよび所有者の値に変更されます。

注意: このフィールドは、複合フォルダの場合は読取り専用です。

「オプティマイザ・ヒント」

このフィールドを使用して、フォルダに対する特定のオプティマイザ・ヒントを指定します。Discoverer Desktop または Discoverer Plus では、このヒントを見ることはできません。オプティマイザ・ヒントの使用の詳細は、対応するリリースの Oracle のパフォーマンスのための設計およびチューニングに関するドキュメントを参照してください。

「識別子」

Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前です。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクトを検索します。詳細は、「識別子」を参照してください。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子を変更しないでください。

「毎回編集後に変更を自動保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

注意

- 「所有者」フィールドを空白にした場合、このフォルダに基づいたサマリー・テーブル (Oracle Standard Edition データベース) は使用できません。サマリー・フォルダがすでに存在する場合は、警告メッセージが表示されます。
- 「所有者」フィールドを変更した場合は、このフォルダに基づくサマリー・テーブル (Oracle Standard Edition データベース) をリフレッシュする必要があります。サマリー・フォルダがすでに存在する場合はメッセージが表示され、そのフォルダに基づくサマリー・フォルダをリフレッシュするように指示があります。

「フォルダ・プロパティ」ダイアログ: 「依存性」タブ

「依存性」タブには、他のオブジェクト（フォルダ、結合、アイテム、アイテム・クラス、サマリー、条件、ユーザー定義アイテム、ワークブック、スケジュール・ワークブックなど）が選択されたフォルダに依存する程度を示す2つの列（タイプと名前）が表示されています。

詳細は、「[フォルダ](#)」を参照してください。

「タイプ」

このフィールドには、現行フォルダに依存するアイテムのタイプが表示されます。たとえば、フォルダ、条件、サマリー、ワークブック、スケジュール・ワークブックなどです。

「名前」

このフィールドには、現行フォルダに対して依存性を持つ各アイテムの名前が表示されます。

「フォルダ・プロパティ」ダイアログ: 「コンポーネント」タブ

このタブには、複合フォルダで使用されるすべてのコンポーネント・フォルダ（およびそのアイテムと結合）が表示されます。

詳細は、「[複合フォルダ](#)」を参照してください。

「+」および「-」アイコンを使用して、ツリーを拡張または縮小します。

注意: このタブは、複合フォルダの場合のみ表示されます。

「フォルダ・プロパティ」ダイアログ: 「リーチスルー」タブ

このタブには、現在選択している複合フォルダに対して、リーチスルー可能として定義できるベース・フォルダが表示されます。ワークシートに複合フォルダのアイテムが含まれている場合、Discoverer エンド・ユーザーは、リーチスルー可能なベース・フォルダからアイテムを追加できます。

詳細は、「[複合フォルダのリーチスルー](#)」を参照してください。

<フォルダ名>

このチェックボックスを使用して、このベース・フォルダをリーチスルー可能にします。

注意: このタブは、複合フォルダの場合のみ表示されます。

「階層プロパティ」ダイアログ

階層プロパティを設定するには、このダイアログを使用します。たとえば、階層の名前または説明を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「階層」

「名前」

このフィールドを使用して、階層の名前を変更します。デフォルトでは、この名前は階層の基礎となるアイテムから導出されます。

注意: このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合は読取り専用になります。

「名前の自動生成」

このフィールドを使用して、「名前の自動生成」プロパティの値を「はい」または「いいえ」に変更します。「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合、Discovererでは、一部のタイプの End User Layer (EUL) アイテムの名前が、(このタイプの階層内で使用されている) フォルダ名またはアイテム名の変更時に動的に生成されるようになります。

このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティがこのアイテム・クラスに適用可能でない場合は読取り専用になります。

このプロパティの詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。

「説明」

このフィールドを使用して、階層の説明を変更します。このフィールドの内容は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus のクエリー・ウィザードで説明されています。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、同じビジネス・オブジェクトを参照する、異なる EUL 内のオブジェクトを検索します。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

「自動的に変更を保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

「階層ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ

作成する階層のタイプを選択するには、このダイアログを使用します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが時間単位データにドリルできるようにする場合は、日付階層を選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「アイテム階層」](#)

[「アイテム階層の作成方法」](#)

[「日付階層とテンプレートの作成方法」](#)

作成する階層を選択してください。

- 「アイテム階層」

このラジオ・ボタンを使用して、アイテム階層タイプを選択します。

- 「日付階層」

このラジオ・ボタンを使用して、日付階層タイプを選択します。

注意

- 作成する階層の関係は、データベースではなく、ビジネスエリアで定義されます。
- アイテム階層は、ユーザーが異なるレベルの詳細情報にドリルアップおよびドリルダウンできるように、指定した順序で複数のアイテムを結合するために使用されます。たとえば、「国」、「地域」、「地区」、「店舗」という列を結合して、所在地に基づく販売階層を作成できます。高位のアイテム（たとえば、国は地域より高位）は、下位アイテムのスーパーセットになります。この販売階層が作成されると、ユーザーは国別の販売状況を表示するワークシートを作成でき、また個々の国についての地域的な詳細や店舗レベルまでドリルダウンできます。
- 日付階層を使用すると、ユーザーはどの時間単位からでもデータ・アイテムにドリルアップまたはドリルダウンできます。たとえば、ユーザーは年単位で販売データを表示でき、四半期単位に、さらに月単位にドリルダウンできます。日付階層は、アイテム階層と異なり、年、四半期、月、週、日、時間、分、秒の継承構造をもちます。したがって、Discoverer Administrator はあらかじめ作成されている日付テンプレートを使用して、日付階層の一般的なフォーマットを数多く定義します。さらに、カスタマイズされた日付階層も作成できます。

「影響」ダイアログ

オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、アイテム、アイテム・クラス、結合、条件、階層）のリフレッシュまたは削除を行った場合の他オブジェクトに与える影響の度合いを計るには、このダイアログを使用します。

表示される情報に基づいて、オブジェクトに対して現行操作の実行が安全かどうかを判断できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリア削除の確認」ダイアログ](#)

[「削除の確認」ダイアログ](#)

[「フォルダ削除の確認」ダイアログ](#)

「タイプ」

この列を使用して、現行操作の影響を受ける可能性のある依存 EUL オブジェクトを表示します。ここにリストされる可能性のある EUL オブジェクトは、ワークブック、スケージュール・ワークブック、サマリー・フォルダ、ビジネスエリア、フォルダ、アイテム、結合、条件およびアイテム・クラスなどがあります。

行を選択すると、現行操作が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが表示されます。

次の表は、ワークブック、サマリー・フォルダまたはその他の EUL オブジェクトが、現行操作の影響を受ける場合に表示されるメッセージを示しています。

オブジェクト	「影響」ダイアログに表示されるメッセージ
確実に影響を受けるワークブック	削除するオブジェクトはこのワークブックで参照されています。
影響を受ける可能性があるワークブック	ワークブックが影響を受ける可能性があります。ワークブックを一度開いて、現行の EUL と同期させてください。
サマリー	削除する前に、サマリーからこのオブジェクトを削除してください。
アイテム・クラス	このオブジェクトは更新されます。
その他すべての EUL オブジェクト	削除されます。

「名前」

この列を使用して、現行操作の影響を受ける可能性のある EUL オブジェクトの名前を表示します。

注意

- EUL オブジェクトをリフレッシュまたは削除しても、このオブジェクトに依存するワークブックはリフレッシュまたは削除されません。しかし、依存ワークブックを持つ EUL オブジェクトを削除した場合は、その後のワークブックの使用に影響があります。
- 「影響」ダイアログには、データベースに保存されている依存ワークブックが表示されません。ローカルに保存されているワークブックに依存性がある場合、このようなワークブックは「影響」ダイアログに表示されません。
- 依存サマリー・フォルダを持つ EUL オブジェクトは削除されません。このようなサマリー・フォルダは最初に手動で削除する必要があります。サマリー・フォルダの削除は、「ワークエリア」の「サマリー」タブで行います（詳細は、「[サマリー・フォルダの削除方法](#)」を参照）。

「PL/SQL 関数のインポート」ダイアログ

End User Layer にインポートする PL/SQL ファンクションを選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「PL/SQL ファンクションが必要な理由」](#)

[「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを自動的に登録する方法」](#)

[「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを手動で登録する方法」](#)

このダイアログに表示されるファンクションは、SQL コマンドを使用してデータベースに定義されています。データベース内に PL/SQL ファンクションを定義するための詳細は、『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

注意: PL/SQL ファンクションを登録するには、そのファンクションに対する EXECUTE 権限が必要です。

「所有者が一致した場合に PL/SQL 関数を表示」

このフィールドを使用して、「インポートする関数を選択」フィールドに表示する PL/SQL ファンクションをフィルタ処理する検索条件を入力します。

注意: 表示する PL/SQL ファンクションが多数ある場合は、このフィールドによってパフォーマンスが向上する場合があります。

「検索」

このボタンを使用して、「所有者が一致した場合に PL/SQL 関数を表示」フィールドに入力した検索基準と一致するファンクションを検索し、結果を「インポートする関数を選択」フィールドに表示します。

「インポートする関数」

このリストを使用して、データベースからインポートするファンクションを1つ以上選択します。

[Ctrl] キーを押しながら別のファンクションをクリックすると、複数のファンクションを選択できます。

「OK」

このボタンを使用して、選択したファンクションをインポートすると、「PL/SQL 関数」ダイアログ: 「関数」タブが表示されます。

「インポート・ウィザード:ステップ1」ダイアログ

インポートする EUL エクスポート・ファイルを選択するには、このダイアログを使用します。たとえば、sales.eex というファイルに格納されているビジネスエリアをインポートします。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」](#)

[「インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法」](#)

「インポートするファイルを追加」

このフィールドには、インポートするために選択したファイルのリストが表示されます。

「ファイルの追加」

このボタンを使用して「ファイルを開く」ダイアログを表示し、インポートするエクスポート・ファイル (.EEX) を選択します。

インポートするファイルを 1 つ以上選択すると、選択したファイルが「**インポートするファイルを追加**」フィールドに表示されます。

「削除」

このボタンを使用して、インポートするファイルのリストから、強調表示したエクスポート・ファイルを削除します。

「インポート・ウィザード:ステップ2」ダイアログ

オブジェクトのエクスポート元の EUL およびオブジェクトのインポート先の EUL に共通する、同じ名前または識別子を持つオブジェクトを処理する方法を選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」](#)

[「インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法」](#)

「2つのオブジェクトが一致した場合」

■ 「インポートされたオブジェクトの名前を変更」

このラジオ・ボタンを使用して、インポートしたオブジェクトの名前を変更し、現行の EUL の既存のオブジェクトと区別します。

たとえば、「Sales」という名前のフォルダを現行の EUL にインポートする場合に、現行の EUL にすでに「Sales」という名前のフォルダが存在することがあります。このオプションを選択すると、インポートしたフォルダの名前が「Sales1」に変更されます。EUL には、「Sales」および「Sales1」というフォルダが存在することになります。

■ 「既存のオブジェクトの名前を変更」

このラジオ・ボタンを使用して、現行の EUL の既存のオブジェクトの名前を変更し、インポートしたオブジェクトと区別します。

たとえば、「Sales」という名前のフォルダを現行の EUL にインポートする場合に、現行の EUL にすでに「Sales」という名前のフォルダが存在することがあります。このオプションを選択すると、既存のフォルダの名前が「Sales1」に変更されます。EUL には、「Sales1」という名前に変更された既存のフォルダと、「Sales」という名前のインポートされたフォルダが存在することになります。

■ 「一致したオブジェクトをインポートしない」

現行の EUL 内の既存のオブジェクトと一致するオブジェクトをインポートしない場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

たとえば、「Sales」という名前のフォルダを現行の EUL にインポートする場合に、現行の EUL にすでに「Sales」という名前のフォルダが存在することがあります。このオプションを選択すると、フォルダ「Sales」はインポートされません。EUL には、「Sales」という既存のフォルダのみが存在することになります。

■ 「オブジェクトをリフレッシュ」

このラジオ・ボタンを使用して、現行の EUL 内の既存のオブジェクトと一致するオブジェクトをリフレッシュします。

たとえば、「Sales」という名前のフォルダを現行の EUL にインポートする場合に、現行の EUL にすでに「Sales」という名前のフォルダが存在することがあります。このオプションを選択すると、既存の「Sales」フォルダが更新されます。EUL には、「Sales」という名前の更新済みのフォルダが存在することになります。

「オブジェクトをリフレッシュ」ラジオ・ボタンを使用すると、「表示プロパティを保持」チェックボックスもアクティブになります。

「表示関連プロパティを保持」

このチェックボックスは、「オブジェクトをリフレッシュ」ラジオ・ボタンを選択するとアクティブになります。

次のワークブックの表示プロパティを保持するには、このチェックボックスを選択します。

- ヘディング
- フォーマット・マスク
- 文字位置
- ワードラップ
- 表示形式
- NULL の表示方法
- デフォルト位置

2つのオブジェクトの一致方法

Discoverer では、EUL のオブジェクトが別の EUL のオブジェクトと同一かどうかをインポート時に識別するために、次の方法のいずれかを使用できます。

■ 「識別子別」

このラジオ・ボタンを使用して、別の EUL の同じオブジェクトを、識別子を使用して照合します。EUL のオブジェクトが別の EUL のオブジェクトと同じときは、両方のオブジェクトは同じ識別子を共有します。

注意:別の EUL の同じオブジェクトを正確に照合するには、「表示名別」ラジオ・ボタンではなく、「識別子別」ラジオ・ボタンの使用をお勧めします。

■ 「表示名別」

このラジオ・ボタンを使用して、別の EUL の同じオブジェクトを、オブジェクトの表示名を使用して照合します。

注意:「表示名別」ラジオ・ボタンではなく、「識別子別」ラジオ・ボタンの使用をお勧めします。このオプションは、以前のリリースの Discoverer との互換性を保つためにのみ用意されています。

「現在のユーザーをインポートしたワークブックの所有者とするか」

■ 「常にインポートしたワークブックの所有者とする」

現行のユーザーに、インポートされたワークブックを所有するように指定する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

■ 「元の所有者が見つからない場合のみ所有者とする」

インポートされたワークブックの所有者を、そのワークブックの元の所有者と同じデータベース・ユーザーになるように指定する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。特定のワークブックの元の所有者と同じ名前のユーザーがデータベースに存在しない場合は、現行のユーザーが、インポートされたワークブックの所有者になります。

「インポート・ウィザード:ステップ3」ダイアログ

インポートを開始して、各 EUL オブジェクトの処理状況を監視するにはこのダイアログを使用します。

「開始」 ボタンをクリックすると、ページ上部のステータス・バーに、インポートが完了した割合がパーセントで表示されます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピー」](#)

[「インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法」](#)

「開始」

このボタンを使用して、インポート・プロセスを開始します。

「ログ」

このウィンドウを使用して、表示されるメッセージを監視します。次の 2 種類のメッセージが表示されます。

- インポートするオブジェクトに関する情報が記述された情報メッセージ
- 発生する可能性がある問題に関する警告が記述された警告メッセージ

「ログの保存」

このボタンを使用して、インポート・ログ・ファイルの名前と場所を、「名前を付けて保存」ダイアログを使用して指定します。ログ・ファイルには、.txt という拡張子が付きます。

ヒント: ログ・ファイルの名前は、インポートするエクスポート・ファイルと同じような名前にすることをお勧めします。わかりやすい名前にすると、後でファイルを簡単に探すことができます。

「ログの消去」

このボタンを使用して、「ログ」フィールドのメッセージを消去します。

「取消」

このボタンを使用して、インポートを中止します。「ログ」フィールドに警告メッセージが表示されている場合は、インポートの中止が必要になることがあります。

インポートを中止すると、すでに行ったインポート処理はすべてロールバックされます。

「終了」

インポートが正常に終了した後に、このボタンを使用してデータベースへのインポート・トランザクションを確定します。

注意

- インポートする EUL、ビジネスエリアまたはオブジェクトの定義のみがインポートされません。EUL テーブルが含まれるデータベース、または EUL 表自体はインポートされません。また、EUL オブジェクトによって参照されるデータベース・オブジェクトもインポートされません。ビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトをデータベースにインポートするときに次の条件に該当しないと、Discoverer のエンド・ユーザーはインポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータを表示できません。
 - インポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータベース・テーブルがデータベースに存在する

- データベース・ユーザーが、インポートされたビジネスエリアまたはビジネス・オブジェクトによって参照されるデータベース、EUL テーブルおよびデータベース・オブジェクトにアクセスするための十分な権限を所有している（詳細は、「[情報に対するアクセス制御](#)」および「[データ・アクセスの前提条件](#)」を参照）。

「サンプル・データ・インストール・ウィザード / サンプル・データ削除ウィザード : ステップ 1」ダイアログ

サンプル・データのビジネスエリア、データおよびテーブルをインストールまたは削除するときは、このダイアログを使用して EUL の名前を確認します。

このダイアログに表示される EUL が現行の EUL でない場合は、「取消」をクリックして「EUL マネージャ」ダイアログを閉じ、現行の EUL に再接続します。

詳細は、次の項目を参照してください。

- [「サンプル・データ・インストール・ウィザード : ステップ 1」ダイアログ](#)
- [「サンプル・データ削除ウィザード : ステップ 1」ダイアログ](#)
- [「EUL マネージャ」ダイアログ](#)

「サンプル・データ・インストール・ウィザード : ステップ 1」 ダイアログ

このウィザードを使用して、サンプル・データのテーブル、データおよびその他の必要なファイルをインストールします。

サンプル・データをインストールできる EUL は、現行の EUL のみです。

「EUL」

このフィールドには、サンプル・データについての情報がインストールされる EUL の名前が表示されます。

「サンプル・データ削除ウィザード:ステップ1」ダイアログ

このウィザードを使用して、現行の EUL からサンプル・データとテーブルを削除します。

注意: サンプル・データを削除すると、結果は次のようになります。

- サンプル・データ用ビジネスエリアが現行 EUL から削除される
- VIDEO5 データベース・ユーザーはデータベースから削除されない

「EUL」

このフィールドには、サンプル・データについての情報が削除される EUL の名前が表示されません。

「サンプル・データ・テーブルの削除」

このチェックボックスを使用して、次のように、現行の EUL からサンプル・データとテーブルを削除するかどうかを決定します。

- このチェックボックスを選択してサンプル・データとテーブルを削除する
このチェックボックスを選択すると、その他のサンプル・データ・インストールはサンプル・データにアクセス不可になります。
- このボタンの選択を解除して、ビジネスエリアのみを削除する

「サンプル・データ・インストール・ウィザード / サンプル・データ削除ウィザード : ステップ 2」ダイアログ

サンプル・データのビジネスエリア、データおよびテーブルをインストールまたは削除するときは、このダイアログを使用してサンプル・データ・ユーザーのパスワードを確認します。

詳細は、次の項目を参照してください。

- [「\[サンプル・データ・インストール・ウィザード : ステップ 2\] ダイアログ」](#)
- [「\[サンプル・データ削除ウィザード : ステップ 2\] ダイアログ」](#)
- [「\[EUL マネージャ\] ダイアログ」](#)

「サンプル・データ・インストール・ウィザード:ステップ2」ダイアログ

このダイアログを使用して、サンプル・データのインストールに必要な VIDEO5 データベースの新規ユーザーのパスワードを指定します。

「ユーザー」

このフィールドには、サンプル・データ・データベース・ユーザー（VIDEO5）の名前が表示されます。また、このフィールドは読取り専用です。

「パスワード」

このフィールドを使用して、VIDEO5 データベース・ユーザーのパスワードを入力します。現行のデータベースに初めてサンプル・データをインストールする場合は、このフィールドに入力した内容がパスワードとなります。

「パスワードの確認」

このフィールドを使用して、「パスワード」フィールドに入力したパスワードを再入力し、VIDEO5 データベース・ユーザーのパスワードを確認します。現行のデータベース内でいずれかの EUL にサンプル・データがすでにインストールされている場合、パスワードの確認は不要です。

「終了」

このボタンを使用して、現行 EUL にサンプル・データをインストールします。

「サンプル・データ削除ウィザード : ステップ 2」ダイアログ

サンプル・データを削除するには、VIDEO5 データベース・ユーザーのパスワードを知っている必要があります。

注意: サンプル・データを削除すると、結果は次のようになります。

- 「[サンプル・データ削除ウィザード : ステップ 1](#)」ダイアログで「[サンプル・データ・テーブルの削除](#)」チェックボックスを選択した場合は、サンプル・データおよびテーブルがデータベースから削除される
- サンプル・データ用ビジネスエリアが現行 EUL から削除される
- 「[サンプル・データ削除ウィザード : ステップ 1](#)」ダイアログで「[サンプル・データ・テーブルの削除](#)」チェックボックスを選択した場合、その他のサンプル・データ・インストールはサンプル・データにアクセス不可になる
- VIDEO5 データベース・ユーザーはデータベースから削除されない

「ユーザー」

この読取り専用のフィールドには、サンプル・データ・データベース・ユーザー (VIDEO5) の名前が表示されます。

「パスワード」

このフィールドを使用して、VIDEO5 データベース・ユーザーのパスワードを入力します。

「終了」

このボタンを使用して、現行 EUL からサンプル・データを削除します。

注意

- VIDEO5 データベース・ユーザーのパスワードが不明な場合は、DBA に問い合わせます。

「サンプル・データ・インストール・ウィザード:ステップ3」ダイアログ

VIDEO5 データベース・ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「EUL マネージャ」ダイアログ](#)

「デフォルト表領域」

このフィールドを使用して、VIDEO5 のデータを格納するデータベース・テーブル領域を選択します。表領域として選択するには、少なくとも 10MB の空き領域が必要です。

EUL 領域の要件および記憶域パラメータの詳細は、「[一般的な EUL の領域要件および記憶域パラメータ](#)」を参照してください。

デフォルト構成の場合、ここで **USR** 表領域を選択するのが一般的です。

- 「表領域」
データベースの使用可能な表領域がリストされます。
- 「空き領域 (MB)」
表領域で使用可能な容量が表示されます。
- 「自動拡張」
データベースの表領域について、データベースの自動拡張機能の状態（オンまたはオフ）が表示されます。自動拡張機能がオンに設定されていると、必要に応じて表領域のサイズが自動的に増加します。

「一時表領域」

このフィールドを使用して、VIDEO5 データベース・ユーザーに関する一時データが格納されるデータベース・テーブル領域を選択します。デフォルト構成の場合、ここで **TEMP** 表領域を選択するのが一般的です。

アイテム・クラス・プロパティ・ダイアログ: 「一般」 タブ

アイテム・クラス・プロパティを設定するには、このダイアログを使用します。たとえば、アイテム・クラスの名前または説明を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

[「アイテム・プロパティの編集方法」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、アイテム・クラスの名前を変更します。デフォルトでは、この名前はアイテム・クラスの基礎となるアイテムから導出されます。

注意: このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合は読取り専用になります。

注意: アイテム・クラスの名前を変更すると、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている 2 次要素（複合フォルダ内の結合やアイテム）の名前に影響を与える可能性があります（詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください）。

「名前の自動生成」

このフィールドを使用して、「名前の自動生成」プロパティの値を「はい」または「いいえ」に変更します。「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合、Discoverer では、一部のタイプの End User Layer (EUL) アイテムの名前が、（このタイプのアイテム・クラス内で使用されている）フォルダ名またはアイテム名の変更時に動的に生成されるようになります。

このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティがこのアイテム・クラスに適用可能でない場合は読取り専用になります。

このプロパティの詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。

「説明」

このフィールドを使用して、アイテム・クラスの説明を変更します。このフィールドの内容は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus のクエリー・ウィザードで説明されています。

「フェッチ単位」

このフィールドを使用して、データベースからの各フェッチで戻される値の最大数を変更します。

「値のソート」

ドロップダウン・リストを使用して、アイテム・クラスの値をソートするか、またはアイテム・クラスの値をデータベースの格納順に表示します。

「ウィザードに表示」

ワークシート・ウィザードの「アイテムの選択」ページにアイテム・クラスの値を表示する場合は、このドロップダウン・リストから「はい」を選択します。ユーザーは、ワークシートに含めるアイテムの選択時に値リストを展開できるようになります。

ワークシート・ウィザードの「アイテムの選択」ページにアイテム・クラスの値を表示しない場合は、このドロップダウン・リストから「いいえ」を選択します。ユーザーは、ワークシートに含めるアイテムの選択時に値リストを展開できません。

「検索ダイアログの表示」

値リストが展開されたときに、ユーザーに値の検索を常に要求する場合は、このドロップダウン・リストから「はい」を選択します。

「値リストのキャッシュ」

値リストが初めて展開されたときに、値リストの各値をメモリーに格納する場合は、このドロップダウン・リストから「はい」を選択します。

値リストが展開されるたびに、値をデータベースから取り出す場合は、このドロップダウン・リストから「いいえ」を選択します。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、同じビジネス・オブジェクトを参照する、異なる EUL 内のオブジェクトを検索します。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

「自動的に変更を保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

「アイテム・クラス・ウィザード:ステップ1」ダイアログ

作成するアイテム・クラスのタイプを選択するには、このダイアログを使用します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーがワークブックを限定するためのパラメータ値の選択に使用できるように、値リストを作成することを選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「アイテム・クラス属性を選択してください。」

「値リスト」

このチェックボックスを使用して、1つのアイテムに対して存在する固有な値のリストを作成します。値は、データベースの列で検索した値に対応しています。

「代替ソート」

このチェックボックスを使用して、ユーザーが定義した基準でアイテムをソートします。アイテムは通常、ASCII コード値で昇順または降順にソートされます。代替ソートは、それ以外の順序でデータ・オブジェクトをソートするときに使用します。たとえば営業地区「北」、「南」、「東」、「西」をこの順序にソートする場合、代替ソート順序を「北=1」、「南=2」、「東=3」、「西=4」と指定します。

「ディテール・ドリル」

このチェックボックスを使用して、ユーザーがサマリー情報から、より特定の情報にドリルできるようにします。これらのアイテムは、同じフォルダにある必要はありません。

注意

- 代替ソート順序を作成するには、最初に、ソートされる列を含むデータベース・テーブルに列を1つ追加する必要があります。
- 代替ソート順序でソートするアイテムは、そのアイテム・クラス用の値リストを提供するアイテムと同じフォルダ内に含める必要があります。代替ソート基準に含まれるアイテム・クラスには、値リストも同時に含まれる必要があります。
- 値リストに使用されるアイテムとソート順序に使用されるアイテムの間に1対1の関係がある必要があります。

「アイテム階層ノード・プロパティ」ダイアログ

アイテムまたは日付階層ノードのプロパティを設定するには、このダイアログを使用します。たとえば、アイテムまたは日付階層ノードの名前または説明を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「階層」

「名前」

このフィールドを使用して、アイテムまたは日付階層ノードの名前を変更します。デフォルトでは、この名前は階層の基礎となるアイテムから導出されます。

注意: このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合は読取り専用になります。

「名前の自動生成」

このフィールドを使用して、「名前の自動生成」プロパティの値を「はい」または「いいえ」に変更します。「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合、Discoverer では、一部のタイプの End User Layer (EUL) アイテムの名前が、(このタイプの階層内で使用されている) フォルダ名またはアイテム名の変更時に動的に生成されるようになります。

このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティがこのアイテム・クラスに適用可能でない場合は読取り専用になります。

このプロパティの詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。

「説明」

このフィールドを使用して、アイテムまたは日付階層ノードの説明を変更します。このフィールドの内容は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus のクエリー・ウィザードで説明されています。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、同じビジネス・オブジェクトを参照する、異なる EUL 内のオブジェクトを検索します。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

「自動的に変更を保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

「アイテム・プロパティ」ダイアログ

アイテム・プロパティを設定するには、このダイアログを使用します。たとえば、アイテムの名前または計算式を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

[「アイテム・プロパティの編集方法」](#)

「アイテム・プロパティ」ダイアログには2つのタブがあります。

- [「アイテム・プロパティ」ダイアログ:「一般」タブ](#):このタブを使用して、アイテムを構成します。たとえば、アイテム名の変更に使用します。
- [「アイテム・プロパティ」ダイアログ:「依存性」タブ](#):このタブを使用して、このアイテムに依存する他のアイテムを確認します。たとえば、このアイテムを使用するサマリーを確認するために使用します。

「アイテム・プロパティ」ダイアログ: 「一般」タブ

このタブを使用して、アイテムを構成します。

「名前」

このフィールドを使用して、アイテムの名前を変更します。デフォルトでは、この名前はアイテムの基礎となるデータベース列から導出されます。

注意: このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合は読取り専用になります。

注意: アイテムの名前を変更すると、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている2次要素（複合フォルダ内の結合やアイテム）の名前に影響を与える可能性があります（詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください）。

「名前の自動生成」

このフィールドを使用して、「名前の自動生成」プロパティの値を「はい」または「いいえ」に変更します。「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合、Discoverer では、一部のタイプの End User Layer (EUL) アイテムの名前が、（このタイプのアイテム内で使用されている）フォルダ名またはアイテム名の変更時に動的に生成されるようになります。

このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティがこのタイプのアイテムに適用可能でない場合は読取り専用になります。

このプロパティの詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。

「説明」

このフィールドを使用して、アイテムの説明を変更します。このフィールドの内容は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus のクエリー・ウィザードで説明されています。

「データ型」

この読取り専用のフィールドは、データ・ディクショナリの中の列定義から情報を得て、アイテムのデータ型を表示します。ディクショナリのデータ型を直接反映しているため、このフィールドは編集できません。

「計算式」

このフィールドを使用して、アイテムの計算式を変更する「[ユーザー定義アイテムの編集](#)」ダイアログを表示します。このフィールドに計算式が表示されている場合は、アイテムがユーザー定義アイテムであることを意味します。ユーザー定義アイテムは、既存のアイテムから計算式によって定義されたものです。たとえば、利益率の計算などがユーザー定義アイテムで可能です。ビジネスエリアでのユーザー定義アイテムの利点は、ユーザーが分析結果の計算のために複雑な計算式を覚える必要がないことです。フィールドが列名の場合、このアイテムはユーザー定義アイテムではなく、データベースの列からの直接データであることを示します（この場合、この項目は読取り専用です）。

「データベース列」

このフィールドには、アイテムの導出が示されます。このフィールドは所有者のユーザー名、テーブル名および列名から構成されます。このフィールドが空白のときは、アイテムは計算式から作成されています。

「ユーザーに対して表示されています」

このフィールドを使用して、Discoverer エンド・ユーザーがアイテムを表示できるかどうかを指定します。

- アイテムを Discoverer Plus で表示するには、「はい」を選択します。
- アイテムを Discoverer Plus で非表示するには、「いいえ」を選択します。

注意: 一般的に「いいえ」オプションは、ユーザー定義アイテムの計算で使用するため、フォルダ内に置く必要があるアイテムを隠すために使用します。エンド・ユーザーに表示する意味がない、または表示することが不適切な場合に、アイテムを非表示にするために使用します。この他に非表示にするアイテムとしては、主キーや外部キーなどのデータ、給与情報などの重要なデータがあります。

「アイテム・クラス」

このフィールドを使用して、アイテムが属するアイテム・クラスを変更します。このリストを使用して、代替のアイテム・クラスを選択します。このフィールドは、アイテムが軸アイテムである場合にのみアクティブになります。

「日付階層」

このフィールドを使用して、アイテムに適用する日付階層を変更します。アイテムに適用できる有効な日付階層のリストが提供されます。アイテムが日付アイテムではない場合、このフィールドはアクティブになりません。

「デフォルト位置」

このフィールドを使用して、ワークシート上のアイテムのデフォルト位置を変更します（例：「行」、「ページ」、「列」、「データ・ポイント」）。

「デフォルト総計」

このフィールドを使用して、アイテムの総計タイプを変更します（数値の場合）。

「ヘディング」

このフィールドを使用して、ヘッダーを変更します。Discoverer には、ワークシートで 사용되는各アイテムの「ヘディング」プロパティが表示されます。デフォルトでは、ヘッダーはアイテムの基礎となるデータベース列から導出される、アイテムの「名前」プロパティです。

「フォーマット・マスク」

このフィールドを使用して、Discoverer エンド・ユーザーのワークブックにアイテムを表示するために使用されるデフォルト・フォーマット・マスクを変更します。構文は、Oracle データベース製品に付属している『Oracle Database SQL リファレンス』にある Oracle の標準フォーマットを使用します。デフォルトでは、アイテムのデータ型に適したフォーマット・マスクがリストに表示されます。リストに使用するフォーマットがない場合、フォーマット・マスクを直接入力することもできます。

注意: 現在、Discoverer Administrator では、フォーマット・マスクにユーロ記号を使用できません。ただし、Discoverer Plus を使用すれば、フォーマット・マスクにユーロ記号を指定できます。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「文字位置」

このフィールドを使用して、Discoverer Plus に表示するデータの文字位置を変更します。文字位置は、ドロップダウン・メニューから選択できます。デフォルトの「一般」、数値データ用の右揃え、日付とテキスト用の左揃えがあります。

ワードラップ

このフィールドを使用して、Discoverer Plus でテキスト・データを折り返して表示するかどうかを指定します。

注意: これを「はい」に設定すると、Discoverer Plus で大量のテキスト・データにアクセスする場合、パフォーマンスに影響を及ぼす可能性があります。

「保存形式」

このフィールドを使用して、データの表示方法とは別に、データベース内にテキスト・アイテムを格納する方法を指定します。Discoverer エンド・ユーザーが、この情報を参照することはありません。これによって、エンド・ユーザーのワークブックで情報を使用または表示する場合の最適化を行うことができます。たとえば、データがすでに正しく格納されている場合、「表示形式」オプションを使用してテキストを変更する必要はありません。この値を調整して、条件付きのクエリーを実行する際のパフォーマンスを向上できます。データベース内でデータが常に大文字で格納される場合は、この値を大文字に設定します。データが小文字で格納される場合は、この値を小文字に設定します。

「表示形式」

このフィールドを使用して、ワークブックにアイテムを表示する方法を変更します。

「デフォルト幅」

このフィールドを使用して、エンド・ユーザー・レポートに表示するときの、アイテムのデフォルト幅（文字数）を変更します。この値は、Discoverer Plus で（「ツール」→「オプション」→「テーブル」メニューで）デフォルト幅を使用が設定されている場合のみ、使用されません。

「NULL 値を置換」

このフィールドを使用して、NULL 文字の表示方法を変更します。たとえば、NULL データを「在庫切れです ... 注文してください」、「0」、「なし」または空白などにできます。

「コンテンツ・タイプ」

このフィールドを使用して、このアイテムのコンテンツが外部アプリケーションの起動に使用されることを指定します。Microsoft Excel またはインターネット・ブラウザのような別のアプリケーションを必要とするアイテムの場合には、「ファイル」を選択します。外部アプリケーションが不要なデータ型には、「なし」を選択します。

注意: このフィールドを「ファイル」に設定することで、アイテムのコンテンツが外部アプリケーションを起動してデータを表示できるのは、Discoverer Desktop を使用している場合のみです。

アイテムにバイナリ・ラージ・オブジェクト (BLOB) が含まれている場合は、ファイル拡張子により、アイテムの表示に使用されるアプリケーション (.exe 実行ファイル) が決定されます。たとえば、DOC は MS Word を使用し、WAV は、WAV ファイル用に現在登録されているサウンド・プレーヤを使用してサウンドを再生します。これらの関連付けは、コンピュータのオペレーティング・システムで設定されます。

注意: コンテンツがデータベースに格納されているイメージである場合は、「なし」を選択します（詳細は、「別のアプリケーションへのドリルアウト」を参照してください）。

「取得文字数」

このフィールドを使用して、データベースへの SQL コールで取り出される文字数の最大値を表示（または LONG データ型の場合は指定）します。このオプションは特に、LONG データ型に対して取り出される文字数の指定に有効です。文字数を制限する理由は、データに数百、数千の文字を含むものがあり、すべてのデータを取り出すのは非効率または不必要という場合があるためです。

注意: このフィールドには、LONG、LONG RAW および BLOB データ型の値のみ表示されます。

「代替表示値」

このフィールドを使用して、「コンテンツ・タイプ」が「<ファイル>」に設定されているアイテムの説明ラベルを指定します。このラベルは、Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Desktop で表示されます。ここで指定するラベルは、Discoverer Desktop においてドリル・リンクに対するテキストで使用されます。たとえば、「ここをクリックするとワードパッドにレポートが表示されます」と入力して、デフォルトのフィールド値「¥files¥Report.doc」を置換できます。

注意: 「コンテンツ・タイプ」フィールドを「ファイル」に設定することで、アイテムをドリルした後、外部アプリケーションを起動してデータを表示できるのは、Discoverer Desktop を使用している場合のみです。

Discoverer Desktop エンド・ユーザーがドリル・リンクをクリックすると、ファイルは、ファイル・タイプに関連付けられているアプリケーションで開きます。たとえば、*.DOC ファイルに対するリンクを選択すると、Microsoft Word が起動されてファイルが表示されます。

「索引付きアイテム」

このフィールドを使用して、現在のアイテムに関連付ける索引付きアイテムを選択します。Discoverer は、索引付きアイテムを使用して、パラメータがこのアイテムに基づく場合のクエリー・パフォーマンスを向上させます。ここで選択する索引付きアイテムの値は、ユーザーがパラメータを作成、編集および選択するときに、Discoverer Plus および Discoverer Desktop の値リストに表示できます。

ドロップダウン・リストからアイテムを選択するとき、アイテムの隣にデータベース索引アイコンがあることを確認します（アイコンは、そのアイテムがデータベース内の索引付けされた列を表すことを示します）。索引付けされていないアイテムを選択すると、クエリー・パフォーマンスは向上しません。

索引付きアイテムは、次の条件で EUL アイテムに対して指定できます。

- アイテムとその索引付きアイテムが同じ EUL フォルダ内にある。
- 現在のアイテムとその関連索引付きアイテムの間に 1 対 1 マッピングがある（各アイテムの値に対して、対応する索引付きアイテムの値が 1 つ（のみ）ある）。この条件はデータベースによって設定されます。
- 索引付きアイテムのデータ型は LONG または LONG RAW にできない。
- EUL アイテムには、索引付きアイテムを 1 つのみ関連付けることができる。ただし、多数の EUL アイテムが、同じアイテムをその索引付きアイテムとして使用できます。
- 索引付きアイテムに関連付けたアイテムは、同時に別の EUL アイテムの索引付きアイテムにすることはできない。
- エンド・ユーザーに表示されないアイテムを索引付きアイテムとして選択できる。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、同じビジネス・オブジェクトを参照する、異なる EUL 内のオブジェクトを検索します。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

注意: 計算式とデータベース列の主な用途は、アイテム・データの元を追跡することです。たとえば、元となるデータベースまたはデータが直接変更された場合、このフィールドにはデータの元となるソースを識別する監査証跡が表示されます。また、Discoverer マネージャにデータソースの正確な位置情報を提供します。

「毎回編集後に変更を自動保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

「アイテム・プロパティ」ダイアログ: 「依存性」タブ

この読取り専用のタブには、他のオブジェクト（フォルダ、結合、アイテム、アイテム・クラス、サマリー・フォルダ、条件、ユーザー定義アイテムなど）が、選択されたアイテムに依存する程度を示す2つの列（タイプと名前）が表示されます。

「タイプ」

このフィールドには、選択されたアイテムへの依存性を持つ、1つ以上のオブジェクト・タイプ（フォルダ、アイテムなど）が表示されます。

「名前」

このフィールドには、「タイプ」列にリストされたそれぞれのオブジェクトの名前が表示されます。

「アイテム」ダイアログ

条件の作成または編集に使用するアイテムを選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「条件」

「条件の新規作成 / 編集」ダイアログの「値」フィールドのドロップダウン・リストから「アイテムの選択」オプションを選択すると、このダイアログが表示されます。

「アイテムの選択」

条件の新規作成 / 編集ダイアログの「値」フィールドに表示するアイテムを選択します。

「OK」ボタンを使用して、選択したアイテムを「値」フィールドに表示します。

ここで選択したアイテムは、この条件の現行の条件文で使用されます。

「結合プロパティ」ダイアログ

結合プロパティを構成するには、このダイアログを使用します。たとえば、結合の名前を変更または結合のカーディナリティ（結合関係プロパティ）を変更します。

「結合プロパティ」ダイアログには2つのタブがあります。

- **「結合プロパティ」ダイアログ：「一般」タブ** – このタブを使用して、結合を構成します。たとえば、結合の名前の変更に使用します。
- **「結合プロパティ」ダイアログ：「依存性」タブ** – このタブを使用して、この結合に依存する他のアイテムを確認します。たとえば、結合を使用するサマリー・フォルダの確認に使用します。

注意：「結合プロパティ」ダイアログを使用すると、一度に複数の結合アイテムを検査および編集できます。結合を選択すると、そのプロパティが表示されます。複数の結合を選択し、選択した結合に共通するプロパティを変更すると、その変更は選択されたすべての結合に適用されます。

注意：不要な結合を削除（結合トリミングとも呼ばれます）すると、エンド・ユーザーのクエリー・パフォーマンスが向上することがあります。詳細は、「[クエリー結果およびクエリーのパフォーマンスに結合が与える影響](#)」を参照してください。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「結合」](#)

[「結合の表示および編集方法」](#)

「結合プロパティ」ダイアログ：「一般」タブ

このタブを使用して、結合を構成します。

「名前」

このフィールドを使用して、結合の名前を変更します。デフォルトでは、Discoverer Administrator は、マスターおよびディテールのフォルダ名を組み合わせて、マスター・フォルダ -> ディテール・フォルダの形式で結合アイテムの名前を付けます。

注意: このフィールドは、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合は読取り専用になります。

「名前の自動生成」

このフィールドを使用して、「名前の自動生成」プロパティの値を「はい」または「いいえ」に変更します。「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている場合、Discoverer では、一部のタイプの結合の名前が、（この結合で使用されている）フォルダ名またはアイテム名の変更時に自動的に更新されるようになります。

このプロパティの詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。

「説明」

このフィールドを使用して、結合の説明を変更します。デフォルトでは、Discoverer Administrator は、マスターおよびディテールのフォルダ名を組み合わせて、マスター・フォルダ -> ディテール・フォルダの形式で結合アイテムを説明します。

「マスター」

この読取り専用のフィールドを使用して、結合関係のマスター側のフォルダ名を確認します。

「ディテール」

この読取り専用のフィールドを使用して、結合関係のディテール側のフォルダ名を確認します。

「計算式」

このフィールドを使用して、アイテムの結合方法を指定する「[結合の編集](#)」ダイアログ：「[アイテム](#)」タブを表示します。

「外部結合」

このフィールドを使用して、ディテール・フォルダまたはマスター・フォルダの外部結合を指定します。このフィールドには、「なし」、「マスター・アイテム」または「ディテール・アイテム」という値が表示されます。

ディテール・フォルダでは、次のものを返すときに外部結合を使用します。

- 対応するディテール・アイテムのないマスター行と、一致するすべてのマスター行およびディテール行。

マスター・フォルダでは、次のものを返すときに外部結合を使用します。

- 対応するマスター・アイテムのないディテール行と、一致するすべてのディテール行およびマスター行。実際のビジネスのシナリオでは、このような構造体はまれです。この構造体を使用するには、「[結合ディテール](#)」フィールドで「ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり」という値を選択します。詳細は、「[結合の編集](#)」ダイアログ：「[オプション](#)」タブを参照してください。

「結合ディテール」

ディテール・アイテムが常にマスター・フォルダに存在するように指定するか、ディテール・アイテムがマスター・フォルダに存在しなくてもよいと指定するには、このフィールドを使用します。

このフィールドには、次の値が表示されます。

- 「ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在」
詳細は、「[「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)」の「ディテール・アイテム値が常にマスター・フォルダに存在 (通常)」ラジオ・ボタンを参照してください。
- 「ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり」
詳細は、「[「結合の編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)」の「ディテール・アイテム値がマスター・フォルダに存在しない場合あり」ラジオ・ボタンを参照してください。

「結合関係」

結合関係 (結合のカーディナリティ) の種類を次のように指定するには、このフィールドを使用します。

- 1対1の関係を持つ2つのテーブルを結合するには、**1対1 (1:1)** の結合を使用します。たとえば、各部門のマネージャが1人のみであり、各マネージャが部門を1つのみ管理する場合は、1対1の結合関係を使用します。
- 1対多の関係を持つ2つのテーブルを結合するには、**1対多 (1:n)** の結合を使用します。たとえば、各従業員が所属する部門が1つのみであり、部門の従業員が1人、多数またはゼロである場合は、1対多の関係を使用します。

「識別子」

このフィールドには、Discoverer が EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用する一意の名前が表示されます。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクトを検索します。

警告: EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

「毎回編集後に変更を自動保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

「結合プロパティ」ダイアログ：「依存性」タブ

「依存性」タブには、他のオブジェクト（フォルダ、結合など）が、選択された結合に依存する程度を示す2つの列（タイプと名前）が表示されます。

「タイプ」

この列には、選択された結合への依存性を持つ、1つ以上のオブジェクト・タイプ（フォルダ、アイテムなど）が表示されます。

「名前」

この列には、「タイプ」列にリストされた各オブジェクトの名前が表示されます。

「ロード・ウィザード:ステップ1」ダイアログ

ビジネスエリアを開く方法を選択するには、ロード・ウィザードを使用します。たとえば、次の操作を行うことができます。

- 新しいビジネスエリアを作成する
- 既存のビジネスエリアを開く

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「操作を選択してください。」

「新規ビジネスエリアを作成」

このボタンを使用して、新しいビジネスエリアを作成します。「[ビジネスエリアにロードするテーブルまたはビューのロード元を選択してください。](#)」フィールドが表示されます。

「既存のビジネスエリアを開く」

このボタンを使用して、既存のビジネスエリアを開きます。「[開きたいビジネスエリアを1つ以上選択してください。](#)」フィールドが表示されます。

「[新規ビジネスエリアを作成](#)」を選択すると、次のオプションが表示されます。

「ビジネスエリアにロードするテーブルまたはビューのロード元を選択してください。」

- 「**オンライン・ディクショナリ**」

このラジオ・ボタンを使用して、Oracle ディクショナリからテーブルおよびビューをロードします。

- 「**ゲートウェイ**」

このラジオ・ボタンを使用して、このテキスト・ボックスで指定されたデータソースからテーブルおよびビューをロードします。使用可能なデータソースから選択するには、ドロップダウン・リストを使用します。

ゲートウェイからビジネスエリアをロードするための情報は、「[ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法](#)」を参照してください。

「[既存のビジネスエリアを開く](#)」を選択すると、次のオプションが表示されます。

「開きたいビジネスエリアを1つ以上選択してください。」

1つ以上のビジネスエリアを選択して開くには、このフィールドを使用します。適切なチェックボックスをクリックするか、「すべてを選択」ボタンおよび「選択解除」ボタンを使用して、ビジネスエリアを選択します。

注意

- EULに接続すると、ロード・ウィザードが自動的に表示されます。すでにEULに接続しているときにロード・ウィザードを表示するには、「ファイル」、「新規作成」の順に選択します。

- 「ゲートウェイ」オプションは、Oracle Designer を使用しているか、EUL ゲートウェイが登録済で、すべてのテーブルが表示可能である場合にのみ使用可能です (EUL ゲートウェイの設定の詳細は、「EUL ゲートウェイ」を参照)。Oracle Designer を使用している場合は、アクセス可能な Oracle Designer の「ワークエリア」がドロップダウン・リストに表示されます。Oracle Designer 6i 以前の Oracle Designer を使用している場合は、ドロップダウン・リストには単に「Oracle Designer リポジトリ」と表示されます。
- Oracle Designer 6i (バージョンングがオン) からデータをロードする場合は、ロードするオブジェクト・バージョンのセットを含む「ワークエリア」を作成してください。一貫性のあるオブジェクトのリリース・セットを定義する構成に基づく「ワークエリア」ルールの使用をお勧めします。「ワークエリア」内の外部キー定義が、「ワークエリア」外のテーブルおよびビューを参照しないことが重要です。「ワークエリア」が完全であることを確認するために、Oracle Designer の外部参照リスト・ユーティリティを使用します。
- バージョニング (Oracle Designer 6i) がオンになっていない場合には、すべてのオブジェクトを含む「グローバル共有ワークエリア」という名前のデフォルトの「ワークエリア」のみが存在するため、これを使用する必要があります。

「ロード・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ

新しいビジネスエリアにロードするオブジェクトを定義するには、このダイアログを使用します。メタデータを取得する場所により選択肢が異なります。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「データベース・リンクを選択してください」

このドロップダウン・リストを使用して、データソースとして使用するデータベースを指定します。

注意: データベース・リンクでは、データベース間の接続を設定します。また、データベース・リンクはデータベースで作成されます。データベースでは、複数のデータベース・リンクを設定できます。不明な点がある場合は、データベース管理者に詳細を問い合わせてください。

「ロードするテーブルを所有するユーザーを選択してください (オンライン・ディクショナリからメタデータをロードする場合)」

このフィールドを使用して、「データベース・リンクを選択してください」フィールドに示されたデータソースからロード可能なテーブルを持つユーザーを 1 人以上選択します。適切なチェックボックスをクリックするか、「すべてを選択」ボタンおよび「選択解除」ボタンを使用してユーザーを選択します。

「ロードするスキーマを選択してください。」 (ゲートウェイからメタデータをロードする場合)

このフィールドを使用して、「データベース・リンクを選択してください」フィールドに示されたデータ・リンクからロードすることが可能なオブジェクトを持つスキーマ (オブジェクトの所有者) を 1 つ以上選択します。適切なチェックボックスをクリックするか、「すべてを選択」ボタンおよび「選択解除」ボタンを使用してスキーマを選択します。

「パターン・マッチングによる絞り込み」

このフィールドを使用して、ロードするオブジェクトを検索するための Oracle ワイルド・カード文字を入力します。これは、ロードするテーブルの名前を覚えていない場合に役立ちます。デフォルトでは、選択したユーザー ID で所有されているオブジェクトがすべてロードされます (このフィールドにパーセント記号 (%) が表示された場合)。

ワイルド・カードの詳細は、「[オンライン・ディクショナリからのロード](#)」を参照してください。

「ロード・ウィザード:ステップ3」ダイアログ

新規のビジネスエリアにロードするスキーマ・オブジェクトを選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「選択可能」

このフィールドには、新規のビジネスエリアに含めることができるすべてのスキーマ・オブジェクト（テーブルおよびビュー）が表示されます。「**選択可能**」フィールドから1つ以上のスキーマ・オブジェクトを選択し、「**選択済**」フィールドに移動します。

「選択済」

このフィールドには、新規のビジネスエリアに含めるために選択した、すべてのテーブルおよびビューが表示されます。選択したテーブルおよびビューは、それぞれ新規のビジネスエリアのフォルダになります。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら別のスキーマ・オブジェクトをクリックすると、複数のスキーマ・オブジェクトを選択できます。
- 「ロード・ウィザード:ステップ2」ダイアログで選択した内容によって、「ロード・ウィザード:ステップ3」ダイアログの「**選択可能**」フィールドに現在表示されているオブジェクトが決定します。これらの選択内容（データベース・リンク、ユーザー ID または「オンライン・ディクショナリ」オプションを使用した場合に指定したテーブルなど）を変更するには、「戻る」をクリックして「ロード・ウィザード:ステップ2」ダイアログに戻ります。

「ロード・ウィザード: ステップ 4」 ダイアログ

新規のビジネスエリアにデータをロードしたときに生成される結合および追加オブジェクトを構成するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「結合を作成しますか。」

「はい、次の基準に基づいて結合を作成します」

このチェックボックスを使用して、ビジネスエリア内のアイテムの結合を作成します。

■ 「主キー / 外部キー制約」

このラジオ・ボタンを使用して、主キーおよび外部キーの結合を作成します。たとえば、「Regions」に多数の「Stores」が含まれる場合、主キー「Region.Region Name」は、外部キー「Stores.Region Name」と結合されます。

このオプションは、次の場合に使用することをお勧めします。

- 主キーおよび外部キーの制約がデータベースで定義されている場合

このオプションを使用する理由を次に示します。

- 結合を手動で作成する必要がありません。
- Discoverer では、常に正しい結合が作成されます（マスターとディテールの関係が正しくなります）。

■ 「一致している列名」

このラジオ・ボタンを使用して、データベース・テーブル内の一致する列名から結合を作成します。たとえば、Oracle 以外のデータソースを使用する場合など、主キーおよび外部キー制約が定義されていない場合に、このオプションを使用します。

このオプションが選択された場合、Discoverer はロードされるすべてのオブジェクトのすべての列名を、その他のすべての列名と照合します。ロードされる列の数が増加すると、必要な処理量も増加します。この方法の欠点は、作成された結合をロード後にチェックして、結合の有効性を確認する必要があることです。マスターとディテールのフォルダの関係が正しいこと、および結合条件の有効性（同じ名前を使用して、異なる 2 つの列から誤って作成されていないこと）を確認する必要があります。

「その他に作成するオブジェクトを選択します。」

「作成されたフォルダをベースとしたサマリー」

ロード処理後に、このチェックボックスで自動サマリー管理（ASM）を使用して、作成されたフォルダに基づいてサマリー・フォルダを作成します。

テーブル構造の分析後に、適切なサマリー・フォルダのセットが ASM によって作成されます。このオプションを選択するとビジネスエリア・ロードの継続時間は若干増加しますが、エンド・ユーザーのクエリーのパフォーマンスは向上します。

注意: ASM を実行する予定がある場合、またはデータベースの領域が少ない場合にはこのオプションを選択しないでください。

「日付階層」

このチェックボックスを使用して、日付アイテムの日付階層を自動的に作成します。

デフォルトの日付階層フォーマットのドロップダウン・リストから階層を選択します。日付階層は、ビジネスエリア内のすべての日付列に適用されます。ユーザーは日付階層を作成することにより、日付アイテムをドリルアップおよびドリルダウンできるようになります。たとえば、年から四半期または月から日にドリルできます。

日付階層を自動生成すると、追加の（計算された）アイテムがフォルダに挿入されます。つまり、日付階層の各ノードのそれぞれの日付アイテムに対して、新しいアイテムが作成されます。たとえば、年 | 四半期 | 月 | 日を含む日付階層を、3つの日付列を持つテーブルに適用した場合、フォルダの中には新たに 12 個のアイテムが生成されます。詳細は、「[階層の作成とメンテナンス](#)」を参照してください。

「データ・ポイントのデフォルト総計」

このチェックボックスを使用して、数値アイテムのデフォルト総計を指定します。

総計は、ドロップダウン・リストから選択します。デフォルトの総計は SUM です。

「アイテムの値リストを作成するデータ・タイプ」

このチェックボックスを使用して、選択したタイプに基づいて値リストを生成します。このオプションによって、指定したタイプのそれぞれの軸アイテムに対して、値リストが作成されます。ただし、40 文字より長い文字アイテムは除きます。値は、データベースの列の値から導出されます。

注意

- DECIMAL (NUMBER データ型) で、スケールがゼロではないアイテムはデータポイントとしてロードされます。整数、すべてのキーおよびその他すべてのデータ型は軸アイテムとしてロードされ、デフォルトの位置は上です。
- 通常、軸アイテムはワークシートの 1 つの軸上に表示されます。たとえば、「Monthly Profit」はワークシートの軸アイテムとなります。
軸アイテムは、ディメンションとも呼ばれます。
- 通常、データ・ポイントはワークシートの本体に表示されます。たとえば、ドル単位の額 (例: \$2,000) はワークシートの「Monthly Profit」を表すデータ・ポイント・アイテムです。
データ・ポイントは、メジャーとも呼ばれます。
- Discoverer Plus では、アイテムが軸アイテムであるかデータ・ポイントであるかによって、クロス集計ワークシート上のアイテムのデフォルト位置が決まります。
 - データ・ポイントは、ユーザーが分析する数値を含んでいることがほとんどであるため、デフォルトでは集計関数とともにクロス集計レポートの中央に表示されます。
 - 軸アイテムは値リストを保持できますが、データ・ポイントは保持できません。軸アイテムはデフォルトで、ページ上、クロス集計ワークシートの上または横に表示されます。
 - ワークシートの軸アイテムまたはデータ・ポイント・アイテムのデフォルトの位置は、Discoverer マネージャが決定します。ただし、Discoverer Desktop または Discoverer Plus ユーザーは、ワークシートの軸アイテムおよびデータ・アイテムの位置を変更できます。

- 値リストは、Discoverer ユーザーがアイテムの隣にあるプラス記号 (+) をクリックして、データベースへのクエリーを行った時点で導出されます。リストの値は動的であり、データベース中の値が変化すれば、リストの値も変化します。プラス記号 (+) がクリックされると、次のダイアログでアイテム・クラスを作成または編集したときに「**接続している間、値リストをキャッシュする**」チェックボックスが選択解除されていないかぎり、パフォーマンス上の理由から、値はクライアント・マシンにキャッシュされます。
 - 「アイテム・クラス・ウィザード: ステップ 4/5」 ダイアログ
 - 「アイテム・クラスの編集」 ダイアログ: 「オプション」 タブ
- 「**接続している間、値リストをキャッシュする**」チェックボックスを選択している場合、リストに新しい値を表示するには、再接続する必要があります（この設定の詳細は、「[「アイテム・クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブ](#)」を参照）。
- 多くの値（小数点）を含むアイテムに、値リストを作成しないでください。

「ロード・ウィザード:ステップ5」ダイアログ

ビジネスエリアへのデータのロード方法を構成するには、このダイアログを使用してビジネスエリアの名前と説明を入力します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「このビジネスエリアの名前を入力します」

このフィールドを使用して、新規のビジネスエリアの名前を入力します。ビジネスエリアのビジネス機能を反映した短い名前を使用してください。たとえば、Web Usage Analysis とします。

「このビジネスエリアの説明を入力します」

このフィールドを使用して、ビジネスエリアの説明を入力します。このフィールドを使用して、作成者、使用対象者またはその適用範囲の詳細など、ビジネスエリアについての追加情報を入力します。

「オブジェクト名の生成方法を指定してください。」

「すべてのアンダースコアを空白に置換する」

このチェックボックスを使用して、アンダースコアを空白に置換します。たとえば、Region_Name は Region Name に変換されます。

「すべての列接頭辞を削除する」

このチェックボックスを使用して、すべての列に共通の接頭辞を削除します。たとえばテーブル名が EMP で、その列名が EMP_Number、EMP_Name および EMP_Address の場合、ビジネスエリアでの名前は、Number、Name および Address になります。

「大文字にする」

大文字にする場合はこのチェックボックスを使用します（次にドロップダウン・リストからオプションを選択します）。

- 「すべてのワードの最初の文字」

フォルダおよびアイテム名の先頭文字を大文字にするには、このオプションを選択します。たとえば、REGION_NAME は Region_Name に変換されます。データベース内のテーブル名は、通常は大文字なので、このオプションが利用できます。

- 「頭文字」

フォルダおよびアイテム名の最初の文字を大文字にするには、このオプションを選択します。たとえば、REGION_NAME は Region_name に変換されます。

「ソートするオブジェクトを選択します。」

「フォルダをソートする」

ビジネスエリア内のフォルダをアルファベット順にソートするには、このチェックボックスを使用します。

「アイテムをソートする」

フォルダ内のアイテムをアルファベット順にソートするには、このチェックボックスを使用します。

ビジネスエリアのロード時にフォルダおよびアイテムをソートするコマンドライン・インタフェースの使用法は、「[/load](#)」を参照してください。

ビジネスエリア内のフォルダおよびアイテムのソートについての情報は、次の項目を参照してください。

- [「ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法」](#)
- [「フォルダにおけるアイテムのソート方法」](#)

「フォルダの管理」ダイアログ: 「ビジネスエリア」タブ

1つのビジネスエリアに複数のフォルダを割り当てるには、このタブを使用します。たとえば、新規のビジネスエリアに複数のフォルダを追加します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用して、1つ以上のフォルダを割り当てるビジネスエリアを選択します。

「選択可能なフォルダ」

このリストには、選択されたビジネスエリアに現在割り当てられていない使用可能なフォルダが表示されます。親なしのフォルダもリスト表示されます。

現行のビジネスエリアにフォルダを割り当てるには、フォルダを「**選択可能なフォルダ**」リストから「**選択されたフォルダ**」リストに移動します。

「選択されたフォルダ」

このリストには、ビジネスエリアに現在割り当てられているフォルダが表示されます。

現行のビジネスエリアからフォルダを削除するには、「**選択されたフォルダ**」リストから「**選択可能なフォルダ**」リストにフォルダを移動します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、一度に複数のフォルダを選択できます。

「フォルダの管理」ダイアログ: 「フォルダ」タブ

複数のビジネスエリアに単一のフォルダを割り当てるには、このタブを使用します。たとえば、複数のビジネスエリアに新規フォルダを割り当てます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

「フォルダ」

このドロップダウン・リストを使用して、割り当てるフォルダを選択します。

選択したフォルダにビジネスエリアが割り当てられていない場合は、そのフォルダは親なしのフォルダです。

「選択可能なビジネスエリア」

このリストには、現行フォルダを割り当てることができる使用可能なビジネスエリアが表示されます。

現行のフォルダをビジネスエリアに割り当てるには、ビジネスエリアを「**選択可能なビジネスエリア**」リストから「**選択されたビジネスエリア**」リストに移動します。

「選択されたビジネスエリア」

このリストには、現行フォルダが割り当てられているビジネスエリアが表示されます。

現行のフォルダからビジネスエリアを削除するには、ビジネスエリアを「**選択されたビジネスエリア**」リストから「**選択可能なビジネスエリア**」リストに移動します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら他のビジネスエリアをクリックすると、一度に複数のビジネスエリアを選択できます。

「フォルダの管理」ダイアログ：「親なしのフォルダ」タブ

現行の EUL の親なしのフォルダを表示または削除するには、このタブを使用します。親なしのフォルダとは、ビジネスエリアによって所有されていないフォルダです。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「親なしのフォルダの EUL からの削除方法」](#)

「親なしのフォルダ」

このリストには、現行の EUL にある親なしのフォルダがすべて表示されます。

「削除」

このボタンを使用して、強調表示されている親なしのフォルダを現行の EUL から削除します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら他の親なしのフォルダをクリックすると、一度に複数の親なしのフォルダを選択できます。

「スケジュール・ワークブックの管理」ダイアログ

このダイアログを使用して、Discoverer エンド・ユーザーによってスケジュールされたワークブックの監視およびメンテナンスを行います。たとえば、処理中のワークブックの進捗を確認したり、Discoverer エンド・ユーザーにより作成された後で必要がなくなったスケジュール・ワークブックを削除します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックおよびスケジュール・ワークブック」](#)

「ワークブックの表示」

このフィールドの隣にある「選択」ボタンを使用して、表示または編集するスケジュール・ワークブックを所有するユーザーまたはロールを検索および選択できる「[ユーザー / ロールの選択](#)」ダイアログを表示します。たとえば、jchan を選択し、jchan のスケジュール・ワークブックを表示します。

「すべてのユーザーを選択」

すべてのユーザーのスケジュール・ワークブックを表示するには、このチェックボックスを使用します。

「スケジュール・ワークブック」

このフィールドには、選択されたユーザーまたはロールが所有しているスケジュール・ワークブックのリストが表示されます。表示されたワークブックは、実行がスケジュールされているか、すでに実行され、使用準備ができています。このリストには次のフィールドがあります。

- 「ユーザー」
この列には、ワークブックをスケジュールした Discoverer ユーザーの名前が表示されません。
- 「名前」
この列には、スケジュール・ワークブックの名前が表示されます。
- 状態
この列には、ワークブックの状態が表示されます。ワークブックの状態の詳細は、下のテーブルを参照してください。

状態	説明
スケジュール済	このワークブックはスケジュール済で、指定された日時に実行されます。
クエリーを実行していません。	このワークブックは現在実行中です。結果はありません。
スケジュールできませんでした。	このワークブックは正常にジョブ・キューに実行依頼されませんでした。Discoverer エンド・ユーザーに連絡して、このワークブックを再スケジュールしてください。
クエリーの実行中にエラーが発生しました。	このワークブックの実行中にエラーが発生しました。データベースから結果が戻されませんでした。これは PL/SQL の生成または実行中の問題に起因します。Oracle データベース・エラーが生成されています。エラーは、データベース管理者によってアクセス可能です。スケジュール・ワークブックの一部（たとえばワークブックの 1 つのシート）でエラーが発生すると、そのワークブック全体の実行が失敗します。

状態	説明
レポートは管理者によって削除されました。	Discoverer マネージャがスケジュール・ワークブックを削除するように設定しています。このステータスを伴って実行されたレポートは、ユーザーが次回 EUL から切断されたときに削除されます。
EUL が変更されました。レポートをスケジュールし直してください。	スケジュール・ワークブックに影響を与えるような変更が EUL で発生しました。たとえば、フォルダが削除されています。ユーザーはスケジュール・ワークブックをもう一度実行依頼できます。
件数の制限に達しました。	このスケジュール・ワークブックの結果が、ユーザーが取り出せる行数を超過しました。結果は削除されました。「権限」ダイアログ: 「クエリー管理」タブを使用して、この制限を変更します。
レポートが失効しました。	失効日を過ぎました。このワークブックはすでに使用できません。この状態のレポートは、ユーザーが EUL から切断されたときに削除されます。
レポートが用意できています。	このワークブックによるデータベースのクエリーは成功し、ユーザーは結果を表示できます。

- 「日付」

この列には、このワークブックが次に実行される予定日（状態が「スケジュールされています。」の場合）、または前回実行された日付（状態が「レポートが用意できています。」の場合）が表示されます。

- 「時刻」

この列には、このワークブックが次に実行される予定時刻（状態が「スケジュールされています。」の場合）、または、前回実行された時刻（状態が「レポートが用意できています。」の場合）が表示されます。

- 「実行時間」

この列には、このワークブックの実行にかかった時間が表示されます。

「説明」

この読取り専用フィールドには、選択されたワークブックについての追加情報が表示されます。

「編集」

このボタンを使用して、選択したワークブックの設定値を変更する、「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「一般」タブを表示します。このオプションは、まだ処理されていないワークブックでのみ使用可能です。

「エラーを表示」

このボタンを使用して、選択したワークブックが正常に実行されなかった原因の説明を表示します。このオプションは、エラーによりスケジュールできなかったワークブックの場合にのみ使用できます。

スケジュール取消

このボタンを使用して、ワークブックのスケジュールを取り消し、「スケジュール・ワークブック」フィールドのリストからワークブックを削除します。このワークブックを以前に実行した結果としてのワークブックがすべて削除されます。

「リフレッシュ」

このボタンを使用して、このダイアログを開いてから、スケジュールが変更されたかどうか、データベースを確認します。

注意

- 列をクリックすると、「スケジュール・ワークブック」リストを再ソートできます。たとえば、リストを日付順にソートする場合は、「日付」列のヘッダーをクリックします。

「一致する値」ダイアログ

フォルダ内のアイテムに対する索引付きアイテムの定義中に、現行フォルダ内の索引付きアイテムに関連付けられる値リストが、(現行フォルダまたは別のフォルダ内の)別のアイテムに作成されていると判明した場合に、このダイアログが表示されます。

このダイアログを使用して、現行フォルダ内の索引付きアイテムに関連付けられている値リストが、別のフォルダ内の別の値リストと完全に一致することを確認します。

詳細は、「[索引付きアイテムをアイテムに割り当てる方法](#)」を参照してください。

「OK」

このダイアログで示されるアイテムの値が、相互に完全に一致していることを確認する場合は、このボタンを使用します。

注意: 「OK」ボタンを使用したときに、「一致する値」ダイアログに表示されているアイテムの値が相互に完全に一致していない場合は、パラメータが条件で使用されるときに戻される結果が不正確になる可能性があります。

注意

- 値リスト (アイテム・クラス) には、単一アイテムから生成される値が含まれますが、これは、複数フォルダ内の複数アイテムに適用できます (詳細は、「[アイテム・クラス](#)」を参照)。索引付きアイテムで使用される値リスト (アイテム・クラス) が別のアイテムに基づく場合は、アイテム・クラス内の値が索引付きアイテム内の一意の値と完全に一致することの確認を求められます。
- 値を照合しているアイテムのデータ型は同じであることが必要です。たとえば、日付の値リスト (DATE データ型) と都市名の値リスト (VARCHAR データ型)、または曜日の値リスト (VARCHAR データ型) と日付の値リスト (DATE データ型) は照合できません。

「新規条件」ダイアログ（詳細設定）

ビジネスエリア内で使用する新規条件を作成するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

[「異なるタイプの条件」](#)

[「単一条件の作成方法」](#)

[「拡張された条件の作成方法」](#)

詳細条件には複数の基準が含まれます。たとえば、次のような場合です。

- Discoverer エンド・ユーザーが 2001 年の第 1 四半期のデータにのみアクセスできるように制限する場合は、**Year = 2001 AND Quarter = Q1** という必須条件を作成します。
Discoverer エンド・ユーザーがワークブックにアクセスした場合、2001 年の第 1 四半期のデータが常に表示されます。
- Discoverer エンド・ユーザーが 2001 年の別の四半期のデータも簡単に表示できるようにするには、次のようにオプション条件を作成します。
 - Year = 2001 AND Quarter = Q1
 - Year = 2001 AND Quarter = Q2
 - Year = 2001 AND Quarter = Q3
 - Year = 2001 AND Quarter = Q4

Discoverer エンド・ユーザーはワークブックにアクセスしたときに、これらの条件を適用して、特定の四半期のデータを入手できます。

「名前」

このフィールドを使用して、新規条件の名前を入力します。

「名前の自動生成」

このチェックボックスを選択して、Discoverer で名前を生成します。

「名前」フィールドを有効にし、条件の名前を入力するには、このチェックボックスを選択解除します。

「説明」

このフィールドを使用して、条件の追加情報を入力します。この説明は、ワークエリア、および Discoverer Plus でこの条件を選択したときに表示されます。条件の作成者とユーザーの両方に対して役立つ説明を入力します。

「保存場所」

このフィールドには、条件を格納するフォルダの名前が表示されます。これは「挿入」→「条件」を選択した際に選択した場所です。

「タイプ」

このドロップダウン・リストを使用して、条件タイプを選択します。

- 「必須」

必須条件は、条件を含むフォルダからのアイテムを 1 つ以上含むワークシートに常に適用されます。Discoverer Plus ユーザーは、必須条件について通知されません。また、必須条件はオフにできません。

■ 「オプション」

オプション条件は、Discoverer Plus ユーザーにより必要に応じてオンまたはオフにできません。

「計算式」

このフィールドを使用して、使用するフィルタ基準を指定します。

■ 「アイテム」

このドロップダウン・リストを使用して、データのフィルタ処理に使用するアイテムを選択します。たとえば、特定の年のデータを表示するには、「年」を選択します。

■ 「条件」

このドロップダウン・リストを使用して、アイテムとデータの照合方法を選択します。たとえば、特定の数値よりも大きいアイテム値という条件でデータをフィルタ処理するには、「>」記号（より大きい）を選択します。

■ 「値」

このフィールドを使用して、照合対象のデータを定義します。たとえば、2001年度のデータのみを表示するには、ここに「2001」と入力します。

アイテムの値リストを作成している場合は、これらのアイテムがドロップダウン・リストに表示されます。

また、ドロップダウン・リストをクリックして、次のようにも照合できます。

- 「**値の選択**」をクリックして「**値**」ダイアログを表示します。

条件で使用する、1つ以上の値を選択します。

- 「**ユーザー定義アイテムの作成**」をクリックし、「**新規アイテム**」ダイアログを表示します。

条件で使用する、ユーザー定義アイテムを作成します。

- 「**アイテムの選択**」オプションを使用して、「**アイテム**」ダイアログを表示します。

条件で使用するアイテムを選択します。

注意: このフィールドには、最大 254 個の値を入力できます。条件に 254 個を超える値を入力する必要がある場合は、「OR」オプションを使用して、超過した値の新規条件文の行を追加します。

「大文字小文字の区別」

このチェックボックスを使用して、大文字と小文字のテキスト・データを厳密に照合します。

このチェックボックスを選択した場合、「New York」という照合値からは「new york」というデータは戻されません。

「詳細設定」

このボタンを使用して、1つ以上の新規基準行を条件に追加します。このボタンを使用すると、「追加」、「削除」、「AND」、「OR」および「NOT」ボタンが表示されます。

「追加」

このボタンを使用して、条件に新規基準行を挿入します。デフォルトでは、新しいアイテムは論理 AND でグループ化されます。つまり、このデータは、AND グループ内に含まれるすべての基準を満たす必要があります。

「削除」

このボタンを使用して、現在選択しているフィルタ基準を条件から削除します。

「AND」

このボタンを使用して、条件に新規基準行を挿入します。新しいアイテムは論理 AND でグループ化されます。つまり、このデータは、AND グループ内に含まれるすべての基準を満たす必要があります。

「OR」

このボタンを使用して、条件に新規基準行を挿入します。新しいアイテムは論理 OR でグループ化されます。つまり、このデータは、OR グループ内に含まれる基準の少なくとも 1 つを満たす必要があります。

「NOT」

このボタンを使用して、現在選択しているグループの条件を逆転します。アイテムは論理 NOT AND または NOT OR でグループ化されます。つまり、このデータは、NOT グループ内の基準に一致しない必要があります。

注意

- 「削除」、「AND」および「OR」ボタンは、「計算式」に表示されている条件を選択したときにのみ使用できます。

「新規条件」ダイアログ（アイテムまたはフォルダの選択）

新規条件を格納する場所を選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

[「異なるタイプの条件」](#)

[「単一条件の作成方法」](#)

[「拡張された条件の作成方法」](#)

たとえば、「挿入」→「条件」を選択する前にフォルダを選択していない場合は、ここでフォルダを選択します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規条件」ダイアログ

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。次に、下にある拡張可能なアイテム・リストから、条件を格納するフォルダを選択します。

条件の新規作成 / 編集ダイアログ

ビジネスエリア内で新規条件を作成、または条件を編集するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規条件」ダイアログ
「条件の編集」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

[「異なるタイプの条件」](#)

[「単一条件の作成方法」](#)

[「拡張された条件の作成方法」](#)

単純な条件には、通常 1 つのフィルタ基準が含まれています。たとえば、次のような場合です。

- Discoverer エンド・ユーザーが 2001 年のデータにのみアクセスできるように制限する場合は、Year = 2001 という必須条件を作成します。Discoverer エンド・ユーザーがワークブックにアクセスした場合、2001 年のデータが常に表示されます。
- Discoverer エンド・ユーザーが異なる四半期のデータも容易に表示できるようにするには、次のようにオプション条件を作成します。
 - Quarter = Q1
 - Quarter = Q2
 - Quarter = Q3
 - Quarter = Q4

Discoverer エンド・ユーザーはワークブックにアクセスしたときに、これらの条件を適用して、特定の四半期のデータを入手できます。

「名前」

このフィールドを使用して、新規条件の名前を入力します。

「名前の自動生成」

このチェックボックスを選択して、Discoverer で名前を生成します。

この条件の名前を入力するには、このチェックボックスを選択解除します。

「説明」

このフィールドを使用して、条件の追加情報を入力します。この説明は、ワークエリア、および Discoverer Plus でこの条件を選択したときに表示されます。条件の作成者とユーザーの両方に対して役立つ説明を入力します。

「保存場所」

このフィールドには、条件を格納するフォルダの名前が表示されます。これは「挿入」→「条件」を選択した際に選択した場所です。

「タイプ」

このドロップダウン・リストを使用して、条件タイプを選択します。

- 「必須」－ 必須条件は、条件を含むフォルダからのアイテムを1つ以上含むワークシートに常に適用されます。Discoverer Plus ユーザーは、必須条件について通知されません。また、必須条件はオフにできません。
- 「オプション」－ オプション条件は、Discoverer Plus ユーザーが必要に応じてオンまたはオフに切り替えることができます。

「計算式」

このフィールドを使用して、使用するフィルタ基準を指定します。

- 「アイテム」

このドロップダウン・リストを使用して、データのフィルタ処理に使用するアイテムを選択します。たとえば、特定の年のデータを表示するには、「年」を選択します。

- 「条件」

このドロップダウン・リストを使用して、アイテムとデータの照合方法を選択します。たとえば、特定の数値よりも大きいアイテム値という条件でデータをフィルタ処理するには、より大きい記号 (>) を選択します。

- 「値」

このフィールドを使用して、照合対象のデータを定義します。たとえば、2001年度のデータのみを表示するには、ここに「2001」と入力します。

アイテムの値リストを作成している場合は、これらのアイテムがドロップダウン・リストに表示されます。

また、ドロップダウン・リストをクリックして、次のようにも照合できます。

- － 「**値の選択**」をクリックして「**値**」ダイアログを表示します。

条件で使用する、1つ以上の値を選択します。

- － 「**ユーザー定義アイテムの作成**」をクリックし、「**新規アイテム**」ダイアログを表示します。

条件で使用する、ユーザー定義アイテムを作成します。

- － 「**アイテムの選択**」オプションを使用して、「**アイテム**」ダイアログを表示します。

条件で使用するアイテムを選択します。

注意: このフィールドには、最大 254 個の値を入力できます。条件に 254 個を超える値を入力する必要がある場合は、「詳細設定」をクリックし、「OR」オプションを使用して、超過した値の新規条件文の行を追加します。

「大文字小文字の区別」

このチェックボックスを使用して、大文字と小文字のテキスト・データを厳密に照合します。

このチェックボックスを選択した場合、「New York」という照合値からは「new york」というデータは戻されません。

「詳細設定」

複数のフィルタ基準を作成するときは、このボタンを使用します。これにより、詳細条件を作成する追加のフィールドおよびボタンが表示されます（「**新規条件**」ダイアログ（**詳細設定**）を参照）。

「新規日付フォーマット」ダイアログ

新しい日付フォーマットを作成するには、このダイアログを使用します。たとえば、一般的な4桁の年の最後の2桁のみを含む年（2001の場合は01を表示し、2002の場合は02を表示するなど）の新規フォーマットを作成できます。

新しいフォーマットを日付階層で使用できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「日付階層」](#)

[「日付アイテム」](#)

[「日付フォーマット・マスク」](#)

「日付フォーマット・グループ」

このドロップダウン・リストを使用して、新しい日付フォーマット（年、四半期、月など）を含めるグループを選択します。

「新規フォーマットの作成」

このフィールドを使用して、使用する日付フォーマット・マスクを入力します。たとえば、4桁の年と月を表示するには、「YYYY-MM」と入力します。

注意

- 新しい日付フォーマットは、SQL日付フォーマットモデル（たとえばYYYY、YYY、YY、RRなど）に適合している必要があります。
- 説明のテキストを二重引用符で囲って、新しい日付フォーマットの前に説明のテキスト（たとえば"Fiscal Year"YYYY）を付加できます。

「新規アイテム」ダイアログ

EUL オブジェクトまたは関数、あるいはその両方に基づくアイテムを作成するには、このダイアログを使用します。作成可能なアイテムは、導出アイテム、集計ユーザー定義アイテムまたは集計導出アイテムです。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテム」](#)

[「ユーザー定義アイテム」](#)

[「ユーザー定義アイテムの作成方法」](#)

たとえば、次のような場合です。

- EUL アイテム「Calendar Year」に基づいた、「Year」という名前のアイテムの作成
- $\text{Sales SUM} * 1.25$ という計算式に基づいた、「Sales Target」という名前のユーザー定義アイテムの作成
- $\text{Sales SUM} - \text{Cost SUM}$ という計算式に基づいた、「Profit」という名前のユーザー定義アイテムの作成
- $\text{RANK} () \text{ OVER} (\text{ORDER BY Sales SUM})$ という計算式に基づいた、「Rank Sales」という名前のユーザー定義アイテムの作成

「表示」

このラジオ・ボタンを使用して、ユーザー定義アイテムの作成に使用可能な計算、関数およびアイテムを表示します。ユーザー定義アイテムにアイテムを追加するには、アイテムを「ユーザー定義アイテム」フィールドに貼り付けます。

■ 「アイテム」

このラジオ・ボタンを使用して、使用可能な EUL アイテムを表示します。

■ 「関数」

使用可能な関数を表示するには、このラジオ・ボタンを使用します。

「貼付け」

このボタンを使用して、「表示」リストで現在選択しているアイテムを、「ユーザー定義アイテム」フィールドに追加します。アイテムは、「ユーザー定義アイテム」フィールドにコピーされます。

「名前」

このフィールドを使用して、アイテムまたはユーザー定義アイテムの名前を入力します。Discoverer Administrator によりデフォルトの名前が作成されます。

「ユーザー定義アイテム」

このフィールドを使用して、ユーザー定義アイテムの詳細を入力します（ユーザー定義アイテムの例については、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照）。

ユーザー定義アイテムを作成するには、次の方法を行います。

- 「ユーザー定義アイテム」フィールドに直接計算式を入力する。

注意：「ユーザー定義アイテム」フィールドに式を入力する場合は、式の前に等号 (=) を付ける必要があります。たとえば、「=Sales SUM-Costs SUM」と入力します。

- 左側の「表示」フィールドからユーザー定義アイテムに、アイテムや関数を貼り付ける。

- 「ユーザー定義アイテム」フィールドの下にある演算子ボタンをクリックして計算に使用する。

演算子ボタン (+ - x / % ())

これらのボタンを使用して、計算に演算子を追加します。演算子は前述の「ユーザー定義アイテム」フィールドにコピーされます。

注意: ユーザー定義アイテムの中で算術表現を使用した場合、乗算と除算は、その位置に関係なく最初に計算されます。優先順位の同じ演算子が複数ある場合は、左から右へ計算されます。

たとえば、値段 - 値引き × 個数という計算式では、値段から値引き × 個数が減算されてしまいます。減算をカッコで囲み (値段 - 値引き) とすれば、乗算より先に減算が計算されます。

「OK」

このボタンを使用して、次のようにユーザー定義アイテムを検証し、保存します。

- ユーザー定義アイテムの構文が有効な場合、ユーザー定義アイテムが保存され、「ユーザー定義アイテム」ダイアログに表示されます。
- ユーザー定義アイテムの構文が無効な場合は、エラー・メッセージが表示されます。ユーザー定義アイテムを保存する前に、構文エラーを訂正する必要があります。

注意

- 次の表に、「表示」フィールドの下にあるフィールドで使用できる関数を示します。

カテゴリ	説明
すべての関数	すべての関数のアルファベット順のリスト
分析	RANK、NTILE、CORR など、統計分析用の関数
変換	RAWTOHEX、TO_CHAR、TO_DATE など、データ型を別のデータ型に変換する関数
データベース	ユーザー定義関数が使用可能な場合に表示されるオプションのカテゴリ（「ツール」メニューの「PL/SQL 関数の登録」機能を使用して作成）
日付	ADD_MONTHS、NEW_TIME、SYSDATE、NEXTDATE など、日付アイテムの操作用の関数
集合	SUM、COUNT、MAX、MIN、VARIANCE などを含む集合関数および統計関数
数値	数値アイテム用の関数。COS、LOG、MOD、POWER など、超越関数および浮動小数点関数
その他	LEAST、USER、DECODE、ROWNUM など、その他の関数
文字列	文字列アイテム用の関数。INITCAP、LPAD、NLS_UPPER などのテキスト操作

- Discoverer で使用可能なすべての関数の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』および『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。
- 一般的に使用される関数の例は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「新規アイテム」ダイアログ（フォルダの選択）

新規アイテムを格納する場所を選択するには、このダイアログを使用します。たとえば、「挿入」→「アイテム」を選択する前にフォルダを選択していない場合は、ここでフォルダを選択します。

このダイアログは、現在選択されているフォルダが、作成しようとするアイテムを使用しない場合に表示されます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規アイテム」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテム」](#)

[「フォルダ」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用して、ビジネスエリアを選択します。次に、アイテムを格納するフォルダを、下の拡張可能なアイテム・リストから選択します。

「新規結合」ダイアログ（フォルダの選択）

新規結合を格納する場所を選択するには、このダイアログを使用します。たとえば、「挿入」→「結合」を選択する前にフォルダを選択していない場合は、ここでフォルダを選択します。

フォルダの選択ウィンドウは、次の場合に表示されます。

- 現在選択されているフォルダが、作成しようとする結合を使用しない
- 「ワークエリア」でフォルダが選択されていない

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規結合」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「結合」](#)

[「ビジネスエリア」](#)

[「結合の作成方法」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。次に、下にある拡張可能なアイテム・リストから、結合を格納するフォルダを選択します。

「オンライン・ディクショナリ・オプション」ダイアログ

「ロード・ウィザード:ステップ2」ダイアログに表示するテーブルおよびビューのタイプを指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、ユーザーが所有しているテーブルおよびビューのみでなく、ユーザーがアクセス可能なすべてのテーブルおよびビューを表示できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

「ロード・ウィザード」

「どちらのテーブル（およびビュー）を表示しますか。」

■ 「ユーザーが所有しているテーブルおよびビュー」

このラジオ・ボタンを使用して、「ロード・ウィザード:ステップ2」ダイアログで指定されたユーザー ID に属するテーブルおよびビューを使用可能にします。

次の場合、このオプションを選択してください。

- スキーマを所有している場合に、スキーマの許可に基づいてテーブルまたはオブジェクトをロードするとき。
 - スキーマ所有者がいる場合に、スキーマの権限付与に基づいてテーブルまたはオブジェクトをロードするとき。たとえば、FINAPPS などの所有者は、Oracle の財務アプリケーション・システムで使用されているすべてのテーブルを所有しており、他のユーザーがこれらのテーブルを参照できるようにアクセス権を付与しています。
- #### ■ 「ユーザーが参照可能なテーブルおよびビュー」

このラジオ・ボタンを使用して、データベース内で SELECT アクセス権が付与されたユーザー ID からテーブルおよびビューを使用可能にします。

「どのタイプのテーブル（およびビュー）を表示しますか。」

■ 「パブリックに select 権限が与えられているテーブルおよびビュー」

このチェックボックスを選択して、選択されたユーザー ID のスキーマにパブリック・アクセス権が付与されているテーブルおよびビューをインポートします。たとえば、JOE はパブリック・アクセス可能なテーブルを表示しています。

■ 「他のユーザーに select 権限が与えられているテーブルおよびビュー」

このチェックボックスを選択して、選択されたユーザー ID のスキーマに、他のユーザーにアクセス権限が与えられているテーブルおよびビューをインポートします。たとえば、ユーザー ID Bob は、データベース内のテーブル D の SELECT 権限をユーザー ID Betty に付与できます。テーブル D は、アクセス制限されたオブジェクトとして指定されます。このオプションを使用して、あるユーザー ID が所有するアクセス制限された、またはユーザー ID に明示的な SELECT アクセスが許可されたオブジェクトのリストを表示します。たとえば、JOE はこれらのテーブルに対する特定のアクセス権を付与されています。

■ 「ユーザーのプライベート・テーブル」

このチェックボックスを選択して、選択されたユーザー ID のスキーマに、他のユーザー ID からアクセス不可能なプライベートのテーブルおよびビューをインポートします。

注意

- ユーザー ID はテーブルを所有し、他のユーザー ID にアクセス権を付与できます。たとえば、FINAPPS などのアプリケーション所有者は、Oracle の財務アプリケーション・システムで使用されているすべてのテーブルを所有し、他のユーザーがこれらのテーブルを参照できるようにアクセス権を付与しています。

「ビジネスエリアを開く」ダイアログ

Discoverer Administrator の「ワークエリア」で、どのビジネスエリアを開くか指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、ユーザー自身のビジネスエリアおよび Video Stores Tutorial ビジネスエリアを選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリア」](#)

[「オンライン・ディクショナリからのロード」](#)

[「ゲートウェイからのロード」](#)

「選択可能」

このリストには、使用可能なビジネスエリアが表示されます。ビジネスエリアを開くには、ビジネスエリアを「**選択可能**」リストから「**選択済**」リストへ移動します。

「選択済」

このリストには、「ワークエリア」で開くビジネスエリアが含まれます。このリスト内のビジネスエリアを開かない場合は、ビジネスエリアを「**選択済**」リストから「**選択可能**」リストへ移動します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。
- 同一のビジネスエリアを重複して開くことはできません。すでに「ワークエリア」で開かれているビジネスエリアを選択しても、「開く」コマンドは何も行いません。同じビジネスエリアを複数表示するには、「ウィンドウ」メニューから「新しいウィンドウを開く」を選択し、別の「ワークエリア」ウィンドウを表示します。

「オプション」ダイアログ: 「接続」タブ

「接続」ダイアログに表示される接続の詳細を指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、常に Oracle Applications EUL に接続する場合は、Oracle Applications 接続の詳細の入力を要求するように「接続」ダイアログを設定できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer Administrator の開始方法」](#)

[「オプション」ダイアログ: 「デフォルト EUL」タブ](#)

「どのタイプの EUL に接続しますか。」

■ 「標準 EUL」

Discoverer Administrator を使用して、標準 EUL にのみ接続する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

このラジオ・ボタンを選択すると、「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「接続」ダイアログに表示されません。

■ 「Oracle Applications EUL」

Discoverer Administrator を使用して、Oracle Applications EUL にのみ接続する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

このラジオ・ボタンを選択した場合、「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「接続」ダイアログに表示されませんが、Oracle Applications のユーザー ID と職責を使用してログインする必要があります。

このチェックボックスを選択すると、Oracle Applications の EUL にのみログインできます。

■ 「標準 EUL および Oracle Applications EUL の両方」

Discoverer Administrator を使用して、標準の EUL と Oracle Applications EUL の両方へ接続可能にする場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

このラジオ・ボタンを選択すると、「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが「接続」ダイアログに表示されるため、次の処理を行うことができます。

- このチェックボックスを選択し、Oracle Applications 接続の詳細を指定して、Oracle Applications の EUL に接続する
- このチェックボックスの選択を解除し、標準のデータベース・ユーザーの詳細情報を指定して、標準の EUL に接続する

「Oracle Applications EUL 設定」

Oracle Applications EUL の場合はこれらのフィールドを使用します。ユーザーが値を入力しないと、これら両方のフィールドでデフォルト値が使用されます。

「Gateway User ID (GWYUID) / パスワード」

このフィールドを使用して、Oracle Applications の EUL にログインするときに Discoverer Administrator が使用する、パブリック・ゲートウェイのユーザー名とパスワード (Gateway User ID / パスワードで識別されます) を指定します。ユーザー名とパスワードは、スラッシュ (/) 文字で区切ってください。

Discoverer で使用されるデフォルト値 (APPLSYSPUB/PUB) を上書きする場合は、ゲートウェイ・ユーザー ID を入力します。

ゲートウェイ・ユーザー ID とパスワードを指定しない場合は、上記のデフォルト値が使用されます。

「Foundation Name (FNDNAM)」

このフィールドを使用して、コア Oracle Applications のテーブルおよびビューを所有する FND スキーマを指定します。

Discoverer で使用されるデフォルト値 (APPS) を上書きする場合は、Foundation Name を入力します。

Foundation Name を指定しない場合は、上記のデフォルト値が使用されます。

注意

- Discoverer Administrator のゲートウェイ・ユーザー ID とパスワード、および Foundation Name のデフォルト値は、Windows のレジストリで定義されています。詳細は、「[Discoverer Administrator](#) および [Discoverer Desktop のレジストリ設定](#)」を参照してください。

「オプション」ダイアログ: 「デフォルト EUL」タブ

Discoverer Administrator の起動時に接続するデフォルトの EUL を指定するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「Discoverer Administrator の開始方法」](#)

[「「オプション」ダイアログ: 「接続」タブ」](#)

デフォルト EUL の設定

「デフォルト EUL を選択してください」

このフィールドを使用して、Discoverer Administrator を起動したときにデフォルトで接続される EUL を選択します。次に Discoverer Administrator に接続したときには、ここで選択した EUL のビジネスエリアがロード・ウィザードに表示されます。

注意

- 新しい EUL を作成する場合は、ここで指定したデフォルトの EUL への書込みアクセス権限を所有している必要があります。デフォルトの EUL への書込みアクセス権限を所有していない場合は、ロード・ウィザードでビジネスエリアの作成オプションは使用できません。詳細は、「[データ・アクセスの前提条件](#)」および「[Discoverer アクセス権限](#)」を参照してください。

「オプション」ダイアログ: 「クエリー管理」タブ

このダイアログを使用して、Discoverer Administrator または Discoverer Desktop が、クエリーからデータが戻されるのを待機する、エラー・メッセージを表示するまでの時間を指定します。この設定は、たとえば、項目の多い値リストを開こうとして、値リストが表示される前に Discoverer でエラー・メッセージが表示されるときに有効な場合があります。この設定の値を大きくすると、Discoverer では、エラー・メッセージを表示するまでの値リストを表示する時間が長くなります。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「値リスト」](#)

[「アイテムの値リストの表示方法」](#)

[「オプション」ダイアログ: 「接続」タブ](#)

[「オプション」ダイアログ: 「デフォルト EUL」タブ](#)

「次の時間を超える値リストの検索を中止」

このフィールドを使用して、Discoverer による値リストのアイテムの取出しを待機する最大時間（秒）を定義します。

注意: このタブは、ユーザーがデータベースに接続されている場合のみ表示されます。

「PL/SQL 関数」ダイアログ：「引数」タブ

登録された PL/SQL ファンクションの引数を定義するには、このダイアログを使用します。

SQL コマンドを使用して、データベース中に定義された PL/SQL ファンクションを登録できません。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「PL/SQL ファンクションが必要な理由」](#)

「関数」

このフィールドには、Discoverer Administrator で使用できるようにすでに登録されている、Oracle が提供する PL/SQL ファンクションとユーザー定義の PL/SQL ファンクションが表示されます。

「引数」

このフィールドには、「関数」フィールドで現在選択されているファンクションに定義されている引数のリストが表示されます。

「新規作成」

このボタンを使用して、新しい引数を作成します。デフォルトの引数名が生成され、フィールドはデフォルト値で初期化されます。ユーザーは必要に応じてデフォルト値を編集して、新しい引数を構成できます。

「削除」

このボタンを使用して、現在選択されている引数を削除します。引数は、「引数」フィールドから削除されます。

「上へ移動」 / 「下へ移動」

これらのボタンを使用して、「引数」フィールドの引数のリストを再配置します。これは引数が不正な場合や、ファンクション自体の変更やファンクション定義の更新の場合に便利です。

「属性 < 「引数」フィールドで選択した引数 >」

この領域には、選択された PL/SQL ファンクションについての情報が表示されます。

「名前」

このフィールドを使用して、引数名を入力します。ユーザーが引数を追加すると、Discoverer Administrator によってデフォルト名が作成されます。

「説明」

このフィールドを使用して、引数についての追加情報を入力します。ユーザーが引数を追加すると、Discoverer Administrator によってデフォルトの説明が作成されます。

「データ型」

このドロップダウン・リストを使用して、このフィールドの引数のデータ型を指定します（デフォルトは NUMBER）。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前を変更します。

「引数の使用」

- 「オプション」

この引数がファンクションのオプション引数の場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

- 「必須」

この引数がファンクションの必須引数の場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

注意

- 現行のユーザーにビジネスエリアの作成 / 編集権限がない場合、このダイアログは読取り専用になります (詳細は、「[権限](#)」ダイアログ: 「[権限](#)」タブ) を参照)。
- PL/SQL ファンクションに BOOLEAN データ型の引数が含まれているとき、次の条件を満たす場合のみ、PL/SQL ファンクションを手動で入力できます。
 - BOOLEAN 引数にデフォルト値が定義されている (例: Arg1 on boolean:=TRUE)
 - 「オプション」ラジオ・ボタンを選択する

「PL/SQL 関数」ダイアログ: 「関数」タブ

Discoverer Administrator で使用可能な PL/SQL ファンクションを管理するには、このダイアログを使用します。ファンクションを登録するには、次の方法があります。

- データベース内に定義されている PL/SQL ファンクションをインポートする（「インポート」ボタンを使用）
インポートするファンクションを選択するとファンクションの詳細が自動的に入力されるため、この方法をお勧めします。
- PL/SQL ファンクションの詳細を手動で入力する（「新規」ボタンを使用）
データベース内のファンクションのリストが非常に長く、ファンクション詳細を入力することによって検索時間を短縮する場合は、このオプションを使用できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「PL/SQL ファンクションが必要な理由」](#)

[「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを自動的に登録する方法」](#)

[「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを手動で登録する方法」](#)

「関数」

このフィールドには、Discoverer Administrator で使用できるようにすでに登録されている、Oracle が提供する PL/SQL ファンクションとユーザー定義の PL/SQL ファンクションが表示されます。**Desktop Edition/Plus での使用を許可**というチェックボックスが選択されているときは、Discoverer エンド・ユーザーがユーザー定義アイテムでこれらの登録済ファンクションを使用できます。

「属性 < 「関数」 フィールドで選択した関数 >」

この領域には、選択された PL/SQL ファンクションについての情報が表示されます。

「関数名」

このフィールドを使用して、ファンクションの名前を入力します。「関数名」と「表示名」は違うものでもかまいません。

「表示名」

このフィールドを使用して、ファンクションの名前を入力します。この名前は Discoverer Administrator の「ユーザー定義アイテムの編集」ウィンドウで表示されます。Desktop Edition/Plus での使用を許可というチェックボックスが選択されている場合は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus でも表示されます。

「所有者」

このフィールドを使用して、ファンクションの所有者のユーザー ID を入力します。この値を変更すると、参照を開発環境から本番環境に移動できます。

「パッケージ」

このフィールドを使用して、このファンクションを含むパッケージを入力します。パッケージは、Oracle のデータベース内でファンクションを分類して管理しやすくするために使用されます。

「データベース・リンク」

このドロップダウン・リストを使用して、ファンクションを格納するデータベースを選択します。これは分散データベースを利用している場合に便利な機能です。

「戻り値のデータ型」

このドロップダウン・リストを使用して、ファンクションから戻されるデータのデータ型を入力します。たとえば、あるファンクションは文字列 (CHAR) または数値 (NUMBER) を戻します。

「説明」

このフィールドを使用して、ファンクションについての追加情報を入力します。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクトを検索します。

「Desktop Edition/Plus で使用可能」

このチェックボックスを使用して、Discoverer エンド・ユーザーがユーザー定義アイテムでこのファンクションを使用できるようにします。

「検証」

このボタンを使用して、入力した情報の妥当性と記述の正確さをテストします。Discoverer Administrator は、PL/SQL ファンクションを含むテスト用の SQL スクリプトを生成し、クエリーをテストします。このテストでファンクションの存在、所有者、戻り値のデータ型などが確認できます。

「新規作成」

このボタンを使用して、新しい PL/SQL ファンクションを登録します。デフォルトのファンクション名が生成され、フィールドはデフォルト値で初期化されます。ユーザーは必要に応じてデフォルト値を編集して、新しいファンクションを構成できます。

「削除」

このボタンを使用して、「関数」フィールドで現在選択している PL/SQL ファンクションを削除します。

「インポート」

このボタンを使用して、(データベース内に定義された) インポートする PL/SQL ファンクションを検索および選択する「[PL/SQL 関数のインポート](#)」ダイアログを表示します。PL/SQL ファンクションをインポート後は、Discoverer Administrator で使用できるようにファンクションを登録します。詳細は、「[ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを自動的に登録する方法](#)」を参照してください。

注意

- 現行のユーザーにビジネスエリアの作成 / 編集権限がない場合、このダイアログは読取り専用になります (詳細は、「[権限](#)」ダイアログ: 「[権限](#)」タブ) を参照)。

「権限」ダイアログ: 「権限」タブ

ユーザーまたはロールに権限を付与するには、このタブを使用します (Oracle Applications ユーザーではロールは職責で置き換えられています)。たとえば、Discoverer Plus および Discoverer Desktop のエンド・ユーザーに対して、クエリーの作成および編集、ドリルダウン およびドリルアウトは許可し、データベースへのワークブックの保存は禁止します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer およびセキュリティ」](#)

「表示対象」

このフィールドの隣にある「選択」ボタンを使用して、変更する権限を所有するユーザーまたはロールを検索および選択できる「ユーザー / ロールの選択」ダイアログを表示します。たとえば、jchan を選択して、「管理権限」および「Desktop と Plus 権限」フィールドに jchan の権限を表示します。

「管理権限」

現在選択されているユーザーまたはロールに、Discoverer Administrator を使用する権限の付与または取消しをするには、このチェックボックスを使用します。

「Desktop と Plus 権限」

現在選択されているユーザーまたはロールに、Discoverer Desktop および Discoverer Plus を使用する権限の付与または取消しをするには、このチェックボックスを使用します。

「管理権限」および「Desktop と Plus 権限」の下のフィールドにあるチェックボックスを使用して、現在選択されているユーザーまたはロールに次のようにして権限の付与または取消しをします。

- Discoverer Administrator 権限を付与するには、「管理権限」チェックボックスの下にあるグループ内の個々の権限を選択します。これらの権限は、Discoverer Administrator に適用されます。
- Discoverer Desktop および Discoverer Plus の権限を付与するには、「Desktop と Plus 権限」チェックボックスの下にあるグループ内の個々の権限を選択します。これらの権限は Discoverer Desktop および Discoverer Plus に適用されます。

< (説明フィールド) >

このフィールドは、現在選択されている権限についての簡単な説明を表示します。

「Oracle システム・プロファイルの選択」

このドロップダウン・リストを使用して、ユーザーに適用する Oracle システム・プロファイルを指定します。これにより、事前定義された権限のセットをユーザーおよびロールに適用できます。

- システム・プロファイルは Oracle 固有のものです。
- 「表示対象」フィールドでデータベース・ロールまたは Oracle Applications 職責を選択した場合、このフィールドはグレー表示になります。

注意

- 現行のユーザー ID が DBA_ROLES テーブルにアクセスできない場合、「ユーザー / ロールの選択」ダイアログにはロールと職責の一部しか表示されません。
- 使用可能な管理権限の種類を次に示します。

権限名	説明
管理権限	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、Discoverer Administrator にログインできます。Discoverer Administrator の各機能にユーザーがアクセスできるようにするには、この権限の下のリストで個々の機能（権限）を選択する必要があります。下にリストされている権限を付与するには、このチェックボックスが選択されている必要があります。
ビジネスエリアのフォーマット	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、アクセスした既存のビジネスエリアのフォーマット情報を編集できます。このフォーマット情報には、フォルダ、サマリー・フォルダ、結合およびアイテムなどがあります。この権限を付与されたユーザーまたはロールは、名前、説明、デフォルトのフォーマット・マスクおよび配置を指定できます。
ビジネスエリアの作成 / 編集	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、ビジネスエリア、フォルダ、サマリー・フォルダ、結合、ユーザー定義アイテム、条件、階層およびアイテム・クラスを作成および修正できます。
サマリーの作成 / 編集	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、Discoverer Administrator を使用してサマリー・フォルダを作成できます。また、データベースの resource 権限が必要です。
権限の設定	この権限を付与されたユーザーは、このダイアログを使用してユーザー権限をメンテナンスおよび修正できます。 注意: この権限をロールに付与することはできません。
スケジュール・ワークブックの管理	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、スケジュール・ワークブックのスケジュール監視およびメンテナンスができます。

- Discoverer Desktop および Discoverer Plus では、次の種類の権限を使用できます。

権限名	説明
Desktop と Plus 権限	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、Discoverer Desktop および Discoverer Plus にログインできます。ユーザーが Discoverer Desktop および Discoverer Plus の機能にアクセスできるようにするには、この権限の下のリストから個々の Desktop 機能（権限）を選択する必要があります。下のリストの権限を付与するには、このチェックボックスを選択する必要があります。
クエリーの作成 / 編集	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、新規ワークシート（クエリー）の作成および既存のワークシートの修正ができます。この権限がない場合、ユーザーは既存の（事前に定義された）ワークブックとワークシートを開いてクエリーを実行することのみが可能です。
統計の収集	この権限を付与されると、ユーザーがワークシートまたはワークブック（クエリー）を実行したときにパフォーマンス統計を保存できます。このチェックボックスの選択が解除されている場合は、クエリー予測の評価の精度が低くなる場合があります。詳細は、「クエリーのパフォーマンスの予測」を参照してください。
ドリル・アイテムの使用	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、ワークシートで詳細情報および関連情報にドリルできます。この権限を付与する以外にも、ユーザーがこの機能を使用できるようにするには、アイテム・クラス・ウィザードを使用してドリルを作成する必要があります。
ドリルアウトの使用	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、ワークシートでアイテムをドリルして別のアプリケーションを起動し、関連情報を参照できます。この権限を付与する以外にも、ユーザーがこの機能を使用できるようにするには、アイテム・クラス・ウィザードを使用してドリルを作成するか、またはコンテンツ・タイプが「<ファイル>」に設定されているアイテムがある必要があります。
ワークブックのアクセス管理	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、自分のワークブックを実行および閲覧できる権限を他のユーザーに付与できます。

権限名	説明
ワークブックのスケジュール設定	この権限を付与されたユーザーは、予定した時刻または定期的な間隔（毎日、毎週、毎月など）でワークブックを実行するようにスケジュールできます。 注意: この権限をロールに付与することはできません。
ワークブックをデータベースに保存	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、作成したワークブックをデータベースに保存できます。Discoverer Desktop のワークブックは、デフォルトでユーザーのディスク・ドライブに保存されます。
パスワードの変更	注意: このリリースでは、この権限は使用されていません。
リンクの作成	この権限を付与された Discoverer エンド・ユーザーは、独自のドリル・リンクを作成できます。ドリル・リンクは、特定のワークシートのセル値から別のワークシートまたは URL にアクセスする方法です。

「権限」ダイアログ: 「クエリー管理」タブ

指定されたユーザーまたはロールのクエリー構成を表示または編集するには、このタブを使用します (Oracle Applications ユーザーでは、ロールは職責に置き換えられています)。たとえば、ユーザー jchan が取り出せる行数を制限します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「情報に対するアクセス制御」](#)

「表示対象」

このフィールドの隣にある「選択」ボタンを使用して、変更するクエリー制限を所有するユーザーまたはロールを検索および選択できる「[ユーザー / ロールの選択](#)」ダイアログを表示します。たとえば、jchan を選択して、「クエリー管理」領域に jchan のクエリー制限の設定を表示します。

「クエリー管理」

「設定時間を超えると予測される問合せを警告」... 「秒」

クエリーに指定された時間よりも長い時間がかかる場合は、このチェックボックスを選択して Discoverer エンド・ユーザーに警告を表示します。

この権限は Oracle データベースを使用した場合にのみ使用可能です。

「設定時間でクエリーを中断」... 「分」

このチェックボックスを選択して、選択したユーザーのクエリー時間を制限します。

「取り出し可能件数の上限を設定」... 「行」

このチェックボックスを選択して、ユーザーのクエリーから戻される行数を制限します。ここで設定される限界は、最大値です。エンド・ユーザーはこれより小さい限界を設定できます。クエリーが、管理者またはエンド・ユーザーによって設定された最大レコード数に達した場合、クエリーは終了し、それまでに取り出されたデータはエンド・ユーザーに戻されます。たとえば、このチェックボックスを選択し、1000 という値を入力した場合、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートには、クエリーからの最初の 1000 行のみが表示されます。

Discoverer でクエリーのすべての行を取り出す場合は、このチェックボックスの選択を解除します。パフォーマンスの理由から、クエリーが何十万もの行を戻す可能性がある場合、このチェックボックスの選択の解除はお勧めしません。

「権限」ダイアログ: 「スケジュール・ワークブック」タブ

指定されたユーザーまたはロールのスケジュール・ワークブックの設定を指定するには、このタブを使用します (Oracle Applications ユーザーではロールは職責で置き換えられています)。たとえば、ユーザーがスケジュールできるワークブックの数の制限や、スケジュール・ワークブックの有効期限を定義します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックのスケジュール」](#)

[「Discoverer およびセキュリティ」](#)

[「スケジュール・ワークブック制限の設定方法」](#)

「スケジュール制限を表示」

このフィールドの隣にある「選択」ボタンを使用して、変更するスケジュール制限を所有するユーザーまたはロールを検索および選択できる「[ユーザー / ロールの選択](#)」ダイアログを表示します。たとえば、jchan を選択し、jchan のスケジュール・ワークブックの設定を表示します。

注意: スケジュール・ワークブック権限を持たないユーザーまたはロールを選択した場合、構成の詳細は使用できません。ユーザーまたはロール (職責) にこの権限を与える場合は、「[特定の作業を実行するユーザーまたはロール \(職責\) の指定方法](#)」を参照してください。

「すべてのワークブックの結果を格納するテーブルを所有するユーザーを選択します。」

このドロップダウン・リストを使用して、スケジュール・ワークブックのテーブルを所有するデータベース・ユーザーのユーザー名を選択します。

<ユーザーはワークブックをスケジュールする必要があるか?>

これらのラジオ・ボタンを使用して、ユーザーにワークブックをスケジュールするように求めるかどうかを指定します。

- 「ユーザーは常にワークブックをスケジュール」

Discoverer エンド・ユーザーが、必ずスケジュール・ワークブック機能を使用してクエリーを実行するようにする場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

- 「ユーザーはワークブックのスケジュールは行わない」

エンド・ユーザーがクエリーを実行する場合は、このラジオ・ボタンを使用して、スケジュール・ワークブック機能の使用を自由に選択できるようにします。

- 「設定時間を超えると予測される場合のみスケジュール (HH:MM:SS)」

クエリーの実行時間が「時間」フィールドで指定された値を超えると予測される場合は、このラジオ・ボタンを使用して、ユーザーがワークブックをスケジュールできるようにします。入力可能な最大値は 23:59:59 です。

「スケジュール・ワークブック数の上限を設定」

このチェックボックスを使用して、ユーザーがスケジュールできるワークブックの最大数を指定します。

注意: このオプションを使用すると、DBMS_JOB キューの他のジョブが実行できないほど多くのスケジュール・ワークブックをユーザーが発行しないようにできます。

「結果の失効」

このチェックボックスを使用して、スケジュール・ワークブックの結果の存続時間 (日数) を制限します。削除対象の結果は、ユーザーが EUL から切断されたときに削除されます。

「コミット単位サイズ」

このチェックボックスを使用して、Discoverer によるスケジュール・ワークブックの処理時に、結果テーブルに一度にコミットされる行数を指定します。たとえば、書き込まれる行数が 1000 行で「コミット単位サイズ」が 100 の場合は、10 回の書込みが行われます。大規模な結果セットでは、「コミット単位サイズ」をデフォルト以上に設定するとサーバー・パフォーマンスが向上します（ただし、「コミット単位サイズ」を 1001 以上に設定するとほとんど向上しません）。

「ワークブックをスケジュールする時間帯を制限 ¥」

このチェックボックスを使用して、ユーザーがワークブックをスケジュールできる時間帯を指定します。これにより、利用者の多い時間帯にワークブックがスケジュールされることを防止できます。

「権限」ダイアログ：「ユーザー/ロール」タブ

ユーザーおよびロールに対して特定の権限を構成するには、このタブを使用します。たとえば、次のような場合です。

- 管理権限を持つユーザーおよびロールの調査
- ロールのグループが「ワークブックをデータベースに保存」権限を保持しているかの確認
- 指定されたユーザーのドリルアウト権限の取消し

Oracle Applications ユーザーの場合はロールではなく職責を使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer およびセキュリティ」](#)

[「特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法」](#)

「権限」

このドロップダウン・リストを使用して、確認する権限を選択します。たとえば、「ワークブックをデータベースに保存」を選択して、「表示」フィールドにこの権限を持つユーザーおよびロールを表示します。

「ユーザー」

このチェックボックスを使用して、ユーザーの権限を確認します。

「ロール」

このチェックボックスを使用して、ロールの権限を確認します。このオプションは Oracle データベースを使用した場合にのみ使用可能です。

「表示」：（「ユーザー/ロール」リスト）

このフィールドには、すべてのユーザーとロールが表示されます。また、これらのユーザーとロールが、現在選択されている権限を持っているかどうかが表示されます。ユーザーまたはロールの隣のチェックボックスが選択されている場合に、ユーザーまたはロールに権限が適用されます。このリストは、「権限」フィールドで新しい権限が選択されたときに更新されます。

- 権限を付与するには、現在選択されている権限を必要とするユーザーまたはロールの隣のチェックボックスを選択します。
- 権限を取り消すには、現在選択されている権限を必要としないユーザーまたはロールの隣のチェックボックスを選択解除します。

「権限の説明」

このフィールドには、現在選択されている権限についての追加情報が表示されます。

「プロパティ」ダイアログ

次のヘルプ・トピックから選択してください。

- [「ビジネスエリア・プロパティ」ダイアログ](#)
- [「条件プロパティ」ダイアログ](#)
- [「フォルダ・プロパティ」ダイアログ](#)
- [「アイテム・プロパティ」ダイアログ](#)
- [「結合プロパティ」ダイアログ](#)
- [「サマリー・プロパティ」ダイアログ](#)

「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログ

現行ビジネスエリアの中のフォルダおよびアイテムと、リンク先のデータベースの中のソース・テーブルの間で検出された相違を確認するには、このダイアログを使用します。たとえば、ソース・データベースで新しい主キーが検出された場合、このダイアログを使用して、ビジネスエリアの中で修正し、リフレッシュを続行できます。また、ビジネスエリア内のその他のオブジェクトに対する変更の影響も評価できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)

[「ビジネスエリアとデータベースの同期化方法」](#)

「名前」

このフィールドには、相違しているアイテムの名前が表示されます。

「タイプ」

このフィールドには、発生した変更のタイプが表示されます。たとえば、ソース・テーブルに新しい外部キーが見つかった場合などです。

「操作」

このフィールドには、リフレッシュを実行することによるオブジェクトへの影響が表示されます。チェックボックスを使用して、操作をオンまたはオフに切り替えることができます。

「OK」

このボタンを使用して、選択したオプションを使用してリフレッシュを開始します。

「影響」

このボタンを使用して、「影響」ダイアログを表示します。「影響」ダイアログには、このビジネスエリアをリフレッシュしたときに影響を受ける、または削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ

現在選択されているサマリー・フォルダをリフレッシュするには、このダイアログを使用します。Oracle Enterprise Edition データベースでは、可能な場合は増分リフレッシュを指定することもできます（詳細は、『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照）。

サマリー・フォルダ・リフレッシュの詳細は、次の項目を参照してください。

[「ASM の機能」](#)

[「サマリー・データをリフレッシュする理由」](#)

[「サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理」](#)

「いつサマリーをリフレッシュしますか。」

■ 「今すぐサマリーをリフレッシュする」

このラジオ・ボタンを使用して、選択したサマリー・フォルダを即時にリフレッシュします。「OK」をクリックするとリフレッシュが開始されます。

このオプションは、マテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルが小さい場合、またはデータベース・サーバーのスケジューリング機能に依存せずにサマリー・フォルダを即時にリフレッシュする必要がある場合に便利です。Discoverer Administrator には、リフレッシュを監視するための進行状況バーが表示されます。

■ 「リフレッシュをスケジュールする」

このラジオ・ボタンを選択して、「日付」および「時刻」フィールドを有効にします。矢印ボタンを使用するか、フィールドに入力してリフレッシュする日時を選択します。

このオプションでは DBMS_JOB を使用してジョブをキューに送った後、ただちに Discoverer Administrator に戻るため（リフレッシュが完了するのを待たない）、ユーザーは作業を続行できます。このオプションは、マテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルが大きいため利用者が多い時間帯を避けて作業を実行する場合に便利です。

「増分リフレッシュを実行」

このチェックボックスを選択して、Oracle Enterprise Edition データベースでのみ使用可能な増分リフレッシュを実行します。

増分リフレッシュは、テーブルに挿入された新規データを段階的に追加するため、完全リフレッシュよりも高速です。

Oracle Standard Edition データベースでは、サマリー・フォルダのリフレッシュ時に全表検索が実行されます。

全表検索を使用してサマリーをリフレッシュするには、このチェックボックスを選択解除します。

注意

- リフレッシュが完了するまでにかかる時間は、データ量と現行のデータベース・エンジンの負荷によって異なります。
- 増分リフレッシュに必要な条件の詳細は、『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

「リフレッシュ・ウィザード」ダイアログ

現行 End User Layer 内のビジネスエリアをリフレッシュするには、このリフレッシュ・ウィザードを使用します。たとえば、データベースの修正を行うときは、リフレッシュ機能によりビジネスエリアがデータ・ディクショナリに同期され、データベースの修正がビジネスエリアに反映されます。

「リフレッシュ・ウィザード:ステップ1」

このダイアログを使用して、ビジネスエリアのリフレッシュ方法を指定します。

「ビジネスエリアのリフレッシュを行ないます。比較の元となる基準を指定してください。」

- 「オンライン・ディクショナリ」

このラジオ・ボタンを使用して、ビジネスエリアの基礎となっている Oracle データベース・テーブルからビジネスエリアをリフレッシュします。

- 「ゲートウェイ」

このラジオ・ボタンを使用して、ドロップダウン・リストで選択したソースからビジネスエリアをリフレッシュします。

「終了」

このボタンを使用して、オンライン・ディクショナリからリフレッシュ処理を開始します。

注意

- 「ゲートウェイ」チェックボックスを選択した場合は、「次へ」をクリックして、「リフレッシュ・ウィザード:ステップ2」を表示します。

「リフレッシュ・ウィザード:ステップ2」

このダイアログを使用して、リフレッシュに使用するゲートウェイ・アプリケーションを選択します。

「リフレッシュするアプリケーションを選択してください」

このドロップダウン・リストを使用して、現行 EUL のソースとして使用しているゲートウェイ・アプリケーションを選択します。

「終了」

このボタンを使用して、選択したゲートウェイ・アプリケーションからリフレッシュ処理を開始します。

「リポジトリ・ユーザー」ダイアログ

すべての Discoverer ユーザーが利用できる単一のデータベース・ユーザーまたはデータベース・ユーザーごとに異なるリポジトリを作成できます。単一のデータベース・ユーザーを使用する利点は、各エンド・ユーザーがスケジュール・ワークブックの処理に他の権限を必要としないことです。ただし、割当て領域が共有のため、単一のユーザーが領域をすべて使い果たしてしまう可能性があるという短所があります。複数のリポジトリ・ユーザーを使用すると、管理する事項が多くなります。

「職責」ダイアログ

Oracle Applications の EUL に接続するときの Oracle Applications の職責を選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」](#)

「職責」リスト

このドロップダウン・リストを使用して、データベースへの接続に使用する職責を選択します。

「OK」

このボタンを使用して、選択した職責に従ってデータベースに接続します。

「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「一般」タブ

このダイアログは次の目的で使用します。

- スケジュール・ワークブックの説明の編集
- Discoverer でスケジュール・ワークブックが処理される間隔および結果が自動的に削除される間隔の指定

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックのスケジュール」](#)

「スケジュール・ワークブックの名前」

この読取り専用フィールドには、スケジュール・ワークブックの名前が表示されます。

「説明」

このフィールドを使用して、スケジュール・ワークブックの追加情報を入力します。Discoverer エンド・ユーザーは、この情報を使用して、開くワークブックを判断します。

「スケジュール・ワークブックは、実行されるごとに結果を保存します。すべての結果を保存しますか。」

- 「はい、すべての結果を保存します。」

新しい結果セットが作成されたときに結果セットを削除しない場合は、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、月次レポートの場合、3月の結果セットが作成されたときに、1月および2月の結果セットを削除しないようにします。

- 「いいえ、最新の結果セットのみ保存します。」

新しい結果セットが作成されたときに古い結果セットを削除する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、月次レポートの場合、2月の結果セットが作成されたときに、1月の結果セットを削除します。

「結果の保存期間を入力してください。」

結果を自動削除

このスピン・ボックスを使用して、このワークブックの実行日と、ワークブックの結果を自動的に削除する間隔を日数で指定します。たとえば、週次レポートの結果セットを7日ごとに削除します。

「パラメータ」

このボタンを使用して、このスケジュール・ワークブックで使用されるパラメータを表示します。

「スケジュール・ワークブック」ダイアログ: 「パラメータ値」

ワークシートに必要なパラメータ値を表示するには、このダイアログを使用します。たとえば、2001年のデータの表示にパラメータ値が必要なときは、ワークブックで'2001'というパラメータを使用します。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

パラメータ・リスト

この領域にはフィールドが1つ以上含まれ、スケジュール・ワークシートのパラメータ値を確認できます。各フィールドには、名前も表示できます。

「ワークブックのスケジュール」ダイアログ: 「スケジュール」タブ

スケジュール・ワークブックを Discoverer で処理するには、このダイアログを使用します。たとえば、毎週日曜日の午前 1:00 に Discoverer でワークブックを処理できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックのスケジュール」](#)

「スケジュール・ワークブックに含まれるワークシート」

現在選択されているスケジュール・ワークブックに含まれているすべてのシートをリストします。

「ワークブックを実行する日時」

次のフィールドを使用して、スケジュール・ワークブックを Discoverer で処理する日時を指定します。

「時刻」

このスピン・ボックスを使用して、スケジュール・ワークブックを Discoverer で処理する時間を指定します。デフォルトでは現在の時刻が表示されます。

「日付」

このスピン・ボックスを使用して、スケジュール・ワークブックを Discoverer で処理する日付を指定します。デフォルトでは現在の日付が表示されます。

「どのくらいの間隔でクエリーを実行しますか。」

このフィールドを使用して、スケジュール・ワークブックを Discoverer で処理する頻度を指定します。

■ 「無期限」

スケジュール・ワークブックを一度のみ Discoverer で処理する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、マネージャから要求された不定期のレポートの場合です。

■ 「間隔」

スケジュール・ワークブックを定期的な間隔で Discoverer で処理する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、1日に1度または1月に1度です。

「セキュリティ」ダイアログ：「ビジネスエリア->ユーザー」タブ

単一のビジネスエリアに対する複数のユーザー・アクセス権の付与または取消しを行うには、このタブを使用します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのグループに、「Video Store Tutorial」ビジネスエリアへのアクセス権を付与して、サンプル・データを使用して Discoverer Plus を学習できるようにします。

複数のビジネスエリアに対する単一ユーザー・アクセス権を同時に付与するには、「[セキュリティ](#)」ダイアログ：「[ユーザー->ビジネスエリア](#)」タブを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「情報に対するアクセス制御」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用して、アクセス権の付与対象のビジネスエリアを選択します。このドロップダウン・リストには、現在開いているビジネスエリアが表示されます。アクセス権の付与対象のビジネスエリアが表示されていない場合には、Discoverer に再接続して、そのビジネスエリアを開いてください。

「選択可能なユーザー / ロール」

このフィールドを使用して、選択したビジネスエリアへのアクセス権を付与するユーザーおよびロールを選択します。アクセス権を付与するには、ユーザー名およびロールを「[選択可能なユーザー / ロール](#)」フィールドから「[選択済ユーザー / ロール](#)」フィールドへ移動します。

「選択済ユーザー / ロール」

このフィールドを使用して、選択したビジネスエリアへのアクセス権をどのユーザーが所有しているか確認します。アクセス権を取り消すには、ユーザー名およびロールを「[選択済ユーザー / ロール](#)」フィールドから「[選択可能なユーザー / ロール](#)」フィールドへ移動します。

「表示」

「ユーザー」

このチェックボックスを使用して、「[選択可能なユーザー / ロール](#)」フィールドに Discoverer ユーザーを表示します。

「ロール」

このチェックボックスを使用して、「[選択可能なユーザー / ロール](#)」フィールドに Discoverer ロールを表示します。

「管理を許可」

このチェックボックスを使用して、「[選択済ユーザー / ロール](#)」フィールドで選択されているユーザーにアクセス権限と管理権限の両方を付与します。ユーザーの管理権限に従って、ユーザーは付与されたビジネスエリアで操作を実行できます。

注意

- ビジネスエリア内のフォルダを表示する前に、Discoverer では、参照されるフォルダ内のテーブルに対するデータベースのアクセス権をユーザーが所持しているかどうかを確認します。必要なアクセス権がない場合、Discoverer はフォルダを表示しません。このチェックボックスは、ObjectsAlwaysAccessible レジストリ設定の値を変更して上書きできます（詳細は、「[Discoverer のレジストリ設定](#)」の ObjectsAlwaysAccessible を参照）。
- Oracle Applications ユーザーとしてログインした場合、ロールという用語は職責という用語で置き換えられます。

- [Ctrl] キーを押しながら別のユーザーまたはロールをクリックすると、複数のユーザーまたはロールを選択できます。

「セキュリティ」ダイアログ：「ユーザー->ビジネスエリア」タブ

複数のビジネスエリアに対するユーザーのアクセス権の付与または取消しを行うには、このタブを使用します。たとえば、新規の Discoverer エンド・ユーザーに、End User Layer 内の多数のビジネスエリアへのアクセス権を付与します。

単一ビジネスエリアに対して複数のユーザーにアクセス権を付与するには、「セキュリティ」ダイアログ：「ビジネスエリア->ユーザー」タブを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「情報に対するアクセス制御」](#)

「ユーザー / ロール」

このフィールドの隣にある「選択」ボタンを使用して、アクセス権を必要とするユーザーまたはロールを検索および選択できる「ユーザー / ロールの選択」ダイアログを表示します。

「選択可能なビジネスエリア」

このフィールドを使用して、選択されたユーザーまたはロールへのアクセス権を付与するビジネスエリアを選択します。アクセス権を付与するには、ビジネスエリアを「選択可能なビジネスエリア」フィールドから「選択済ビジネスエリア」フィールドへ移動します。

「選択済ビジネスエリア」

このフィールドを使用して、選択されたユーザーまたはロールがアクセス権を所持しているビジネスエリアを確認します。アクセス権を取り消すには、ビジネスエリアを「選択済ビジネスエリア」フィールドから「選択可能なビジネスエリア」フィールドへ移動します。

「管理を許可する」

このチェックボックスを使用して、選択されたビジネスエリアに対するアクセス権限と管理権限の両方を、選択されたユーザーに付与します。

注意

- ビジネスエリア内のフォルダを表示する前に、Discoverer では、参照されるフォルダ内のテーブルに対するデータベースのアクセス権をユーザーが所持しているかどうかを確認します。必要なアクセス権がない場合、Discoverer はフォルダを表示しません。このチェックボックスは、ObjectsAlwaysAccessible レジストリ設定の値を変更して上書きできます（詳細は、「Discoverer のレジストリ設定」の ObjectsAlwaysAccessible を参照）。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続した場合、ロールという用語は職責という用語に置き換えられます。
- [Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。

「ユーザー / ロールの選択」 ダイアログ

このダイアログを使用して、権限、クエリー制限およびスケジュール制限を表示するデータベース・ユーザーまたはロール（あるいは Oracle Applications 職責）を検索および選択します。たとえば、検索を絞り込むために、C で始まるデータベース・ユーザーのみを表示する場合があります。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「ユーザーの選択」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer 作業権限」](#)

[「権限」ダイアログ: 「権限」タブ](#)

[「権限」ダイアログ: 「クエリー管理」タブ](#)

[「権限」ダイアログ: 「スケジュール・ワークブック」タブ](#)

「検索範囲」

このドロップダウン・リストを使用して、ユーザーまたはロール（あるいは Oracle Applications 職責）を検索するかどうかを指定します。

「検索条件」

このドロップダウン・リストを使用して、「**検索文字列**」フィールドに入力する値に対する照合方法を指定します。たとえば、T で始まるすべてのデータベース・ユーザー名を検索するには、「次で始まる」を選択し、「**検索文字列**」フィールドに「T」と入力します。

「検索文字列」

このフィールドを使用して、検索するテキストを入力します。たとえば、T で始まるすべてのデータベース・ユーザー名を検索するには、「T」と入力し、「**検索条件**」ドロップダウン・リストから「次で始まる」を選択します。ワイルドカード % および _ も使用できます。たとえば、「N%」と入力すると、Discoverer Administrator では、N で始まるすべてのユーザー名が検索されます。また、「N_T」と入力すると、N で始まり、3 番目の文字が T のユーザー名が検索されます。

「大文字 / 小文字を区別する」

このチェックボックスを使用して、検索時に大文字と小文字を厳密に照合するかどうかを指定します（たとえば、このチェックボックスを選択すると、検索語が 'New York' の場合、'New York' は検索されますが、'NEW YORK'、'new york' または 'new York' などは検索されません）。

「検索」

このボタンを使用して、指定した検索基準に従って検索を開始し、一致する値を下の「結果」リストに表示します。

表示される最大行数は、レジストリ設定 MaxNumListRows で決まります（詳細は、「[Discoverer Administrator](#) および [Discoverer Desktop](#) のレジストリ設定の詳細」を参照）。

「**検索文字列**」フィールドが空の状態ですべてのユーザー / ロールが表示されます。

「結果」

このリストには、検索の結果が表示されます。このリストを使用して、データベース・ユーザー（またはロール）を選択します。リスト内の名前を選択し、「OK」をクリックします。

注意

- Discoverer では、検索で戻される行数が 10,000 を超えた場合は、エラー・メッセージが表示されます（この制限の変更方法の詳細は、「[Discoverer Administrator](#) および [Discoverer Desktop](#) のレジストリ設定の詳細」を参照）。

「サマリー・プロパティ」ダイアログ

このサマリー・フォルダのプロパティを表示および構成するには、このダイアログを使用します。たとえば、サマリー・フォルダの状態の確認、またはサマリー・フォルダの次回リフレッシュ日付の変更をします。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「サマリー・フォルダ」](#)

[「Discoverer サマリー・テーブル」](#)

[「マテリアライズド・ビュー」](#)

[「サマリー・データをリフレッシュする理由」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダの名前を入力します。

「説明」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダの説明を入力します。

「タイプ」

この読取り専用のフィールドには、サマリー・フォルダが管理サマリーであるか、外部サマリーであるかが示されます。

■ 「管理サマリー・フォルダ」

管理サマリー・フォルダでは、指定した間隔でデータをリフレッシュできます。管理サマリー・フォルダには、多数のサマリー組合せを含めることができます。Discoverer では、必要なマテリアライズド・ビューを作成できます。また、サマリー・フォルダ名、サマリー・アイテム名および作成したサマリー・フォルダの記憶域プロパティを指定できます。その他、サマリー・テーブルを事前に作成し、Discoverer にテーブルの所有者とテーブル名を通知することもできます。

■ 「外部サマリー」

外部サマリー・フォルダには、Discoverer 以外のアプリケーションで作成したテーブルが含まれています。列名とアイテム名は、Discoverer で作成したテーブルとは異なる場合があります。このオプションを使用して、外部テーブルを登録し、テーブルの列を End User Layer 中のアイテムにマップします。Discoverer に、外部サマリー・フォルダの管理を引き継ぐように指定すると、マテリアライズド・ビューの作成およびサマリー・フォルダのリフレッシュができます。

「クエリーで使用可能」

このフィールドを使用して、このサマリー・フォルダを Discoverer Desktop または Discoverer Plus でのワークシートの実行に使用できるかどうかを指定します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが、サマリー・フォルダのアイテムを表示するワークシートを開くと、Discoverer Desktop または Discoverer Plus にはこのサマリー・フォルダを使用したワークシートの結果が表示されます。

「状態」

この読取り専用フィールドには、サマリー・フォルダのライフ・サイクル内の現在地点が表示されます。クエリーに使用できるのは、状態が「完了」のサマリー・フォルダのみです。

次のリストは、「状態」フィールドに表示される値の意味を説明しています。

- 「保留」

サマリーをリフレッシュするジョブは、DBMS_JOB キューにスケジュール済ですが、実行は開始されていません。
- 「作成中」

サマリーをリフレッシュするジョブが開始され、マテリアライズド・ビューに行が挿入されます。
- 「使用不可」

Discoverer で新規のサマリー・フォルダが作成されていますが、初回のリフレッシュが行われていません (Oracle Enterprise Edition データベース)。
- 「古い」

マテリアライズド・ビューに関して、サマリー・フォルダはディテール・データと一貫性がありません (Oracle Enterprise Edition データベース)。
- 「完了」

サマリー・フォルダは完成し、使用する準備が整いました。
- 「失敗」

サマリーをリフレッシュするジョブに失敗し、データベース・エラーが表示されます。
- 「更新必須」

サマリー・フォルダを使用する前に、エンド・ユーザーによるリフレッシュが必要です。これは通常、Discoverer マネージャがフォルダ、アイテムまたは結合の定義を、サマリー・フォルダの再作成を必要とする方法で変更した場合のみ発生します。リフレッシュが必要なときは、次の理由が表示されます。

 - データベースのバージョンと互換性がありません

マテリアライズド・ビューの EUL 定義に、データベースのバージョンとの互換性がありません。この問題は、異なるバージョンのデータベース間で EUL のエクスポート / インポートが発生した場合に起こる可能性があります。たとえば、Oracle Standard Edition データベースから Oracle Enterprise Edition データベースへの場合です。
 - EUL が変更されました

依存性 EUL アイテムの定義が変更されています。たとえば、サマリー・フォルダ内のアイテムの計算式です。
 - サーバーが変更されました

データベースでのマテリアライズド・ビューの定義に、EUL の定義との一貫性がありません (Oracle Enterprise Edition データベース)。
- 「外部」

このサマリー・フォルダは外部サマリー・フォルダであり、Discoverer 以外のアプリケーションで作成されたサマリー・テーブルを使用します。

「最後のリフレッシュ」

この読取り専用のフィールドには、サマリー・フォルダがデータベースから最新のデータを受け取った最後の日付が表示されます。このフィールドは管理サマリー・フォルダの場合にのみ使用されます。

「次のリフレッシュ」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダがデータベースから最新のテーブルを受け取る次の日付を変更します。このフィールドは管理サマリー・フォルダの場合にのみ使用されます。

「リフレッシュ間隔」

このフィールドを使用して、このサマリー・フォルダがデータベースから最新データを受け取る頻度を変更します。このフィールドは管理サマリー・フォルダの場合にのみ使用されます。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意の識別子を変更します。Discoverer では、同じビジネス・オブジェクトを参照する、異なる EUL 内のオブジェクトを識別子を使用して検索します。

「毎回編集後に変更を自動保存」

このチェックボックスを使用して、このダイアログのフィールドが更新されるたびに変更を保存します。

サマリー・ウィザード (ASM) : ダイアログのリスト

サマリー・ウィザードでは、自動サマリー管理機能を使用して、最小限の操作で適切なサマリー・フォルダを作成および保守できます。

ASM サマリー・ウィザードの各ダイアログの詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・ウィザード: ステップ 1」ダイアログ](#)

[「サマリー・ウィザード \(ASM\) : ステップ 2 「フォルダの分析」ダイアログ](#)

[「サマリー・ウィザード \(ASM\) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: ダイアログのタブのリスト](#)

[「サマリー・ウィザード \(ASM\) : ステップ 3 \(領域の割当て\) ダイアログ](#)

[「サマリー・ウィザード \(ASM\) : 「分析されませんでした。」ダイアログ](#)

[「サマリー・ウィザード \(ASM\) : 「推奨サマリー」ダイアログ](#)

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: ダイアログのタブのリスト

ASM では、「詳細設定」内の事前設定されたデフォルト値により、ユーザーの必要性にあわせた最適なサマリーのセットを作成およびメンテナンスできます。必要であれば、デフォルト値をさらに調整して、ASM でサマリーを作成およびメンテナンスする方法を変更できます。

「詳細設定」は、データベース内のどのオブジェクトを ASM 処理に含めるかを定義し、ASM から作成される結果に影響します。

「詳細設定」(「デフォルト設定の変更」ダイアログ) には、次のタブが表示されます。

「サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「分析」タブ」

「サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「フォルダ」タブ」

「サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「クエリー・ユーザー」タブ」

「サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「クエリーの使用方法」タブ」

「サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「削除」タブ」

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「フォルダ」タブ

ASMによって分析するフォルダを指定するには、このタブを使用します。デフォルトではすべてのフォルダが含まれています。たとえば、大規模なデータ・ウェアハウスを使用する場合に、分析時間の短縮に最も重要なフォルダ（たとえばファクト・テーブル）のみの分析に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択可能」

このリストには、ASM分析に含めないフォルダが表示されます。「**選択可能**」リストから「**選択済**」リストにフォルダを移動して、分析するフォルダを選択します。

「選択済」

このリストには、ASM分析に含めるフォルダが表示されます。「**選択済**」リストから「**選択可能**」リストにフォルダを移動して、ASM分析の対象からフォルダを除外します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」 ダイアログ : 「分析」 タブ

分析するフォルダおよび最適化レベルを指定するには、このタブを使用します。たとえば、まだ分析されていないフォルダのみでなく、全フォルダに対して完全分析を実行する場合に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択されたフォルダをどのように分析しますか。」

■ 「分析されていないフォルダのみ分析」

以前にいくつかのフォルダを部分的に分析してある場合に残りのフォルダを分析するには、このラジオ・ボタンを使用します。xx 日後フィールドで指定された周期よりも長くサマリー・データが保持されている場合は、このデータも再分析されます。

■ 「すべてのフォルダを分析」

このラジオ・ボタンを使用して、EUL 内のすべてのフォルダを分析します。

「フォルダの分析結果をいつ無効にしますか。」

xx 日後

このフィールドを使用して、分析済のサマリー・データの使用期間を指定します。この周期の経過後、ASM を実行するとフォルダは再分析されます。デフォルト値は 30 日です。

「分析結果をどのように最適化しますか」

このスライド・バーを使用して、分析を高速化したり、フォルダの分析範囲を拡張します。

「高速度」

このレベルでは、フォルダの約 10% が分析されます。このレベルでは、あまり長い時間をかけずにサマリーの基本セットが作成されます。たとえば、大規模なデータ・ウェアハウスの分析時間の短縮に使用します。

「標準」

このレベルでは、速度と範囲のバランスを同程度に保ちます。

「高精度」

このレベルでは、100% のフォルダが分析されます (デフォルト設定)。この設定値を使用すると、ASM により幅広い範囲のサマリーを作成できます。たとえば、比較的小規模なデータ・ウェアハウスの場合、または分析時間が問題にならない場合に使用します。

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「削除」タブ

古くなったサマリー・フォルダをページ (削除) する方法を構成するには、このタブを使用します。たとえば、データベースの使用可能な領域を増やすために使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「次の場合、特定のサマリー・フォルダを削除」

前回のクエリーからの期間 _ 日以上

Discoverer エンド・ユーザーによって最後に使用された日付が指定された日数よりも前の場合は、このフィールドを使用してサマリー・フォルダを削除します。たとえば、7 日間以上使用されていないサマリー・フォルダを削除する場合に使用します。

作成されてからの期間 _ 日以上

指定された時間よりも前に作成されていた場合は、このフィールドを使用してサマリー・フォルダを削除します。たとえば、2 週間以上前に作成されたサマリー・フォルダを削除する場合に使用します。

平均使用回数が _ 回以下

サマリー・フォルダのページを厳密に制御する場合は、このフィールドを使用します。たとえば、最後の 2 週間で、使用された回数が 1 週間に 10 回未満であったサマリー・フォルダを削除する場合に使用します。

「常に次のサマリーを保持」

このチェックボックスを使用して、特定のサマリー・フォルダをページ対象から除外します。たとえば、常に使用する必要がある重要なサマリー・フォルダをメンテナンスする場合に使用します。

「保持するサマリー」

このフィールドには、ページから除外されるフォルダが表示されます。「保持するサマリー」フィールドから「選択可能なサマリー」フィールドにフォルダを移動して、フォルダをページ対象にします。

「選択可能なサマリー」

このフィールドには、ページ対象のすべてのフォルダが表示されます。「選択可能なサマリー」フィールドから「保持するサマリー」フィールドにフォルダを移動して、ページ対象から除外するフォルダを選択します。

注意

- 外部サマリー・フォルダを「保持するサマリー」フィールドから移動することはできません。
- 外部サマリー・フォルダを「保持するサマリー」フィールドから「選択可能なサマリー」フィールドに移動しようとする、警告メッセージが表示されます。このサマリー・フォルダは「保持するサマリー」フィールドに残ったままになります。Discoverer では、外部サマリー・データがないため、削除されません。また、外部サマリー・テーブルに関連付けられたメタデータを削除しても多くの領域を得られないという理由からそのようなデータは削除されません。

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」 ダイアログ : 「クエリーの使用方法」 タブ

推奨サマリーに使用するクエリーを選択するには、このタブを使用します。たとえば、Discoverer Plus ユーザーの作業中に、特定の時間に実行されたクエリーのみを含める場合に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「含める」

このドロップダウン・リストを使用して、ASM の考慮対象に含めるクエリーを定義します。

「すべてのクエリー」

このオプションを使用して、以前に実行したすべてのクエリーに基づく推奨サマリーを設定します。

「前回の実行以降に行なったクエリー」

このオプションを使用して、前回 ASM を実行した後に行なったクエリーに基づく推奨サマリーを設定します。

「特定のクエリー」

このオプションを使用して、次に指定するような特定のタイミングで実行されたクエリーを考慮します。

- 過去 xx 日間に実行されたもの
- 分 / 日 / 週 / 月 / 年当り x 回以上実行されたもの
- クエリーの実行に x 秒以上かかったもの

ユーザーのクエリーの性質を最も的確に反映する位置にスライドを移動します。

このスライド・バーを使用して、分析時に事前定義されたクエリー（パフォーマンス）が優先されるか、またはアドホック（非定型）なクエリー（対象範囲）が優先されるかを決定します。

「事前定義済」

この設定を使用して、ASM が保持しているサマリーを過去のクエリーを反映して最適化します。つまり、以前のクエリーとほとんど変わらないクエリーの場合には、サマリーのパフォーマンスが大幅に向上します。

たとえば、以前に実行されたクエリーと 1 対 1 で対応する、5 つの完全一致のサマリーが ASM から推奨されます（ASM が有用であると判断したサマリー）。

「混合」

事前定義のクエリーとアドホックのクエリーの中間（デフォルト）です。

「アドホック」

この設定を使用して、サマリーの対象範囲を拡大します。この設定によって、これまで実行されたことはないが以前のシステム使用と緊密に関連するクエリーのパフォーマンスを向上できる可能性があります。しかし、この方法には、以前に実行された個々のクエリーのパフォーマンス向上をさほど見込めないという短所があります。

たとえば、ASM は 5 つの完全一致のサマリーを組み合わせて、より少数になっても汎用性の高いサマリーを作成します。これにより、以前に実行された 5 つのクエリーだけでなく、その他の多くの可能性のあるクエリーでパフォーマンスを向上させることができます (つまり、全体的な適用範囲でパフォーマンスの向上を見込めます)。

サマリー・ウィザード (ASM) : 「デフォルト設定の変更」 ダイアログ : 「クエリー・ユーザー」 タブ

ASM の処理において選択されたユーザーからのクエリー統計 (QPP) を使用するには、このダイアログを使用します。たとえば、ASM を、Discoverer Plus の使用時に最大限のパフォーマンスを必要とするユーザーのサブセットに基づくものにします。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択可能」

このリストには、ASM の処理に含めないユーザーが表示されます。「**選択可能**」フィールドから「**選択済**」フィールドにユーザーを移動して、分析するユーザーを選択します。

「選択済」

このリストには、ASM の処理に含めるユーザーが表示されます。「**選択済**」フィールドから「**選択可能**」フィールドにユーザーを移動して、ASM の処理からユーザーを除外します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら別のユーザーをクリックすると、複数のユーザーを選択できます。

サマリー・ウィザード (ASM) : 「分析されませんでした。」 ダイアログ

分析不能なフォルダの処理方法を指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、特定のデータベースに対する分析権限を持っていない場合に使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「分析されませんでした。」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

_ フォルダ (全 _ フォルダ中) が分析できませんでした。それらのフォルダーをサマリーの自動作成から除外してよろしいですか？

「はい」

このボタンを使用して、分析不能なフォルダを除外します。

「いいえ」

分析不能なフォルダを含めるには、このボタンを使用します。

「ヘルプ」

分析不能なフォルダについて詳しい情報を入手するには、このボタンを使用します。

注意

次に示す問題を理解し、解決するためのヘルプとしてこれらの注意事項を参照してください。

- 使用されているオブジェクトまたはテーブルを分析する権限を持っていない場合

テーブルを分析するには、次のいずれかの条件が必要です。

- そのテーブルの所有者であること
- データベース全体に対して分析する権限を持っていること (たとえば、すべてを分析する権限を付与された場合)

フォルダを構成するテーブルのうち、1 つでも前述の条件を満たしていないテーブルがある場合、そのフォルダは分析されません。つまり、フォルダの中にいくつか分析不能なテーブルがある場合、そのフォルダ全体が分析不能とみなされます。

- フォルダが無効な場合

フォルダが無効である原因によって、対処法は変わってきます。

無効なフォルダに関するエラー・メッセージを表示するには、「表示」メニューから「フォルダの妥当性チェック」を選択します。

- DB-LINK を使用して分析する場合

フォルダが参照しているテーブルが、DB-LINK を使用してアクセスするデータベースに格納されている場合は、そのフォルダは分析できません。この操作は Oracle データベースではサポートされていません。

- フォルダを構成しているすべてのテーブルを把握できない、またはアクセスできない場合

Discoverer のフォルダには、元となるデータベースのテーブルまたはビュー (あるいはその両方) を複数含むことができます。元となるテーブルのすべてを把握またはアクセスすることが不可能な場合があります。たとえば、次のような場合です。

- あるビューが別のビューに基づくもので、ASM ユーザーはトップ・レベルのビューにアクセス可能でもその下の参照対象ビューにはアクセス不能な場合

この場合、ASM ユーザーは、そのビューの構成に実際に使用されているデータベース・テーブルを確認できません。

- フォルダを完全にテーブルに分解できない場合

これが原因となるのは、サーバーの動的なテーブル（たとえば V\$ テーブルや、多くの DBA_ テーブル）を使用している場合のみです。これらのビューおよびテーブルのなかには、物理的なテーブルに分解できないものがあります。メモリーに格納されるものがあるためですが、その場合は分析できません。

たとえば、次のような場合です。

- v\$_lock

この種のテーブルまたはビューにクエリーを実行することはできますが、データはすぐに更新されてしまうので、サマリーを作成しても実際には意味がありません。

サマリー・ウィザード (ASM) : 「推奨サマリー」 ダイアログ

Discoverer で使用される予定のサマリーを確認し、必要な場合に選択済のリストを変更するには、このダイアログを使用します。現行の ASM ポリシーから外れたサマリーには、削除用のマークが付けられる場合があります。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「推奨サマリー」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「含める」

このチェックボックスを使用して、推奨されるフォルダを ASM のサマリー作成および削除の処理に含めます。

「操作」

「含める」チェックボックスが選択されている場合、このフィールドには、ASM の処理の一部として実行されるアクションが表示されます。

「名前」

このフィールドには Discoverer のフォルダ名が表示されます。

「使用済領域」

このフィールドには、現在サマリー・フォルダ用に使用されている領域の量が表示されます。

「必要な領域の合計」

このフィールドには、推奨されたサマリー・フォルダに必要な領域の合計量が表示されます。

注意

- 「推奨サマリー」ダイアログを初めて表示した場合は、割り当てられた領域に対して Discoverer から推奨されるサマリー・フォルダが選択されます。つまり、メイン・ウィザードで「終了」ボタンをクリックすると、選択されたサマリー・フォルダは、「操作」フィールドに「作成」が表示されているか、「削除」が表示されているかにより、作成または削除されることとなります。推奨サマリーのリストからチェックボックスを選択または選択解除して、どのサマリー・フォルダを作成または削除するかを変更できます。
- 右側のペインには、現在選択されているサマリー・フォルダ・コンポーネントが表示されます。
- 選択されたサマリーに必要な領域の合計がその下に表示されます。
- 次の方法で、推奨サマリーのリストから「必要な領域の合計」の数値が導出されます。
必要な領域の量が合計され、「必要な領域の合計」フィールドに表示されます。サマリー・フォルダが削除される場合、削除されるサマリー・フォルダが使用していた領域は、リスト上の他のサマリー・フォルダのうちの 1 つに使用できます。このため、「必要な領域の合計」の数値では、削除されるサマリー・フォルダの合計 KB 数が減少します。
- Discoverer では、リーチスルー可能として定義されているベース・フォルダのアイテムに基づく推奨サマリー・フォルダは生成されません（詳細は、「[複合フォルダのリーチスルー](#)」を参照）。

サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ 2 「フォルダの分析」 ダイアログ

データベース構造を自動的に分析し、推奨サマリーを使用するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー・ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「進行状況バー」

このバーを使用して、データベース分析の進行状況を監視します。分析の進行中は、バーの上部のキューブが回転します。

「開始」

このボタンを使用して、フォルダ分析を開始します。

このプロセスを初めて実行した場合は、デフォルト値に基づいて分析が行われます。その後のフォルダ分析では、「詳細設定」でこれらの値に対して行われたすべての変更が適用されます。

「続行」

このボタンを使用して、「停止」ボタンを使用してプロセスを停止した後に、フォルダ分析を再開します。

「停止」

このボタンを使用して、フォルダ分析を一時停止します。

- フォルダ分析を再開するには、「続行」ボタンを使用します。
- フォルダ分析を停止するには、「取消」ボタンを使用します。

「ポリシー内のフォルダ合計」

このフィールドには、ASM ポリシーに含まれるフォルダの数が表示されます。

「分析されたフォルダ」

このフィールドには、ASM ポリシー内の分析済フォルダの数が表示されます。

「詳細設定」

このボタンを使用して、[サマリー・ウィザード \(ASM\) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「分析」タブ](#)を表示します。このタブでは、フォルダ分析の基礎として使用するデフォルト設定の範囲を編集できます (ASM ポリシーとも呼ばれます)。

注意

- フォルダ分析を一時停止してから ASM ポリシーを変更した場合は、プロセスを再開すると新しい ASM ポリシーが使用されます。

サマリー・ウィザード (ASM) : ステップ 3 (領域の割当て) ダイアログ

ASM で使用可能な表領域の量に対して必要な ASM パフォーマンスを指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、最小限の表領域を使用して ASM パフォーマンスを最大化します。また、表領域の量の増加により達成されるパフォーマンスの向上率を分析できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

領域 (KB) に対するパフォーマンスのグラフ

このグラフを使用して、指定した量の表領域を割り当てることにより達成されるパフォーマンスの向上率を評価します。表領域の量を変更して、パフォーマンスへの影響を因数値で表示できます。

- 点線は、利用可能な表領域の量を示しています。
- 赤線は、選択された表領域の量を示しています。
- 描画線は、選択した表領域の量により達成されるパフォーマンスの向上率を示しています。
- 選択された領域の設定を変更するには、次のいずれかの方法を使用します。
 - グラフ部分をクリックし、赤線を左または右にドラッグする
 - 領域 (KB) 軸の上部の三角形を左または右にドラッグする
 - 赤線の左または右のグラフ部分をクリックする
 - 「サマリー作成に使用する容量」フィールドに、使用する表領域の量 (KB 単位) を入力する

「サマリーの使用する表領域」

このドロップダウン・リストを使用して、サマリー・テーブルの格納に使用する表領域を指定します。

「サマリー作成に使用する容量」

利用可能な表領域の量がわかり、その値のパフォーマンスを評価する場合は、このフィールドを使用します。

「推定パフォーマンス向上率」

この数字は、ASM で推奨されたサマリーを作成した場合に、クエリーが何倍速くなるかを表す因数値です。

「推奨サマリー」

このボタンを使用して、[サマリー・ウィザード \(ASM\) : 「推奨サマリー」ダイアログ](#)を表示します。このダイアログでは、現在割り当てられている領域を使用して最適のパフォーマンスを得るには、どのサマリーを作成または削除すればよいかを指定します。

「詳細設定」

このボタンを使用して、ASM ポリシーを定義する [サマリー・ウィザード \(ASM\) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: ダイアログのタブのリスト](#)を表示します。

注意

- 表領域の選択には、サマリー・データ専用の個別の表領域にサマリーを配置することをお勧めします。そのような表領域がない場合でも、SYSTEM または TEMP 表領域を使用しないことをお勧めします。

「サマリー・ウィザード:ステップ1」ダイアログ

Discoverer サマリー・フォルダの作成方法を指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、サマリーを自動的に作成するように指定します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

「これらのサマリーをどのように作成しますか。」

■ 「Discoverer の推奨するサマリーを作成」

このラジオ・ボタンを使用して、Discoverer でサマリー・フォルダを自動的に作成します。これにより、[サマリー・ウィザード \(ASM\) :ステップ2「フォルダの分析」ダイアログ](#)が表示されます。ここで、テーブルを自動的に分析し、作成するサマリー・フォルダを推奨できます。

注意: このオプションを使用できない場合は、「HELP」→「データベース情報」を選択して「[データベース情報](#)」ダイアログを表示します。このダイアログに、ASM を利用できない場合がある理由が表示されます。このオプションを使用できない場合がある理由の詳細は、「[ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件](#)」を参照してください。

■ 「サマリーを個別に指定」

このラジオ・ボタンを使用して、サマリー・フォルダを手動で作成します。これにより、「[サマリー・ウィザード:ステップ2」ダイアログ](#)が表示されます。

「サマリー・ウィザード: ステップ2」ダイアログ

サマリー・フォルダの作成方法を選択するには、このダイアログを使用します。たとえば、Discoverer Desktop または Discoverer Plus ユーザーが収集したクエリー統計を使用して、作成するサマリーを決定します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「どの方法でサマリーを作成しますか。」

■ 「End User Layer 上のアイテムを指定」

このラジオ・ボタンを使用して、End User Layer 上の既存のフォルダのセットからサマリー・フォルダを作成します（詳細は、[「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」](#)を参照）。

たとえば、次の場合にこのオプションを選択します。

- 「統計の収集」権限をオフにした場合（詳細は、[「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」](#)を参照）
- サマリー・フォルダを形成する EUL アイテムの組合せを手動で選択する場合

■ 「クエリー統計を使用」

このラジオ・ボタンを使用して、以前に実行された Discoverer のクエリーに基づいてサマリー・フォルダを作成します。この強力な機能により、ユーザーは自分でアイテムを選択する必要がありません。以前のクエリーを基にしてサマリーを作成した後は、アイテムおよび組合せを追加することで、サマリーをユーザーのニーズにあわせて変更できます（詳細は、[「ユーザーのクエリーに基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)を参照）。

ユーザーの「クエリー統計の収集」権限がオンになっている場合に Discoverer Desktop および Discoverer Plus でクエリーを実行すると、クエリー統計が自動的に収集されます（詳細は、[「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」](#)を参照）。

特定のクエリーに基づいて1つ以上のサマリー・フォルダを作成する場合に、Discoverer によりその他のサマリー・フォルダが作成される必要が必ずしもなければ、このオプションを選択します。

■ 「外部サマリー・テーブルの登録」

このラジオ・ボタンを使用して、Discoverer の外部のアプリケーションで作成されたテーブルを含む外部サマリー・フォルダを使用します。列名とアイテム名は、Discoverer で作成したテーブルとは異なる場合があります。このオプションを使用して外部テーブルを登録し、テーブルの列を End User Layer 中のアイテムにマップします。Discoverer にサマリーの管理を引き継ぐよう指定すると、テーブルを移入でき、そのデータをリフレッシュしてサマリー・テーブルの管理を継続できます（詳細は、[「外部サマリー・テーブルに基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)を参照）。

「サマリー・ウィザード:ステップ3」ダイアログ (クエリー統計の使用)

最適なサマリーの見積りのためにクエリー統計を収集する方法を指定するには、このダイアログを使用します。たとえば、指定された CPU タイムをクエリーが超過した場合にクエリー統計を使用するように指定します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー・ウィザード:ステップ3」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「クエリー統計について、検索条件を指定した後、「検索」をクリックします。」

統計を検索して、「サマリーを作成するクエリーを選択します。」フィールドに移入するには、これらの条件を使用します。

「次の期間内のクエリー統計を表示」

このフィールドを使用して、クエリー・リストに含めるクエリー統計の期間を指定します。

「平均 CPU 時間」

このフィールドを使用して、データベース・サーバーでクエリーを実行するために必要な最小時間を指定します。

「平均経過時間」

このフィールドを使用して、クライアント・ワークステーションでクエリーを実行するために必要な最小時間を指定します。

「クエリー実行回数」

このフィールドを使用して、選択されたクエリーが実行される最小回数を指定します。実行したユーザーや時間は同一とは限りませんが、フォルダとアイテムの組合せは同一です。

「検索」

このボタンを使用して、前述の検索基準に一致するクエリー統計を検索し、これを「サマリーを作成するクエリーを選択します。」リストに表示します。

「サマリーを作成するクエリーを選択します。」

このリストには、指定された検索基準に一致するクエリー統計が表示されます。

リストからクエリーを選択すると、ダイアログの右下部にあるパネルに、クエリーに含まれたフォルダ、結合およびアイテムが表示され、「次へ」ボタンが有効になります。

クエリー回数列には、エンド・ユーザーによりクエリーが実行された回数が記録されます。

注意

- クエリー統計を使用して作成されたサマリー・フォルダは、Discoverer によりリフレッシュされます。
- チェック・マークまたはキューブ・アイコンは、そのクエリーを実行した際に、クエリーと一致するサマリー・フォルダが検出されたことを示しています。記号は、全オブジェクトを含めた完全一致を示します。

「サマリー・ウィザード:ステップ3」ダイアログ (外部テーブルの使用)

外部のデータベースのテーブルを End User Layer (EUL) にマップするには、このダイアログを使用します。登録する各外部テーブルに対してサマリー・ウィザードを1度実行します。

外部サマリー・フォルダは、Discoverer 以外のアプリケーションで作成されたテーブルを参照します。列名とアイテム名は、Discoverer で作成したテーブルとは異なる可能性があります。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー・ウィザード:ステップ3」ダイアログ

詳細は、「[手動によるサマリー・フォルダの作成](#)」を参照してください。

「外部サマリー・テーブルを選択します。」

「選択」ボタンを使用して、現行データベース内のテーブルを選択する「[ユーザーまたはテーブルおよびビューの選択ダイアログ](#)」を表示します。

「選択可能なアイテム」

このドロップダウン・リストを使用して、外部サマリー・テーブルにマップするビジネスエリアを選択します。

このフィールドを使用して、「**マップされたアイテム**」フィールドに表示された外部サマリー・テーブルの中の対応するデータベース列に、EUL アイテム (現行ビジネスエリアの) をマップします。

アイテムのマッピングは次のいずれかの方法で行います。

- ドラッグ・アンド・ドロップ

「**選択可能なアイテム**」フィールドから「**マップされたアイテム**」フィールドの中の対応するデータベース列にアイテムをドラッグします。

1度の操作で外部サマリー・テーブルの中のすべての列を EUL アイテムにマップするには、「**選択可能なアイテム**」フィールドから「**マップされたアイテム**」フィールドへフォルダをドラッグします。外部サマリー・テーブルにある類似した名前のデータベース列のアイテムが自動的に照合されます。外部サマリー・テーブルを EUL 内の複数のフォルダのアイテムにマップする場合は、複数のフォルダについてこの手順を繰り返します。

- 「含める」ボタン

「**マップされたアイテム**」フィールドでデータベース列を選択し、対応するアイテムを「**選択可能なアイテム**」フィールドで選択して「挿入」ボタン (右矢印) をクリックすると、「**マップされたアイテム**」フィールドで両方が照合されます。

- ダブルクリック

「**マップされたアイテム**」フィールドでデータベース列を選択し、対応するアイテムを「**選択可能なアイテム**」フィールドでダブルクリックします。

「マップされたアイテム」

EUL 内の対応するアイテムにマップされた、外部サマリー・テーブルの中のデータベース列です。

- 「アイテム」

外部サマリー・テーブルの中の対応するデータベース列にマップされた EUL 内のアイテムです。

- 「データベース列」
EUL内の対応するアイテムにマップされた外部サマリー・テーブルの中のデータベース列です。
- 「データ型」
データベース列のデータ型とサイズです。

「ヘルプの使用方法」

Oracle Business Intelligence Discoverer Administrator は、広範囲にわたる文脈依存ヘルプおよびリファレンス情報をオンラインで提供しています。

詳細は、「[Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプ](#)」を参照してください。

「値」ダイアログ

条件の作成または編集に使用する1つ以上の値を選択するときは、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「条件」

条件の新規作成 / 編集ダイアログの「値」フィールドの中のドロップダウン・リストから「値の選択」オプションを選択すると、このダイアログが表示されます。

「値の選択」

対応する値の隣のチェックボックスを1つ以上選択して、「条件」ダイアログの中の「値」フィールドに選択した値を含めます。

「値の選択」フィールドに表示されたすべての値を選択するには、「すべてを選択」ボタンを使用します。

「値の選択」フィールドに表示されたすべての値を消去するには、「選択解除」ボタンを使用します。

ここで選択した値は、この条件の現行の条件文で使用されます。

ワークエリア: 「データ」タブ

Discoverer のエンド・ユーザーが Discoverer Desktop、Discoverer Plus および Discoverer Viewer で参照する EUL 内のビジネスエリア、フォルダおよびアイテムを表示するには、「データ」タブを使用します。フォルダのアイテムには、軸アイテム、データ・ポイント・アイテム、結合、条件およびユーザー定義アイテムなどがあります。Discoverer Administrator には、エンド・ユーザーに対して非表示のフォルダおよびアイテムが表示されます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークエリア」](#)

[「「ワークエリア」ウィンドウのタブ」](#)

「データ」タブでは、フォルダ間でアイテムを移動できます。また、フォルダ、複合フォルダ、アイテム、条件、結合の作成、編集および削除、そしてビジネスエリアを削除できます。

注意: このタブで 1 次要素（フォルダまたはアイテム）の名前を変更すると、「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されている各 2 次要素の名前に影響を与える可能性があります。依存 2 次要素の「名前の自動生成」プロパティが「はい」に設定されているときに、1 次要素の名前を変更すると、Discoverer では、各依存 2 次要素の「名前の自動生成」プロパティが「いいえ」にリセットされます。詳細は、「[EUL アイテム名の自動生成および自動更新](#)」を参照してください。

「プロパティ」ダイアログを使用すると、多くの属性値を検討および変更できるだけでなく、ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムの依存性のタイプおよび名前を表示できます。

ワークエリア: 「階層」 タブ

ビジネスエリア別にグループ分けした EUL 内の階層を表示するには、この「階層」タブを使用します。Discoverer エンド・ユーザーは、ワークシート内で階層を使用して、階層的に編成されたアイテムをドリルダウンできます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「ワークエリア」ウィンドウのタブ](#)

「表示」

このドロップダウン・リストを使用して、表示する階層のタイプを変更します。ユーザー定義またはシステム定義の階層の表示、および異なるタイプの階層（たとえばアイテム階層、日付階層または全階層など）の表示を選択できます。

注意

- 各階層の内容および編成の確認や、Discoverer Administrator で用意されている階層テンプレートが表示できます。

ワークエリア: 「アイテム・クラス」タブ

ビジネスエリア別にグループ分けした EUL 内のアイテム・クラスを表示するには、この「アイテム・クラス」タブを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「表示」

このドロップダウン・リストを使用して、表示するアイテム・クラスのタイプを変更します。ユーザー定義またはシステム定義のクラスの表示、および異なるタイプのクラス（たとえば値リストまたは代替ソートなど）の表示を選択できます。

注意

- 各アイテム・クラス・フォルダでは、アイテム・クラスに割り当てられた値のリストを参照できます。値リスト・フォルダを開くと、データの一意の値が一覧となって表示されます。どのアイテムがアイテム・クラスを使用しているかが表示されます。

ワークエリア: 「サマリー」 タブ

ビジネスエリア別にグループ化された EUL 内のサマリー・フォルダを管理するには、この「サマリー」タブを使用します。ここでは次の処理を実行できます。

- サマリー・フォルダの新規作成
- サマリー・フォルダの編集
- サマリー・フォルダのリフレッシュ
- サマリー・フォルダの削除
- サマリー・フォルダのプロパティの確認
- サマリー・フォルダの検証

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークエリア」](#)

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

「サマリー」タブ

このリストを使用して、サマリー・フォルダを選択します。

サマリー・フォルダで使用可能なオプションのリストを表示するには、サマリー・フォルダを表すキューブ・アイコンを右クリックします。Discoverer では、サマリー・フォルダは次のように表されます。

サマリー・フォルダ	Discoverer でサマリー・フォルダを表す方法
有効なサマリー・フォルダ	時計文字盤が付いたキューブ・アイコン
有効な外部サマリー・フォルダ	キューブ・アイコン
破損したサマリー・フォルダ	警告の黄色い三角形が付いたキューブ・アイコン

注意

- サマリーのリフレッシュ時に「このユーザーは CREATE ANY MATERIALIZED VIEW システム権限を持っている必要があります。」というメッセージが表示された場合は、ユーザーにサマリー・フォルダをリフレッシュするために必要な権限がありません。必要な権限を付与するには、次の手順に従います。
 - Discoverer Administrator からログアウトします。
 - Oracle SQL*Plus を起動し、データベース管理者のユーザー名とパスワードを使用して接続します。
 - 次の SQL スクリプトを実行します。


```
<%ORACLE_HOME%>%discoverer%util%eulasm.sql
```
 - Discoverer Administrator を再起動します。
- Discoverer がマテリアライズド・ビュー、サマリー・テーブルまたはディテール・テーブルを使用できない場合、サマリー・フォルダは破損しているものと判断されます。サマリー・フォルダが破損した原因の詳細を確認するには、「表示」→サマリーの検証メニュー・オプションを使用します。破損したサマリー・フォルダを編集してその構成を調査し、破損したフォルダを削除できます。

SQL ファイルおよびトレース・ファイルの使用

この章では、Discoverer によって使用されるファイルに関するリファレンス情報について説明します。項目は次のとおりです。

- 「Discoverer に付属する SQL ファイルのリスト」
- 「Discoverer の問題を解決するためのオラクル社カスタマ・サポート・センターの利用」
- 「トレース・ファイルを作成して Discoverer の問題を診断する方法」
- 「Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を設定して EUL トレース・ファイルを作成する方法」

Discoverer に付属する SQL ファイルのリスト

いくつかの SQL ファイルが、Discoverer Administrator とともにインストールされます。この SQL ファイルを使用すると、特定のデータベース構成作業を実行できます。次の表には、SQL ファイルとその機能の説明が記載されています。

次のファイルは、特に記載のない限り <ORACLE_HOME>%discoverer%util ディレクトリにあります。

ファイル名	説明
batchusr.sql	スケジュール・ワークブック結果スキーマを設定する（詳細は、「スケジュール・ワークブックの結果を含むテーブルの所有者を指定する方法」を参照）。
dbmsjob.sql	Oracle DBMS JOB キューのインタフェース（詳細は、「DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法」を参照）。 dbmsjob.sql ファイルは、<ORACLE_HOME>%rdbms%admin ディレクトリにデータベースとともにインストールされません。
eul4del.sql	4.1 の EUL オブジェクトをすべて消去する（詳細は、「アップグレード手順 5: リリース 4.1 EUL の削除」を参照）。
eul5.sql	eul5.eex のビジネスエリアとそのワークブックに必要な機能を作成する（詳細は、「標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法」を参照）。
eul5_apps.sql	Oracle Applications EUL を使用するとき、eul5.eex のビジネスエリアとそのワークブックに必要な機能を作成する（詳細は、「Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法」を参照）。 注意: このスクリプトは、Oracle Applications EUL とともに使用します。
eul5_id.sql	EUL の参照番号を変更する。このスクリプトは、データベースのエクスポート・ユーティリティおよびインポート・ユーティリティを使用して EUL をコピーし、次の作業を行うときに使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 元の EUL と新しい EUL 両方のオブジェクト修正 ■ 修正されたオブジェクトが両方の EUL に存在する場合での、Discoverer エクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードを使用した、この 2 つの EUL 間でのオブジェクトのコピー eul5_id.sql スクリプトを実行すると、新しい参照番号が新しい EUL に付与されるため、上記の場合でも各 EUL が一意ではなくなるといった競合が発生しません（詳細は、「標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法」を参照）。
eulasm.sql	Discoverer Administrator でのサマリー・フォルダ管理（および ASM）に必要な権限を付与する（詳細は、「SQL*Plus を使用してサマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法」を参照）。
eulgwreg.sql	EUL ゲートウェイのメタデータを設定するときに使用するテンプレートの EUL ゲートウェイ登録スクリプトが含まれる。 詳細は、<ORACLE_HOME>%discoverer%kits ディレクトリにある egwspec.doc および eulgatew.doc を参照してください。
eulgwtbl.sql	EUL ゲートウェイのメタデータを設定するときに使用するテンプレートの CREATE TABLE SQL 文が含まれる。 詳細は、<ORACLE_HOME>%discoverer%kits ディレクトリにある egwspec.doc および eulgatew.doc を参照してください。

ファイル名	説明
eulgwvue.sql	EUL ゲートウェイのメタデータを設定するときに使用するテンプレートの CREATE VIEW SQL 文が含まれる。 注意: このスクリプトを修正せずに実行した場合は、有効なゲートウェイが作成されません。ゲートウェイを通じて情報を転送するため、ビュー列がメタデータに正しくマップされるように SQL 文を修正してください。 詳細は、<ORACLE_HOME>%discoverer%kits ディレクトリにある egwspec.doc および eulgatew.doc を参照してください。
eulsown.sql	データベース・エクスポート・ユーティリティを使用して EUL をエクスポートし、別のデータベース・ユーザーにインポートする場合に必要なサマリー・フォルダの所有者情報を修正する (詳細は、「 標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法 」を参照)。このスクリプトでは、ソース EUL のサマリー・フォルダの所有者名、ターゲット EUL の新しいサマリー・フォルダの所有者名を入力するように要求されます (詳細は、「 標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法 」を参照)。
eulstdel.sql	指定した期限よりも古いクエリー予測統計を削除する (詳細は、「 古いクエリー予測統計の削除方法 」を参照)。
eulsuqpp.sql	クエリーのパフォーマンス予測 (QPP) を有効にするために必要なデータベース権限を付与する (詳細は、「 Secure Views でクエリー予測を使用する方法 」を参照)。
gwdrop.sql	EUL ゲートウェイを削除可能にする。 詳細は、<ORACLE_HOME>%discoverer%kits ディレクトリにある egwspec.doc および eulgatew.doc を参照してください。
gwgrant.sql	EUL ゲートウェイへのアクセスを付与できるようにする。 詳細は、<ORACLE_HOME>%discoverer%kits ディレクトリにある egwspec.doc および eulgatew.doc を参照してください。
lineage.sql	このスクリプトは、lineage.eex のビジネスエリアとそのワークブックを使用する前に実行してください (詳細は、「 Oracle Warehouse Builder とともに Discoverer を使用する方法 」を参照)。

Discoverer の問題を解決するためのオラクル社カスタマ・サポート・センターの利用

Discoverer の問題を解決するためにオラクル社カスタマ・サポート・センターを利用する場合、通常は次の情報をお尋ねしています。

- Discoverer のリリース
- 問題が発生したときに使用していた Discoverer ツール (Discoverer Administrator、Discoverer Plus、Discoverer Viewer、Discoverer Desktop など)
- 問題が発生する前に、ユーザーが Discoverer で実行した操作の正確な詳細
- 問題が発生したときに、画面に表示された内容

さらに、オラクル社カスタマ・サポート・センターへのトレース・ファイルの提供が必要になることがあります (詳細は、「[トレース・ファイルを作成して Discoverer の問題を診断する方法](#)」を参照)。

トレース・ファイルを作成して Discoverer の問題を診断する方法

Discoverer で問題が発生したときに、その問題の原因を特定できないことがあります（たとえば、一般的なエラー・メッセージでは十分な情報が得られないことがあります）。Discoverer の問題に関する詳細な情報を得るため、次の 2 種類のトレース・ファイルを生成できます。

- EUL トレース・ファイル。Discoverer と EUL との間の低レベルの相互作用が記録されます。
- サーバー・トレース・ファイル。データベース・サーバーに送信された SQL 文が記録されます。

トレース・ファイルは、問題の原因を自分で診断する場合またはオラクル社カスタマ・サポート・センターを利用する場合に使用できます。

解決しようとしている問題に関する情報が記録される EUL トレース・ファイルまたはサーバー・トレース・ファイル（あるいはその両方）を作成する手順は、次のとおりです。

1. 正常に機能している Discoverer で作業を開始します。
2. 作成するトレース・ファイルを次のように指定します。
 - EUL トレース・ファイルを作成するには、適切な値を含む構成ファイルを作成し、Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を構成ファイルの名前とパスに設定します。
Windows 環境変数である DCLOG_CONFIG_FILE の設定方法の詳細は、「[Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を設定して EUL トレース・ファイルを作成する方法](#)」を参照してください。
 - サーバー・トレース・ファイルを作成するには、Discoverer のレジストリ設定である SqlTrace を 1 に設定します。
Discoverer レジストリ設定の詳細は、[第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」](#)を参照してください。
3. 問題の原因となった操作を Discoverer で行います。
4. トレース・ファイルに不要な情報が書き込まれないようにするため、Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を削除するか、Discoverer のレジストリ設定の SqlTrace をデフォルト値に戻します（あるいはその両方）。

Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を設定して EUL トレース・ファイルを作成する方法

Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を設定すると、EUL トレース・ファイルに EUL トレース情報が収集されます。トレース・ファイルへの情報の書込みは、後で有効または無効にすることができます。

Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE を設定して EUL トレース・ファイルを作成する手順は、次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューから「コントロール パネル」→「システムのプロパティ」→「詳細設定」→「環境変数」を選択します。
2. 新規ユーザー変数を作成します。
 - 変数名 =DCLOG_CONFIG_FILE
 - 変数値 =<path>/<file_name>
例:c:¥dc_config/dc_config.txt
3. Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE で指定したディレクトリ（c:¥dc_config¥dc_config.txt など）にテキスト・ファイルを作成します。

4. 必要なレベルの診断情報を含むトレース・ファイルを作成するために、Discoverer のテキスト・ファイル (dc_config.txt など) に構成設定を入力します。

たとえば、dc_config.txt に次の設定を入力できます。

```
DCLOG_ENABLED=1
```

```
DCLOG_LEVEL=4
```

```
DCLOG_LOGDIR=d:\oracle_home\bin
```

```
DCLOG_ODLDEMO=1
```

```
DCLOG_DCELEVEL='OL=6,DC=10,DCOV=10'
```

DCLOG_DCELEVEL 設定には 1 つ以上の値を指定します。それぞれの値には整数を指定します (例: OB=1)。値と整数のペアを複数指定する場合は、各ペアをカンマで区切ります (例: OB=1, OL=3)。DCLOG_DCELEVEL 設定に使用される値によって、特定のトレース情報が定義した細分度で作成されます。使用する整数が大きいほど情報が詳細になります。

DCLOG_DCELEVEL 設定を使用してトレース・ファイルに書き込むことができるトレース情報の種類は、次のとおりです。

- DC – 一般に重要なイベント
 - DC=15 では、一連の Discoverer アクションがログに記録されます。
 - DCBL – バルク・ロードの詳細
 - DCIE – インポート / エクスポートの詳細
 - DCIE=2 では、インポートおよびエクスポート操作で処理されたアクションと要素がログに記録されます。
 - DCOV – メタデータの検証
 - OB – トランザクションのコミット時にデータをデータベースに転送するプロセス
 - OL – データベースの相互作用 (SQL 文、バインド変数など)
 - OL=0 では、データベース上で実行に失敗したすべての SQL 文がログに記録されます。
 - OL=2 では、実行されたすべての SQL 文とともに、フェッチされた行数と基本的なカーソル・ライフサイクルが (OL=0 でログに記録された情報に加えて) ログに記録されます。
 - OL=3 では、すべてのカーソル・バインド変数が (OL=2 でログに記録された情報に加えて) ログに記録されます。
 - OM – データベースの接続 / 切断
5. Discoverer Administrator または Discoverer Desktop に接続します。

Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE で指定したテキスト・ファイル (dc_config.txt など) の構成設定に従って、トレース情報が XML トレース・ファイル (log200501204153419588.xml など) に書き込まれます。

6. 十分なトレース情報が収集されたら、トレース情報の書込みを無効にして、不要な情報がトレース・ファイルに書き込まれないようにすることができます。

トレース情報の書込みを無効にするには、Windows 環境変数の DCLOG_CONFIG_FILE で指定したテキスト・ファイル (dc_config.txt など) を編集し、DCLOG_ENABLED 設定の値を 1 から 0 に変更します (または、DCLOG_ENABLED 設定を削除することもできます)。

詳細は、「[Discoverer の問題を解決するためのオラクル社カスタマ・サポート・センターの利用](#)」を参照してください。

Discoverer のサンプル・データ EUL、 データおよびワークブック

この章では、サンプル・データを使用できるように、Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックをインストールする方法を説明します。この手順によって、Video Tutorial Workbook もインストールされます。

この項では、次の項目について説明します。

- 「サンプル・データを使用して Discoverer Administrator の使用を開始するために必要なデータベース前提条件」
- 「Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックのインストール時に実行される処理」
- 「サンプル・データのインストールに必要な権限」
- 「Discoverer Administrator に最初に接続するときに適用される条件」
- 「EUL を作成する理由」
- 「Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックのインストール手順」
- 「サンプル・データ用のプライベート EUL の作成方法」
- 「Discoverer サンプル・データのインストール方法」
- 「VIDEO5 データベース・ユーザーのサンプル・データ EUL に対するアクセス権限を付与する方法」
- 「チュートリアル用ビジネスエリアを別の End User Layer にインストールする方法」
- 「チュートリアル用ビジネスエリア、テーブルおよびデータを削除する方法」
- 「サンプル・データの再インストール方法」

サンプル・データを使用して Discoverer Administrator の使用を開始するために必要なデータベース前提条件

Discoverer Administrator ユーザーがサンプル・データを使用して Discoverer の使用を開始するには、データベースに次のものがが必要です。

- End User Layer (EUL)
- VIDEO5 データベース・ユーザー
- VIDEO5 データ

注意: Discoverer Administrator を最初に使用する際は、VIDEO5 データベース・ユーザーが存在しない場合があります。VIDEO5 データベース・ユーザーが存在しない場合は、サンプル・データのインストール時に作成できます (詳細は、「[Discoverer サンプル・データのインストール方法](#)」を参照)。

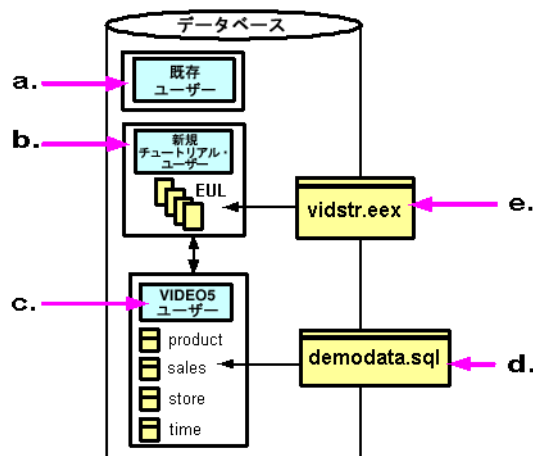
Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックのインストール時に実行される処理

Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックをインストールすると、Discoverer Administrator によって次の処理が実行されます。

- 指定した名前での新規データベース・ユーザーが作成されます (このユーザーは EUL を所有します)。
- 新規 EUL が作成されます。
- VIDEO5 データベース・ユーザーが存在しない場合は、次の処理が実行されます。
 - VIDEO5 という名前での新規データベース・ユーザーが作成されます。
 - VIDEO5 データベース・ユーザーの表領域にサンプル・データ・テーブルが作成されます。
 - サンプル・データ・テーブルにサンプル・データが移入されます。
- 新規 EUL に、VIDEO5 テーブルに関するメタデータが移入されます (¥demo ディレクトリにある vidstr.eex ファイルからチュートリアル用ビジネスエリアがインポートされます)。

次の図は、サンプル・データのインストール時に発生するイベントを示しています。

図 27-1 サンプル・データのインストール時に発生するイベント

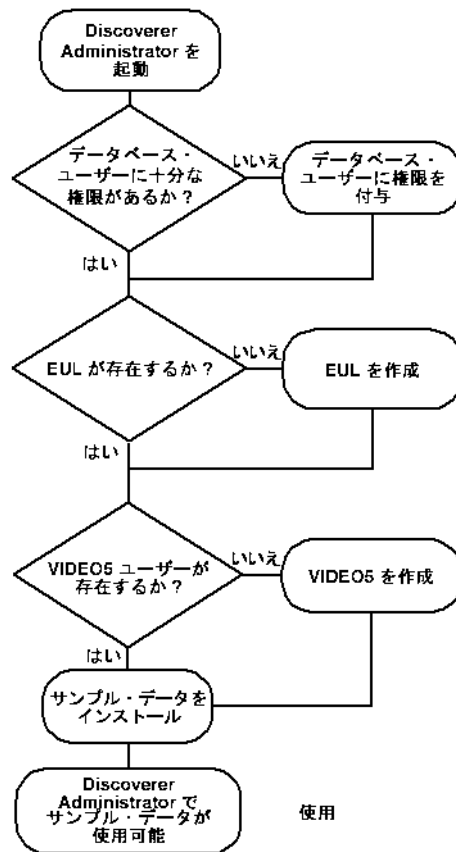


前述の図では、次のことに注目してください。

- a. サンプル・データをインストールするための十分な権限のある既存のデータベース・ユーザーで Discoverer Administrator に接続します（詳細は、「[サンプル・データのインストールに必要な権限](#)」を参照）。
- b. 新規データベース・ユーザーの EUL を作成します。
- c. EUL にサンプル・データをインストールするように選択すると、Discoverer Administrator によって VIDEO5 ユーザーが作成されます（作成されていない場合）。
- d. Discoverer Administrator によって VIDEO5 ユーザー・テーブル（Product、Sales Fact、Store、Time など）が作成され、¥demo ディレクトリにある demodata.sql ファイルからそれらのテーブルにデータが移入されます。
- e. Discoverer Administrator によって、vidstr.eex ファイルから新規データベース・ユーザーの EUL に、Video Stores チュートリアル用ビジネスエリアのメタデータが移入されます。

サンプル・データのインストール時の選択肢を次の図に示します。

図 27-2 Discoverer サンプル・データのインストール時の選択肢フロー・チャート



サンプル・データのインストールに必要な権限

サンプル・データを現行の EUL にインストールするには、Discoverer Administrator への接続に使用するデータベース・ユーザーに、次に示すような複数のデータベース権限が必要となります。

- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- CREATE PROCEDURE

ヒント：これらの権限をデータベース・ユーザーに付与するには、スクリプト <ORACLE_HOME>\discoverer\util\%eulasm.sql を実行します。

- VIDEO5 ユーザーが作成されていない場合は、次のデータベース権限も必要となります。
 - CREATE USER
 - GRANT ANY PRIVILEGE
 - ALTER USER
- Oracle Enterprise Edition データベースに対して実行している場合は、Discoverer のサマリー管理機能および ASM 機能を使用するために、次のデータベース権限も必要となります。
 - CREATE ANY MATERIALIZED VIEW
 - DROP ANY MATERIALIZED VIEW
 - ALTER ANY MATERIALIZED VIEW
 - GLOBAL QUERY REWRITE
 - ANALYZE ANY

ヒント：これらの権限をデータベース・ユーザーに付与するには、スクリプト <ORACLE_HOME>\discoverer\util\%eulasm.sql を実行します。

- SELECT ON V_\$PARAMETER

これらのデータベース権限を付与する方法の詳細は、「ヘルプ」をクリックしてください。

Discoverer Administrator に最初に接続するときに適用される条件

Discoverer Administrator に最初に接続するときは、次の条件が適用されます。

- 特定の権限を持つデータベース・ユーザー（サンプル・データをインストールできる DBA ユーザーなど）で接続する必要があります。

詳細は、「[サンプル・データのインストールに必要な権限](#)」を参照してください。

- EUL または EUL メタデータがデータベースに存在しません。
- VIDEO5 データベース・ユーザーおよびテーブルが作成されていません。

VIDEO5 データベース・ユーザーが存在しない場合は作成し、VIDEO5 テーブルにサンプル・データを移入すると、Discoverer Administrator の学習を開始できます。詳細は、「[Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックのインストール時に実行される処理](#)」を参照してください。

EUL を作成する理由

次の作業を実行するには、EUL を作成する必要があります（EUL が存在しない場合）。

- Discoverer サンプル・データのインストール
- VIDEO5 ユーザーの作成と VIDEO5 テーブルへのデータの移入
- Discoverer Administrator サンプル・データの完了

サンプル・データを EUL にインストールすることで、その EUL へのアクセス権限を持つすべてのユーザーがサンプル・データを使用できるようになります。

Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックのインストール手順

Discoverer のサンプル・データ EUL、データおよびワークブックをインストールするには、次の手順に従います。

1. プライベート EUL を作成します（「[サンプル・データ用のプライベート EUL の作成方法](#)」を参照）。
2. 作成したプライベート EUL に Discoverer サンプル・データをインストールします（「[Discoverer サンプル・データのインストール方法](#)」を参照）。
3. VIDEO5 ユーザーに、サンプル・データ EUL へのアクセスに必要な権限があることを確認します（「[VIDEO5 データベース・ユーザーのサンプル・データ EUL に対するアクセス権限を付与する方法](#)」を参照）。

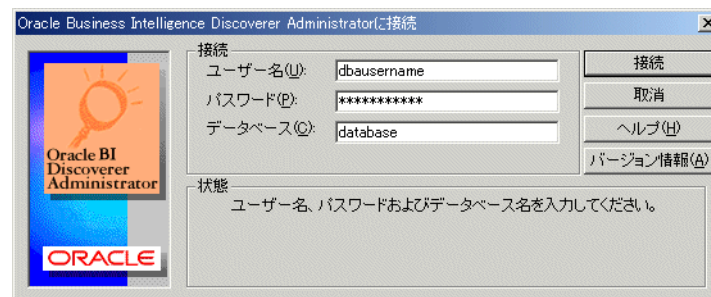
サンプル・データ用のプライベート EUL の作成方法

EUL が存在しない場合は、EUL を作成する必要があります。サンプル・データ EUL を作成するには、十分な権限を持つデータベース・ユーザーで Discoverer に接続し（詳細は、「[サンプル・データのインストールに必要な権限](#)」を参照）、新規データベース・ユーザーの EUL を作成する必要があります。

サンプル・データ EUL を作成する手順は、次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle Business Intelligence Tools - <HOME_NAME>」→「Discoverer Administrator」を選択すると、「接続」ダイアログが表示されます。

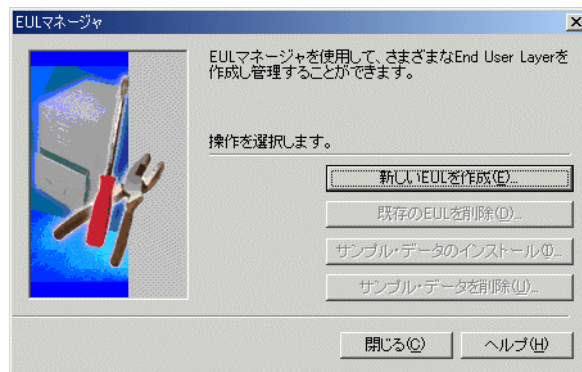
図 27-3 「接続」ダイアログ



2. 十分な権限を持つデータベース・ユーザー（DBA ユーザーなど）のユーザー名を入力します。
詳細は、「[サンプル・データのインストールに必要な権限](#)」を参照してください。
3. パスワードを入力します。

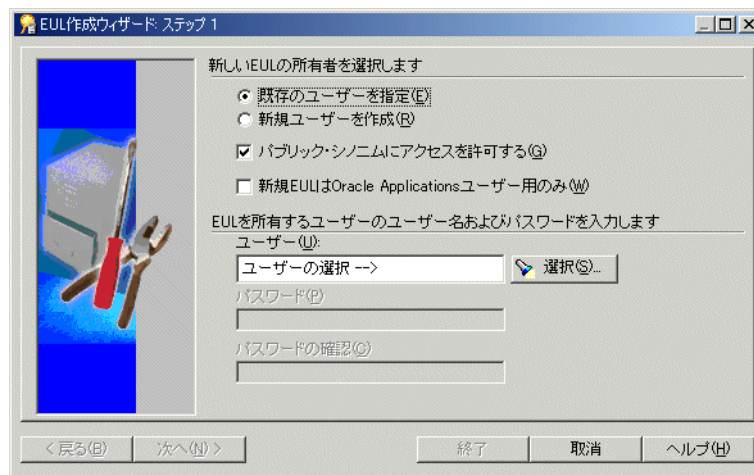
4. 「接続」フィールドで次のように指定します。
 - デフォルト・データベースにログインしている場合は、このフィールドを空白のままにします。
Oracle Enterprise Edition データベースでこの作業を行うには、tnsnames.ora ファイルにエントリが必要です（詳細は、Discoverer マネージャに問い合わせてください）。
 - デフォルト・データベース以外の Oracle データベースにログインしている場合は、適切な SQL*Net 接続文字列を指定します（接続文字列の詳細は、データベース管理者に問い合わせてください）。
5. 「接続」をクリックします。
接続に使用したデータベース・ユーザーの EUL が作成されているかどうかによって、Discoverer Administrator の動作が異なります。
EUL が存在しない場合は、「ここで EUL を作成しますか。」というメッセージが表示されます。
6. 「はい」をクリックすると、「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。
ヒント: 1 つ以上の EUL がすでに存在する場合は、ロード・ウィザードが表示されます。ロード・ウィザードで「取消」をクリックし、「ツール」→「EUL マネージャ」を選択すると、「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

図 27-4 「EUL マネージャ」ダイアログ



7. 「新しい EUL を作成」をクリックすると、「EUL 作成ウィザード」ダイアログが表示されます。

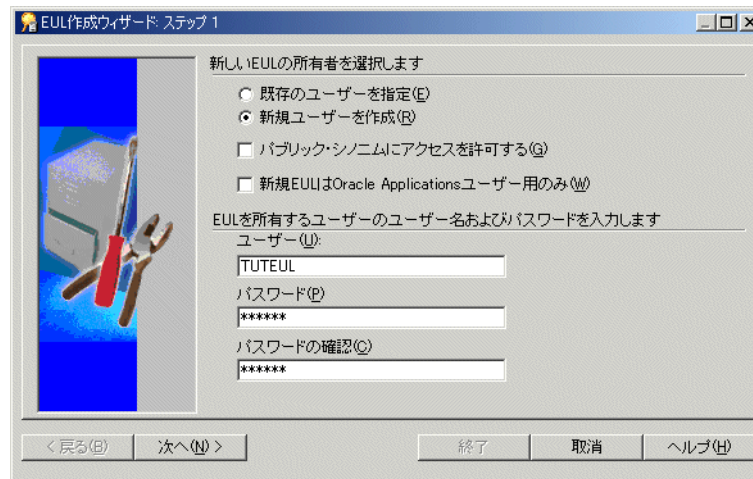
図 27-5 「EUL 作成ウィザード」ダイアログ



このウィザードを使用して、EUL および新規データベース・ユーザーを作成します。新規の EUL およびデータベース・ユーザーを作成してから、サンプル・データを VIDEO5 ユーザーにインストールする必要があります。

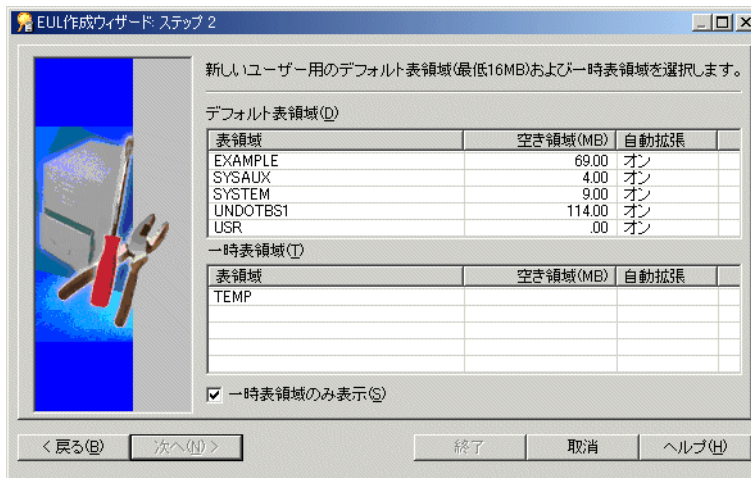
8. 「新規ユーザーを作成」ラジオ・ボタンを選択します。
9. 次のチェックボックスの選択を解除します。
 - 「パブリック・シノニムにアクセスを許可する」チェックボックス
 - 「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」チェックボックス
10. 「ユーザー」フィールドに新規データベース・ユーザーの名前を入力します。
 新規データベース・ユーザーには任意の名前を使用できます。たとえば、「TUTEUL」と入力して特定のユーザーを識別できます。
11. 「パスワード」フィールドと「パスワードの確認」フィールドの両方にパスワードを入力します。
 ヒント: 前の手順で入力したユーザー名を「パスワード」フィールドと「パスワードの確認」フィールドの両方で使用できます。
12. EUL 作成ウィザードに、次のようなラジオ・ボタンとチェックボックスの設定が表示されることを確認します。

図 27-6 「EUL 作成ウィザード」ダイアログ



13. 「次へ」をクリックすると、「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」ダイアログが表示されます。

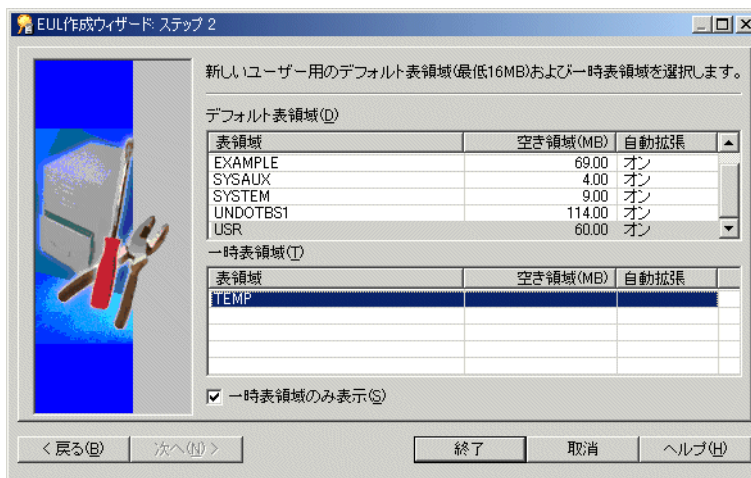
図 27-7 「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



14. デフォルト表領域と一時表領域を選択します。

たとえば、デフォルト表領域に USR を選択し、一時表領域に TEMP を選択します。

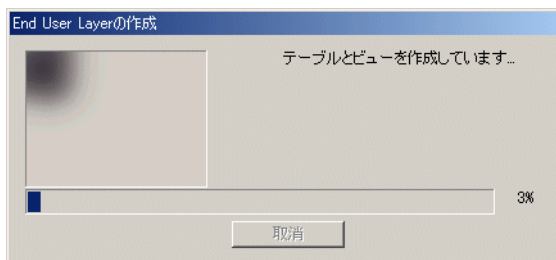
図 27-8 「EUL 作成ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



15. 「終了」をクリックして EUL を作成します。

進行状況バーが表示されます。

図 27-9 EUL の作成を示す進行状況バー



Discoverer Administrator で新規 EUL が正常に作成されると、EUL が正常に作成されたことを示すメッセージが表示されます。

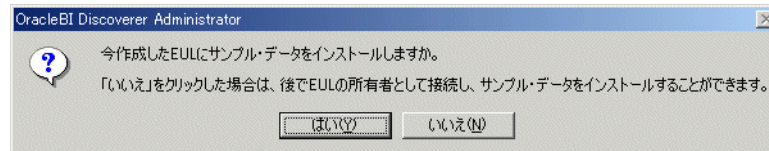
図 27-10 EUL が正常に作成されたことを示すダイアログ



16. 「OK」をクリックします。

最初に EUL の作成が完了しました。ここで、サンプル・データをインストールする必要があります。

図 27-11 サンプル・データをインストールするかどうかを確認するダイアログ



17. 「はい」をクリックすると、「サンプル・データのインストール」ダイアログが表示されます。

図 27-12 「サンプル・データのインストール」ダイアログ



18. 次の項「[Discoverer サンプル・データのインストール方法](#)」で説明する手順を完了します。

Discoverer サンプル・データのインストール方法

サンプル・データ用のプライベート EUL の作成後、そのプライベート EUL に Discoverer サンプル・データをインストールできます（詳細は、「[サンプル・データ用のプライベート EUL の作成方法](#)」を参照）。

Discoverer サンプル・データのインストール方法は、サンプル・データをいつインストールするかによって異なります。

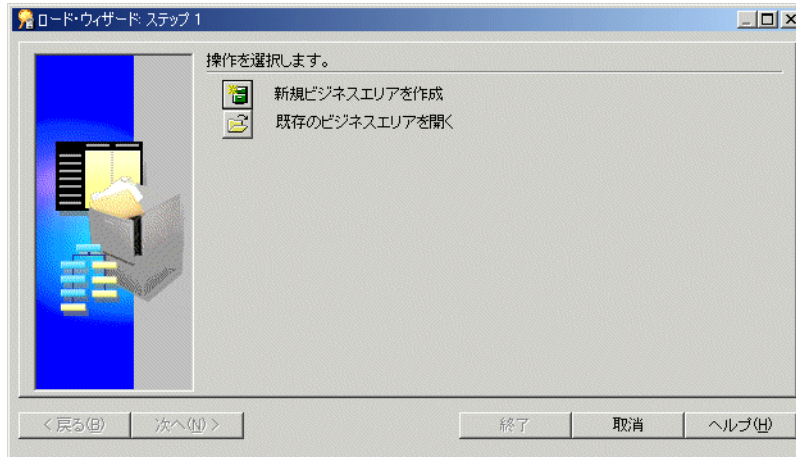
- サンプル・データ EUL の作成後すぐに Discoverer サンプル・データをインストールする場合は、次の手順のステップ 5 から開始してください。
- 既存の EUL に Discoverer サンプル・データをインストールする場合は、次の手順のステップ 1 から開始してください。

1. チュートリアル用ビジネスエリアを格納する EUL の所有者で Discoverer Administrator に接続します（詳細は「Discoverer Administrator の開始方法」を参照）。

注意: 接続に使用するデータベース・ユーザーに、サンプル・データをインストールするための十分な権限があることを確認してください（詳細は、「サンプル・データのインストールに必要な権限」を参照）。

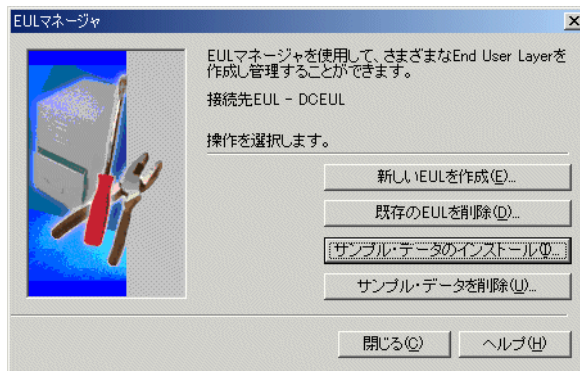
ロード・ウィザードが表示されます。

図 27-13 「ロード・ウィザード」 ダイアログ



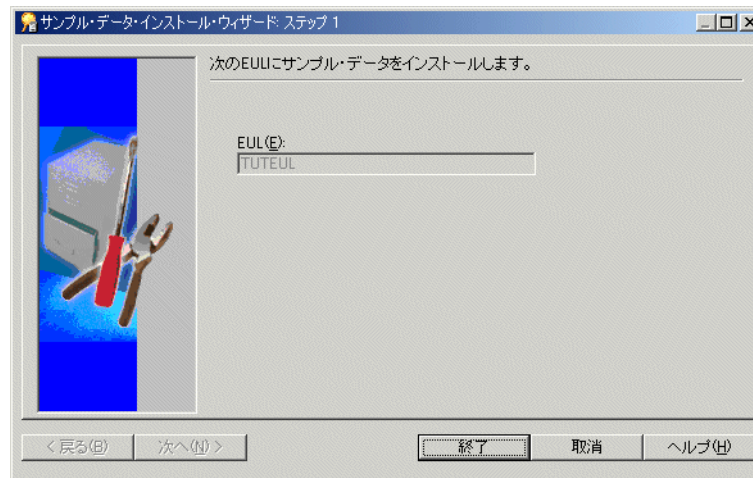
2. 「取消」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。
3. 「ツール」 → 「EUL マネージャ」を選択すると、「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

図 27-14 「EUL マネージャ」 ダイアログ



4. 「サンプル・データのインストール」をクリックすると、「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ 1」ダイアログが表示されます。

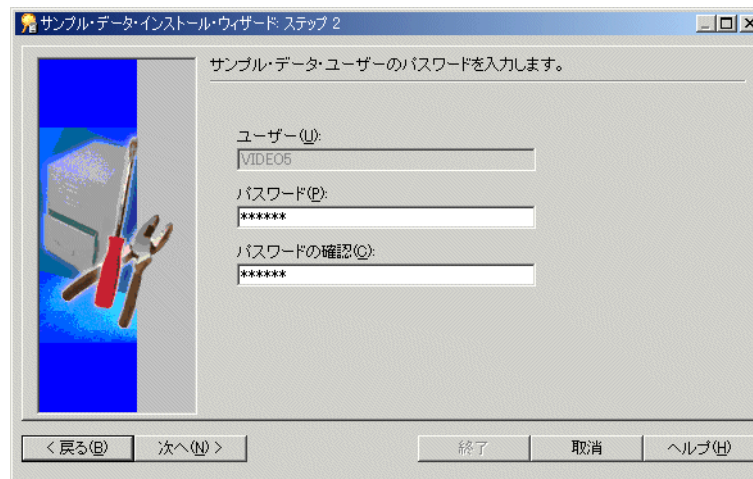
図 27-15 「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ1」 ダイアログ



「EUL」フィールドに表示される EUL に、チュートリアル用ビジネスエリアがインポートされます。

- 「次へ」をクリックすると、「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ2」ダイアログが表示されます。

図 27-16 「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ2」 ダイアログ



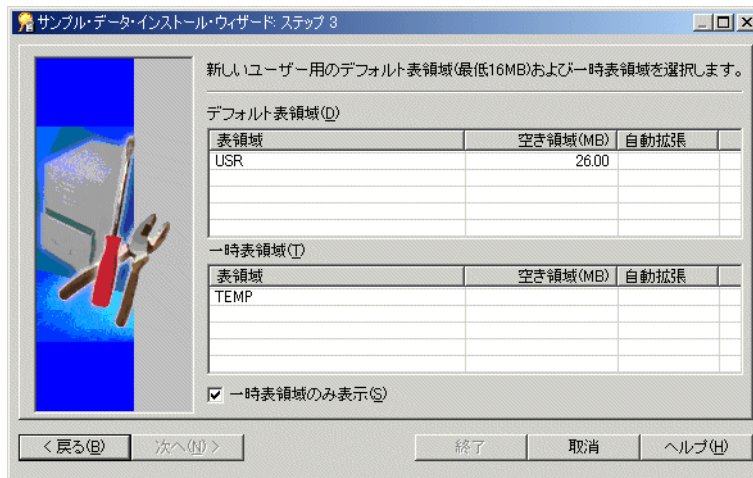
- 「パスワード」フィールドと「パスワードの確認」フィールドの両方に、VIDEO5 と入力します。

注意: サンプル・データを削除または再インストールする場合は、パスワード VIDEO5 を使用します。

注意: このパスワードとは異なるパスワードを使用することもできます。

- 「次へ」をクリックすると、「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ3」ダイアログが表示されます。このダイアログで、VIDEO5 データベース・ユーザーのデフォルト表領域と一時表領域を指定します。

図 27-17 「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ

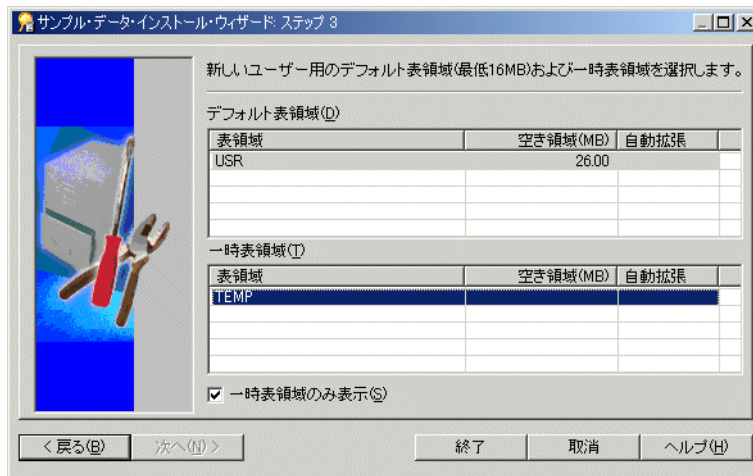


注意: VIDEO5 を新規データベース・ユーザーとして作成していない場合、「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ 3」ダイアログは表示されません。

8. デフォルト表領域と一時表領域を選択します。

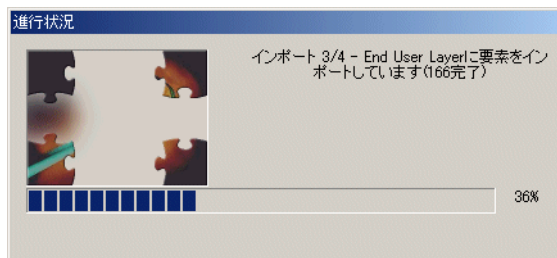
たとえば、デフォルト表領域に USR を選択し、一時表領域に TMP を選択します。

図 27-18 「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ 3」 ダイアログ



9. 「終了」をクリックすると、「進行状況」ダイアログが表示されます。

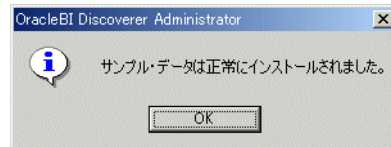
図 27-19 「進行状況」メッセージ・ダイアログ



¥demo ディレクトリにある demodata.sql ファイルを使用して、VIDEO5 データベース・ユーザー・テーブルにデフォルト・データが移入され、¥demo ディレクトリにある vidstr.eex ファイルを使用して、新規 EUL に Video Stores チュートリアル用ビジネスエリアがインポートされます。

プロセスが完了すると、サンプル・データが正常にインストールされたことを示すダイアログが表示されます。

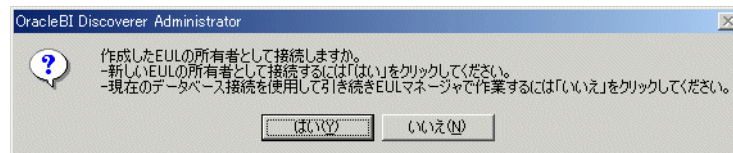
図 27-20 サンプル・データが正常にインストールされたことを示すダイアログ



10. 「OK」をクリックします。

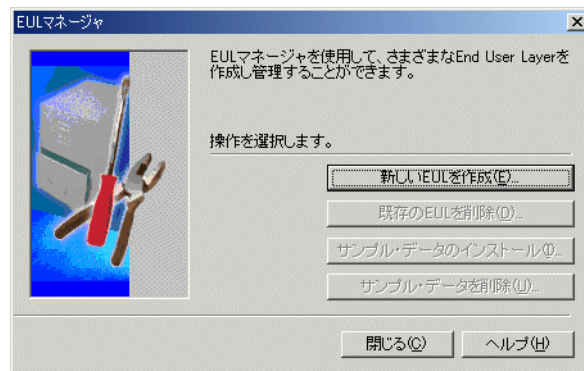
次のダイアログが表示されます。

図 27-21 EUL 所有者で接続するかどうかを確認するダイアログ



11. 「いいえ」をクリックすると、「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

図 27-22 「EUL マネージャ」ダイアログ



12. 「閉じる」をクリックして「EUL マネージャ」ダイアログを閉じます。

これで、次の作業が完了しました。

- VIDEO5 データベース・ユーザーの作成
- VIDEO5 テーブルへのデータの移入
- 新規 EUL へのチュートリアル用ビジネスエリアのインポート

この時点で、Discoverer Administrator は、ユーザーが Discoverer のサンプル・データを使用して学習を開始できるように適切に構成されました。

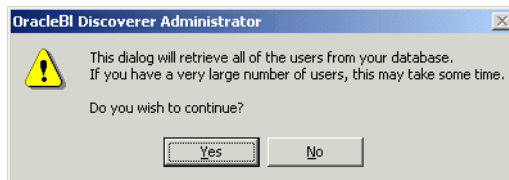
VIDEO5 データベース・ユーザーのサンプル・データ EUL に対するアクセス権限を付与する方法

プライベート EUL の作成と Discoverer サンプル・データのインストールが完了した後は、VIDEO5 データベース・ユーザーがサンプル・データ EUL にアクセスできるようにする必要があります。その結果、VIDEO5 データベース・ユーザーとして Discoverer に接続している Discoverer エンド・ユーザーがサンプル・データ、EUL およびワークブックにアクセスできるようになります。

VIDEO5 データベース・ユーザーがサンプル・データ EUL にアクセスできるようにする手順は、次のとおりです。

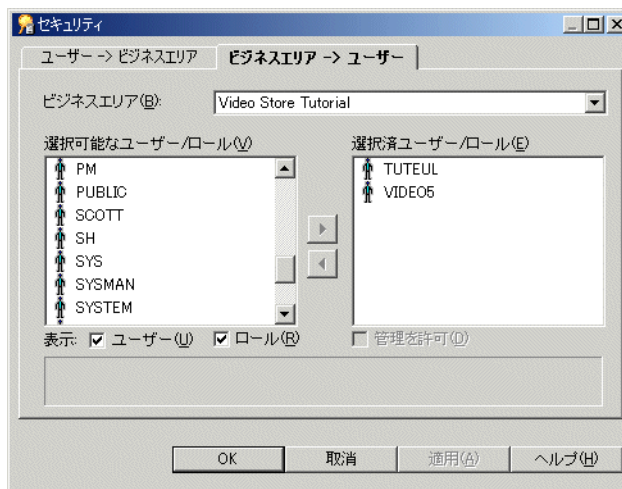
1. 「サンプル・データ用のプライベート EUL の作成方法」で作成したプライベート・サンプル・データ EUL (TUTEUL) の所有者で Discoverer Administrator に接続します。
2. 「ツール」→「セキュリティ」を選択すると、「セキュリティ」ダイアログが表示されます。次の警告ダイアログが表示されます。

図 27-23 警告ダイアログ



3. 「はい」をクリックすると、「セキュリティ」ダイアログ: 「ビジネスエリア -> ユーザー」タブが表示されます。

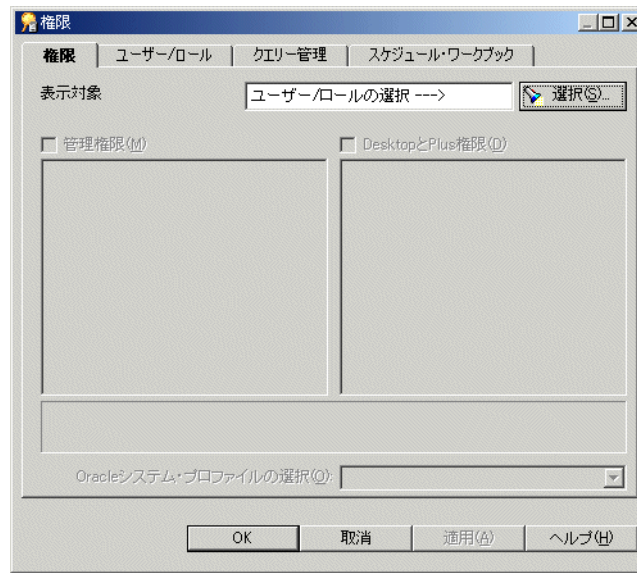
図 27-24 「セキュリティ」ダイアログ: 「ビジネスエリア -> ユーザー」タブ



「選択済ユーザー/ロール」リストに VIDEO5 データベース・ユーザーが表示されていることを確認してください。

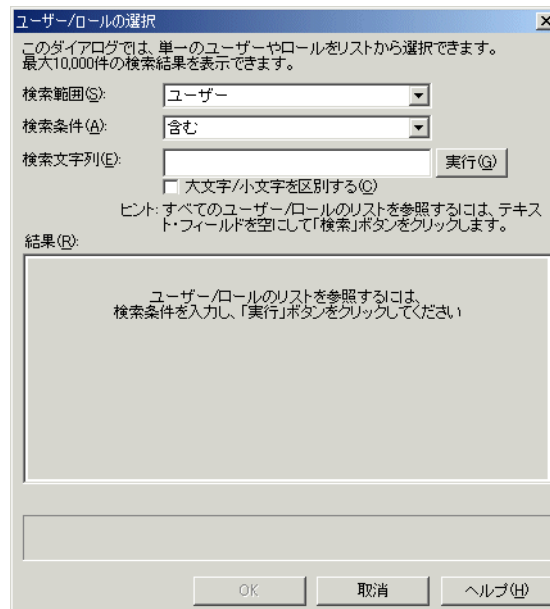
4. 「選択済ユーザー/ロール」リストに VIDEO5 データベース・ユーザーが表示されていない場合は、VIDEO5 ユーザーを「選択可能なユーザー/ロール」リストから「選択済ユーザー/ロール」リストに移動します。
5. 「OK」をクリックして詳細を保存し、「セキュリティ」ダイアログを閉じます。
6. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ: 「権限」タブが表示されます。

図 27-25 「権限」 ダイアログ: 「権限」 タブ



- 「選択」をクリックすると、「ユーザー / ロールの選択」ダイアログが表示されます。このダイアログで、作業権限を変更するユーザーまたはロールを検索して選択できます。

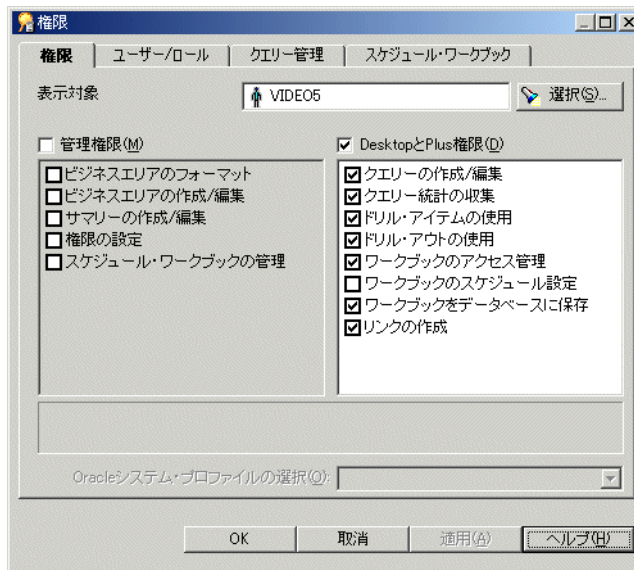
図 27-26 「ユーザー / ロールの選択」 ダイアログ



- 「実行」をクリックします。
「結果」リストに検索結果が表示されます。
- 「結果」リストから VIDEO5 ユーザーを選択します。
- 「OK」をクリックすると、VIDEO5 ユーザーの「権限」ダイアログ: 「権限」タブが表示されます。
VIDEO5 ユーザーには「Desktop と Plus 権限」はありますが、「管理権限」はありません。
- 「管理権限」チェックボックスの選択を解除し、「Desktop と Plus 権限」チェックボックスを選択します。

12. 「Desktop と Plus 権限」 リストの「ワークブックのスケジュール設定」チェックボックスの選択を解除します。

図 27-27 「権限」 ダイアログ: 「権限」 タブ



13. 「OK」 をクリックして詳細を保存し、「権限」 ダイアログを閉じます。

これで、サンプル・データ EUL、データおよびワークブックへのアクセスに必要な権限が VIDEO5 データベース・ユーザーに付与されました。

チュートリアル用ビジネスエリアを別の End User Layer にインストールする方法

チュートリアル用ビジネスエリアを1つの EUL にインストールした後、他の EUL にもインストールできます (詳細は、「[Discoverer サンプル・データのインストール方法](#)」を参照)。

ユーザーがチュートリアル用ビジネスエリアにアクセスできるようにする一方、サンプル・データを最初にインストールした EUL にはアクセスできないようにする場合は、1つ以上の代替 EUL にサンプル・データをインストールできます。これにより、各 EUL 所有者が各自のチュートリアル用ビジネスエリアを所有できます。異なる EUL にサンプル・データをインストールするたびに、別のチュートリアル用ビジネスエリアがその EUL に作成されます。すべてのチュートリアル用ビジネスエリアがデータベース内の同じテーブル・セットのデータにアクセスします。データベース (つまり、VIDEO5 データベース・ユーザーの表領域) に作成される各テーブルのバージョンは1つのみです。

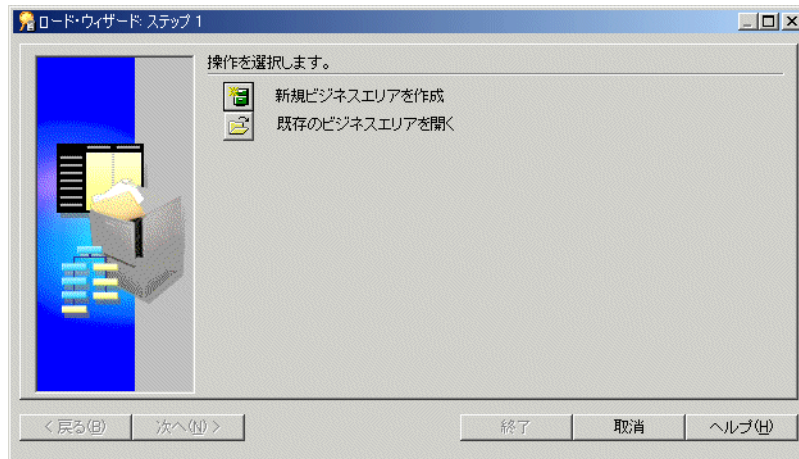
チュートリアル用ビジネスエリアを別の EUL にインストールする手順は、次のとおりです。

1. サンプル・データをインストールする EUL を所有するデータベース・ユーザーで Discoverer Administrator に接続します (詳細は、「[Discoverer Administrator の開始方法](#)」を参照)。

注意: 接続に使用するデータベース・ユーザーに、サンプル・データをインストールするための十分な権限があることを確認してください (詳細は、「[サンプル・データのインストールに必要な権限](#)」を参照)。

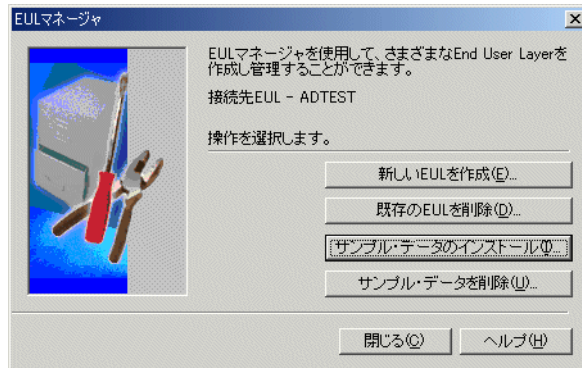
ロード・ウィザードが表示されます。

図 27-28 「ロード・ウィザード」 ダイアログ



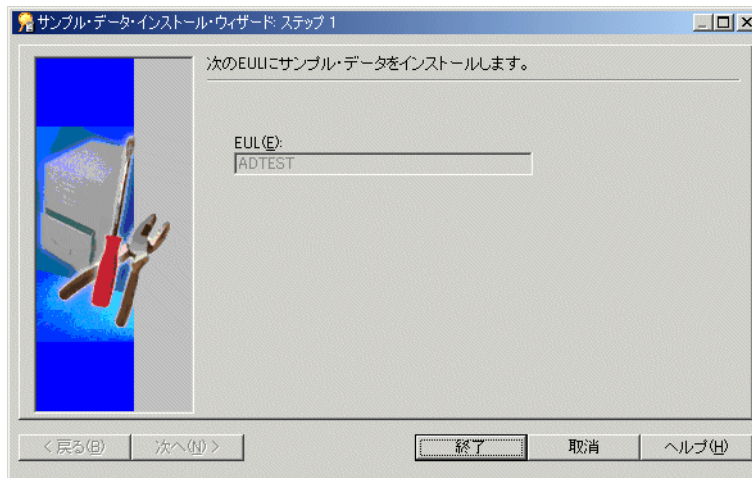
2. 「取消」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。
3. 「ツール」 → 「EUL マネージャ」を選択すると、「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

図 27-29 「EUL マネージャ」 ダイアログ



4. 「サンプル・データのインストール」をクリックすると、「サンプル・データ・インストール・ウィザード: ステップ 1」ダイアログが表示されます。

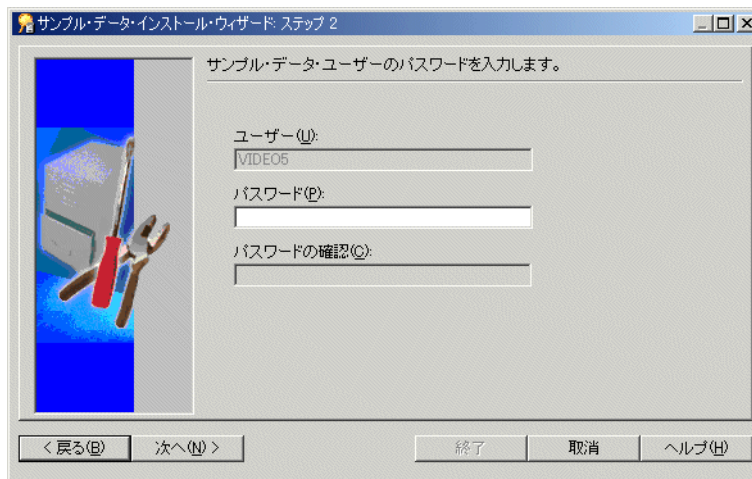
図 27-30 「サンプル・データ・インストール・ウィザード:ステップ1」ダイアログ



「EUL」フィールドに表示される EUL に、チュートリアル用ビジネスエリアがインポートされます。

5. 「次へ」をクリックすると、「サンプル・データ・インストール・ウィザード:ステップ2」ダイアログが表示されます。

図 27-31 「サンプル・データ・インストール・ウィザード:ステップ2」ダイアログ

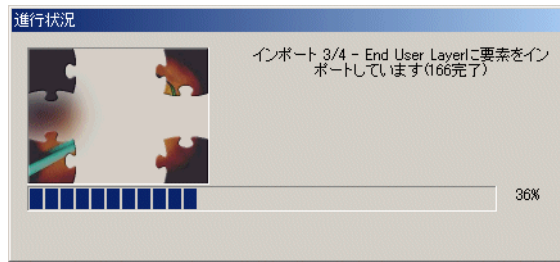


6. 「パスワード」フィールドに、VIDEO5 と入力します。

注意: VIDEO5 データベース・ユーザーに対して指定した任意のパスワードを入力できません。

7. 「終了」をクリックします。
「進行状況」ダイアログが表示されます。

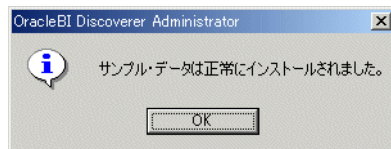
図 27-32 「進行状況」 ダイアログ



%demo ディレクトリにある vidstr.exe ファイルを使用して、Video Stores チュートリアル用ビジネスエリアが EUL にインポートされます。

プロセスが完了すると、サンプル・データが正常にインストールされたことを示すダイアログが表示されます。

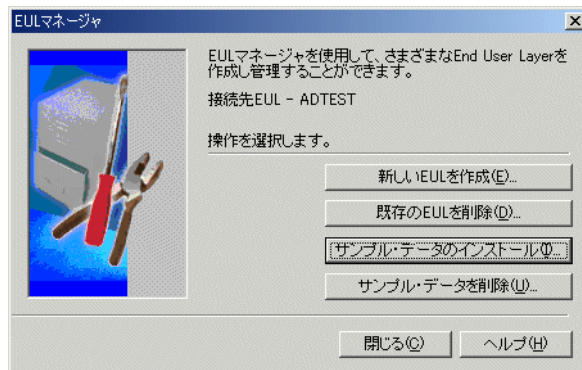
図 27-33 サンプル・データが正常にインストールされたことを示すダイアログ



8. 「OK」をクリックします。

「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

図 27-34 「EUL マネージャ」ダイアログ



9. 「閉じる」をクリックして「EUL マネージャ」ダイアログを閉じます。

現行の EUL にチュートリアル用ビジネスエリアのコピーが 1 つ作成されます。EUL にチュートリアル用ビジネスエリアのコピーを複数作成するには、前述の手順を繰り返します。

注意: チュートリアル用ビジネスエリアのすべてのコピーがデータベース内の同じテーブル・セットのデータにアクセスします。

チュートリアル用ビジネスエリア、テーブルおよびデータを削除する方法

サンプル・データを削除すると、次の内容が削除されます。

- 現行 EUL のチュートリアル用ビジネスエリア
- (オプション) データベースのサンプル・データ・テーブル

次の点に注意してください。

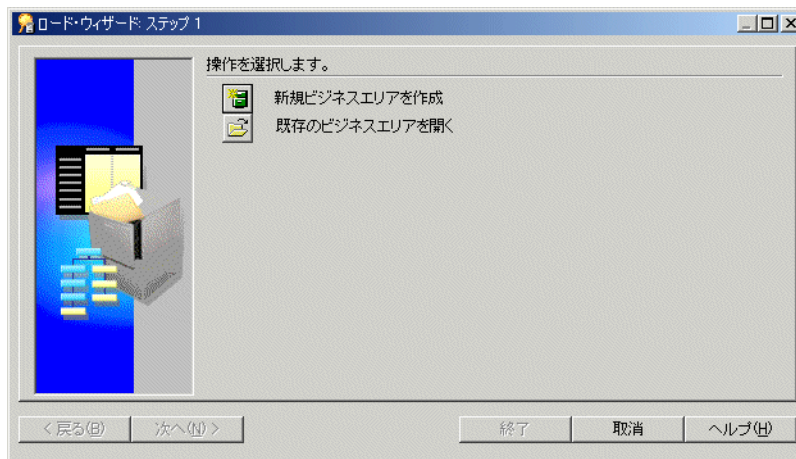
- VIDEO5 ユーザーはデータベースから削除されません。
- サンプル・データを他の EUL にインストールした場合、チュートリアル用ビジネスエリアはその EUL から削除されません (ビジネスエリアが指し示すテーブルをオプションで削除している場合も同様です)。
- サンプル・データのコピーを複数の EUL から削除する場合は、一度に1つずつ削除する必要があります。

サンプル・データを削除する手順は、次のとおりです。

1. チュートリアル用ビジネスエリアを削除する EUL を所有するデータベース・ユーザーで Discoverer Administrator に接続します。

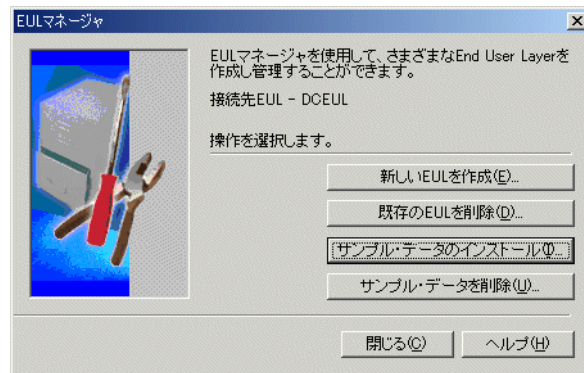
ロード・ウィザードが表示されます。

図 27-35 「ロード・ウィザード」 ダイアログ



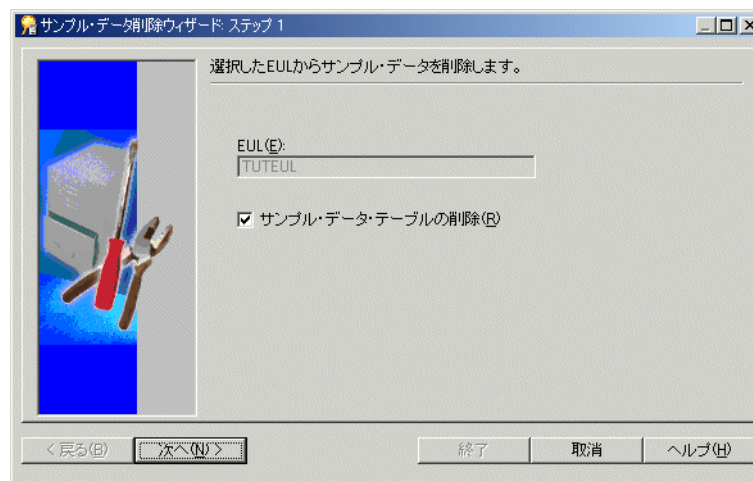
2. 「取消」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。
3. 「ツール」 → 「EUL マネージャ」を選択すると、「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

図 27-36 「EUL マネージャ」 ダイアログ



4. 「サンプル・データを削除」をクリックすると、「サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 1」ダイアログが表示されます。

図 27-37 「サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 1」 ダイアログ



「EUL」フィールドに名前が指定された EUL からチュートリアル用ビジネスエリアが削除されます。

EUL 名が正しくない場合は、「取消」をクリックし、チュートリアル用ビジネスエリアを削除する EUL の所有者で Discoverer Administrator に接続しなおします。

5. 「次へ」をクリックすると、「サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 2」ダイアログが表示されます。

図 27-38 「サンプル・データ削除ウィザード: ステップ 2」 ダイアログ



6. VIDEO5 データベース・ユーザーの「パスワード」フィールドに、VIDEO5 と入力します。
あるいは、最初にサンプル・データをインストールしたとき（VIDEO5 データベース・ユーザーを作成したとき）に指定した任意のパスワードを入力できます。
7. 「終了」をクリックします。
サンプル・データの削除によってデータベースからサンプル・データとテーブルが削除され、現行 EUL からチュートリアル用ビジネスエリアが削除されることを示す警告が表示されます。
8. 「はい」をクリックすると、チュートリアル用ビジネスエリアとデータベース・テーブルが削除されます。

サンプル・データの再インストール方法

以前にサンプル・データを削除し、再インストールする場合は、「[チュートリアル用ビジネスエリアを別の End User Layer にインストールする方法](#)」の手順に従ってください。

Oracle Business Intelligence Discoverer の 管理アカウント情報

ここでは、Oracle Business Intelligence Discoverer の管理アカウント情報を記載します。項目は次のとおりです。

- 「Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって PUBLIC ユーザーに付与されるデータベース権限」
- 「Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって Discoverer マネージャに付与されるデータベース権限」

Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって PUBLIC ユーザーに付与されるデータベース権限

次の表に、Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって PUBLIC ユーザーに付与されるデータベース権限を示します。

スクリプト名	スクリプトの説明	付与される権限
batchusr.sql	スケジュール・スキーマの設定 (INVOKER 権限とともに付与)	EUL5_BATCH_REPOSITORY に対する EXECUTE 権限
demoddl.sql	Video Stores チュートリアル・データの設定	VIDEO5 スキーマ内のすべてのテーブルに対する SELECT 権限
eulsuqpp.sql	Secure Views での QPP 統計の実行	v_\$session、v_\$sesstat、v_\$parameter、v_\$sql、v_\$open_cursor に対する SELECT 権限
eulgfn.sql、 lineage.sql、 eul5.sql	PL/SQL パッケージの設定	EUL5_GET_COMPLEX_FOLDER に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_SIMPLE_FOLDER に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_OBJECT に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ITEM に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_HIERORD に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_HIERLVL に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ADATE に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ANALYZED に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_OBJECT_NAME に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ITEM_NAME に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_APPS_USERRESP に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ISITAPPS_EUL に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_LINURL に対する EXECUTE 権限

Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって Discoverer マネージャに付与されるデータベース権限

次の表に、Oracle Business Intelligence Discoverer のスクリプトによって Discoverer マネージャに付与されるデータベース権限を示します。

パッケージ名	パッケージの説明	付与される権限
EUL5_DROP_BATCH_TABLE	Discoverer マネージャに実行権限を付与します。バッチ・ユーザー管理の一部としてのテーブルを削除するためのバッチ・リポジトリ・パッケージです。 (GRANT 権限とともに付与されます。)	GRANT 権限とともに付与

Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー情報

ここでは、Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーに関する情報を記載します。項目は次のとおりです。

- 「Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー」
- 「Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー・リスト」
- 「Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーで実行可能な PL/SQL ファンクションの登録方法」
- 「ワークシートの保存時に PL/SQL トリガーを使用して SQL をワークシートから抽出する方法の例」

Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー

Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーは、Discoverer で特定のアクション（ユーザーによるワークブックの保存など）が発生すると特定の PL/SQL ファンクションを実行するデータベースのコールです。

注意：

- Discoverer では、EnableTriggers レジストリ設定がレジストリに存在し、その値が 0（ゼロ）に設定されていないかぎり、デフォルトで EUL トリガーが実行可能になります。Discoverer のレジストリ設定の詳細は、第 21 章「Discoverer のレジストリ設定」を参照してください。
- EUL トリガーは、PL/SQL ファンクションが特定の表示名（eul_trigger\$post_save_document など）で Discoverer Administrator に適切に登録されている場合のみ実行されません。詳細は、「Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーで実行可能な PL/SQL ファンクションの登録方法」を参照してください。
- EUL トリガーは、各 EUL トリガーに対して PL/SQL ファンクションの引数が定義されている場合のみ実行されます（詳細は、「Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー・リスト」を参照）。

Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガー・リスト

次の表に、Discoverer で使用できる EUL トリガー、トリガーが実行される時期、トリガーの引数、引数が必須かオプションか、および推奨する使用目的を示します。

トリガー名	実行される時期	引数（データ型）	引数（必須 / オプション）	推奨する使用目的
eul_trigger\$post_login	正常なログイン後	ファンクションの戻りデータ型 (NUMBER) 引数なし。 注意： このファンクションから返される数値は使用されません。	なし	ユーザー環境コンテキストを設定する。たとえば、データベースまたは SSO ユーザー名に基づいた行レベルのセキュリティを強制する。
eul_trigger\$post_save_document	ワークブックの保存時	ファンクションの戻りデータ型 (NUMBER) WorkbookOwner (VARCHAR) WorkbookName (VARCHAR) WorksheetName (VARCHAR) Sequence (VARCHAR) SQLSegment (VARCHAR)	必須 必須 必須 必須	Discoverer ワークシートから SQL を自動的に抽出し、データベースの事前定義されたテーブルに保存する。
eul_trigger\$pre_delete_document	ワークブックがデータベースから削除される前	ファンクションの戻りデータ型 (NUMBER) WorkbookOwner (VARCHAR) WorkbookName (VARCHAR)	必須 必須	削除されるワークブックの名前と所有者を保持する。

トリガー名	実行される時期	引数 (データ型)	引数 (必須 / オプション)	推奨する使用目的
eul_trigger\$refresh_new_column	リフレッシュ操作による新規列の検出時	ファンクションの戻りデータ型 (VARCHAR) DBLink (VARCHAR) Schema (VARCHAR) Table (VARCHAR) Column Name (VARCHAR) EUL Language (VARCHAR)	必須 必須 必須 必須	Oracle Applications フレックスフィールドの適切な表示名を返す。
eul_trigger\$get_developer_key	ゲートウェイまたはオンライン・ディクショナリからのビジネスエリアのロード時、データベース内にオブジェクトが作成される前	ファンクションの戻りデータ型 (VARCHAR) Default Developer Key (VARCHAR) Element Type (VARCHAR) DB Link (VARCHAR) Schema (VARCHAR) Table (VARCHAR) Constraint / Column (VARCHAR)	必須 必須 必須 必須 必須	デフォルト識別子に製品の短縮名を付加する。たとえば、EMPLOYEE テーブル (デフォルト識別子: EMPLOYEE) に基づくフォルダを HRI 製品でメンテナンスする場合、識別子は HRI_EMPLOYEE となります。

Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーで実行可能な PL/SQL ファンクションの登録方法

特定のファンクションを実行する PL/SQL ファンクション (例: ワークシートの保存時に SQL をワークシートから抽出するファンクション) を登録できます。Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーによって PL/SQL ファンクションが実行されるのは、PL/SQL ファンクションがデータベースに存在し、Discoverer Administrator に適切に登録されている場合のみです。

注意: PL/SQL ファンクションは、Discoverer の EUL トリガーと同一の名前で登録する必要があります。名前が異なる場合、Discoverer の EUL トリガーによるファンクションの検出または実行が行われません。したがって、PL/SQL ファンクションの「表示名」フィールドの名前を PL/SQL ファンクション名 (eul_trigger\$post_save_document など) に設定する必要があります。

Oracle Business Intelligence Discoverer の EUL トリガーで実行可能な PL/SQL ファンクションを登録する手順は、次のとおりです。

1. PL/SQL ファンクションをデータベースに作成し、ファンクション名を指定します。

詳細は、「ワークシートの保存時に PL/SQL トリガーを使用して SQL をワークシートから抽出する方法の例」を参照してください。

2. Discoverer Administrator を起動し、「ツール」→「PL/SQL 関数の登録」を選択すると、「PL/SQL 関数」ダイアログ: 「関数」タブが表示されます。

このダイアログを使用して PL/SQL ファンクションをインポートし、Discoverer に登録します。

詳細は、「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションの登録」を参照してください。

ワークシートの保存時に PL/SQL トリガーを使用して SQL をワークシートから抽出する方法の例

SQL を自動抽出できるように、Discoverer では、ワークブックの保存時に必ず実行されるトリガーが有効になっています。このトリガーによって PL/SQL ファンクション (eul_

trigger\$post_save_document) が検索されます。このファンクションが検出されない場合は、何も実行されません。PL/SQL ファンクションが検出された場合は、そのファンクションに従って SQL が保存されます。次に、使用可能なファンクションの例を示します。ただし、この機能は、顧客が各自の特定ニーズにあわせて使用できるようにオープンのままになっています。

ワークシートの保存時に PL/SQL トリガーを使用して SQL をワークシートから抽出する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動します。
2. 次の SQL 文を入力して、SQL を格納するテーブルを作成します。

注意: この例では、PL/SQL ファンクションによって移入される my_sql テーブルを作成します。

```
SQL> create table my_sql (
        workbookowner          varchar2 (100),
        workbook                varchar2 (100),
        worksheet               varchar2 (100),
        seg_sequence            number (10),
        sql_segment              varchar2 (2000) );
```

3. 次の SQL 文を入力して、POST_SAVE_DOCUMENT という名前の PL/SQL ファンクションを作成します。

```
SQL> create or replace function POST_SAVE_DOCUMENT
        (P_WORKBOOKOWNER in varchar,
        P_WORKBOOK        in  varchar,
        P_WORKSHEET        in  varchar,
        P_SEQUENCE         in number,
        P_SQL_SEGMENT      in varchar,
        )
return number as
begin
delete from my_sql;
insert into my_sql

        (          WORKBOOKOWNER,
          WORKBOOK
          WORKSHEET
          SEG_SEQUENCE
          SQL_SEGMENT

VALUES (          P_WORKBOOKOWNER,
          P_WORKBOOK,
          P_WORKSHEET,
          P_SEQUENCE,
          P_SQL_SEGMENT
```



```
);  
  
return 1;  
  
end;
```

4. 次の権限を PUBLIC ユーザーに付与し、my_sql テーブルおよび PL/SQL ファンクション POST_SAVE_DOCUMENT へのアクセスを許可します。SQL*Plus で次の SQL 文を入力します。

```
SQL> grant execute on POST_SAVE_DOCUMENT to PUBLIC;
```

この SQL 文によって、PUBLIC ユーザーによる PL/SQL ファンクション POST_SAVE_DOCUMENT の実行が可能になります。

```
SQL> grant select, insert, update on my_sql to PUBLIC;
```

この SQL 文によって、PUBLIC ユーザーによるデータベース・テーブル my_sql に対する選択、挿入および更新が可能になります。

5. Discoverer Administrator を起動し、「ツール」→「PL/SQL 関数の登録」を選択すると、「PL/SQL 関数」ダイアログ:「関数」タブが表示されます。

このダイアログを使用して、新規 PL/SQL ファンクションを Discoverer に登録します。

注意: 新規 PL/SQL ファンクションの「表示名」フィールドの名前が eul_trigger\$post_save_document に設定されていることを確認してください。

6. 新規 PL/SQL ファンクションを登録します。

PL/SQL ファンクションのインポート方法の詳細は、「ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを自動的に登録する方法」を参照してください。

用語集

1 対 1 関係 (one-to-one relationship)

2つのテーブルで、一意の行に対する一致が1つあり、しかもこれが唯一である関係。

たとえば、ビデオ製品テーブルの（一意キーで識別される）各ビデオ・タイトルには、その説明を含んでいる行がビデオ明細テーブルに1つあり、しかもこれが唯一の行である場合。個々の製品には説明は1つしかないので、ビデオ製品テーブルで直接検索できる。ただし、他の処理上の理由から別のテーブルに配置することもできる。後者の場合、2つの行は、これらを一緒に結合する共通キーによって一意に識別される。

1 対 N の関係 (one-to-many relationship)

1つのテーブルに、別のテーブルの1つ以上の行と関連する一意に識別される行がある関係。この関係は、最初のテーブルにある一意キーに基づく。たとえば、ビデオ製品テーブルの（一意キーのある行で識別される）各ビデオ・タイトルには、顧客にビデオを貸出すたびに記録する売上明細テーブルに多くのエン트리（行）がある。

DATE

Oracle データベース上で使用されるデータ型。日付列には、紀元前 4712 年 1 月 1 日から西暦 4712 年 12 月 31 までの間の日付と時間を含めることができる。

End User Layer (EUL)

データベース・ディクショナリまたはテーブルの定義と、Discoverer Desktop または Discoverer Plus などのクライアント・アプリケーションの中間に（概念的に）存在する多数のデータベース・テーブルおよびビュー。End User Layer は、データベース・オブジェクトに対してビジネス的な意味のあるわかりやすい名称を提供することにより、データベースの複雑さからユーザーを解放する。

EUL は階層テンプレート、フォーマット情報、サマリー・テーブル管理および集計情報などの要素を制御する。EUL は、データベースから情報を抽出するために生成された SQL も制御する。

GUI

グラフィカル・ユーザー・インタフェース (graphical user interface) の略語。文章のみでなく、図も使用してプログラムの入力と出力を表すこと。GUI を使用したプログラムは、ウィンドウ・システム (X Windows、Microsoft Windows、Apple Macintosh など) で実行される。GUI プログラムは、画面上のウィンドウにアイコン、ボタンなどを表示する。ユーザーは、主に（通常マウスによって制御される）画面上のポインタを移動することで、GUI プログラムを制御する。ビットマップ・インタフェースとも呼ばれる。

HTML

Hypertext Markup Language の略語。インターネットの WWW サーバー上のコンテンツおよび他の文書へのハイパーテキスト・リンクを指定するために使用される、タグベースの ASCII 言語。Web ブラウザを持つエンド・ユーザーは、HTML 文書を表示し、リンクに従って他の文書を表示する。

HTTP

Hypertext Transfer Protocol の略語。WWW ブラウザ・コンピュータとアクセスされる側の WWW サーバーの間の WWW 通信量を実行するためのプロトコル。

IP (インターネット・プロトコル: Internet Protocol) アドレス (Address)

4つの部分から構成される数値。各部分は、0～255の数字で構成され、インターネット上のコンピュータを一意に識別する。

JInitiator (JInitiator)

異なるリリースのブラウザ間で一貫性のある Java Virtual Machine (Discoverer で使用されるソフトウェア環境) を保つためのソフトウェア・プラグイン。

NOCACHE

データが含まれるページが書式化される時にデータがフェッチされる (書式化前にフェッチおよびキャッシュされるのでない) ことを意味するデータ型。

NULL 値 (NULL value)

値がないこと。

ODBC

オープン・データベース接続性 (Open Database Connectivity) の略語。異なるデータベース・システムに接続するための規格。アプリケーションは、ODBC に対応する SQL を使用して、ODBC に文を発行できる。次に ODBC は、これをデータベースが理解できる形に変換する。Oracle Heterogeneous Data Services (HDS) を使用すると、Discoverer は単一の一貫性のある方法で異なるデータベース管理システムにアクセスできる。

OLE

オブジェクトのリンクと埋込み (Object Linking and Embedding)。

OLE コンテナ (OLE container)

OLE オブジェクトを格納および表示できるアプリケーション。

OLE サーバー (OLE Server)

OLE オブジェクトを作成するアプリケーション。

Oracle Designer

システムの分析、アプリケーションの設計と生成、メンテナンスのためのオラクル社のツール。

Oracle Designer は、アプリケーション・システム設計とモデル情報のために拡張された Oracle ディクショナリを使用する。

ORACLE_HOME

Oracle 製品のルート・ディレクトリを示す環境変数。

PDF

Portable Document Format の略語。文書を作成するために使用する元のアプリケーション・ソフトウェア、ハードウェア、およびオペレーティング・システムとは独立した方法で文書を表すための (Adobe Acrobat にネイティブな) ファイル形式。PDF ファイルは、テキスト、グラフィックおよびイメージの任意の組合せを含む文書をデバイスおよび解像度から独立した形式で記述できる。

PL/SQL

Oracle が所有権を持つ、SQL 言語に対する拡張機能。SQL をアプリケーション作成に適したものにするプロシージャ上の構成体およびその他の構成体を、SQL に追加する。

RDBMS

リレーショナル・データベース管理システム (Relational Database Management System) の略語。データ構造の定義、格納と検索操作、整合性制約ができるデータベース。このようなデータベースでは、データやデータ間の関係は、テーブルとして編成される。

SELECT 文 (SELECT statement)

1 つ以上のテーブルまたはビューからどの行および列をフェッチするかを指定する SQL 文。

SQL

構造化照会言語 (Structured Query Language) の略語。この言語は、データベース中のデータを定義および操作するために使用される。「表示」メニューから「SQL インспекタ」を選択すると、ワークシートで使用されている現行 SQL 文を表示できる。

SQL スクリプト (SQL script)

データベース管理を迅速かつ簡単に行うために実行できる SQL 文が含まれているファイル。SQL スクリプトのいくつかは、Oracle 製品とともに出荷されている。

SQL 文 (SQL statement)

Oracle に対する SQL 命令。SELECT 文は、SQL 文の一種。

TCP

伝送制御プロトコル (Transmission Control Protocol) の略語。クライアントと Web サーバー間で HTTP リクエストを交換するための基礎を形成する通信プロトコル。

アイコン (icon)

ウィンドウまたはツールの図形表示。

アイテム (item)

EUL にあるデータベース・テーブルの列の表現形態。列をアイテムとして表すことにより、Discoverer マネージャはユーザーがデータを明確に読み取れるようにフォーマット変更、名前変更およびその他の同様の変更を行える。アイテムはフォルダに格納され、作成、削除、異なるフォルダ間での移動ができる。

アイテム階層 (item hierarchy)

アイテム間の階層的な関係を定義し、エンド・ユーザーが異なるレベルのディテールにドリルダウンできるように使用する。たとえば、国レベルから地域レベル、州レベルへという具合。

アイテム・クラス (item classes)

データベースにとって意味のあるアイテムのグループ。アイテム・クラスは、1 つ以上のアイテムが使用できる値リスト (これらのアイテムのための代替ソート順序) を定義するため、またはアイテム間のサマリーからディテールへの拡張を定義するため (あるいはその両方) に使用される。たとえば、Product というアイテムは、製品の説明を含み、Product フォルダの一部になることが可能。この同じアイテム Product は、Sales Revenue フォルダでも要求される可能性がある。両方のアイテムに同じ値リストを使用させるには、値を定義するアイテム・クラスを 1 つ定義し、両方のアイテムに適用する。したがって、値リストは一度定義すればよい。アイテム・クラスを作成しなかった場合は、Product フォルダの Product と Sales Revenue フォルダの Product に値リストを定義する必要がある。

アイテム・クラス・ウィザード (item class wizard)

アイテム・クラスの作成に必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator に事前定義済の一連の手順。

アクセス権および権限 (access rights and privileges)

更新および削除権限などの特定機能。この機能は、データベース管理者または権限付与対象のテーブルを「所有」するユーザー ID によって、特定のユーザー ID に与えられる。

値リスト (list of values)

アイテムに存在する一連の固有な値。値は、データベースの列で検索されたアイテムのもの。

たとえば、データベースに部品が 4 個、ボルトが 28 個、ファン・ベルトが 34 個、ガスケットが 90 個、ブラケットが 49 個含まれていた場合は、「部品、ボルト、ファン・ベルト、ガスケット、ブラケット」という 5 つの重複しない値が含まれる値リストが生成される。値リストは、条件の作成や選択時に使用される。値リストは、実行時に自動的に生成される。

イメージ (image)

アプリケーションに格納およびロードできるビットマップ・オブジェクト。クライアントは、インポートされたイメージを変更できない。

インターネット (internet)

世界的な規模の TCP/IP ベースのコンピュータ・ネットワーク。

インポート (import)

ファイル・システムまたはデータベースからモジュールを読み取り、アプリケーションに取込むこと。

ウィンドウ (window)

アプリケーションが含まれる、デスクトップの長方形領域。ウィンドウにはそれぞれ、アプリケーションと対話できる領域がある。ウィンドウは、開く以外に、サイズ変更、移動、アイコン状態化またはデスクトップ全体を埋めるような拡張ができる。

エクスポート (export)

オブジェクト、モジュール、選択したテキストまたはイメージのコピーをファイルまたはデータベースに格納すること。Project Builder の場合、プロジェクト、タイプ、アクションまたはマクロ定義を含むファイルを、異機種プラットフォームに配布して使用するために移植可能な形式で書き出すプロセス。「エクスポート・ファイル (export file)、インポート (import)」を参照。

エクスポート・ファイル (export file)

EUL オブジェクトのエクスポートにより作成される、共有可能で移植可能なファイル。

オブジェクト (object)

レイアウト上に配置できるアイテム。オブジェクトの例には四角形、線、省略記号、アーク、ポリゴン、ポリライン、角が丸い四角形、フリーハンド、チャート、テキスト、記号およびテキスト・フィールドが含まれる。

親なしのフォルダ (orphan folder)

どのビジネスエリアにも存在しないフォルダ。親なしのフォルダは、ビジネスエリアの内部にないため、「ワークエリア」には表示されない。したがって、使用不可である。フォルダは、ビジネスエリア内のみ作成でき（そして、End User Layer に格納され）、複数のビジネスエリアで潜在的に繰返し使用される。ただし、End User Layer から削除されないまま、最後のビジネスエリアから削除される場合は、「親なしのフォルダ」となる。

「ツール」メニューから「フォルダの管理」コマンドを選択することによって、親なしのフォルダを表示および管理できる。

カーソル (cursor)

マウスの位置を示す小さいアイコン。カーソルの形状は、ツールによって変わる。

階層 (hierarchy)

Discoverer Administrator で定義され、End User Layer に格納されるアイテム間の関係。階層によって、ユーザーはデータをドリルアップおよびドリルダウンして異なるレベルの詳細を参照できる。階層にはアイテム階層と日付階層の 2 種類がある。新規階層の作成および既存階層の編集には、階層ウィザードを使用する。

階層ウィザード (hierarchy wizard)

Discoverer Desktop または Discoverer Plus で使用する階層の作成に必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator に事前定義済の一連の手順。

外部キー (foreign key)

テーブル内のデータの行または列を別のビジネスエリアのテーブルにリンクするキー。「主キー (Primary key)」を参照。

外部クエリー (external query)

他の Oracle 製品で参照できる、ANSI 標準の SQL SELECT 文。

カラー・パレット (color palette)

ウィンドウ・システム、描画、またはウィンドウとそのビューで使用できる色をすべて含む。

環境 (environment)

一般的に使用するツールおよびその構成を含めた、コンピュータ・ベースの作業場のこと。

キーワード (keyword)

1. 対応する引数を提供する必要のあるコマンドライン構文の一部。2. PL/SQL 構造体の必須部分。

キャッシュ (cache)、メモリー (memory)

Oracle データベースが、ユーザーが現在アクセスまたは変更しているデータベース・データなどをサポートするために必要とするデータの一時記憶域。2つの用語は、どちらも同じような意味で使用される。

行 (row)

テーブル中の 1 組のフィールド値。たとえば、EMP テーブルの例では、フィールドは 1 人の従業員を表す。

切り取り (cut)

1 つ以上のオブジェクトを削除してクリップボードに格納すること。これにより、必要に応じてエディタ内のどこにでもオブジェクトを貼り付けることができる。

切離しメニュー (tear-off menu)

ユーザーがマウスまたはその他の指示装置を使用してドラッグすることで、ソースから切り離して表示画面の別の場所へ移動できるサブメニュー。

クエリー (query)

1. 指定した基準に従ってデータベースから情報を取り出す検索。基準には、アイテム、レイアウト、フォーマット、条件およびユーザー定義アイテムが含まれる。クエリーの結果はワークシートに表示される。

2. データベースの 1 つ以上のテーブルまたはビューから取り出すデータを指定する SQL SELECT 文。

クエリー時間予測 (query prediction)

クエリーで情報を取り出すために必要な時間を予測する Oracle Business Intelligence Discoverer の機能。クエリーの開始前に予測時間が表示されるので、クエリーを取り消すかどうかの判断ができる。

クリップボード (clipboard)

オブジェクトを格納できるメモリー・バッファ。一度格納されたオブジェクトは、別のオブジェクトを切り取りまたはコピーするまで、またはアプリケーションを終了するまでクリップボードに残る。

クロス集計 (crosstab)

アイテムを行と列のマトリックスに配置するワークシートのレイアウト。アイテムは上軸と横軸の両方に表示される。クロス集計を使用して、サマリー情報の表示や、1つのアイテムと他のアイテムの関連（月ごと、地域ごとの売上など）の表示ができる。クロス集計はマトリックスとも呼ばれる。「テーブル (table)」を参照。

結合 (join)

特定の列にあるデータの一致に基づき、データベース内のテーブルの論理的な組合せ。Discoverer Administrator での結合の作成は、Discoverer Desktop または Discoverer Plus でユーザーに使用可能なフォルダを識別するために重要。ユーザーがワークシートを作成するためにアイテムまたはフォルダを選択するときは、選択されたフォルダと結合しているフォルダのみ使用できる。したがって、2つのフォルダ間に結合が存在しない場合は、選択されていないフォルダもそのアイテムもワークシートで使用できない。

結合は、データベース内の列、主キーまたは外部キーの一致から導出される。

権限付与 (grant)

ユーザーにモジュールへのアクセス権を与えること。モジュールの作成者のみが、他のユーザーにモジュールのアクセス権を付与できる。

構文 (syntax)

コマンド、修飾子およびパラメータを結合して有効なコマンド文字列を形成するための規則性をもったシステム。

コピー (copy)

クリップボードに、選択したオブジェクトの複製を格納すること。これにより、必要に応じてエディタ内のどこにでもオブジェクトを貼り付けることができる。

コマンドライン (command line)

オペレーティング・システムのコマンドライン。大部分の Oracle 製品は、いくつかの引数を使用してコマンドラインから起動できる。

作業環境 (preference)

アプリケーションのインタフェースの動作に影響する設定。

作業リスト (task list)

ビジネスエリアを作成するための個々の作業を順番に表示する、Discoverer Administrator 中のウィンドウ。作業をチェックしながら進めるときに便利。作業をクリックすると、それぞれのウィザードを起動する。

索引 (index)

テーブルに関連付けられたオプションの体系。Oracle データベースがテーブルの行を迅速に検索し、(オプションで) 個々の行が一意であることを保証するために使用される。

サマリー・ウィザード (summary wizard)

サマリー・フォルダを使用するようにエンド・ユーザーのクエリー・リライトする場合の、使用するサマリー・フォルダの作成に必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator の事前定義済の一連の手順。

サマリー・テーブル (summary table)

クエリーからの結果。テーブル・フォーマットで情報を表示する。

サマリー・フォルダ (summary folder)

サマリー・テーブルについての情報と、それを使用できる EUL アイテムの組合せ情報を格納するフォルダ。クエリー・リクエストが、サマリー・テーブルに事前に集合および結合されているデータで足りている場合、サマリー・テーブルにクエリーを行うことによってパフォーマンスを向上させる。この処理は自動的に実行される。つまり、ユーザーにはクエリーが基本データ・テーブルではなくサマリー・テーブルに対して行われたという事実は分からない。この機能により、迅速で正確なデータ検索が実現できる。

サマリー・リライト (summary rewrite)

ディテール・データではなく、サマリー・テーブルまたはマテリアライズド・ビューを使用してクエリーの SQL をリライトするために Discoverer Plus が使用するプロセス。

識別子 (identifier)

Discoverer がワークブックを識別するために使用する一意の名前。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクトを検索する。

たとえば、「A」という EUL 中の「売上」という名前のフォルダが、「B」という EUL 中の「売上額」という名前の同じフォルダを参照しているとする。この2つのフォルダは同じ識別子を持ち、このため同じオブジェクトを参照していると識別される。

軸 (axis)

ワークシートの3方向の1つ。クエリーに選択されたアイテムは、軸に表示される。「上軸 (top axis)」、「横軸 (side axis)」、「ページ軸 (page axis)」および「軸アイテム (axis item)」を参照。

軸アイテム (axis item)

ワークシートの上軸、横軸、またはページ軸のいずれかに表示されるアイテム。アイテムは、テーブルのレイアウトでは上軸またはページ軸のみに表示され、クロス集計レイアウトではどの軸にでも表示される。「軸 (axis)」および「データ・アイテム (data item)」を参照。

実行 (execute)

「実行 (run)」を参照。

実行 (run)

アプリケーションまたはプログラム・ユニットのランタイム・バージョンを実行すること。

自動サマリー管理 (automated summary management: ASM)

サマリーの作成およびメンテナンス処理を単純化する Discoverer の機能。ASM を使用すると、Discoverer の稼働に使用されるサマリー・ポリシーと呼ばれる入力パラメータの範囲を設定できる。Discoverer では、サマリー・ポリシーに従って、最適なサマリーのセットの作成およびメンテナンスが自動で行われる。

集計 (aggregate)

サマリーに使用するデータ。たとえば、特定の製品の販売台数は、日、月、四半期、年度ごとに集合化できる。

終了 (quit)

現行セッションを終了して、ユーザーをオペレーティング・システムに戻すオプション。システムによっては、終了 (Quit) は Exit ともいう。

主キー (primary key)

テーブル中の行を識別するために使用できる一意の値で構成されるメンバーを持つ、データベース・テーブルの列。

使用可能 (enabled)

メニュー・アイテム、ボタンなどが現行コンテキストで使用できること。つまり、キーボードおよびマウス入力にレスポンスすることを意味するインタフェース要素の状態。

使用禁止 (disabled)

メニュー・アイテム、ボタンなどが現行コンテキストで使用できないこと、つまりキーボードおよびマウス入力にレスポンスしないことを意味するインタフェース要素の状態。

条件 (condition)

戻り値を制限するためにアイテムに関して作成されるフィルタ。フィルタには、1つの列とデータの量を指定するための修飾データがいくつか含まれる。Discoverer Administrator で作成される条件は、指定するビジネス条件に応じてオプション条件にも必須条件にもなる。

条件は、Discoverer Plus でクエリーの定義中にも作成できる。たとえば、東部地域にある全都市をリクエストする場合は、条件 (show East Region only) を作成して、結果に取り入れる都市を絞り込む。

所有 (own)

Discoverer 内の特定のオブジェクトの所有関係を定義する用語。たとえば、ユーザーのデータベース・アカウント内にテーブルがある場合、ユーザーはその EUL を所有する。ユーザーは他のユーザーのアカウント内のテーブルへのアクセス権を与えられることがあるが、この許可を受けたユーザーが EUL を所有することにはならない。

ズーム (zoom)

フィールドの内容を編集する場所を広げるために、オブジェクトを拡張すること。

スキーマ (schema)

関連するデータベース・オブジェクトの集合。通常はデータベース・ユーザー ID 別にグループ分けされる。スキーマ・オブジェクトには、テーブル、ビュー、順序、ストアド・プログラム・ユニット、シノニム、索引、クラスタおよびデータベース・リンクが含まれる。

スケジュール・ワークブック (scheduled workbook)

予定の日時にあらかじめ指定した間隔で自動的に実行されるようにプログラムされたワークブック。「ファイル」メニューから「スケジュール」を選択するとワークブックをスケジュールできる。

セッション (session)

実行ファイルの起動から終了までの期間。

接続 (connect)

データベースにログインすること。クエリーを作成または変更する場合、またはデータベースに格納されたアプリケーションにアクセスする場合は、接続する必要がある。

接続文字列 (connect string)

ネットワーク上の特定の Oracle データベースに接続するために SQL*Net が使用する、プロトコルを含む一連のパラメータ。

ソート (sort)

アイテムの並び替えの方向を指定する。たとえば、アイテムを昇順または降順で並べ替えて表示する。

総計 (total)

ワークシートのデータを集計した結果。総計には、最小値、最大値、平均値、合計値などがある。

送信 (send)

Discoverer ではワークブック（またはワークブックの一部）を電子メールで送信できる。送信するデータは、メール・メッセージのテキストまたは添付ファイルにできる。Discoverer Plus でワークブックを送信するには、「ファイル」メニューから「送信」を選択する。

ダイアログ (dialog box)

操作を完了するために必要な情報の入力を促すプロンプトを表示する、画面の一部またはウィンドウ。

タイトル・バー (title bar)

ウィンドウの一番上の水平領域。そのウィンドウ中のアプリケーションまたはインタフェース要素の名前を表示。

ツール (tool)

アプリケーション内のオブジェクトの作成および操作に使用されるアイコン・ボタン。

ツールバー (toolbar)

製品のコマンドを実行するアイコン・ボタンの集合。通常、ウィンドウの一番上に水平に並べられるか、ウィンドウの側面にそって垂直に並べられる。

ツール・パレット (tool palette)

ツールの集合。

データ・アイテム (data item)

上軸アイテムと横軸アイテムの関係を表しているアイテム。データ・アイテムを共通に持つアイテムのみが、上軸と横軸で表示される。これは、クロス集計レイアウトのワークシートのみ適用される。データ・アイテムはメジャーとも呼ばれる。「軸アイテム (axis item)」および「データ・ポイント (data point)」を参照。

データ型 (data type)

データの標準形式。一般的な Oracle データ型には CHAR、VARCHAR2、DATE、NUMBER、LONG、RAW および LONG RAW がある。

データベース (database)

1 つの単位として処理されるディクショナリ・テーブルおよびユーザー・テーブルのセット。

データ・ポイント (data point)

ワークシートのセルに表示されているデータ・アイテムの値。データ・ポイントは、クロス集計で交差している軸アイテム間の関係を反映する。「データ・アイテム (data item)」を参照。

データ・モデル (data model)

データベースからどのデータをフェッチするか、どの値を計算するか、レポートでデータをどう順序付けるかなどを定義するリレーショナル・モデル。データ・モデルを定義する Report Builder のオブジェクトは、クエリー、グループ、列、パラメータ、およびリンクである。

テーブル (table)

1. 関連する情報について名前が付けられている集まり。リレーショナル・データベースに格納される。行と列から構成される二次元格子。
2. アイテムを列に配置するワークシート・レイアウト。アイテムは上軸に表示される。テーブルのレイアウトは、たとえば、先月の売上データの一覧などのクエリー基準に適合したすべての情報をリスト表示するために使用する。「クロス集計 (crosstab)」を参照。

テーブル・レイアウト (tabular)

ページの一番上にラベル、その下にデータ行を表示するデフォルトのレイアウト。

ディテールからマスターへの結合 (detail to master join)

ディテールからマスターへの結合のアイコンは、異なるフォルダ内にある 2 つのアイテム間の多対 1 の関係を表す。外部キーは左側 (ディテール)、主キーは右側 (マスター)。「マスターからディテールへの結合 (master to detail join)」および「結合 (join)」を参照。

テキスト・アイテム (text item)

Form Builder の場合、文字列値を表示するアイテム。

デフォルト (default)

必要なコマンド・パラメータや属性をユーザーが指定しない場合に、システムが提供する値。

等価結合 (equijoin)

等価演算子を使用した、2 つの列の結合。演算子の両側で定義された列で等しいデータを持つ行のみが結合されることを示す。

独立データ (independent data)

その値が別のデータに依存していないデータ。たとえば、ある従業員の名前の値 *Jones* は、他の従業員の名前または関連データに依存しない。カテゴリ・データとも呼ばれる。

トグル (toggle)

設定をオンまたはオフに交互に切り替えること。たとえば、ツールバーを非表示または表示にできる。

閉じる (collapse)

選択されたアイテムより下位のレベルの関連アイテムをすべて削除すること。ドリルダウンを元に戻すこと。「ドリルダウン (drill down)」を参照。

ドラッグ (drag)

マウス・ポインタをウィンドウの特定の場所に移動する間、マウス・ボタンを押した状態に保つこと。

トランザクション (transaction)

単一の単位として扱われる一連の SQL 文。

トリガー (trigger)

特定のイベントについて実行または「起動」される PL/SQL プロシージャ。

ドリル (drill)

あるアイテムを、それに関連したアイテムを含むように拡張すること。Oracle Business Intelligence Discoverer は、データベースに再びクエリーを行う場合もある。「ドリルダウン (drill down)」および「ドリルアップ (drill up)」を参照。

ドリルアップ (drill up)

階層中の次に高位の関連アイテムを含むようにアイテムを拡張すること。Oracle Business Intelligence Discoverer は、データベースに再びクエリーを行う場合もある。「ドリル (drill)」、「ドリルダウン (drill down)」および「閉じる (collapse)」を参照。

ドリルダウン (drill down)

階層中のより低位の関連アイテムを含むようにアイテムを拡張すること。Oracle Business Intelligence Discoverer は、データベースに再びクエリーを行う場合もある。「ドリル (drill)」、「ドリルアップ (drill up)」および「閉じる (collapse)」を参照。

トレーラ (trailer)

レポートの終了内容を含む、レポートのオプションのリージョンで、テキスト、グラフィックス、データおよび計算が含まれる。レポート・トレーラは、ヘッダーおよび本体の後に、最後に表示される。

ハイパーテキスト (hypertext)

読者が Web ブラウザや Acrobat Reader などのブラウザを利用して 1 つの文書から別の文書に簡単に移動できるようにする相互参照を含む文書の集合。

ハイパードリル (hyperdrill)

別のワークシートの詳細データヘドリルできるようにシステム間のリンクを確立する方法。各ワークシート内のアイテムまたはカテゴリ間に結合が存在している必要がある。

ハイパーリンク (hyperlink)

あるハイパーテキスト文書内のいくつかの点から他の文書中の場所または同一文書内の別の場所への参照 (リンク)。Web ブラウザは、通常いくつかの表示方法の違い (異なる色、フォントまたはスタイル) でハイパーリンクを表示する。ユーザーが (マウスでクリックして) ハイパーリンクをアクティブにすると、ブラウザはリンクのターゲットを表示する。

パターン (pattern)

グラフの塗りつぶしに適用できるグラフィック・プロパティ。

パブリック・テーブル (public tables)

すべてのユーザー ID がアクセスできる、データベース内のテーブル。

パラメータ (parameter)

サブプログラムに情報を渡すために使用される PL/SQL 構造体。たとえば、サブプログラム・コール MYPROC (x) では、x がパラメータ。

貼付け (paste)

現行のカーソル位置にクリップボードの内容 (カットまたはコピーされたオブジェクト) を配置すること。

非キャッシュ列 (non-caching column)

NOCACHE データ型のデータベース列を参照するレポート列。

ビジネスエリア (business area)

ユーザーのデータ要求に適合するように、テーブルまたはビュー (あるいはその両方) を概念的にグループ化したもの。たとえば、会計部門は予算と財務についてのデータを表す会計ビジネスエリアを、エンジニア部門のプロジェクト・リーダーはプロジェクトの予算情報を調査するためのビジネスエリアを持つ。

アイテムの一部は同じであっても、各部門に関するテーブルやビューの組合せは異なる場合がある。Discoverer 上でひとつのファイルとして示される。このファイルを開いて、中にあるフォルダとアイテムをすべて表示できる。

日付階層 (date hierarchy)

日付階層は、年、四半期、月、週、日、時間、分、秒の継承構造を持つ。Discoverer マネージャは、日付階層テンプレートを使用して、共通フォーマットの日付階層の多くを定義する。デフォルトの日付階層を使用することも、カスタマイズされた日付階層を新たに作成することも可能。

日付階層テンプレート (date hierarchy template)

事前に定義された日付階層 (表示フォーマットを含む)。日付階層テンプレートは、日付アイテムに適用され、その日付アイテムに固有の日付階層を作成する。

たとえば、年 (YYYY)、月 (Mon-YY) および日 (DD-Mon_YY) の汎用日付階層テンプレートを 'sales_date' に適用して、ユーザーが年から月および日のレベルに (2002 年から 02 年 6 月、2002 年から 02 年 6 月 2 日に) ドリルダウンできるようにする。

どの時間 / 日付レベルを使用し、どの表示フォーマットを使用するかを定義するために、日付階層テンプレートを使用する。

ピボット (pivot)

アイテムをある軸から別の軸にドラッグしたり (クロス集計のみ)、軸から「ページ・アイテム」ボックスにドラッグすること。横軸のアイテムが上軸のアイテムやページ・アイテムになったり、逆に変換されたりする。ピボットを使用すると、データがより簡潔に表示され、アイテム間の関係がわかりやすくなる。

フィールド (field)

インタフェース要素。データの入力、編集または削除を行う画面上の場所。

フォーカス (focus)

ユーザーまたはクライアントからの入力にレスポンスできるエンティティ状態。エンティティにキーボード・フォーカスがある場合は、ユーザーがキーを押すとイベントを受け取ることができる。描画ビューに描画フォーカスがある場合は、描画に影響を与えるクライアント・ルーチンにレスポンスできる。

フォルダ (folders)

EUL にあるデータベース・テーブルの表現形態。テーブルをフォルダとして表すことは、エンド・ユーザーをデータベースの複雑さから保護する 1 つの方法である。

複合フォルダ (complex folder)

Discoverer Administrator で作成され、複数のフォルダ (またはデータベース・テーブル) からのアイテムを含むフォルダ。

複製 (duplicate)

クリップボードの内容に影響を与えずに、オブジェクトをレイアウト上に直接コピーできるようにするオプション。

物理ページ (physical page)

プリンタが出力するページのサイズ。

部分的に制限されたテーブル (partially restricted tables)

自身が所有していて、他のユーザー ID にそのアクセス権を付与しているテーブル。または、所有はしていないが、そのテーブルの所有者からアクセス権を付与されているテーブル。

プライベート End User Layer (Private End User Layer)

特定のユーザー ID のみが使用できる End User Layer。アクセス権は、その End User Layer の所有者によって明示的に付与される。

プライベート End User Layer は、同一データベース上に複数存在できる。

プライベート・テーブル (private tables)

テーブルを「所有」するユーザー ID によってアクセス権を付与されたユーザー ID からのみアクセス可能なデータベース内のテーブル。あるユーザー ID がテーブルを作成した場合、このユーザー ID はテーブルを「所有」する。

プロパティ (properties)

オブジェクトの動作または外観を決定する、オブジェクトの特性。

文 (statement)

条件制御、反復制御および順次制御およびエラー処理に使用される PL/SQL 構造体。PL/SQL 文はセミコロン (;) で終了する。

分析関数 (analytic functions)

分析関数は行のグループに基づき集計値を計算する。行のグループはウィンドウと呼ばれ、分析句によって定義される。分析関数が集計関数と異なる点は、分析関数がグループ内の各行の 1 つの値を返すことである。たとえば、ランク付け関数を作成する場合は、グループ内の各行のランクの値を作成する。

分析関数の詳細は、『Oracle Database SQL リファレンス』または『Oracle Database データ・ウェアハウス・ガイド』を参照。

ページ・アイテム (page item)

特定の視点からデータを表示できるようにするアイテム。ページ・アイテムはワークシート全体に適用される。ページ・アイテムを軸アイテムまたはデータ・アイテムから作成すると、たとえば、「年」が「2000」であるときのデータのみが表示される。「ページ・アイテム」ボックス中の使用可能な値のリストから値を選択することによって、2000、2001、2002などのページ・アイテムの値を変更する。アイテムは、上軸または横軸から「ページ・アイテム」ボックスにドラッグできる。

ページ軸 (page axis)

ページ・アイテムを表示する軸。ページ軸は上軸の上に表示される。

変数 (variable)

値を割り当てることができ、割り当てられた値が時間とともに変化する可能性のある、名前付きのオブジェクト。

ポート (port)

TCP が特定のプログラムとの間で転送データを経路指定するために使用する番号。

ポップアップ・リスト (pop-up list)

ユーザーが特定の操作を実行するときにポップアップするリスト。

マスターからディテールへの結合 (master to detail join)

マスターからディテールへの結合のアイコンは、異なるフォルダ内にある2つのアイテム間の1対多の関係を表す。主キーは左側（マスター）、外部キーは右側（ディテール）。

ロード・ウィザードを使用してビジネスエリアを作成しているときに結合を作成するか、「挿入」メニューから「結合」を選択して結合を作成する。「ディテールからマスターへの結合 (detail to master join)」および「結合 (join)」を参照。

マスター・フォルダ (master folder)

マスター・フォルダは、結合で使用され、ディテール・フォルダと単対多の関係を持つテーブルを識別する。たとえば、ビデオ製品フォルダの（一意キーのある行で識別される）各ビデオ・タイトルには、顧客にビデオを貸出すたびに記録する売上明細フォルダに多くのエントリ（行）がある。

マテリアライズド・ビュー (materialized view)

Oracle Enterprise Edition データベースで使用されるサマリー・メカニズム。マテリアライズド・ビューは、SQL のクエリーに使用される集計データを事前に計算して格納する。

メガバイト (MB) (megabyte)

1,048,576 (1024 x 1024) バイトに等しいメモリー単位。多くの場合、100 万バイトに丸められる。

メタデータ (metadata)

データについてのデータ。EUL に含まれるデータは、実際のデータベース・テーブルのデータに関するデータであるため、メタデータである。メタデータを作成することにより、Discoverer マネージャはデータベース用語をビジネス用語に変換できる。

メッセージ・ボックス (message box)

最後の操作で発生した状態をユーザーに通知するモーダル・ウィンドウ。メッセージ・ボックスにレスポンスする必要がある。

モーダル・ウィンドウ (modal window)

アプリケーションを続行する前に、ユーザーのレスポンスを求めるウィンドウ。

文字位置 (alignment)

フィールドに文字を配置する方法。左揃え、右揃え、中央揃えのいずれかで文字を配置して表示できる。

文字間隔調整 (justification)

「文字位置 (alignment)」を参照。

ユーザー ID (user ID)

データベースにアクセスするために使用される一意の文字列。ユーザー ID には常に関連付けられたパスワードがある。Oracle データベースにログインする場合は、許可されたユーザー ID とパスワードが必要。

ユーザー定義アイテム (calculation)

1 つ以上のアイテムから導出されるアイテム。Oracle Business Intelligence Discoverer では、複雑な計算式を利用してユーザー定義アイテムを作成できる。

横軸 (side axis)

ワークシートの左側の縦の軸。これは、クロス集計でのみ使用する。「軸 (axis)」および「軸アイテム (axis item)」を参照。

ラジオ・グループ (radio group)

2 つ以上のラジオ・ボタンの組。常にそのうちの 1 つしかオンまたはオフになれない。

ラジオ・ボタン (radio button)

2 つ以上の組で表示され、常にそのうちの 1 つしかオンまたはオフになれない (チェックボックスと同様の) コントロール。

ラベル (label)

値を識別するテキストまたはアプリケーションの可視オブジェクトを意味するテキスト。

リモート・データベース (remote database)

ローカル・データベース以外のコンピュータ上のデータベース。通常は、同じネットワーク上にあるが、別のノードにあるコンピュータ (つまり、データベース・リンクを通して使用するデータベース)。

例外 (exception)

ユーザーが設定した基準から外れる、結果セット内のデータ。

レコード (record)

SQL SELECT 文でフェッチされる 1 つの行。

列 (column)

データの特定の領域を表す、データベース・テーブルの垂直領域。列には列名 (ENAME など) および特定のデータ型 (CHAR など) がある。たとえば、従業員情報のテーブルでは、全従業員の名前で 1 つの列が構成される。1 つのレコード・グループ列がデータベースの列を表す。

Discoverer では、特定の型のデータは、ワークシートに垂直に表示される。

ローカル・データベース (local database)

1. アプリケーションを実行しているコンピュータ上のデータベース。2. アプリケーションが接続している先のデータベース。このデータベースは、アプリケーションによって生成された SQL 文をすべて解析して実行する。

ロード・ウィザード (load wizard)

テーブルを End User Layer にロードして新しいビジネスエリアを作成するために必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator に事前定義済の一連の手順。

ロール (role)

権限の集合体。ロールをユーザー ID に割り当てると、そのロール内に定義されたすべての権限が付与される。ロールは、多くの人々に同じ権限を割り当てる場合に便利。

たとえば、航空会社の予約係スタッフのためのデータベース管理者は、予約係に必要な権限をすべて含んだロール reservationist を定義する。次に、予約係一人一人にすべての権限を定義するのではなく、そのロール (reservationist) を割り当てる。

ワークエリア (workarea)

End User Layer へのビューである、Discoverer Administrator 中のウィンドウ。「ワークエリア」ウィンドウを使用して、End User Layer 内の個々のビジネスエリアでの作業を行う。ここで、新規ビジネスエリアの作成、フォルダから別のフォルダへのアイテムの移動、アイテムの作成と編集などができる。基本的には、End User Layer に影響する操作はすべて「ワークエリア」内で行われる。

ワークシート (sheet)

ワークブック・ウィンドウ内のタブ。1 つ以上のクエリーの結果が表示される。

ワークシート (worksheet)

Discoverer がクエリーの結果を表示する方法。ワークシートには、End User Layer に対して実行されるクエリーも含まれる。ワークブックには、複数のワークシートが格納される。

ワークブック (workbook)

Discoverer Desktop または Discoverer Plus 内のワークシートの集合。ワークブックは、本質的にはクエリー定義を含む文書で、データベースのテーブルおよびネットワーク・ファイル・サーバーに格納でき、ネットワークを介して他の Discoverer Desktop または Discoverer Plus ユーザーと共有できる。自身のローカル PC にも格納できる。

ワイルドカード (wildcard)

単語または語句内で「任意の文字」または「連続する一連の文字」を意味するために使用される文字。

記号

- % ワイルドカード, 5-4
- <> 演算子, 25-46
- < 演算子, 25-46
- <= 演算子, 25-46
- = 演算子, 25-46
- > 演算子, 25-46
- >= 演算子, 25-46

数字

- 1 次要素
 - 「名前の自動生成」プロパティ, 9-9
- 1 対 1 結合
 - 作成, 25-49
- 2 次要素
 - 「名前の自動生成」プロパティ, 9-9

A

- AggregationBehavior レジストリ設定
 - Discoverer Desktop (および Discoverer Plus) のデフォルト動作の指定, 21-3
- apps_fndnam
 - コマンド修飾子, 22-10, 22-29
- apps_gwyuid
 - コマンド修飾子, 22-10, 22-29
- ASM, 14-7
 - オペレーティング・システムのスケジューラ, 14-11
 - 機能, 14-4
 - コマンドライン・インタフェース, 14-11
 - 実行方法, 14-6
 - 説明, 14-4
 - バッチ・ファイルを使用, 14-11
 - ポリシー, 14-6
 - ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後, 14-10
- ASO 暗号化認証, 7-2
- AutogenNameOnCreate
 - レジストリ設定, 21-4

C

- CONNECT BY 句
 - 階層内, 13-13
 - カスタム・フォルダで使用して階層を作成, 13-14
- CONNECT BY 句 (SQL), 6-5

- COUNT(DISTINCT)
 - サマリー・フォルダでの式, 15-7

D

- d51wkdmmp
 - ワークブック・ダンプ・ユーティリティの使用に関する注意, 4-24
- DBMS_JOB, 14-12
- DBMS_JOB パッケージ, 8-5
- DECIMAL データ型, 25-109
- Discoverer
 - アクセス権限, 7-2
 - 機能, 1-5
 - 作業権限, 7-3
 - システムの前提条件, 3-9
 - 実装, 3-5
 - セキュリティ, 7-2
 - データ・アクセスの前提条件, 3-9
 - メンテナンス, 3-8
 - ワークフロー, 1-5
- Discoverer Administrator
 - オンライン・ヘルプ, 3-16
 - 開始, 3-11
 - 概要, 1-1, 2-1, 3-2
 - 基本概念, 3-3
 - 新機能, 3-16
 - 状況依存メニュー, 3-15
 - スタート・ガイド, 3-1
 - タスクリスト, 3-15
 - ワークエリア, 3-12
 - 「ワークエリア」ウィンドウ, 3-12
- Discoverer Desktop
 - パフォーマンスに影響を与えるレジストリ設定, 21-2
- Discoverer Plus
 - 固有の機能, 1-4
- Discoverer 10.1.2
 - アップグレード, 24-4, 24-5, 24-12
- Discoverer マネージャ
 - 基本概念, 1-5
 - 役割の概要, 2-3
- Discoverer のメンテナンス, 3-8
- Discoverer のレジストリ設定, 21-1, 21-3
 - 概要, 21-2
- Discoverer マネージャに権限を付与するスクリプト, A-3

E

- EnableTriggers
 - レジストリ設定, 21-5
- End User Layer
 - EUL オブジェクトのインポート, 4-8
 - EUL オブジェクトのエクスポート, 4-14
 - Oracle データベース, 4-3
 - アップグレード, 24-18
 - エクスポート方法, 4-11
 - オブジェクトのインポート, 4-19
 - 概要, 4-2
 - 削除, 4-7
 - 作成, 4-4
 - 作成とメンテナンス, 4-1
 - 所有者, 4-3
 - 新規データベース・ユーザー用に作成, 4-6
 - データベース間でのオブジェクトのコピー, 4-8
 - コマンドライン・インタフェースを使用したインポート, 4-16
 - コマンドライン・インタフェースを使用したエクスポート, 4-16
 - 必要な権限, 4-3
 - 表示, 4-8
 - ファイルへのエクスポート, 4-8
 - 分析関数, 24-18
 - 変更, 4-8
 - 便利な理由, 4-2
 - メンテナンスに必要な権限, 4-4
- End User Layer (EUL), 3-3
- End User Layer オブジェクトのインポート, 4-8
- 「EUL」
 - 作成する理由, 27-4, 27-5
 - チュートリアルインストール, 27-4
- EUL_DATE_TRUNC, 9-7
- EUL アクセス・ワークブック, 19-8
- EUL オブジェクトのインポート, 4-19
- EUL クエリー統計ワークブック, 19-8
- EUL ゲートウェイ
 - 概要, 4-4
- EUL ステータス・ワークブック, 19-1
 - APP のインストール, 19-4
 - Discoverer EUL V5 のビジネスエリア, 19-2
 - アンインストール, 19-6
 - インストール, 19-3
 - 概要, 19-2
 - 実行, 19-6
- EUL テーブル
 - 編集なし, 4-2
- EUL データ定義ワークブック, 19-7
- EUL トリガー
 - 説明, B-2
 - リスト, B-2
- EUL のアップグレード
 - スケジュール・ワークブック, 24-20
- EUL のエクスポート, 4-8
- EUL への複数接続、EUL オブジェクトに対する競合する変更、詳細は「注意」を参照, 3-11
- EUL ワークブック管理ワークブック, 19-9

G

- Generic Connectivity

- Oracle 以外のデータベースへの接続, 23-2
- Generic Connectivity を使用した Oracle 以外のデータベースのサポート, 23-2
- Generic Connectivity の設定方法, 23-4
- Generic Connectivity の利点, 23-3

L

- Lineage ワークブック
 - Oracle Warehouse Builder とともに使用するためにインストール, 18-3

N

- NUMBER データ型, 25-109

O

- OLTP システム, 3-2
- ORA-3113 エラー
 - Discoverer Administrator で異機種間データ・サービスを使用する場合, 23-9
- Oracle Applications, 17-1
 - Discoverer の相違点, 17-3
 - EUL の作成, 17-7
 - 作業権限の付与, 17-15
 - 作業の指定, 17-16
 - サポートされる機能, 17-2
 - 職責, 17-2, 17-15
 - 「接続」ダイアログの設定, 17-5
 - 前提条件, 17-3
 - ビジネスエリアの指定, 17-16
 - ユーザーの名前および職責を Discoverer ワークブックに表示, 17-17
 - ユーザーまたは職責の指定, 17-16
- Oracle Applications EUL
 - メンテナンスするユーザー, 17-11
- Oracle Applications EUL のメンテナンスユーザー, 17-11
- Oracle Designer
 - メタデータのロード, 5-7
- Oracle Enterprise Manager, 18-2
- Oracle Portal, 18-4
- Oracle Reports, 18-2
- Oracle Warehouse Builder
 - Discoverer の使用, 18-3
- Oracle WebCache, 18-2
- Oracle 以外のデータベース
 - 接続, 23-2
- Oracle 以外のデータベースのサポート
 - Transparent Gateway の使用, 23-9

P

- PL/SQL ファンクション
 - BOOLEAN データ型の引数に関する注意事項, 25-137
 - カスタム, 11-10
 - 手動で登録, 11-12
 - 自動的に登録, 11-11
 - 登録, 11-11
 - 登録に必要な権限, 11-11
 - 便利な理由, 11-10

PUBLIC ユーザー, 17-15
PUBLIC ユーザーに権限を付与するスクリプト, A-2

R

Rdb

Discoverer サポート, 23-9
サポートされない機能, 23-10
ソフトウェア要件, 23-9
部分的にサポートされる機能, 23-11
RDB および Oracle 以外のデータベースのサポート, 23-1

S

SELECT 文, 6-5

SQL

SQL インспекタ, 16-3
インライン・ビューの削除, 16-3
再フォーマット (フラット化), 16-3
フラット化された SQL, 16-3

SQL インспекタ

SQL のフォーマット, 16-3

SQL および実行計画

表示, 16-3

例, 16-4

SQL コマンド

CONNECT BY, 6-5

SELECT, 6-5

SQL スクリプト

Discoverer ファイルのリスト, 26-2

SQL 文

結合, 25-49

最適化, 20-2

T

TAF

透過アプリケーション・フェイルオーバー、概要, 7-15

Transparent Gateway, 23-9

Oracle 以外のデータベースへの接続, 23-9

U

UserRoleFilter レジストリ・キー, 21-10

V

v_\$parameter ビュー

サマリー・フォルダ用の権限の付与, 14-12
スケジュール・ワークブックを実行するための権限付与, 8-8

W

WITH 句

カスタム・フォルダの SQL で使用できない句, 25-23

X

XML

インポート・フォーマット, 4-8
エクスポート・ファイルへの追加, 22-23
ワークブックのエクスポート用のフォーマット, 22-29

あ

アイテム, 3-4

アイテム・クラス, 9-2

値リスト, 9-2

値リスト・アイテム・クラスの作成, 9-14

値リストの表示, 9-26

概要, 9-2

クロス集計への配置, 25-109

コンテンツ・タイプ, 9-8

索引付きアイテムを割り当てる方法, 9-29

削除, 9-27

代替ソート, 9-3

代替ソート・アイテム・クラスの作成, 9-16

ディテール・ドリル・アイテム・クラス, 9-6, 9-19

日付, 9-6

日付フォーマット・マスク, 9-6

プロパティの編集, 9-13

アイテム階層, 13-2

アイテム・クラス, 9-2

アイテムの削除, 9-24, 9-25

アイテムの追加, 9-23, 9-24

アイテムの表示, 9-25

値リストの表示, 9-26

削除, 9-27

編集, 9-21

アイテム・クラス・プロパティ・ダイアログ

「一般」タブ, 25-89

アイテムのコンテンツ・タイプ, 9-8

アイテム・プロパティ

索引付きアイテム, 25-97

アクセス権限

VIDEO5 データベース・ユーザーに付与する方法, 27-14

値階層

CONNECT BY 句を使用して作成, 13-13

値リスト

カスタム・フォルダを使用, 9-20

クエリー, 6-6

値リスト・アイテム・クラス

作成, 9-14

アップグレード

Discoverer と EUL のリリース, 24-3

Discoverer リリース 3.1 から Discoverer リリース 10.1.2, 24-4

Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2, 24-5

Discoverer リリース 9.0.x から Discoverer リリース 10.1.2, 24-12

EUL 内の分析関数, 24-18

前提条件, 24-2

異機種間サービス, 22-2

Generic Connectivity, 23-2

Transparent Gateway, 23-2

インストール

チュートリアル, 27-4

インポート・ウィザード, 4-19

エラー・メッセージ, 25-80

- インライン・ビュー
 - RDBMS に送信される SQL から削除, 16-3
- インライン・ビュー SQL
 - データベースでの実行内容, 16-3
- エクスポート
 - コマンドライン・インタフェースを使用して EUL オブジェクトを, 4-16
- エクスポート・ウィザード, 4-12, 4-14
- エクスポート・ファイル
 - XML コードを追加, 22-23
- エラー・メッセージ
 - Discoverer, 3-16
- 演算子
 - 集合, 6-5
- オブジェクト
 - ビジネスエリアへの追加, 5-4, 5-5
- オブジェクト名, 5-7
- オプション条件
 - 必須条件との対比, 12-3
- オブティマイザ, 20-2
- オブティマイザ・ヒント, 6-5
- 親なしのフォルダ
 - 表示または EUL からの削除, 6-17
- オンライン・ディクショナリ
 - ロード, 5-4

か

- 開始時間
 - サマリー処理の設定, 14-15
- 階層, 3-5, 13-1
 - CONNECT BY 句の使用, 13-13
 - アイテム, 13-2
 - アイテムの作成, 13-5
 - アイテムの編集, 13-9
 - カスタム・フォルダで CONNECT BY 句を使用して作成, 13-14
 - 概要, 13-2
 - 再帰的, 13-13
 - テンプレートの削除, 13-12
 - テンプレートの適用, 13-11
 - テンプレートの編集, 13-10
 - デフォルトの日付階層テンプレート, 13-11
 - パフォーマンス, 13-5
 - 日付, 13-3
 - 日付階層テンプレート, 13-4
 - 日付階層の作成, 13-7
 - 日付テンプレート, 13-7, 13-10
 - 変更, 13-12
- カスタム・フォルダ
 - CONNECT BY 句を使用して階層を作成, 13-13
 - Discoverer ワークシートで使用する Oracle Applications ユーザーの名前と職責を表示, 17-17
 - クエリー, 6-6
 - シノニムの使用, 6-5
 - ビューに基づく場合の更新, 25-23
- 外部結合
 - 概要, 10-13
- 外部サマリー
 - マテリアライズド・ビューがすでに存在するエラー、次善策, 16-9
- 行レベルのセキュリティ
 - 条件を使用した作成, 12-11
- クエリー
 - 最適化, 6-6, 20-2
 - パフォーマンスの予測, 20-2
 - ファントラップ検出, 25-49
 - フォルダ定義とサブクエリー, 6-5
- クエリー時間予測, 20-1
 - Discoverer Plus, 20-2
 - optimizer_mode パラメータの確認, 20-5
 - Secure Views, 20-7
 - timed_statistics パラメータの確認, 20-3
 - 概要, 20-2
 - 使用できない場合, 20-2
 - 時間の短縮, 20-5
 - 速度と精度の向上, 20-3
 - データ・テーブルの分析, 20-4
 - ビューを使用可能にする, 20-3
 - 古い統計の削除, 20-8
- クエリー取出し制限
 - 設定, 7-10
- クエリー・リライト
 - 概要, 16-2
 - 例, 16-5
- クロス集計ワークシート
 - アイテムの配置, 25-109
- 計算式
 - 改行の削除, 11-2
 - 連結アイテム, 11-2
- 計算式内の改行, 11-2
- 結果セット
 - 複合フォルダ, 6-3
- 結合
 - 1 対 1, 10-8
 - 1 対多, 10-8
 - 外部結合, 10-13
 - 概要, 10-2
 - 結合の編集, 10-18
 - 結合プロパティの編集, 10-18
 - コンポジット結合キー, 10-4
 - 削除, 10-20
 - 多対多, 10-8
 - 単一アイテム, 10-3
 - 単一アイテム結合およびマルチアイテム結合の作成, 10-15
 - ディテール・アイテムの追加, 25-47
 - データ型の不一致, 10-25
 - デカルト演算, 25-48
 - 名前付け, 25-46
 - ファントラップ, 10-21
 - マルチアイテム結合, 10-4
- 結合条件, 10-3
- 権限
 - Discoverer のスクリプトで Discoverer マネージャに付与, A-3
 - Discoverer のスクリプトで PUBLIC ユーザーに付与, A-2
 - PL/SQL ファンクションの登録に必要, 11-11
- 検索フィルタ
 - ユーザーとロールを有効にする方法, 21-10
- 検証
 - サマリー・フォルダ, 15-23
- ゲートウェイ
 - ロード, 5-5

- コマンドライン・インタフェース, 22-1
 - apps_fndnam, 22-10, 22-29
 - apps_gwyuid, 22-10, 22-29
 - apps_user, 22-10, 22-30
 - asm, 22-10
 - cmdfile, 22-11, 22-30
 - connect, 22-11
 - create_eul, 22-11
 - create_eul /apps_mode, 22-12
 - delete, 22-12
 - delete_bus_area, 22-13
 - delete_eul, 22-14
 - export, 22-14
 - import, 22-15, 22-16
 - load, 22-16
 - refresh_bus_area, 22-18
 - refresh_folder, 22-18
 - refresh_summary, 22-19
 - ` /?` コマンド, 22-9
 - 概要, 22-2
 - クイック・ガイド, 22-8
 - 構文規則, 22-5
 - コマンド, 22-3
 - コマンド構文, 22-6
 - コマンド修飾子, 22-3
 - コマンドの例, 22-6
 - コマンド・ファイル, 22-6
 - コマンド・ファイルの作成, 22-7
 - コマンド・ファイルの実行, 22-7
 - コマンド・ファイルの例, 22-7
 - コマンド・リファレンス, 22-9
 - 使用, 22-4
 - 使用に関する注意, 22-5
 - 必要な権限, 22-4
- コマンドライン・インタフェースの修飾子
 - aggregate, 22-20
 - all, 22-20, 22-34
 - apps_grant_details, 22-20
 - apps_responsibility, 22-20, 22-34
 - apps_security_group, 22-20
 - asm_space, 22-20
 - asm_tablespace, 22-20
 - audit_info, 22-21
 - auto_gen_name, 22-21
 - ba_link, 22-21
 - business_area, 22-21
 - capitalize, 22-22
 - condition, 22-22
 - date_hierarchy, 22-22
 - db_link, 22-22
 - description, 22-22
 - eul, 22-22, 22-34
 - external_element, 22-23
 - folder, 22-23
 - function, 22-23
 - hier_node, 22-23
 - hierarchy, 22-24
 - identifier, 22-24
 - insert_blanks, 22-24
 - item, 22-24
 - item_class, 22-24
 - join, 22-24
 - keep_folder, 22-25

- keep_format_properties, 22-25
- log, 22-25
- log_only, 22-25
- lov, 22-25
- object, 22-26
- overwrite, 22-26
- parameter, 22-26
- password, 22-26
- private, 22-26
- refresh, 22-26
- remove_prefix, 22-27
- rename, 22-27
- schema, 22-27
- show_progress, 22-27
- sort_folders, 22-27
- sort_items, 22-28
- source, 22-28
- summary, 22-28
- user, 22-28
- workbook, 22-28
- xmlworkbook, 22-29
- コンテンツ・タイプ
 - アイテムのコンテンツ・タイプ, 9-8
- コンボジット結合キー
 - マルチアイテム結合, 10-4

ナ

- 最初の接続
 - 適用される条件, 27-4
- 索引付きアイテム
 - アイテムに割り当てる方法, 9-29
 - 現在のアイテムとの関連付けによるパラメータ・パフォーマンスの向上, 25-97
 - パラメータを使用したクエリー・パフォーマンスの向上, 25-93
 - フォルダおよび複合フォルダ内のアイテムへの割当てによるパフォーマンスの向上, 9-28
- サブクエリー, 6-5
- サポートされない文字の使用
 - 識別子, 4-21
- サマリー・ウィザード
 - 使用, 14-7
- サマリー管理, 14-12
- サマリー組合せ
 - セットアップ, 15-6
- サマリー処理
 - 開始時間の設定, 14-15
- サマリー・テーブル
 - 概要, 14-2
 - 列のマッピング
 - 例, 15-4
- サマリー・データ
 - リフレッシュする理由, 14-6
- サマリー・フォルダ, 3-5
 - ASMで作成するための前提条件, 14-5
 - Oracle Standard Edition データベースと Oracle9i 以上の Enterprise Edition データベースとの相違点, 16-6
 - Oracle データベース間のインポート後のリフレッシュ, 16-9
 - インポート後のリフレッシュ, 16-9
 - 外部サマリー・テーブル, 16-7

- 外部サマリー・テーブルおよびビューのマッピング, 16-8
- 外部サマリー・テーブルに基づく作成, 15-17
- 概要, 14-2
- 検証, 15-23
- 削除, 15-25
- 作成, 15-7
- 式
 - 使用, 15-7
- 手動作成, 15-1
- 手動リフレッシュ, 15-21
- 迅速に表示させる方法, 21-9
- ステータス, 15-26
- 前提条件, 14-5
- データベース記憶域プロパティの編集, 15-25
- データベースの構成, 14-11
- 必要な権限の付与, 14-12
- フォルダ, 14-2
- プロパティの編集, 15-22
- 編集, 15-23
- ユーザーのクエリーに基づく作成, 15-11
- リフレッシュ時に行われる処理, 14-7

サマリー・リダイレクション

- 概要, 16-2
- 実行される状況, 16-2

識別子

- Discoverer Plus のワークブック / ワークシート識別子の位置の特定, 4-21
- オブジェクトの比較に使用, 25-79
- 概要, 4-21
- サポートされない文字の使用, 4-21

シノニム, 6-5

- カスタム・フォルダでの使用, 6-5

集計導出ユーザー定義アイテム

- 概要, 11-4
- 例, 11-4

集計ユーザー定義アイテム

- 概要, 11-3
- 制限, 11-3
- 分析関数, 11-4

集合演算子

- 例, 6-5

軸アイテム, 25-109

事前定義ワークシートへのドリル, 11-8

自動サマリー管理, 14-4

条件

- カテゴリ, 12-2
- 外部結合, 12-9
- 概要, 12-2
- 行レベルのセキュリティの作成, 12-11
- 削除, 12-8
- 使用, 12-2
- タイプの説明, 12-3
- 単一の作成, 12-4
- 複合の作成, 12-5
- プロパティの編集, 12-7
- 編集, 12-7
- 例, 12-8

スキーマ・オブジェクト名

- 確認, 14-14

スケジュール・ワークブック

- DBMS_JOB パッケージ, 8-5
- Oracle データベースの機能, 8-3

- 下位互換性, 24-20
- 概要, 8-2
- 結果の格納場所, 8-4
- サーバーがチェックする間隔, 8-9
- 所有者の指定, 8-6
- 前提条件, 8-5
- 表示および管理, 8-10
- 便利な理由, 8-2

スケジュール・ワークブックの制限

- 設定, 7-12

制限されたテーブル, 25-131

整数, 25-109

セキュリティ

- 作業を実行するユーザーまたはロール, 7-9
- ビジネスエリアへのアクセス, 7-3
- ユーザーまたはロールの権限, 7-7
- ユーザーまたはロールのビジネスエリアへのアクセス権, 7-5

「説明」フィールド

- 結合, 25-46

選択

- データソース, 5-7
- ソート・オプション, 5-7

た

「他のユーザーに select 権限が与えられているテーブルおよびビュー」オプション, 25-131

ダイアログのリファレンス

- リスト, 25-2

代替ソート, 9-3

- 例, 9-4

代替ソート・アイテム・クラス

- 作成, 9-16

チュートリアル

- インストール, 27-4

チュートリアル・データ

- 再インストール方法, 27-22

チュートリアル・データの再インストール, 27-22

チュートリアルのインストール

- 実行される処理, 27-2
- 手順, 27-5
- 必要な権限, 27-4
- 方法, 27-9

チュートリアル・ユーザーに対するデータベース前提条件, 27-2

チュートリアル用ビジネスエリア

- 削除方法, 27-20
- 別の EUL にインストールする方法, 27-16

追加

- ビジネスエリアにオブジェクトを, 5-4, 5-5

テーブル

- BA 用の選択, 5-6

テーブルおよびビューの選択, 5-6

テンプレート

- 日付階層, 13-4

ディテール・アイテム

- 結合に追加, 25-47

ディテール・ドリル・アイテム・クラス, 9-6

- 作成, 9-19

データ

- 取出し, 6-6
- データ・ウェアハウス, 3-2

データ型
DECIMAL, 25-109
軸アイテム, 25-109
データ型の不一致
結合, 10-25
データソース
Oracle Designer, 5-7
データのフェッチ, 6-6
データベース・セキュリティ
ASO 暗号化認証, 7-2
データベース・パラメータ
Discoverer での使用, 3-10
データベースへのユーザー ID の割当て, 5-4
データベース・リンク, 25-106
データベース・ロール
ワークブックの共有に使用, 7-14
データ・ポイント・アイテム, 25-109
デカルト演算, 25-48
デフォルト日付階層
Oracle9i へのアップグレード後の日付フォーマット
「RR」の変更, 13-12
等価結合, 25-46
等号, 25-46
トレース・ファイル
作成方法, 26-4
導出ユーザー定義アイテム
概要, 11-3
ドリル, 3-5
別のアプリケーションへ, 9-8

な

名前付け
結合, 25-46
「名前の自動生成」プロパティ
概要, 9-9

は

パッチセット
Discoverer Administrator, 23-9
「パブリックに select 権限が与えられているテーブルおよびビュー」オプション, 25-131
パラメータ
索引付きアイテム・プロパティの指定によるパフォーマンスの向上, 25-97
索引付きアイテムを使用したクエリー・パフォーマンスの向上, 25-93
必須条件
オプション条件との対比, 12-3
日付アイテム
EUL_DATE_TRUNC を使用した切捨て, 9-7
条件の適用, 9-8
日付階層テンプレートの適用, 13-11
日付階層, 13-3
日付フォーマット「RR」, 13-12
日付フォーマット・マスク, 9-6
表領域割当て制限
決定, 14-14
リセット, 14-14
ヒント
オペティマイザ, 6-5
ビジネス・インテリジェンス

概要, 1-5
ビジネスエリア, 3-4
EUL 間のコピー, 5-9
エクスポート, 4-12
オブジェクトのリフレッシュ, 5-11
オブジェクトのロード, 5-4, 5-5
概要, 5-2
コンポーネント, 5-7
削除, 5-10
作成, 5-2
前提条件, 5-2
作成とメンテナンス, 5-1
設計, 5-2
データベースとの同期化, 5-11
開く, 5-8
プロパティ, 5-9
ロード・ウィザードによる作成, 5-3
ビュー
BA 用の選択, 5-6
カスタム・フォルダでの更新, 25-23
ファントラップ, 10-21
複合フォルダ内, 10-24
ファントラップ検出, 25-49
フォルダ, 3-4, 14-2
SQL, 6-11
アイテムのソート, 6-18
依存性, 6-6
親なしのフォルダの表示または削除, 6-17
カスタム, 6-4
カスタムと単一の対比, 6-4
カスタムの作成, 6-9
カスタム・フォルダの SQL 文の編集, 6-11
カスタム・フォルダの例, 6-4
概要, 6-2
検証, 6-18
削除, 6-15
順序変更, 6-18
単一, 6-2
単一の作成, 6-7
データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用
, 6-3
ビジネスエリア間での共有, 6-6
ビジネスエリアにおけるソート, 6-17
ビジネスエリアへの割当て, 6-16
複合, 6-3
複合の作成, 6-8
複数ビジネスエリアへの割当て, 6-16
プロパティの編集, 6-9
複合フォルダのリーチスルー
説明, 6-11
適用される制限およびルール, 6-13
不等号, 25-46
分析関数
Discoverer およびデータベース・サポート, 11-4
プライベート EUL
作成方法, 27-5
ヘルプ・システム
概要, 3-16
ベース・フォルダ・アイテム
リーチスルー, 6-11
ベース・フォルダ・アイテムへのリーチスルー
複合フォルダ, 6-11

ま

- マテリアライズド・ビュー
 - 1つの外部サマリー・テーブルに対して1つのマテリアライズド・ビューのみ登録可能, 16-9
 - 概要, 14-3
- マルチアイテム結合
 - 作成, 10-15
- メタデータ
 - Oracle Designer, 5-7

や

- ユーザー
 - 権限の付与
 - 複数ユーザーへ, 7-2
 - ユーザー ID, 25-131
 - データベースへの添付, 5-4
- ユーザー定義アイテム
 - 概要, 11-2
 - 削除, 11-7
 - 作成, 11-6
 - 事前定義ワークシートへのドリル, 11-8
 - プロパティの編集, 11-7
 - 編集, 11-7
- 「ユーザーのプライベート・テーブル」オプション, 25-131
- ユーザー / ロールの検索フィルタ, 21-10
- 読取り専用データベース
 - EULの作成, 4-27

ら

- リフレッシュ・オプション
 - 概要, 16-9
- リレーショナル・データベース, 3-2
- リンク
 - データベースからユーザーへ, 25-106
- レジストリ設定, 21-1, 21-3
 - 概要, 21-2
- 列
 - サマリー・テーブルへのマッピング
 - 例, 15-4
- 列のマッピング
 - 例, 15-4
- 連結アイテム, 11-2
- ロード・ウィザード, 5-3
- ロール
 - 権限の付与, 7-2
- ロジカル・スタンバイ・データベース
 - EULの作成, 4-27

わ

- ワークエリア
 - 状況依存メニュー, 3-15
- ワークシート, 3-4
- ワークブック, 3-4
 - 概要, 8-2
- ワークブック・ダンプ・ユーティリティ
 - 使用に関する注意, 4-24
- ワークブックのエクスポート
 - XMLフォーマット, 22-29

- ワークブックの共有
 - データベース・ロールを使用, 7-14
- ワークブックのスケジュール
 - 必要な権限の付与, 8-8
- ワイルドカード, 5-4